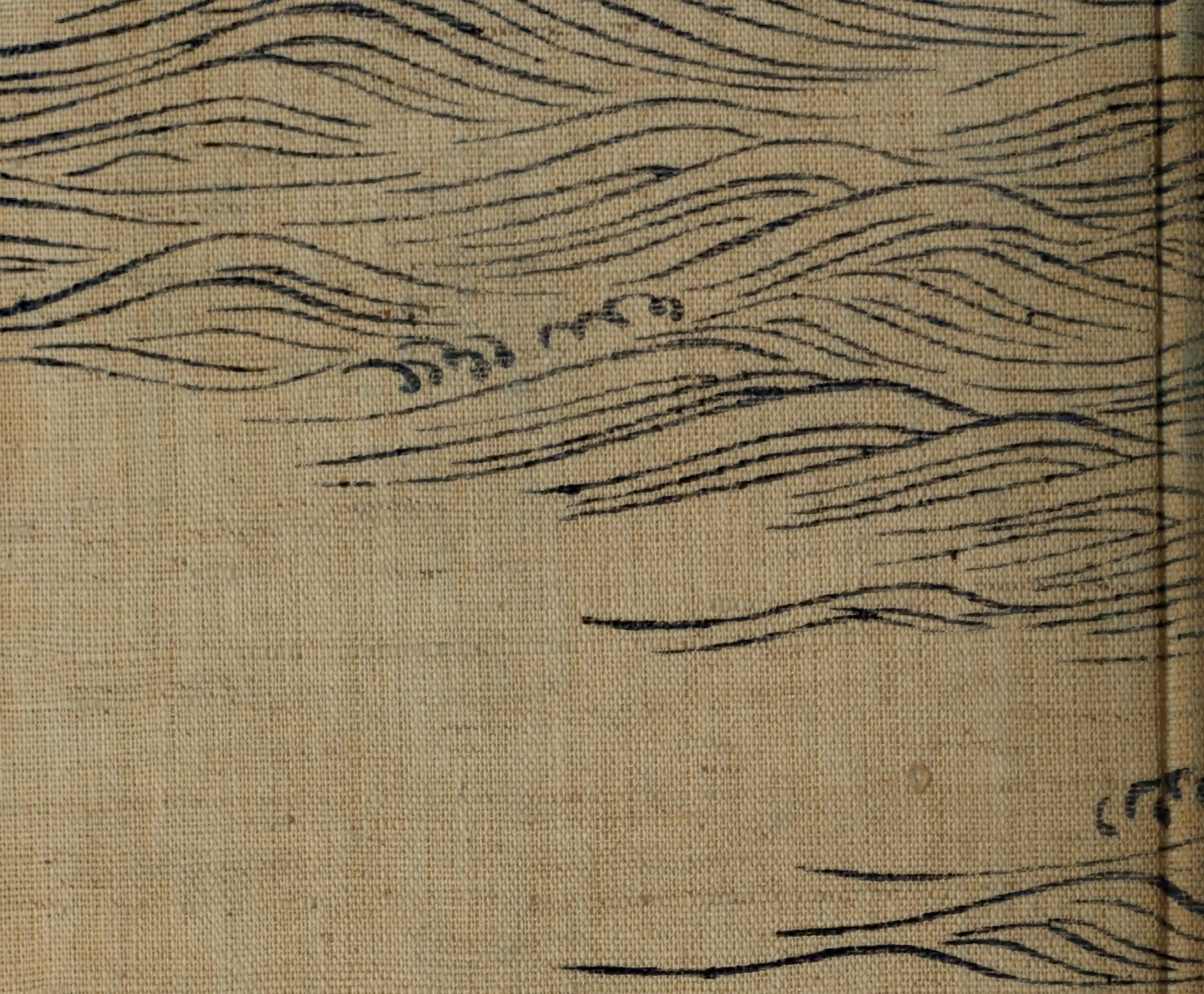
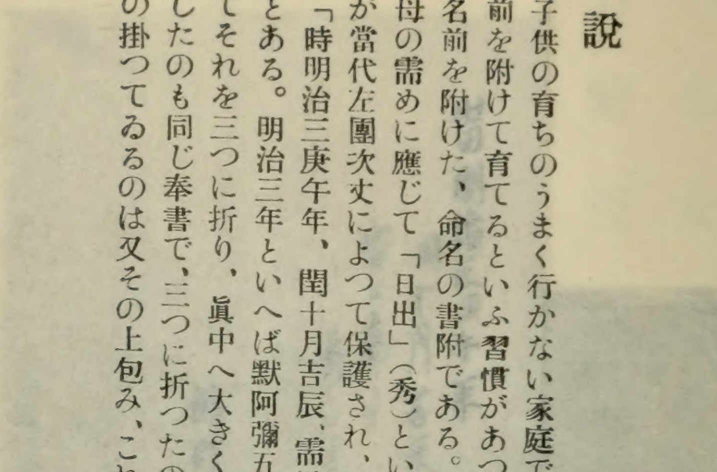




鏡花全集

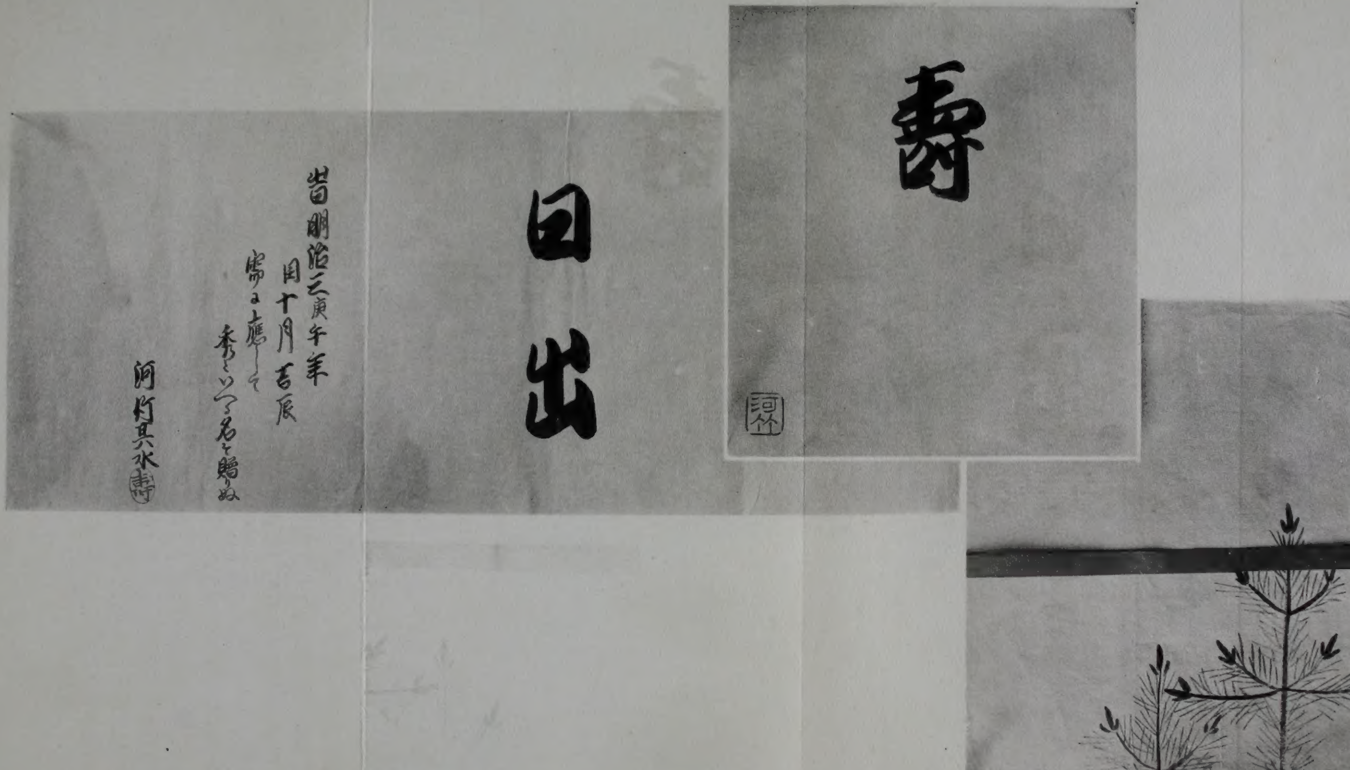
第廿三巻

解説



子供の育ちのうまく行かない家庭で、男の子なら女名前を、女の子ならば男名前を附けて育てるといふ習慣があつた。これは、その男子に對して默阿彌が女名前を附けた、命名の書附である。先代市川左團次の前途を祝禱する爲に、老母の需めに應じて「日出」(秀)といふ女名前を贈つて是れが認められた。それが當代左團次丈によつて保護され、震火を免れた。

「時明治三庚午年、閏十月吉辰、需に應じて、秀といへる名を贈りぬ、河竹其水」とある。明治三年といへば默阿彌五十五歳であつた。大奉書を横に二つ折にしてそれを三つに折り、眞中へ大きく「日出」と認めたものである。「壽」字をしるしたのも同じ奉書で、三つに折つたのを包んだもの。その下方松を描いて紅丈長の掛つてゐるのは又その上包み、これは半紙で、松も自分で描いたものである。


壽
日出
河竹其水

河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集

第廿三卷

東京 春陽堂刊行

默阿彌全集 第廿三卷目次

挿絵目次

東京根生御取立の箕尾谷　姿も對の虚無僧出立詞だゝかひ事かはり　頃霜月

三座同列御攝恩景清　頭巾のしらべを引とゞめ左右へくわつとぞ立退く古めかしくも吉　花雪面

鶴岡拜殿御見願靜御前　例の是ダンマリの闇試合賤の小田巻繰返し新参の申譯鎧師明珍衣笠も重忠が取持に　白旗顔

仰高鎌倉山星月夜光輝右大將武扁錄　鏡世界

打囃す羯鼓手拍子その艶に引替てアラ愛たやな鶴は千年の靈島と村上萬歳才藏が鼓調べも能登殿流經時菊王兄弟と悟る聲音も高畑治郎共に北嵯峨の佐藤の老母山路の假家嫁の菊町信代を連れて讃岐の六郎諸共に過去現在打解けて名乗り合たる敵味方目を驚せし高名と御馬の面に立塞がりはつし受たる矢島物語　調度時　節當候

[illegible]

『大佛供養』は明治六年十一月、作者五十八歳の時、守田座に書きおろされた『甲屋景淸』とも稱されるくらゐで、甲屋に於ける三保の谷、景淸の出會も篇中の眼目であつた。大詰の大佛供養の件が時々獨立的に上演されるからその稱を生んだのである。男山をもじつた晉駒山は、座頭格であつた彥三郎(晉羽屋)、芝翫(成駒屋)兩優の屋號から、一字づゝ取つたもので、名題を附ける時の狂言作者の用意の一端が最も露骨に看取されるものである。四幕目の佐藤の假屋敷繼信の靈を描いた場の如きは、哀切極まりなき一篇の詩になつてゐる。

書きおろしの時の役割は中村芝翫(惡七兵衞景淸、能登守敎經、讃岐六郎經時)、坂東彥三郎(三保の谷四郎國俊、佐藤三郎兵衞繼信、後室山路、秩父庄司重忠)、市川左團次(高畑治郎、半澤成淸)、中村翫雀(結城七郎朝光、三保の谷妻おきせ)、澤村訥升(佐藤四郎兵衞忠信)、中村仲太郞(高畑治郎右衞門、兜師妙珍幸作)、坂東しう調(花園姬、繼信妻衞町)、尾上いろは(景淸の妻衣笠)、市川子團次(九郎判官義經、經時弟菊王丸)、中村鷺助(景淸の郞等さつま五郎)、坂東太郎(武藏坊辨慶)、坂東喜知六(須の股運平)等であつた。

挿繪にしたのは稿下當時の繪草紙の一部分である。此扉の題字は作者の筆ではない。

大正十五年八月下旬

校訂者


大佛殿

音駒山守達源氏（甲屋景清、大佛供養――六幕）

序幕　八島寺門前の場

〔役名――古金買吾市實は薩摩五郎、駿河治郎清繁、番場の忠太、伊勢三郎義盛、燗酒賣勘助實は鷲ノ尾彌藤治、軍兵。平家ノ侍女漣、同なぎさ、同公達六代君等。〕

（八島寺門前の場）――本舞臺二間常足の二重、石垣の蹴込、此の上瓦屋根、朱塗りの表門、上寄りに潛り付き、欄間に八島寺といふ額をかけ、左右練塀、後ろ一面の淺黄幕、平舞臺上手に石の墳を建て、是に四國八十八ケ所靈場と朱の文字にて彫付け、上下松の立木日覆より同じく釣枝、平舞臺左右の見切に笹龍膽の紋附きし幕を張り、總て八島寺門前の體、平舞臺に莚を敷き、爰に番場の忠太後ろ鉢卷陣立の拵へ、○△□◎の軍兵四人酒肴を取散らし、下手に燗酒賣勘助、やつしなり、股引草鞋にて、燗酒屋の荷をおろし、酒の燗をして居る、軍兵四人箸にて皿の緣を叩き、忠太しきりに踊つて居る、此の見得双盤、かつぽれの唄にて幕あく。

軍兵四人　あま茶でかつぽれ、鹽茶でかつぽれ〳〵。

ト はやし立てる、忠太しきりに踊り、どつさりと下に居て、

忠太　あゝ一杯機嫌に踊つたら、めつぽふかいに醉が出て、大層目がまはつて來た。イヤ此寺の門が廻るわ〳〵。

〇　モシ〳〵お旦那、さつきからお休みなしに、踊りつゞけでござりますから、さう醉が出たのでござります。

△　ちつと踊りはお休みなされ、

□　息つぎに一杯お上りなされませ。

◎　酌は私が致しませう。

忠太　成程左樣致さう、身共からだ中へ醉が廻つて、ふら〳〵と致すのは、爰にある煮込のこんにやくの樣だ、ハヽヽヽヽハヽ。

〇　今度は私が代つて踊りませう。

忠太　成程、其方は大分諸藝に達して居ると申すこと、踊りは格別よからう、然らば身共が唄つてやらう。（ト忠太箸で皿を叩き乍ら）酒のつよいのでしらふも亂れ、是は茶碗でつゞけ飲み。

軍兵四人　むやみにかつこめ〳〵。（トみな〳〵はやし立て、軍兵○踊る。）

忠太　こりや〳〵、其方もちと落着いて酒にしやれ〳〵。（ト忠太皿を見て、）あまり騷ぎの強いので、各の各肴がなくなつた。コリヤ〳〵燗酒屋、もつと酒と肴を澤山爰へ持つて來い〳〵。

ト勘助酒の燗をし乍ら、

勘助　へい〳〵、畏りましてござりますが、平生の時と違ひまして、かういふ戰場の事ゆゑ、どうぞ前錢に願ひたう存じます、其代りおでんは申すに及ばず、お酒も極く銘酒を差上げまする。

忠太　ヤイ〳〵燗酒屋、此方共を何と心得居るぞ、武士に向つて前錢に願ふなどゝ、平民同樣なる申し方、コリヤよく聞けよ、手前達の樣な其の日稼ぎの商人を、飲み倒すやうな者だと思ひをるか忝くも當時鎌倉方で、飛ぶ鳥落す勢ひの、梶原平三景時がお側去らずのお氣に入り、番場の忠太といふ者だ。

勘助　へイ、左樣ならあなた樣が、番場の忠太樣でござりまするか。

忠太　いつ何時でも苦しうないから、陣所へ拂ひを取りに來やれ。

勘助　いえ〳〵、たとひ飛鳥落す源氏方の御家來に致せ、どなた樣でも陣中では、決して掛賣は致しませぬ。

○ ムヽ、然らばあれ程お旦那が、陣所へ來いとおつしやるに、

△ 手前は一切貸さぬと申すのか。

勘助 サア、なぜとおつしやりませ、此頃戰も大分鎭つたと申すものゝ、まだ此樣にあなた方も陣を張つてござるからは、いつ何時に始まらうも知れませぬ、僅な儲けの芋田樂、夜陣をいとふ燗酒も、わしが煮込のこんにやくならねど、ぶる〳〵物で戰場へ、賣り歩くのも其日の活計、一貫取つては一貫と、出商賣の貧乏暮し、まして賣り場は皆戰場、今日爰においでなすつても、明日は何處へおいでなされるか、其の行先は知れませねば、氣の毒乍ら前錢でなくては、どうも上げられません。

ト此内軍兵四人顏を見合せ、思入あつて、

○ こりやア手前の言ふのも尤もだ、今にも出陣の太鼓が鳴れば、何處へ行くか知れぬ我々。

△ 前錢に拂つてやりたいが、先づ海苔めしやを初めとして、壽司、菓子、團子、鍋やきうどん。

□ 種々軍中へ商人が、持つて來るのをのがさずに。

◎ 見る物毎にぱくつくゆゑ、用意の錢を遣ひなくし、（ト忠太思ひ切つて、）

忠太 氣の毒乍ら一錢の、たくはへもなければ、

五人　暫く待ちやれ。

勘助　へエ左様なら、アノ皆様が、百の錢もお持ちなされず、わしが商ふ燗酒を、たゞ飮みでござりまするか。

○　いかにも、平家な面はして飮んだが、催促される度毎に、實に源氏に困つて居るのだ。

勘助　イヤ御常談じやござりませぬ、金にも足らぬわづかな錢、どうぞ拂つて下さいまし。

忠太　ヲヽ金といへばいつもの古金買が參りなば、此度の勝戰に分捕なしたる品があれば、それを拂つて勘定致すから、必ず共に案じずに、もつと酒を出したり〳〵。

勘助　お氣の毒でござりまするが、モウ酒は賣り切れましてござります。

ト荷物の酒を隱す、軍兵□是を見つけ、

□　ヤイ〳〵燗酒屋、何を致す、ある酒をないなどゝ申す不屆きやつ、只今も申す通りだ、古金買さへ參りなば、直に拂ひは致してやるから、案じずに此處へ酒と肴を、

四人　もつと出せ〳〵。

ト捨ゼリフにて燗酒屋斷るを、無理に徳利を出し、忠太の前へ持來り飮む、勘助うろ〳〵して居る、木魚入りの合方に成り、花道より古金買吾市やつしなり、股引尻はしなり、草履にて具足櫃と屑籠を

一荷にかつぎ出來り、

吾市　古着古金買はう。（ト呼び乍ら出て來る、忠太此聲を聞き、）

忠太　ヲヽ噂をすれば影とやら、古金買の聲が致すわ。

〇　分捕の品を賣つて、早く酒が、

四人　飲みたいものだ。（ト此內吾市舞臺下手へ來り、）

吾市　古金買はう、分捕のお拂ひ物はござりませぬか。

忠太　こりや〳〵古金買、先程から待つて居つた、是へ參れ〳〵。

勘助　サア〳〵わしもお待兼ねだ、こつちへ來たい〳〵。（ト勘助下手へ來ようとして、吾市と顏見合せ、）や、こなたは。

吾市　コレ。（ト押へて氣をかへ、）ヲヽ勘助殿か、よう毎日精が出るの。

勘助　まア聞いてくれ、此間からの戰爭で、人は難儀といふけれど、わしは戰で錢まうけ、雨風いとはず出さへすれば、三拾貫の錢はかゝさずに、內へ持つて歸ります。

吾市　イヤ、わしも矢張り同じこと、かうして毎日出かけても、町の御用はさつぱりなく、所々の陣所を得意場に、分捕の品の拂ひ物で、思ひがけない錢まうけさ。

勘助　これといふのも源氏方が、勝利になつたばかりだ。（ト無念の思入あつて吾市と顔見合せ、）何と、有難いわけぢやないか。（ト兩人よろしく思入、忠太も思入あつて、）

忠太　こりや〳〵古金買、其方に拂ひたい品がある、まア是へ來やれ。

吾市　毎度お拂ひ下さいまして有難う存じます。シテ今日のお拂ひものは、どういふ品でござります。

忠太　其方に拂ふ品は、此度の戰爭に身共が功名致した時、分捕りなしたる一口の太刀、いか程に其方は買ひ取るぞ。

ト忠太太刀を出す、吾市受取り見て、

吾市　成程、是れは結構な品でござりまする。（ト此内勘助ものぞき見て、思入あつて、）

勘助　や、こりや、これ平家の、（ト云ひかけるを、吾市冠せて、）

吾市　イヤサ、何れ平家の何某といふ、名のあるお人がお持ちなすつた、結構な此の太刀。

忠太　いかにも此度八島の戰ひに、平家は殘らず敗軍なし、それに引きかへ味方の勝利、しかも是は敵の大將、清盛公の悴にて、三位中將惟盛が所持致したる此の太刀を、身共が分捕りいたしたのだ。

吾市　ムヽ、扨は惟盛公には、討死をなされしとか。

勘助　シテお前樣が惟盛卿を、お討ちなされましたのでござりまするか。

ト兩人思入あつて、

忠太　イヤ〳〵是は討取つたと申す譯ではないが、姿をかへて惟盛が何處へうせたか壇の浦の、苫屋に太刀と裝束が、ぬいであつた所をば、折よく身共が參り合せ、分捕つて參つたのだ。

勘助　それでは君には、何れへか。

忠太　ヤ。

勘助　イヤなに、いゝ分捕をなされましたな。

忠太　シテ古金屋には、いか程に引取るな。（ト此内吾市太刀をよく〳〵見て、）

吾市　イヤ、なか〳〵出來は當世風で、何處に一つ斯うといふ申分のない拵へでござります、惜しいかな此の太刀は、黃金作りと見えましても、是はめつきの納め太刀、中身を拜見致しませんでも上のめつきの樣子では、慥に中は生くらもの、こりやさのみには踏めません。

忠太　イヤ、それは古金買や屑買が、お定まりの口調だが、そんな見倒しな事を云はず、もつとふんごんで直を付きやれ。

○　何もこれきり其方に、賣らないといふ譯でもなし。

△　まだ追々に分捕りした、品をこれから賣拂ひ、

□ 酒の代を拵へねば、

○ 斯うして居ても樂は出來ぬ。

○ ぎり〳〵の處を附けたがよい。

吾市 外樣とは違ひまして、毎度御贔屓になりまする、お得意樣の事ゆゑに、精々直をよく頂きまして、三兩ならばお貰ひ申します。

忠太 なに三兩だ、そりやァあんまりな見倒しやう、身共が方は捨賣にしても、二三十兩には賣れようと存じをつた此の太刀。

○ コリヤ〳〵古金屋、其樣に足許を見ずと、

三人 モウちつと張込んで買へ〳〵。

吾市 イエもうせい〴〵働きましたのでござりますから、實に三兩より致し方がござりませぬ、がよろしうござります、私も折角拜見致しまして、買はぬのも殘念ゆゑ、左樣ならモウ二百疋買ひませう。それで實に仕方はござりませぬ。

忠太 なか〳〵二歩や三歩買ひ上げたのでは、所詮手放す譯には行かぬ、どうも是非がないのだ。

勘助 ア、モシ〳〵旦那大がいの事なら、思ひ切つて手を打つておしまひなされませ、御勘定を下さい

ませぬと、モウ是から酒を上げられませせぬ、それにお拂ひ物の太刀だといつて、元をたゞせば拾ひ物、元直のきれる品ぢやなし、少しも早く金にして酒を召上るのが上分別でござります。

○　こりや燗酒屋の云ふ通り、實の所は元はたゞで手に入つた此の太刀なれば、今此處でばらさぬ日にや、いつ迄これを持つて居るか、商人まれな此の軍中、俗に云ふ寶の持ちぐされ。

△　同じ寶になさるなら通用金の寶にして、食ひたい時でも飲みたい時でも右から左りと用が足り、

□　まして其左りは、お旦那を始めとして、陣中大方酒飲みばかり。

◎　それを僅な直違ひで、古金買にお拂ひなくば。

○　今日からあなたも私共も、酒の氣にはなれますが、あなたも是ぎり飲まずには居られますまい。

△　こりやお拂ひなされた方が、

四人　よろしうござりませう。

忠太　イヤ手前達も陣太鼓を打つことがあらうのに、目先の見えぬ奴らだわえ、賣手の方では少々ぐらる、法螺を吹かねばならぬのを、それを側から總體進めで、古金買の味方をするとは、扨々惡い太鼓を叩く奴らだ。

吾市　イエ此の品と申しましても、達てお貰ひ申したいといふ品でもなし、只今申上げました直段で、

勘助　モシお氣に入りませずば、お氣の毒樣でも外へお見せ下さりませ。わしも此處にばかり居た時は、商ひもない事ゆゑ、そろ〳〵外へ出かけませう。

ト兩人荷をかつぎ、下手へゆきかける。

忠太　アヽこれ、まて〳〵、誰も賣らぬとは申さぬから、まア爰へ來やれ。

吾市　へい、左樣なら、三兩二分でよろしうござりまするか。

忠太　サア、そこをどうか五兩に買うてくりやれ。

吾市　イエ、どう致しましても、外樣なら見倒しもつけまするが、お得意先の事でござりますゆゑ、實に決着な直段でござりまするから、モウ是より二朱も買へませぬ。

忠太　さて〳〵因業な奴だ、然らばどういたしても買はぬと申すか。

吾市　それより仕方はござりませぬ。（ト又ゆきかけるを、忠太思ひきつて、）

忠太　エヽ仕方がねえ、拂つてやれ。（ト太刀を出す、吾市戻り。）

吾市　左樣なら、お拂ひになりまするか、それは有難うござります。（ト財布より金を出し乍ら、）外にはむきの惡い品でござりますから、おもはしく引取れませんでござります、其の代り今度は、何ぞお入合せをいたしまする、左樣なら三兩二歩、慥にお渡し申しまする。

ト小判三枚と一分銀を忠太に渡す、勘助思入あつて、

勘助　吾市、豪勢な掘出しものをしたなう。（ト片荷の鎧櫃を見て、）掘出し物と云へば、此の鎧櫃は何處ぞで見倒して來たのか。

吾市　そりやお此の先の陣中で、安く買つて來たのだ。

勘助　さうして中に、鎧はあるのか。

吾市　ナニ、櫃ばかりあつたから、何かになるだらうと思つて買つて來たのだが、是ればかりおや急にはけねえ。

ト此内忠太金を改め見て、

忠太　こりや／＼燗酒屋、先程から待遠であつた、酒肴の前錢に先づ一兩遣す間、是を取つておきやれ。

ト小判一枚を出す、勘助受取り、

勘助　是は有難うござります、こんなに頂戴いたしましては、いくら召上つても大丈夫、まだ煮込も酒も澤山ござりますから、ずん／＼と上つて下さいまし、餘程のお預かりになつてをります。

忠太　先程賣切れたと申したくせに、イヤ現金な奴だ。

勘助　ヘイ、現金でさへございますなら、いくらでもよろしうございます。

○　こりや又おみこしを据ゑて、飲みたまへ旦那。

四人　大きに御馳走でございます。

忠太　ずん〳〵此處へ出してくれ、すつかり醉がさめてしまつた。

勘助　畏りました。

ト勘助荷物の内より、煮込を皿に盛り德利を添へ、忠太の前へ持ち行く、是にて皆々酒を飲み居る、薄く遠寄せ、ばた〳〵になり、上手より軍兵の五走り出來り、

五　忠太樣、是においでゞございまするか。

忠太　何事ぢや。

五　只今御主人梶原樣が、急速あなたに御用の筋、直樣出張ある樣にと、お迎ひに參りましてございます。

忠太　なに、主人より火急の御用とな、よし〳〵、只今直樣參ると、左樣申せ。

五　イエ〳〵直に同道致して參れと、くれ〴〵も申付かつて參りました。

忠太　イヤ參りは參るが、只今酒を、イヤなに、先へ手前が戻つたがよい、身共は後より參る間。

五　イエ殿様からの仰せゆゑ、お供致して參ります。
忠太　然らば是非に及ばぬ、其方達も供いたせ。
四人　畏つてござります。
忠太　こりや／＼燗酒屋、身共は主人の陣所より、程なく戻つて參るから、それ迄暫く是に待て、燗の酒をわかしておけよ。
勘助　畏りましてござりまする。
忠太　イザ、者共。（ト立たうとしてひよろ／＼とする、軍兵〇腰を押へるを振りはらひ、）サア參れ。
ト時の太鼓にて、忠太先に軍兵付いて上手へはひる、後吾市勘助あたりを窺ひ思入あつて、
勘助　薩摩五郎殿、
吾市　コレ。（ト上下を見廻し、誂への合方になり、）主人景清の命を蒙り、姿をかへて今朝より、此の八島に屯なす、源氏方の陣所へ入り込み、敵の機密を窺はんと、それがし粉骨碎身なし、所々の陣所を窺ふに、用心嚴しき源氏方。
勘助　燗酒賣と姿をやつし、拙者も諸所へ入込めど、敵は名に負ふ智勇するどき源九郎、それに從ふ武藏坊、四天王を始めとして何れも一騎當千の、働きなさんず若武者ゆゑ敵に取つては實に難儀、

吾市　高の知れたる關東武士と、思ひの外の豪の者、中にも味方で驚きしは、那須の與市が扇の的、漂ふ船に立てたるを、要を射きりし射術の妙手。

勘助　または源九郎義經を、主人能登守教經が、船中にて射んとせし時、軍船八艘飛ばれしは、諸神應護の希代の手練。

吾市　これといひそれといひ、正に勝利になるべき場所も、終には敵にせばめられ、味方敗北いたすのも、是皆大將平相國淸盛公の多年の積惡、一時に子孫に報い來て、榮華も忽ち蘆生が夢、是天命の歸する所。

勘助　悔んで詮なきことながら、貴殿拙者も御主人へ、報國盡忠の志し、立てんと思へど水の泡。

吾市　消えて行く身は皆味方、たゞ恨むべきは源氏方、一矢なりとも大將へ、番へて討死せんものと、思ひ八島の浦ならで、

勘助　處も爰は八島寺、大師の札所靈場も、皆敵陣の幕張と、

吾市　變る浮世の有樣は、

勘助　惡因惡報の世のたとへ。

吾市　必らず天の罰する處。

勘助　互ひに悔むは、
兩人　愚でござる。（ト兩人よろしく思入あつて、）
吾市　何にもせよ氣遣はしきは、惟盛卿の御臺所若葉の内侍、まつた公達六代御前、御座船におくれたまひ、陸にまようてござるよし。
勘助　拙者も其事案じられ、商ひながら御行方をお尋ね申してあるけども、何れへお落ちなされしか、いまだにお行方知れませぬ。
吾市　然し婦人の御步行なれば、未だ遠くへはお越しあるまじ。
勘助　是れより又も右左り。
吾市　別れてお行方、
勘助　お尋ね申さん。
吾市　左樣ござらば、
勘助　薩摩五郎殿。（ト大きく云ふ。）
吾市　アコレ。
ト押へる、勘助びつくりして口を押へ、荷をかつぎ、兩人氣をかへて、

勘助　おでん燗酒。

吾市　古金買はう。

ト在郷唄になり勘助は上手、吾市は下手へ、呼び乍らはひる。後合方薄き遠寄せになり、花道より漣侍女の拵へ、市女笠、ざうり、六代御前、壺折ふんごみ黒塗笠、杖をつき、後よりなぎさ同じく侍女の拵へ、漣　六代の手を引き出來り、花道にて、

漣　若君樣にも嘸お草臥でござりませう。

渚　今少しお出で遊ばしますれば、お負ひ申して參ります程に、

兩人　おとなしうおひろひ遊ばしませ。

六代　足が痛うて、あるけぬわいなう。

漣　御尤も樣でござりまするが、少しの間、御辛抱遊ばしませ。

渚　向ふに見ゆるお寺へ參り、門を頼んで暫しの間、御休息をおさせ申しまする程に、

兩人　サア〳〵、お出で遊ばしませ。

ト矢張右の鳴物にて、三人舞臺へ來り、漣　二重の上へ前の莚を敷き、渚　腰に付けし風呂敷包みをとき、莚の上へ敷き、此上へ六代を住はせ、兩人邊りへ心遣ひの思入。

蓮　殿樣にも御臺樣にも、何れへお落ちなされしか、どうぞお行方尋ね出し、若君樣を恙なうお手渡し申したいと、心はやたけにはやれども、

渚　行く先々は敵の中、斯うして居る間も心遣ひ、幸ひ願ふは此の御寺、大師樣の札所なれば、何卒若君の御身の上に恙なきやう、お守り下され。

蓮　どうぞ御無事に御船迄、お供申して行きたいものぢやなア。（ト渚後ろを見て、）

渚　さういふ内も油斷はならず、願ふ札所の門前も、幕張りしたる敵地の内、若君樣は私がお負ひ申して行きます程に、蓮殿には警固しながら。

蓮　合點でござんす。

ト蓮手傳ひ、渚帶をとき、六代を背負ふ、爰へ上手より以前の軍兵五人出來り、左右よりかこみ、

○　最前から物蔭で、始終の樣子を窺ふ處、

△　わいらは正しく平家の落人、まつた、それなるちつぺいは、

□　平家の公達、六代御前に違ひあるまい。

◎　包み隱さず有體に、

五人　其名を名乘つて、

五人 縄にかゝれ。

ト立ちかゝるを、漣渚ぎつくり思入あつて、六代をかこひ、

漣 イエ／＼、私共は其様な者では決してござりませぬ、今度八島の戦ひにて、知るべが参つて居りましたを、やう／＼戦が鎮まりましたゆゑ久々にて戻つた者、何も怪しい者ではござりませぬ。

○ ム、、土地へ戻つたとあるならば、其の方達の、

五人 宅は何れだ。

兩人 サア、それは、

五人 宅を知らぬか。

兩人 サア、それは。

五人 サア、

皆々 サア／＼／＼、

○ こりやよく聞けよ、はる／″＼知るべへ参りをつたを、此度の戦ひに勝敗分つて鎮まるゆゑ、故郷へ戻つて参つたと、只今其方申したが、誠それに相違なき者が、自身の宅の知れぬといふは。

兩人 エゝ。

○　サア隱してもモウ無駄事、平家の落人に相違ないわえ。
△　此上は梶原樣の陣所へ引きつれ、委細の事を申上げん。
○　それ、何れも、引立てめされい。
四人　心得ました。
　　ト三人を引立てに掛る、此の前方上手より、以前の燗酒屋窺ひ居て、此時中へ割つて入り、軍兵をささへる。
△　ヤ、わりやさつきの燗酒屋、
四人　何で爰を留めるのだ。
勘助　ヘイ、おとめ申した其の譯は、さつきあなたの旦那樣から、お貰ひ申した一兩の、酒をまだ上げませぬゆゑ、それでお留め申しました、どうぞあなた方も、澤山飮んで下さりませ。
　　ト德利を出す。
○　エヽ馬鹿をいふなえ、今落人を引とらへ、梶原樣の御前へ引くに、何ぼ酒が好きだといつて、爰でのんでゐられるものかえ。
△　邪魔せずと、退いて居やれ。

ト勘助を突きのけ、子役を引立て行かうとするを、勘助是をさゝへる、ちよつと立廻つて軍兵を一人投げのける。

○ ヤイ商人、平家方の落人を、引立て參るに其方は、

△ 何で妨げ、

皆々 致すのだ。(ト左右より取りまく、勘助せゝら笑ひ、)

勘助 ムヽハヽヽヽ、わいら達は此のおれを、たゞの燗酒屋と思つてゐるか、ヤレ／＼不便ながらくためら、かねて主人の命を受け、姿をやつして入込みしも、源氏の陣を窺ふ爲。

五人 何と。

勘助 誠は平家の御内にて、さる者ありと呼ばれたる、能登守教經が家來、鷲の羽彌藤治てう豪の者、身共が目にかゝつたからは、片ツぱしから鷲づかみ、羽根ツぱたきもさせやアしねえ。

トきつと見得。

□ 扨こそ怪しい商人と、思ひの外なる平家の間者、彼奴ぐるみ引ツくゝれ。

四人 合點だ。(ト皆々打つてかゝるを、勘助受けとめ、)

勘助 若君樣には此處に、御座あつては御身危し、そこな衆とも／＼警固して、少しも早く此間に。

兩人　心得ました。

ト軍兵六代をやるまいとするを、勘助是をさゝへる、此間に漣附添ひ、渚六代を背負ひ、上手へはひる。

○　あれをやつては。

勘助　何を、小癪な。

ト遠寄にて勘助軍兵ときつと見得、是より三味線入り、大小の鳴物になり、軍兵五人を相手に立廻りあつて、よろしく

幕

ト幕引付けると、遠寄せの鳴物にてつなぎ、道具出來次第引返す。

返し　駒立石切通の場

〔役名＝＝古金買吾市實は薩摩五郎、番場の忠太、駿河次郎清繁、伊勢三郎義盛、公達六代御前、平家方軍兵五人、源氏方軍兵四人。平家の侍女渚。〕

（駒立石切通の場）＝＝本舞臺一面の平舞臺、向う杉山の遠見、此前一面の藪疊、上下杉林、日覆より

同じく釣枝、總て駒立石切通しの體、山おろしにて幕明く。と早き合方バタ〳〵になり、花道より以前の吾市鎧櫃を背負ひ、太刀を付け、走り出來る、後より以前の渚片肌ぬぎ、懷劍を持ち手負にて吾市を追ひかけ出來り、花道にてちよつと立廻り、舞臺へ來り、吾市の背負ひし鎧櫃に手をかけ、

渚　たとひ此まゝ死するとも、此の若君は渡さぬ〳〵。

吾市　斯く亂軍の中ゆゑに、そちが疑念はさること乍ら、古金買とやつせし我は、平家方に名の高き、上總七兵衛景淸が家來、薩摩五郎高景と申す者、女に稀なるそちが働き、たゞ不便なは此の深手所詮存命覺束なければ、若君はそれがし預かり奉り、是より直に守護なして、御座船へ御供なす必ず共に氣遣ふな。

ト渚これを聞き、思入あつて、

渚　其のお詞に相違なくば、何ぞ慥な證據があるか。（ト吾市思入あつて、よろひ櫃をおろし、）

吾市　ム、、其の證據は、オ、幸ひ。（ト腰に付けし太刀を出し、）是なる品は勿體なくも、大將惟盛卿の則ち御太刀、一度敵へ渡りしをそれがし姿をやつせしゆゑ、計らずも再び戻りしが、是が慥な證據なるぞ。（ト渚よく〳〵見て、）

渚　ヲヽ見覺えのある此の御太刀、そんならあなたは景淸樣の御家來樣、五郎殿でござりましたか。

吾市　ヲヽサ、主人の命を蒙つて、姿をやつし敵陣の、樣子を窺ふ間者のそれがし。

渚　ヲヽ嬉しやそれで落着きましたが、女の淺い心から一途に敵と思ひ詰め、先程よりの無禮の手向ひ、御免なされて下さりませ。

ト渚苦痛をこらへ乍ら、よろしく詫びる、吾市淚を拂ひ、

吾市　何の〳〵其の詫には及ばぬ事、主人大事と思へばこそ、其の疑念も發する道理、少しも惡うは思はぬが、女の身にて斯く迄に手疵を受けしそちが健氣さ、かゝる忠臣あり乍ら御運拙き平家の末、

渚　アヽ是非もなき事共ぢやなア。是より私もとも〳〵に若君のお側に付添ひ、お供致して參りたけれど、御覽の通りの此の深手、所詮お供もならざれば、若君樣をお賴み申す。

吾市　それは必らず氣遣ひ致すな、此の鎧櫃へ入れ參らせ、首尾よく身共がお供致すぞ。

渚　エヽ忝い。（ト苦痛の思入にて、）若君樣をお渡し申せし上からは、是にて思ひ置く事なし。

吾市　不便ながらも其方は、所詮存命なし難ければ、早く苦痛を助けてくれん。

渚　今際の別れに若君樣を、どうぞ御慈悲に今一目。

吾市　ヲヽ、合點だ。（ト吾市鎧櫃を明け、中より六代を出す、六代吾市を見て、）

六代　アレ、こはいわいなう。

渚　アヽモシ、何もこはい事はござりませぬ。(ト六代をかゝへ、)アヽ嬉しや、是が、(ト別れを惜しむこなしにて、思入あつて合掌なし、)南無阿彌陀佛々々。

ト吾市思ひ切つて後ろへ廻り、太刀をかまへ、

吾市　エイ。(ト渚の首を打落す、六代びつくりして、)

六代　アレエ。(ト駈出すを、吾市介抱する、爰へ軍兵△窺ひ出て、)

△　怪しい小びッちよ。(ト掛るを吾市つきまはして當てる、軍兵△立ちすくみになる、吾市氣をかへて、)

吾市　すんでの事に、代物を、

ト手早く六代を鎧櫃へ入れ、蓋をして腰をかける、此のとたん軍兵△見事にかへる。

取られる處であつた。(トあたりを見廻し、鎧櫃を背負ひ、)どりや、モウ二三軒廻つて歸らうか。

トそろ／＼と花道よき所迄行く、此の時上手へ以前の忠太先に、軍兵四人付添ひ出で、

忠太　古金買、暫く待て。(ト吾市振返り見て、)

吾市　ヘイ、何ぞ御用でござりまするか。

○　いかにも、御用だ、是へ參れ。

吾市　畏りましてござりまする。（ト合方になり、吾市思入あつて、舞臺下手へ來り、）何ぞお拂ひものでござりまするか。
忠太　外でもない其方が、最前脇で買受けし、其の鎧櫃が求めたい。
吾市　何の御用かと存じましたら、此の鎧櫃でござりまするか、そりやモウ賣買致すが商賣でござりまするゆゑ、賣つて上げたい品なれど、是は內遣ひに致しませうと、買つて參つた鎧櫃、實は私の着物入れ、つゞら代りに致しますれば、どうもお賣り申す譯には參りませぬ。
忠太　賣られぬとあれば是非がない、然らば櫃の其中を、身共にちよつて見せてくりやれ。
吾市　是はまた旦那樣には、希代な事の仰せながら、どうも此の中ばかりは見せられませぬ、と申す譯は、人は逃げたり隱れたり致して居りまする戰の中を、命にかけての古金買、あなたの前では言ひにくけれど、二足三文見倒しの、値段も承知で買ひますのは、何時なんどき戰が始まり、何處で命を捨てますか、大事の軀を投出して、商ひするのは旦那樣、高利を見ようばつかりゆゑ、諸所の陣所で買出しました、掘出し物がござりますれば、どうも中は見せられませぬ。
忠太　成程そちが申す通り、こりや中は見せられまい、さうして汝は此の櫃を、何れの陣から買ひ出した、最前主人の砦より、上意を受けて戻りがけ、八島寺の門前から、不圖目を付けた番場の忠太

怪しい奴と見たゆゑに、直に心の駒立石、一本通りの切通しを、馳せ付け來つて樣子を見るに、われが背負ひし鎧櫃、中は正しく平家の公達、

吾市　ヤ、

忠太　六代御前であらうがな。（トきつと云ふ、吾市思入あつて、）

吾市　イヽヤそんな物ではござりませぬ、六代どころか七八代續いた家の古道具、釘もゆるんで合せ目のひらかぬ先にわしが買取り、廻りの板の埋れ木に、ならぬ内につくろひをして、是から再び世に出さうと手入れをするのが商賣冥利、明けて言はれぬ櫃の蓋、中には利益を見まする品が、澤山はひつて居りますれば、掘出し物は祕佛同然、めつたに中は見せられませぬ。

ト始終思入にて云ふ、忠太むつとして、

忠太　イヤ、見せられぬとあれば、猶々怪しい、それ、者ども箱の蓋を開いて見ろ。

吾市　イエ、此の中ばかりはどうしても。（ト鎧櫃を圍ふ。）

忠太　それ、改めろ。

四人　心得ました。

ト四人箱の蓋を明けようとするを、さゝへる立廻りあつて、吾市四人を捉へる、忠太きつとなつて、

忠太　ヤア、手向い致す怪しき奴。モウ此の上は、（ト忠太切つてかゝる、此時花道の揚幕にて、）
駿河　アイヤ、暫く、お待ちなされい。
伊勢　伊勢三郎義盛、
駿河　駿河治郎清繁、
兩人　只今それへ參るでござる。
皆々　何と。
ト大小の合方へ薄き遠寄せを冠せ、花道より駿河次郎、後ろ鉢卷陣立の拵へ、伊勢三郎同じ拵へにて軍兵四人、床几を持ち出來り、花道に留り、忠太兩人を見て、
忠太　誰かと思へば、伊勢駿河の御兩所、何はしかれ此處へ、サ、サ御通りなされい。
駿河　いかにも、左樣仕らう。イザ、義盛殿。
伊勢　まづ〳〵。（ト是にて皆々舞臺へ來り、少し下手寄りに住ひ、忠太思入あつて、）
忠太　早速乍ら承るが、只今こやつが狼籍なすゆゑ、怪しき奴とそれがしが、取押へんと致せしを、何ゆゑあつてお止めありしぞ。
駿河　サ、お止め申すにはあらざれど、只今陣所を見廻りに、參る途中でかくの仕合せ。

伊勢　拙者も只今猿井殿と、時替りの非番になり、休息致す道すがら、駿河殿に面會なし、是迄同道致してござる。（トちよつと會釋する、駿河思入あつて、）

駿河　最前より此場の爭論、あれにて見聞致したが、たとひ商賣物にもせよ、賣らぬと言ふを無理無體買はうといふは本意に非ず。

伊勢　達て賣らぬとあるならば、此の商人一人に限つたこともござるまい、外でお求めなさるがよい。

忠太　アイヤお手前達のやうに、さう云はるれば尤もの様には聞ゆれど、身共が是れなる鎧櫃を、達て買はうと申すのは、中は正しく平家の公達、六代御前をかくまひ置くを、慥にそれと見たゆゑに平家の末は根を斷つて、枝葉迄絶やせとあるゆゑ、身共が探索致するを、よもや批判はござるまい。

駿河　成程主人の達しを厳重に、お勤めなさるは御苦勞千萬、コリヤ商人、只今忠太殿の言はるゝには櫃の内に平家の公達、隠しあると仰せあれど、よもや左様な物はあるまいナ。

伊勢　定めて汝は妻がなく、出商賣の事ゆゑに、幼き者をたゞ一人、宅へ殘しては置かれぬゆゑ、櫃へ入れて荷籠と共に、一荷に荷つて商ひなすか、さうであらうな。

ト駿河、伊勢吾市にのみこませる。

吉市　へイ、おつしやる通りでござりまする。それに付いて私が昨年からの身の上話し、お聞きなされて下さりませ。（ト合方になり、）然も昨年の冬のとり時、俄の寒さに綿入物も、調ひませぬ其の日稼ぎ、棟割長屋の裏屋住居、雨戸やかべのすき間もる、夜風が女房のからだへ障り、それからぶら〳〵煩ひつき、貧窮ぐらしの手ずくなに、一人の子供も頑是なく、どうした物と思ふ内、病ひは日に〳〵重るばかり、出商賣さへ出來兼ねる程、煎じ詰めたる藥のしろ、たうとう氣やみに女房に死なれ、據なく其後は、片荷へ悴を入れまして、毎日商ひいたしまするが、今日わきの得意場で、鎧櫃の明きがあるから、拂つてやるとおつしやるゆゑ、葛籠代りに致しませうと、買つて參つた鎧櫃、又此の太刀は論より證據、是にお出での旦那樣から、買受けました品なれば、どこに一ツ胡論な事は、此の身に取つてござりませぬ。また疑ひかゝりし櫃の内は、全くは私の悴是も女房に別れたゆゑ、實に困つて居りまする。

トよろしく言ふ、忠太思入あつて、

忠太　イヽヤそれは僞りだ、今御兩所が其方に、慈悲の詞をかけたに付込み、誠しやかに申述ぶるが、一圓分明ならざるは、其の日稼ぎの古金買が、ぼろッこならば知らぬ事、錦を着てゐる小悴を、どうしてわりやあ連れてあるく。

吾市　エヽ。

忠太　イヤサ、詞だくみは理に落ちずと、武士を欺く憎さ奴、慥に中は六代御前、匿ふこやつも探索者、それ引くゝれ。

軍兵四人　ハツ。（ト立ちかゝるを、）

駿河　イヤ、其の探索には及びませぬ。

忠太　なに、及ばぬとは。

駿河　されば、それなる古金買、彼が悴に相違なくば、探索致すに及びませぬ。

伊勢　よし又それなる櫃の内、たとひ平家の公達にもせよ、小兒の事なら見のがしやるが、武士の情と申す者。

忠太　ハテ、情をかけるも時による、再三申す樣なれど、平家の末は悉く、根を斷つて葉を枯らせよと、主人梶原よりの達しなれば、是非とも詮議いたさにやならぬ。

駿河　サア、たとひ梶原殿の仰せにも致せ、そこを貴殿が見のがしやるが、則ち慈悲と申すもの。

伊勢　勇ばかりでは治まり難し、貴殿も爰らで情をかけ、憎がられぬ用心なされ。

忠太　イヤ、憎まれるのは百も承知、二百も合點して居る忠太、たとひ人が何と云はうと、小兒であれ

ば助けると申した日には其の悴が、成人すれば謀叛の企、必ず君へ敵たふ道理、其の時貴殿は何
と召るゝ。

伊勢　それは貴殿の愚なる論、小兒を助け遣して、成人の後敵たふとも、寄り集まりのひよろ／＼武士、
何程の事あらんや、たとひ數萬の軍勢で、さいそくなすとも其時は、貴殿の力はかり申さぬ、そ
れぢやによつてあれなる櫃、よしんば平家の公達にもせよ、小兒の儀なれば、お構ひなく。

駿河　コリヤ見のがして、おやりなされい。

忠太　すりや、是程迄にそれがしが、目串を付けしあの小兒を、何ゆゑあつて見のがせとは。

駿河　其の譯愚昧にさとり得ずば、申し聞かさん承られよ。

忠太　ヲヽ、いかにも、聽聞致すでござる。

ト忠太きつとなる、駿河、伊勢思入あつて、

駿河　恐れ多き事ながら、いまだ我君御幼稚の節、待賢門の戰破れ、御舍兄たる今若乙若、御公達の三
人は、御母常磐御前の懷ろに抱かれ、然も降り積む雪の暮、伏見の里にさまよはれし時、平家へ
一度捕はれて、君諸共に御連枝方、既に死刑に及ぶべきを、彌平兵衛宗清と池の禪司が情けに依
て、一命を助かりしゆゑ、今鎌倉殿と人も仰ぐ、其時平家に御身の如き、情を知らぬ人あつて、

恐れ多くも父諸共、死刑に及ぶ其時は、此度八島の合戰に、平家追討の指揮をなす、範賴公義經公の兩大將は有之まじ、君にも此事忘却なく、其の大恩を思召され、平家の公達目に掛らば、見のがせよとある、義經公の則ち御諚。

忠太　イヤ、たとひ義經公の御諚にもせよ、身共は主人梶原の、嚴命受けて探索するのだ。

伊勢　ヤア梶原は臣下ならずや、恐れ多くも御連枝たる、義經公の下知をもどくか。

忠太　ヲヽ、いかにももどきまする。

兩人　何と。

忠太　そも〳〵石橋山の合戰に僅か主從七騎にて、伏木の內に隱れたまふを、其頃平家の家臣たる、主人梶原景時が、お助け申せし賴朝公、こりや大恩のある主人梶原、然る所只の家臣同樣、ヤレ君の嚴命だの、主人の御諚なぞと、權威をふるひ威張りちらかすなまくら武士、お手前達は御存じなきか、只の家臣と一つにはならぬぞ。

駿河　ヤア、云はしておけば過言千萬、たとひ景時賴朝公へ、大恩があるにもせよ、梶原は臣下の身分、

伊勢　その分際で御連枝たる、義經公の上意をそむくか。

忠太　サア、それは。

兩人　返答あるか。
忠太　サア、
兩人　サア、
三人　サア〳〵〳〵。
伊勢　上意を背く不屆き奴、モウ其分には差置かぬぞ。
　　ト兩人きつとなつて、太刀へ手をかける。忠太びつくりして飛びのき、
忠太　アヽこれ〳〵、誰も背きは致さぬゆゑ、必らずともに御兩所には、御短慮をさつしやるな、池の禪司が恩を思ひ、助けよとある義經公の、上意があれば是非に及ばぬ、身共も見免しゆるしくれう。
　　トむれんのこなしにて云ふ。
駿河　然らば見のがしおやりなさるか。イヤ、それでこそ誠の武士。
伊勢　情は人の爲ではござらぬ。（ト忠太思入あつて、）
忠太　しかし此後お祟りあらば、お手前達はいかゞめさるな。
駿河　其時こそは兩人が、
伊勢　切腹致す分の事。

駿河　貴殿の腹は借り申さぬ。

忠太　イヤ借りられてたまるものか。しかし、みす〳〵櫃の内。(ト下手へ思入。)

兩人　いかゞ致した。

忠太　イヤなに、命冥加な奴だなア。

ト忠太いま〳〵しいといふ思入あつて、軍兵四人附添ひ上手へはひる。吾市邊りを見廻し思入、本調子の合方になり、

吾市　何から何迄御兩所の、お情厚き此の場の御配慮、お禮は詞に盡し難し、是に付けても御大將、流石は智者と名の高き、義經公の御仁心、肝に徹して忝し、今日平家滅亡なすも、是皆天理に從はぬ、淸盛公の惡逆ゆゑ、聊源氏を恨むことなし、斯く仁心ある人々に、一旦此場は救はるゝとも猶行先は敵の中、再び無慈悲なやからの手に、捕へられんも計られず、其時悔んで詮なければ、六代君拙者諸共、今此所で御兩所が繩かけて、義經公の御前へ御引き下され。

ト吾市眞中にどつかと坐し、覺悟の思入、駿河、伊勢感心の思入にて、

駿河　アヽあつぱれなる覺悟ながら、今其方を捕縛なし、引く位なら梶原の、家來をそれがし止めはせぬ。

吾市　でも此の先で捕はれなば、

駿河　サア、そこを存じてそれがしが、心ばかりの貴殿へ寸志、此の行先の氣遣ひなきやう。

ト思入あつて、懷中より鑑札を出し投げてやる。吾市受取り見て、

吾市　ムヽ、シテ是れなる鑑札は。

駿河　則ち軍中往來の切手。

吾市　すりや此の切手をそれがしへ。

伊勢　いかにも、心置なく船場へ早く。

吾市　エヽ、有難うござりまする。（ト吾市鑑札を懷中する、爰へ上手より忠太出で、）

忠太　さてこそ〳〵、最前よりの振舞といひ、怪しき奴と心を付けしに、平家方へ情をかけるは、

駿河　ヲヽ、義經公の、

兩人　嚴命なるぞ。

忠太　イヤ、たとひ義經公の嚴命なりとも。（ト刀へ手をかけるを、）

駿河　ハテ、御連枝へ對して。

ト駿河、伊勢陣笠にて左右へへだてる、忠太刀を鞘へ納める。吾市鎧櫃を背負ひ立上る、双方見合つ

て、木の頭。

駿河
伊勢　失敬なるぞ。

ト忠太口惜しき思入、駿河伊勢早く行けといふこなし、吾市會釋して下手へ行く。双方引ばりよろしく、本釣鐘の寺鐘にて、

ひやうし　幕

二幕目　義經野陣の場

〔役名〕――源九郎義經、龜井六郎、片岡八郎、伊勢三郎、駿河次郎、高畑治郎、軍兵大ぜい。〕

〔義經野陣の場〕――本舞臺三間一面の山幕、どんちやんにて幕明く。ト直にばた〳〵になり、上下より軍兵○△□◎の四人二人づゝ、早足にて出來り、舞臺にて行逢ひ、

○　ヲヽ、こなた衆は大層あわてゝ、どう致されたのぢや。

□　また敵に、不意でも討たれたのではないか。

△　なか〳〵左樣な油斷はなけれども、知つての通り平家方は大敗軍、此圖を外さず、よき大將の首でも拾ひ、一足飛びの立身と、頑張つて居つたる所。

◎　聞かつしやれ、すこぶるの落人を見つけました。
○　それは御手柄、どうか半口のせては貰はれまいかな。
△　處が肝腎の玉をにがして殘念千萬。
□　何の事だ、どうでこなた衆のする事は、其位のものだ。シテ、それは男か女か。
◎　女も女年の頃は十七八で、その美しさといふものは、頗る別品といふ代物だが、モシ貴公達、道で見かけはせなんだか。
○　イヤ、心付かなんだが、いつたいそれは何者ぢや。
△　平家方に隱れのない、能登守教經の娘、花園姫を引つとらへてさし出せば、一廉の御褒美と思ひの外、女にしては素早い奴。
◎　とんと行方を見失うたが、どうか尋ねあてたいものだ。
□　相手は能登守の娘と聞いては、猶々殘念なことであつた。
◎　何で又能登守に限つて、さう遺恨に思はるゝのだ。
△　察する所戰場で豪勇無双の教經ゆゑ、よつほど手ひどい目にあつたと思ふわえ。
○　イヤ我々が目に逢ふのは有りうちのことなれば、恥を恥とも思はぬが、たつた今壇の浦であの佐

□ 藤繼信殿が、我君に成り代り戰場へ出られし所、今云ふ能登守が矢先にかゝつてあへない御最期、其事を御舍弟の忠信殿の陣所迄、お知らせ申しに參る途中、丁度よい敵の片割、捕へなば出世の種、拔群の手柄、それゆゑ殘念に思ふのだ。

◎ それは惜しいことをした、然しお氣の毒なは繼信殿、是がまことに惡い矢先と云ふのだらう。

△ ほんに、夢の樣な話しだ。

□ 何を言はつしやる。

◎ イヤ、おどけは差置き、我々は敵の片割れのあの女を、

△ 後より追かけ、召しとらん。

○ 我々共も急ぎのお使ひ、

□ 然らば是にて、

四人 お別れ申す。

ト山おろしになり、軍兵二人づゝ上下へ別れてはひる。跡鳴物打上げ、知せに附きうしろの山幕を切つて落す。

本舞臺三間の間一面岩組の張物、舞臺前上下へ浪板を出し、よき所に松の立木、日覆より同じく釣枝上下へ幕串をたて、笹龍膽の紋の附きし幕を張り、上手に源九郎義經、鎧陣羽織附太刀、采配を持ち毛沓にて床几にかゝり此の左右に龜井六郎、駿河次郎、伊勢三郎、片岡八郎等の四天王陣立にて、一人義經の兜を持ち、其外軍兵大勢、旗馬印などを持ち並よく控へゐる、總て義經野陣の模樣よろしく、浪の音小鼓の入りし合方にて、此の道具納まる。

義經　いかに方々、身不肖なれども義經が、兄賴朝の命を受け、次兄範賴と二手に別れ、一の谷を手始めに、亡父の怨敵平家の一族、鵯越の逆落しより、今又八島壇の浦の戰ひに、敵を西海の浪に漂はせ、軍功あけてかぞへ難きも、我一人の手柄にあらず、皆汝等が忠勤のなす處と、義經過分に思ふぞよ。

龜井　ハヽ、コハ冥加なる御仰せ、何ぞや葉武者の拙者共、いか程に働くとも、平家の大軍追討なす、かゝる大功相成りませうや。

駿河　是と申すも我君の、御軍令のよろしきゆゑ、御旗下の諸公は元より、我々に至る迄、手足の如き戰の掛引き。

伊勢　數なりませぬ者迄も、英名を子孫へ傳へ、末代ほまれを殘しまするも、是御主君の皆おかげ。

片岡　弓矢とる身の本懐ゆゑ、いつの世にかは此御恩、報ずる時節の候はんや、臣等が身にとり何程か、

龜井　有難き仕合せに、

皆々　存じまする。

義經　しば／＼軍功ありながら、それにほこらぬ申し條、恩賞は後しての沙汰、いまだ平家の一門、全く亡びしにもあらざれば、油斷なきやう心を用ひよ。

四人　畏つてござりまする。

ト浪の音、ばた／＼になり、花道より軍兵一人走り出來り、花道に手をつかへ、

軍兵　ハヽ、先刻君の御名代として、佐藤繼信御姓名を名のり、出陣なせし所、敵の大將教經が矢先に掛り、落命仕つてござりまする。

義經　なに、すりや繼信には落命せしとな。

皆々　ヤヽヽ。(ト義經始め皆々驚く、義經きつとなつて)

義經　馬引け。(トずつと立つ、四人あわてゝ義經をとめる。)

龜井　アイヤ我君暫く、コハ物に狂はせたまふか。何ゆゑあつての御出陣、

駿河　察する處繼信が、仇を報ぜんお心ならんが、其儀ばかりは相成りませぬぞ。

義經　ヤア我名代を勤めし繼信、射て落せし教經を、其儘置くは弓矢の名折れ、留立て致さずそこ放せ。
伊勢　たとひいか樣仰せあるとも、高が臣下のことに付き、我君御出馬ある時は、猪武者と世上のあざけり。
片岡　御怒りはさること乍ら、我々共が心中を、御賢察あつて我君樣、
龜井　まづ／＼お止まり、
四人　下さりませう。（トすがつて云ふ、義經思入あつてうなづき、元の床几へかけ、）
義經　左迄の諫言、いかにも出馬は止まるぞ。
龜井　ハヽア、數なりませぬ臣等がお諫め、
駿河　御許容下しおかるゝ段、
伊勢　我々身にとり、
片岡　有難き仕合せに、
四人　存じ奉りまする。（ト安堵の思入にて四人控へる。義經氣をかへ、）
義經　シテ繼信が、死骸はいかゞせしぞ。
軍兵　ハツ、則ち家來高畑治郎楯板に載せ、我君樣の御下知を待ち、あれに控へをりまする。

義經　我に代つて死したる繼信、こりや龜井、片時も早く其死骸、是へ持參なすやう申付けい。

龜井　ハツ。（ト是にて軍兵下手へはひる、龜井前へ出て、）それに控へし繼信が家來、高畑治郎御上意なるぞ、急いで是へ。

高畑　ハア。

ト花道より軍兵二人梱板へ本鎧をきせし繼信の死骸をのせ、手かきにて出來り、跡より高畑治郎、陣立大童の拵へにて、しをれ乍ら誂への鞍、飾り附きの黑馬を引き出來り、花道にて思入あつて小腰を屈め乍ら、舞臺へ來る、軍兵は死骸をよき所へ置き、高畑の持ちし馬の手綱を取り、下手松の木へつなぎ控へる、高畑そこへ平伏する、義經見て、

義經　ヲヽ、治郎なるか、今注進の者より承りしが、繼信には我名を名のり、平家方に聞えし强弓、能登守が矢先に掛り、落命なせしよし、主人を討たれ其方にも、さぞ愁傷にあらうな。

高畑　ハヽッ。

龜井　我君にも殊の外なる御愁傷、我々とても朋輩の信義、

駿河　とりわけ入魂の繼信殿、人事とは存じ申さぬ。

伊勢　我々ですら無念なのに、殊更家來の高畑治郎、

片岡　そちが心中おし計られ、何とも以て、

四人　氣の毒千萬。

ト皆々愁ひの思入、高畑ひれふし居る。

軍一　イヤもう、おつしやる通り御尤も樣でござりまする、高が日雇で雜兵に出ます私共でさへ、其時の悔しさは、おのれやれとは思ひましたれど、何を申すも海と陸河向ひの喧嘩でそれなりけり、

軍二　まご〳〵致して飛道具のお相伴は餘りどつとも致しませぬゆゑ、口惜し乍ら戻りましたが、少しも早く此敵きを、討つて上げて下さりませ。

ト此内高畑いろ〳〵と心遣ひのこなしにて、控へ居よと制す、兩人是に心づき、尻込みなして控へる。

義經始終ぢつと思入あつて、

義經　ア今更申して詮なけれど、此度源平海陸の晴れ戰に、最前我も海へのり入り、平家の軍船數知れず、追退けし其砌、計らずも海中へたづさへし弓取り落せしが、引汐時にはるかなる沖の方へと流るゝを、捨置かば武門の恥辱と、駒を浮べて追ひかけしを、敵勢見るより船をこぎよせ、それ討取れとひしめく折柄、繼信早くも馬をのりつけ、危急を助けて我への諫め、平家方に名を得たる勇者にあらば兎も角も、かゝる名もなき端武者の爲に、萬一あやまちある時は、末代迄の物笑

ひたとひ千金の弓たりとも、一命にはかへ難し、此上は繼信が代つて敵を討取らんと、彼が申す詞に隨ひ、我祕藏なす其の駿足、太夫黑と名付けし馬、ゆづりやりしを悦んで、勇氣をふくみ出陣せしが、あの諫言が此世の名殘り、耳に殘つて今に忘れず、アヽあたら忠臣を、失うたることの殘念よなア。

ト落涙の思入、四天王も愁ひのこなしあつて、

龜井　御尤もなる御なげき、是迄數度の戰ひに、後れをとらざる彼が働き、

駿河　我々ですら勇氣をたゆむ、繼信が今日の戰死、

伊勢　打物業と事違ひ、飛道具にて落命は、

片岡　甚だ以て殘念至極、其場の樣子、我君へ、

龜井　逐一言上、

四人　致されよ。（トきつといふ、是にて高畑少し顏を上げ、）

高畑　仰せには候へども、陪臣の拙者めが、我君樣へ御直答は、おそれ多うござりますれど、

義經　イヤ苦しうない、それにて直々申して聞かせい。

高畑　ハツ、おゆるし出でし上からは、御免の蒙り此の場にて、申上げるでござりませう。（ト詫への大

小入りの合方になり、高畑少し前へ出て思入あって、）扨も今日味方の諸軍、我君の嚴命を蒙り、爰を先途と働けども、平家方にも必死と見え、手痛き防戰なす內にも、敵方に名を得たる、新中納言知盛を始め、上總五郎兵衞忠光、惡七兵衞景淸、飛彈の三郎 同 四郎、其外宗徒の兵三十餘人、おの〳〵得物を打振つて、船と陸とかけ廻り、死者狂ひと切つて廻る、其勢ひに辟易なし、勝ちほこりたる味方の勢も、暫しためらふ其折柄、敵の內より屈竟の、勇士一人顯れ出で、船のへさきに突立上り、ヤア〳〵敵の奴輩承れ、我は平家の 侍 大將、門脇中納言敎盛が正統能登守敎經敵の大將義經公へ見參と、大音聲に呼はるを、聞くとひとしく主人繼信、望む所の敵なりとかねて賜はる御姓名に、同じく馬上に突立て、檢非違使五位の尉 源 の義經是にありと、一鞭當てゝ立出づるを、待ちまうけたる敎盛が五人張ともおぼしき强弓きり〳〵と引しぼり、切つてはなせばあやまたず、胸板を射通され、馬よりどつと眞逆樣、菊王すかさず首かゝんと、かけ寄る處を拙者めが、有合ふ弓矢追取つてひざ骨はツしと射たるゆゑ、どうとまろぶを敎經が、船より陸に飛んで出で、手負を片手に船へ投げいれ、むらがる士卒を追退け、其身も船へ飛んでのり、折しも丁度引汐に兩軍互ひに引別れ候へば、無念乍らも是非なく〳〵、主人のなきがら諸共に、歸陣致せし拙者めが、心の內を我君樣、何れも方にも憚り乍ら、御推量なされて下さりませ。

ト此内始終思入にてよろしくあつて、落涙のこなし。義經感心の思入。

義經　ホヽヲそちが心中察し入る、殊更以て義經が姓名名のりし繼信が首級、よくこそ敵へ渡さゞりし汝が働き過分なるぞ。

高畑　ハヽツ、陪臣づれの拙者めに、忝くも御懇の御意、身に取りましていか程か冥加至極、有難き仕合せに存じ奉ります。

ト平伏する、四天王も感心のこなしにて、

龜井　流石は繼信殿の腹心と、人に知られし者程あつて、戰場なれし今の振舞、

駿河　敵に名を得しわつぱの菊王、射返したるはあつぱれ手柄、武勇と申し彼が忠節、

伊勢　主人の最期に悲歎の有樣、誠心面にあらはれし、

片岡　高畑治郎が忠義の程、我々如きの及ばぬ事。

四人　誠に感心仕る。（ト是を聞き義經思入あつて、）

義經　それに付けても骨肉たる、忠信が心中、取りわけて都に殘る母山路、かくと聞きなばいかばかり嘸や歎かん不便至極。（トホロリとこなし、高畑も落涙なし、）

高畑　御上意の如く只今より、それのみが拙者の心勞、既に先達て主人兄弟門出の其砌り、何れなりと

も一人は一の谷の戰終らば、何卒お返し下さる樣、我君樣へくれ〴〵のお願ひ、それゆゑにこそ兄繼信鴨越より立歸れと、重き嚴命用ひませぬも、斯く成り果つる因緣かと、今思ひ當りましてござりまする。

義經　さるにても不便なり、一世の別れ、死骸を是へ。

高畑　ハヽ有難き御上意には候へども、血汐の汚れござりますれば。

義經　苦しうない、面會いたす。

高畑　ハヽハツ。

ト高畑指圖なし、軍兵兩人死骸をよき所へ直す、義經立寄りよく〳〵見て、落涙のこなしあつて、

義經　ア、淺ましくも成果てしよなア。（ト誂へのしんみりとした合方になり、）ヤヨ繼信、我に代つて非命の最期、盡未來迄忘却せぬぞ、主從は三世の緣、未來の緣はあるなれば、義經誓つて恩を謝するぞよ。（トよろしく愁ひの思入にて云ひ又氣を替へ、）ア、不便の最期致させたわい。

高畑　斯く有難き御上意を蒙り、恐れ乍ら拙者が大慶、最早思ひ殘す儀はござりませねど、せめては主人の息ある內、かゝる仰せを蒙らば莫大なる御恩賞を頂きしより有難がり、悦び勇むを見らるゝ程、最前迄もあの馬にまたがりました武者ぶりとは、打つて變りし今の有樣、申して返らぬこと

乍ら殘念な儀にござりまする。(トホロリとして氣をかへ、)馬と申せば我君より、お讓りのあの乘馬、汚しまして恐れ入り奉れど、あれは如何計らひませうや。

義經　繼信が最期に乘りし馬なれば、冥土の旅へ先陣の餞別、着せし鎧兜をのせ、母の山路へ形見に遣はせ。

高畑　ハヽ、有難き御賜、身不肖乍ら主人に代り、拙者御禮申上げ奉りまする。

義經　歸國致さば老の役、よう囘向致せよと、母へくれぐ\申傳へよ。

高畑　委細畏つてござりまする。

龜井　猶我々よりも悼みの傳言、其方よきに、

四人　賴み申す。

高畑　申し聞けるでござりまする。

ト此内義經死骸のそばへゆき、ちよつと囘向なしてうなづき、

義經　遠路と申し戰爭の砌りゆゑ、繼信が死骸は此邊りの寺院へ葬り、跡念頃に弔ひ得させん。

高畑　ハヽ、重ねぐ\の御仁情、有難う存じ奉りまする。

ト義經思入あつて、

義經　あたら勇士を失ひし今日の日は、義經が爲大惡日、最早歸陣いたさうわえ。
四人　左樣ござらば我君樣、
義經　治郞大義、
高畑　ハヽハツ。
ト時の太鼓、大小入りの合方になり、義經先に思入あつて四天王其外軍兵附いて上手へはひる。高畑軍兵兩人と殘り、茫然と跡を見送り思入、合方になり、
アヽ世の盛衰とは申し乍ら、御朋友の方々が、君のお供をなさるゝを見るに付けても、お悼はしい御主人樣の御最期。
ト死骸の兜をとり、顏を見て落涙のこなし、
嘸御無念にござりませうが、只今君の御上意を、御引導と思召し、今眼前に修羅道の、此世の苦患お脫れあつて、極樂淨土の城廓へ、何卒御身を納めたまひ、御成佛を願ひ上げまする。（トつくく死骸を見て、）アヽ淺ましいお姿ぢやなア。
ト死骸に取付いて泣く、軍兵兩人もこらへかねて泣き出し、
兵一　ヲヽ御尤もでござりますく。現在御主人が此の御最期、どれ程強いお武家でも、是が泣ずにを

兵〇 かけ構ひない我々でさへ、身も世もあられず最前から、堪へ兼ねての貰ひ泣、思へば〳〵繼信樣、られませうか。

兵二 おいとしいことを、

兩人 いたしました。（ト兩人しく〳〵泣く、高畑涙を拂ひ、）

高畑 よう云うてくれた、討死なすは武士の常とはかねて知りながら、かゝる際に及んでは、主從の情愛にてどうも涙が止らぬ、是を思へば御老母樣、斯とお聞き遊ばしたら、其のお歎きはいかばかり、ありし次第を申上げるが、今から心勞でならぬわえ。（トぢつと思入。）

兵一 實にそれはお辛いお役目、親御の御身ではどれ程か、他人でさへも此通り。

兵二 御覽じませ馬でさへ、涙うかめてあの樣に、首をうなだれ、しをれて居ります。

ト是を聞き、高畑下手の馬を見返り思入、合方になり馬のそばへゆき、

高畑 何樣心付かざりしが、悲歎にせまりし彼が振舞、畜類心なしとは云へど、名に負ふかゝる駿足ゆゑ、身の盛衰を知りつるか、左すれば歎くは尤も至極、昨日迄は君のお召、太夫黑ともてはやされし、御祕藏の名馬なりしが、今日よりしては主もなく、形見となりし亡き方の、鎧兜を背に負うて、歸るはそちが身の非運、思へば不便な事ぢやなア。

ト始終愁ひの思入にて云ひ、馬の前壺へすがつて泣く、時の鐘になり、

兵一　最早夕暮近ければ、此のお死骸を少しも早う、

兵二　葬むる寺は何れやら、どうか御案內、

兩人　なされて下さりませ。（ト是にて高畑心づき、）

高畑　ヲヽ歎きに時を移したり、暮れざる內に御苦勞乍ら、

兩人　お供致すでござりませう。

ト高畑馬の口をとる、兩人死骸をかき上げる、高畑片手に馬の手綱を持ち、死骸を見てほろりとこなし、

高畑　アヽ、涙のひまを。（トきつと手綱を上げるを木の頭、）ゆく駒ぢやなア。

ト高畑後ろ向になり、仰向いて手綱にて涙を拭ふ、此の見得引取り三重の合方、時の鐘にて、よろしく、

幕

三幕目　長門壇の浦の場

〔役名――上總七兵衞景淸、三保谷四郎國俊、須股運平、敎經娘花園姬。〕

〔壇の浦の場〕――本舞臺三間上下岩の張物にて見切り、此前切破りの蘆原、後ろ三段に打寄せの波手摺向う一面沖に兵船の書割、灯入りの遠見、よき所に松の大樹、日覆より同じく釣枝、總て壇の浦の體よろしく、浪の音にて幕明く、とすぐに波の音打上げ、兩吟の淨瑠璃になり、

〽敷島の道は都に通ひ路や、渚の果は白峰の、夜風にいとゞ燃えつのる、漁火ならぬ船かゞり、漂ふ浪はいはほにせかれ、音にのみぞ啼く濱千鳥、

ト此文句よき程に花道より、敎經の息女花園姬下げ髮、花ぐしをさし、廣振袖、襠をぬぎかけ、しごきの上帶、懷劍をさし、誂への長刀を持出で來る、少し後より須の股運平、陣立の拵へ拔身にて伺ひ乍ら後を付け出て來るを、花園姬ちよつと見返る、運平花道にべつたりとなる、花園姬思入、合方彈流しにて、

花園　いづくぞと人やは問はん我行方、たより涙に磯傳ひ、辿りてどこをあてとせん、覺束なくも參りしが、どうぞして是から先へ、寄るべ浪路に此道のお指圖願ふは處のお方、外に便りは味方の兵船、沖を越えたる兵の、助けを賴んで此身の落着き、さうぢや〳〵。

ト行かうとするを、運平ヤツと掛る、ちよつと立廻り、きつと見得、是を唄のあげになり、

〽むれ飛ぶ羽音はた〳〵〳〵、見えつ隱れつ汐境、しぶきにまがふ風情にて、後白浪となるや沖凪、

ト此文句にて、兩人立廻りながら舞臺へ來り、よろしく唄一ぱいに納まり、きつと思入。

こりや狼藉な、何としやる。

運平　何とするとは知れたこと、お身はまさしく平家の落人、引つくゝつて連れ參る、サア尋常に覺悟いたせ、とさあ申す處なれども、見れば見る程美しい其顏に、武者ぶるひの出る程ほれ〴〵した命は助けて遣す代り、此の運平に抱かれて寢やれ。（トしなだれかゝるなつきのけ、）

花園　ヤア推參なる下郎めが、たとひ運つき刃に伏すとも、汚らはしい汝等の心に何しに隨はうや。

トきつと身構へする。

運平　ムヽハヽヽヽヽ、いやしやらくさい其の一言、ヤレ推參の西瓜のと、身共が頭は南瓜に似ても、女にかけたら豪の者、糠みそ臭い水仕迄、いつでも手前に初契り、直にあき茄子にして、緣も木瓜の三下り、はて、それとは違ひ姫百合の根こそげ惚れて菜に仕ようと、思ひの外に汚らはしいとは、よつぽど我も青物だ、名もなき菜づけの葉武者と思はゞ、名のつて聞かせるよッく聞け、我こそ源氏方に名も高き、岩永左衛門宗連が臺所番頭、須(ハ)股運平とは身共がことだ。

ト きつと思入。

花園　ヤア推參なり下郎めが、自らを誰とか思ふ、平家方に隱れなき、能登守教經が娘花園、陪臣の身を持ち乍ら、身の程知らぬ今の雜言、詞交すも汚らはしい、きり〳〵そこを下りをらぬか。

ト長刀をかまへる。運平むゝとこなしあつて、

運平　さう聞く上は是非がない、可愛さあまつて憎さの譬、色氣を放れ運平が、からめ取つて手柄にする、覺悟いたせ。

花園　何を小しやくな。

ト大小入り早き合方になり、花園姫運平を相手によろしく立廻りあつて、運平花園姫を引附ける、ばた〳〵になり、花道より三保谷四郎、陣立の拵へにて、誂への兜を持ち走り出來り、花道にてきつと見得、つか〳〵と舞臺へ來り、運平をつき廻して投げのけ、花園姫を圍ひきつと見得、運平起上り、三保谷をすかし見て、

運平　ヤア、敵か味方か知らねども、何故妨げいたすのだ。

三保　敵にもせよ味方にもせよ、戰場に於て女を生捕り、何の手柄に相成るぞ。

運平　たとひ女たりとも平家の餘類、見のがしには相成らぬ、それ故身共が搦め捕る。

トよ寄るをさゝへて、

三保　達てとあらば是非に及ばぬ、軍令背きし汝が振舞、陣所へ召しつれ詮議しようか。

運平　サア、それは。

三保　但し此まゝ見のがし歸るか。

運平　サア、

兩人　サア／＼／＼、

三保　返答致せ、ナナ何と。（トきつと云ふ、運平つまり、）

運平　覺えてをらうぞ。

ト云ひ捨て、逸散に花道へ走りはひる。三保谷後を見送り、思入あつて花園に向ひ、

三保　正しく御身は落人ならんが、よき折柄に參り合せ、邪魔を拂うて進ぜたれば、又もや障りのない內に、少しも早く落のびたまへ。

花園　敵か味方か知らねども、情ある志し最前より參る道々、士卒の者に取圍まれ、幾度となく難儀に及び、やう／＼爰迄參りしかど、味方の船は遙かの沖、のり後れし上からは所詮助からぬ我が命、せめてもの思ひ出に、斯く情ある武士の、手に掛つて死ぬるが本望、どうぞ自らを討つてたべ。

三保　イヤ〳〵、それは女の一途、生は難く死は易し、のがるゝだけは落延びられよ、最早是より山手の方には、源氏の武士あらざれば、道をさへぎる者あるまじ、早う爰を落ちのびて、御身の安堵を計られよ。（トあたりへ思入あつて云ふ。花園姫三保谷の體に目をつけ、）

花園　最前より見る所、正しく敵とは思へども、味方にまさる情の詞、自らことは能登守教經が娘花園と云へる者、御身の姓名聞かしてたべ。

三保　我は源氏の身内に於て、三保谷四郎國俊と云へる者、

花園　扨は噂に聞及びし、三保谷殿でありしよな。

三保　教經殿が息女とも、知らぬ同士が斯く迄に、

花園　いかなる緣か助けを受け、世界に鬼はないものを、

三保　武門の意地に是非なくも、

花園　敵よ味方とへだつも義理、

三保　義理と情の世の中を、

花園　思へば四海、

兩人　兄弟ぢやなア。（ト双方ちよつと愁ひのこなし、三保谷思入あつて、）

三保　ササ、いらざる事に暫時のひまどり、又もや敵の參らぬ内、早う此場を落ちたまへ。

花園　其の志しは忝なけれど、妾が落ちし其後にて、かくと源氏へもれ聞え、御身の難儀になる時は、恩を仇にて返す道理、どうぞ此身を討つなりと、生捕るなりといたされて、其身の明りを立てたべ。

三保　ハテ、かよわき女を討ちしとて、手柄にも相成らず、よし又此身の越度になるとても、武士の情是非もなし、左樣な事に心おかれず、一旦爰を落ちのびて、何れへなりとも身を忍び、時節の至るを相待たれよ。

花園　それ程迄の志し、無下に致すも本意にあらず、左樣なれば仰せに從ひ、

三保　忍び／＼に、少しも早う、（ト介抱してせき立てる、花園姫立上り、）

花園　さるにても此の御恩、いつの世にかは、

三保　ハテ、ござれと申すに。

トきつと云ふ、三重になり、花園姫名殘りをしき思入にて、見返り／＼東の花道へはひる。三保谷後を見送り、思入あつて、

アヽ世の盛衰とは云ひながら、平家方にて誰あらう、能登守教經が娘ともあらう身が、路頭に迷

ふあの有様、味方の者に見咎められ、どうぞ捕虜にならねばよいがな。

ト案じる思入、此の時本釣鐘を打込み、兩窓をおろす、三保谷思入、かすめて浪の音になり、

今打つ鐘は暮六つなるか、最早浦邊に敵もなし、晝は深山にこだませし、金鼓の音も今は絶え、群れとぶ鴎岩に打つ、浪より外に音もなし、どりや陣所へ歸らうか。

ト兜を冠り行き掛ける。此時ばつたりと音する故、三保谷きつと思入、上手蘆原を押分け、景清陣立好みの拵へ、長刀をかい込み半身出してきつと見得、三保谷是を窺ひ、思入あつて行きかける。景清つか〳〵と出て引きもどす、三保谷振拂つて、兩人きつと見得、本釣鐘誂への鳴物になり、景清長刀にて足を掻かうとするを、三保谷飛びのき太刀をぬき合せ、兩人くらがりにてダンマリもやうの立廻りの内、知らせに付き日覆より灯入りの月を出す、兩人左右へわかれ、きつと思入あつて、

ヤア、まさしく汝は平家方に、名ある武士と覺えたり、かく云ふ我は源氏の侍、三保谷四郎國俊なり、サ、サ、姓名名乘つて勝負なせ。

景清　いかにも我名を語つて聞かさん、かねて音にも聞きつらん、我こそは平家方の侍大將、上總七兵衞景清なるわ。

三保　扨は汝は景清なるか。

景清　敵に取つて不足はあるまじ。

三保　イデヤ、此の場で、

兩人　勝負をなさん。

ト誂へ早めたる鳴物になり、兩人よろしく立廻りあつて、とゞ景清三保谷の兜の錣をきつと捉へ、甚面の見得になり、

三保　エイヤ、

景清　エイヤ、

兩人　エイ〳〵。

ト二三度引合ひ、トゞ仕掛にて、鉢付けより引き切れ、景清うしろへどうとなる、三保谷前へどうとなり、持ちたる太刀折れる、兩人立上り、

景清　さるにても、首の強さよ。

三保　イヤ、腕の強さよ。（ト三保谷兜をぬぎ、景清と顔見合せ、）

兩人　ム、ム、（と双方笑ふを、木の頭。）ム、ハ、、、、。

ト景清は錣、三保谷は鉢を持ち、双方引張りの見得、日覆へ鴎を大分に引上げ、波の音カケリにてよ

ろしく〳〵、

ひやうし 幕

四幕目　佐藤假屋敷の場

【役名――佐藤繼信、高畑治郎、父治郎右衞門、能登守教經實は讃岐六郎經時、經時弟菊王丸、足輕作内、中間、繼信一子鶴若。母山路、繼信妻菊町、腰元等。】

（佐藤假屋敷の場）――本舞臺三間の間中足の二重、本緣付き向う銀地へ菊を畫きし襖、上手塗骨の障子屋體、此前の所本緣の前に月見の團子を三方へのせ、細口の花立に芒をさしてあり、本庇の軒口に蓬、菖蒲をふき、いつもの所冠木門の門口、注連飾りを張り、門松を立て、下の方變つた網代塀、此内に式紙短册を付けし七夕の笹、塀の上より見える事、總て佐藤庄司京都假屋敷、四季の儀式を一時にしたる模樣、二重に喰積と屠蘇の銚子、土器を置き、爰に腰元四人居並び、平舞臺に足輕作内、菖蒲革、足輕の拵へ、○△の中間二人紺看板にて控へ居る、此の模樣調べにて幕明く。

○　モシ〳〵、私共は新參故、さつぱり譯は分かりませぬが、こちらのお屋敷は出羽の國が御本國との事。

△此の都においでなされまするのは、御在番でござりまするな。

作内　いかにも此の日の岡のお館は、重衡様の目代に御主人佐藤庄司様、禁裡守護の其爲に、拝領ありしお屋敷なれど、庄司様は去年の春、お年の上で御死去なされ、後室山路様が是にお出で遊ばすのぢや。

腰一　勿論繼信様忠信様といふ、御兄弟の御子はあれど、義經公のお供にて、八島とやらへ御出陣。

二　後室様のお側にお出で遊ばすは、繼信様の奥様菊町様と、御嫡子の鶴若様。

三　御家來の高畑治郎殿も、戰のお供に付添ひたれば、其の親御の治郎右衛門殿が、鶴若様のおもり役。

四　旦那様方のお留守の内に、合點の行かぬは後室様、四季の祝ひを一度にせいと、私共へのおつしやり付、

一　それ故門には時ならぬ、松を立てたり注連飾り、

二　奥の一間は桃の節句の、雛祭りの飾りつけ、

三　蓬菖蒲を軒へさし、お庭に立てし皐月幟り、

四　星の手向も文月の、式紙短册を笹へ付け、

作内　まだ其上に精靈棚から月見の團子、亥の子の餅に煤掃竹は云ふに及ばず、豆から柊赤鰯、

○　其の品柄を集めるにも、時ならぬ物はそこらあたりに、賣る内もござりませぬ故、とんだ遠方迄尋ねに行つて、やう〳〵の事で手に入れました。

△　盆と正月が一緒に來たより、まだ〳〵騒ぎな此の取込み、いつたい是はどうした譯でござりまする。

作内　貴樣達はまだ知らぬが、是は三日の其内に、三年を取越さうといふ、後室樣の思召し、それで何もかも一緒になるのだ。

○　それでは私共のお給金も、三年ぶりを一緒にかため、三日の内に下さりませうな。

作内　これはまた慾の深い奴ぢやわえ。

三人　はゝゝゝゝ。

作内　イヤ、おどけは扨置き、是からお庭先へ參つて、五月幟や七夕の、張番を致すから、貴樣達も一緒に參れ。

仲間二人　へイ〳〵、御一緒に參りませう。（ト立上る。）

腰元四人　そんなら作内殿。

作内　どりや、張番に參らうか。（ト作内先に中間二人付いて下手へはひる。）

一　それはさうと鶴若様は、後室様のお指圖で一年中の御佛參を、一つに固め治郎右衛門殿が、お供してお寺へお參りなされましたが、モウお歸りのある時分、

二　左樣なら私どもは、是れにてお待受け、

四人　致しませう。

ト合方調べになり、花道より鶴若棒茶筅の、若衆かづら、羽織袴大小、後より治郎右衛門少し更けたろ拵へ、袴大小にて出來り、花道にて、

治郎　ヤレ〳〵和子樣、今日は一年中の物詣でを、一つに兼ねし御佛參、今朝から餘程の道程故、思ひの外遲うなりましてござりまする。

鶴若　婆樣にも母上にも、さぞお待兼ねであらう程に、少しも早く、

治郎　サ、サ、お越しなされませ。（ト兩人舞臺へ來り、内へはひり、）鶴若樣のお歸りでござるぞ。

ト是にて腰元四人平舞臺へおり、

一　これは〳〵、和子樣には、

四人　只今お歸りでござりましたか。

ト此内鶴若二重へ上る、治郎右衛門は平舞臺、下手に控へ、腰元に向ひ、

治郎　お歸りの御樣子、ちよつと奥へお知らせ下され。

二　畏まりました。（ト腰元の二襖の奥へ向ひ、）後室樣奥樣へ申上げます。只今鶴若樣お歸りでござります。（ト此時奥にて、）

山路　なに、鶴若が戻りしとな。

ト替つた合方になり、二重眞中の襖をあけ、母山路切髪、打掛、衣裳、後室の拵へ、妻菊町、片はづし、打掛衣裳、繼信の奥方の拵へにて出來り、よろしく住ひ、

お、鶴若、けふは一年の物詣で、わしが云ひ付けた通り、殘る方なく佛參してたもつたかいなう。

鶴若　婆樣のお詞故、治郎右衛門と二人して、所々のお寺へ參詣致し、只今戻りましてござりまする。

山路　お、、それはよう參詣してたもつたなう。

菊町　治郎右衛門にも和子の供、今日は取分け遠くの道を、あちこち大儀であつたわいなあ。

治郎　恐れ入つたる其のお詞、いやもう和子樣も今日ばかりは、御遊山と事變り、二月の般若會、七月の盂蘭盆會、年の暮の佛名迄、四季折々の物詣でも、一つに兼ねて寺々を、ようお歩きなされま

した故、お供致した私めも、どうやら今日の一日に、一年立つたやうな心持が致しまする。

山路　おゝさうであらう〳〵、其の一年を一日づゝ三日の内に三年の、月日を送るが私の願ひ、知つての通り五節句の祝ひも大方すんだれば、今宵は又鶴若に目出度う年をとらせにやならぬ、これ嫁女、節分の儀式は調うて居ますかいなう。

菊町　最前母上樣の仰せ故、年徳神へ神酒を供へ、福の神を恵方へ祀り、用意致しておきました。

一　まだ其上に私共が、鬼打豆は申すに及ばず、福茶沸しておせちの煮物、

四人　殘らず調へましてござりまする。

山路　おゝ、それは大儀であつたわいなう。(ト治郎右衛門是を聞き、)

治郎　扨々承れば承る程、ようお手が廻つたものでござりまする。しかし乍ら三日の内に三年取越すお祝ひとは、餘りと申せば思ひもよらぬ、前代未聞の儀式故、一圓合點が參りませぬ、恐れ乍ら後室樣、こりやいつたいどういふ謂れでござりまする。(ト山路思入あつて、)

山路　成程今日の儀式の譯は、嫁女に云うて聞かしたばかり、そなたは樣子を知らぬ故、合點の行かぬはコリヤ尤も、事の仔細を治郎右衛門、一通り聞いてたも。(ト合方になり、)改め云ふには及ばねど、夫庄司殿世にある頃、平家方に隱れなき越中の禪司盛俊殿、此都へ在番にて、不圖した事か

ら人魂になり、盛俊殿の娘なる此の菊町を、惣領繼信の嫁に貰うて、程なく儲けた此の鶴若、掛替えのない初孫ゆゑ、大事にかけて育てる內、去年の春夫に別れ、引續いて二人の忰は、數度の戰に出陣なし、家にある日も稀なる故、兎に角わしが便りなさ、せめては此の鶴若を、義經公のお側へ出し、御家臣の數に加へて婆が心を慰めんと、常から願うて居たなれど、そも武士の鎧着初は、十三歲に限ると聞く、孫はやう／＼今年十歲、三年足らぬ月と日を、指折かぞへて待つ內に、何時知れぬ老の身の世にある內に鶴若を、武士の數に加へ度く、それ故にこそ三日の內に、三ツの年を取らせんと、心急ぎの祝ひ事、老の愚癡とはいふものゝ、孫には引かるゝ心の內、推量してくりやいなう。（ト山路思入あつて、）

治郎　事の仔細を承れば御尤もなる思召し、成程三年の月日を取越し、鶴若樣のお年の數を、十三歲と御披露なされ、鎧を召せばあつぱれ若武者、御大將の御馬前で親御に劣らぬお手柄を、今見るやうでござりまする。

菊町　これと申すも母上の一方ならぬ御情、夫繼信殿此の事を聞かれたら、其の悅びはいかばかり。これ鶴若、婆樣の思召しでそなたは武士の數に入るのぢや、今迄とは事替り、わやく云うてはなりませぬぞ。

鶴若　母様お案じなされまするな、我君へ御目見得すれば、わしも源氏の御家臣ゆゑ、其時こそはおとなしう御奉公をつとめまする。

山路　おゝかしこい〳〵、よう云やつた、初陣の初めよりあつぱれ勇士と云はるゝやう、功名手柄をしやいなう。（ト山路菊町とも〳〵悦ぶこなし。）

治郎　其のお手柄で思ひ出しましたが、此度の西國の合戰に、平家は過半敗北なし、十が九つ味方の勝利と此程よりの巷の風説、いよ〳〵それに相違なくば、繼信様も忠信様も、程なくお歸りのある時分鶴若様の御身の祝ひとお目出度い其中へ、一日も早く御兄弟が御無事でお歸りなされますやう、願はしう存じまする。（ト山路思入あつて、）

山路　ヲヽ、二人の子供が歸りの程、わしも心に待ち兼ねまする、それに付けても子を思ふ親の心は同じ事、そち迚も忰治郎を戰の供に立たせたれば、目出度う戻るそれ迄は、さぞ待久しう思ふであらうの。

治郎　何がさて忰めは數にも足らぬ御家來ゆゑ、怪我あやまちがあらうとも、何の厭ひはござりませぬが、取分けお案じ申しまするは、御兄弟の御身の上。

菊町　夫を初め忠信様、敵に後を見せぬといふ、日頃からの御氣質ゆゑ、モシ深入りしてどの様な、お

山路　怪我でもなされはせぬかと、御身の上を思ふに付け、夜の目もろく〳〵あひませぬわいな。

山路　その案じは道理ながら、戰場にて討死なすは、武士の身のほまれ、殊更此度の合戰は、源家の晴れと誰かれも、忠義を磨く味方の陣中、モシ子供等が御馬前で、立派な最期を遂げしといふその噂でも聞いたなら、それこそは母が悦び、そなたとても女のたしなみ、萬一をつとに別るゝとも未練の歎きに取亂し、人の笑ひを受けぬやうかねて心に覺悟を極め、よう思案して居やいなう。

ト山路思入あつて云ふ。

菊町　だん〳〵との其のお詞、逐一承知致しました、たとひ夫の身の上に、どの樣な事があらうとも、必ず恥辱を取るやうな、不覺の涙はこぼしませぬ程に、必ずお氣遣ひなされまするな。

山路　おゝそれでこそ武士の妻、嫁女がさういふ心なら、此母も一つの安堵、是で心が落着きましたわいの。

ト ばたばた〳〵になり、下手より幕明きの作内出て手をつかへ、

作内　ハツ、申上げまする。お庭先に立ちましたる一對の幟の內、一本の竿が折れ、只今倒れましてござりまする。

ト皆々是を聞き、

治郎　なに、幟の片々が倒れしとか。（ト山路思入あつて、）

山路　はて、物の知せは爭はれぬ、定紋付けし一對は取りも直さず二人の子供、一人は脆く戰場にて、

菊町　えゝ。

山路　イヤ、脆く折れしは年たゝぬゆゑ、蟲が通して居たのであらう。

治郎　いかさま、左樣でござりませう。

山路　早う行つて竿を取替へ、元の通りに立つておきや。

作内　畏りました。（ト作内下手へはひる。菊町心に掛るこなし、山路思入あつて、）

山路　最前から事に紛れ、思はず時を移しましたが、雛の儀式は言ふに及ばず、五月幟に文月の、星の歌迄捧げし上は、佛を祭る靈棚へ回向をするが母の役目、腰元どもにはまだ外に、用事もあればわしと一緒に。

腰元皆々　畏りました。

菊町　左樣なれば、母上樣、

山路　どりや、佛間へ行つて看經しませう。

ト唄になり、山路先に腰元皆々付添ひ、奥へはひる。跡菊町氣にかゝる思入あつて、

菊町　これ治郎右衛門、そなたは何と思やるか、此間よりこのわしは、引續いての夢見の惡さ、心も心ならぬ所へ今も今とて幟の竿の、折れしといふが氣にかゝり、もしや我夫繼信様の御身に凶事でもありはせぬかと、その案じは又一倍、母上様にはあのやうに、立派に云うてのけたれど、兎角心に掛るわいなう。

治郎　その御案じは御尤もでござりまするが、是が敗戰といふではなし、源氏の勝利と聞くからは、味方の者は先づ安泰、案じるより産むが安いと、軈て御兄弟打揃うて、目出度うお歸りがござりませう程に、必ず御心配なされまするな。

鶴若　父上お歸り遊ばしたら、戰のお話し承はらうと、それが今から樂みぢやわいなう。

治郎　それこそは樣々のお手柄がござりませう、親仁めも早く承りたうござりまする。（ト治郎右衛門菊町の様子を見て）モシ奧様、斯ういふ目出度い幸先に、萎れておいでなされましては、どうやら忌はしうござりまする、幸ひそこに屠蘇のお銚子、和子様にもお勸め申しあなたもお一つ召上つてお氣をお晴らしなされませ、どりや、親仁がお酌致しませう。

ト治郎右衛門有合ふ食積と、屠蘇の銚子土器を持ち出し、菊町と鶴若の中へ置く、菊町氣を直して、

菊町　そんならそなたの詞に任せ、一つ過して愁ひを拂ひ、春めくやうにしませうわいな。

ト是にて治郎右衛門酌をする、菊町と鶴若屠蘇を呑む事よろしく、小鼓の入りし萬歳めきたる合方になり、向うより能登守教經、實は讃岐六郎經時、烏帽子素袍、袴の裾をはしをり、扇を持ち萬歳の拵へ、經時弟菊王丸、侍烏帽子、達附才藏の拵へ、大きな風呂敷包みを背負ひ、鼓を持ち、兩人出來り、花道にて、

經時　コリヤ才藏、時候違ひも合點で、都の町を稼ぎに出たが、アレ見やれ、向うの屋敷に珍らしく門松が立てゝある、こりや萬歳には打つて付けたものぢや。

菊王　成程、時ならぬ正月のやうだわ、然らばあれへ參つて、舞ひませうか。

經時　いかにも、一さし舞うて見よう。サ、サ、來やれ／＼。（ト兩人は本舞臺の門口の所へ來り、）エヘン。是は此頃諸國を廻る、御存じの大和萬歳、

菊王　見ればこちのお屋敷は、お門に千代の松飾り、正月めいた御趣向ゆゑ、

經時　目出度う一さし、

兩人　祝ひませうか。（ト菊町是を聞き、）

菊町　治郎右衛門聞きやつたか、珍らしい大和萬歳、

治郎　扨は正月のまなびをするゆゑ、かぎつけて參りましたな。

鶴若　母様、是へ呼んでもよろしうござりまするか。

菊町　そなたが呼びたいとあるならば、丁度幸ひ是へ呼んで、わしの夢見の悪いのも、祝ひ直して貰ひませう。

治郎　左様なれば兎も角も、ちよつと是へよび入れませう。（ト治郎右衛門門口の外へ向ひ。）サア／＼萬歳殿、ずつと是へはひらつしやい。（ト門口をあける。）

經時　然らば目出度う、御祝ひ申さう。

ト經時先に、菊王丸付いて内へはひり、風呂敷包みをおろし、兩人平舞臺上手へ住ひ、あたりを見て、

コリヤ才藏、門松の立てあるを珍らしい事と思うたりや、まだ其外に軒の菖蒲や月見の芒、四季を一度にお祝ひなさると見える。

菊王　成程、コリヤ祝ひ事がかさなつてをりまするな。

治郎　コレ／＼萬歳殿、是にはチト仔細あつて、一年の儀式を一つに寄せた十二ケ月、和子様のお年は十三で、今日は鎧の着初め。

菊町　弓始めやら馬乘りぞめの、支度とり／＼の其處へ、よう見えられた萬歳殿、此の子を祝うて舞うて下され。

經時　委細心得ました、鶴も若やぐ春の初め、鎧の着初とあるからは、
菊王　弓矢の道に事よせて、
經時　さらば一とさし、
兩人　舞ひませう。（卜是より下座にて、鼓の調べよろしくあつて、唄の文句になる。）
〽ヤアハレ目出度やナア、鶴は千年の名譽なり、龜は萬年のヨウほまれをなす、〽それはや戰神の御まつりを、靑陽の春によそへてけふ此の和子が、御鎧の召初と、祝ひ榮えましンまする。
〽初陣の御兜に太刀長刀を御手に取つて、弓と矢を付けンさせて馬にまたがりましンませば勇ましき武者振とあたりにかゞやき候ひける。
經時　旗さし物もきらめき渡つて、
菊王　貝鐘太鼓もひゞきわたつて、
經時　誠にゆゝしく候ひける。
菊王　是からそろ〳〵、
〽出陣、〽それ、急いで、〽それ、先陣、ヲヤ先陣、エエ先陣々々々々、百萬騎の强敵で、

も、六韜三略孫呉の術で、進退自在に打物取つて追ひちらしてきりちらして、組打なんぞはすきをねらつて、ソレ首を取つて首級を上げて功名手柄は、一世の晴ぢや、末代迄の武門の晴ぢや。

〽それやれとの御いさほしに、御家も榮うる萬歳樂の御壽命と、一陽來復の御乘り出しこそお目出度や、

經時　先づ初春の御壽き、

兩人　お目出度う存じまする。

ト此内經時菊王丸、よき程に立上り、すべて戰によそへて萬歳の振よろしくあつて納まる。

菊町　ヲヽ大儀々々、よう祝うてくりやつたなう。

治郎　シテ、萬歳殿には、いつの頃、此の都へ上られましたな。

經時　今年の春から此の都へ、初めて稼ぎに出かけましてござりまする、所がやんごとなきお方樣へ今日も明日もとお召しに預かり、萬歳冥加に叶ひし仕合せ。

菊王　殊の外御意に入りまして、品々澤山頂戴致し、一と風呂敷に此のわしが、やつとこさと背負ひ上げて、ぐつと立つた其はずみに、ツイ此の足をふみくじき、國へも歸れず此の地へ滯留。

經時　ひま入りついでに都中を、遊び半分ぶら〳〵萬歳、春でなければ間が抜けて、よび込む内もない處、此方のお宿は珍らしく、時候違ひの正月に、思はず出逢うたわしが悦び、

菊町　鶴若が殊の外氣に入つた様子ゆゑ、今宵は爰へ一宿して、明日も舞うてたもいなう。

經時　それは有難うござりまする、いつもの旅宿へ泊るより、こなたへ願へば世話もなし、

菊王　旅籠賃だけ助かれば、此の才藏も大きな仕合せ、

兩人　どうぞお泊めなされて下さりませ。

菊町　ヲヽ、遠慮なく泊つてゆきやいなう。

治郎　モウかれこれ日暮前、幸ひ奥に別間もあれば、それへござつて休息さつしやれ。

兩人　有難うござりまする。

菊町　治郎右衛門、案内してやりや。

治郎　畏りました。サア、萬歳殿、わしと一緒に。

經時　ドレ、御造作に、

兩人　預かりませうか。

ト矢張り萬歳めいたる合方にて、治郎右衛門先きに經時菊王丸附添ひ、風呂敷包みを提げて奥へはひ

ろ、鶴若後を見送り、

鶴若　母樣、あすも萬歳を舞はすとは、嬉しいことでござりまする。

菊町　ヲヽ樂みにして待つて居や。

ト奧より腰元○短檠を持ち、同△白木の臺へ苧がらを積み、附木を添へて持ち出で、

○　奧樣へ申上げます。後室樣は御佛間にて、靈祭りのお棚を飾り、只今御看經を遊ばすとの事。

△　最早日も暮れましたれば、門にてお迎ひ火をお焚きなされまするやう、お指圖でござりますゆゑ其の品是へ持參いたしました。（ト件の苧がらを出す。）

菊町　成程お迎ひ火の事は、わしもとんと忘れて居ました、是から鶴若を相手にして、門へ持ち出し焚く程に、其由母樣へ申し上ぎや。

兩人　畏りました。（ト腰元兩人奧へはひる。）

菊町　コレ鶴若、婆樣の仰せゆゑ、少しも早う門火の用意、そなたもとも〴〵手傳うてたもいなう。

鶴若　心得ましてござりまする。（ト是より床の淨るりになる。）

〽一年も待つは久しき春秋を、寄せて三とせの數盡す、其日の岡の假館、千代を壽ぐ門松の青葉も曇る盂蘭盆會、苧がらの煙り哀れけに、なき魂祭る迎ひ火や、手向ける念佛合す手の

妻子に心引かれけん、佐藤三郎兵衛繼信、輪廻に迷ふまぼろしの、此の世の姿あり〳〵と、
我家の門へ立顯れ、

ト此内菊町鶴若を連れ件んの苧がらを門口へ持出し、灯りをうつし迎ひ火をたく事よろしく、奥の佛間にて看經の心にて、一つ鉦を文句へあしらひ、よき程にドロ〳〵になり燒酎火を出し、佐藤繼信鎧下、義經袴、小さ刀陣羽織附太刀、髪を亂して色青ざめたる拵へにて、下手スッポンにて出る、菊町鶴若迎ひ火へ合掌して、氣のつかぬこなし、繼信兩人の方を見返り、思入あつて、

繼信　こりや菊町、鶴若、繼信只今戻りしぞ。

〽云ふに此方は、合點行かねば灯影に顔をすかし見て、（ト菊町鶴若心附き、顔を見て、）

菊町　や、我夫なるか。

鶴若　父上お歸りなされましたか。

繼信　ヲヽ、只今戰場より歸宅致した。

〽詞の内も飛立つ思ひ、（ト菊町嬉しき思入にて、）

菊町　ヤレ〳〵嬉しや、今も今とてあなたのお噂、お案じ申してをりましたに、ようお戻りなされました、まづ〳〵あれへお越しなされませ。

ト菊町鶴若いそ〳〵として取りはやす、みな〳〵内へ入り、繼信二重眞中へ住ひ、
〽妻子はいそ〳〵繼信も、一間へ通り座をかまへ、

繼信　扨久々戰場にありて、便りも致さず、そち達もさぞ待ちわびつらん、シテ母人には御安泰なるか。

菊町　母上樣には御別條なく、いつに變らず御安泰、また鶴若も此通り息災でござりまするが、父上樣は如何やと御身の上をお案じ申して、云ひ出さぬ日とてはなく、この私は此程から夢見の惡さに取分けて、あなたの御身が氣遣はしく待ちこがれて居りましたに、先づは御無事なお顏を見て、やう〳〵胸が落ち着きました。シテ忠信樣にも、お變りはござりませぬか。

繼信　弟忠信は君のお供、やがて後より戻るであらう。

鶴若　高畑治郎は父上と、御一緒ではござりませぬか。

繼信　治郎も共に出立せしが、彼は荷物を携へたれば、途中より後れし樣子、身共は道を急ぎしゆゑ、供をも連れず歸宅いたした。

菊町　何はしかれよう戻つて下されました、目出度い時には重ね〴〵、吉事があるといふは此事、お留守の内に母上が、此鶴若を我君の御前勤めに致すとて、三年の年を取越し、十三にする祝ひ事、それゆゑ今も門松のそばで盆の迎ひ火、また母上には奧の間で精靈棚へ御回向なされ、やがて

歳暮の儀式を整へ、孫に年を取らさうと、おつしやつてゞございます。

〽様子語れば、

繼信　成程一年を打混じたる仔細、それでやう〳〵合點が參つた、それと申すも母人の兎角に孫に御慈愛深く、一方ならぬ思召し、身共に於ても悦ばしい儀ぢや。

菊町　そりや私とても同じ事、おゝそれ、其の悦び次手に承はりたいは、此度勝戰の御手柄、我夫には如何なる功名遊ばしましたか、早うお聞かせなされて下さりませ。

鶴若　私も其のお話しを、承りたうございまする。

〽尋ぬる詞は胸に釘、様子見せじと打ちうなづき、（ト繼信思ひ入あつて、心にうなづき、）

繼信　すりや、戰の様子承りたいと申すか、それこそは様々の話はあれど、まづあらましを語つて聞かさう。（ト誂への合方になり、）此度平家追討に西國へ御出陣、義經公に從ふ人數は武藏殿を始めとして、龜井片岡伊勢駿河まつた我々兄弟二人、其外諸軍五千餘騎、既に壇の浦の磯邊に陣取り船にて攻寄せる平家方と數度戰爭に及びしが、名におふ氣早の大將ゆゑ海へざんぶと馬を乘り入れ、敵を退けたまひし折、あやまつて海中へ弓押流したまひしを、敵の軍卒熊手を以てかきよせるを、渡さじやらじの爭ひに、それがし忠信と諸共に矢つぎ早に射て落し、義經公には恙なく弓奪

ひ返して退きたまへば、猶我君の御名を名のり、平家の船へ向ひし折柄、能登守教經が射かくる矢先に此の繼信、

菊町　もし、お怪我でもなされましたか。（ト氣遣ふこなし、繼信ちつと思入あつて、）

繼信　サ、怪我あやまちのあるべきを、不思議にのがれし運の強さ、殊に勝れし働きとて、大夫黑と名付けたる、名馬を賜はる此身の面目、程なく君にお暇願ひ、母人の安否を伺ひ、妻子に安堵させん爲我家へ戻る折も折、門にて焚きし迎ひ火は、誰に手向けの、

菊町　えゝ。

繼信　イヤサ、其の迎ひ火の灯影より、家にかゞやく我が功名、そちも悦んでくりやれ。

〽まぎらす詞濁り江の、底の心を悟らぬ妻、

菊町　ほんにあつぱれな其のお手柄、委細の樣子承つて、嬉しさは又一しほ、母上樣お聞きあらば、嘸かしのおよろこび、何は兎もあれお歸りの樣子、ちよつとお知らせ申しませう。

〽と立つを押止め、（ト繼信止めて、）

繼信　アヽイヤ〳〵、母人には佛間に於て、看經とあれば、御回向濟みし其後にて。

菊町　左樣なれば勝戰のお祝ひ、今日の儀式におなますから、お燒物迄取揃へ、蔭膳すゑておきました

れば、目出度う爰で酒一つ。

繼信　イヤ、其酒も飲み度うない、身共は氣分が惡いわえ。

菊町　なに、御氣分が、(ト繼信の顏を見て、)お丶成程、さうおつしやれば、お顏の色が惡い樣子、ちよつとお待ちなされませ、只今お藥を調へて差上げませう。鶴若、そなたは父上のおそばに居て、心をつけてたもいなう。

〽夫思ひの貞節に案じる胸の八重襖明けて一間へ入りにける。

ト此内菊町案じられる思入あつて、奥へはひる。

〽後見送りて繼信は、仔細ありげに詞をあらため、(ト繼信鶴若を見返り、)

繼信　こりや鶴若、父が傍へ近う參れ。

鶴若　ハツ。(ト鶴若繼信のそばへ進む。)

繼信　あたりに人の居ぬこそ幸ひ、今此父が改めて、申聞かす一通り、仔細とつくりと承れ。(ト床の合方、横笛になり、)稚なけれど其方は、武士の家に生れし身の上、殊更母人の思召しにて、御大將の御前近く、御側勤めに出仕なさば、其時こそは源氏の御家臣、戰場の御供なし、たとひいかなる敵に向ふとも、卑怯未練の振舞なさば、末代迄の家の恥辱、それがし迚も刃の中に、月日を送る

武士の、あすの命も計り難く、萬一此父が死したる後は、汝忠義をうけついで、伯父忠信と心を合せ、あつぱれ武功をあらはさば、家の面目二つには、泉下に於ての我悦び、されば初陣の初めより一命を君に捧げ、百萬の強敵にも、後れをとらぬが武士の意地、今改めて父が遺言、必ず胸に忘るゝな。

〽それと言はねど亡き後の、我子へ殘す一言に、鶴若はおとなしく、

ト此内繼信思入あつて云ふ、鶴若こなしあつて、

鶴若　だん／＼との御教訓、そんなら命を君に捧げ、御奉公を勤めるのが、まことの武士でござりまするか。

繼信　おゝさ、主君の爲に戰場へ、たとひ屍はさらすとも、比類なき功名なさば、其名は末代に殘る道理。

鶴若　さう聞く上は私も、かねて心に覺悟して、父上の忠義をうけつぎ、まさかの時は御馬前で、あつぱれ功名いたしまする。

繼信　それ聞いて父も安堵、此上は其方がお側勤めに出仕なす、其の悦びを草葉のかげで、（ト思入あつて氣をかへ、）イヤサ、蔭膳すゑて待受けし、我家の門へ久々にて、戻ると直に氣がゆるみ、旅の

勞れを引出した、暫く奥にて休息いたさう。

鶴若　お勞れとあるならば、おみ足でもさすりませう。サヽ、奥へお越しなされませ。

〽いざとばかりに立上る、我子のおもてつくゞゝと、流石勇士も愛着の血筋の涙眼にうるみ

ト繼信立上り、鶴若の顏を見て思入、薄きドロゝゝになり、

繼信　返すゞゝも武士の、生死不定の一命に、愛別離苦を思ひやる、親子一世のうき別れ。

鶴若　なに、別れとは。

ト鶴若聞咎めて繼信の前へ行き、ぢつと顏を見上る、繼信鶴若をきりゝと廻して、

繼信　イヤサ、別れて後の教訓は、寐物語りに一間の内、

鶴若　左樣なれば父上樣、

繼信　イザ！案内を致してくりやれ。

〽何氣なければ世を去りし、父とも知らで鶴若が、打ちつれ一間へ、

ト送りになり、鶴若附添ひ屋體の障子を明け、案内をする心にて先へはひる、是と一時にドロゝゝ燒酎火を出し、繼信物凄きこなし、續いて障子屋體へはひる。

〽入りにける既に其夜も初夜過ぎて、早中空に澄み渡る、月の光りはあり乍ら、道のはこび

は黑駒の、轡にすがる高畑治郎、佐藤がもとへ戻り路の、街に彳み吐息をつき、

ト此内花道より、前幕の高畑治郎、鎧下迯附大小草鞋がけ、母衣に包みし繼信の鎧を駒に附け口を取り出來りて、花道に留り、

高畑　君の仰せにもだし難く、拜領の馬をひき、はる〴〵これ迄戻りしが、後室樣や奥樣に、繼信樣の御最期を、申上ぐるもじゆつなき仕合せ、あゝこりや何としたものであらう。

〽心の内もとつおいつ、しを〳〵門邊に立戻り、樣子窺ひ思案を定め、

ト高畑しを〳〵と考へ乍ら舞臺へ來り、門松へちよつと馬をつなぎて內を窺ひ、思案の思入あつて、

西國より高畑治郎が、戻りましてござりまする、どなたか御取次ぎ下さりませ。

〽云ふ聲奥へ聞えけん、治郎右衞門一と間を立出で、（ト是にて奥より以前の治郎右衞門出來り）

治郎　誰やら案內がある樣子、ハテ何人なるか。

〽門の戸明けてあたりを見まはし、

ト治郎右衞門門口を明け、高畑の顏に心づかず、件の馬に目をつけ、

ハテ夜中に馬を引かれしは、ハヽア扨は當家で四季のまなびをなされるゆゑ、かの望月の駒引き殿が參られしか。

高畑　その駒ではござりませぬ、治郎めでござりまする。（ト次郎右衞門よく〳〵見て、）
治郎　おゝ悴であつたか、さて〳〵よう戻りやつた、身共は元より後室樣にも、お待兼ねであつたわえ。
高畑　私もさうとは存じましたれど、遠路ゆゑ手間取りましてござりまする。
治郎　サ、内へはひつたがよい。
高畑　左樣なら、荷物をお請取り下さりませ。

〽馬に付けたる鎧より、重荷を下す家の内、わらぢぬぐ間も親は氣配り、

ト高畑件の鎧を馬よりおろす、治郎右衞門手傳ひて本緣の上へ置く、高畑内へはひり草鞋をぬぐ、

治郎　ヤレ〳〵、さぞくたびれたであらう、足をすゝぐなら、水を汲んでやりませう。

ト手桶、たらひなぞを持出す。

高畑　アヽモシ〳〵勿體ない、必ずお構ひ下さりますな、其のお世話より親仁樣、門につないである馬を、どうぞ厩へお引きなされて下さりませ。
治郎　ヲヽ成程氣が付かなんだ、門へ置いては無用心、ドレ、厩へつないでやりませう。

〽いそ〳〵馬の口を取り、裏手の方へ引いて行く。

ト治郎右衞門馬を引き、下手網代塀の間へはひる。此内高畑足を洗ひ、始終思案の思入。

山路　ヘ折から佐藤の後室は、一間の内より立出て、（ト奥より山路出來り、）

ヲヽ、治郎戻りやつたか。（ト高畑見て、）

高畑　これは〳〵後室樣、いつに替らず御機嫌の體、恐悦至極に存じまする。

山路　そちも無事にて目出度い〳〵。イヤモウ國を隔てし戰場にて、兄弟の者に附添ひ樣々の心遣ひ、必ずあだには思ひませぬぞ。

高畑　これは又、恐れ入つたる其のお詞、冥加至極にござりまする。

ヘ話半ばへ治郎右衞門、（ト下手より治郎右衞門出て內へはひり、）

治郎　後室樣御安堵なされませ、次郎めが戻りましたれば、何かの樣子は知れませう。こりや悴、其方一人お先觸れに戻つたのか。シテ御兄弟のお歸りは、今宵かあすか、どうぢや〳〵。

高畑　ハツ、忠信樣我君のお供にて、後よりお歸りにござりまする。

山路　シテ、繼信はいかゞした。（ト高畑うじ〳〵して、）

高畑　その繼信樣は。

山路　戻りますか。（ト高畑切なき思入あつて、）

高畑　いかにも、やがてお歸りでござりまする。

〽云ひまぎらせど心の苦しさ、それと白髪の治郎右衛門、

ト高畑云ひまぎらす思入、治郎右衛門是を知らず、

治郎　程なくお歸りとあれば、後室樣、モウお氣遣ひはござりませぬ。何は格別こりや悴、西國表の戰のお話し、是にて詳しう申上げたがよい。

山路　治郎右衛門が云やる通り、聞きたいは戰の樣子、萬に一つ子供等が手柄でもしましたか、遂一聞かしやいなう。

〽問はれて此方は口ごもり、何と答へも胸一ぱい、思案定めて座を改め、

ト高畑とかく云ひ兼ねる思入あつて、トヾ思案を定め、よろしく居直り、

高畑　お尋ねなくともそれがしが、立戻りしは戰の仔細、詳しく申上げん爲、事長くともお聞き下され。(ト肥前ぶしの合方になり、)そも此度の合戰は、名におふ八島壇の浦、平家は數艘の兵船に、例の赤旗浪間に押立て、源氏は陸地に陣所をかまへ、磯に白旗吹きなびかせ、打ちつ打たれつ切結ぶ。

〽太刀の鍔音てう〳〵く、射かける矢先は浦風に、いさごを飛ばす雨あられ、陸と沖とに入り亂れ、戰ひはげしき其の折柄、一際目立つ兵船に、物の具りゝしき武者一人、へさきに突立ち大音聲、遠からん物は音にも聞け、近くばよつて目にも見よ、平家一門の棟梁たる

門脇宰相教盛が一子、能登守平教經、

〽目ざす相手は九郎義經、覺えの一矢參らせんと、弓につがうて待ちかくる。元より猛き御大將、憎き敵の廣言に、かけ向はんとなしたまふを、お傍にありし繼信樣、それと見るより、御鎧の草摺むんずと引止め、千金の御身あやふし／＼、我君の御名を名のり、イデ一戰仕らんと、實にいさぎよき有樣に、いしくも繼信申したりと、則ちお召しの太夫黑、手づから賜る其場の面目、

山路　すりや、我君には御手づから、お召しの名馬を賜はりしか。

治郎　ハテ、あつぱれなる其のお手柄、シテ／＼後は如何なるぞ。

高畑　それより件の敵に向ひ、繼信樣には聲張上げ、ヤア／＼一院の御使、源氏の大將檢非違使、五位の尉たる九郎義經、則ち是にと呼はりたまへば、待ち設けたる教經が、シヤのがさぬと云ふより早く、引きしぼつて射かけし矢つぼ、

治郎　狙ひは外れたか。

高畑　サア、

治郎　射そんじたか。

高畑　ハヽツ。（ト云ひ兼ねる思入、山路ぢつとなつて、）

山路　こりや治郎、其矢は違はず繼信が、胸板を貫ぬいたか。

高畑　ハヽツ。（ト泣伏す。）

山路　必ず共に隠しやんな、能登守の矢先に掛り、討死したと云ふことは、疾うから知つて居るわいの。

治郎　えゝゝゝゝ。

〽驚く父より泣き伏す治郎、兼ねて知つたる後室も、涙先立つばかりなり、

ト治郎右衛門びつくり驚く、高畑は泣伏す、山路も歯をくひしばり泣く事よろしく、

〽様子を聞いてかけ寄る菊町、（トばた／＼になり、奥より菊町走り出來り、）

菊町　物かげにて様子を聞けば、合點の行かぬ今のお詞、まだ母上には申上げねど、最前夫繼信殿、戰場より立歸り、現在あれなる一間の内に、

治郎　なに、繼信様が、戰場より。

菊町　サア戻つてお出で遊ばすを、討死などゝ誠らしう、母上様の思ひ過しか、治郎がてんがう云やるのか、今目の前の證據には、是へお連れ申しませう。

〽一間の障子押開けば、内には鶴若おろ／＼涙、

ト菊町屋體を明ける、是にて障子を引ぬき、正面の床の間、櫻の折枝と紙雛を畫きし掛物をかけ、其前の鎧櫃へ子役の鎧飾りある事、爰に鶴若うろ〳〵して居て菊町に向ひ、

鶴若　モウシ母上、今の今迄此處に、お出でなされた父上樣、俄に姿が消え失せて、影も形も見えませぬわいな。

〽云ふにびつくり、

菊町　これ鶴若、何と云やる、そんなら我夫のお姿が。

山路　消えしも道理繼信が、最前此家へ戻りしは、世になき魂の迷ひの姿。

菊町　エヽ。(トびつくりする。)

治郎　扨はいよ〳〵西國にて。

高畑　討死ありし其場の樣子、眼前見たは此の治郎、今迄包み隱せしが、誠を明かすも涙の種。

菊町　すりや我夫には戰場にて、あへない御最期なされたかいなア。

〽はつとばかりに泣きければ、(ト菊町鶴若はツと泣く。)

治郎　ヲヽ御尤もでござりまする、此の親仁めも聞くが初めて、悲しい事になりましたなア。

〽共に涙にくれ居たる、菊町やう〳〵顏をあげ、

ト此内みな〳〵よろしく泣く。菊町顔を上げ、

菊町　かういふ事とは露知らず、最前のお姿を、誠に世にある夫と思ひ、御無事でお歸りなされしと、取りはやしたる悦びは、早くも變る秋の空、

〽星の逢ふ瀬は一年に一夜と云へど末かけて、變らぬ契りあるものを、此身はそれに引きかへて、

〽露もたもたぬ笹の葉の、本意ない別れと身をかこち、取亂してぞ泣き居たる、老母も心察しやり、

ト此内菊町よろしくあつて泣く、山路涙をぬぐひ、

山路　其歎きは道理ぢや〳〵、必ず無理とは思ひませぬが、初めて聞いたそなたより、疾から知つた此母が心の内はいかばかり、繼信が最期の樣子は、弟の忠信から文に認めひそかの知せ、嫁女にも鶴若にも、歎きかけまい其爲に、今の今迄包みかくし、せめては孫に世をとらせ、親の後目と我君の御前勤めに出しなば、千部萬部の弔ひより、草葉の陰の悦びと、思ひまうけし今日の仕儀、悴が討死とくよりも、知つたる證據は、これ爰に。

〽云ひつゝ立つて傍へなる鎧の胴丸取りのくれば、中に飾りし白木の位牌、

卜山路立上り、附屋體にある子役の鎧を取りのけると、鎧櫃の上に俗名佐藤三郎兵衛繼信行年三十一歳と記せし、白木の位牌かざりある事。

アレ見やれ、親の位牌へ暫しの內、着せし鎧は鶴若へ家の後日の讓り物、開く武運を掛物の、花によそへて祝へども、雛の女夫と事替り、俗名佐藤繼信と、名を記したる其日より、後家になつたそなたの顏。

〽見れば見る程不便さは、胸も張裂くその悲しさ、

最前も最前とて、夫を案じるそなたの樣子、それとなく異見して、武士に連れ添ふ女子のたしなみ、云うて聞かせる其內も、母が思ひは千萬無量、返らぬ夫と白菊の、秋の操の哀れさを、後ろに立てし書襖の、あけて云はれぬ切なさ辛さ、

〽心の內をこれ嫁女、推量してとばかりにて老の繰言くり返す深き歎きを菊町も、しばる〻涙果しなき、何思ひけん高畑治郎、主人の鎧取出し、位牌と共に上座へ直し、遙か下つて手をつかへ、

卜此內山路菊町よろしく泣伏す、高畑思入あつて母衣に包みし、以前の鎧を出し、床の間の鎧櫃へ飾り、此前へ位牌を直し、有合ふ月見の團子と芒をさしたるを供へ、平舞臺へおりて、

高畑　後室様を初めとして、奥様や鶴若様、其のお歎きを見るにつけ、返す〴〵も口惜しきは、旦那様の御落命、其折矢疵を受け磯に打伏し給ひしを、教經の家來なる菊王といふ童、御首級取らんと勇み立つ、それがしやはか渡さじと、射かけし矢先は菊王の脚に當つてたじろぐ内、御死骸を取納め、それより敵と渡り合ひ、討死なさんと存ぜし所、義經公の御前へ召され、繼信の着せし鎧を、太夫黒の馬に添へ、故郷の母へ形見として、汝は今より持參せよと、くれ〴〵仰せを受けたるゆゑ、詮方なく〳〵血に染みし、それなる鎧を馬につけ、はる〴〵是迄戻りしが、今お位牌へ手向けし上は、拙者が役目も最早是迄、最期の時刻はおくるゝ共、今よりお主のお後を慕ひ、冥土の御供仕らん。

〽既にかうよと見えければ、

ト高畑差添に手をかける、治郎右衞門びつくり思入、山路とめて、

山路　ヤレうろたへしか高畑治郎、たとひ主人に別るゝ共、一命捨つるは犬死なるぞ。

高畑　でも此儘に存へては、臣下の道を失ふ道理。

山路　すりや繼信を主と思ひ、其餘の者は主ではないか。

高畑　全く以て。

山路　此世の忠義を思はぬか。

高畑　サア、それは。

山路　犬死しやるか。

高畑　サア、

山路　サア、

兩人　サア〳〵。

山路　死する命を存へて、此の鶴若に力を添へ、敵教經を討取らずば、臣下の道は立つまいがや。

トきつと云ふ、高畑詰つてぢつと考へる思入あつて、差添を鞘へ納め、

高畑　ホヽヲあやまつたり〳〵、お主に別れ血迷うて、前後を忘れし拙者が振舞、一途に死なんと存ぜしも、今仇討との仰せによつて、初めて心に思ひ當り。

山路　合點がいたか。

高畑　ハヽツ、死をとゞまつて只今より、手の裏返す義心は金鐵。

山路　すりや所存の臍を固めしか、それでこそ誠の忠臣。

治郎　悴出かした此上は、鶴若樣に附隨ひ、能登守を付けねらひ。

菊町　夫の恨みを晴してくりやるか。
高畑　いかにも敵に近寄つて、せめて一太刀恨みの刃。
鶴若　そんなら直に。（ト鶴若立上り、行かうとするを、山路とめて、）
山路　ハテ忙しない、まア〳〵待ちやいなう。

〽勇む鶴若とゞむる老母、やがて敵に合せ砥の胸に刃を研ぎすます、折から一間に聲あつて

ト鶴若しきりにはやるを、山路形よく留める事あつて、皆々壇の浦はあちらかといふ心にて、向うをきつと見込む、此時奥にて、

經時　ヤア〳〵人々、佐藤繼信を矢先にかけし、能登守教經。
菊王　其場にありしわッぱの菊王。
經時　それへ參つて。
兩人　見參せん。
皆々　何と。

〽と見返れば隔ての襖明けの春、萬歲唄ふ長袖の素袍に代る大鎧、傍に隨ふ才藏も小手脛當のあら若衆、立並んだる有樣は、菖蒲人形の如くなり。

ト是にて二重正面の襖を引拔く、庭遠見の前に五月幟、鯉の吹流しなどよろしく立てあり、此前の所上手の方に前の經時、立烏帽子、鎧、腹卷、附太刀、陣立の拵へ、重籐の弓を携へ、床几に掛り下の方に菊王丸見かづら、胸鎧、小手脛當りゝしき拵へにて控へ居る、皆々見て、

菊町
治郎　ヤ、ヤ、こなたはさつきの萬歲どの。（ト山路詰めより、）

山路　汝が參りし其時に、物蔭より差覗き、怪しき奴と思ひしが、能登守とは心得難し、高畑治郎見覺えありや。

高畑　ハヽツ源平陣所をへだてしゆゑ、面體しかと分らねど、見覺えあるは其の菊王。

菊王　壇の浦にて繼信が、首をとらんと勇みし折、汝が射かけし矢先にて、足に手疵を受けたるそれがし。

高畑　其時汝を打ちもらし、殘念なりと思ひしが、爰で逢ひしは是幸ひ。

菊王　ヲヽ我も恨みの高畑治郎。

經時　それ、彼めを早く。

菊王　心得ました。（トつか〳〵と平舞臺へ下り、）治郎覺悟。

高畑　何を小癪な。

〽互に刃をぬき合せ、討つてとらんと切結ぶ、覺えの早業上段下段、暫く挑み戰ひしが、すきを見合せ治郎が切先、受損じたる菊王が、肩先深く切込んだり、

ト此内高畑菊王よろしく切結ぶ、ト、高畑菊王の肩先を切付ける、菊王たぢ〳〵として倒れる、治郎右衛門鶴若をつれ、走り寄つて刀を抜き、

治郎　敵の片割、まツこの通り。（ト鶴若の手を持添へて、止めを刺させる、經時是を見て、）

經時　ヤ、菊王には不覺を取りしか、モウ此上は死者狂ひ、刃向う奴輩返り討、一々に首を並べてくれん。

ト前へ出て、經時きつとなる、

山路　ヤア、奇怪なる其の一言、

菊町　夫の敵。

山路　我子の仇。

兩人　教經覺悟。

〽切つてかゝれば身を躱し、付入る懷劍拂ひのけ、緣より下へ蹴落せば、のがさぬ治郎が飛鳥の刃、

ト山路菊町懷劍をぬき、左右より切つてかゝる、經時陣扇にてあしらひ、立廻つて平舞臺へ兩人を蹴落す、治郎右衞門山路を介抱する、鶴若菊町を介抱する、高畑經時に切つてかゝる、經時ぬき合せ文句の留りきつと見得、是より誂への大小の鳴物になり、經時舞臺へ飛下り立廻りあつて、トゞ高畑に切立てられたぢ〳〵となる。

〽たぢろぐ敎經菊町がすきをねらつて敵の脇腹、貫ぬく刃も女の一心、痛手にたまらずどつと坐し、

ト菊町經時の後ろへ廻り、懷劍にて鎧の間をつく、經時苦しみ、どうと下に居て、

經時　妹出來した、よく討つた。

山路　なに菊町を妹とは、心得難き其の詞。

菊町　我父上は禪司盛俊、こなたにゆかりは少しもない。

經時　ヲヽ其不審は尤もながら、我云ふよしをよツく聞かれよ。

〽苦しき息をほつとつき、（ト經時苦しき思入あつて、）

誠我身は敎經ならず、能登守の家の子たる、讃岐太郎經時なるぞ。

皆々　ヤヽ何と。（ト竹笛入りの合方になり、）

經時　我父太郎經政殿は、能登守殿のお家に仕へ、三人の子を儲けられしが、惣領の男子は則ちそれがし、末は是なる菊王丸、中に生れし女の子は、四十二の二ッ子ゆゑ、人に知らさず朋輩なる、越中の禪司盛俊殿へ、我父よりひそかに頼み、養育されしは此の菊町、成人の後盛俊殿、都在番のその砌り、庄司殿の子息たる、繼信殿へめあはせしが、其後源平引きわかれ、

〽互ひにそれと兄弟の、名のり明かさぬ明石潟、

一の谷の敗軍より平家は終に西海の、浪路をさしておちこちの、陣所を出づる忍び足、運の極めはそれがしが、主君と頼む教經殿、二の木戸の磯際にて、名もなき葉武者の手にかゝり、つひにあへなく御落命、南無三寶平家方に、此人なくては叶はじと、我面ざしの似たるを幸ひ、教經なりと僞る計略、此程八島の戰ひに、義經公に出逢ひし折も、能登守と名のりを上げ、目がけし敵にあづさ弓、よつ引ひやうと放す矢は、大將ならぬ我妹の、夫と頼む繼信が、胸先深く覺えの矢壺、

〽情なや急所の痛手、しばしもたまらずたぢ〳〵、どつと倒れてむざんの最期、

菊王　現在姉聟の、佐藤繼信殿とは露知らず、兄の矢先にかゝり、落つると見るよりかけ寄りて、首をかき切らんと勇みし時、陸より放つ治郎殿の、矢先に足を射られし報い。

〽忽ち此身も矢疵の重手、苦しむ内に敵味方、

經時　引き汐時と諸共に、源氏は陸地平家は沖へ、兩陣互ひに引きわかれ、矢先にかけしは繼信と、後に知つたる後悔も、先に立たざる因果の寄り合、

〽思ひ廻せば廻す程身のあやまりの面目なさ、其の云譯に死ぬべきを、まだ〳〵命長門の沖、安藝の太郎兄弟を、小わきにかひ込み入水なし、水底くぐつて今日迄、卑怯未練に生き延びしは、佐藤に連れ添ふ妹や甥に此首やりたさゆゑ。菊王とてもそち達が、手にかからんと覺悟して、兄弟ひそかに云ひ合せ、本名かくし姿をかへ、此家の內へ入り込みし、我こそそちが兄なるぞよ。

〽其身の素性打明かす血汐の淚目にあふれ、息も忙しき物語り、菊王苦しき眼を見開き、

菊王　當家で死するはかねての覺悟、最早此世に思ひ置く事更になし、兄上冥土の魁仕らん。姉上何れもおさらば。

〽差添拔いて腹へ突立て、きり〳〵と引廻し、其儘其處に倒れ伏す、

ト差添をぬいて腹へ突立て、よろしく落入る。

〽姉は堪らずさし寄つて、

菊町　これ弟今の今迄同胞と、知らで恨みし此姉が、今々思へば不便な最期、悲しい別れをする事ぢやなア。

〽くどき歎くぞ道理なり、經時眼をしばたゝき、

經時　歎くな妹、菊王諸共佐藤が屋敷で最期をとげなば、是にて繼信殿の恨みも晴れん、お袋必ず恨みとばし思ひ下さるな。

〽語るを聞いて人々は、あらぬ思ひも猶更に悔む涙ぞ哀れなり、老母は傍にさしよつて、

山路　初めて聞きし御身の素性、能登殿と名のりしは、此の菊町が兄御にて、矢先にかけしも繼信と、知らぬ其場の誤りとは、ハテ是非もなき互ひの不運。

治郎　先非を悔んで此家へ來り、敵と名のつて討たれんとは。

高畑　流石は平家に聞えたる、讃岐六郎經時殿。

菊町　さうとは知らず我夫の、敵と思へば現在の妹の身にて刃を當て、云はう樣なき不孝の罪、お許しなされて下さりませ。

〽許してたべと身を悔み、鎧の袖に取付いて前後正體なければ、手負は涙ふり拂ひ、

ト菊町經時にすがり泣く、經時拂ひのけて、

經時　今更未練の其繰言、たとひ兄でも其方の夫の爲には當の敵、恨みの刃が受けたさに、はる／＼參りし我々が、假の姿も假の世に、
〽覺悟を死出の大和萬歲、千代を壽く鶴若が春の儀式に此首を、打つや鼓の拍子事、誠に目出度う侍の、
道を立つるは今此時。（ト經時よろしくあつて、）
山路　とは云ふもの丶此姿が、孫の爲には母方の、現在伯父御の六郎殿。
治郎　血筋の緣も敵となり、又は味方と引別れ。
高畑　武門の義理に恥を知る、あたら勇士をやみ／＼と。
菊町　刃にかけるも先の世の。
山路　約束事とは云ひながら。
經時　思へばはかない。
皆々　身の上ぢやなア。
〽親子主從敵味方交す涙は春雨に、まさる嵐と白雪に夕立そ丶ぐ如くなり、歎きを止めて六郎經時、（ト經時菊町鶴若と手を取交し、皆々よろしく、大落しにて泣落し、經時きつとなり、）

經時　ヤア〳〵人々、不覺の歎きに時移る、少しも早く我首打つて、繼信殿へ手向けられよ。
山路　ヲヽ、とても深手に叶はぬ命、こなた衆二人の首打つて、孫が手柄に鎧の着初。
治郎　お年の數も年越して、丁度三年の忌服をよけ、
山路　御大將へ御目見得の、路次の警固を賴むは治郎、
高畑　仰せにや及ぶべき。
　　トのりになり、高畑年越の豆を蒔く模樣にて、
　和子の御武運長久を、豆でかぞへる今宵の節分。
　〽然も平家の鬼は外、福はうちとる敵とる、いざや惠方へのり出しの、お供は拙者が厄拂ひ、
　西の海より義經公、早御歸陣の途中迄、鶴若樣にはお出迎ひ。
　〽いざ御用意とありければ、
山路　おゝ、直樣是よりのり出しなさん、それ太夫黑を是へ引きや。
治郎　心得ました。（ト治郎右衞門下手網代塀の間へはひる。）
山路　サア鶴若には、物の具附きや。
鶴若　ハツ。

ト是より大小入りの鳴物になり、山路高畑手傳ひ、鶴若に鎧をきせる、菊町手負の介抱する。此の内治郎右衛門は以前の馬を引出し來り、下手にて馬具など直し居る。鶴若鎧を付けて二重眞中に凛々しく床几に掛り山路そばに付添ふ。

山路　おゝ勇ましゝ〱、婆も是にて一つの安堵。

治郎　然らば是より御出立。

經時　もはや近付く此身の知死期、首討てよ高畑治郎。

高畑　詞に任せ、いでや介錯。

ト高畑刀をぬき、經時の後ろへ廻る。菊町これを見て、

菊町　そんなら是が、

經時　此世のわかれ。

山路　臨終唱念、必ず成佛。

經時　南無阿彌陀佛。

皆々　南無阿彌陀佛。（ト云ふを押へて）

山路　ヤレ目出度い。

ト山路陣扇を開き、鶴若に持たせる。是と一時に經時片足ふみ出し、手を合せる。双方見合つて木の頭。

門出ぢやなア。

ト山路經時よろしく、高畑刀を振上げる、菊町泣落す。治郎右衞門馬の口を取り、勇ましき思入、鶴若二重の眞中に立身にて勇み立つ、此の仕組よろしく、カケリにて、

ひやうし幕

ト幕引付けるとエイと聲して、バツタリ首を打つ音よろしく。

五幕目

般若坂鎧師幸作内の場

〔役名――惡七兵衞景清、三保谷四郎國俊、鎧師幸作、南都の盤若坊、薩摩五郎、丁稚三太、三保谷一子國松、景清一子小七郎實は平家の公達六代御前。幸作娘おきせ實ハ三保谷妻。〕

（般若坂鎧幸幸作内の場）――本舞臺三間常足の二重、向う押入、納戸口、兜を並べし棚の書割、柱に鎧師妙珍の幸作といふ看板をかけ、上の方一間障子屋體、此の前枝折戸、四ツ目垣、庭口の心、下の方小高き藪疊、いつもの處門口、總て般若坂鎧師幸作内の體、二重に幸作白髮かづら、袖なし羽織に

て、兜の鉢を鍛へて居る、平舞臺に國松芥子坊主、木綿やつしにて、小さな木太刀を持ち、丁稚三太
箒を持ち叩き合つて居る、此の見得テンツヽ白囃子を冠せたる鳴物にて幕明く。と國松三太をさ
んぐ〵に打つ。

三太　アイタヽヽヽ、まゐつたぐ〵。

幸作　おゝ勝負は見えたぐ〵。

國松　サアをぢさん、今度はお前と勝負しませう。

幸作　イヤぐ〵、おれは急に仕かけた仕事がある、是を片付けねば相手になられぬ。

三太　そんなら坊さん、もう一遍私が相手になりませう。

國松　イヤぐ〵、そちは相手にならぬわい。

三太　所を相手に。

トまた打つてかゝる、テンツヽ白囃子になり、兩人立廻りの内、花道より軍兵、水汲達附、陣笠を持
ち出て、直に舞臺へ來り、

軍兵　頼まうぞぐ〵。(ト内へはひるを、三太だしぬけに打ちすゑる。)アイタヽヽヽ。

幸作　ヤア、これぐ〵三太、お武家樣をどうしたものぢや。

三太　ヤア、こいつは違つた〳〵。
軍兵　ア痛い〳〵、おのれ武士たる者を、よく打つたな。
國松　おいらぢやないよ〳〵。
三太　イヤ〳〵、ぼんさんぢや〳〵。
軍兵　イヤ誰でも彼でも、料簡ならぬぞ〳〵。
幸作　これは〳〵どなた樣かは存じませぬが、申さば時の出合頭、全く粗相でござりますれば、どうぞ御料簡なされて下さりませ。
軍兵　イヤ〳〵、たゞはすまさぬ〳〵。
幸作　サア御尤もではござりまするが、相手は子供の事なれば、私めにお免じ下され、打つた所を酒でなど、おもみ下さりませ。ヘイ〳〵、失禮乍ら、

ト　さしにさしたる錢を出す。

軍兵　ムヽ、料簡仕にくい處なれど、心附いたる主人が挨拶。（ト錢をとり上げ、）是で勘辨致さうわえ。
幸作　それはまア有難う存じます。これ三太、そこへ出てお詫を申せ。
三太　アイ、眞平御免なされませ。

幸作　これはしたり、もつと頭を下げぬか。
三太　おまんまの喰べたてゞ、かゞむ事は出來ませぬ。
幸作　えゝ腹も身の内、よいかげんに喰ひ居らう。（ト木太刀にて打つ。）
三太　アイタヽヽ。料簡ならぬぞ〳〵。
幸作　阿呆めが、やかましいわえ。
三太　そんならわしにも、錢を下さい。
幸作　えゝまだぬかし居るかえ。（ト立ちかける。）
三太　こいつはたまらぬ。
　　　　ト下手へ逃げてはひる。幸作こなしあつて、
幸作　是はお前樣、とんとお構ひ申さず、大きに失禮を致しましてござりまする。さうしてあなたは、
　　どちらからおいでなされました。
軍兵　おゝ土肥の治郎樣よりのお使ひ、急に桶皮の胴丸が御入用、明朝旅宿へ持參めされ。
幸作　へい〳〵、畏まりましてござりまする。
軍兵　其次手に身共にも、黑革おどしを見せてくりやれ。

幸作　ヘイ〳〵、畏りましてござりまする。

軍兵　ア、これ〳〵。代金は身共が出世致してから、拂つてやる程に、隨分値段は下直にしてくりやれ。

幸作　ヘイ〳〵、畏りましてござりまする。イヤ、こりやちと畏りにくうござります、ハヽヽ。シテお前樣のお名は、何とおつしやります。

軍兵　身共は岡部の六郎と申すわい。

幸作　どうやら承つた樣なお名でもある、定めて八島のお戰には、よいお手柄をなされましたらうな。

軍兵　すりやいまだ身共が手柄を聞かぬか、餘り手柄の數が多くて胸へつかへて口へ出ぬ、まづ一の谷の逆落しに、薩摩守忠度を何の苦もなく討つて取り、それより藤戸の先陣して扇の的を射落し、又能登守が矢表に立ちて八艘を飛び、

幸作　イヤ〳〵お待ちなされませや、能登守が矢に當つて、ようお命がありましたな。

軍兵　ヲヽサ、既に討死する處を、熊の膏藥一とつけで達者になつて歸つて參つた。イヤ、歸ると云へば身共も歸らうか。

幸作　それはまア、何の御愛想もござりませぬ。

軍兵　大きに世話であつた。

トテンツ、になり、花道へはひる。此時奥より娘おきせ丸髷世話女房の拵へにて、湯呑へ茶をくみ持ち出來り、

きせ　モシ父さん、今のは氣違ひぢやござんせぬかいなア。（ト云ひ乍ら茶を出す、幸作取つて、）

幸作　氣違ひでもあるまいが、あんまり本氣の沙汰とも思はれぬ、聞取り法問の手柄話し、今云うた薩摩守を討取つたのは岡部の六彌太、扇の的は奈須の與市、皆高名の人達ぢやが、取分け中にも大將の面へ立つて討死した、佐藤三郎兵衛繼信は、アヽ忠心な人ぢやなア。

きせ　それに付けても氣にかゝるは夫三保の谷殿、此子と私をお前に預け、戰に出てもう二年、最早八島も鎮まつて、大名衆も鎌倉へ御歸陣あるに夫ばかり、今に便りのないと云ふは、モシ繼信殿の樣な事でもありはせぬか。

幸作　ハテわッけもない、三保の谷程の侍が討死でもした事なら、人の噂でも知れる筈、氣遣ひしやるな、追付け手柄して戻られよう。アヽ緣なればこそ町人の聟になられた三保の谷殿、今にも出世せられたら、大名に成る孫の國松、アヽ嬉しい事だなア。

國松　これ祖父樣、わしも父樣と一緒に、八島とやらで戰がしたいわいなう。

幸作　チヽ出かした〳〵、どうでも侍の胤は胤だけある、戰がしたいとはよう云うた、シタガもう八島

へ行つても、戰はしまひになつたれば、矢張りいつもの內でせい。

國松　そんなら父さんを、呼んで來て下され。

きせ　サア、その父樣が知れぬゆゑ、母も案じて居るわいの。

ト合方になり、花道より、薩摩五郎着込武者達附大小にて出來り、直に舞臺へ來り、

五郎　こりや、幸作は在宿なるか。（ト內へはひる。幸作見て、）

幸作　これは〳〵御大身樣、まア〳〵こちらへお通り下さりませ。

五郎　イヤ、かまやるな〳〵。拙者は鎌倉方の者なるが、然るべき具足があらば求めたい。

幸作　それは〳〵、鎧の儀なればお好み次第、又兜は鍬形烏帽子形、錣はまんじう割錣、立物にも前立脇立、流儀に依て忍びの緒の結び樣も樣々に、三保の谷結びと申すのもあります相にござります

五郎　アイヤ〳〵、その三保の谷は申さぬこと、武士の家には大禁物。

幸作　ム丶、そりや又何故でござりまするな。

五郎　されば此度八島の戰に、不覺を取つて逃げ去りし、卑怯未練の臆病者、それゆゑ我々風情にも、三保の谷が名を嫌ひ申す。

きせ　エ丶、そんなら何とおつしやります、あの三保の谷殿が戰場で不覺を取りましたとか、そりやま

アほんまの事でござりますかいなア。

五郎　なに偽りを申さうぞ、何が平家の侍大將惡七兵衛景清と云ふ、大力無双の勇士に出逢ひ、赤恥かいて逃げたく〳〵。流石に恥かしいと思ひ、戰場より直に駈落、イヤモウ鎌倉中の物笑ひぢやてハヽヽヽ。

幸作　すりや、三保の谷殿には。

きせ　いよ〳〵不覺を。

ト幸作と顏見合せがつかりせし思入、おきせ五郎に氣をかれて脇を向き、しめ泣きに泣く。五郎思入あつて、

五郎　イヤ拙者も主用繁多ゆゑ、具足は明日見に參らん。

幸作　左樣なれば相應な、品を見立て置きませう。

五郎　然らば頼み申したぞ。

ト時の鐘になり、五郎思入あつて花道へはひる。時の鐘を打上げ、床の淨瑠璃になり、

〽後見送りて娘のおきせ、只うつとりと呆れ果て暫し詞もなかりしが、そつと立ちて押入より一腰取出し駈け出すを、幸作見るよりすがり止め、

ト幸作腕を組み思案の思入、おきせ淚の內にきつと思入あつて、押入を明け誂への脇差を取出し、門口へ出かけるを幸作すがりとめ、

幸作　こりや待て娘、脇差持つて何處へ行く。

きせ　ハテ知れた事、夫に恥を與へし景清、女の一念、やはか其儘。

幸作　サ、サ、さう思ふのは尤もぢやが、平家は殘らずちり〴〵ばら〳〵、景清の行方知つて居るか。

きせ　エヽ。

幸作　サア、それぢやに依て急かずとも、おれが云ふ事とつくりと、よう聞けよ。

トおきせを無理に下に居させ、誂への合方になり、

よし景清の行方が知れてあるにもせよ、三保の谷程の勇士にさへ、不覺をとらせた强者が女の刃でいかうと思ふか、其上今の侍が云うたも嘘やら誠やら、近所の事さへ知れぬ世の中、殊に八島と爰の事、必ず心にかけぬがよいぞや。

〽口には云へど胸の內、聟の身の上氣にかゝる、をさな心の國松も、

ト幸作思入、國松おきせにすがり、

國松　コレ母樣、父樣がお負けなされて、おりや悔しいわいなう。

きせ　〽悔しいわいのと泣きいだせば

チ、道理ぢや〱。何にも知らぬ子心にさへ、是程悔しう思ふもの、まして母が心の内、どの樣にあろぞいなう。

〽わつと泣出す親と子を、傍で見る目のやるせなき、

ト おきせ國松を抱いて泣く、幸作愁ひの思入。

〽折から爰へ風俗も屋敷めいたる女房の、一腰帶びたる子を連れて、門口にさし向ひ、

ト此文句へ時の鐘を冠せ、花道より景清の妻衣笠模樣物抱へ帶、好みの拵へにて、子持筋の陣羽織を着、陣笠をかざし脇差をさしたる景清、一子七郎實は平家の公達六代御前の手を引き出て來り、門口にて內を窺ひ、思入あつて、

衣笠　チト物が尋ねたうござります。鎧師妙珍の幸作殿とは、こなたでござりますかな。

〽物々しげな案內に、

幸作　アレ、表へ誰やらお出でなされた。これ娘、泣顏見するは見つともない、坊主を連れて奧へ行きや行きや。

きせ　アイ。（ト思入あつて、）

國松　サア、母様、奥へ行かうわいなう。

幸作　ヲヽ、さうぢや、早う行きや〳〵。

〽早う〳〵と二人を追遣り、小腰かゞめて、

　トおきぜ國松をつれ奥へはひる、幸作門口を明け衣笠を見て、

これは〳〵、見受けますればお女中様、よもや具足の御用でも。

衣笠　成程妾が参りしは、此家の主人に用事があつて。

幸作　なに、私へ。

衣笠　すりや其方は、此家の主人、

幸作　ヘイ、妙珍の幸作と申します。

〽聞くよりつゝと上座へ通れば、主人は一圓合點ゆかず、

ついぞ見受けぬ、あなた様は。

衣笠　鎌倉殿の身内の者。

幸作　シテ私へ御用とは。

衣笠　詮議に参つた。

幸作　エ、そりやまた、何の御詮議に。(ト合方になり、)

衣笠　外でもない、此度八島の戰より、行方知れざる平家の一門、詮議致せと我夫へ、賴朝公よりきびしき嚴命、然るに其方は以前より、平家へ出入の鎧師ゆゑ、恩になつたる誼を思ひ、落人共を匿ひ置くよし、申さば町家に入らぬ義理立、モシほか〴〵より訴人あつて、事顯れなば重き罪科自身の口より白狀すれば賴朝公の御慈悲にて、そちが命は助け遣はす、サア有體に云うてしまや。

〽和らで仕かける詮議役、幸作つく〴〵思案顏、(ト幸作思入あつて、)

幸作　これは〳〵思ひがけない其の御詮議、みじん聊覺えはなけれど、お情ない左程迄、お慈悲深い賴朝樣に、似合はしからぬ今のお詞、町家に入らぬ義理立とは、近頃無慈悲なおつしやり樣、町人でこそあれ私も、武器を商ひ致しますれば、心迄町人ではござりませぬ、忘れぬ證據は今にでも、モシ平家の落人が、逃げて來たなら匿ひます、ハイ、未練に命は惜しみませぬ。

衣笠　すりや、命にかへても落人を。

幸作　ハイ、匿ひまする。

〽にかり切つたる挨拶を、聞くにこなたは安堵の思ひ、(ト衣笠思入なつて、)

衣笠　ハテ賴もしき心立、さこそあらんと思ひしかど、心を引きしは妾があやまり、イザ、此の二人共

どうぞ匿うてたもいなう。

幸作　今の詞に打つて替り、匿ひくれよとおつしやりまするは。

衣笠　何をか包まん我々は、平家方の落人にて、木にも葉にも心を置く身、暫しの間の隱れ家を、慈悲ぢや情ぢや、頼みますわいなう。

〽頼みまするると手をつけば、幸作は二言と言はず、

幸作　お氣遣ひなされまするな、頭のてつぺんから爪先迄、平家の御恩になつたる幸作、命を捨ても云はゞ元々、きつとおかくまひ申しませう。

衣笠　そんなら匿うて下さるか、エヽ忝い。

幸作　シテあなたは平家方にて、どなたの奥樣にござりまする。

衣笠　サア妾事は衣笠とて、夫は上總の國の住人七兵衛景清、また是なるは小七郎とて、二人が仲の悴でござるわいなう。

幸作　すりや、あの景清樣の、ハテナ。

〽はてさてこれはと手をこまぬき、又も思案にくれけるが、

シテ景清樣の、御在所はな。

衣笠　サア西海の戰より、後白浪どちり〴〵に、其後便りのあらざれば。
幸作　御存じないか。
衣笠　おいなう。
幸作　ムヽ、是も尤も。イヤ、なには兎もあれ、爰は端近。
衣笠　いかさま、源氏の武士の目にかゝらば。
幸作　あなたの身の上、
衣笠　そなたの難儀、
幸作　人の心のつかざるやう、幸ひの細工部屋、
衣笠　たとひ賤の子の上なりと、
幸作　しばしの内の御辛抱、
衣笠　そんなら幸作。
幸作　アモシ、（トあたりへ思入あつて、）サ、是へお出でなされませ。
〽主人が案内に衣笠は、小七伴ひ入りにける。（ト幸作下の方居間へ衣笠小七郎を入れ、）
〽後見送りて兎や角と思案額に波よする、後ろにすつくり娘のおきせ、

ト幸作娘に知れては惡いといふ思入、よき時分に奥よりおきせ出で、後ろに窺ひ居る、幸作うなづき奥へ行かうとして、

きせ　父さん、今の女中さんは。

幸作　ヤ。

きせ　名は何と云ひなさんすえ。

幸作　サア、其の名は。

きせ　上總七兵衛景清が女房、衣笠と云はうがな。

幸作　エヽ、

きせ　何とさうでござんせうがな。

幸作　ムヽそんなら、われは何もかも。

きせ　これが聞かずに居られうかいなア。(ト合方になり、)夫三保の谷殿に恥辱を與へた景清が、女房悴と知りながら、匿はしやんしたお前の心は、味方ごかしにたばかつて、訴人する氣でござんせうが、それよりいつそ手短かに、すぐに敵景清の在所を白狀させませう。

ト小褄りゝしく立上るを、

幸作　又しても其樣に、これ心の急くは尤もぢやが、こりやさうはなるまいぞや。
きせ　ムウ、ならぬとは、そりや又なぜに。
幸作　ハテ、平家の御恩を思ふゆゑ、一旦おれが受合うて匿うた親子の衆、指さゝしても義理がすまぬ。
きせ　そんならお前は眞實に、匿はしやんす心かえ。
幸作　おいヤイ。
きせ　アノ三保の谷といふ源氏の武士を、現在聟に持ちながら。
幸作　サア、其の聟の三保の谷も、おれの方から持たせはせぬ、我が勝手に念頃して、子迄產んだ事ゆゑに、せう事なしに持たせた聟、二年此方家出して、便りをせねどふッつりとも云はぬはわれが可愛いゆゑ、なれども此度の戰ひに、恥辱を取つた臆病者、モウ三保の谷の三の字も厭ぢや、われも今日より三保の谷と、夫婦の緣を切つてしまひ、卑怯者にまさつたる立派な男を持ちかへい。
〽云はれてくわッとせきのぼせ、
きせ　これ父さん、女子の知らぬことながら、不覺をとるも手柄をするも、戰の習ひ時の運、自慢ぢやなけれどあの樣な、器量骨柄揃うたる、男は又とござんせうか。いかに親の効驗ぢやとて、娘の心も知りもせで、外の男を持ちかへいとは、あたあほらしい、おいて下さんせいなア。

幸作　おのれ親をやりこめをるか、阿呆とはおのれが事だわ。
きせ　イエ〳〵、今源氏の世の中に、平家の肩を持たしやんす、お前は阿呆でござんすわいなア。
幸作　イヤ、こいつ口が過ぎるぞよ。
きせ　イエ、私よりお前の口が。
幸作　エヽ、われが口は過ぎるわい。
〽口が〳〵と水掛け論親子喧嘩の眞中へ音色やさしき虚無僧二人、一度に表と裏口に、佇む
鶴の巣籠りも、こなたは何やら腹立ちまぎれ、
ト此内幸作仕事に掛り居て、腹の立つこなしにて、兜の鉢をむやみに叩き立てる、此内東西の花道揚幕にて、尺八の音になり、花道より景清旅虚無僧の拵へにて包みを背負ひ出る、東の揚幕より三保の谷同じく虚無僧にて出來り、直に双方舞臺へ來り、上下門口の外にて、兩方一時に尺八を吹く思入。
エヽやかましい、通らつしやれ。モウ〳〵われの様な片意地なやつに、物云ふもいやぢやわい。
きせ　それ程に思はしやんす此内に、私や居ずとようござんす、向後親子でない證據、さつぱりと勘當して下さんせいなア。
幸作　何ぢや、勘當せい。ヲヽ我が方からの頼みなら、勘當せまいものでもないが、勘當受けてどうす

る氣ぢや。
きせ　アイ、國松をつれて、出て行くわいなア。
幸作　イヤ〳〵坊主を連れて行かれると、明日からおれは淋しいわえ。
きせ　何と云はしやんせうが、子ぢやものを、連れて行かいでかいなア。
幸作　達て連れて行きをるなら、
きせ　どうさしやんす。
幸作　モウ勘當止めぢや〳〵。
きせ　イエ〳〵、勘當して下さんせ〳〵。
幸作　止めぢや〳〵。
〽果しも長の旅修行、吹合はせたる甲乙も、調子の合はぬ内の仕宜、
ト此内始終上下にて、尺八の音。幸作心づき、
エヽさりとはしつこい尺八殿、通らつしやれ〳〵。
〽とあらけなき詞の歌口、互ひに止め、（ト双方尺八の音を止め思入あつて、）
景清　ムヽ、通れとあれば、修行の掟。

三保　いづ方迄も、

兩人　罷り通る。

〽兩方おめず內に入り、（ト兩人一時に內へはひり、よき所へ住ひ。）

景清　只今是の軒先にて、一飯の所望致せし所、

三保　通れとある故通りましたが、シテ御用ばし、

兩人　ござるかな。

〽云はれて幸作心付き、（ト幸作おきせ兩人を見てびつくりこなし。）

幸作　イヤこれは〳〵、こちらにちつと取込んだ事があるゆゑ、お修行者に申す詞をツイ忘れ、ぶしつけな事申しました、お許しなされて下さりませ、元より粗相のことなれば、何も用事はござりませぬ、お二人共に氣の毒ながら、どうぞ歸らしやつて下さりませ。

三保　イヤ歸れとて歸るまじ、それにござるはイザ知らず、身共は修行ばかりでない、武具を渡世と承り、チト求めたい品あつて、わざ〳〵此家へ參つてござる。

景清　手前とても其如く、武具を求めに參つたが、何と賣つて下されうか。

幸作　ハヽア拙はお二人乍ら、御大身のお忍び出立と見受けました、武具一と通りは生業物、賣らいで

何といたしませう、鎧兜のお望みなら、何なとお目にかけませう。

三保　イヤ／＼身共が好みの誂へは、此方より持參せり。

〽包の內より桃なりの兜の鉢を取出し、（ト三保の谷包の內より兜の鉢を出し、）

これ見られよ此の兜、鉢ばかりあつて錏なし、此の鉢に合ひさうな、錏があらば求めたい。

幸作　ハテ、變つたるお誂へ。シテ、こなた樣のお望みは。

景清　手前もこれに持參せり。

〽同じ兜の錏をば、懷中より取出し、（ト懷中より錏を出し、）

此錏に相應な鉢があらば、賣つておくりやれ。

幸作　すりやこなた樣には錏ばかり、またあなた樣には鉢ばかり、ハテ不思議な御註文。

〽不審立つれば、

三保　見らるゝ通り此兜も、鉢ばかりでは戰場の、役に立たねば元の如く、誠の武士と鍛うたる、兜に仕立て貰ひたい。

景清　また手前も八島にて、源氏武者の兜首、とらんとせしを今少しで、取殘せしが殘念至極、錏ばかりは手柄にならず、それゆゑ此家へ賴み置き、滿足にして受取りたい。

幸作　すりやこなた様には平家方、お手柄なされし御方とあれば、お名がゆかしうござりまする。

〽と立ちよれば、(ト幸作景清の天蓋を覗かうとする。)

景清　アイヤ〳〵、旅の修行の掟にて、笠をとらぬが則ち禮儀。

三保　身共とても其の通り、元の武士になる迄は、めつたに此の名は名のられぬ。

きせ　最前よりの詞のはし〴〵、物腰格好聲音迄、どうやらゆかしい笠の内。

〽と覗いてびつくり、(トおきせ三保の谷の顔を覗き思入。)

ヤ、お前は。

三保　アヽコレ、笠を取るにはまだ早い、時節があらう待つて居やれ。

きせ　それぢやと云うて。

幸作　アヽ是はしたり、お客へ對してぶしつけ千萬、エヽ氣の付かぬ。(ト今は悪いとのみ込ませ)　それお茶煙草盆でも上げぬかい。

きせ　ハアイ。

〽親の詞に是非なくも、心殘して立つて行く。

トおきせ三保の谷へ思入あつて、奥へはひる。景清思入あつて、

景清　見受けますればそこ許にも、普化宗門に御歸依の樣子。
三保　左樣にござる、拙きながら尺八の一と手二た手を修行の爲。
景清　諸國をお廻りなさるゝか。
三保　いかにも左樣。
景清　身共とても其如く、好みの道とて諸國遍歴。
三保　思へば斯樣のお出合ひも、
景清　一河の流れ、
三保　一樹のかげ、
幸作　他生の緣のお二人樣。
景清　殊に持參の誂へも、
三保　同じ兜の鉢鐵、
幸作　一つに合せば、しつくりと、
景清　兜となるも源平と、はなれ〴〵の世につれて、
三保　思ふ樣にはならぬ勝、

幸作　サアヽ、成らぬ所をつぎ合す、此の幸作が細工はりう〳〵。
景清　然らば仕上げる其間、
三保　旅の勞れの足休め、
幸作　間所へだてゝ、
兩人　相待ち申さう。
幸作　左樣なれば、お二人樣。
景清　きつと誂へ、
兩人　申したぞ。

〽互ひに我名は忍びの緒、解かす左右へ別れゆく、

ト兩人きつと笠を上げ、顏を見合せ思入、幸作モシと中をへだてる、是にて景清は上の屋臺、三保の谷は奧へはひる、幸作兜と錣を取上げ見て、

幸作　アヽア折も折時も時、同じ出立の旅虛無僧、然も持參の誂へも、ちぎれし兜の鉢錣、はなれ〳〵の敵味方を、元の通りにしつくりと、つぎ合すのが、こりや幸作が細工ものぢやわえ。

〽思案にくるゝ灯ともし頃、うなづき〳〵奧の間へ、

ト幸作兜の鉢錣を持ち奥へはひる。時の鐘にて、此の道具廻る。

（幸作内奥座敷の場）――本舞臺三間高足の二重本緣付、向う須磨の浦の墨繪の襖、伊豫簾を一面におろし、上下後へ下げて建仁寺垣、四ツ目垣、いつもの所枝折戸、總て幸作内奥座敷の體、時の鐘にて道具留る。

〽入相の鐘かう〳〵と告げ渡る、軒の灯火春日野の飛火の野守それならで、落武者ねらふ南都の衆徒、がまん不敵の盤若坊。

ト花道より南都の盤若坊、衆徒の拵へにて、太刀をさし出來り、

盤若 鎌倉殿の仰せを受け、平家の落人詮議の爲、此あたりを徘徊なすに、合點行かぬは具足師の、あの幸作が茅屋へ、今日兩人の旅虛無僧、入込んだのは其の以前、平家へ出入り致せしゆゑ、姿をかくし落人を、匿ひ居つたに違ひない、兩人共に討つて取り、褒美の金は元より此の身の出世、何は兎もあれ庭口より、忍んで樣子をさうぢや〳〵。

〽幸作が門をさしのぞき、

ヲヽ、幸ひ〳〵、どいつも居らぬ其ひまに、庭より裏手へ忍び込み、モシ落人ならたつた一突さう

だく〳〵。

〽折こそよしと裏口へ、窺ひ〳〵忍び行く、（ト盤若坊上手へはひる）

〽そよとの風も落人は氣を奥の間より衣笠が一腰さすが侍のつま引上げて小七郎、手を引き窺ふこなたの障子、明けておきせが國松を、つれて聞くとも白髮の親仁、修行者が前に手をつかへ。

ト此内下手より衣笠小七郎の手を引き出で、門口に窺ふ、是と一緒に上手障子屋體を明け、おきせ國松をつれて窺ふ、此内正面の御簾をまき上げる、内に景淸上手に、幸作下手に住ひ思入あつて、

幸作　イヤなに旅の御浪人樣、ちとあなたに折入つて、お願ひがござりますが、お聞きなされて下さりませぬか。

景淸　ム、如何なる願ひか知らねども、身に叶うた事なれば。

幸作　お聞きなされて下さりまするか。

景淸　シテ、其の願ひは。

幸作　外の事でもござりませぬが、此度八島の戰ひに、景淸殿と三保の谷が勝負の樣子を世上にて、種々樣々に申しまするが、其の實說を御存じなら、承りたうござります。

景清　何事かと存ぜしに、それはいと易き事、望みに任せ此の場にて、
幸作　すりや八島の浦の戰ひを、
景清　語り聞かせん、承れ。
〽かたり聞けんと座をかまへ、
イデ其頃は元曆元年三月下旬、船と陸との戰ひに、平家方にて大將と、賴むは能登守只一人、
〽弓杖突いて船べりに、突立ち上り大音聲、
平相國清盛の舍弟、門脇中納言敎盛が嫡子、能登守敎經、源氏の大將義經へ見參々々、
〽呼はる聲沖に響いてすさまじく、
詞戰ひ事終らば、我さきがけと敵味方、はやり切つたる其中にも、平家方の侍大將惡七兵衛
景清、
〽是にありと、夕日かげに、(ト此時盤若坊窺ひ出て、)
般若　景清、覺悟、(ト切つてかゝる。)
〽波の打物ひらめかして、切つてかゝればこらへずして、しどろになりて强者は四方へどつ
とちり／＼に、

ト此内盤若坊を相手に、よろしく立廻りあつて、

景清 逃げる後詰は源氏の勇士、三保の谷國俊、シヤ、

〽よき敵と二打三打うち合ひしが、終に刀を打落され、叶はじとや思ひけん、汀の方へ逃げ行けば、

ト此内やはり立廻り、

ヤア逃げるとは卑怯なり、きたなし返せと兜の錣、後ろへ引けば三保の谷も、身をのがれんと前へ引く。

〽互ひにエイヤと引く力に、鉢付の板より引きちぎつて、四郎は濱邊へ眞逆樣、

ト盤若坊を二重より投げろ、盤若坊見事に返る。

〽ほう〳〵乍ら口へらず、

さるにても汝おそろしき腕のつよさと云ひければ、又景清が三保の谷の首の骨こそ強けれと、

〽笑うて左右へさつと引く、

臆病みれんの三保の谷が、恥辱のだん〳〵かくの通り、

〽と語れば悦ぶ衣笠親子、おきせ親子が口惜しさ、まぶたにしめるあら涙、胸も張り裂くば

かりなり。

トみな〳〵よろしく思入。

般若　觀念〽また切付けるを引ぱづし、襟首つかめば兩眼飛出し、ウンとも云はず死してんげり、景清

外面に眼をくばり、

ト般若坊切つてかゝるを、景清立廻つて襟髪をとらへる、是にて苦しむ。此内おきせは國松を圍ひ、

そつと障子を立てる、景清表へ思入あつて、

景清　ヤ、表に誰やら。

衣笠　イヤ氣遣ひめさるな景清殿、外には誰もござんせぬ。

〽云ひつゝ内へ入るを見て、（ト衣笠小七郎内へはひる。）

景清　ヤ、左云ふは女房、我が悴。

幸作　扨はあなたは、景清樣。

景清　アコレ、（トあたりへ思入あつて、）平家の恩澤蒙りし其方なれば、よもや他言は致すまじ。

幸作　何が扨、疑はしくば幸作が、此皺首を差上げませう。

景清　ムヽ心底見えた、さるにても此の坊主、不便な最期と思へども、今にも南都へ忍ぶには、是幸ひの衆徒のなり、

幸作　エヽ。

景清　イヤサ、人目に掛らぬ其内に、

衣笠　死骸を片付け、別間にて、

景清　親子揃うて、

衣笠　何かの話し。

幸作　どれ、御案内致しませう。

〽心靜かに一間の障子、さしも不敵の振舞を、見るにつけ聞くにつけ、おきせが身にしむ腹立涙。

ト幸作先に景清衣笠小七郎附添ひ奥へはひる、上の方よりおきせ國松をつれ出來り、よろしく思入あつて、

きせ　エヽ口惜しい三保の谷殿、さつきに覗いた笠の內、二年振で逢うた夫、定めて戰に手柄して、戻らしやらうと明暮に、待ち暮らしたる甲斐もなく、日頃に似合はぬ今度の不覺、笠を取るにも時節

があらうと、女房に迄も其顔が、面目なうて合はされぬか、それ程恥に思ふなら、なぜ手柄して
は下さんせぬ、今景清か悪口雑言、聞く女房の悔しさは、どの様であらうぞいナア。
〽と身をもだえ夫を思ふ恨み泣き、思ひ詰めたる國松が、

國松　コレ母さま、其の景清と云ふやつは、おれが切つてやるわいなう。
〽裾も短く武士のたね、さすが逆手にかけ行くを、母はあわてゝ抱き留め、
ト國松さすがを持ち奥へ行かうとする、おきせとめて、

きせ　これ〳〵國松、そなたの手に合ふ景清なら、母がさつきに殺すわいなう。

國松　イヤ〳〵、母様の手に合はずとも、おれが行つて殺してやる。

きせ　これはしたり、怪我してはならぬ〳〵。

國松　イヤ〳〵、きかぬ〳〵。
〽争ふ親子を止むる幸作、（ト國松行かうとするを、おきせ留める、奥より幸作出で、）

幸作　こりや待つた〳〵、ヲヽ子心にも景清を、父の敵と思ひ討たんとは、さすが武士の種程あるが、
相手が悪い、コレ待てと言うたら、まア〳〵待て。（ト國松をとめ、思入あつて、）こりや娘、そちや
おれが心底を、定めて不審に思ふであらうが、おりや最初から景清と睨んだゆゑに心許さず、親

切顔に有様は、聟の敵とおれも殺す氣、所詮わいらが手に合はねば、こりや坊主よ、景清めはおれに任せ、我が相手に相應な、敵の小倅小七郎、坊主が憎けりやけさぎりに、日頃習うたやつとうで、すつぱりと切つて來い、臆病未練な三保の谷が、氣を勵ますには屈竟一、必ずおくれを取りやるなよ。

〽脇ざし渡せば、（ト幕明きにおきせの持ちし脇差を渡す。）

國松　ヲヽ合點ぢや。

〽勇む我子の帶しめ直し、襷鉢卷國松は、一腰さし足忍び込む、子よりも二人は氣もあぶあぶ、

ト國松身拵へして奥へはひる、兩人思入あつて、

きせ　これ父さん、一人遣つては氣遣ひな、私も一緒に。

幸作　ハテわれが行つては肝腎の、國松が手柄にならぬわい。

きせ　それぢやと云うて、モシひよつと、怪我でもあつては。

幸作　サア怪我ぐらゐならよけれども、どうであいつは。

きせ　エヽ。

幸作　サア、相手を仕とめて、來居らうわい。

〽生死のさかひ物かげに、身をひそめたる間もなく、國松が切先に受太刀になりて小七郎、

トバタ〳〵になり、奥より小七郎國松、切り結び乍ら出て來る、おきせ寄らうとするを幸作とめる。

小七　こりや卑怯者め、おりや侍の子ぢやによつて、譯を聞かねば相手にならぬ。

國松　ヲヽ知れた事、おのれは平家の景清が子、源氏の侍三保の谷が子の國松が手並を見よ。

〽名のりかけ一寸去らぬ晴勝負、きッつきられつ親々の八島の戰ひ今爰に汗を流して打合ひしが、小七がいらつて打込む刃、受け外して國松が肩先より脇腹迄、うんと倒るゝ一聲に、幸作あわてゝ引分くれば、おきせは我子を抱き起し、

ト子役兩人立廻りの内、おきせ幸作いろ〳〵思入、トヾ國松きられる、おきせあわてゝ抱起す、幸作小七郎をとめる。

きせ　コレ國松、氣を慥に持ちや、國松イなう〳〵。

〽呼び生けられて起直り、はや絕え〴〵の息ながら、

國松　やらぬ〳〵。

〽やらぬといふも舌廻らず、血は瀧津瀨に眼はくれなゐ。

きせ　ヲヽ無念にあらう口惜しからう、親の恥辱を雪がさうと、科もない子を殺せしか、ヤイそこな子め、おのれはナア〳〵、ようも〳〵此樣に、むごたらしう切りをつたな、我子の敵、覺悟しや。

〽脇差取つて突きかゝるを、

トおきせ國松の脇差をとつて、立掛るを幸作とめる、此時奥にて、

三保　ヤレ待て女房、はやまるナ。

〽まてと聲かけ一間より、三保の谷四郎出て來り、女房を取つてつきのくれば、

ト奥より以前の三保の谷出來り、おきせの脇差をもぎとり突きのけ、

きせ　コレ四郎殿、そいつは景清の子ぢやわいな、ずた〳〵にしてもあきたらぬ奴。そこ退かしやんせ。

〽かけよる小腕ぐつとねぢつけ、小七郎が手を取つて、

トおきせを引付け、小七郎思入あつて、

三保　ハヽア三保の谷が悴を仕とめたまひし、あつぱれの御手の内、流石は平家の御公達六代御前にて渡らせたまふか。

〽上座へうやまひまゐらすれば、

ト三保の谷おきせをつきのけ、小七郎を抱へ、二重へ上り、上の方へ住はせ敬ふ。

きせ　イヤ〳〵、六代でも十代でも、我子の敵のがしはせぬ〳〵。

〽かけよる女房はつたとねめつけ、

トおきせ寄るを三保の谷きつと思入。

三保　ヤア敵とは誰が事、忰國松を殺したは、現在親の國俊なるわ。

きせ　エヽそりや又何で、どういふ譯で。

三保　ホヽヲ、合點が行かずばとつくりと、忰が持つた刃物を見よ。

〽云ふにおきせは脇差を、見るよりびつくり、（トおきせ脇差をよく〳〵見てびつくりなし、）

きせ　ヤ、こりやこれ刃引、ヤヽヽヽ。

〽はつとあきれて親夫の、顔恨めしげに打守り、

エヽ胴慾な國俊殿、父さんも聞えませぬ、こんな物あてがうて、承知で孫を殺すのか。

〽こんなつれない祖父親を、持つたそなたが因果ぞや、悔しからうがあきらめて、

迷はず成佛してくれよ。

〽可愛や犬死さす事かと、夫を恨み現在の我親ながら鬼か蛇か、無得心なとどつと伏し、前

後不覺になく涙。（トおきせ國松を抱き、愁ひの思入。）

〽歎きをよそに、國俊聲をかけ、（ト三保の谷もちよつと愁ひのこなしあつて、氣をかへ、）

三保　イヽヤ犬死ならぬ國松は、六代御前の御身代り。

きせ　ヤヽ、何と。

三保　サ、六代御前の身代りに、我子を立てねばならぬ仔細、申し聞かせん承れ。

ト誂への大小入りの合方になり、

去る彌生初めつかた、平家追討の出陣に、忝くも頼朝公、ひそかに我を召させられ、我日の本の賢人たる、小松殿の子孫をば、波の哀れや西海に、沈めん事のいたはしければ、平家を討てと法皇の、逆鱗強くましませば我助けよとの指圖はならず、汝よろしく計らふべし、まつた平家の武士にて、我家來にほしき者は、惡七兵衛景清一人、モシ頼朝に仕うるならば、命を助けつれ歸れと、ひそかに君より我への御諚、何萬人ある御家來の其内にて我お見出しに預かりしは、

〽心魂に徹して有難く、

扨こそ八島の戰ひに、當の敵たる景清に、後ろを見せしは見のがして、源氏の味方につけん爲、それと知らねば世の人は、臆病未練とさみなせども、

〽この三保の谷が心底を、御存じあるは海内に、鎌倉殿只一人、殊に此程東大寺にて、政子の方のお詞に、一の谷にて討死ありし、惟盛卿は是非なけれど、せめて御子の六代御前、首討つて來い助けよとは、身代り立てよとの謎なりと、察せし乍らも敵方の六代御前の身代りに、死んでくれとは現在の、

〽我子乍らも云ひかねて、

所詮女房に申したとても、得心はせまじと思ひ、舅殿に仔細を語り、悴を討つたはかくの仕儀、邪險な者と思はうが、武士の家に生れた不運、お主の爲に戰で、討死したとあきらめよ。

〽義を鐵石と武士の、泣かぬ涙は尙百倍、始終を聞いて女房が。

ト三保の谷よろしく思入、おきせ涙を拭ひ、

きせ　そんなら云ひ合して身代りに、殺す覺悟であつたかいなア。さうならさうと有樣に、なぜ云うては下さんせぬ。私も武士の女房ぢやもの、何の留めよう留めはせぬ。これ國松、そなたの最期はお主へ忠義、犬死とばし思やんな。

〽云へど聞えぬ手負の耳、一途にこつたるをさな氣の、

國松　エヽ、口をしい、大事の勝負を仕損じたゆゑ、猶父樣に笑はれうと、それが悲しうござるわい

なう。

〽まだ其子にぢゞ樣が弱い奴ぢやと叱らうが、堪忍してと子心の、苦しき中のはら〳〵涙、見る幸作はたまりかね、（ト國松よろしく苦痛の思入、幸作落涙なし、）

幸作　ヲヽ、誰が叱つてよい者ぞ、其けなげな魂で、成人したら類ひなき、よき弓取に成らう者、十やそこらで死ぬ程なら、なぜ利口には生れしぞ、可愛や耳が遠はなつたか。

きせ　これぢゞ樣はな、卑怯者ではない、強い侍の子ぢや程に、氣を落さずに死んでたもや、ヤ。

〽云ふもおろ〳〵涙聲、今際の耳に傳へてや、

國松　アイ、嬉しうござる。

〽と合す手を、血汐の紅葉はら〳〵と、流るゝ涙せきとめて、

ト國松苦しみ乍ら手を合せる、幸作落涙のこなし。

幸作　アヽ、年は行かねど侍の、種程あつてけなげな坊主、明けても暮れても祖父樣よ、きり合せうとせがむゆゑ、怪我させまいと此間、こしらへてやつた刀引の脇ざし、それ故に不覺をとり、子よりも可愛い一人の孫を、殺す樣な胴慾な、おれを今際の際迄も祖父樣よ〳〵と、云うてくれたか可愛いやなア。

〽歎けば共に三保の谷も、

三保　こりや國松、そちが命をおとせしゆゑ父が役目の功もたつたぞや、アヽ君に忠義親に孝行、思へばけなげな奴ぢやナア。

〽千萬云ひ度き數々を健氣な奴と一言に、恩愛籠る親子の別れ。

きせ　これ國松、父樣ぢやわいなう。目は見えずともお暇乞ひして。

〽抱き起せばにつこりと、笑ひこぼるゝちご櫻、夜半の嵐に散りて行く。

トおきせ國松を抱起す、國松よろしく落入る。

〽母は死骸にいだきつき、（トおきせ國松にすがり、）

これ、國松いなう。

幸作　坊主やアイ。

〽聲をばかりに泣叫ぶは、理りせめて哀れなり、（ト兩人國松をおし動かし、泣きふす。）

〽國俊心はけまして、

三保　こりや女房、千萬云うても返らぬくり言、涙をこぼす其の手間で、奥へ伴ひ香花とれ。サ親人にも、早く〱。

〽云ふに詮方なく涙、幸作なきがらかき抱き、

幸作　サア、娘來やれ。

〽塒へつれて親鳥が、冥土の小鳥なく／＼も、翅かはして入りにける。

ト幸作國松を抱き、おきせ附添ひ奥へはひる。

〽後に三保の谷若君いだき、一間に向ひ聲張り上げ、

三保　ヤア／＼景清、頼朝公の御仁心、定めし肝に銘じつらん。今より心改めて鎌倉殿へ隨身せよ。

〽云ひ捨て一間へ入りにける。（ト三保の谷小七郎を抱き、上手へはひる。）

〽折こそよけれと薩摩五郎、忍び／＼に此家の門、外面に窺ひ相圖の呼子、吹立つれば惡七兵衛景清が、出立つ姿は衆徒づきん、藤繩目の大鎧小手臑當、上に衣の玉だすき、白柄の長刀かいこんで、若君守護なし出でたる形相、あつぱれ一個の良將たり。

ト此時、時の鐘になり、花道より以前の薩摩五郎出で來り、門口にて呼子を吹く、よき程に奥より景清陣立、衆徒の拵へにて、六代の子役を抱き、片手に大長刀をかひ込み出來り。

景清　待ちかねたり薩摩五郎、シテ／＼首尾は、何と／＼。

五郎　ハツ、大願成就の時節到來、今宵政子のもてなしにて、女房に酌とらせ、酒宴に長ぜし頼朝、

ことに付添ふ諸大名、大半沈醉なしたる樣子、此虚に乘じ片時も早く、御出陣あつて然るべう存じます。

景淸　ムヽ、上首尾々々。

〽云ひつゝ一間に打向ひ、

イカニ三保の谷、此の景淸が武勇におそれ、源氏の味方に引入れんと、恩をかけたる今の仕儀、悅ぶ者もあるべきが、景淸ばかりは恩にきぬ。今の內に賴朝が、素首取つて返禮せん。イザ六代御前にも、親御のかたき一門の仇、初太刀を遊ばせ。それ、御供申せ。

五郞　畏つてござりまする。

〽直に若君負ひまゐらせ、（ト六代を背負ひ）

萬事の手配り、拙者は是より。

景淸　いそふれ五郞。

五郞　ハツ。

〽飛ぶが如くに、（ト五郞逸散に向うへはひる。）

〽後打見やり景淸は、長刀かい込み行く折柄、思ひがけなき一間の內、ハツと女のたまぎる

聲、流石の景清仰天し、障子蹴放し見てびつくり。

ト景清行かうとする、此時上手屋體の内にて、ハツと聲して障子へ血汐かゝる、景清驚き障子を明け放す、内に衣笠自害して居る、景清びつくりして介抱なし、

景清　そちや女房、何ゆゑ自害致せしぞ。

衣笠　私の死するは、あなたのお爲め。

景清　ヤ、何と。（ト尺八入りの合方になり。）

衣笠　御一門の仇敵、討たねばならぬ頼朝は、仁義を守る情の武士、現在敵を助けんと、六代御前の身代り立てさせ、誠の道をたて通す、今を盛りの頼朝に、傾く運の景清殿、所詮刃向ひたまふとも、御本望は思ひもよらず、どうぞお心ひるがへしてと妾がいか程云うたとて、お聞入れない常の御氣質、それゆゑ自害致したは、源氏方への申し譯、一旦受けたる恩返し、モウ頼朝に義理もなく、さすればあなたの心のまゝ、御一門の仇を報じ、たとひ未來は修羅道の、苦艱をともに受くるとも、何の厭はう厭ひはしませぬ。惡と異名をとり給へば、末の世迄も惡人と、よし世の人に云はるゝとも、お主の無念を晴らしてたべ、足手まとひの衣笠が、自害を門出の血祭りと、祝うて出陣遊ばしませ。

景清 〽と末期にみれん殘さぬは、さすがに武士の妻なりき、（ト此内よろしく苦痛の思入。）
ホヽヲ出かした女房、今にぞ當の敵たる、頼朝の首討ちとるを、草葉の蔭より待つて居やれ。

衣笠 嬉しうござんす。

〽云ふが苦しも斷末魔。

これが此の世の。

景清 いでや苦痛を、助けてくれん。

〽長刀かまへ立上れば、手負は西に打向ひ、南無阿彌陀佛と諸共に、首は前にぞ落ちにける。

ト衣笠合掌する。景清首を打落す、誂への切首出る。

此上はさつま五郎が今宵の知らせ、片時も早くかしこへ立越え、日頃の本望、おゝそれ。

〽勢ひこんで行く折から、三保の谷一間を走り出で、

ト景清行かうとする。奥より三保の谷陣立のなりに着かへ、つか〳〵と出て、

三保 ヤア〳〵景清、妻が自害に心亂れ、敵に後ろを見せるは卑怯、返せ戻せ。

〽返せ戻せと大音聲、（ト軍扇にて招く、景清きつと見て、）

景清 さ云ふ汝は、三保の谷なるか。

三保　待ちうけたる、惡七兵衞景清。
景清　望む相手の四郎國俊。
三保　八島の浦の戰ひより、
景清　別れ／＼の鉢鍛、
三保　それは西海、今日はまた、
景清　再び出逢ふ再會に、
三保　イデヤ此の場で、
兩人　勝負を決せん。

〽互ひに打物上段下段、撓へば受けとめ切返すを、心得退つて附入るさそく、追ひつ追はれつ切り結ぶ刃の音はかツち／＼、まさり劣らぬ勇者と勇者、更に果しも中の間より走りまどひて幸作が、心もあぶ／＼あぶなさも、怖さも忘れ一生懸命、火花を散す其中へ、老の捨身の捨小舟、漂ふ胸を押なでゝ。

ト此内兩人よろしく立廻り、よき程に奧より幸作兜を持出て、兩人の中へはひり、邪魔になる仕組の立廻りあつて、幸作よろしく双方をとめ、

幸作　御兩所共に、まアく待つた。

景清　イヽヤ、さり難き武門の意地。

三保　御身達の存ぜぬ事、

景清　とめずとそこを、

兩人　のいたく。（ト また立ちかゝるを留める。）

幸作　ササ御尤もではござりまするが、私が此様におとめ申すは、最前御兩所からお誂への、出來上つた此兜、

〽持ちたる兜を前にさし置き、（ト件のかぶとをよき處におき。）

是を申して見ませうなら、鉢鐚は源平兩家、確執の其中でも、どうぞして景清殿を、源氏の味方に付けたいといふ頼朝公の思召し、其又頼朝公を平家の仇と付覘ひ討たんと思ふ景清殿、互ひの心も放れく、其放れたを此様に、繼合して和睦あるやう、ついだ兜のはなれぬ御思案、どうかなされて下さりませ。

〽兜によそへ武士を、さとすも業の徳なりき。（ト 幸作よろしく思入。）

〽兩士は實にもと打ちうなづき。（ト 三保の谷、景清思入あつて、）

景清　何さま事を分けたる親仁が頼み、無下に致すも本意ならねば。
三保　此場は此儘見のがすとも、和睦結ばぬ其内に、モシ運盡きて討たれなば、
景清　其時こそは此首を、三保の谷汝に進上致さん。
三保　しかと申受けるぞよ。
景清　念には及ばぬ。
ト勇士の約定、聞く幸作は横手を打ち、（ト幸作感心のこなし。）
幸作　アヽそれでこそお二人とも、花も實もある勇者と勇者、一旦此場の事さへ濟まば、是で親仁の詞も立ち、それから先は先の事、
三保　討ち討たるゝは互ひの運命、
景清　天に任せて此の場は此儘、
幸作　左樣ござらば御兩所樣。
三保　景清殿、
景清　國俊殿、
兩人　重ねて面會、

〽心詞の裏表、一禮なして敵味方、
ト三保の谷景清月禮なし、景清門口へ出る、三保の谷きつと立掛るを、幸作へだて、門口をぴつしやりしめる。

三人 さらば、

〽わかれ／＼て、
ト三重カケリにて、よろしく、

ひやうし 幕

大詰　南都東大寺大佛殿の場

〔役名――惡七兵衞景清、秩父庄司重忠、榛澤六郎成清、妙珍幸作、本多治郎近常、衆徒葛城坊、同蘆原坊、同猿澤坊、同若狹坊、役僧雲念、公達六代御前、立廻りの士卒。相澤妻外山、稻毛妻秋篠、新谷妻柏木、愛甲妻小笹、臼杵妻眞弓、安西妻花園、三保の谷妻おきせ。〕

(南都東大寺大佛殿の場)――本舞臺一面に廻廊の道具幕。上手に役僧雲念、袈裟衣の拵へ、下手に○△

の腰衣の所化二人控へ居る、此の見得時の太鼓にて幕明く。

雲念　いかに方々、世に有難きは源氏の頭梁、當寺に對して佛敵たる、平家の一門を討亡ぼし、大佛殿を再興あつて、則ち今日供養の法會、忝くも右大將頼朝公を始めとして、大小名のお入りなれば、粗相なき樣心を付けられい。

○　其儀はかねて仰せゆゑ、我々共も代る／＼、七堂伽藍は云ふに及ばず、

△　庫裏庭中のすま／＼迄、殘る隈なく院内を、非常の見廻りいたしてござる。

雲念　それは御苦勞千萬でござる。もはや樂人揃ふ上は、供養の法會に間もあるまじ。

○　警固旁々我々は、

△　是にて暫時休息いたさん

ト音樂になり、花道より相澤の妻其他何れも打掛なりにて、花手桶へ花の枝を入れ、是を持ち出で來り、花道へ居並び、

外山　頼朝公には御願望にて、久々絶えし大佛殿を、御再興遊ばして、

秋篠　其の御供養に鎌倉より、はる／＼遠き大和路へ、御臺所の御參詣。

柏木　私共もお供にて、思ひがけなくとも／＼に、

小笹　奈良の都の名所を、日毎に三輪や春日山、
眞弓　紅葉なけれど鹿の音に、秋はさこそと忍ばるゝ、
花園　立田に近き山々の、花に其名も東大寺、
外山　吉野をはじめ種々の、詠めつきせぬ、
六人　所ぢやなア。（ト是にて舞臺の三人出迎ひ。）
雲念　これは〳〵諸侯方の奥方には、ようこそ御參詣、もはや御臺所のお入りにござりまするか。
外山　程なく是へ御參詣に、
六人　ござりまする。
雲念　何は兎もあれ、まづ〳〵是へ、
外山　左樣なれば、
六人　お許し下され。（ト音樂にて舞臺へ來る。）
外山　今日御供養の御法會に、御臺所の仰せを受け、お先へ參りし私は、相澤彌五郎が妻外山、
秋篠　稻毛三郎が妻秋篠、
柏木　新谷荒次郎が妻柏木、

小笹　愛甲三郎が妻小笹、
眞弓　臼杵七郎が妻眞弓、
花園　安西彌七郎が妻花園、
外山　たづさへまゐりし一本は、今を盛りの八重櫻。
秋篠　薫りは御寺に名も高き、蘭奢にまさる山櫻、
柏木　今日の法會に紫の、雲井櫻も棚引きて、
小笹　お經の聲も墨染に、虚空に花の普賢像、
眞弓　七堂伽藍がら〳〵と、尊き法の庭櫻、
花園　其家櫻家々より、今日の供養のお供へ物、
雲念　何れも花の色香深く、まさり劣らぬお供へ物、誠に見事な事でござる。
外山　シテ御供養の時刻には、餘程の間がござりまするか。
雲念　最早御供養の時刻、追付け、
○　奥様方には御假家へ、
△　御入りあつて御休息。

外山　仰せに任せ假家にて、御臺様を、

六人　お待ち申さん。

雲念　左様なれば何れも方、

外山　御苦勞乍ら、

六人　御案内。

雲念　かう、お出でなされませ。

トやはり音樂にて、雲念先に、女形六人所化附添ひ上手へはひる。知せに付き廻廊の幕を切つて落す。

本舞臺向う六間高足の二重、石垣の蹴込、朱塗りの丸柱、裾眞鍮の彫物の金物附き、左右一間上青漆塗りの立格子、下彩色唐花の彫物、欄間同じく彫物、大佛殿といふ額をかけ、瓦屋根の小口を見せ、紫笹龍膽の幕を張り、二重正面、小高き青漆塗りの矢來、此向う大佛の蓮座を見せ、前側欄間寄り純子摺込みの段幕をおろし、上下同じ段幕にて見切り、此後に鑓、長刀笹龍膽、鎌倉大名の紋附きし幟を立て、總て南都東大寺大佛殿の體、音樂にてよろしく道具廻る。と本行の鳴物により、誂へ下

座の謠、竹本淨瑠璃の掛合になる。

謠〽春日山鹿立つ峰の夜あらしに、梢の花や散りぬらん。

竹〽上總七兵衛景清は、こたびの供養に賴朝を討つて蒙霧を散ぜんと、いで立つ衆徒の僞姿、

謠〽肌身に着たる藤繩目重金物の大鎧草摺長にざつくと着、上に衣の玉だすき、袈裟を結んで鉢卷し、謠〽敵を冥土へ送りやる十王領の臑當に、竹〽我身を守護の毘沙門籠手、謠〽家重代の痣丸を、結び上げて腰に帶び、竹〽人は白柄の長刀を小わきにかい込み、見渡せば、

ト此內よき程に、花道より景清、藤繩目鎧小手臑當附太刀、草鞋、此上へ墨衣を着、袈裟頭巾を冠り誂への長刀を持ち、揚幕より出で、少し來て本舞臺をきつと見て思入あつて、六法にて花道いつもの所へ來て、よろしく思入、はるか後より、葛城坊、蘆原坊、猿澤坊、若狹坊、衆徒の拵へ、十手を持ち窺ひながら出る。

謠〽廻廊諸堂こと／＼く家の幕張兵具を飾り、警固きびしく見えたりける。

竹〽音せで通らばあしかりなんと、處々に彳み大音上げ、（ト此內景清よろしく思入あつて、）

景清　宿直の衆やおはする、非常の警固怠りたまふな。

謠〽呼はり／＼かけ通る、爰ぞ右幕下賴朝の假家とおぼしき幕張に、

竹へサア仕果せし嬉しやと、近附く所へうしろより、
ト景清後を振返る、四人下に居る、景清舞臺へ來る、四人附いて來る、景清正面の石段へ足をふみかける、此時四人つかくと取巻き、

葛城　ヤア、怪しき曲者、

四人　そこ動くな。

景清　何と。

葛城　最前より窺ふ處、衆徒の姿にやつせども、

蘆原　下に鎧を着せしは、たゞ者ならぬ其の出立、

猿澤　君の假家へ近寄るは、正しく平家の殘黨ならん。

若狹　繩打つて御前へ引く、サア尋常に、

四人　腕廻せ。（ト景清きつとなり、）

景清　ヤア繩かゝれとは推參なり、汝等如き賣僧めらに、搦めとらるゝ者ならず、妨げなさず控へ居らう。

葛城　ヤア賣僧とは過言なるぞ、斯くいふ我々四人の者は、

蘆原　非常を守る南都の衆徒、
猿澤　怪しき者と見たからは、
若狹　からめ捕つて手柄になす、
葛城　ヤア〳〵、何れも出合召され。
大勢　ハア。（ト下手にて、）
景清　何を小しやくな。（トきつと見得。）
〽長刀追取り立向ひ、多勢を相手に切り立てたり。
ト四人十手にて打つて掛る、長刀にてちよつと立廻り、謠の切より誂への鳴物になり、立廻りよろしくあつて、鎧下の立廻りの人數出で、大まくしの立廻りにて、皆々上手へ逃げてはひる。
〽さしも固めし警固なれども、四方へパツとぞ逃げにける、中に若武者進み出で、
ト此時上手より榛澤六郎、胸當小手臑當、袴股立、大小たすき鉢巻りゝしき拵らへ、十手を持出る、下手より本多次郎、同じ拵へにて、景清に詰めより、
榛澤　ヤア頼朝公の大法會に、院内騒がす慮外者、
本多　此儘爰を通さんや、目に物見せん、

兩人　覺悟なせ。

景清　ヤア又しても〳〵、蛆虫めらが入らぬ留立、名もなきわいらに搦めとられんや。

榛澤　ヤア名もなきとは、誰が事、かくいふ我々兩人は、

本多　秩父の庄司重忠の家臣、

榛澤　榛澤六郎成淸、

本多　本多の治郎近常、

榛澤　サア、本名名のつて、

兩人　繩にかゝれ。

景清　小しやくな事を。

ト誂へ大小の鳴物になり、景清は長刀兩人は十手にて、立廻りよろしくあつて、

竹〽打つてかゝるを身を躱し、ひたりと飛びし手許より忽ち勝負を見せにけり。

ト榛澤、本多、景清を引入れる心にて上手へはひる。景清進み行かうとする途端、音樂を打込む、是にて景清眞中へ來り、きつとなつて、

あの音樂は供養の初まり、扨は時刻が早かりしか、一先づ此場を引上げん。（ト景清思入あつて、）

浄〽奈良の都の時めけど、我はそれには引かへて、敵を打たんと計略を思ふ心はおのが名の、
竹〽惡七兵衛景清と、餘所には人やそれと見ん。浄〽實に我乍ら思はざる姿に今はならの葉の
時雨ふりしく天が下に、身を隠すべき便りなき、
ト此内景清よろしく思入あつて、長刀を小脇にかいこみ、悠々と花道へ行く、正面幕の内にて、

重忠　景清待て。

竹〽聲かけられて思はずも、あたりをきつと見廻し〳〵、
ト景清ぎつくり思入、あたりを見廻し、

景清　ムヽヽ聲あつて形なきは、我を呼ぶにはあらざりしか、覺えなき名に驚いて、思はぬ氣後れ、ハハヽヽヽ人なくて恥かゝざりし
竹〽一人言して行く處を、又も此方に大音聲、（ト景清思入あつてまた行きかける、幕の内にて、）

重忠　イヤサ、惡七兵衛景清待て。

景清　又もやかしこで景清と、呼びとゞむるは、誰が事なるか。

重忠　ヤア、其の名を隠して逃げ行くは、近頃以て卑怯なるぞ、ハヽヽヽヽ。

景清　何と。

竹〽今は景清是迄と、アラ口惜しや殘念や、大佛供養を幸ひに藤縄目を三衣に隱し、衆徒に出立ち賴朝を討取らんずと思ひつるに。

早早くも我と悟りしか、景清待てと聲かけられ、此儘引くは弓矢の恥辱。

竹〽たとひ賴朝鐵洞の內に隱れて、源氏の奴輩何萬騎にて圍むとも、

シヤ、何程の事あらん。

竹〽いで物見せんと云ふまゝに、

トつッかけになり、景清つか〳〵と舞臺へ來る。爰へ士卒二人掛るを、左右へ投げのけ、

竹〽頭巾をかなぐり仁王立、

ト頭巾を取って投げる、百日かづらにて長刀をつき、きつと見得、此の時花道の內にて、

重忠　草も木も、我大君の國なるに、源氏に敵たふ不敵の大膽。

景清　ヤ。

重忠　惡七兵衞景清へ、右幕下賴朝、

皆々　見參々々〳〵

景清　何が何と。

〽竹 持ちたる長刀引きそばめ、寄らばきらんず勢ひなり、

ト景清長刀を構へきつと見得、知せに付き、正面の幕を切つて落す、眞中に重忠金烏帽子狩衣さしぬき、附太刀、頼朝の拵へ、左右に幕明きの女形六人、紅のたすき鉢巻にて、長刀を持ち控へ上下へ以前の榛澤本多出て居並ぶ。

〽竹 景清きつと打見やり、

景清　ヤ、こりや頼朝と思ひの外、秩父の庄司重忠よな。

重忠　イヤ重忠とは愚か〳〵、斯く征夷大將軍の御裝束を着すれば、則ち我は源氏の長者、右大將頼朝同然。

景清　何と。

重忠　平家の一門討亡ぼし今一天下の棟梁と、仰がれたまふ頼朝公、たとひ鬼神の勇あるとも、景清如きが首とらんは、蠅打つよりも易けれど、よく〳〵汝が忠心を君にも感じたまへばこそ、今日迄も一命を助け置かるゝ寛仁大度、

榛澤　源氏の世に居て源氏を狙ふは、土を食ふきうぢ同然、

本多　所詮及ばぬ運命と、思ひあきらめ鎌倉殿へ、

皆々 降参せよ。
竹〽降参せよとつめかくれば、不敵の景清あざ笑ひ、（ト景清思入あつて、）
景清 エヽ降参なぞとは汚らはしい、關八州の源氏の奴輩、蛆蟲とも思はぬ景清、力づくなら負けねども、頭勝なる頼朝が、運には所詮叶はぬか、計る〳〵と思つたも、却つてわいらに計られて、鶍のはしとなつたる上は、平家の仇たる源氏の奴輩、切つて〳〵切死になさん。
竹〽勢ひ込んで詰めかくれば、（ト景清きつとなる、上手にて、）
幸作 ヤレ待たつしやれ、景清殿。
竹〽云ひつゝ此方の幕張より、若君抱き立ち出る幸作、（ト二重上手へ幸作、六代を伴ひ出る、）
景清 ヤア我を待てと止めしは、兜師の幸作なるか。
幸作 サアお止め申すは外ならず、今源氏方へ刃向ふ時は、此の若君の御命に、かゝはりますゆゑ景清殿、思ひ返して降参あれ。
景清 扨は我に降参させんと、六代御前を奪ひしよな。
重忠 ホヽヲそれこそは唐土の諸葛孔明孟獲を七度とらへて七度助く、まツその如く六代御前、一旦源氏の手に入りしを、汝に奪ひとらせしは、恩義をかくる源氏の仁心、

榛澤　まつたとくより其方が、味方となつて入込みし、薩摩五郎と名のりし者は、
本多　則ち主人の家臣にして、狹山七郎と申す者、
景清　すりや味方と思ひし薩摩五郎は、廻し者にてあつたるか。
幸作　モウ斯うなれば是非がない、早く降參なされませ。
景清　エヽ汚らはしい、源氏方へ、何しに降參いたさうぞ。
榛澤　降參せずば此場にて、六代御前の命を絕たうか。
景清　サア、それは。
本多　但しは心ひるがへし、降參なすか。
景清　サア、それは。
榛澤　手向ひなすか。
景清　サア、
重忠　降參なすか。
景清　サア、
重忠　サア、

皆々　サア〳〵。

重忠　景清返事は、な、な、何と。

〽竹何と〳〵と詰めかくれば、さしもの景清人質に、とかう詞もなかりける。

ト景清ぢつと思入あつて、

景清　なき一門へ義理立たず、家來となつてすゑ〴〵迄、後に殘りし公達を守立て討死せしを、

重忠　供養あるが主人へ忠義、

六人　景清殿。

〽竹云ふに無念の齒がみをなし、

景清　エヽ、六代御前を人質に、我を源家へ引入れんとは、卑怯未練の庄司重忠、

重忠　ヤア人質とは何のたは言、平家の公達六代御前は、賴朝公の嚴命にて三保谷四郎が討取つたり、

景清　何と。

榛澤　ヤア〳〵、それに控へし國俊殿の內室、六代殿の首級を是へ。（ト下手にて、）

きせ　ハア。

〽竹はツと答へてこなたより、泣く〳〵首桶たづさへ出で、

ト下手より前幕のおきせ首桶を持ち出來り、

これ景清殿、六代御前の此首を、不便な物ぢやと見て下され。

竹〽涙ながらに我子の首、蓋とりのけて差出せば、（トおきせなく〳〵切首を見せる。）

景清 すりや、此の首級を。

きせ 夫三保の谷四郎殿が、現在我子の、イエサ、我子と同じ年ばいの、六代御前を討ちとりました。

景清 何にも云はぬ、忝い、

きせ ハア。

〽はツとばかりに泣きふせば、（トおきせ泣伏す。景清六代を見て、）

景清 シテ又それなる稚子は。

重忠 平家の血筋をたち切つて、鎌倉殿の世繼の君、

幸作 景清殿聞かれしか、テモ有難い御計らひ。

〽老いの悦び景清も、思はず知らず頭を下げ、

景清 ハヽアかく迄厚き仁心の、源氏の大將頼朝に、引かんず弓のあらばこそ、さはさりながら今日迄凝りかたまつたる七兵衛、二君に仕へん所存はない、腹かツさばくが順道なれど、八島の浦より

御親子共、御行方知れぬ主君を尋ね、和睦を結ぶそれ迄は、
〽衣姿を幸ひに、六代御前や女房の追善供養と云ひなして、
景清が命景清が、暫く預かり立かへる。
〽勇氣も折れて立上れば、

榛澤　イヤ、これ〳〵景清殿、和睦を結ぶそれ迄に、
本多　モシ運盡きて討たれなば、
景清　ヲヽ、其時こそは此の首を、重忠殿へ進上申す。
幸作　アヽそれでこそ義を忘れぬ。
きせ　花も實もある誠の武士。
重忠　また重ねての再會迄、
景清　秩父の重忠、
重忠　上總七兵衞、
皆々　景清。
景清　かた〳〵。

皆々　さらば。

竹〽霧立ち隱す春日山、しげみに飛入り落ちけるが、又こそ時節をまつべけれと、虛空に聲して落ちにけり。

ト太鼓入り、本行の鳴物へ遠寄を冠せ、上下へ軍兵大勢出て、引張りの見得にてよろしく、

ひやうし　幕

大佛供養（終り）

東京日〻新聞

日新實說寫

本月一日平塚の浪人堀越甚内の父を秩父屋半左衛門小鳥を打んと狙を損じ人口堤を人知れず立退跡へ來る甚内酒に長じて長次へ無心古主へ異見眞實も通り掛りし船川の何某劍術の師とて物堅き石濱右膳の娘の淺茅門三郎が連退を計らず聞て半左衛門三年このたの今月今宵人を殺せし大罪をせめては謝せんと立聞ば七十圓の金故に命を捨ると聞し故札を與へて名を言ず別れし跡へ窺ふ甚内半左衛門を切殺す後へ來掛る半次郎下男と共に驚木村戸長鶴木新十郎が懐中せし七十圓の番號調べ計らず爰で大磯にて淺茅門三は人力の車をおりて行過る跡に悄り追掛て渡せば禮に十兩を置捨にして逃延る下男の徳介半次郎又人力に乗移り心急にて取落せし煙草の無手手に離る番號合し金札を詮議に今行連退の追手に苦もなく晴渡る甚内が身の上故鄉の東の様子懐しく新聞を見て打驚き我重代の刀を賣つてと心は逸れど何とせん電信を掛けたすけんと願とゞいて蒸汽船本地へかへり善惡の三年めぐりてあきらけく御見物の眉をひらく狂言の本體

『鳥越甚内』は明治六年十一月、作者五十八歳の時、守田座に於て稿下された。『大佛供養』の二番目狂言であつた。「新聞物を舞臺にかけたるは是れが嚆矢なるべし、作者河竹新七の友人條野傳平落合芳幾など孰れも同社に在つて執筆なし居りし故新聞の爲芝居の爲所謂廣告的に演じたるものならん」(續々歌舞伎年代記)とある如く、作柄も至極甘いものであつたが、明治の新社會を舞臺とした第一作、散切芝居の第一作と言ふべきものであつた。然し作者の抱負に拘らず、大好評を以ては迎へられなかつた。たゞ左團次の車夫正直長次が當り役と言つてもよい出來ばえであつたといふ。

書きおろしの時の役割は坂東彦三郎(浪士鳥越甚内)、市川左團次(人力引正直長次)、澤村訥升(書生船岡門三郎)、坂東しう調(石濱の娘淺茅)、中村翫雀(秩父屋半左衛門)、市川子團次(秩父屋半次郎)中村仲太郎(秩父屋の下男德助)、坂東喜知六(赤堀大藏)、中村鶯助(黑澤傳八)、尾上菊四郎(刀屋五郎兵衛)、中村翫六(秩父屋の手代與七)等であつた。

挿繪にしたのは書きおろしの時の繪草紙の一部分である。

大正十五年八月下旬

校訂者

箱根の場



東京日新聞（鳥越甚内――三幕）

序幕

両國廣小路の場
本所一ッ目橋の場

淨瑠璃　男形の絞扱帶
　　　　女姿の蝙蝠傘　濡露花袖褄（淸元連中）

〔役名――浪士鳥越甚内、戸長鶴木新十郎、書生船岡門三郎、澤田半左衞門、同忰半次郞、車夫正直長次、浪士赤堀大藏、同黑澤傳八、澤田雇人德藏、芋酒屋の彌太、車夫相の子半助、同めつたの百藏同呼込番藏。石濱の娘淺茅等。〕

（両國廣小路の場）――本舞臺一面の平舞臺、眞中に煉瓦石造り硝子窓のある電信局、上手に紅白の幡を立て、上下に疊んである葭簀の掛茶屋、上手に針金を引きたる柱を立て、後中村屋川岸を見たる東両國の遠見、總て西両國廣小路の體、爰に二人乘りの人力車を置き、百藏、番藏車挽きのこしらへにて摑み合つて居るを、半助同じく車挽きのこしらへにて取押へて居る、此の見得、施餓鬼船の題目太鼓にて幕明く。

半助　これさ〳〵、手前達はどうしたものだ、仲間同士で喧嘩をしては、御布告でも守らねえやうで、お上へ對して濟まねえから、まあ〳〵靜かにしろ〳〵。（ト是れにて兩人左右にほぐれて、）
番藏　なにさ、喧嘩を仕度くもねえけれど、あの野郎がおれの事を、たゞ取つたやうに言やあがるからそれから起つた此の喧嘩よ。
百藏　又惡く言はずにやあ居られねえ、年中此の土地で渡世をしながら、五十嵐の若い衆が湯に行く所へ車をすゝめ、臺の飯櫃同樣に直底を喰つたから、間拔けだと言つたがそれがどうした。
番藏　どうするものか、斯うして遣るのだ。
半助　これさ、待てといつたら待たねえか、手前達が其やうにあんまり往來ではびこるから、扱所から呼ばれて、此通り御箇條書が渡つたわ。（ト懷から本になつてゐる觸書を出す。）
百藏　なに、御箇條書とはどんな事だ。
半助　はて、無暗に車をすゝめたり、酒手をねだつて貰ふ事から、いろ〳〵とこつちの惡い事が書いてあるゆゑ、仲間の者へ漏れぬやう言ひ聞かせろと、此の通り一册書いて下すつた。
番藏　そいつア何にしろ恐れ入つた事だが、どんな箇條が出た事か、ついでに讀んで聞かせてくれ。
半助　今讀んで聞かせるから、謹んで聞くがいゝ。

百藏
番藏　東西々々。（ト淨瑠璃觸れを開き、）

半助　淨瑠璃名題、（ト淨瑠璃名題、太夫連名、役人替名を讀みしまひ、）こりやあ何だか、謎を見たやうな御箇條書だ。

百藏　清元々々としてあるのは、火の元を大切にしろといふ御布告だらうか。

番藏　相勤めまする役人とは、お役人さまを輕んじるなといふ事だぜ。

半助　何にしろ、こりやあ違つたやうだ。（ト懷を見て箇條の御布告書を出し、）お〻違つた〳〵、本當の御布告は爰にあつた。今讀んだのは今朝島原へ行く作者衆が、車へ落して行きなすつたから、屆けようと思つて持つて居たのだ。

百藏　いや狂言方へ屆けるより、清元々々と書いてあるから、直近所だらう、柳町の文字太夫の内へ屆けるがい〻ぢやあねえか。

半助　もう延壽太夫は柳町には居ねえ、疾に濱町へ越してしまつたから、横山町の家内壽の内へ屆けて遣らう。

番藏　そりやあさうと仲直りに、何處ぞで一杯やりてえものだ。

百藏　小大橋へ行つて飲むとしようが、仲人にはひつた者に、割前も掛けられめえ。

半助　そこは人力車は人力車だけ、手拭で鬮がよからう。

百藏
番藏　それがいゝ／＼。

ト三人の手拭を一緒にし、結んで玉をこしらへ鬮にして三人で引き、玉のある手拭半助の手へ殘る。

半助　南無三、おれが勘定方だ。

百藏　いや仲人は仲人だけ、

番藏　すんでに天窓を割られる所を、

半助　おれが一人で背負ひこんだか。

百藏　そこが名代の大頭だ。

半助　鷺助ぢやァあるまいし。

三人　さあ／＼、行かう／＼。

ト三人下手へはひる。やはり題目太鼓にて花道より赤堀大藏、黑澤傳八、袴大小下駄がけ、浪士のこしらへ、酒に醉ひたるこなしにて出來り、跡より彌太、紺の着附、前垂掛け、居酒屋の若い者にて附添ひ出來り、

彌太　もし／＼旦那、何處まで御一緒に參りますのでござります。

大藏　何處までゞもよい、行く所まで二人の跡を附いて來い。

傳八　是れから足の向き次第、フランスへ行くかイギリスへ行くか、其行先きはまだ分からぬ。

大藏　かねて洋行の志願あれば、これより異國へ押渡る積りだ。

彌太　もし、そんな御常談をおつしやらずに、行先きをおつしやつて下さりませ。

傳八　はて、まだ行先きは分からぬと申すに。

大藏　扨々手前もしつツこい奴だ、まだ跡から附いて來るのか。

彌太　附いて參りませんでどうしませう、御勘定を下さらぬ内は、何處までも附いて參ります。

傳八　その勘定は我々が、浪士仲間の隊長分、鳥越氏が諸事萬事會計方で賄ひなれば、甚内どのからお貰ひ申せ。

彌太　鳥越さまとおつしやるお方は、何處へお出でなされました。

大藏　足があつて行かれるから、どつちの方へ行かれたか、其番はいたさぬわえ。

彌太　もし大概になされませ、ついそこまで來いと言つて、三人して引摺り出し、途中で一人影を隱し勘定なら其人から取つてくれろとおつしやるのは、こりや言ひ合せでござりますな。

傳八　やあ、こいつが〳〵、言ひ合せとは誰がことだ、武士に向つて慮外な言分。

大藏　今一言申して見よ、其分には捨ておかぬぞ。
彌太　僅かばかりの勘定で、一緒に來いと引摺り廻され、たゞ置かれねえもよく出來た、御勘定を下さらねば、こつちでもたゞは置かれませぬ。
傳八　たゞ置かれぬとは、如何いたす。
彌太　はて、いはゞ喰逃げ同然ゆゑ、屆ける所へ屆けますのさ。
大藏　うぬ、さうぬかせば。(ト刀の柄へ手を掛け拔かうとして氣を替へ、)これさ若い者、そんなに勘定々々と、大きな聲で申さぬものだ、出來れば家へ屆けてやるから、今日の所は歸るがよい。
彌太　いえ〳〵、そんな欺しを聞いて家へ歸る位なら、生肴を抱へて置いて暇を潰して附いちやあ來ませぬ。
大藏　それゆゑ何も其方に、附いて來いとは申さぬわえ。
彌太　附いて來いとおつしやらなくつても、御勘定を下さらねば、仕方なしに附いて行きます。
傳八　やあ、最前より赤堀氏が種々と談判なさるのに、聞入れのなき素町人、達て過言を申すに於ては掴み料理の庖刀より寸の延びた大刀で、その素ッ首をぶち落すぞ。(ト傳八きつとなる。)
彌太　もし其強面は喰ひませぬ、見かけはけちな番公だが見世に吊した鮟鱇同樣、腹は大きな肝ッ玉、

何處へ行つても賣込んだ顏にあばたの芋酒屋　親仁橋から渡り人、力自慢の鬼熊で石燒豆腐のこつを覺え、鮪のさしみの厚作りも東京一の大橋の見世で年來苦しんで、金箔附の若い者、年中しらふを相手にしねえ氣違ひ水を賣る稼業、お前方に脅されて逃げるやうな意氣地なしとは、譯の違つた若いもの。さあ、勘定が出來ぬといふなら、わつちと一緒にお出でなせえ。

ト兩人の胸倉を取つて引立てにかゝる。

太藏　やい〳〵、おのれ、我々を何處へ連れて行くのだ。

彌太　何處へ行かうとわつちの勝手だ、行く所までお出でなせえ。

傳八　うぬ、武士に向つて憎い奴めが。

彌太　えゝ、喰逃げをして置いて、武士も絲瓜もあるものか。

トやはり右の鳴物にて、兩人の胸倉を取り花道へ引つぱつて行く、此時花道より、鳥越甚内五十日鬘、袴大小下駄がけ、浪士のこしらへにて、小楊枝を遣ひながら、酒に醉ひしこなしにて出來り花道にて、

甚內　こりや、赤堀黑澤には、往來中で見苦しい、如何めされたのだ。

大藏　おゝ鳥越氏でござるか、只今是れなる居酒屋めが不當な事を申しかけたれば、

傳八　斯くの如く兩人とも、引連れて參るのぢや。

彌太　何で不當な事を言ふものか、腹一杯飲み喰ひして、其勘定をしなさらねえから、居ける所へ連れて行くのだ。
甚内　だまれ町人、高が三分か一兩の端た金を拂はぬとて、武士たる者を手籠めになし、それにておのれ濟まうと思ふか。
彌太　濟むも濟まぬもいるものか、假令二朱でも喰逃げを、すれば武士だとは言はせねえ。
甚内　その勘定さへして遣つたら、兎やかう申すには及ぶまい、あれへ參つて拂つて遣はす。
大藏　すりや、勘定を、
兩人　鳥越氏が。
彌太　流石は頭は頭だけ、金を持つて居ると見える、そんならいよ〳〵勘定を。
甚内　拂つて遣はす、あれへ參れ。（ト右の鳴物にてみな〳〵舞臺へ來り、）
彌太　左樣ならあなたから、どうか勘定を下さりませ。
甚内　身共が拂ふ金といふは、一圓二圓の札ではない、今脫刀の世の中に斯く舊弊を捨てぬ我々、腰に帶せし延金の鞘を拂つて遣はすぞ。
彌太　えゝ。（トびつくりして氣を替へ、）大方そんな事だらうと、肚胸を据ゑて附いて來たのだ、さあ切れ

ろなら切つて見ろ。

甚内　面白い、よい覺悟だ、久しく人を切らねえから、どれ、延金を遣はさうか。

ト刀をすらりと拔く、これにて彌太びつくりして飛びのき、

彌太　あゝこれ〳〵、待つておくんなせえ〳〵、今言つたのは嘘だ〳〵。

甚内　嘘だと申すは、命が惜しいか。

彌太　惜しいとも〳〵、大事に使へば一生ある、大事な命を爰で取られてたまるものか。

大藏　それ程命が惜しいなら、

傳八　なぜ先刻より無禮をいたした。

彌太　實は此節お侍が人を切つた事がないから、拔く氣遣ひはないと思つて、氣の強い事を言つたれど、今拔かれてはこつちも拔けた。

大藏
傳八　なに、拔けたとは。

彌太　面目ないが、腰が拔けた。

甚内　はてさて、意氣地のねえ奴だ。

大藏　命を助けて遣はすから、

傳八　痴言いはずに、早く歸れ。

彌太　歸りますく、かへる一ひよこ身ぞくく、目がぐらく、お盲で歸りましよ、躄でさあ來なせえ、ちよくンがちよい。

トじやんじやかの唄になり、彌太腰の拔けたるこなし味にて、花道へ逃げてはひる。これにて甚内刀を納め、

甚内　いや、馬鹿な奴もあるものだ。

大藏　いやなに鳥越氏、舊幕よりは又一際當時は市中の政事が嚴しく、白刃を拔いて人を脅せば忽ち其身に科を受け、窮命せねば相成らぬ。

傳八　それらの邊を存ずるゆゑ、彼れが手籠めになつたる所、お扱ひにて事なく濟み、恥をかゝずにしまつてござる。

大藏　承はれば貴殿には、近々旅行なさるとあるが、何れへお出でなされるな。

甚内　知つての通り知行はなし、ほんの天竺浪人ゆゑ、朋友どもが何れへか出仕しろと周旋するが、西洋嫌ひのおれだから散切頭になるのがいやさに、到頭遊んで暮らしてしまひ、衣類は元より諸道具まで殘らず賣つてしまつた上、親類緣者を借り盡し最早飲代の當てがないゆゑ、甥が一人西

京に商法立つて當時では、盛んに遣つて居る樣子、先づこれを使つて京大阪へ、見物がてら行く
積りだ。

大藏　それはどうか我々も、お供いたして參りたい。

傳八　お連れなされては下さるまいか。

甚內　賴むとあれば連れても行かうが、今の始末を見るに附け、肚胸の惡いお手前達、身共が連には
覺束ない。

ト此以前下手より、長次白の筒ツぽう、花色の半股引、縞の半纏を引つかけ、人力挽のこしらへにて
出かゝり、此體を窺ひ、此時前へ出て、

長次　もし旦那さま、又御機嫌でござりますか。（ト甚內長次を見て、）

甚內　おゝ、誰かと思つたら、そちは長次か。

長次　此間から御近邊へ仕事で參つた歸りがけ、二三度お宅へ上りましたが、いつ參つてもお留守ゆゑ
掛違つてお目にかゝらず、是非お逢ひ申したいとお尋ね申して居りました。よい所でお目に掛り
ました。

甚內　むゝ、おれが行方を搜したとは、何ぞおれにくれる氣か。

長次　別に何もお上げ申す品といつてはござりませぬが、ちと内々で申し上げねばならぬ事がござりまする。

甚内　なに、内々で言ふことがある、然らば是れにて聞いて遣らう。（ト是れにて大藏傳八思入あつて）

大藏　扨は常々お話しあつた、以前お宅に仕へ居つた、

傳八　正直者の長次といふ、人力車は、彼れでござるか。

甚内　如何にも毎度お話し申すが、馬鹿正直な奴でござる。

長次　もしお二人さま、ちと内々で旦那さまにお話しがござりますれば、どうか此場を少しの間。

大藏　遠慮いたしてくれと申すか、然らば其内我々は、柳湯へでもはひつて來よう。

傳八　二階番の新造に小札の一枚も遣りたいが、野面で今日も押し上がらう。

大藏　然らば御用が相濟みましたら、

傳八　二階までお出で下さい。

甚内　用濟み次第、直に參る。

大藏　どりや醉醒しに、

兩人　入湯いたさう。（ト右の鳴物にて上手へはひる。）

甚内　こりや長次、何がおれに話しがあるのだ。

長次　まあ是れへお掛けなされませ。(ト車の内の蒲團を取つて床几の上へ敷き、甚内を掛けさせ、)

甚内　こりや一寐入り遣られるわえ。(ト床几の上へ臂枕にて寐ようとするを、)

長次　いえ、お寐かし申す事はなりませぬ。(ト甚内を抱きおこす。)

甚内　えゝい。(ト噯をする、長次酒臭いといふ思入あつて、)

長次　もし旦那さま、えゝお前さまはなあ。(ト誂への合方になり、)今私が改めて、申すには及びませぬが、元あなたは三筋町で舊幕時分、五百石お取りなされた御直參、大旦那さまの時分にはお金がしつかりあつたゆゑ、あの界隈の商人も鳥越さまは御内福ゆゑ、お拂ひがよいお屋敷と、酒屋をはじめ餅屋肴屋、日に三度づゝお窓下をせつて歩く豆腐屋までも、どうぞお出入りになりたいと、傳手を求めて頼んだものが、御病身ゆゑ大旦那が伊香保へ湯治においでの途中不慮の事にてお隠れから、間もなく世間も替りましたが、同じ舊幕のお武家でもお心懸けのよいお方は、此節立派な御身分におなりなされたと申すこと、それには引替へあなたさまは、僅か三年たゝぬ間に身代を飲潰し、それを氣病みに奥さまはお癪が嵩じて終に御病死、今では酒屋肴屋どころか豆腐一丁鳥越さまなら決してお貸し申されぬと、言はれる程に此年月あがつた酒はどの位、立派な酒

屋が出來ませう。まだそれでも上り足りぬか、今も今とて居酒屋から附馬を連れてござつて、刀を拔いて追ひ散らし、それで事が濟まうと思召すか、そんな所業をする者を捕へる爲に晝夜となく、市中をお廻りなされますれば、お目に止らば有無を言はせず捕へられるは知れたこと、是れが血氣の御壯年、十九や二十の御身なら辨へぬとも申されませうが、最う二十五の曉もいつか過ぎ行き三十の坂をお越しなされたあなたさま、少しは物の御分別も附かねばならぬお年配で、あらう事かあるまい事か天にも地にも掛替のない、たつた一人の後室さまをお里方へお預けなされて異見の仕手のないのを幸ひ、仕度い三昧なされますとは、如何なる天魔の魅入りなるか、えゝ、お情ない、お前さまはなあ。

ト長次涙をこぼし異見する、此内甚内床几へかけ坐睡をしながら、うつ向いて居て此時顏を上げ、

甚内　親身も及ばぬそちが異見、一々以て尤も至極、イヨ人力車の親玉々々。

長次　えゝ、あなたのお爲を思ふゆゑ、背イ腹揉んで申すのに、よい加減に馬鹿にさつしやりませ。

ト腹を立てし思入。

甚内　いや〳〵決して馬鹿にはいたさぬ、そちが異見の長物語り、教導師の說教を聞くより遙かに忝なく、甚内身に取り的中いたした。（ト誠しやかにいふ。）

長次　事も知らざる私が、愚鈍な今の御異見を、あなたはお用ひ下さりますか。

甚内　おゝ用ふるとも〳〵、何しにあだに聞くものぞ、今其方が申す通り、親父はいつぞや上州の伊香保へ湯治に參りし途中で病死といへど變死を遂げ、母は身共へ愛想をつかし遂には里へ歸つてしまひ、師匠と賴む堀田原の先生には破門され、伯父や伯母はいふに及ばず親類一統に見限られ、誰一人甚内に異見を加ふる者なきに、輕き身分の其方が僅かの恩義を忘れずに、事を分けたる今の說得、正に冥府へ先立れし父尊靈の乘移り、此身に御異見下さると思ひ當つて改心なし、今日よりふッつり禁酒なし、最早酒は飮まぬほどに、是れにて料簡してくりやれ。

長次　いえ〳〵、あなたの御禁酒もこれまで度々聞き飽きました、ほんに此頃のお天氣より、當てにならぬ其お詞。

甚内　過ぎ行く以前は兎も角も、今日こそはスツパリと禁酒いたして一吸も、此後飮まねば安心いたせ。

長次　左樣なれば本當に、あなたは御禁酒なされますか。

甚内　はて、そちが異見に言ふ通り、人も三十の年を越せば、最う一分別附けねばならぬ、爰らが丁度止め時だ。

長次　それが誠のお詞なら、御異見申した私も鼻が高いと申すもの、えゝ有難うござりまする。

ト長次悦ぶ、是れにて甚内思入あつて、

甚内　ときに長次、ちと其方に折入つて頼みたいことがあるが、何と聞いてはくれまいか。

長次　そりやもう私の御異見をお用ひなされて下さる上は、あなたさまのお頼みも此身に叶つた事ならば、何なりと聞きませう。

甚内　早速の承知忝ないが、頼みといふは、やつぱり酒だ。

長次　えゝ。（トびつくりする。）

甚内　いや何も案じることではない、そちが異見で今日より酒を飲まぬといふ證據に、禁酒固めをしたいのだ。

長次　して、御禁酒固めとおつしやるは。

甚内　さあ物に譬へて言はうなら、一向宗の報恩講に明日より精進する前夜に、魚を喰つて精進の固めをすると同じことで、誠の禁酒をいたすには其前方に酒を飲み、腹の蟲にも最うこれ切り、酒は飲まぬと心得させねば、心底からの禁酒は出來ぬが、何をいふにも居酒屋から附馬を連れて來る程なれば、面目ないが懐中に一朱の小札も持合さぬが、明日から禁酒をいたしなば、他出をいたさず内職に西洋ものは嫌ひだが、靴でもこしらへ金をば溜め、借用金は倍増に利息を附けて返さ

うから、如何程でもよいそこにあるたけ、身共に二三日貸してくりやれ。

長次　そりやもう左樣な譯なれば、お貸し申すまいものでもないが、又あがつたらそれなりにお止めなさる方角を、お忘れなさるでござりませう。

甚内　いかにも常が常ゆゑに、さう思ふも尤もだが、身共も以前は天下の直參、いか程酒を飲んだと申して魂までが腐りはいたさぬ、止めると言つたら刀にかけて、今宵限りにきつと止める。

長次　そんならいよ〱お止めなさいますか。

甚内　疑はしくば、是れを見やれ。(ト小柄を拔いて金打をなし、)武士の金打違變はない。

ト長次横手を打ち、

長次　いやお出來しなされました。旦那さま、その御心底を見る上は、金子をお貸し申しませう。

甚内　それは何より忝けないが、さうして其處に幾らある。(ト是れにて長次財布を出し、)

長次　斯ういふ事のあるはしか、此二三日は拍子がよく、仲間符牒のめつたやたらに、仕事のあるのにどのお客も、精を出すので酒手を下さり、思ひの外に都合がよく、一膳飯と湯錢を引き、爰に殘りが三分一朱溜つたお金がござります。(ト札を出す、甚内手に取つて、)

甚内　所持の金子はこれぎりか。

長次　それではお間に合ひますまいか。

甚内　せめて一兩ほしいものだが。

長次　あとは錢があるばかり、もうそれぎりでござります。

甚内　ないとあるなら仕方がねえ、三分一朱でも取らぬは損だ。

長次　え。

甚内　取らぬもそなたの心にもどけば、一兩日の内借りて置くぞ。

長次　どうぞ左樣なされて下さりませ。

ト甚内件の札を懷中する、下手より以前の大藏傳八出來り。

大藏　鳥越氏、まだ是れにござつたか。

甚内　もうあがつてござつたか、大分早い湯であつたな。

大藏　會計方の其許に、またまかれてはならぬゆゑ、湯もそこ〳〵にはひつて參つた。

傳八　して、御家來の御用談は、最早相濟みましたかな。

甚内　御兩所お悅び下さい、よい家來は持ちたいもので、身共が囊中錢なきを悟り、歸りに一杯飲んで行けと三分一朱貢ぎくれた。

大藏　それは近頃奇特なこと、先づ其金子を土臺となし、
傳八　又ぞろ何處ぞへ押上り、それからそれと手を廣げ、
甚内　今夜も酒と討死だ。（トこれを聞き長次心得ぬ思入にて、）
長次　もし旦那さま、禁酒固めでござりまするぞ。
甚内　おゝさ、きつと今夜十二時限りに禁酒固めをいたした上、又明日改めて飲れるだけは飲む積りだ。

ト長次びつくりなし、

長次　えゝ、それでは禁酒をなさると言つたは、やつぱり嘘でござりますか。
甚内　はて、死んでしまへば知らぬこと、息あるうちは金輪際、好きな酒は止められねえ。

トこれにて長次悔しき思入にて、

長次　是れまで酒を止めると言つて、欺されたのも度々ゆゑ油斷をせずに居ましたが、今度ばかりはきつと止めると、金打までなされしゆゑ、よもやと思つて三分一朱お貸し申した其金も、やつぱりあなたに欺されたか、えゝ、殘念な事をいたしました。（ト齒ぎしりなして悔しがるを甚内見て、）
甚内　金打をして誓言立てたは、子供同士の約束に油證文した昔、今ぢやあ子供の遊びにもそんな間抜けな眞似はしねえ、替る世界に貸借りも印紙がなけりやあ通らぬに、金と金を打合せ、ちよん

ちよんいはせた誓言を、誠と思つてなけなしの金を貸すとはいゝ料簡、手前もよつぽど目出てえ奴だ。

大藏　そこが名代の正直長次、頭に宿る神々も出雲へ行つて留守のうち、思ひれ欺して金を借り酒を飲むのがこつちの仕事。

傳八　又候金の溜つた時分、策を用ひて品を替へ、酒飲代を借りに參らう。（ト長次拳を握り、）

長次　えゝ聞けば聞くほど腹の立つ、體を元手の人力も、類の殖えたる世渡りに、目に何がしの齒代を納め暮しの錢と店賃を、引いて二朱でも一分でも殘して行かうと思ふには、容易の事ではござりませぬ、廻りの惡い身代ゆゑ夜る晝かけて二人前、車も重い相の子に油をしぼりあくせくと貰ひ溜めたる酒手をば、貪り取つて飲まうとは、餘りと言へばお情ない、其心なら今の金子はあなたへお貸し申されませぬ。

ト甚内にすがるを、

甚内　えゝ、未練な事を申すな。（ト突き倒す。長次起上つて、）

長次　いえ〳〵それは。（ト又すがるを、大藏傳八捉へて、）

大藏　えゝ、無禮者めが。（トむごく突倒す、是れにて長次どうとなる、甚内につこり思入あつて、）

甚内　どれ、此金で飲み直さうか。

ト唄になり、甚内先きに三人上手へはひろ。跡かすめて波の音、長次起き上り體の痛む思入、西洋時計の音、合方になり、跡を見送り思入あつて、

長次　あゝ如何に酒が飲みたいとて、義理も情も辨へず、あゝも非道に出來るものか、わしがやうに無學文盲、本の端を見た事も、ないものなれば知らぬこと、劍術柔術はいふに及ばず漢學とやらの學問は學者に勝るといふ噂、譬にもいふ論語讀みの論語知らずに、あのやうな惡い事のみなさるといふは、あゝ、情ない事だなあ。それに引替へこのわしは車は引けど横道や惡い道へは決してはひらず、只正直に道を行けど、前世に惡い事でもしたか、あゝいふ非道なお主を持ち、昨日は一朱今日は二朱と貰ひ溜めた三分一朱、古着で袷の一枚も買はうと思つた金を取られ、是れから今の埋め草に稼ぎ出さねばならぬけれど、斯ういふ憂き目に逢ふからは、今夜は仕事が。（ト床几の上の蒲團を車の中へ投げ込むを道具替りの知せ、）あればよいが。

ト腕を組み思入、時の鐘、右の合方、波の音にて此の道具廻る。

（一ツ目橋の場）――本舞臺眞中より上手斜に橋を飾り、上の方庇をおろせし床見世、後駒寄せ、下の方

二階家伊豫簾をおろし、橋との間駒寄せ、柳の立木、開帳札、日覆より柳の釣枝向う畫心に辨天の森竪川の川岸を見たる夜るの遠見。波の音にて道具納まる。と波の音打上げ、知らせに附き下手二階家の簾を巻揚げる、爰に清元連中羽織袴にて居並び、直に淨瑠璃になる。

〽世の中も移り替りて昨日まで、讀書の聲の日窓、今日は町家に大學の、その德に入る商法を、竪川筋や一の橋。

トかすめて波の音合方になり、花道より半左衞門、羽織着流し雪踏、銅の小田原提灯を提げ出來り、

〽二の橋くらき川霧に、跡を三つ目の撞木橋、常聞く時も心中に、若しや命を捨て鐘と、胸にひゞきて九時十字、辻に佇み獨言。

ト此内半左衞門跡から來る二人連は、心中ではないかといふ思入あつて、心にかゝるこなしにて、舞臺へ來り、又向うへ思入、合方にて、

半左　今爰へ來る二人連れ、兩國橋から跡になり先になりして樣子を見たが、年頃といひ素振りといひ親の許さぬ戀路から、添ふに添はれぬ譯あつて、身でも投げて死ぬといふ無分別ではあるまいかと、ふつと心に思つたら、持つて生れた苦勞性に別れて行くにも行かれぬ仕儀、殊には今日は志す丁度佛の祥月命日、殺生をした罪滅し、もし金にでも迫つての事であるなら力となつて命を助

けて遣りたいものだ。（ト向うを見て、）あれ又あそこへ佇みて、何やら愚癡を言ふ様子、小陰に隠れて待合さん。

〽心にかゝるむら雲に、月さへ暫し隠れ行く。

ト半左衞門提灯の明りを吹き消し、床見世の蔭へ隠れる。

〽往來途絶えし雨催ひ、しんと二階に影にくき、端唄の茶屋に差向ひ。

ト本釣鐘、端唄の合方になり、花道より門三郎散髪の鬘着流し、白の扱帯駒下駄書生のこしらへ、淺茅島田かづら、筒袖の上へ門三郎の縞物長き書生羽織を着、蝙蝠傘を相合にさし出來り、花道へ留り跡へ思入。

〽川岸にまだ蚊もしらで雁金を、結ぶ比翼の花莚は、肌に冷たく沖の石、人こそ知らねしつぼりと、濡れて思ひの増穗の芒、露は涙の種かいな。

ト此内門三郎親へ濟まぬゆゑ、歸れといふこなし、淺茅いやだといふこなしあって泣くゆゑ、門三郎是非なく手を取り、舞臺へ來り、端唄の合方にて、

門三　これ淺茅、今更いふも愚ながら、十二の年から槍劍の指南を受けし石濱どの、其厚恩ある師の娘と密會せしは譬にいふ、思案の外と若氣の誤り、尤もよき折得るならば師に此事を打明かし、

嫁に貰ふか聟に行くか、媒人頼みて事をなさんと思ふその內小濱氏へ、約束ありしと聞きしゆゑ豫ての望みも水の泡、あゝ是非もない是れまでと、あきらめ居つたは行先きが、此身と違つて月給も百圓以上の高取りゆゑ、小濱へ嫁せば其身の出世、それを知りつゝ妨げなば厚恩受けし師へ濟まず、故に最前事を分け異見なせしも子供等へ、教導をなす學者の端くれ、御身も武士の娘なれば、先非を悔いて家へ歸り、親の詞に隨はれよ。

淺茅　親の詞に隨うて外へ嫁入りする氣なら、不孝と知りつゝ家は出ませぬ、此身を思うて下さんす、なまじ情のお詞がわしや恨めしうござんすわいな。

門三　なに、情の詞が恨めしいとな。

淺茅　とても斯うなる上からは、再び家へ歸らねば、何れいづくの果までも連れて退いて下さんせ。

門三　さあ連れて退くは易けれど、それでは爲にならぬゆゑ。

淺茅　そりやさうでもござんすが、假令この身は出世して、

〽榮耀榮華をするよりも、お前と二人立退いて、片山里へ身を忍び、小學校は及ばねど、手跡指南に武佐墨の、曲りなりにも世を送り、筆の命毛つなぐなら、それが何より樂しみと、女子の愚癡は今にまだ、開け兼てぞ見えにける。

ト此うち淺茅門三郎よろしくこなしあつて、門三郎困る思入。

門三　おぬしが外の娘なら、一旦契りを結びしからは、何れへなりとも連れて退けど、恩を受けた師の娘、どうもそれでは濟まぬ義理。

〽今更それを言はずとも、初手から知れた事なれど、道に迷ひし我が誤り。
只何事も是れまでの約束なりと思ひあきらめ、再び家へ歸つて下され。（ト淺茅ぢつと思入あつて、）

淺茅　そのお詞の樣子では、お前はわたしに愛想が盡き、緣を切る氣でござんすか、夫と賴みし門三さん、お前の心が替りし上は、生きて甲斐ないわたしの身の上、幸ひ是れから大川へ此身を投げて死ぬ程に。

〽不便な者と思ひ出す、其日があらば一遍の、御回向なされて下されと、覺悟極めて立ちあがれば、門三郎は押止め。

ト此內淺茅よろしく思入あつて、ずつと立つて橋の方へ行かうとするを、門三郎留めて、

門三　すりや此門三が連れて退かねば、其身を投じて死するとか。

淺茅　家へ歸らば親のこと、心に濟まぬ其方へ嫁に行かねばならぬゆゑ。

門三　それも其身の爲なれば、思ひ返して今一度。

淺茅　いゑ〳〵何と言はしやんしても、わたしや家へ歸らねば、留めずと死なして下さりませ。

ト淺茅橋の方へ行かうとするを門三郎留め、ぢつと思入あつて、

門三　あゝこれ待つた、左程に思ひ詰めし上は、所詮留めても留りもせまい。我ゆゑ此場で入水させ、跡にながらへ居られうぞ。恩を受けたる石濱殿にとても難儀を掛けるなら共々死ぬが身の言譯。

淺茅　そんならお前もわたしと一緒に。

門三　濡れぬ先きこそ露をも厭へ、もし斯うなつたら是非がない、此四五年の學問も此身と共に水の泡さりとは愚なる門三郎と、開化の友は笑ふであらうが、今日に迫りし命の瀬戸、

淺茅　幸ひ四邊に人目もなければ、少しも早う冥土の旅へ、

門三　淸き最期を遂げんにも、廢刀ゆゑに橋上より、

淺茅　この川中へ身を投げて、

門三　二人一緒に死んだなら、

淺茅　明日は世上の噂となり、

門三　此身の恥を新聞に、

淺茅　國々までもしらすのか、

門三 人に教へゐ身を以て、

淺茅 道に迷ひし罪科ゆゑ、

門三 戀は諸道の、

兩人 妨けぢやなあ。

〽是れが此世の別れぞと、手に手を取れば雲晴れて、見かはす月の顔と顔、川を隔てゝ題目の聲もあの世の導きと、目に持つ涙ふり拂ひ。

ト此内門三郎淺茅手を取りかはし、名殘りを惜しむ思入よろしくあつて、

門三 人目に掛らぬ其うちに、

淺茅 少しも早う。

〽既にかうよと見えたる所へ、思ひ掛けなき後より、二人が帯際引き留め。

ト兩人覺悟の思入にて、門三郎淺茅の手を取り、橋の方へ行かうとする、此時床見世の蔭より、以前の半左衞門出て兩人を引き留め、

半左 お二人とも、まあ待つた。

門三 いづくの誰か知らねども、

淺茅　死なねばならぬ譯あるもの。
門三　留めずと此場を見のがし下され。
半左　いえ、見のがすことはなりませぬ、切ない譯の一部始終、此の床見世の小蔭にて。
門三　すりや最前からの、
淺茅　此場の樣子を、
半左　殘らず聞いて居りました、斯うお留め申すお二人さま、憚りながら私が、惡いやうにはしませぬから、まあ〳〵待つて下さりませ。
ト兩人を留めて、よろしく思入にていふ、兩人半左衞門を見て、
門三　見れば面も知らざる仁、
淺茅　留めてくれるは嬉しいけれど、
門三　どうでも生きては、
兩人　居られぬ身の上。
半左　御尤もではござりますが、先づ私が申すこと、お聞きなされて下さりませ。（ト半左衞門手を放す、兩人ぢつと下に居る、誂への合方になり、）何をお隱し申しませう、兩國橋からお二人の跡になり先き

になり、爰へ參る道すがら、どうもをかしな御樣子に、斯ういふ譯と推量なし、この床見世の小蔭に隱れ、切ない譯も聞きましたが、何にいたせ身を投げて死なうといふのは無分別、見ればあなたのお頭は西洋風に開化なされど、二人一緒に情死なさるはあんまり愚ではござりませぬか、私などは何一ッ知らぬ以前が百姓なれど、忰は六歲三月から小學校へ參りますれば、よう物の理を辨へ居ります、かゝる文明開化の世に心中なさるはよく申す、舊弊とやらぢやござりませぬか、かやうな事のないやうに、爰の神社かしこの寺院、最寄々々で說敎の道場あつて諭したまふ、其御仁惠が無になりませう。然し斯ういふ譯合では、假令いか程私が御說得申すともお家へ御歸りなさるといふお心にもなりますまい。一先づ何れの果てへなりと、其身を忍んで時節を待ちお詫びをなさるが上分別、師匠とあれば親同然、どんな惡い事があらうとも、お命にさへ恙なくば長いうちには御孝行の出來る事がござりませう、口ももどらぬ敎導師、この私が敎へに附き、死ぬることを思ひ止り、知邊を便つて何れへなりと、一先づお出でなされませ。

ト此内半左衞門よろしく思入あつて言ふ、兩人もこなしあつて、

門三　眞身も及ばぬ其の異見、忝なさに詞に附き一先づ此地を立退きたけれど、其行く先きは、靜岡に兩三軒の緣家あれど四五年此方疲弊なし、桑茶を作りやう／＼と其日の活計立てる身に、よしや

半左　その金策はお案じなさるな、斯うしてお留め申したからは、失禮ながら私が御入用程差上げませう。

便つて參るとも、たゞ厄介にもなられぬゆゑ、此の金策にほとんと當惑。

門三　すりや見ず知らずの、こなたが金を、

淺茅　お貸しなされて下さりますとか。

半左　幸ひ今日一つ目の懇意な者へ用達つ積りで、持參いたせし七十圓是れをあなたへ進上しませう。

ト半左衞門懷中より紙入を出し、紙に包みし西洋紙の札を七枚出す。

門三　その志しは忝なけれど、七十圓といふ金を、

淺茅　何いはれなく貰うては。

半左　いや、其御心配には及びませぬ、元私は上州の高崎在でござりますが、此東京へ出ましてから日増に商法盛んになり、七十圓や百圓の金子に事を缺かぬ身の上、殊に今日は志す世に亡き人の祥月命日、冥府の佛へお詫びの爲に、いやなに、御奉公にせめて人をば助けたいと、思ふ所へお二人の命をお助け申したので、悅ばしうござりますれば、御心配なく此の金子、どうぞお受け下さりませ。

〽紙に包みし其金の、薄き紙幣に引替へて、厚き情の七十圓、涙ながらに押しいたゞき。

ト門三郎札を受取り、淺茅兩人嬉しき思入にて戴き、

門三 今宵に迫る二人が命、助けられたる其上に、旅の入費の七十圓。

淺茅 何とお禮を申さうやら。

門三 えゝ忝うござりまする。(ト兩人禮を言ひ、)是れより靜岡へ立越しまして、二人の住所が極りますれば身の禮狀を差上げたいが、所はいづれいづくにて、お名は何といはるゝか、斯くいふ拙者の姓名は。(ト言ひかけるを半左衛門冠せて、)

半左 いや、其御姓名は後してのこと、こちらもお名乘り申さねば。

門三 とは云へ、此儘名乘らずには。

半左 はて、是れも何ぞの御縁なれば、いづれ其内お目に掛り、目出度くお名乘り申しませう。(ト此時九つの鐘鳴る。)おゝ、あの鐘は最早九つ、いや、九つではない十二時なれば、夜更けぬうちに少しも早う。

門三 左樣なれば、仰せに任せ、

淺茅 此場はこのまゝ、

三人　お別れ申す。

〽打切る鐘と諸共に、月も落行く西の空、また大橋と一つ目へ、別れてこそは。

ト時の鐘、浪の音三重にて門三郎淺茅跡を振返り／＼、橋を渡つて上手へはひる、半左衞門跡を見送り思入あつて、

半左　やれ／＼今夜は思ひ掛けなく、あの衆二人の命を助け、こんな嬉しいことはない、年頃わしが氣にかゝる今日は佛の祥月命日、こゝろばかりの膳部をこしらへ、檀那寺で供養をしたが、其志しが屆いたか人の命を助けたのは、何より此身のよい功德、其替りには一つ目の伊勢善でさぞ待つて居たらうが、最う十二時を打つたれば、明日の事にしよう。（ト袂から以前の提灯を出し、）あゝ夜蕎麥賣でもくればよい、明りを一つ借りたいものだ。

ト向うへ思入、此時上手より以前の甚内、づぶろくに醉ひしこなしにて、ひよろ／＼と出來り、半左衞門へ行當る、半左衞門びつくりして行かうとするを袖を捉へ、

甚内　やい／＼、何で武士に突當り、一言半句の詫びもせず、うぬ失敬な奴ぢやあねえか。

半左　これは／＼御免下さりませ、私方から突當ればお詫びをいたしますれど、あなたの方から私へ突當つたのでござりますから、それゆゑお詫びをいたしませぬ。

甚内　いやこいつが〳〵、太え奴だ、武士に向つて言ひ掛けするな、何でおれが突當るものか、慮外ひろいだ素町人、うぬ其分には差置かぬぞ。

半左　あ、もし〳〵、御酒の上とは申しながら、よし私の方から突當つたにもせよ、申さばほんの出合頭、それに武家の町人のと、差別を附けておつしやりますが、當時は武家も平民も、皆一體ではござりませぬか。

甚内　や。

半左　さ、それもみんな御酒の上、手前が惡くば惡いにして、まあ御勘辨なされませ。

甚内　うぬ身共をおひやらかすな、それに又二言目には酒々と、身共酒は飲まぬわえ。

半左　なに、上らぬことがござりませう。酒の鏡を拔いたやうに、ぷん〳〵と匂ひます。

甚内　いやこいつが〳〵、またそんな言ひ掛けをするか。

　　ト甚内ひよろ〳〵しながら、半左衛門の胸倉を取る。

半左　こりや、何となされまする。

甚内　何とするとは知れたことだ。おれが屋敷へ連れて行くのだ。いや、今は上地に屋敷はねえが、山崎町の借店へ、うぬをそびいて連れて行くのだ。（ト引摺つて行かうとする。）

半左　え丶、お放しなされませ。（ト半左衛門手ひどく振拂ふ、甚内ひよろ〳〵としてどうと倒れ。）

甚内　うぬ、武士たる者を投げやあがつたな。

半左　何であなたを投げませうぞ。

甚内　もう料簡がならねえ。（ト刀を抜き振上げる。）

半左　あゝもし、おあぶなうございまする。

ト波の音にて、甚内切つてかゝる、半左衛門逃げるはずみにばつたり轉ぶ、甚内はひよろ〳〵として踏止り、刀を杖に生酔の見得、誂への合方かすめて波の音、西の下にて夜蕎麥賣の風鈴の音、迷子の鉦太鼓を冠せ、甚内ひよろ〳〵と追ひ廻すを、半左衛門逃げる立廻り、トヾ半左衛門羽織を取つて打附ける、甚内天窓へかゝりし羽織を取つて捨て、只一刀に半左衛門を切り下げる、半左衛門よろしく苦しみばつたり倒れる、甚内これを見て、

甚内　まだ〳〵醉つても、手は狂はねえ。（ト件の羽織で刀の血糊を拭ひ鞘へ納め、）えゝ水を一杯飲みてえものだ。

ト時の鐘、右の鳴物にて甚内橋を渡つて上手へはひる。烏笛になり、日覆より相引にて烏三四羽下りる、花道より徳藏やつし裝、尻端折り草履にて秩父屋といふ梅鉢の紋附きし弓張提灯を持ち、跡より

半次郎縞の羽織着流し雪踏にて出來り、烏の聲の氣にかゝる思入にて花道へ留り、

半次　これ德藏、大層烏が啼くではないか。

德藏　左樣でござりまする。月もないのにあのやうに、何で烏が啼きますか。

半次　今夜は宵からどき〳〵と、胸騷ぎがしてならぬのに、親仁さまが十二時を打つのにお歸りなされぬゆゑ、お迎ひに行く道すがら、心に掛るあの烏啼き。

德藏　斯ういふ時には往來の人の話も耳へはひり、兎角心に掛りますもの。（ト風の音、仕掛けにて提灯の明り消える。）南無三、明りが消えました。

半次　今まであつた月も入り、明りが消えては眞闇だ。

德藏　向うへ行つて附けませう。

半次　何處で明りを借りる積りだ。

德藏　いえ、早附木がござりまする。（ト兩人本舞臺へ來り、下手にて德藏煙草入の段口から早附木を出し、提灯へともし四邊を見てびつくりなし、）もし若旦那、大層な血でござりまする。

半次　なに、血がこぼれて居る。（ト德藏提灯にて四邊を見廻し、死骸を見て、）

德藏　やあ、人が切られて居りまする。（ト提灯を取つて見て、）

半次　えゝ、人が爰に切られて居る。やゝこりや親仁さまだ。
德藏　おゝ大旦那さまだ。(ト德藏抱き起し、)もし、大旦那さまく。
半次　親仁さまく。
德藏　こりやもう息は絕えました。
兩人　えゝ、情ない事だなあ。(ト死骸に縋り泣く。)
半次　常日頃から慈悲深い親仁さまの事なれば、人に意趣を受けるやうな、そんな事のない筈なれば、何でもこれは物取りの仕業に違ひあるまいわいの。
德藏　おつしやる通り物取りの、仕業に違ひございりませぬ。(ト四邊に落ちてある紙入を取つて、)中を改め御覽じませ。(ト半次郎中を改め見て、)
半次　最前お持ちなされた、七十圓のその札が中になければ物取りが、取つたに違ひあるまいわいの。
德藏　それとも餘程の間ゆゑ、七十圓は伊勢善へ、お持ちなされたかも知れませぬ。
半次　いやく、貸した證文が中になければまだ先きへ、行かぬさきに違ひない。斯ういふ事のある端か、お出し申すが氣に掛り、明日になされと申したのに、いやく宵ゆゑ氣遣ひないと、無理にお出でなされたが、あの時お留め申したなら、こんな事にはなるまいもの、殘念な事をしたわい

の。

ト半次郎死骸へ取附き泣く、徳藏何か考へし思入あつて、

徳藏　徴兵方の見廻り繁く、こんな事は忘れたやうに、とんと噂も聞かなんだが、今夜に限つて只お一人、供も連れずお出でなされ、斯ういふ果敢ない死をなさるも、是れも定まる約束事か、常から旦那が氣になさる其亡き人の今日は命日。（トぞつとせし思入あつて、）はて、爭はれぬものぢやなあ。

ト時の鐘、誂への合方、かすめて波の音を冠せ、橋の上より新十郎、散髪背割羽織、まち高袴シヤツプを冠り、駒下駄にて戸長のこしらへ、手丸提灯を持ち出來り、四邊を見て、

新十　こりや夥しい血糊の滴り。（ト提灯で死骸を見てびつくりなし、）やゝ、殺害されしものあるか。

半次　はツ、私の親にござりまする。今宵一ツ目まで參る途中、殺害されてござりまする。

徳藏　私ども迎ひに參り、只今是れにて死骸をば、見附けましたのでござりまする。

新十　して、其方達は何れの者だ。

半次　私ことは通り鹽町十二番地に居りまする、澤田半左衛門が悴半次郎と申すもの。

ト新十郎提灯を下へ置き、中腰になり西洋手帳を出し、石筆にて一々記し、

新十　して、同道の其方は。

德藏　私ことは半左衞門雇人、德藏と申しまする。

新十　して殺害されしは、半左衞門か。

半次　左樣にござりまする。（ト新十郎一々書記す、德藏思ひ入あつて、）

德藏　憚りながら、あなたさまは。

新十　當區内の戸長を勤むる、鶴木新十郎と申す者、今日は一六の休暇ゆゑ、所用あつて深川から只今宅へ歸る途中、計らず爰にて出逢ひしが夜目とはいへど見る所、實體なる半左衞門、意趣切りとは思はれず、何ぞ取られしものはないか。

半次　今日本所相生町何某方へ七十圓用達てまする約束にて、持參いたしましてござりまする。

德藏　只今所持なす紙入を、改めましたが其中に、右の七十圓がござりませねば、取られしことゝ存じられます。

新十　して其金は、新貨幣か、但しは又紙幣なるか。

半次　持參の札は大藏省で御製造になりまする、十圓札にござりまする。

新十　その十圓札の番號を、控へてはあるまいな。

徳藏　いえ、後日の證據に私店では、出入り毎に番號を手帳へ控へて置きまする。

新十　それはよくぞ控へ置いた、何者の仕業なるか其の手掛りにはよき手掛り、一枚毎に書き記し御訴へは申すに及ばず、當扱所へも持參いたせ。

兩人　畏りましてござりまする。（ト西洋手帳へ仕込みし石筆を仕舞ひ、死骸を提灯で見て、）

新十　肩先きより乳の下かけ、只一刀に切り下げしは、餘程手者と見ゆるわえ。

牛次　何でも是れは手の利いた、武家の仕業と思はれます。（ト新十郎思入あつて）

新十　斯くまで開化文明して、世は靜謐に及びしに、未だ頑愚の族あつて、斯かる舊弊の悪業なし、終に斬首の刑を受くるは、はてさて愚なる事ぢやなあ。（ト時の鐘、兩人思入あつて）

牛次　何にもせよ、此の場の次第を、

徳藏　御扱所へお屆け申し、（ト新十郎襟にかけし時計を見て、）

新十　明朝御訴訟申すがよい。

兩人　ハツ。（ト新十郎提灯を持ち、すつと立つた木の頭、兩人を見返り、）

新十　近頃愁傷

　ト會釋の思入。兩人はツとこなし、時の鐘、波の音早き合方にて、

ひやうし　幕

中幕　大磯棒鼻の場
箱根湯元福住の場
同湯場道一本杉の場

〔役名〕──浪士島越甚内、書生船岡門三郎、車夫正直長次、澤田雇人傳助、澤田子息牛次郎、浪士赤堀大藏、同黒澤傳八、足柄縣宿役人幸兵衛、刀屋五郎兵衛、同供男、足柄縣番太二人、箱根駕籠舁二人茶見世の亭主。石濱の娘淺茅、福住女房お光、同湯女お仙、同お駒等。〕

〔立場茶屋の場〕──本舞臺一面の平舞臺、上寄りに一間の立場茶屋、三方葭簀張り、立場といふ掛行燈を出し、臺の上に菓子の箱ゆで玉子など入れし箱などよろしく並べ、土竈に茶釜を掛け茶道具其他此側へ飾り、後海の遠見、下手に東海道大磯宿といふ榜示杭、松の立木日覆より同じく釣枝、爰に床几二脚程並べ、五郎兵衛鳶合羽脚絆草鞋、旅なりにて床几に掛け、供男同じく旅装の供にて、小さな雨掛けを床几の上へおろし、腰を掛けてゐる、茶見世の亭主茶を運び居る、此の見得馬士唄、浪の音にて幕明く。

五郎 時に御亭主、今年は大層湯治場へ、人が出たといふことだの。

亭主 いつもより暑いせゐか、湯元でも宮の下でも實に一杯でござりまして、お客をお歸し申す程な込合でござりました。

五郎 わたしも今度伊香保へ行つたが、あつちもやつぱり賑かさ、いはゞ遊山の湯治場が斯う繁昌するのを見ると、車流行の世の中に錢廻りがいゝと見える。

亭主 それはあなた方のおつしやる通り、錢廻りがよいので、何生業でもきつと儲かるゆゑ、おのづと世間も賑かでござります。何でも當時のすたり物は、刀屋さんでござりまする。

供男 おい〳〵そんなに惡く言はねえものだ、おらが旦那は刀屋だよ。

亭主 これは粗相を申しました。(ト頭を掻き、)へえ、刀屋さんでござりまするか、よい御生業でござりまするな。

五郎 なに、いゝ事があるものか、今もお前の言ふ通り、武家一統廢刀で、實に當時の廢りものさ。

亭主 いえ〳〵さうでござりませぬ、何ぼ刀が下落してもまた名作は別物ゆゑ、刀のすたつた所を附込み、御道中をなさるうち、好い作物でもお手に入れば、しつかりと儲かりませう。

五郎 先づそこいらを當込みに、商法がてら京大阪を、見物に行くつもりさ。

亭主　それは結構でございまする。

供男　もし旦那、道了さまは行きがけに、お參りをなさいませうね。

五郎　歸りはどうで神戸から、蒸汽で歸る積りだから、お參り申して行かう。

亭主　あなた方も道了さまを、御信心でございまするか。

供男　信心とも〳〵、道了さまのお蔭で疝積痞が直つたから、御禮參りをしにやあならねえ。

五郎　相變らず道了さまは、御繁昌な事だね。

亭主　一年増しに東京の講中が殖えますので、引ッ切りなしの御參詣、私どもの見世なぞは六分道了さまでございまする。

供男　道了さまが六分持つて、殘りの四分を茶釜で煎じ、そこで四分茶を飲ませるのか。

五郎　また詰らねえ無駄を言ふか。

亭主　只今よいのを差上げますから、まあ御ゆるりとなされませ。

ト浪の音、宿場の流行唄になり、花道より前幕の門三郎、淺吉二人乘りの人力車に乘り、これに長次引いて出來り、花道にて、

長次　もし旦那さま、小田原までのお約束でございますが、向うでよろしうございまするか。

門三 昨日から乘り續けで血の道にさはつたゆゑ、向うの立場でおろしてくりやれ。
長次 是れから先きは平な道ゆゑ、なるたけ靜に引きますから、ならう事なら小田原まで、お乘りなされて下さりませ。
淺茅 先きの宿へ行くどころか、あとの宿から眩暈がするゆゑ、早うわたしや下りたいわいの。
門三 小田原までの約束ゆゑ、こゝで下りるはこつちの勝手ゆゑ、定めた賃は遣さうから、向うの立場でおろしてくりやれ。
長次 へえ〳〵、畏りましてござりまする。(ト右の唄にて舞臺へ來り、茶見世の前にて車をさげ、)あい、お客さまだよ。
亭主 これは入らつしやいまし、お若い衆御苦勞でござりまする。
ト三人へ茶を出す、門三郎淺茅車より下り、門三郎紙入より札を出し、
門三 こりや〳〵車屋、夜前半金遣はしたれば、是れにて極めの二圓になるぞ、酒手に一分遣はすから歸りに一杯飲んで行きやれ。(ト長次に渡す。)
長次 これは〳〵、小田原までの賃錢の其外に、お酒手まで戴いては、誠に是れでは濟みませぬ。
門三 いや少々ばかりぢや、取つて置きやれ。

長次　左樣ならお詞に隨ひ、お貰ひ申しますでございます。是れはお孃さま有難うございます。

ト禮を言ふ。五郎兵衞、門三郎を見て、

五郎　や、あなたは船岡門三郎さまではございませぬか。

門三　おゝ、誰かと思へば、刀屋の五郎兵衞か。

淺茅　思ひ掛けない、どうして爰に。

五郎　お孃さまも御一緒に。

供男　さては二人は東京を。

五郎　あゝこれ。（ト目で押へ、）やれ〳〵、とんだ所でお目に掛りましたな。

亭主　先づ〳〵是れへお掛けなされませ。

トこれにて門三郎淺茅、床几へ掛ける、長次は汗を拭ひ茶を飲んで、

長次　左樣なら旦那さま、大きに有難うございます。

門三　おゝ、大儀であつた。（ト長次車を引き、花道の方へ行きかけ、）

長次　昨日東京からお供した、あのお二人の裝形、何でもあれは色戀で。

門三　え。

長次　いえ、いろ／＼有難うございます。（ト右の唄にて長次花道へ車を引いてはひる。）

亭主　もしお供さん、一杯汲んで來ますから、見世をお頼み申します。

供男　おいらが番をして遣るから、ゆつくりと行つて來なせえ。

亭主　何分お頼み申します。どれ、一杯汲んで來ようか。

　　　ト手桶をさげて下手へはひる。五郎兵衞思入あつて、

五郎　もし、お前さま方は、只今何處に隠れておいでなされました。

門三　それでは二人の、身の上を。

淺茅　五郎兵衞、そちは知つてかいなあ。

五郎　諺にもいふ惡事千里、翌朝直に承はりました。

門三　知つてとあれば隠しはせぬが、追手が掛ると思つたゆゑ、龜井戸在の百姓家に十日程忍んで居たが、何時が何時まで果しもなければ、今靜岡に住居いたす縁家を便つて參るのだ。

淺茅　どうぞ爰で逢うた事は、家へいうて下さんすな。

五郎　それは決して申しませぬが、然し物堅い親御さまゆゑ、お家出なされた其跡で、殊の外なる御立腹。

淺茅　すりや、父上には、其樣に。

門三　さあ、御立腹なさるも、全く二人が不所存ゆゑ。

五郎　今度旅行いたすに附き御暇乞に上りまして、お二人さまの一部始終をとつくりと承はりましたが、物堅い御親父さま、娘を勘當するとのお詞、母御さまにはそれを氣病みにお煩ひが出た御樣子、何とお孃さま、それを見捨て丶影をお隱しなされては濟みますまい、今からお家へ詫言してお歸りなされては如何でござります。もし門三さま、お前さまも外ならぬお師匠さまの事なれば、浪風立てず納まるやう、どうぞ御思案なされたがようござりまする。

ト是れにて兩人ぢつと思入。

門三　思案の外とはいひながら、七尺去つて影だにも踏まぬ師匠へ恥辱を與へ、また其上に母御まで御苦勞かける不行跡、こりやもういつそ淺茅どの、思ひ切らずばなりますまいわいの。

淺茅　いえ〳〵、わたしやどうあつても、思ひ切る氣はござりませぬ、勘當の身となりますれば、便りに思ふはあなたばかり、それに思ひ切れとは、そりやお胴慾でござりますわいなあ。

ト門三郎に縋つて泣く。

門三　はて、五郎兵衞も親切に爲を思つてくれるゆゑ、此場で一旦、いやさ、一旦故郷へ歸らずば。

淺茅　すりや、あの、ほんとに。

門三　さあ、いやであらうと歸らずば、浮世の義理が濟むまいわいの。（ト門三郎淺茅に呑込ませる。）

五郎　左樣なれば私が詞を立て、お二人ともに是れから歸つて下さりまするか、それは何より有難い、一緒にお送り申したいが、長い旅路の出がけゆゑ、御免なされて下さりませ。

供男　もし旦那、もうそろ／＼と出掛けませう。

五郎　おゝ、思ひの外暇取つたから、是れから道を急がねばならぬ。

ト下手より、以前の亭主手桶を提げ出來り、

亭主　まあ、よろしいではございませぬか。

五郎　いや、秋の日は早いから、手廻しをして行かねばならぬ。

供男　もし、茶代は爰に置きますよ。

亭主　これは有難うござりまする。

門三　こりや五郎兵衛には、もう出掛けるのかな。

五郎　是れにてお別れ申しますが、何分共に今の事を。

門三　それは承知いたして居ります。

五郎　左樣なればお二人さま。
門三　長い旅路の事なれば、
淺茅　隨分道中恙なう。
五郎　いづれ其うち東京へ、歸つてお目に掛りませう。
　ト馬士唄になり、五郎兵衞先きに供男荷を擔ぎ上手へはひろ、此内淺茅は癪の起りし思入あつて、
淺茅　あいたゝゝゝ。
門三　あこれ、どうぞしやつたか。
淺茅　車で眩暈がする所へ、持病の癪が差込んで、
亭主　なに、お癪が起りましたとか、お湯でも一杯上げませうか。（ト葭簀の蔭へはひろ。）
門三　それも大方刀屋の今の話しを聞いたので、持病の癪が起りしならんが、口ではあゝは申すものゝ今更おぬしを振捨てゝ、切れる心はない程に、必ず心配いたさぬがよいぞや。
　ト介抱する、亭主湯を汲んで出す。
亭主　もし、何ぞお藥はござりませぬか。
門三　東京から求めて參つた、寶丹があつたれど、生憎みな呑んでしまひ、外に藥の貯へとても、

亭主　池の端の寶丹なら、此の宿にも取次がございますから、一走り私が行つて參りませうか。

ト淺茅くるしみながら、

淺茅　あゝもし、それには及びませぬ、寶丹なら私の、紙入の中にございまする。

門三　おゝ、さうであつたか。（ト四邊を見廻し心附きしこなしにて、）やッ、こりやとんだ事をいたしたわえ。

亭主　なに、とんだ事をなされましたとは。

門三　これが所持の紙入を、入れし包みを落さぬやう、蒲團の下へ入れて置いて、その儘車を歸せし不念、あゝしまつた事をいたしたなあ。（ト當惑の思入、淺茅顏を上げ、）

淺茅　そんならあれを、あいたゝゝゝ。（トびつくりして苦しむ。）

亭主　さうして何ぞお包みに、大事な品でもございましたか。

門三　おゝ大事も大事、包みの中へ路用の金子を入れて置いた。

亭主　そりや打捨てゝは置かれませぬが、して先刻の人力車は、何れにてお雇ひなされました。

門三　東京から雇つて來たが、何れの車か見ず知らず。

亭主　それでは何の手掛りも。

門三　遠くは行くまい、跡追つかけて。（ト行かうとするを淺茅留めて、）

淺茅　あゝもし、待つて下さりませ。

門三　こりや何故に留めるのぢや。

淺茅　そのやうな事おつしやつて、あなたはわたしを振捨てゝ。

門三　何で身共が左樣なこと。

淺茅　いえ〳〵、今の刀屋の話しを聞いて振捨てる、お心になつたのでござりませうが、そりや、お情なうござりますわいなあ。

門三　えゝ何でそなたを見捨てようぞ、左樣な事を申さずと、どうぞ身共を遣つてくりやれ。

淺茅　いえ〳〵、一人殘るは心細うてなりませぬゆゑ、どうぞ爰に居て下さりませ。

門三　えゝさりとては、聞き分のない。

ト當惑の思入、馬士唄、ばた〳〵になり、花道より以前の長次足早に車を曳き出來り、直に舞臺へ來り、

亭主　もし旦那さま、さつきの車屋が參りました。（ト門三郎見て、）

門三　おゝ、こなたは先刻の車屋か。

淺茅　ようまあ、戻つてくれたなあ。

長次　先刻は有難うございました。

亭主　今お前の跡を旦那さまが、追つかけてお出でなさるところだつた。

長次　そりや、お包みゆゑでございませうな。

門三　おゝ、蒲團の下へ入れ置いた、小包みを忘れしゆゑ。（ト長次車の臺箱の中より風呂敷包みを出し、）

長次　先刻お別れ申してより、跡の立場で仕度をしようと、蒲團を上げると其下から此お包みが出ましたゆゑ、爰においでなさる内とお屆け申しに參りました。念の爲めお包みの中を、お改め下さりませ。（ト門三郎に渡す。）

門三　それは／＼奇特なこと、よく屆けてくれたぞ。（ト言ひながら包みの中を改め見て、）如何にも中に躊躇はない。さて／＼そなたは正直者、近頃見上げた事ぢやな。

長次　いえもう、假令扇一本でも、躊躇物があつた日にやあ、東京の車はいふに及ばず、此の街道にある車まで名の出る事でございます、別して當時は惡いことは、どうして／＼出來ぬ世の中、何でも正直にしくはございませぬ。

淺茅　惡い心のものなれば、返されぬとて仕方もないに、ようまあ屆けて下さんしたなあ。

ト この內門三郎件の札の內、十圓札を一枚紙に包み、

門三 あいや車屋、これはそなたが屆けてくれた禮の印だ、受取つてくりやれ。

ト出す、長次取つて開き見てびつくりなし、

長次 もし旦那さま、こりや十兩札ではござりませぬか。

門三 不足であらうが、不承しやれ。

長次 えゝ、めつさうな事をおつしやりませ、これが二朱か一分ならお貰ひ申して置きますが、十兩といふお禮を、お貰ひ申しては濟みませぬ。

門三 何の濟まぬことがあるものか、まる／＼是れを取られたとて、いたし方なき旅の空、又此所で出合はず、所の縣へ訴へ出れば半金は下さる上の御規則、これが遊山の旅なれば半金こちに遣はすが、長の旅ゆゑさうも行かねば、どうぞそれを受取つてくりやれ。

長次 いえ／＼、是れは戴かれませぬ。そりやもう是れが往來中に、落ちてあつた品ならば、屆ける所へ屆けませうが、極めの賃の其外にお酒手まで澤山に下されました旦那さま、申さば內も同然な車の中へお忘れなされた、其お包みを屆けたとて、こんなお禮に預かつては天道さまへ濟みませぬ。

ト亭主見兼ねて、

亭主　これさ〳〵車屋どの、こなたの言ふのも尤もだが、其正直な心を見て、旦那さまから下さるお禮お貰ひ申しておくがよい。

淺茅　それを納めて下さんせぬと、却てこちらが困るわいなあ。（ト是れにて長次思入あつて、）

長次　十兩といふお禮を、お貰ひ申しては濟みませぬが、其樣にまでおつしやるゆゑお詞に隨ひ、お貰ひ申しますでござりまする。（ト件の札を戴き、叺煙草入の段口へ入れる。）

門三　それにて手前も、安堵いたしました。

長次　せめてお禮にお泊りまで、車でお送り申しませう。

淺茅　いえ〳〵、わたしや車より、歩く方がようござんす。

長次　ほんにあなたは車ゆゑ、めまひがするとおつしやりましたな。

門三　おゝ、眩暈といへば癪はどうぢやな。

淺茅　包みの出たので嬉しやと、思つたせゐかさつぱりと、癪も納まりましたわいなあ。

門三　癪がよければ小田原まで、少しも早く出掛けよう。

亭主　して、今晩のお泊りは。

門三　小田原から駕籠を取り、今宵は湯元へ泊る心得。
長次　湯元までは爰から五里半、餘程道が手張りますから、お早くお出掛けなされませ。
淺茅　そんなら、あなた少しも早く。
門三　左樣いたすであらうわえ。（ト紙入より一分の札を出し、）これ亭主、これは茶代ぢや。
　ト出す。亭主取つて、
亭主　かやうに澤山お茶代を、お貰ひ申しては濟みませぬ。
門三　いや〳〵使ひ立てたゆゑ、遠慮せずに受取つてくりやれ。
亭主　それは有難うござりまする。
長次　左樣なれば旦那さま。
亭主　御機嫌よろしう。
門三　おゝ、いかい世話であつた。（ト唄になり、門三郎淺茅を連れ上手へはひる。）
亭主　やれ〳〵今日は東京の、お客で餘計なお茶代をお貰ひ申したが、氣の惡いは車屋さん、いゝ仕事をしなすつたな。
長次　お恥かしいが十兩札は、初めてわしは手に取りました。こんな嬉しい事はござりませぬ。

亭主　まあゆつくり休んで行きなせえ。（ト亭主葭簀の蔭へはひる。長次思入あつて、）

長次　いや捨てる神あれば助ける神と、此間兩國で虎の子のやうに溜めて置いた、三分一朱を御主人さまに欺されて取られたが、思ひがけない旅仕事で、二兩取つた其上に、又候十兩お貰ひ申し、夢ではないかと思ふやうだ。是れから家へ歸つたら、是れで古い車を買ひ、自前で曳けば六匁の車代を出さぬゆゑ、かツたり二兩儲かる身上、あゝ爰が助ける神だなあ。

ト嬉しき思入、馬士唄になり、花道より前幕の牛次郎、鳶合羽一本差し、脚絆草鞋旅なりにて、足を痛めしこなしにて蝙蝠傘を杖につき出來る、跡より前幕の德助旅形一本差し、脚絆草鞋、割掛けの荷を肩へかけ、附添ひ出來り花道にて、

德助　もし若旦那、幸ひ向うに人力車が居りますから、あれまで御辛抱なされませ。

牛次　朝夕時候の惡いせゐか久しく起らぬ脚氣が起り、膝ががく／＼してならぬ。

德助　それも今晩湯元へ泊り、二三日湯治をなさいましたら、直になほるでござりませう。

牛次　さういふ事なら、少しく早く。

德助　まあ、向うで車を雇ひませう。（ト右の鳴物にて、兩人舞臺へ來る、亭主出來り、）

亭主　これも東京のお方のやうだ。これはお客さま、ようお出でなされました。

ト兩人床几に腰を掛ける。

徳助　こりや〳〵車屋、小田原まで乘せてくれまいか。

長次　はい、わしは東京の車で、今歸る所でございますから、小田原の方へお出でになるなら、地の車をお雇ひなされませ。

徳助　さあ地の車を賴みたくも、折惡しく出拂つて、是れまで御辛抱おさせ申した、見らるゝ通り若旦那が、脚氣を踏み出し御難儀ゆゑ、さう言はずと小田原まで、乘せて行つてはくれまいか。

亭主　これ車屋どの、斯う見たところがお二人さまも、東京のお方の樣子、御難儀をなさるとあれば、今のお客を送つたと思つて、乘せて上げさつしやいな。（ト是れにて長次思入あつて、）

長次　成程そんなもの、今のお客を小田原まで、送る積りで乘せませう。

徳助　そんなら乘せてくれるとか、やれ〳〵それは有難い。（ト亭主茶を出し、）

亭主　先づお茶を一つお上りなさりませ。

ト半次郎徳助へ茶を出す、此内長次煙草を呑んで居るゆゑ、徳助これを見て、

徳助　これ〳〵車屋どの、わしに一服呑ませてはくれまいか。

長次　それはお安い御用だが、自分ごしらへの煙草だから刻みが荒くツて臭うございます。

徳助　わしも飯より煙草好きだが、煙草入を落したので、ないと思ふと呑みたいものだ。
長次　さあ〳〵粗葉だが呑まつしやりませ。（卜件の叺煙草入れへ煙管を添へ、徳助へ渡す。）
徳助　これは何より忝ない。（卜煙草入を取り、煙草を附けて呑みながら、ふと段口を見て、）こりや不用心な、札ではないか。
長次　ほんに、其中へ今貰つた、十兩札を入れて置いた。
徳助　なに、十兩札を貰つたとな。（卜思入、）
長次　東京から乗せて來たお客さまが、車の中へ忘れ物をさつしやつたを屆けて上げたらば、禮だといつて其の大札を貰ひましたが、ついに手に取つた事もござりませねば、惡い札ではござりませぬか、お目利きをして下さりませ。（卜長次段口より札を出して見せる。）
徳助　どれ〳〵見せなせえ。（卜取つて見て、）是れは大藏省から出る西洋紙の札なれば、贋札などでは決してないから、心配するには及ばない。（卜裏を返して見て、よく〳〵見てびつくりなし、）もし若旦那、この番號を御覧なされませ。
半次　誠にこれは同じ番號。（卜兩人きつと思入、長次合點の行かぬこなしにて、）
長次　もしお客さま、その札がどういたしましたかな。

徳助　さあ、ちつと是れには譯があるが、さうして是れをこなたにくれた、客といふのは何者だ。
長次　貰つたお客は年の頃、二十五六のお侍に、十七八の人柄のいゝ娘を伴ふ二人連れ。
半次　それぞ正しく尋ねる敵。（トずつて立上り、足の痛む思入にて、）あいたゝゝゝ。
　　ト床几へ掛ける、徳助心の急く思入にて、
徳助　して、其客は何處へ行つたか、其行き先きは聞かなんだか。
長次　其行き先きは聞きませぬが、今夜は箱根の湯元へいつて、慥に泊るといはれました。
徳助　むゝ、さう聞く上は湯元まで、こなたも一緒に行つて下さい。
長次　え、そりや又なぜでござります。
半次　何を隠さう其ものは、人殺しのある盗賊だ。（トきつと言ふ。）
長次　えゝゝゝ。（トびつくりして尻餅をつきおど〳〵して、）それぢやあ札をくれた人は、どゞ泥坊でござりまするか。
亭主　十兩札を惜氣なく人に遣るのは、氣前のいゝお客だと思つたが、盗んだ金ゆゑくれたのだ。
長次　とんだ金を貰つて、同類になりやあしまいか。
亭主　いや同類になら氣遣ひはないが、何にしろ引き合ひだ。（ト長次やはりぶる〳〵しながら、）

長次　これだから言はねえ事か、一朱か一分の酒手ならお貰ひ申しませうけれど、たんとのお禮は入りませぬと斷つたを、こなたが側からお貰ひ申せと勸めたゆゑ、うつかり貰つた十圓札、人を殺して取つたとあれば、どんな掛り合にならうも知れぬ、さうなる日には生業の車も引けぬわしが迷惑、これといふのもこなたゆゑ、あゝ恨めしい人だなあ。（ト叩き立ていふを徳助仲へはひり。）

徳助　あゝこれ〳〵必ず心配さつしやるな、假令不正の札なりとも其札からして敵が知れ、首尾よく望みを遂げる時はこなたに難儀を掛けるどころか、こちらから禮をしませうから、行ける所まで二人を乘せ、湯元まで行つて下さい。

長次　難儀を掛けて下さらずば、隨分急いで遣りませうが、所詮湯元まで車はきゝませぬから、小田原までお乘せ申し、車を預けまして御一緒に參りませう。

亭主　ほんにこなたの親切も、今となつては骨折り損。

長次　忘れた包みを屆けた禮に、貰つた札の番號が。

徳助　證據となつて敵の在所。

半次　忽ち知れる積惡も、

徳助　廻りは早き人力車、

長次　是れから藻搔きで、(ト鉢巻をするを道具替りの知せ、)ヤッつけようか。

ト半次郎、徳助車へ乗り、此模様よろしく馬士唄になり、道具廻る。

(湯元福住の場)――本舞臺一面の平舞臺、向う一間の床の間、續いて袋戸棚、違ひ棚、此下襖出這入り、上の方折廻し塗骨障子屋體、下手中窓のある廊下、この後山の張物にて見切り、總て箱根湯治場福住座敷の體、爰に以前の淺茅、湯あがり浴衣なりにて鏡に向ひ、化粧をして居る、お仙お駒下女にて櫛の齒を紙にて拭ひ世話をして居る、下手にお光福住の女房、世話なりにて、湯元細工の菓子鉢へ菓子を入れしを持ち控へ居る、此模様流行唄へ山おろしを冠せ道具留る。

お光　只今はお茶代を下さりまして、有難う存じまする。

淺茅　御丁寧にお禮をば、お恥かしうござりますわいなあ。

お仙　お上さんからよろしくお禮を、おつしやつて下さりませ。

お光　それは〳〵女子共まで、御祝儀を下さりまして有難う存じまする。

淺茅　男と違つて女連れは、お世話勝ちでござりますわいなあ。

お光　どういたしまして、何のお世話がござりませう。是れはお口には合ひますまいが、山中のてゝ打

た栗、お笑ひ草に召上つて下さりませ。

淺茅　おゝ打栗とは珍らしい、よい物を下さんしたなあ。

お光　これ〱お仙、お客さまのお召物をどうしやつた。

お仙　はい、次の間へ掛けて置きました。（ト此内淺茅白粉の包みを取つて、）

淺茅　今お内から下さいました、此の薄櫻といふ白粉は、よい白粉でござりますな。

お光　それは今度東京の湯島切通しで、糸屋喜久松といふ糸店で弘めます薄櫻といふ藥白粉、うす化粧には何處のより一番よろしうござります。私どものお得意ゆゑ、たんと參つて居りますゆゑ、お遣ひ料に差上げませう。

淺茅　それは有難うござりますわいなあ。

お光　只今御膳を差上げますれば、御ゆるりと遊ばしませ。これ〱お駒、旦那さまへお浴衣を差上げたか。

お駒　はい、風呂場へお上げ申しました。

お光　よく氣を附けてお上げ申しや。（ト下手襖の内へはひる、此内淺茅顏を直してしまひ、）

淺茅　お世話ながら此鏡を、片附けて下さんせ。

お仙　畏りました。（トよろしく片附ける、）秋の半でござりますれば、山家はお寒うござりますから、お湯冷めのせぬうち、お召替をなされませぬか。

淺茅　ほんに浴衣を今のうち、着替へてしまひませうわいな。

お仙　左様なら、お召物を。（ト立ち掛るを、）

淺茅　いえ、次の間で着替へませうわいな。

お仙　こちらへ、お出でなされませ。

ト　お仙先きに淺茅上手障子屋體の内へはひる。下手より前幕の大藏、傳八出來り、

大藏　黒澤氏、よい金の蔓に取り附きましたな。

傳八　いかにも、酒匂川の川端で、會計方の鳥越氏に兩人ともまかれてしまひ、今宵の泊りの手當てもなく、如何はせんと思ひし所、三枚橋で見掛けた門三。

大藏　正しく此家へ泊りの樣子、師匠の娘を引ッ淩ひ駈落ちいたす弱身へ附込み、追手の積りに言ひ掛り、一議論に及んだ上路用の種を奪ひ取る、この計略は如何でござる。

傳八　それは至極の策でござる、然し彼等兩人は何れへ參りましたかな。

ト　兩人四邊を見廻す思入、下手より以前のお光出來り、

お光　もし〳〵あなた方、此お座敷は外のお客さまがお出でなされまする、あなた方は御自分の御座敷へお出でなされませ。

大藏　こりや〳〵女房、爰の座敷へ參つたは、ちと用事があつてのことだ。

傳八　宵に泊つた二十五六の男と十七八の娘、あの二人連れに談判いたしたい事があるのだ。

お光　左樣でもござりませうが、餘所のお座敷へさうつか〳〵お出でなさいまして、もし間違ひでもあつては濟みませぬ、どうぞあちらへお出でなされて下さりませ。

大藏　いや〳〵決して心配いたすな。假令間違ひにならうとも、其方に難儀を掛けることではない。

傳八　兎やかう申さず捨てゝおきやれ〳〵。

お光　いえ〳〵、捨てゝはおかれませぬ、是非ともあなたの御座敷へ、お出でなされて下さりませ。

大藏　はてさて、分らぬ事を申す奴ぢやな。

傳八　其やうな事を申さずとも、ちよつとあの客に逢はしてくりやれ。

お光　いえ〳〵、お逢はせ申すことは出來ませぬ。（ト兩人立腹の思入にて、）

大藏　やあ此奴、譯を申すに聞入れぬ死太い奴、其方が逢はせぬとて、面會せずにはおかぬぞよ。

傳八　何と赤垣氏、こりや門三郎が我々を恐れ、此女房に斷らせて、面會いたさぬ所存と見えます。

大藏　いかさま、左樣でござらう、此上は手短に奥へ踏込み家搜しなし、

傳八　門三郎を、

兩人　引き出しくれん。(ト兩人きつとなる、此時奥にて、)

門三　おいや船岡門三郎、只今それへ。

兩人　何と。(ト合方になり、下手の襖を明け、以前の門三郎浴衣裝、湯あがりのこしらへにて出で、)

門三　これは／＼赤堀氏黑澤氏、拙者が旅宿へようこそ御入來、只今御挨拶仕つれば、暫くお控へ下されい。(ト門三郎悠々と立上り、お光手傳ひ着物を着替へる、其内大藏傳八目と目を見合せ、いろ／＼思入、お光は浴衣を持ち奥へはひる、門三郎帶をしめてよろしく住ひ、)さて暫時の失敬、御兩所とも、御免下され。(トよろしく思入。)

大藏　だまれ門三、師匠の娘を勾引し、落着き拂つた其挨拶は、人も無げなるいたし方。

傳八　破門となりし上からは、同席いたすも穢らはしい。なぜへいつくばつて挨拶せぬのだ、近頃以て、

兩人　無禮千萬。(トきつといふ。)

門三　その御立腹はさる事ながら、各々方とも是れまでは同じ師匠の門弟にて、同席なせしそれがしゆゑ、申さば日頃のお心安立て、無禮の段は幾重にも御高免下されい。して、御兩所には何故あつ

て、態々拙者の旅宿を尋ね、御入來ありし其の仔細は。
大藏　その仔細は知れたこと、大恩ある師匠の顔へ泥をなすりし門三郎、淺茅諸共跡追つかけ、引き連れ參れと師の仰せ。
傳八　それゆゑ態々東京より、路用を費やし參りし我々、爰で逢ひしはお手前の運の盡きと申すもの。
大藏　いざ、此上は我々と、同道なして東京なる、師匠の宅までお越しなされい。
傳八　いやとあらば兩人とも、繩を掛けても引ッ立て參る。
大藏　思案定めて。
兩人　挨拶し召され。（トきつといふ、門三郎思入あつて、兩人が巧み事と推察せしこなしあつて、）
門三　何事かと存ずれば、仰々しき其のお詞、いかにも若氣の誤りに師匠の娘淺茅どのと密通なせし門三郎、是れまで跡を晦して逃げ延びたれど御兩所に、斯く出逢ひたる上からは最早免る〻場合にあらず、よしやお頼み申したとて、態々追手にござつたからは見のがしめさる謂れなし、元より犯せし罪科ゆゑ、捉へらる〻は天の罰、兩人ともに東京へ御引立てなされい。（ト態と覺悟せし思入）
傳八　む〻、すりや貴殿には先非を悔み、追手に參りし我々に、引立て參れと申さる〻か。
大藏　流石は武士の端くれとて、未練殘さぬ健氣な料簡。

傳八　あの、いよ〳〵東京へ引かれて參る御所存とな。

門三　大恩受けし石濱どのへ恥辱を與へし門三郎、假令手討に逢ふとても師匠の仕置を受ける所存、いざ御兩所にはそれがしを、東京表へ御引き下され。（ト大藏傳八顏見合せ思入あつて、）

大藏　いやなに門三どの、其の覺悟は天晴ながら生は難く死は易し、篤と分別いたされよ、我々ども〻舊友の誼を思へばそこ許の、惡いやうには計らふまい。

傳八　假令師匠の命なりとも、箱根邊まで尋ねしが出逢ひ申さぬと申さばそれまで、見のがしくれよ〳〵我々へお頼みあれば兩人とも、

大藏　そこが譬に申す如く、水心あれば魚心。

傳八　かやうの事には彼の償ひ金、俗に申す口塞げといふ儀もござれば、貴殿の心一ッにて如何樣にもなる儀でござるわ。

門三　御親切なるお詞ながら、とても運命盡きたるそれがし、此期に及んで一命惜しみ、此身を隱す所存はござらぬ、さ〻師匠の許へ御引き下され。（ト態と覺悟の思入。）

大藏　はてそれは餘りな短慮でござる、多分な事は申さぬから、償ひ金を是れへ出し、何れへなりとも立退いて、淺茅どのと夫婦になり、生涯樂に暮すのが、上分別と申すもの。

傳八　さゝ、我々が詞に附き、罰金にて事を濟まして、身の安泰を計らはれよ。

大藏　これさ門三どの、

兩人　如何でござる〳〵。（ト門三郎思入あつて、）

門三　その罰金は、差出しますまい。

兩人　何と。

門三　まこと朋友の誼を思ひ助けんといふ心なら、償ひ金に拘はるべきや、察する所御兩所には師匠の娘を連れ退きし、門三郎が越度を附込み、金をゆすらん巧みごと。

兩人　や。

門三　金子を惜しむにあらざれど、斯かるあざとき計略にうか〳〵乘つて罰金を、騙り取らるゝ其時は恥辱に恥辱を重ぬる道理、底の底までそれがしが見抜きし上は是非なしと、思ひあきらめ御兩所とも、疾々この場を歸られよ。

大藏　やあ、言はれな、其の雜言。

傳八　すりや我々を、騙りといふか。

門三　おゝ金子を望むが騙りの證據、かゝる開化の世の中に、人を欺く卑劣の振舞、その舊弊はお止め

なされい。（トきつと言ふ。）

兩人　もう此上は。

ト兩人刀を拔き切つて掛るを、門三郎ちよつと立廻り傳八の刀を奪ひ、門三郎兩人を散々峯打ちにうち据ゑる、ばた／＼になり、奥よりお光書置を持ち走り出て、

お光　もし旦那さま、奥にお出でなされました、あなたのお連れのお孃さまが、此の書附を跡へ殘し、何處へかお出でなされましてござりまする。

門三　なに、淺茅どのが何れへやら。（ト件の書置を手に取り見て、）「書置の事。」やゝ、書置とは合點の行かぬ。（ト手早く開き見て、）何々、「私事門三さまと不義いたし親を捨て立退き候所、途中にて赤澤黑澤の二人に出逢ひ門三さまの御身の難儀になり候も全く私から起りし事ゆゑ、淵川へ身を沈め申譯いたし候、其替り門三さまの罪お許し下され候やう御願ひ申し上げ參らせ候」父上さま母上さま、淺茅より。」やゝゝゝ、扨は此場の樣子を立聞き、二人を誠の追手と思ひ、其身を捨てゝ門三郎を助けくれよと親への賴み、淺茅どのを死なしては、恩ある師匠へ濟まぬ義理、跡追つかけて少しも早く。（ト此内大藏傳八體の痛む思入、足腰などを擦り居て、此時また立上り、）

兩人　どつこい遣らぬ。（ト又門三郎に切つてかゝる、門三郎兩人の腕を押へ、きつと留める、）

お光　斯ういふ内に男どもを、追手にかけてお孃さまを、お助け申すが何より近道。
門三　御内儀、必ず賴みましたぞ。
お光　少しも早く、さうぢや。

ト言ひ捨てお光奧へはひる。大藏傳八振挖つてまたちよつと立廻り、門三郎兩人を見事に投げる、兩人叶はず拔身を持ち、這々の體にて下手へ逃げてはひる。

門三　何はともあれ、氣遣ひなるは淺茅どの、我れも共々跡おつかけ、さうぢや。

ト行かうとする、此時ばた〳〵になり、下手より以前の長次走り出で、門三郎の胸倉を取り、

長次　おゝ、さつきの旦那、もう何處へも遣りませぬぞ。（ト門三郎びつくりして、）
門三　こなたは晝の車屋どの、手前を捉へて何とさつしやる。
長次　何とするどころぢやない、お前さまゆゑとんだ引合になりましたぞ。
門三　そりや何の引合かは存ぜぬが、手前はちつと心の急くことがあれば、まあ爰を放さつしやれ。
長次　いや〳〵、どうあつても放さぬ〳〵。（ト武者ぶり附く。）
門三　えゝ、こなたは氣違ひぢやな。

ト門三郎無理に振放す、此時下手より半次郎下緒にて襷をかけ、德助も甲斐々々しきこしらへにて、

兩人脇差を持ち出で詰寄り、

半次　親の敵、

德助　主人の敵、

兩人　おのれ覺悟。

ト兩人左右より門三郎に切つてかゝる、門三郎煙管にてあしらひ、半次郎足の痛む思入、德助氣遣ふ思入、長次はうろ〳〵して氣を揉むこと、門三郎兩人をきつと留めて、

門三　思ひも寄らぬ敵呼はり、此身に取つて覺えはないぞ。

半次　やあ、覺えないとは卑怯な一言、しかも當月八日の夜本所一の橋の袂に於て、父半左衞門を殺害なし、

德助　其時所持の七十圓、盗み取つたで、

兩人　あらうがな。

門三　合點の行かぬ其の詞、手前が人を殺せしとは、それには何ぞ證據があつてか。

德助　おゝ證據といふは大磯の、茶見世に於てこなたから、此車曳が貰ひし十圓、慥に覺えがあらうがな。

ト徳助以前の紙幣を出して見せる。

門三　いかにもそれなら車屋が乘せし車に置き忘れし、包みを屆くてくれしゆゑ、その禮として遣はせし、其金札がいかゞいたした。

長次　如何したもよく出來た、盗み物をおれにくれ、詮議にあつた其時に、人に罪を着せる氣か、いや、見掛けに寄らぬ太え人だ。

半次　さあ、人殺しの詮議はその札の裏に記せし番號にて、手帳へ控へし割符の番數。

徳助　まだ此外に懷中の札を殘らず是れへ出し、その番號を一々に、改め見るが何より證據。

門三　おゝ、所持の紙幣に疑念があらば、此場の面晴れ改め見ん。（ト門三郎包みの内より殘りの十圓札を五枚出し、件の帳面へ引合せ、皆々見る事あつて、）やゝ、こりや是れ殘らず違はぬ番號。

長次　扨こそいよ〳〵怪しい其札、

徳助　して、此れは何れから、

半次　こなたの手にはひりしぞ。

門三　さあそれは。（ト差し詰まる。）

徳助　一圓二圓と事違ひ、斯う纏つた十圓札、出所の知れぬ事はあるまい。

半次　さあ、何方より請取りしぞ。

門三　さあ、思ひ掛けなき事よりして、東京に於て手に入れど、その先方の姓名は。

德助　存ぜぬと言はるゝか。

門三　近頃不念な事ながら、その姓名は存じ申さぬ。

半次　それを知らぬが、敵の證據。

德助　その人殺しは我なりと、包み隱さず、

兩人　白状いたせ。

門三　何やう敵と言はるゝとも、其の人殺しの覺えはない。

德助　しらしらしい其の詞、殺した覺えないならば、何故この札を所持してござる。

半次　それともこなたが殺さぬといふ、何ぞ慥かな證據がござるか。

門三　さあ、それは。

德助　言譯なければ親旦那を、殺して取つた札なるか。

門三　さあ、

半次　言譯あるか。

門三　さあ、
兩人　さあ、
皆々　さあ〳〵〳〵、
徳助
半次　な、何と。（ト双方より詰寄る、是れにて門三郎思入あつて、）
門三　此身の恥辱を思ふゆゑ、此の十圓札の手に入りし仔細を包み隠せしが、先づ一通りお聞き下され。（ト枠つた合方になり、）何をか隠さん、それがしは元舊幕の昵近にて、船岡門三郎と申す者、劍道の師と頼む石濱氏の娘淺茅と、互ひに若氣の至りより親の許さぬ不義をなし、折がなあらば申し請け妻になさんと思ふうち、斯かる事とも師は知らず他に婚姻の約束なし、印の來るに家出なし終に迫つて大川へ其身を投じて死するとあるゆゑ、我ゆゑ一命捨てさせては大恩受けし師へ對し濟まざる上に一ツには、言交したる義理立たず、倶に死なんと覺悟を極め、入水なさんとせし折柄、思ひがけなき後より抱き留められしは年の頃五十に近き町人體、夜目にもそれと覺えあるは劍酸漿の紋附きし小紋の羽織を着せし仁が、眞身も及ばぬ二人へ異見、死を止まつて何れへなりと一先づ其身を隠せよと、外へ用立つ七十圓旅の入費と活計の、助けに惠みくれしが此札、餘り事の忝けなさに何れの土地へ落着くとも御禮の書狀を差上げたし、所はいづくで姓名はと、再應

聞けど緣あらば又重ねてと其名を名乘らず、とかうする內更ける夜に本意なく其場を別れしが、金子を惠みくれたるは、こなたの親御であつたるか、非業な死をばいたされしとは、我に於ても愁傷いたす。

ト門三郎よろしく思入にていふ。

半次　年齡といひ羽織の紋、劍酸漿とあるかちは、親仁さまに疑ひなし。

德助　七十圓を貰ひしとは、此の場をのがれん僞り事、殺害なして奪ひしと、

半次　包み隱さず、

兩人　白狀いたせ。（トきつとなる。）

長次　まあ〳〵お待ち下さりませ。今言譯のお詞に、石濱さまとおつしやつたは、もしや淺草堀田原の右膳さまではござりませぬか。

門三　いかにも堀田原の石濱氏、それをこなたが何ゆゑに。

長次　御宅へ上つた事はなけれど、噂に存じて居りまするは、元私は御門弟の、鳥越さまの家來ゆゑ。

門三　すりや其方は甚內どのゝ、元の家來にてあつたるか。

半次　やあ、其主從の名乘りより、

徳助　敵と名乘つて、
半次　勝負なせ。（トきつと詰寄る、門三郎思入あつて、）
門三　一旦死する一命を助けられたる恩人ゆゑ、餘の儀で一命お望みなら、決して惜しみはいたさねど害せし覺えあらざれば、敵となつては討たれ難し。
半次　その言譯は暗い／＼、見ず知らずの我が親に、假初ならぬ七十圓惠みを受けなば住所名所、押しても聞かねばならぬ筈。
徳助　こりや若旦那のおつしやる通り、それを聞かぬが胡亂の一ツ、殺して取つたに相違ない。
ト長次思入あつて、
長次　成程これは不念ながら死する覺悟のお二人ゆゑ、顚倒なされてお名前をお聞きなされぬ事であらう、既に最前私も十圓札をお貰ひ申し、嬉しい餘りにお名前をお聞き申さぬやうなもの。
半次　やあ、主人の因みに今となり、道理を附けし肩持顏。
徳助　假令何と言ひ拔けても、殺害したる證據は明白。
半次　のがれぬ所と覺悟して、
徳助　恨みの刃に、

兩人　命を渡せ。（トきつとなる、此時奥にて、）

幸兵　双方共に控へい。

皆々　や、あの聲は。

ト半次郎德助ためらふを長次留める。合方になり、奥より幸兵衞、散髮背割羽織、まち高袴役人のこしらへ、鞭を持ち、捕手二人十手捕繩を持ち、手丸提灯を持ち出來り、お光附添ひ出て來る、

門三　して、あなたさまは。

お光　此箱根をお見廻りの、お役人さまでござりまする。

トこれにて皆々下手へ來り、平伏する。幸兵衞高床几へ掛ける。

幸兵　最前より此所へ旅人改めに罷り越し、樣子は逐一承はる、半次郎が父半左衞門本所一の橋の袂にて殺害されし其事件は、既に東京日々新聞に記載あつて承知いたすが、士民共私に刀劍を交ゆるは穩かならざる事により、仇討の儀は御禁制、さればそち達兩人が敵と覘ふ門三郎、篤と吟味を遂げし上、まこと人殺しに相違なくば、東京表へ差送り、彼の地に於て斬首なし敵は取つて下さるゆゑ、兩人共左樣に心得い。

半次　すりや、現在親の敵ながら、

徳助　討つ事は叶ひませぬか。
牛次　徳助、
徳助　若旦那、
牛次　はて、是非もない、
兩人　事ぢやなあ。（ト兩人無念の思入、幸兵衞お光に向ひ、）
幸兵　して、門三郎が同道せし、彼の女子は如何いたした。
お光　其お連れの御女中は、親御への言譯に、淵川へ身を沈めるとて此家を脱け出し、今以てかいくれ行方が知れませぬ。
長次　すりや石濱さまのお孃さまには、命を捨てるお覺悟とは、はておいたはしい身の成行き。
幸兵　然し身共の同役ども晝夜此邊を見廻れば、取押へんも計り難し。何は差しおき門三郎を、東京表へ差出さば、事明白にお調べあらん。
門三　其御詮議を受くるのも、元はといへば此の身の不覺、今更悔いて返らねど七十圓の惠みを受けし其恩人の姓名を、承はらぬは我が誤り。
長次　元の主人の御朋輩とは夢にも知らず跡を附け、持込んで來た此騷ぎも、思へば車へ其包みをお忘

れなされぬ事ならば、斯ういふ事にもなるまいに。
半次　それも札より顯はれしは、
德助　人を殺せしこれ天命、
お光　善か悪かは知らねども、
幸兵　事落着に及ぶまで、門三郞は大事の囚人。
德助　とは云へ、敵を。(ト立ち掛るを、)
半次　やあ、上の御布告辨へぬか。(トきつといふ。)
幸兵　はツ。(ト餘儀なく控へる。)
德助
半次　それ、囚人を少しも早く。
幸兵　心得ました。(ト繩を持ち立ち掛るを、長次見て、)
捕手　そんなら、いよ〳〵。
長次　直さま役所へ。
幸兵　いざ、繩かけて。(ト門三郞居直るを道具替りの知せ、)お引き下され。
門三　トよろしく思入、時の太鼓になり、半次郞立ち掛るを德助留める。引ぱりの見得にて、此道具廻る。

（箱根湯元道の場）――本舞臺一面の平舞臺、眞中に杉の大樹、上下岩の張物にて見切り、後岩山の間に杉の梢、遠山を見たる遠見夜るの景色、上下杉の立木、日覆より同じく釣枝、總て箱根湯元道の體。

爰に四ツ手駕籠をおろし○△の駕舁兩人立ちかゝり居る、時の鐘山颪にて道具納まる。

△もしお客さまえ、草鞋を切つてしまひましたから、ちよつと待つて下さいまし。

○こウ久次や、立場へ行くなら一緒に行かう。

△何しに手めえ行くのだ、草鞋なら買つて來てやらうか。

○草鞋ぢやあねえが、小田原で鰹のたゝきで飲んだせゐか、べらぼうに咽喉が渇く、水を一ぺい飲んで來てえのだ。

△それだといつて山中へ、お客ばかり置いちやあ行かれめえ。

○なに、旦那も酒氣で白川夜舟、行つて來ても大丈夫だ。

△それぢやあ一緒に出掛けよう。

○眞闇だ、提灯を持つて行かう。

ト山おろしにて兩人下手へはひる、本釣鐘誂への合方となり、上手より以前の門三郎縄に掛り捕手縄を取り悄々と出る、歩き一人箱根湯元といふ弓張提灯を持ち、長次附添ひ幸兵衛警固して出來り、

幸兵　こりや〳〵待て。

捕手　はツ。（ト控へる。）

幸兵　門三郎が連れの女を、同役共が詮議なす内、暫く是れにて待合さん。

ト幸兵衛床几へ掛ける、門三郎も岩臺へかける。長次下手へ控へる。

長次　もし旦那さま、不慮の事になりましたが、何ぞおつしやり置く事がござりますなら、私へおつしやりませ。

門三　此期に及んで別段に、言ひ置くことはなけれども、身に覺えなき疑ひうけ、繩目に逢ふが殘念至極。

長次　御尤もにござりまする、其お疑ひも天道さまが誠をお照しなされますれば、やがて晴れるでござりませう。

門三　それも師匠と親の罰、悔む所はなけれども、身の疑ひを晴らして死にたい。（ト兩人愁ひの思入）

長次　お道理でござりまする。（ト長次泣く、此時捕手花道よりばた〳〵にて出來り、）

捕手　はツ、申し上げます、先刻より御詮議の女、三枚橋より身を投げんといたせし所、丁度折よく見當りしゆゑ、直樣取押へましてござりまする。

長次　それでは却つてお命には、別條ないとはいふものゝ、是れから先きは獄屋の責苦、あゝおいたはしい事でござりまする。

門三　すりや、淺茅どのにも、繩目をうけしか。

捕手　早速繩かけ、いましめ置してござりまする。（ト門三郎これを聞き、）

幸兵　すりや、御用便に相成りしか。

幸兵　その女召捕る上は此の囚人、その所まで召連れい。

捕手　はツ、立ちませい。（ト矢張本釣鐘、風の音トヒヨになり、日覆より雁三羽程おろす、是れを見て、）

門三　折しも告ぐる後夜の鐘、あはれに雁の啼き渡る空も涙の雨催ひ、

長次　繩目にかゝるお二人は、別れ〳〵の諸翼、

門三　色に溺れし不覺より、恥辱を受けし今日の災難、

長次　それも御身の濡衣ゆゑ。（ト長次つか〳〵と寄らうとするを、）

捕手　えゝ、控へ居らう。

長次　はツ。（ト控へる、門三郎是れを見て、）

門三　愚癡を申すは、未練なるぞ。

幸兵　それ引ッ立てい。

捕手　はッ、きり〳〵歩め。

ト木釣鐘うれひ三重にて、門三郎しを〳〵と俯向き、幸兵衛附き花道へはひる。長次跡にてあゝいたはしい事だといふこなしあつて、足早に跡を追つて花道へはひる。本釣鐘、合方替つて駕籠の垂れを上げる、内に前幕の甚内、これに乘り居て、伸びをしながら、

甚内　あゝよい心持に一睡したが、木の葉を落す夜嵐に襟許寒く目が覺めて、朧に聞いた今の話し、夜目に姿は分らねど、聲音は正に擊劍の朋友なりし門三郎、何ゆゑ繩目に逢つたるか、跡追つかけて樣子を聞かん。（ト蒲團の下にある雪踏を出し、これを履き刀を差し行かうとして思入あつて、）いや、おれと違つて物堅く、惡い道へは染まぬ男、大方今のは人違ひ、聲音の似たもの往々あれば、聞き違へであらうわい。（ト思入あつて駕籠へ臂を掛け居る、下手より駕籠舁出來り、）

△　旦那、お目覺めでござりますか。

甚内　水を一杯飮まうと思つて。

△　そりやあ生憎でござりますが、

○　爰には清水もござりませぬ。

甚内　はてさて、それは殘念な。（ト風の音にて、ばら〳〵と日覆より小豆を落す。）
△○　おゝ冷てえ、今のは雨か。
甚内　秋霧深くはら〳〵と、落ちしは木々の雫であらう。
兩人　えゝ。（ト合點のゆかぬ思入、）
甚内　醉覺めには。（ト懐から片手を出し頬を叩くな木の頭、）あゝ、いゝ心持だ。
ト世話にくだけて言ふ、時の鐘、山おろし、浮いた合方にてよろしく、

ひやうし幕

大切

祇園社境内の場
木屋町浪宅の場
鎌倉問注所の場
神戸波戸場の場

（役名――鳥越甚内、結城七郎朝光、船岡門三郎、正直長次、秩父屋代理人徳助、赤堀大藏、黒澤傳八、刀屋五郎兵衞、道具屋六兵衞、牢番早太、同兵次、供男、町役人、同心三人、合長屋佐次兵衞。

石濱娘淺茅、祇園の仲居二人、茶屋娘。」

（祇園境内の場）――本舞臺一面の平舞臺、上の方石の鳥居、祇園社といふ額を掛け、上下とも石垣の上に同じく玉垣、所々に石燈籠、楓の立木、日覆より同じく釣枝、下の方に葭簀張りの出茶屋、茶道具よろしく飾り、床几三脚並べ、總て西京祇園社の體、爰に前幕の五郎兵衛の刀屋、羽織着流し、六兵衛同じく羽織着流し、道具屋にて兩人床几へ掛け、下手床几に供男着流し、供にて風呂敷に包みし刀を持ち、○△二人赤前垂仲居にて腰を掛け、□茶屋娘にて盆を持ち立ち掛り居る、此の見得大拍子にて幕明く。（ト茶屋娘茶を汲んで、）

□　もう一ツ、お茶をお上りなさりませ。

六兵　いやお茶よりは、二軒茶屋へ行つて、早くお酒にしたいものだ。

五郎　折角姉さんが出したのにさう言はずと、さゝもう一杯茶を飲んで行きなさい。

□　おいやでもござりませうが、どうぞ上つて下さりませ。

○　もし小三さんがお待兼ねゆゑ、二軒茶屋は明日にして、

△　これから家へお出でなさんして、顔を見せてお上げなさんせいな。

供男　小三さんがお待兼ねとは、あんまりそりや油過ぎるね。

△　いゝえ、旦那さんばかりぢやない、銀さんお前も花野さんが。
○　逢ひたがつてゞござんしたわいな。
供男　そりやあお前、本當かえ。
△　何んで嘘をつかうぞいな。
供男　さう聞いちやあ二軒茶屋より、祇園町へ行きませう。
五郎　いや、今夜は小三のところへ行かずに、直に宿へ歸らねばならぬ。
六兵　何ぞ御用でござりまするか。
五郎　別に用もないけれど、遊山といへど商法半分、儲けづくで來たのだから、さう浮かれちやあ歸りに困る。
△　又そんな事をおつしやります。若しお歸りにお困りなら、小三さんがどうなりとも。
○　お前さんならしなさんせうから、今夜はお出でなさんせいな。
六兵　斯ういふと胡麻のやうだが、なぜ上方の女といふと、東京の衆に惚れるだらう。
五郎　それだから上方へ來て、土産はいつでも兩横痃だ。
△○　又そんな悪口ばかり。（ト仲居五郎兵衛の背中を叩く。）

六兵　いや歸るに困ると言ひなさるが、どうで歸りは神戸から、蒸汽船でござりませう。僅か一日一晩で横濱まで寢て行かれますから、もう四五日逗留なすつて、小三にもとつくりと顔を見せてお遣りなさいな。

供男　あんまり見たがりもしますまい。

△　お前が側からそんな事を、

○　旦那へ言つてはいけないわいな。

五郎　小三に顔を見せたいが、段々寒くなるに附け、着物はあつくなる替り、懐が薄くなつて來たから

　そんなに遊んでは居られない。

六兵　なに四五日くらゐ遊んでも、大丈夫といふ儲け口を、銀藏さんに聞いておいた。

五郎　なに、銀藏に聞いたとは。

六兵　今日さる所から村正の、こしらへ附きを直を安く、お引取りなされたといふ事だ。

五郎　さのみ儲かる品でもないが、東京から知つたお人で、據なく引取りました。

六兵　爰に御所持でござりますなら、ちよつと拜見したいものだ。

五郎　幾らにふめるか踏んで下さい。

ト供の男の持つて居る風呂敷包みより、こしらへ附きの刀を出して見せる、六兵衞取つて、

六兵 成程これはいゝ拵へだ、中は見ずとも金目貫、緣頭といひ何處といつて、申分のない代物だ。

五郎 元舊幕の御旗本で御內福であつたから、拵へなどは殘らず毛彫、十年跡なら豪氣なものさ。

六兵 幾らでお手に入つたか知らぬが、こりやあしつかり儲かります。

五郎 所が廢刀が流行るので、刀劍類は上つたりだ。

六兵 いや、上つても下つても、金所ばかりも餘程のものだ。

ト刀を見て居る、右の鳴物にて前幕の長次やつしなり、脚絆草鞋三度笠を肩へ掛け、旅なりにて出來り、花道にて、

長次 成程斯うして來て見ると、又西京は西京だけ、神社佛閣が神々と名所古跡の多い所だ。おれが古主の甚內さま、遊山といふでもあるまいが、知るべを便つて先月からこつちへお出でなすつたが不孝なお子でも御實子ゆゑ後室さまがお案じなされ、ついては今度の御大病是非逢ひたいとおつしやるゆゑ、何處においでなさる事か、以前と違つて郵便で三日で便りの出來るのに、お手紙位は御親類へお出しなさつてもよい事を、兎角御酒ゆゑ萬事が怠り、誠に困つたものだなあ。

ト思入あつて舞臺へ來る。

□　ちとお掛けなさりませ。（ト長次下の床几へ掛ける。）
長次　もう何時でござりますな。
□　只今四時を打ちました。
長次　それでは暮れるにもう二時か、大分日は詰りましたな。
□　誠に短くなりましたわいな。（ト茶を出す、長次茶を飲み、此時六兵衛刀を見て。）
六兵　見れば見る程結構だ。
五郎　すきのない拵へだね。（ト此内長次伸び上り件の刀を見て、）
長次　やあ、其刀は。（ト大きくいふ、皆々びつくりして、）
六兵　早くお仕舞ひなされませ。（ト風呂敷へ包みに掛るを、）
長次　あゝもし、ちよつと待つて下さりませ。
五郎　待てとは、何でござります。
長次　失禮ながら其刀の、目貫は金の毛彫で、三疋獅子ではござりませぬか。
五郎　成程これは三疋獅子だが、何でそれを尋ねるのだ。
長次　何をお隠し申しませう。是れは私が以前勤めた、故主の刀でござりまする。

五郎　それぢやあお前は鳥越さまに。
長次　五年跡までお屋敷に、中間奉公して居りまして、見覺えのある其の刀、どうしてそれをお前さまが御所持なされてゞござりまする。
五郎　わしは東京の刀屋だが、堀田原の先生の所で、甚内さまに兩三度お出逢ひ申した其御緣で、さつき是れは買ひましたのさ。
長次　え、そんならそれをお前さまが、お買ひなさつたのでござりますか、譬にもいふ武士の魂、刀までお賣りなさるとは、えゝ情ない事だなあ。（トわれを忘れてきつとなる。）
五郎　さうしてお前さまは、甚内さまを尋ねてこつちへござつたのか。
長次　はい、何をお隱し申しませう、たつた一人の御母公さまが九死一生の御大病ゆゑ、お知らせ申しに上りましたが、何處においでなさる事やら、御住所が知れないので、所々方々と尋ねましたが、刀をお買ひなされたとあれば、甚内さまの御住所を定めて御存じでござりませう。どうかお教へ下さりませ。
五郎　甚内さまは木屋町の、大和屋といふ米屋の裏に、借家をなされておいでなさる。
長次　左樣なら木屋町の大和屋といふ、米屋の裏に借家をなされてござりますとか。やれ／＼嬉しや、

やうやつと其御住所の知れたのも御家重代の刀から、誠に是れはお過ぎなされた大旦那さまの道きであらう。少しも早くお尋ね申し、御病氣の由をお知らせ申さん。さうだ〳〵。

ト大拍子流行唄にて、長次笠を持ち心の急く思入にて、足早に花道へはひろ。皆々跡を見送り、

五郎　今の男はとぱくさと、禮も言はずに行つてしまつた。

六兵　どうして〳〵禮どころか、茶代も置かずに行つた樣子だ。

□　何かよつほど、心の急くことがあると見えますわいな。

供男　何ほ心が急くといつて、茶代を忘れるのは惡い顏だ。

五郎　いや、其茶代はわしが上げよう。（ト紙に包んで二分やろ、□取つて、）

□　いえ、此樣にお貰ひ申しては。

六兵　これさ、金所ばかりも餘程の値打、大掘出しをなされたから、遠慮するには及ばねえ。

□　それは有難うござりますわいな。

△　二軒茶屋へいらつしやいますなら。

○　早う參りませうぢやござんせぬか。

五郎　もう日も西へ傾いたから、祇園町へ直に行かう。

供男　それは何よりよいお心。
六兵　えゝ、花野さんに逢はうと思つて。
○△　こりや、當てられなさんしたわいな。
五郎　どれ、おれも小三に此顏を、早く見せて遣らう。
六兵　成程是れは見たがつて居りませう。
五郎　そんなら仲居衆。
○△　さあ、ござんせいなあ。（ト流行唄、大拍子になり、皆々上手へはひる。此見得にて道具廻る。）

（甚内浪宅の場）――本舞臺一面の平舞臺、向う更紗の暖簾口、上手一間押入戸棚、三尺の佛檀、誂へ白木の位牌粗末なる佛具を飾り、下手鼠壁、上の方一間折廻し障子屋體、いつもの所門口、下の方路地口、後裏長屋の書割り、路地に續いて隣の家、竹窓板羽目鼠壁、總て木屋町貸長屋の體、爰に前幕の大藏傳八二升樽を持ち、門口に立掛り居る、此見得京の四季の唄にて道具留る。

大藏　鳥越氏、御在宿でござるか、赤堀大藏、
傳八　黑澤傳八、御病氣のお見舞に參つた。（ト言ひながら内へはひる。）

大藏　何ぼ取られる物がないとて、留守居もなしに明ッぱなし。
傳八　小用にでもござつたか知らぬ。
兩人　鳥越氏々々。（ト奥にて。）
甚內　只今それへ參るでござる。（ト右の合方になり、奥より前幕の甚內着流しにて出來り。）
大藏　これは隊長。
兩人　御在宿でござつたか。
甚內　久しくお目にかゝらぬが、いつもながら御酒機嫌で、お羨しい事だな。
傳八　して、御不快は如何でござる。
甚內　いつもながら同遍で困るて。
大藏　時候のせゐでもござらうが、一つはお氣の持ちやうだ、ちと亂暴をなさるがいゝ。
傳八　此間から兩人共女出入りに關係して、多分の謝物を得た所から昨夜は妓樓へ一泊なし、二日醉の飲み直しに二人連で參つたのだ。
大藤　酒は二升持參いたした、何ぞ肴を申し附け、久し振りで五德になる、鍋でも掛けてやらう。
甚內　それはよく飮みに來てくれたが、兎角鬱々氣がふさぎ、一杯遣つたらよからうと、二合買つて獨

樂に飮まうと口へ持つて來ると、酒の匂ひがいやになり、下戸になつたも同然で、一吸もいかなくなつた。

大藏　それは君にも似合はぬ料簡、高の知れたる風邪ぐらゐ、酒で紛らしておしまひなされい。

傳八　假令どんな病氣でも、愁ひを拂ふ玉箒、實に百藥の長たる、酒を飮まぬといふは愚なことだ。

大藏　さあ〳〵我等がお酌いたす、茶碗で一杯お過しなされい。

ト甚内の前へ有合ふ茶碗を突附ける、甚内酒を見て思入あつて、

甚内　不斷なら勸めずとも、引ツたくつても飮む酒だが、腹の時計が狂つたか、人の飮むのを見るのもいやだ。（ト甚内飮みたき思入を隱すこなし。）

大藏　これまで兄弟同樣に、朝から晩まで飮合つたぐでん仲間のかれこれ師、一杯いけずばせめては半分。

傳八　今日は一番强談で、四半分でもお勸め申す、是非とも口を附けて下さい。

ト酒をつぎし茶碗を突附ける、甚内匂ひを嗅ぎ飮みたき思入あつて、

甚内　假令何と言はれても、病氣ゆゑに飮めぬ酒、今日ばかりは許して下せえ。

大藏　すりや、どうあつても。

兩人　飲まれぬかな。

甚内　さあ、匂ひをかぐと。（ト飲みたきこなしあつて氣を替へ、）胸へ病がのぼるやうだ。
ト袖にて鼻を覆ひ、匂ひをかゞぬ思入、

傳八　はてさてそれでは、

兩人　是非に及ばぬ。（ト此内甚内紙入より二圓出し紙に包み出して、）

甚内　甚だこれは輕少だが、酒を飲まない償金だ。（ト大藏あけて見て、）

大藏　こりや兩人へ、一圓づゝ。

甚内　それでどこぞへ押上り、一杯飲んで歸つて下せえ。

傳八　是れは千萬忝けない、お辭儀なしに頂くといたす。

大藏　二圓出してお斷りとは、よく〳〵酒がいやと見える。

傳八　それを強てお勸め申すも、近頃野暮の至りなり。

甚内　全快したらば身の祝ひ、どこぞでしつかり飲みませう。

大藏　飲む事ならばいつ何時でも、決して辭儀はいたさぬ兩人。

傳八　又々その内お尋ね申さう。

甚内　然らば御兩所、

大藏　御全快を、

兩人　お待ち申す。（ト合方にて兩人二升樽をさげ花道へはひる、甚内跡を見送り、）

甚内　やれ〳〵二人が歸つたので、酒の匂ひがなくなつた、三度の食は喰はずとも、必ず一度は飲む酒を愼しんで、先月から病氣の積りで外へ出ず辛抱するが、今のやうに鼻の先きへ突附けられては腹の蟲が、ぐう〳〵と唾の出るほど飲みたいのを、ぢつと怺へるその苦しさ、二圓ぐらゐには替へられねえ。

ト思入、路地口より佐次兵衞やつしなり、合長屋にて出來り、

佐次　御免下さいまし、旦那はお内でござりますか。

甚内　おゝ、これはお珍らしい隣家の主人か。

佐次　ちとお願ひがござりまする。（ト内へはひり、）今東京の緣家から手紙の中へ封じ込み、新聞紙が參りましたが、不斷附合はぬ字が多く、所々の拾ひ讀みではさつぱり事が分りませぬ。御面倒でも私に讀んで聞かして下さりませ。（ト懷から東京日々新聞を出す。）

甚内　是れは東京日々新聞、記者は條野有人に落合芳幾、西田菫波、秀才の者關係なすゆゑ、當今一二

の新聞紙、見れば十三日の日附故、僅か三日で西京まで屆くといふは早いことだ。

佐次　以前三日の早便りも、五日位かゝりましたが、郵便局が開けてより、僅か三日で西京まで、屆く
上に賃錢限りは安いものだ。

甚内　四日跡に東京であつた事が、直に新聞で知れるといふは、實に爰らが開化の所だ。

佐次　どうか御面倒でも此件を。

甚内　どれ、讀んで聞かせませう。（ト甚内新聞を讀み聞かせ、）此の御布告は下々を思召しての御仁惠、
有難い事ではないか。

佐次　さう承はつて見まするると、誠に有難い事でござりまする。

甚内　一ヶ條書留めて置きたいことが是れにあれば、暫時借用申したい。

佐次　どうぞ私には讀めませぬから、御ゆるりと御覽なされませ。

甚内　それは忝なうござる。

佐次　旦那さま、有難うござりまする。（ト門口を出て、）どれ御布告の有難さを、女房に話して聞かせま
せう。

ト佐次兵衞下手路地口へはひる、跡甚内新聞を見て、

甚内　此新聞に記載ある船岡門三郎といふは、我が劍術の同門にて師匠の娘淺茅どのと、豫て密通の噂ありしが、何ゆゑあつて家出なし人を害せし事なるか。捕縛されしは是非もなし、思へば行程百三十里の西京に居て舊友の、違變を知るも新聞紙、世界になくてならざるもの、斯かる有用も舊習を捨てざるゆゑに洋人を敵のやうに思ひしが、輪船、列車はいふも更なり、傳信器械の便利の自在、總て究理の詳法を發明なして開化に進み、今日おのが頑愚を悟り誠に後悔いたしたり。

ト思入あつて佛檀の白木の位牌へ水を上げ、回向の思入、やはり京の四季の唄になり、花道より以前の長次出來り、花道にて、

長次　今表の米屋で聞いたが、甚内さまのお住居は、慥に向うに違ひない、あれへ參つて尋ねて見ようかな。

(ト長次舞臺へ來り門口にて、)ちとお頼み申しまする、鳥越甚内さまのお宅は、こちらでござります

甚内　甚内は手前だが、どれからござつたな。

長次　おゝ、さうおつしやるは旦那さまだ。(ト長次門口を明ける、甚内見てびつくりなし、)

甚内　や、思ひがけない長次か。

長次　やう／＼と、尋ね當てました。

甚内　まあ、何にしろこつちへ來やれ。

長次　眞平御免下さりませ。（ト合方になり、内へはひり、下手へ住ふ。）

甚内　よく此の住居が、手前に知れたな。

長次　誠に知れ兼ねましてござりまする。（ト長次手を突き、）先は旦那さまにも、御機嫌おろしうお目出たうござりまする。

甚内　聞けば東京も此の秋は、惡い病が流行つたさうだが、煩ひもせなんだか。

長次　仕合せと私は風一ツ引きませぬが、流行病を煩つて大分人が死にましたが、中にも坂東三津五郎岩井紫若も死にましたが、惜しい事をいたしました。

甚内　當時女形の拂底だのに、嘸芝居でも困るであらう。（ト此内長次甚内の顔を見て、）

長次　お珍らしく旦那さまには、御酒氣がとんとござりませぬな。

甚内　此間から謹愼して、酒はさつぱり止めてしまつた。（ト長次何をいふかといふ思入して、眉毛へ唾を附ける。）長次、何をするのだ。

長次　又お騙しなさるゆゑ、眉毛を濡らして居りまする。

甚内　いや今度ばかりは僞りなく、二月越し一吸も酒を飲んだ事がない。

長次　いえ〳〵、それは僞りでござりまする。
甚内　そりや何ゆゑに。
長次　あなたには、魂がござりませぬゆゑ。
甚内　何と申す。（ト誂への合方になり、）
長次　大旦那さまより御讓りの目貫は金の三疋獅子、緣頭から小柄まで赤銅斜子の御紋散らし、中身は名に負ふ村正の、その魂をあなたには、どうなされましてござりまする。
甚内　むゝ。（ト甚内ぎつくり思入。）
長次　五百石の御知行は御上地なされし事ゆゑに、いたし方もござりませぬが、御所持の金子はいふに及ばず、衣類諸道具賣拂ひ何百兩といふ金を皆酒ゆゑにお遣ひなされ、天にも地にもお一人のお年重ねし御母公さまが、御里方の御厄介におなりなさるゝおいとしさ、何ぼ生れしお家でも、他人もあればお心遣ひ、其の御苦勞がたゝまつて、此の間より御大病。
甚内　なに、母人には御大病とな。
長次　斯かる御不孝なあなたをば、血を分けしとて御母公さまが、どうぞ悴に息あるうち、たつた一目逢ひたいとおつしやるゆゑに遙々と、此の西京まで參りまして雲を當なる尋ねもの、やう〳〵今

日祇園の社で此お住居の知れたるも、御所持なされしお刀をお拂ひなされし刀屋に、計らず出逢つて知れましたが、御先代よりお讓りの武士の魂のお刀まで、お酒になつてしまふとは、え丶、お情ないお心ぢやなあ。（ト長次涙を拭ひながら異見なす、甚内面目なき思入あつて、）

甚内　是れまでおれが放埒も、そちを度々騙せしゆゑ、其疑ひは尤もなれど、父が讓りの千壽院村正の刀、賣拂ひしは此身の害を除かん爲。

長次　そりや何ゆゑでござりまする。

甚内　既に先年脱刀の儀勝手次第と仰せ出され、華族方を始めとして官士一統無刀となりしに、武士たるものが脱刀なすは本意にあらずと我輩は、開化に進まず舊習を捨てざるゆゑに散髮なさず、腰に長刀を帶せしゆゑ、然も九月八日の夜酒狂の上にて人を害し、其後藝妓の宅へ參り强談なして金策なし惡事露顯に及びしゆゑ、其金子にて當地へ來り、此裏長屋へ寓居せしに知恩院の說敎へ人に誘はれ參りしに、酒を戒しむ說話を聞き、初めて此身の非を知りてそれより病氣の體になし酒をふッつり止めたれば、胸にさへぎる惡事の行ひ、中にも何の科なき者を殺害せしは誤りゆゑ、あれ見やれ、佛檀の内に飾りし白木の位牌、殺せし其日を命日に朝暮供養をなすに附け、此村正の刀がなくば其夜人は殺すまじ、實に帶劍を遠ざくるは天下靜謐のこれ基る、それをもどきて長

刀を帶せしは則我が誤り、無刀にしかじと村正をそれゆゑ今日賣拂ひ、平民となり商法にて身の活計を立つる所存、僞りならぬ確證は父が譲りの刀ゆゑ、母へ此の金送らんと、手紙を添へて封じ置きたり、是れにて疑念を晴らしてくりやれ。

ト甚内ぢつと思入にていふ、長次嬉しき思入にて手を打ち、

長次 おゝよく御改心なされました、假令是れまで何程の御放埒をなされましても、締る時にお締りなされば御母公さまも御安心と申すもの、其話しに附きまして、心當りもござりますが、いづれであつたか八日の晩、人を殺害なされましたか。

甚内 午後三時ごろ兩國で、そちに金子を借りし折、御船藏の湯場へ行き十二時過ぎまで酒を飲みぶらぶら歸る道すがら、一の橋のだら／＼下りで、年の頃は五十に近き町人體の者に出逢ひ、我が突當りしを醉に乘じ、武士たるものに慮外な奴と一刀の下に切つて捨て、無益の殺生いたせし後悔しての事なるぞ。（ト長次これを聞き、扨はといふ思入あつて、）

長次 扨は本所一の橋で、八日の晩に人を切つたは、旦那さまでござりましたか。

甚内 むゝ、酒興の上で計らずも、身共が殺害いたしたが、なぜ其方は驚くのだ。

長次 さあ、思はず知らず驚きましたは、其人殺しの一件でしかも二人まで入牢なし、窮命なされてゞ

ございまする。

甚内　して、それは何者が。

長次　石濱さまのお孃さま淺茅さまに、御門弟の門三郎どのでございまする。

甚内　して〳〵、それは如何なる譯で。

長次　かねてお二人言交し末の御縁を樂しみになされし所、外々へ御縁が極まつて是非なくも添はれぬ切羽に家出なされ、一の橋から身を投げて既に死なうとなされしを、通りの人が引き止め異見を加へ其上に七十圓といふ金を惠みくれたを旅用となし、お二人さまが靜岡へお出でなさるゝ其途中で、切られし人の子息に出逢ひ、御所持の札の番號から事顯はれて本所で殺して金を取つたと言はれ、全く殺さぬやうなれど證據なければお二人とも、繩に掛つて東京で入牢なされてゞございまする。(ト甚内びつくりなし、)

甚内　すりや大恩受けし師匠の娘、又朋輩の門三郎に我ゆゑ難儀を掛けたるか、えゝゝゝゝ。(ト思入あつて、)思へば最前隣家より、持參なしたる日々新聞、記載ありしも餘所事に我身の科とは思はざりしが、悔んで返らぬ事をなしたり。(ト思入あつて四邊へこなし、長次心得、門口の外を見てびつしやりしめる、甚内思入)して、それがしが一の橋で、殺害せしは何者なるぞ。

長次　宅は通り鹽町で太物渡世をいたしまする、秩父屋半左衛門と申すもの、其子息の半次郎が徳助といふ召仕ひと二人で敵を搜しに出て、艱難辛苦する所へかて、加へて半次郎が、それを氣病みに煩ひ附き、聞けば此頃正氣を失ひ、こつちのものではなからうと、申す噂でござりまするが、何と氣の毒な事ではござりませぬか。(トこれを聞き甚内佛檀の位牌を取り、よろしく思入あつて、)

甚内　人の難儀を聞く上は猶豫いたす所にあらず、我が害したる一部始終を官へ訴へ、淺茅どの門三郎を助けし上、人を害せし刑を受け、一命捨てなば煩ひ居る、半次郎が恨みも晴れん、片時も早く東京へ罷り越して訴へ出ん。

長次　御尤もではござりますが、其お訴への前方に一度あなたは御母公さまに、お逢ひなされて下さりませ。

甚内　いや〳〵なまなか母に逢ふ時は、却て餘計の御苦勞掛ければ、我西京に居らぬ由、母に申して立ち歸れ。

長次　それなら、どうでもあなたには。

甚内　一刻も早く我が科を電信を以て官へ訴へ、二人が獄屋の苦患を助け、幸ひ刀を賣拂ひし金子を以て神戸より、蒸汽船に乗るならば、三日の日數で横濱へ、着せば直に列車に乗り、其日のうちに

訴へ出で、人を害せし御所置を受けん。

長次　左程に思召すからは、所詮お止め申したとて。

甚内　聞き届けぬが武士の意地、一命捨てねば名義が立たぬ。（トきつといふ。）

長次　えゝひよんな事を言ひ出してお主に命を捨てさすも、あゝ此口が恨めしい。

ト長次我が手にて口の端を抓る、此時時の鐘鳴る、甚内思入あつて、

甚内　ありやもう六時、少しも早く二人の者の趣意を詳しく認めて、電信局へ一通出さん。（と有合ふ硯箱を引寄せ、巻紙に書かうとして薄暗きこなしあつて、煙草盆の引出しより早附木の箱を出し、）こりや長次、その行燈へ。（ト附木の箱を投げるを、道具替りの知せ、）燈火を附きやれ。

ト甚内思入をする、長次早附木にて行燈を點ける、時の鐘、合方にて道具廻る。

（鎌倉問注所の場）——本舞臺四間通し高足の二重、本庇本緣附、白洲階子、向う紗綾形の襖、軒口に笹龍膽の紋附きし幕を張り、上の方潜り附きの板羽目、下の方一面の柵矢來、此前突棒、刺股を飾り總て鎌倉問注所の體、爰に早太、兵次袴股立一本差し、十手をさして上下に控へ、下手に前幕の德助羽織着流しにて、後に町役人、羽織袴にて控へ居る。此見得、時の太鼓にて道具留る。

早太　通り麴町十二番地澤田半左衛門召仕徳助。

徳助　はッ。

兵次　半次郎儀は病氣の由、其方代を兼ねて出でしか。

徳助　はッ、仰せの如く半次郎儀、昨今病氣重態ゆゑ、則ち私代を兼ね、罷り出ましてござりまする。

早太　其方ことは半左衛門殺害されし砌りより、其の事柄は存じ居るな。

徳助　しかも悴半次郎と其場に參り合せしゆゑ、とくと存じ居りまする。

兵次　存じ居らばお掛りなる、結城七郎朝光殿、お尋ねあらばお答へ申せ。

徳助　畏りましてござりまする。

早太　最早御出席に間もあるまじ、門三郎淺茅の兩人を、是れへ呼出し置きませう。

兵次　いかにも、それが宜しうござる。

早太　お呼出し下されい。

兵次　承知いたしした。（ト上手へ向ひ、）それに控へし船岡門三郎、右膳が娘淺茅、兩人ともに是れへ出ませい。（ト上手うしろにて、）

門三 淺茅　はあゝゝゝゝ。

ト時の太鼓になり、上手板羽目滑りの内より、門三郎お仕着と見える好みの着附、白の扱帶、本縄に掛り、袴股立の足輕縄を取り出來る、上手より淺茅同じくお仕着と見える着附しごき帶本縄にかゝり袴股立の足輕縄を取り出て、兩人舞臺へ住ふ。

足輕　下に居らう。

門三
淺茅　はあゝゝゝゝ。（ト下に居る、）

早太　只今打ちしは八つのお太鼓。

兵次　最早御出席の時刻ゆゑ、

早太
兵次　双方共に控へ居よ。

三人　はッ。（ト下手より足輕出で、）

足輕　岩永殿の御用でござる、御兩所にはお詰所まで。

早太　心得ました、こりや兩人。

早太
兵淺　氣を附けい。

足輕　はッ。（ト早太兵次下手へはひる。門三郎思入あつて說教の合方になり、）

門三　おゝ徳助どのか、噂を聞けば半左衞門どのゝ子息半次郎どのには、此頃より大病を煩ひ居らるゝ

様子、少しは快うござるかな。

徳助　おゝ初めは風の様子でありしが、次第に重つて疫となり、この四五日は正氣をうしなひ、誠に困りきりまする。

門三　すりや半次郎どのには疫を煩ひ、正氣を失ひ居らるゝとか。

淺茅　おいとしい事ぢやわいな。

徳助　それに附けて門三郎どのへ、折入つて徳助がお賴み申したい事がござりますが、何と聞いては下さるまいか。

門三　此身に覺えなけれども、敵と覘ふ門三郎に、こなたが賴みと言はるゝは。

徳助　外の事でもござりませぬ、此間より御吟味になつて居ります人殺し、覺えないとおつしやれど、どうぞ主人を殺せしこと、白狀なされて下さりませ。

門三　そりや此間より申せし如く、死する命を助けられ半左衞門に七十圓、金子は貰ひ受けたれど、害せし覺え嘗てなし、されども名前を聞かざる不念に人を害せし疑ひ晴れず、如何なる苛責に逢はうとて、覺えなきこと白狀ならうか。

徳助　誠覺えのない事なら、是非もない儀でござりまするが、お隱しなさる事ならばどうぞ言うて下さ

りませ。と申すは家の息子どの、町人ながら幼少より武藝が好きで劍術も、榊原樣のお弟子になり、少々習ひ覺えしゆゑ、親の敵が討ちたいと此德助を供に連れ、尋ねに出たる其途中、失ふ札の番號から箱根で廻り逢うたれど、討つことならぬ上の御布告、空しく宅へ歸りましたが、間もなく疫を煩うて此四五日は正氣を失ひ、晝夜わかたぬ囈言にも敵が討ちたい〳〵と寢ても覺めても現にも、それより外の事は言はず、側で見る目もいぢらしく所詮命のない病人、今にも息子の死ぬ時は歎きで母御の死ぬは必定、とてもの事に息あるうち、敵が知れてお上にて命を取つて下さると、言ひ聞かして殺したい、切ない譯を汲み分けて、どうぞ言うて下さりませ。もし、手を合せて拜みます。

ト德助のせりふの内より、門三郎不便なといふ思入、淺茅は泣き居る、門三郎は罪を着て二人を助けようといふこなしあつて、

門三　隱されるだけ隱さんと、半左衞門どのを害せし事、今日まで隱せしが、そちが詞を今聞けば、半次郎どのゝ大病に、母御の歎きが不便ゆゑ、隱せし罪を顯はさん。

德助　すりや我が主人を殺せしと、白狀をして下さりますか。

門三　如何にも、白狀いたすであらう。（ト淺茅是れを聞きびつくりして、）

淺茅　あゝもし門三さま、そりや何をおつしやります、金子はお貰ひ申したけれど、殺せし覺えもないことを。

門三　あゝこれ、覺えないと今日まで包み隱して居たれども、一旦命を助けられし、いやさ、助かるだけはと思へども、敵を討たぬを遺憾に思ひ、半次郎どのが九死の大病、晝夜分たぬ囈言にも只敵が討ちたいと寢ても覺めても現にも、忘れぬ二人が身の大恩、いやさ、大恩うけし石濱どのゝ娘のそなたと不義をなし、恥辱を與へし罪科に、義理に迫つて死するのも、道に背きし師匠の罰、せめては二人の恩返し、人を助けた事ならば、いやさ、所詮繩目に逢ふからは、助りがたき二人の命、それゆゑ此場で白狀なし、上の御所置を受ける所存、聊か悔むは愚なこと。

ト此内門三郎切なき思入にて、命を助けられし恩返しに死ぬといふ思入、淺茅にも呑み込ませること よろしく、德助は嬉しきこなしあつて、

德助　それではいよ／＼殺したと、白狀して下さりますとか。

門三　むゝ、是非に及ばぬ、此場にて。

淺茅　そんならどうでも。

門三　恩と義理には替へられぬぞ。（トきつといふ。）

淺茅　はあゝゝゝ。

ト泣伏す。よき程に時計の音になり、奥より朝光上下大小にて出來り、是れと一時に平舞臺へ以前の早太兵次兩人出て控へ、皆々はッと辭儀をする、朝光眞中へ住ひ、

朝光　本所一ッ目人殺し一件、双方共に相揃ひしか。

早太　はッ、則ち船岡門三郎、右膳娘淺茅。

兵次　澤田半次郎代召仕徳助、竝に町役人ども。

早太
兵次　一同相揃ひましてござりまする。

朝光　むゝ。（ト思入。徳助前へ出て、）

徳助　はゝ、恐れながら申し上げまする。

早太
兵次　何事だ。

徳助　只今仰せござりました本所一ッ目人殺し、私主人半左衞門を殺害なし金札七十圓奪ひ取たるは、いよ／＼それなる門三郎が仕業に相違ござりませねば、何卒御吟味下さりませう。

ト朝光思入あって、

朝光　こりや、船岡門三郎。

門三　はッ。
朝光　今徳助が申す如く、其方本所一ツ目にて半左衛門を殺害なし、金札七十圓盗み取りしか。
門三　はッ、此程より再應のお尋ねに預かりしも免るゝだけはと今日まで、包み隠してござりまするが半左衛門悴半次郎大病のよし承はり、子の身として父を討たれ、さぞや無念と推察なし、息ある内に我が討ちしと承はらば、張合で全快いたす事もやと、それゆゑ白狀いたしてござる。
朝光　むゝ、自身に白狀いたすからは、よもや相違はあるまいな。
門三　聊か相違ござりませぬ。
朝光　しかと左樣か。
門三　御念には及びませぬ。(ト朝光思入あつて、)
朝光　然らば改め其方に承はり度きは、其折これなる淺茅を伴うて一の橋より川中へ、其身を投じて死せんとなすよし、先達て聞き置きしが、それに相違はあらざるな。
門三　はッ、若氣の至りと言ひながら面目もなき不料簡、義理に迫りて橋上より、身を投じて相果てんと、いかにも覺悟いたしてござる。
朝光　こりや淺茅、門三郎が申す通り、聊かそれに相違ないか。

淺茅　はい、それに相違ござりませぬ。

朝光　門三郎も腹からして武士の悴、劍術も石濱右膳が高弟にて、人に勝れし業とやら、又其方も女ながら劍術師範の右膳が娘、小太刀ぐらゐは心得居らうに、さりとては不覺悟千萬、なぜ自殺はいたさぬぞ。

淺茅　はッ、自殺をなさんと存じましたが、刃物を持參仕つりませぬゆゑ。

朝光　其方持參いたさずとも、門三郎は武士の悴、なぜ帶劍をいたさぬぞ。

門三　武家一統脫刀は勝手次第の仰せゆゑ、先日よりそれがしは小刀さへも帶しませぬ。

朝光　然らば其夜は、無刀であつたな。

門三　え。（ト門三郎ぎつくり思入。）

朝光　たゞ一刀に肩先より乳の下かけて切り下げしは、腕前といひ刃物といひ、勝れしものと存ぜしに、無刀でありし其方が、何を以て半左衛門を、其夜殺害いたせしぞ。

門三　さあ、それは。（ト門三郎詰る。）

朝光　殺害せしは僞りか。

門三　全く以て。

朝光　然らば何で殺害せしぞ。

門三　さあ、それは、

朝光　偽りなるか。

門三　さあ、

朝光　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵、

朝光　どゞ、どうぢや。（トきつといふ。）

門三　はツ。（ト門三郎さし詰りぢつと思入、朝光德助へ思入あつて、）

朝光　こりや德助、無刀でありし門三郎が、そちの主人半左衞門を、殺害せしとは不都合なるぞ。

德助　ではござりまするが半左衞門、その夜失ふ七十圓、番號同じ金札を所持なし居つたが慥の證據。

朝光　されば同じ番號の金札所持なし居つたるゆゑ、兩人とも吟味中縛して牢舍いたさすれど、正に七十圓の金札は、死人に口なく分らねど、半左衞門が遣はせしに相違なきと思はるゝ。

淺茅　はい〳〵、それに相違ござりませぬ。

門三　こりや〳〵、女の身にて入らぬ口出し控へて居よ。
淺茅　それぢやというてお上でも。
門三　まだ〳〵申すか、控へよといふに。（トきつといふ。）
淺茅　はゝい。（ト門三郎思入あつて、）
門三　只今無刀と申し上げしが、實は其夜短劒を所持いたし居りましたれど、方今開化の時に臨み戀に迫りて情死なすうつけの我ゆゑ狼狽なし、身を投ぜんといたせしが、七十圓の金札に俄に賊心差起り、何を以て害せんと思ふに附いて心附き、所持なし居りし短劒にて、殺害いたしてござります。
朝光　して、其短劒はいかゞせしぞ。
門三　後日の證據を厭ひまして、川へ投じてござりまする。
德助　是れにて慥に半左衛門を、害せし敵に極まれば、お仕置きなされて下さりませ。
朝光　德助そちが申さずとも、邪正を糺す天下の政事、其罪慥に極れば何ゆゑあつて猶豫いたさん。なれども未だ其罪の疑はしきは門三郎、是れをいかで罰せんや。
門三　こは心得ぬ御詞、自身に白狀いたせしそれがし、何ゆゑあつて疑はしきとは。

朝光　一の橋にて半左衞門を、殺害せしは外にあり。

德助　して、又それは何者でござりまする。（ト朝光懐より電信局の書取りを出し、）

朝光　四日以前西京より、電信を以て當役所へ、自ら罪を訴へ出しぞ。

門三
德助　何とおつしやります。（ト朝光電信の書取りを開き、）

朝光　九月八日午後十二時頃、本所一ツ目一の橋に於て、酒興の上にて商人秩父屋半左衞門を殺害に及び候。今日先非を悔い御刑罪受け候心得にて、神戸より蒸汽船にて、東京表へ即刻立越し候間此段御訴へ申し候。當時西京住舊幕臣鳥越甚内。（ト讀み終る。皆々不審の思入）

淺茅　此の鳥越甚内と記してあるは、とゝさんの慥にお弟子の甚内どの。

門三　我も左こそと思へども、似寄りの名前まゝあれば、しかとそれとも言ひ難し。

德助　何にもせよ電信にて、訴へ出しは僞りならず。

朝光　かゝる確證を得たれども、其本人の訴へを聞かざるうちは證としがたし、尤も前より門三郎の仕業ならぬは活眼にて篤と見極め置いたるゆゑ、只一通りの吟味を遂げ、外に害せし者あらんと探索いたせし所、此訴人にて門三郎の仕業ならぬは判然たり、最早日數も四五日目ゆゑ、蒸汽船にて甚内が東京着に間もあるまじ、本人出でなば再應の、吟味を遂げて所置なさん。

徳助　扨は其夜一の橋にて、主人半左衛門を害せしは。
淺茅　わが父上の門弟たる、甚内どのであつたるか。
門三　いゝや朋友甚内が何恨みあつて害せんや、此門三郎が所持なせし、七十圓の金札の欲しさに殺害いたせしぞ。
淺茅　すりや、どうあつても敵となり。
門三　上のお仕置き受けるなら、親を討たれて無念なる半次郎が恨みも晴れ、九死をのがるゝ事あらん。
淺茅　それぢやと言うて。（ト淺茅すがるを突放し、）
門三　いざ、御刑罪下さりませう。
ト門三郎覺悟の思入。花道よりばた〳〵になり、以前の甚内、袴無腰にて駈け出るを、袴股立の一二の侍留めるをちよつと立廻りながら花道にて、
一　やあ、爰を何れと思ひ居るか、鎌倉殿の問注所なるぞ。
二　町年寄も差添はず、其身一人駈込みしは、
一　法を知らざる、

兩人　慮外ものめが。
甚內　御法に背くは恐れ入れど、火急の事ゆゑ其段は、御宥免下さりませう。
　　　　　ト侍を留め、下に居て辭儀をなす。
朝光　して其方は、
皆々　何者なるぞ。
甚內　拙者事は四日前、電信を以て西京より、當御役所へ御訴訟せし、鳥越甚內と申す者。
朝光　電信を以て訴へし、甚內ならば止めるに及ばぬ。
兵次　然らば是れへ、
早太　通り召され。
甚內　はツ。（ト留めし侍に會釋なし、舞臺眞中へ通る。門三郎淺茅思入〕
門三淺茅　や、甚內どの。
甚內　淺茅どの、門三どの面目もなき此の對面。（ト甚內思入あつて、）何は兎もあれ積年の我が惡業を悔悟なし、蒸汽船にて今日着し、取る物も取り敢へず直に是れへ駈附けしが、只今是れにて御詮議の半左衛門を害せしは、斯く申すそれがしゆゑ、御法通り御刑罪に、仰せ附けられ下さりませ

う。

朝光　自ら訴へ出でしからは、よもや僞りはあるまいが、何遺恨あつて半左衛門を、甚内には害せしぞ。

甚内　そのお尋ねに預かりましては、面目もなき我が不埒、何の遺恨もあらばこそ、酒興の上にて申し募り、終に殺害に及んでござる。

朝光　なに遺恨もなく酒興の上にて、半左衛門を害せしとは、餘りと申さば愚なこと。

甚内　さればこの身の害となる、刀を捨てゝ此の訴へ。

早太　さすればいよく、半左衛門を、

兵次　殺害せしは是れなる甚内。

門三　いや、半左衛門を殺害せしは、斯くいふ船岡門三郎、拙者を死刑に行ひ下され。

甚内　こは船岡には物に狂せしか、酒興の上にて殺害せし先非を悔いて訴へ出でしも、師匠の娘淺茅どの又朋友の門三郎、二人の難儀を救はん爲、元より覺えなき身にて半左衛門を害せしとは、何を以て言はるゝぞ。

門三　さあ、それは。

朝光　察する所七十圓、惠みくれたる半左衞門が、恩を思うて罪を負ひ、生死知れざる半次郎が、恨みを晴らさす所存であらうな。（ト門三郎思入）

門三　如何にも只今仰せの如く、我々二人は入水なし死すべき身をば計らずも、半左衞門どのに助けられ、しかのみならず七十圓旅の費用に惠みし恩人、その子息たる半次郎どの、九死一生の大病に敵が討ちたい〳〵と、寢ても覺めても現にも其事のみと聞く哀れさ、此身に覺えなけれども、敵となつて死刑に逢へば、恨みも晴れて一命を止まることもと罪を負ひ、御所置を願ふは一旦の、恩を報ずる我が所存、上を僞る不屆きは、御宥免下さりませ。

朝光　流石は武士の志し、一度戀に迫るとも、受けたる恩を忘却せず、

淺茅　明日をも知れぬ大病の、半次郎どのを救はんと、身に覺えなき罪を着て、

德助　助けられたる命をば、又もや捨つるお心は、跡へ引かざる大和魂。

甚内　誠を照らす神國に、その本人のそれがしが名乘つて出づる上からは此兩人はお助け下されい。

朝光　おゝ言ふにや及ぶ、門三郎淺茅にもはや構ひなし。

門三　えゝ、有難うござりまする。

朝光　それ、兩人のいましめ解け。

早太　はツ。（ト早太兵次門三郎淺茅の縄を解く、甚内思入あつて、）

甚内　兩人御免に相成る上は、いざ、それがしを此場にて、御刑罪になし下さりませう。

トよろしく覺悟の思入、朝光感心せしこなし、

朝光　あゝ器量といひ骨柄といひ、あたら武士をば刑罪なすは、近頃以て殘念至極、して、舊幕の時分には旗本にてあられしか。

甚内　如何にも身共は小祿ながら、慶長以來の旗本にて、父は鳥越甚左衛門、則ちわれは悴にて同苗甚内と申すもの。

朝光　斯く白狀の上からは、罪はのがれぬ人殺し。

甚内　斬首はかねて覺悟でござる。

門三　豫て覺悟も御馬前の、討死ならぬ身の科に、

淺茅　お命お捨てなさるゝは、あゝお情ない事ぢやなあ。

朝光　それ、縄かけい。

早太　はツ。（ト兩人縄を持ち立ちかゝるを、）

徳助　あいや、其のお縄お待ち下され。

早太　何と。

徳助　もし甚内さま、あなたの御親父甚左衛門さまは、上州伊香保の松原で、不慮な御最期はなされませぬか。

甚内　おゝ如何にも父は病身ゆゑ、隱居なして上州伊香保へ湯治に參りし途中、思ひがけなき鐵砲のそれ玉うけて果敢ない最期。

徳助　それではあなたを敵とは、申されませぬ儀がござります。

甚内　して〱、それは如何なる譯にて。

徳助　私主人半左衛門は、元伊香保の湯宿にて小鳥を撃ちに出でたる所、ねらひが外れて鐵砲にて、道行く旅人を打ち留めて逃げ去り、樣子を聞けば鳥越甚左衛門さまといふお旗本の御隱居さま、其時主人が名乘つて出でお仕置き受けんと申せし所、此徳助がお止め申し、それとはなしに東京へ店を開いて太物渡世、人を撃ちたる罪ほろぼしに、人の命が助けたいと不斷申して居つたるゆゑ、此お二人を一つ目でお助け申せし甲斐もなく、殺害されし九月八日は甚左衛門さまの祥月命日、天命のがれず甚内さまの、お手に掛つて果てたるは、取りも直さず敵討。

ト是れを聞き甚内思入あつて、

甚内　やゝ、すりや先年伊香保にて、父甚左衛門を討ちたるは、半左衛門にてあつたるか。
門三　それとも知らず一の橋にて、甚内どのゝ殺害せしは、
淺茅　親の敵を討ちしも同然。
德助　思へば廻る身の因果。
甚内　その罪科を滅せんと、
門三　情死に迫るわれ〳〵が、
淺茅　命を助けしのみならず、
德助　一度敵と疑はれ、
甚内　獄屋の苦艱うけたるも、
門三　親と師匠に、
淺茅　背きし身の、
甚内　惡事はならぬ、
皆々　世の中ぢやなあ。
朝光　ほゝお、今となりては敵とも、いはれぬ此場の一部始終、頼朝公へ進達なし、後日の裁許いたす

であらう。

甚内　左様ござらば、

皆々　われ〳〵は、

朝光　双方共に、

皆々　はッ。(ト三方の息を見合せ、木の頭)

朝光　立ちませい。

ト朝光立上り、皆々は引つぱりよろしく、時の太鼓にて、黒幕の引栓幕を引附ける。大ドロ〳〵になり、日覆より心といふ字を引いて取り、道具陰廻しにて、よき程に黒幕切つて落す。

(異人館提灯祭の場)――本舞臺上下異人館石疊の書割り、正面に蒸汽船數艘書割りし神戸波止場の遠見。日覆より枠釣りにて紅白灯入りの提灯を數多く提げ、異人館提灯祭の體、爰に織物を入れし箱の荷物を積み、以前の甚内、この箱へ腰を掛け、坐睡り居る、ドロ〳〵にて道具留る、トドロ〳〵打上げ蒸汽船の筒音にて甚内目を覺し、

甚内　さては今のは、夢であつたか。(ト本釣鐘の合方になり、)東京表へ出府なさば、兎やせん角と思つ

たる心の内を夢に見し、所は正しく鎌倉の邪正を糺す問注所にて、今見し夢が正夢なら、父を討つたる敵も知れん。はて、幸先よい吉夢ぢやなあ。（ト唐人囃子ばた／＼になり、下手より長次出で）

長次　旦那さま、最早出帆でござります。

甚内　然らば刀を賣拂ひし、此の金子にて乗船なさん。

ト懐より以前の金包みを出す、此時後へ大藏傳八窺ひ出て、

大藏　其の金子を。（ト取りに掛るを、長次引戻しちよつと立廻りて、兩人を引附け）

長次　心よからぬ彼等兩人。

甚内　生かして置きなば世界の妨げ、

長次　海へどんぶり、遣つてくれう、

大藏　何を小癪な。（ト兩人切つて掛る、やはり唐人囃子にて四人立廻り甚内大藏、長次傳八を引附け）

甚内　先づ今日は、これぎり。

ト目出度く打出し

東京日新聞（終り）

此廓ばかり月夜哉と晋子が吟のいにしへを忍ぶ三浦の四郎左衛門妻のお牧も諸共に深き情を掛け香の薫は失せぬ太夫職名もあらためて廓出の日さへ最上吉之丞と手管を捨て本所に誠を明す詫住居細き煙りに宗次郎へ餘儀なき非を割下水頼みし金の間違ひから死ぬる覺悟の二通の書置浮世は夢か幻か爰が惡事の年明と兄作藏の手にかゝり善にかへりて紛失の寶も金も手に入りてよろこぶ甲斐も情なや二人が入水と仁太郎が知らせにたづぬる川岸通り姉のおなみと德右衛門がはからずたすけて再生なし目出度くさかえる一家のをさまり

関東銘物男達鑑

『子持高尾』は明治六年五月、作者五十八歳の時、守田座に書きおろされた。『關東名物男達鑑』なる名題の下に、『明石志賀之助』の狂言の二番目物として包含されてゐた。扉に用ひた作者の手蹟には最初の名題しかなかつたので、それを用ひておいた。『廓曠着紅葉裲襠』は後年の命題である。講談に材料を仰いだものであるが、まとまつた二番目狂言として、注目に値する作といつてよい。

書きおろしの時の役割は澤村訥升(三浦屋のけいせい高尾)、坂東彦三郎(若黨曾根作藏)、市川左團次(三浦屋四郎左衞門)、中村翫雀(最上吉之丞)、中村いてう(番頭新造高篠)、澤村千鳥(三浦屋の女房お牧)、坂東喜知六(神崎傳内)、坂東鶴之助(禿もみぢ實は高尾娘おかよ)、中村駒之助(禿にしき)等であつた。

挿繪にしたのは國周筆の錦繪、及び『子持高尾』の稿下當時作者の手書した正本(臺本)の表紙と第三幕目の一部分とである。

大正十五年八月下旬

校訂者



關東名物男達鑑（廓曠着紅葉襠裲、子持高尾――三幕）

序幕

三浦屋の場
日本堤の場

〔役名――最上吉之丞、三浦屋四郎左衞門、高尾の伯父德右衞門、神崎傳内、判人善六、若い者與助、同太助、駕籠屋。三浦屋高尾、三浦屋女房お牧、番頭新造高篠、振袖新造高衣、同とよ、同はな、禿紅葉、同錦、茶屋女房等。〕

〔三浦屋内證の場〕――本舞臺一面の平舞臺、上下折廻し塗骨障子屋體、正面一間の延喜棚、この下地袋戸棚上の方一間中仕切りのある戸棚、この下簞笥の書割、下の方一間茶壁、是れへ刀掛取り附けてあること、總て大磯の廓三浦屋内證の體。上手に傳内羽織着流しにて、前へ煙草盆を控へ住ひ居る。其次に與助太助若い者、善六羽織着流し判人のこしらへにて住ひ、後にとよ、はな振袖新造にて、長火鉢の側にあたつて居る模樣、吉原雀にて幕明く。

傳内　こりや／＼若い者、亭主に逢つて談判なさん、亭主を呼べ／＼。

與助　もし／＼旦那さま、御談判がござりますなら、二階へいらつしてなさいまし、内證などへお坐り

なさるゝと、茶屋が迷惑いたしまする。

善六　こウ／＼與助どん、それぢやアあんまり愛敬がねえ、折角旦那が判人のわしまでお呼びなさつて身請をしようとおつしやるのだ、まあ何にしろ、旦那にお逢はせ申すがいゝぢやねえか。

與助　そりやあお前が言はねえでも、わたしも茶屋の若い者、內から送つたお客さまが、おいらんの身請をなされば、見世の看板に箔の附くこと、共々おすゝめ申すけれど。

太助　外の內の內證と違つて、內の主人は片意地もので、年の明けたおいらんを身請される法はないと、奥へ行つて此太助が叱られました。

傳內　假令何と申さうとも、手前達では譯が分らぬ、是非とも亭主に面談いたす。こりや／＼新造ども、亭主の居間へ案內いたせ。

とよ　外の用ならお連れ申すが、おいらんの身請の相談は、

はな　旦那さんに叱られますから、わちき共は知りませんよ。

傳內　えゝ手前達までが同じやうに、然らば善六案內いたせ。

善六　へい／＼、畏りました。

與助　いえ／＼旦那の居る座敷へ、神崎さまをあげましては、

とよ　わちき共が叱られます。

はな　遣り申すことはなりません。

太助　まア／＼お待ち下さりませ。

傳内　えゝ、ざは／＼と留め立していたすな。

ト傳内善六は上手へ行かうとするを、跡皆々これを支へる、太鼓入り騒ぎ唄になり、上手障子屋體より四郎左衛門、遊女屋大見世の亭主好みのこしらへにて、煙草盆を提げ出來り、傳内を留めて、

四郎　もし旦那さま、お靜かになされませ。

とよ　こりやよい所へ御内證の、

はな　旦那さんがござんした。

善六　もし神崎さま、よく御談判をなされて御覽じませ。（ト傳内四郎左衛門を見て、）

傳内　然らばそちが當家の主人、三浦屋四郎左衛門と申すものか。

四郎　左樣にござりますな。（ト是にて皆々下に居る、合方になり）しげ／＼お通ひ下さりまする、お客樣とは知りながら、まだ御挨拶もいたしませぬが、毎度手前を御贔屓に高尾が許へお通ひ下され、有難うござりまする。

傳內　亭主とあれば其方に、折入つて頼みがある。

四郎　そのお頼みの入譯も、奥で委細は承はりましたが、高尾が身請の御相談ならお斷り申しまする。

與助　それ御覽じませ、此通りでございます。

傳內　すりや金銀を山ほど積み、身請をいたすと申しても。

四郎　お氣の毒ではございまするが、お斷りを申しまする、譯と申すはあの高尾、最早今日年が明け苦界をのがれて親許へ目出度歸る奉公人、せめて十日と半月も是れがお早い事ならば、又御相談もいたしませうが、年の明けたる奉公人は、主人の自由になりませねば、お斷り申しまする。

傳內　さゝそちとも相談づく、物に例へて見ようなら醫者の見はなす病人も、看病の仕手がよければ助かることもあるではないか、年季の明いたあの高尾、身請といつて面倒なら、主人のそちが親となり、身共の方へ片附けて支度金と名を附けて何百兩でも望み次第、さすれば主人のそちは元より當人の身寄りのものまで、浮み上がると申すもの、それゆゑ野暮を取りおいて、窮理いたして見たならば話しにならぬ事もあるまい。こりや亭主、勘辨いたせ〳〵。

善六　成程旦那のおつしやる通り、身請といつては御內證でも、御相談がしにくからうが、親許になり旦那さまへ片附けるといふ名目なら、何處へ知れても恥かしからず、殊に旦那は北條家で當時ぱ

りつくお賄役、その新新造におなりなさりやあ、おいらんも大仕合せ。

太助　世間の人が消炭と悪口をいふ若い者、どつちの方へも行き易い、此の太助ではござりまするが、こりやあ旦那のおつしやる通り、身請といはずにおいらんの、親許になり片附けるは、よい思ひ附きでござりまする。

四郎　いやその親許にはなりにくい、金が欲しさにおいらんを主人の威光で金満家へ、片附けたといはれては、内外のもの丶手前といひ第一親に恨みを受け、又當人も年季中どういふ事がしてあらうも知れず、それを主人がとやかうと申す譯にはなりませねば、其御相談なら親許へ、直接になされて下さりませ。

傳内　然らば直接に親許へ、渡つて談判いたさうが、其の親許の宗庵は人手に掛り先達つて、中田甫にて横死を遂げ、今は此世に居ぬ筈ぢやが。（ト善六、太助に向ひ、）

善六　さうして當時親許の、代りになつて居るものが、何處の誰だかこなたは知らぬか。

太助　いえおいらんの親許は宗庵さんが死んでから、何處の誰がして居るやら、跡の事は知りませぬ。

四郎　その親許も此間宗庵どのが中田甫で、人手に掛つて死んだと聞き、まさかの時のあの高尾を引渡す親のないのは、主人の越度と思ふゆゑ、當人に段々聞けば、片瀬の濱邊で德右衞門といふ漁師

が高尾の伯父に當り、宗庵どのゝ弟ゆゑ早速呼びに遣り、取り極めをして置いたれば、年季の明いたあの高尾、引渡すのは德右衛門、お掛合なら旦那さま、その德右衛門になさいまし。

傳内　然らば伯父の德右衛門に、面會なした其上にて。

善六　成行こりやあ其伯父に、御相談をなさゝる方が、早手廻しでござりませう。

ト此時下手の障子を明け、振袖新造出で、

○　もし旦那さん、おいらんのお迎ひに、德右衛門さんとやらいふお人が、今見世へ參りましたわいな。

四郎　德右衛門とは高尾が伯父、幸ひこちらへ通すがいゝ。

○　そんなら、お通ししますぞえ。（ト下手へはひる、傳内これを聞き、）

傳内　いや尋ねて行かうと存ずる折柄、その德右衛門が參るとは、此頃になきよき手都合。

太助　こりや辻占がよろしいから、御相談が整ひませう。

ト合方きつばりとなり、下手の障子屋體を明け、德右衛門誂への長半纏の上へ、羽織を引ッかけ出來り、

德右　旦那さま、其後はお目に掛りませぬが、御機嫌ようござりますか。

四郎　おゝ徳右衞門どのよくござつた、さあ〳〵是れへ來さつしやれ。

徳右　いえ〳〵是れでよろしうござりまする。扨早速に申しますが、親宗庵が娘のお高昨日にて年も明け暇を遣るから迎ひに來いと、有難いお使ひに、早速引取りに參りました、伯父の身に取り此樣な悅ばしい事はござりませぬ。

四郎　定めて早速來るであらうと、女房に言ひ附け夜具蒲團から、衣類諸道具取揃へさせて置いた筈、今當人を爰へ呼ぶから、引取つて行かつしやい。

徳右　いやもう假初ならぬ五年越し、お世話下さるのみならず、衣類道具を取揃へお暇をお出し下さるとは、お慈悲深い旦那さま、有難いことでござりまする。（ト此內傳內思入あつて、）

傳內　いやなに、徳右衞門とやら、ちよつとこれへ。

徳右　あの私めに。

傳內　如何にも。（ト合方きつぱりとなり、徳右衞門前へ進み、）

徳右　いづれいづくの御方樣か、ついぞお目にも掛らぬゆゑ、お名前も存じませぬが、して私めに御用でも。

傳內　面會いたすは初めてゆゑ、知らぬと申すは尤も至極、なれども名前は高尾より聞き及んで居るか

も知らぬが、手前は北條相模守時政公の昵近にて、當今殿のお覺え目出度賄役をいたし居る、神崎傳内と申すもの。

善六　此旦那がこなたの姪の高尾さんを御執心で、長い年季の其内も足を拔かずにお通ひなされ、紋日物日や煤はきの仕舞などはいふに及ばず、夜具や襠裲の無心もきゝ、お通ひなさる度毎に二階中へいつでも惣花、實にこちらの內證でも、一番通りのよいお客さまさ。

太助　さうとも〳〵、私が覺えまして今年で丁度四年越し、太鼓持の惣羽織や出入りの者の仕着までみんな旦那の御散財、表二階で太神樂や住吉踊りかつぽれに、投げて遣つた金ばかりも、容易いことではござりませぬ。（ト爰へ新造とよ出て、）

とよ　噓も大概にお言ひなさんせ。（ト太助の袖を引く、太助默つて居ろと目顏で押へる。）

傳內　まだ其上に身請なし宿の妻にいたし度く、只今亭主に申し入れしが、年の明いたる高尾ゆゑ其相談にもなり難く、そちに談判いたしてくれと話し半へ迎ひとて、そちが參るは丁度幸ひ、是れにて直に此座で取極めなし、屋敷へ伴ひ歸りたいが、伯父の威光であの高尾、身共に手渡しいたしなば金銀は望み次第、又當人も是れまでの恩義があればいなともいふまい、そこを見込んで德右衞門とやら、よき挨拶を聞かしてくりやれ。（ト是を聞き德右衞門思入あつて、）

徳右　左様なればあなた様が、北條家の御藩中にて高尾の元へお通ひなされし、お客さまでござりましたか、さうとも存じませず御挨拶もいたしませぬが、不束な兄の娘それほどまでに思召して、御家内にもなされたいとは有難い事ながら、どうも高尾は上げられませぬ。

傳内　して又それは、如何なる仔細で。

徳右　何をお隱し申しませう、あの高尾には蟲がござりまする。

傳内　なに蟲があるとは、癪の蟲か寸白の蟲か何の蟲ぢや。

徳右　いえ其蟲ではござりませぬ、二世までと約束いたした、あれには夫がござりまする。

傳内　其約束せし夫といふは、大江の藩中にて、吉之丞と申す浪人者であらうがな。

徳右　左様でござりまする。（ト合方きつぱりとなり、さう御存じの上からは、申さずともの事ながら、勤めの身には珍らしき、二人が中に子までなし子持高尾と世間にて噂をされし此年月、廓の勤めをいたしましたも、吉之丞さまといふお人と、年が明いて添ひたいばつかり、身請をしようといふお客も度々あつたさうなれど、それを斷り長の年待ちに待つたる今日となり、それを知りつゝお前さまの御新造さんになつてくれろとは、なんぼ伯父でも此口から、申しにくうござりますれば、こりやお斷りを申しまする。

傳内　さゝ、そこを貴公の働きにて、こちらへ振向けくれるやうにと、武士が手を下げ一つの頼み。
善六　手切れの金が入るならば、幾らかくらの綵目は附けず、
太助　こなたもたんまり骨折り代を、とつた擧句舅御さまと、
傳内　屋敷へ引取り一生涯、樂隱居にて月日を送り、
善六　漁師を止めて講釋場の、定連にでもなつた方が、
太助　よからうかと思ひますが、それでもやつぱりお斷りを、おつしやる心でござりますか。
徳右　そりやもうわしの娘なら、どのやうにも勸めまして、旦那の方へ上げもせうが、義理ある中の高尾ゆゑ、こりや折角の思召しだが、お斷り申しまする。
傳内　然らば是れほど賴んでも。
徳右　へい、お斷りを申しまする。（トきつぱりいふ。）
傳内　む丶。（ト腕組をなし、思案の思入、四郎左衞門思入あつて、）
四郎　もし傳内さま、斯う話しがこぢれましては、よい御返事も聞かれますまい、二階へ行つてわつさりと、一口御酒でも召しあがり、又氣を拔いて御相談を、ゆつくりとなされませ。
傳内　いやく二階へ參つて居るうち、高尾を連れて行かれては、身共の武士が相立たぬ。

四郎　はてそこは亭主の私が、爰に控へて居りますから、あなたのお恥になるやうな取計らひはいたしませぬ。

傳內　然らば亭主其方に、暫時が間預け置くぞ。

德右　それでは高尾を引取るにも。（ト言ひかけるを。）

四郎　はて、わしが萬端呑込んで居ります。（ト德右衞門へ思入。）

與助　左樣なれば旦那さま、二階へお出でなされませ。（ト是れにて傳內は立上り、下手へ來り、）

傳內　亭主がかやう受合へば、身共に於ても氣遣ひなし何の苦もなしと、ヽヽなし盡しでいふではないが、四年此かた此二階へしげ〳〵通つて參つたが、床にはひつた事はなし、其のくせ座敷の樣子では、まんざら形のないでもなし。

善六　それも其筈お前さまは、お金はあれども氣障はなし、

太助　少しはお顏が中低くても、まんざら男も惡くはなし、

與助　女にお好かれなされぬとは、神も佛も此の世になし、

傳內　是れを思へば世の中に、ヽヽなしはつれないものぢやなあ。

トさわぎ唄になり、與助先きに傳內、善六、太助附いて、下手の障子屋體へはひる。四郎左衞門跡を

見送りて、

四郎　傳內さまといふお人は、無駄を知らねえお人だな。（ト德右衞門氣の揉める思入にて、）

德右　もし旦那さま、あなたに萬事預けると、今のお方がおつしやれども、所詮高尾はあのお方に。

四郎　はて、それも合點知つては居れど、譯も分らずあゝ言つて、一寸のがれにして置くのも、二階へ遣つた其後で、早く高尾をこなさんに、引渡してやるわしが料簡。

德右　流石は廓の旦那さま、何分跡はよろしきやうに。（ト四郎左衞門二人の新造に向ひ、）

四郎　これ、手前達は二階へ行つて、おいらんを呼んで來やれ。

兩人　あい／＼、合點でござんす。（トはひる。皆々立つ、此時下手障子屋體の內にて、）

お牧　いや參るには及ばない、今そこへ連れて參りますよ。

ト誂へのしつとりとした端唄の合方になり、お牧遊女屋の女房にて先きに立ち、高尾好みのこしらへにて出る。跡より高篠の番新、高衣〇△振袖新造にて附添ひ出來り、皆々よろしく住ひ、德右衞門を見て、

是れは德右衞門さん、嘸お待遠でござんしたらうが、朋輩のおいらん達が高尾に縋つて名殘りを惜しみ、部屋々々で引止められて、大きに手間が取れましたわいなあ。

徳右　これは〳〵おかみさま、何からお禮を申しませうか、長年の間お高めの御面倒を御覽下され、殊には又勤め中に懷妊せしを御主人さまが、御承知にて產をさせ、それは〳〵御親切にお世話なされて下されしと當人からも承はり、譬にもいふ此廓は見れば極樂居て地獄と、世間の人は申しますが其廓にも珍らしき、御慈悲深い御夫婦さま、有難うござりまする。

お牧　其お禮はこつちから澤山言はねばなりませぬ、是れまで多くの奉公人も取り扱つては見たけれど高尾のやうに年季中世話のやけぬものはなく、その又氣質を見習うてか、使うて居る新造までが主人へ苦勞をかけぬのは、みんな高尾が仕込みゆゑ、主人も樂をしましたわいなあ。

四郎　いやもう斯ういふ稼業をして居れば、心の休まる暇はなく、強く叱れば內證が嚴しいからと腐貞ていけず、さうかといつて優しくして、白い齒を見せた日にやあいゝ事にして附け上り、なかなかいけるものではないが、此高尾に限つてはそんな曲つた心もなく、勤めを大事と精出すゆゑ、自然と其名も全盛の名を賣るやうになつたのを、朋輩もそれを見習ひ客を大事に勤めるゆゑ、繁昌して來た此三浦屋、禮はこつちで言はねばならぬ。(ト此時高尾こなしあつて)

高尾　何のまあ勿體ない、わたしゆゑにこちらのお内が、繁昌するのぢやござんせぬ、御主人さまがお慈悲深く奉公人に目を掛けて、お遣ひなさるがお上手ゆゑ、殊に今年はこの廓で一といつて二

と下らぬおいらん方も澤山抱へ、顔の揃ひし大籬、お顔揃ひの其中で高尾といふ名も面伏せ、顔に紅葉の襠も寸の短いおいらんゆゑ、達て御辭退申せしを、御內證の旦那さまや朋輩衆にすゝめられ、低い姿で高尾どいふ、お職の役を勤めるもお內のお蔭でござんすわいなあ。

德右　さうぢやとも〱、何でもこちらの御主人さまは、奉公人を大事に遣ふと世間中での評判ゆゑ、わき〱のおいらん衆も、皆住替へに來たがるとやら、何生業でも元をかけてよい品物を澤山仕入れ、お客樣を大事にすれば、繁昌するに違ひない。

四郎　いや品物が澤山でも、世間のお方の助力を受けねば、繁昌するは覺束ないが、御贔屓樣のお蔭にてやう〱取附く此の三浦屋、品といへばこれお牧、さうして高尾の諸道具は、殘らず揃へて置いたであらうな。

お牧　それもわたしが立合ひで、落のないやう取揃へ持たせてやらうと思ひましたが、重ね簞笥と長持を持つて行くのみ、その外は琴三味線から手道具まで、みんな二階へ置土產。

高篠　取分けわたしはおいらんが、遣うて居た新造ぢやと、身分に過ぎた櫛笄、又黑塗りの鏡臺、うがひ茶碗にはんざうまで、皆おいらんの讓りもの。

高衣　香や茶の湯をおいらんが常から敎へて下さんした、まだ其上に記念とて、茶の湯道具や香道具を

お貰ひ申した此の高衣。

○　またわたしは手文庫と、金の蒔絵の硯箱、菓子簞笥まで取添へて、

△　瀬戸物類の蠅帳は、こはれものとて手も附けず、下さんした其上に、

とよ　きのふのうちにわたし等には、海鼠絞りや緋鹿の子の、頭掛をば澤山に。

はな　仲よう分けてと言はしやんして、皆それ〴〵においらんが、お心づかひの其中で、

高篠　銅の落しの長火鉢と大内藥鑵に鐵瓶は、疾から遣手のお爪どんが、お約束ぢやと一端がけ、お貰ひ申して行きなさんした。

お牧　まだ其外に積夜具から衣桁や碁盤服の臺、三幅對の掛物まで座敷に附いて居る品は、高尾の名前を繼ぐものに、そつくり遣つてくれいと言うて、部屋も綺麗に掃除をさせ、出て行く高尾の心の内、奥床しうてならぬわいなあ。

四郎　そんなら部屋の諸道具を二階中へ分けてやり、高尾の名前を繼ぐものに、遣つてくれろと積夜具まで。

お牧　はい〳〵、くれ〴〵わたしへ頼みましたわいなあ。（トそれを聞き四郎左衛門思入あつて、）

四郎　いや、それでこそ廓の名妓、なか〳〵見上げたものだなあ。（ト誂への合方になり、）實は高尾といふ名

前は内で大事の暖簾名ゆゑ、跡でとやかう二階中で噂こはさをされるやうな、さもしい心を出さねばいゝと、おれも内々案じて居たが、流石におれが目鏡にて高尾といふ名を繼ぐほどあつて、行屆いたる其仕方、餘所の事をいふのではないが、勤めのうちは一二を爭ひ、廓でどこの誰といふ一枚畫にも出されるほどな名を賣つたおいらんでも、身請をされて此廓をいよく出ると極まる時は、元の賤しい心が出て疊建具はいふに及ばず、自分の部屋だと造作までこはして持つて行きたがるは、十人が九人まで、それも出て行く其先きが貧乏暮しの親許なら、尤もだと思はうけれど、いづれ身請をする客はどこ町さんと名の附いた、立派な所へ行く體で、わづかこはした造作や疊建具を古道具屋へ賣つた所が二そく三文、あんまり出來た事でもないが、それに引替へ此の高尾は、身請と違ひ年明けに出て行く先きも大概それと、いや感心なものだなあ。

高尾　そりやもう常からお慈悲深い、御夫婦さんのお心では、明日から困るであらうのに、よせばよいにと思召しもござんすかは知らねども、不束な身で三浦屋の六代續きし高尾といふ全盛の名を繼ぎましたは、遊女冥利に叶うたこと、それといふのも御主人や朋輩衆のお蔭ゆゑ、心ばかりを皆さんへ殘して行くも遊女の晴れ、假令明日から手鍋を提げ貧しい暮しをしませうとも、それは此身の約束、言はぬ心でござんすゆゑ、詰らぬ物でももし皆さん、是れも高尾が記念と貰うて置い

て下さんせ。

高篠　何のまあ勿體ない、おいらんのお手道具が詰らぬ物でござんせう。

高衣　わたしらなどには一生涯、自力で出來ぬ品々を、

○　殘る方なくそれ〴〵に、振りわけて下さんして、

△　かたみなどゝ言はしやんすと、

とよ　もう今日ぎりでおいらんに、

はな　逢はれぬやうに思はれて、

高篠　いとゞ悲しう、

皆々　なりますわいなあ。

お牧　それに今も二階中で禿までが袖に縋り、死に別れでもするやうに、名殘を惜しみ泣くゆゑに、わたしも共々悲しくなり、實の娘に別れるやうな心持がするわいなあ。

四郎　おぬしを始め二階中がそんなに名殘りを惜しむも尤も、おれが口から此樣な自慢をするもをかしいが恐らく遊女多しといへど、こんな氣立のおいらんは、是れから先きにあるかは知らず、先祖の代からおれの代まであつた噂を聞かなければ、此の高尾が遊女の鑑、廓の記錄に殘るであら

う。

　　ト此うち德右衞門淚をこぼして聞いて居て、

德右　いやもう其樣にまで旦那さまが、お褒めなされて下さりますると、引取つて參る私は、鼻が高うございります。

四郎　いやもうお前も鼻が高からうが、主人のわしも廓中へ鼻が高いといふもの。（トお牧高尾に向ひ、）

お牧　そんならお前は望み通り、明日からあなたのお宅へ行き、貧しい暮しも好きあうて、浮世を送る心がいなう。

高尾　それに附けても以前と違ひ、あのお方も今は貧しいお身の上、一人でお出でなさるゆゑ何かに附けて御不自由勝ち、あゝいふお身にならしやんしたも、元の起りはわたしゆゑ、片時も早く一つになり手鍋提げるはまだなこと、假令糊を賣りませうとも、實を盡して共々に苦勞をせねばなりませぬ。

四郎　それでこそ天晴貞節、さとの勤めをするものは、つまり世間の素人より實があるといはれるやうに貞女を盡してあげるがよい、廓の法は是非もなく見世や遣手の手前を兼ね、二階を堰いた吉之丞さま、久しくお目にも掛らぬが、ようう傳へて下され。

高尾　それも度々お上さんが見ぬ振りをして遣らうからと、仰しやつては下されど、御内證のお目を偸み二階へ揚げては濟まぬゆゑ、いつでも格子で悄々と、積る話しも人目をかね、禿の紅葉が取り縋るを、振拂つては泣き別れ。（ト これを聞き德右衞門思入あつて、）

德右　紅葉といへば、そちが娘、爰に見えぬがどうぞしたのか。

高尾　今二階で朋輩の禿達への暇乞、手間の取れる事ではあるわいなあ。

高篠　ほんに子供は子供同士と、あの子もやつぱりおいらんのおしつけゆゑか、すなほな生れ。

高衣　おいらん方は取分けて、わたしらでさへ可愛う思ひ、

○　あの意地惡るのお爪どんさへ、目をかけて呼びつかへど、

△　禿同士は猶のこと、ついぞ是れまで一度でも、

とよ　朋輩喧嘩をしたことなく、同じ禿のその中でも、

はな　錦どんとは氣があうてかして、今も二階でお互ひに、

高篠　別れを惜しんで泣いて居たゆゑ、皆さん呼んで下さんせ。

新造皆々　あい／＼、紅葉どん。

紅葉錦　あい――。

ト兩人長く返事をする。是れより合方替つて、下手障子屋體の内より、禿兩人皆々と泣きながら出來る。德右衞門紅葉を見て、

德右　おゝ紅葉か爰へ來い、いやちつとの間見ぬうちに、大層大きくなり居つた。これ紅葉、是れまで母親の側に一つに居つても、母とも言はれず禿のつもりで居やつたが、今日からは世間晴れて母さんと言はれるが、何と嬉しいか〳〵。

紅葉　あい、それは嬉しうござんすが、爰に居る錦どんと最う明日から遊ばれぬかと、それが悲しうござんすわいなあ。

德右　はてそれもほんの當座のこと、廓を出れば出たやうに、近所の子供に友達が出來、毬もついて遊ばれるから、さうくよ〳〵と泣ぬものぢやっ（ト是れを聞き錦羨しきこなしあつて、）

錦　紅葉どんはおいらんと一緒に廓を出なさんして、又友達も出來ませうが、わたしや奉公して居るゆゑ、もう今日ぎりでおいらんのお側にも居られぬゆゑ、紅葉どんとも遊ばれず、悲しいことでござんすなあ。（トしく〳〵と泣いて居るゆゑ、高尾こなしあつて、）

高尾　ほんにこなたは此の紅葉と、一つに使ふわしが禿、奉公の身で遊ぶといふは大それた事ながら、肩を揉ませる替りとて外の禿へ内證で、部屋に居るうち少しづゝ遊ばせて遣つたのを、それ程ま

錦　でに樂しみに、ほんに子供といふ者は罪のないものぢやなあ。（ト是れにて錦高尾の側へ兩手を突き、）もしおいらん、どうぞ後生でござんすから、旦那さんへお願ひ申し、わたしもどうぞ御一緒にお連れなされて下さりませ。（ト手を合せて拜む、高尾不便なといふこなしあつて、）

高尾　不思議な縁でこの年月、わが子の紅葉と同じやうに使うて居たをそなたゆゑ、一緒に連れて行きたいが、長い年季のあるそなた、一緒に連れては行かれぬわいの。

錦　そんならどうでも、行かれませぬか。

高尾　おいなう。（ト顏を背けて泣く。）

錦　はあゝ。（ト泣伏す。是れにて皆々愁ひの思入、四郎左衞門も思入あつて、）

四郎　その錦は三ツの年兩親に別れ、一人の伯父が邪險にて、賣られて來た奉公人、それ程までに高尾をば慕ふ心が不便ゆゑ、僅な金の證文を卷いて暇を遣りたいが、さうする時は外のものゝ示しが自然と出來なくなり、內の亂れになる事ゆゑ、不便なれども小の蟲、どうも暇はやられない。

ト高尾思入あつて、

高尾　これ錦、顏を上ぎや。

錦　あい。（ト是れにて錦泣く〳〵顏をあげる、高尾あごへ手を當て、愁ひのこなしあつて、）

高尾　そなたは利發な生れゆゑ、わしが言ふこと、よう聞きや。（ト是れより胡弓の入りし、誂への合方になり。）この高尾は五年跡、母さんが御病氣で、人參代の其爲にこのお內へ賣られて來た、まだ其頃は引込みにて名をも高口といふ時分、先代のおいらんがわしへ廓の諸譯をば、よう敎へて下さんしたが、勤めする身は取分けて惡い病を煩はぬやう、神信心を第一に、御主人さまを大事に思ひお客の機嫌を取るのが勤め、又どのやうに困ればとて、人さんの物を箸片々、目がけぬやうにして居れば、自然と天のお惠みでよいおいらんになつた上、樂な所へ請出され其身の出世が出來ると聞き、それを守つて居たゆゑに、不束な身で高尾といふ名前を受けつぐやうになり、お職とまではなつたれども、生れ附いての氣隨にて、いやなお客は振り通し、勤めする身にあるまじき一人のお客に心中立て、子まで產みしはお主へ不忠、その罰ゆゑか吉之丞さん、降つて湧いた災難にて、今は主家を御浪人、貧しう暮してござんすゆゑ、此の二階へも來られぬほど不義理が出來てお身の難儀、元はといへばわたしゆゑ年の明けるを待ちし上お內へ行つて一つになり、共に辛苦を盡すのは遊里の意氣地といふものゝ、世にある人に見られなば、あれが三浦屋の全盛にて高尾が成れの果てなるかと、笑はれる事は知れたこと、此身の恥殊に立派な御主人のお名前出さねばならぬゆゑ、廓を出れば此わしも人の目褄に掛らぬやう邊鄙な所へ身を隱し、明るい體を持ち

ながら闇い家にて一生涯、月日を送るもよい手本、必ずわしを見習うて氣儘な勤めをする時は其身の末が惡いゆゑ、氣隨を出さず大切にお客を勤め一日でも、辛い苦界をのがれるが、遊女の譽れと思ふゆゑ、年の明くまで此里で、勤めを仕ようと思ふなよ。（トよろしく異見をする。）

錦　あい有難いその御異見、それは嬉しうござんすが、そんなら明日からおいらんは此廓にはござんせぬか。

高尾　さあ昨日の錦に引替へて明日は襤褸を身に纒ひ、貧苦をせねばならぬゆゑ、もう廓へは來ぬわいなう。

高篠　ほんにこんなに立派にして、廓を出て行かしやんすは、どうやら目出度いやうなれど、

高衣　みす〳〵明日から困るのは、知れた暮しの御浪人、

○　どんな苦勞をなさんすかと、それを思ふとわたしらも、

△　目出度いやうでも考へれば、

高篠　段々悲しう、

皆々　なりますわいなあ。（トよろしく泣く、是れを聞き四郎左衞門思入あつて、）

四郎　主人を思ふ心から、斯うしてみんなの居る所で、禿へ異見をして行くは、それと言はねどみんな

へ異見、そりやもう假令我儘でも高尾のやうに器量も勝れ、客に枕をかはさずとも、座敷の内の味ひがいふにいはれずあるゆゑに、子持高尾と評判取り見世も繁昌したゆゑに主人に少しも損はないが、是れが外のおいらんに氣儘をされた日には、忽ち見世のさびれとなり、主人の爲にもなりますまいと、跡々までへ教訓を加へて行くとは見上げた心。（ト用箪笥の引出しより五十兩包みを出し、）これ高尾、こりやァあんまり少しだが、今の異見の禮を兼ね、年の明けたる悦びに態とおれが祝つてやる。

ト金包みのまゝ前へ出す。高尾こなしあつて、

高尾　不束な身を持ちまして、旦那さまへも憚りなく、足らはぬ勝の異見をば小癪な奴とも思召さず、却つてお褒めのお詞にて、お金までを下さんすとは、何とお禮を申さうやら。

徳右　斯うして子まであるものを長の年月御不便がり、お世話下さるのみならず、見れば多くの金子まで戴きましては濟みませぬ。

四郎　いや其の遠慮には及ばない、わしも長年高尾のお蔭で大きな金を儲けたから、言はゞ利息も同然なほんの僅かな五十兩、祝つてやるも貧苦の中へ、いやさ、贔屓に思ふおいらんゆゑ、鰹節料を祝つてやるのさ。

徳右　でも、大枚の金子ゆゑ。（ト押し戻さうとするを、）

高尾　旦那さんの思召しにて、折角お祝ひ下さんすを、お返し申すは却つて失禮、お貰ひ申して置かしやんせいなあ。

徳右　さういふ事ならお詞に隨ひ、頂戴いたすでござりませう。

ト金包みをいたゞいて懐へ入れる、お牧有合ふ手箱より薬包を出し、

お牧　またお前は癪持にて暑さ寒さの取附きには何時でも持病が起るゆゑ、若しもの時はと内證へ買つて置いた此薬、月頭には怠たらずいつもの灸をすゑて貰ひ、假令貧苦に暮すとも、體を達者にするがよいぞや。（ト高尾に薬包みをやる。）

高尾　お薬までを此樣に求めて置いて下さんする程、お情深いお上さん、何とお禮を申さうやら、有難うござりまする。（ト押し戴き薬包みを見て、）もし伯父さん、此薬は弟が奉公して居る本町の、小西の家傳で癪の妙薬、又なくなつたら買うて下さんせ。

徳右　いや其小西で思ひ出したが、そなたの弟宗次郎が主人の使ひの戻りがけ、最前家へ寄つたゆゑ、そなたが今日廓から年が明けて出る事を宗次郎に話したら、久しう姉に逢はぬゆゑ迎へに行くならお前と一緒に、連れて行つてと頼むゆゑ、そんなら戻つて御主人へ、暇を願つて出て來いと言つ

て置けど、主人の前が出にくいかして來ぬゆゑ、もしおれが出た其跡へ宗次郎が來たならば、跡から寄越して大門口で待合して居るやうにと、言ひ置いて出て來たゆゑ、ひよつと弟が廓の口に待つて居やうも知れぬぞや。

高尾　そんなら弟宗次郎が、迎ひに來たいと言ひましたか、小さい時に別れた儘、どんなになつたか顏も見ぬゆゑ、わたしも逢ひたうござんすわいなあ。

德右　いやもう同じ姉弟とて、あゝもよく似て居るものか、丸でそなたを男にしてそこへ出したと思ふ程よい若い者になり居つた。

高尾　同じ姉妹でありながら、明石關へ片附いた姉さんは似て居ねど、弟とわたしは子供の時から似て居たさうでござんすわいなあ。（ト此時五ッの鐘鳴るゆゑ、）

德右　ありやもう五ッ、更けぬうちにお暇をして、出掛けようか。

高尾　さあ何時まで居ても皆さんへ、名殘りは盡きぬゆゑ、そんならお暇申さうわいなあ。

錦　そんなら、最う行かしやんすか、情ない事でござんすなあ。

高篠　ほんに是れぎりおいらんの、

高衣　お顏も明日から見られぬかと、

○　思へばいとゞ悲しうて、

△　お名殘惜しう、

新造　ござんすなあ。（トみな〳〵高尾に縋つて泣く。）

お牧　新造はじめ禿までが、泣きの涙で名殘りを惜しみ慕ふ心がいぢらしく、側で聞くさへ胸一杯涙のとめどがないわいなあ。（トよろしく泣伏す、四郎左衞門思入あつて、）

四郎　えゝ手前までがどうしたものだ、いはゞ目出度い高尾が年明け、斯うしてみんなが慕ふのも不斷目をかけ使はるゝ其恩を思ふゆゑ、何でも人は惜しがられて其身を早く引くのが花だ、それをめろ〳〵泣かれては、高尾も爰が立ちにくい、必ず泣くな。

お牧　あい。

四郎　泣くな。

お牧　あい。（ト此うち四郎左衞門も男泣きに泣くことあつて、氣を替へ、）

四郎　えゝ、みつともない、泣くなといふに。（ト涙をこぼして居るゆゑ、錦四郎左衞門に心附いて、）

錦　さう言はしやんす、旦那さんも。

四郎　えゝ、おれのは、こりやあ嬉し涙だ。

ト手拭にて涙を拭ふ、此うち高尾も愁ひの思入よろしく、徳右衞門思入あつて。

れ〳〵お高、長居をしては皆さんへお歎きをかけ濟まぬゆゑ、少しも早くお暇しやれ。

トよろしくせり立てる。高尾涙をぬぐひ思入あつて、

高尾　左樣なれば御夫婦さま、隨分とも御機嫌よう。

四郎　そんならこなたも、隨分達者で、

お牧　煩はぬやうにしたがよいぞや。

高尾　有難うございります。

高篠　せめての事にわたしらは、大門口まで、

皆々　お見送りを。（ト立たうとするを、）

高尾　あゝもし、有難うはござんすが、それでは却つて心が引かされ、廓が出にくうござんすゆゑ、よしにして下さんせ。

四郎　成程こりやあ此儘で、送つて行かねえ方がよからう。

徳右　左樣なれば旦那さま、何れお禮に改めて、此の徳右衞門が上りまする。

高篠　ならう事ならおいらんと、紅葉どんも御一緒に、

高尾　一度ぐらゐは來られうわいなあ。（ト紅葉の手を取り、立上る。）

錦　そんなら、紅葉どん。

紅葉　錦どん。（ト此うち高尾下手へ來り、）

高尾　とはいへ、是れが。（ト跡へ返らうとするを德右衛門隔て、）

德右　はて、行きやれといふに。

ト是れより送り三重になり、高尾禿の手を引き跡へ心の殘る思入、これを德右衛門せり立て花道へ掛る、舞臺皆々高尾を見送る、四郎左衛門は見ぬ顏をしてぢつと思入、トゞ高尾揚幕の所へ行く、

錦　紅葉どウん。」

ト長く呼ぶ、是れにて高尾紅葉と共に舞臺を振返り見て、皆々と顏見合せ愁ひの思入よろしくあつてトゞ思ひ切つて顏へ袖を當てたまゝ揚幕へはひる。德右衛門これに附いてはひる。此の時舞臺の皆々わつと泣伏す。跡浮いた合方になり下手の障子屋體を明け、以前の傳內出來り、此體を見て、

傳內　こりやどうぢや〳〵、亭主一人腕組をなし、眞中に坐つて居て、廻りに大勢うつ向いて居るは、扨は何かしくじつたな。これ亭主、どんな越度か存ぜぬが、身共が挨拶ぢや、料簡いたせ〳〵。

四郎　傳內さま、これはお手水でございますか。

傳內　いや手水ではない、上手をつかひ、其方へ詫びをいたす。

四郎　お前さまの御挨拶なら、料簡をいたして遣りませう。

傳內　それは早速の承知で忝けない。して、高尾が身請の儀は、定めてそちが働きにて。

四郎　その高尾はたつた今、親許へ歸りました。

傳內　や。（トびつくりなす。）

四郎　さあ、高尾が伯父の德右衞門と、いろ〳〵談判いたしましたが、なか〳〵承知いたしませず、みんなが留めるを振りもぎつて、たつた今歸りました。

傳內　やゝゝゝ、然らば高尾は親許へ、あの高尾は親許へ、高尾が逃げたか〳〵。（トびつくりして立上りあちこちをうろ〳〵駈け廻り、ト、四郎左衞門の側へ來て下に居て、）やい亭主、おのれはなあ〳〵承知せぬならせぬやうに、なぜ身共に知らせぬのぢや、それ故にこそ先刻も二階へ行かぬと申せしを、決して恥辱を取らせぬと、おのれが受合ひ置きながら、その身共へも沙汰なしにて、玉を逃がしてしまふなどゝは、不埓とやいはん、不屆きとやいはん、身共の武士はどこで立てる、返答いたせ〳〵。（ト叩き立つていふ、此內四郎左衞門思ひ附いたるこなしあつて、）

四郎　さ、そこでござります。

傳內　どこぢや〳〵。
四郎　それなればこそ只今も、小言を申して居つた所、お前さまの御挨拶ゆゑ、料簡いたしましたが、私が小便に行くうち、是れなる大勢附け置きましたを、伯父と二人であの高尾が、振りもぎつて逃げました、小言をいつては見ますが、どうも仕樣がござりませぬ。
傳內　然らば直に跡追つかけ、なぜ捉へて戾らぬのぢや。
四郎　追つかけさせて見ましたが、未だに返事がござりませぬ。
傳內　遠くは行くまい、それ。
ト傳內血相して行きにかゝる、お牧出て、傳內の袖を引き留め、
お牧　お歸りならば、あなたのお腰が。
傳內　えゝ、腰のふら附く筈はないわえ。（ト振拂つて逸散に花道へはひる。四郎左衛門跡を見送つて、）
四郎　いや、とんと氣違ひの沙汰ぢやわえ。
お牧　ほんにわたしがお腰のものをと、引き留めていうたをば、腰のふらつく筈はないと、振切つて行つたわいなあ。
高篠　それは其筈、おいらんの所へ來ても床の番。

高衣　いつでも二階の名代部屋で、
とよ　手ばかり叩いて居るゆゑに、
はな　それで腰がふらつくまいわいなあ。
四郎　川柳點にもいふ通り、手を叩く客はいつでも床の番とは、いやよく言つたものだ。
高篠　川柳といへばおいらんが、此の短册を旦那さんへ、あげてくれろと言はしやんした。

ト高篠蒔繪の短册箱を出す、四郎左衞門手に取つて、

四郎　おれが不斷なまぎゝに、本歌を詠むを知つて居るゆゑ、短册箱をあの高尾が、記念にくれて行つたと見える。（ト箱の蓋を明ける、お牧箱の中をのぞいて、）
お牧　中に何やら一首の歌が、書き殘してあるわいなあ。（ト四郎左衞門箱の中より短册を取出し見て、）
四郎　年毎に見しは名殘りの春ぞとも、など白妙の花の下蔭。（ト讀む事よろしく皆々思入あつて、）
高篠　どういふ心かわたしらには、
高衣　歌のてにはも知らぬゆゑ、
高篠　ちんぷんかんで分らねども、
高衣　面白さうな三十一文字、

高篠　どういふ心で、
皆々　ござすんえ。（ト四郎左衛門思入あつて、）
四郎　年毎に見しは名殘りの春ぞとは、春の名殘りの惜しまれて。
お牧　つもる思ひの白妙を、花に見立てし一首の歌。
高篠　成程それでおいらんの、
高衣　歌の心が分りんした。
○　お名殘り惜しいその中に、
△　又もかたみの短册が、
とよ　涙の種と思ひますと、
はな　猶々悲しう、
皆々　ござんすわいなあ。（ト四郎左衛門短册をぢつと見て、）
四郎　おまき見やれ、手蹟といひ歌といひ、ても感心な。（ト短册を自分の前へ置くを道具替りの知せ、）ものだなあ。
ト腕組をなしぢつと思入、お牧は愁ひのこなしにて、此道具廻る。

（衣紋坂の場）——本舞臺一面高足の二重、土手の蹴込み、下手へ寄せて開帳場の上り口、二重の上手に疊んだ葭簀張りの出茶屋、同じく下手に柳の立木、日覆より同じく釣枝、霞附の月をおろし、平舞臺上手に人力と記したる腰障子を建切り、車屋の前面を見せ、うしろ田中を見たる夜の遠見、總て大磯衣紋坂の模樣よろしく、○△の若い衆二人長持をおろし立ち掛り、以前の與助三浦屋と記したる弓張提灯を持ち、立ち掛り居る、此の見得、時の鐘にて道具留る。

○　もし〳〵與助どん、さうして此長持は、どこまで擔いて行くのでござります。

與助　笹目ヶ谷の裏店で、吉之丞さんといふ浪人の所へ、今夜これを持込むのだ。

△　そんなら其の浪人者が、おいらんの親許でござりますか。

與助　いや〳〵、それが高尾さんの言交したといふいゝ人だ。

○　裏店の浪人者ぢやあ、定めて家も狹からうに。

△　こんな大きなものを擔ぎこんで、第一置きどころがござりますまい。

與助　近々に此の荷物も、古道具屋の見世へ出て、家は明き店、高尾さんは二度の勤めで、又廓へ歸つて來るに違ひはねえ。

○　それぢやあ折角夫婦になつても、

△　長いことはござりませぬ。

與助　此の荷物と同じことで、長持はあるめえよ。

兩人　いや違ひなし〳〵。

與助　さあ、休んだら出掛けようぜ。

兩人　ちつとも早く參りませう。

與助　さあ〳〵、行かう〳〵。

ト與助先きに○△の兩人、長持をかつぎ上手へはひる。時の鐘打ち上げ、跡雨吟の唄淨瑠璃になり、

〽照りもせず曇りも果てぬ春の夜の、朧に見えて歸る雁、誰が玉章か薄墨の、文と見ゆれどこひ中は、廓の花を振り捨てゝ。

ト此うち風の音トヒヨになり、日覆より雁をおろし、花道より吉之丞着流し大小雪踏にて、高尾の文を讀みながら出來り、花道に留りこなしあつて、

吉之　茶屋の二階で連れ彈きに、誰がつゞりしかあの唄は、八島の謠曲を其まゝに、枕つかひし唄淨瑠璃、それに引替へそれがしは破れ扇で高砂の謠ひも心勇まねど、面白からぬ春の夜の朧月夜に繰

返す、雁の便りの玉章も、今日高尾が廓を出て此吉之丞が浪宅へ、來るとの知らせ取りあへず迎ひがてらに日暮から此の大磯へ出て來たれど、廓の内へはそこ爰と不義理があつてはひられず、大門口で先刻から待てど未だに見えぬゆゑ、一つ所に立つても居られず、何れ廓の入口は一筋道の衣紋坂、どりや土手にて待合さうか。

〽出口の柳うち靡く、風がさそうて連彈きも、餘所の浮氣の本調子。

ト此うち吉之丞舞臺へ來り、二重へ上る、是れにて日覆の雁を引いて取り、

幸ひ爰にたゝんである、茶屋の床几を暫く借り受け。（ト此時花道の揚幕にて、）

大勢　おいらん、お送り申しませう。（ト吉之丞この聲を聞き、向うを見て、）

吉之　あの提灯は慥に高尾、廓の者が大勢にて、送つて來る樣子ゆゑ、目に掛らぬやうさうぢや〳〵。

〽しんき白紙眞實を、反故にするのが男の癖と、袖に雨知る戀の癖。

ト此うち吉之丞上手の出茶屋の蔭へはひる。此唄を借り、花道より一、二茶屋の女房にて銘々看板提灯をさげ兩人先に立ち、跡より駕籠屋四ツ手駕籠をかつぎ、この跡に茶屋の若い者大勢、めい〳〵看板提灯を提げ送つて出で、直に舞臺へ來り土手の上、よき所にて、

一　もし駕籠屋さん、おいらんの伯父さんが、道に後れた樣子ゆゑ、ちよつと待つたがよいわいなあ。

駕昇　左樣なら爰へおろしませう。（ト件の駕籠をおろす。）

〽ぬれて色增す若草の、露の姿もしのぶずり。

ト此うち駕籠の垂れを上げる、合乘に乘つて居たる心にて、以前の高尾と紅葉駕籠より出る、駕籠屋駒下駄を直し、高尾と紅葉はこれを履いて出る。

高尾　此の高尾が廓を出るとて、斯うして大勢打揃ひ、爰まで送つて下さんすとは、願うてもない此身の名聞、わたしや嬉しう思ひますぞえ。

一　その御挨拶には及びませぬ、おいらんのお蔭にて女主人の私どもまで、繁昌いたしましたわいなあ。

二　ほんに廓の茶屋なれば、何處といふ限りはなく、此のおいらんのお蔭にて、お金を儲けぬ家はなく。

三　それも今日ぎり御年が明け、廓をお出と承り、

四　茶屋仲間へ廻狀を、まはして殘らず打揃ひ、

五　斯うしてお送り申しまするも、百分が一の御恩返し、

皆々　お目出たうござりまする。

高尾　そのやうにまで皆さんが、嘘にも言うて下さんすと、世間の外聞この身の本望、假令明日から困つても。

一二　えゝ。

高尾　さあ、子までどうやら肩身を廣う、此廓が出られまするわいなあ。

一　又御無用になされませいで、伯父御さまから只今は、茶屋中への惣花を、

二　澤山頂戴いたしまして、何とお禮を申さうやら、おいらん、

皆々　有難うござります。

高尾　心ばかりのお禮のしるし、其樣に言はしやんしては、却つてわたしが困りますわいなあ。

一　せめての事に土手先きまで、

二　お送り申して、

皆々　參りませう。

高尾　いえ〳〵それではお氣の毒、爰まで送つて下さんすりや、澤山でござんすから、どうぞ戻つて下さんせ。

三　さやうでもござりませうが、

四　とてもの事に、
皆々　もう少し。
高尾　それでは却つて困るゆゑ、どうぞ爰から是非ともに。
一　あのやうにおつしやるを、無理にとも言はれまい。
二　お名残り惜しいことながら、そんならおいらん、
皆々　御機嫌よう。
高尾　是れでお別れ申しませう。（ト是れにて皆々捨てゼリフにてわや〱と花道へはひる。高尾これを見送り）
茶屋の衆まであのやうに、親切にして下さんすとは、ほんに嬉しいお志し、必ず忘れは置きませぬわいなあ。それはさうとあの伯父さんは、何をして居なさんすやら、きつう遅い事ぢやなあ。
駕舁　茗荷屋へ寄つておいでになるかも知れません、ちよつと見て參りませう。
高尾　そんなら御苦勞ながら、どうぞさうして下さんせ。
駕二　わつちも草鞋があやしいから、一寸はき替へて參りませう。
駕一　そんならおいらん。
兩人　ぢきに行つて參じます。（ト駕籠屋兩人は花道へはひる。跡高尾揚幕の方を見て思入あつて、）

高尾　爰まで來ても月明りで、五十間から大門口、どうやら目先きに見えるやうな、この住み馴れた大磯も、思へばこれが見納めなるか。

〽晴れてよかろか、晴れぬがよいか、とかく霞か春のくせ、胸の曇りの雲紙も。

ト此うち高尾名殘り惜しき思入よろしくあつて、此時上手葭簀張の蔭より以前の吉之丞出て、高尾を見て、

吉之　高尾なるか。

高尾　吉之丞さん。

紅葉　よう迎ひに來て下さんしたなあ。

〽晴れてうれしき月の面影。

ト兩吟のあげにて、高尾、禿、吉之丞の側へ來り寄り添ふ。吉之丞思入あつて、

吉之　昨日そちの所より參つた文を見るよりも、飛び立つ程のわが悅び、昨夜もろく／＼寢られぬゆゑ夜の明けるのを待兼ねて、宅も綺麗に掃除をなし、爰まで迎ひに參つたのぢや。

高尾　定めしさうと思ひしゆゑ、わたしも心は急げども、朋輩衆や新造達に引き留められて思はずも、出るのが遲くなりましたわいなあ。

紅葉　もしかゝさん、もう今日からはとゝさんと、言うても大事ござんせぬか。
吉之　おゝ大事ない〳〵、實の親子であるからは、そちも一緒に今宵から川といふ字に抱いて寢るぞや。
紅葉　いえ〳〵わたしや別々に、一人で寢るのがよいわいなあ。
吉之　然らば一緒に寢るのはいやか。
紅葉　いやではないがかゝさんの、邪魔になつては惡いゆゑ。
高尾　えゝもう、何を言やるぞいなう。
吉之　どうでも廓に居たゞけに、戀にはませた奴ぢやなあ。
高尾　ほんに二階をせかれてより、是れまでしみ〴〵話しもならず、積りつもつて居たわいなあ。

ト吉之丞の側へ寄添ふ、此前方に下手より以前の傳内、丸腰のまゝにて出て二重へ上り、これを後に聞いて居て、氣の揉める思入よろしくあつて、

傳内　あゝ羨しい。

ト高尾に抱き附く、これを吉之丞よろしく支へる、紅葉アレと高尾に縋る、吉之丞傳内を引附け、月明りに顏を見て、

吉之　貴殿は神崎傳内どの。
高尾　そんなら後で、最前から、
傳内　二人が仲の睦じさ、聞くにたまらず、ついうかうかと。
吉之　それほど貴殿がお望みなら、夫婦が妹背の語らひも、
高尾　里の諸譯に引替へて、
吉之　借家住居の入譯を、
高尾　そんなら爰で、
傳内　それには及ばぬ。（ト振拂つて逃げにかゝる、吉之丞突廻し膝に引き敷き）
吉之　お聞きなされい。（ト是れより誂への合方になり）
高尾　さうして是れから此子を連れ、お前の宅へ行たならば、
吉之　今の其名も呼びかへて、お高おかよと名を改め、
高尾　遣手の部屋や朋輩部屋、廊下續きの附合も、
吉之　家主はじめ長屋中、弘めをなして明日からは、
高尾　派出を賣つたる道中に、高い三つ齒の駒下駄も、

吉之　路地の通ひに見得を捨て、低い値の流し下駄、

高尾　外八文字で厚綿の、裾を捌いた足許も、

吉之　見られぬやうに四文から、値切り小ぎりの小買物、

高尾　高尾紅葉の源氏名も、

吉之　岡持提げて豆腐屋へ、

高尾　雪の降る日の居續けも、

吉之　親子三人一ツ鍋、

傳内　散蓮華なら爰にある。（ト顔を持ち上げるを押へ附ける。）

高尾　つもる話しも遠慮なく、

吉之　誰に氣兼ねもあら世帶、

高尾　ほんに嬉しい事ぢやわいなあ。

傳内　所を身共が。

ト振り解いて吉之丞に組附く、吉之丞ちよつと立廻つて、ト、傳内誤つて二重の後へ落ちる。ドンと水音になり、禿うしろを見て、

紅葉　あれ、田の中へ落ちたわいなあ。
吉之　あの傳內には日頃より、遺恨重なる身共ゆゑ。
高尾　これで日頃の意趣返し、
吉之　又もや障りのないうちに、宅へ歸つて、今宵は夜とともに、
高尾　それでも跡から伯父さんが、
吉之　參るとあれば暫しの間、是れなる葭簀の蔭にて、
高尾　積る話しを仕ようわいなあ。
吉之　然らば高尾。
高尾　こちの人。
紅葉　おや、とゝさんも名を替へて。
吉之　はて、詞咎めをする奴ぢやなあ。
ト合方、時の鐘にて、吉之丞高尾紅葉を連れ、上手葭簀の蔭へはひる。跡木魚入り、合方にて、花道より以前の善六、太助出來り花道にて、
善六　ときに、あの傳內さんは、大小もさゝずに三浦屋を飛び出し、どつちの方へ行つたらう。

左助　何でも高尾と夫婦にならねば、生きては居ないと言つたから、鐵漿溝へでも身を投げて、死んだかも知れぬわえ。

善六　さうしてくれゝばこつちも仕合せ、高尾の身請のことにつき、親切ごかしに持込んで、金を借り込んだおれだから、向うが死ねば跡腹痛めずだ。

左助　わたしもいつぞや志賀之助から、吉之丞さんの拂ひを取つたが、あの茗荷屋の與助と馴れ合ひ、家へ三文も入れぬから、尻が割れたら傳内さんへ、罪を塗り附けこつちの身のがれ。

善六　貴樣もいゝ事をして居るが、然しあんな執念深い人は、化けて出るかも知れねえぜ。

ト此うち月を日覆へ引いて取る。

左助　さういへば今の間に、何だか四邊が薄ツ暗くなつた。

善六　おれもぞく〳〵して來たが、何にしろ是れも義理づく、そこらを一遍搜してやらう。

太助　それがいゝ〳〵。

トやはり右の合方にて、兩人舞臺へ來り、二重へ上りあちこちと搜す思入、此時ドロ〳〵のやうな風の音になり、二重の後より以前の傳内深田へ落ちた心にて泥まぶれになり這ひ上り、兩人を見て、

傳内　えゝ恨めしい。（トぬつと出る、是れにて兩人びつくりなし二重より飛び下り、ぶる〳〵顫へながら、）

善六　そりやこそな／＼、傳內さんが化けて出た。

太助　さてはお迷ひなされたのぢやな。

傳內　おゝ迷うた、どうぞ高尾に逢はしてくれ。

善六　逢はせてくれとおつしやつても、あの高尾には吉之丞さんといふ、深い仲の男があつて、

太助　其方へ參りましたから、無い緣だとあきらめて、迷はず浮んで下さりませ。

傳內　いや／＼高尾に逢はせぬうちは、どうでもおれは浮ばぬ／＼。

善六　うかばれぬとおつしやるなら、お前さまから借りた金で、とひ弔らひをして上げます。

太助　それで浮んで下さりませ。

傳內　とひ弔らひをするよりも、貸した金を返してくれ。

太助　扨は旦那がこなたに貸した、金に未練が殘つて居るのだ。

傳內　おゝ殘つて居る／＼、金を返さぬ其時は、善六おのれを取り殺すぞ。

善六　あゝ返します／＼、如何にもお返し申しますが、今となつては困ります。

傳內　そんなら高尾に逢はしてくれ。

太助　それもやつぱり出來ない相談。

傳内　出來ずば二人を取り殺すぞ。

兩人　さあ、それは、

傳内　金を返すか。

善六　さあ、それは、

傳内　高尾に逢はすか。

太助　さあ、それは、

傳内　返事が遲いと、取り殺すぞ。

兩人　こりやもうたまらぬ。

ト兩人逃げにかゝるを、傳内二重より下りて引戻し、二人をかしみの立廻りあつて、トゞ傳内泥だらけな手にて、善六の顏をまッ黒な手で撫でる、是れにて善六の顏眞ッ黒になる、太助これを見て、

太助　や、其顏は。

ト逃げにかゝるを、傳内太助を捉へ顏を撫でる、是れにて太助の顏眞ッ黒になる、善六これを見て、

善六　助けてくれ〳〵。（ト花道へ逃げてはひる。太助傳内を上の方へ突き倒し、）

太助　えゝ、泥くせえ幽靈だ。

ト逸散に花道へ逃げてはひる。跡木魚入りの合方になり、花道より以前の德右衞門先きに以前の駕籠屋兩人附添ひ出で、花道にて、

德右　三浦屋の見世の衆に、いろ〳〵挨拶して居るうちに、思ひの外手間取つた。嘸高尾が待ち草臥れて居るだらう。さうして駕籠屋さん、何處に居るのだえ。

駕一　へい、あすこの土手に待つておいでなさいます。

德右　それは嘸待遠であらう。

兩人　さあ〳〵、早く行つてお上げなさいまし。（ト德右衞門駕籠屋兩人附いて舞臺の土手の上へ來り、）

德右　はて、高尾は見えぬが、どうしたのでござるの。

兩人　はい、爰らにおいでなさる筈でござりますが。（トあちこちを尋ねる思入、此時傳内起き上り、）

傳内　えゝ、恨めしい。（トびつくりと口をあく、是れにて駕籠屋兩人びつくりして、）

兩人　幽靈だ、逃げろ〳〵。

トよき所へ駕籠を置き、下手へ逃げてはひる。德右衞門びつくりして飛びのく、此時知らせに附き日覆より月をおろす、德右衞門傳内をよく〳〵見て、

德右　幽靈にしては眞ッ黑だが。

傳内　おゝ、炭團屋の幽靈だ。

徳右　えゝ、馬鹿な面な。

ト傳内を突き飛ばす、是れにて傳内ひよろ〳〵として駕籠の中へ其儘すつぽりはひる。ばた〳〵になり、土手より宗次郎羽織着流し、店の若い者のこしらへにて出來り、徳右衞門に突當り額を見合せ、

宗次　や、お前は伯父さん。

徳右　おゝ、宗次郎か。

宗次　姉さんは、どうしました。

徳右　今その高尾を搜して居るのだ。（ト此時又駕籠の内より傳内出て）

傳内　えゝ恨めしい。（トばつくり口をあく。）

宗次　あれえ。（ト徳右衞門にすがる。）

徳右　えゝ、又出やあがつたな。

ト傳内の前を蹴る。是れにて傳内睾丸を蹴られし思入にて、前を押へてふら〳〵して居る。宗次郎これを見て、

宗次　ても、氣味の惡い。（ト身顫ひをする、是れにて傳内ぽんとかへるを木の頭）事ぢやなあ。

ト此の模様、風の音、迷子の鳴物にてよろしく、

ひやうし　幕

中幕

最上佗住居の場
本所割下水の場

〔役名 ――最上若黨作藏、巾着切幻次郎吉、高尾伯父徳右衞門、高尾弟宗次郎、男達子分仁太郎、道具屋吾市、家主幸兵衞、判人善六、若い者太助、同與助、最上吉之丞。吉之丞妻高尾のお高、同娘紅葉のおかよ、新造高篠等。〕

（最上佗住居の場）――本舞臺三間の間平舞臺、正面一面に破れたる鼠壁、上手に黒塗り紅葉の紋散らしの重ね簞笥、此上に鏡臺手箱を載せ、續いて同じく紋散らしの長持戸棚の替りに横に据ゑ、内に飯櫃布巾を掛けし蝶足の膳、三ツ組の蓋物徳利など並べ、下手に一ツ竈鍋をかけ、狭箱の米櫃、流し手桶など並べ、いつもの所門口、上の方一間折廻しの障子屋體、下の方跡へ下げて路地口、下座の前白壁、窓のある寺の塀、總て本所邊佗住居の體、爰に序幕の善六太助立掛り居るを、高篠の新造、

前垂れやつしなりにて、是れを留めて居る、此の見得稽古唄へ木魚を冠せ、よろしく幕明く。

善七　もし高篠さん、何も無心合力に來たのぢやあねえ、おいらんに逢はせゝえすりやあ、直ぐ事の分ることだ。

太助　それも知らねえ人ぢやあなし、廓から馴染のわたしらだ、ちよつと逢はせておくんなせえな。

高篠　そりやあさうでもござんすが、南風でおいらんは頭痛がすると言ひなさんして、奥に寐て居なさんすから、今日は歸つて下さんせ。

善六　いくら歸つてくれろと言つたとて、是れが二町か三町なら、又出直して來るけれど、

太助　半道からある割下水、此道の悪い本所へ、度々出掛けて來られるものかな。

高篠　道が悪くつて來られずば、來なさらないでもよいことを。

善六　愛敬のねえことを言ひなさんな、斯うして態々淺草から折の一ッも土産に持つて、機嫌さゝに出掛けて來るも、おいらんの爲を思ふからだ。

太助　こんなしがない暮しをするより、神崎さまへ捻を戻せば、何不自由のない御新造さま、今日は開帳明日は芝居と、榮耀榮華の仕放題だ●

高篠　御親切は有難いが、わたしでさへもそれ相應、行く所もあつたれど、鍛冶松さんの女房になり前

垂がけで味噌漉を提げて歩くも其身には、玉の輿より嬉しいから、おいらんなども其通り、どんな暮しをしなさんしても、吉之丞さんと添ふのが樂しみ、お前方も野暮らしい、無駄な事を言ひなさんな。

善六　何も無駄な事は言はねえ、破れ扇で門へ立つ浪人者より羽振りのいゝ、神崎さまへ乘換へれば、その身の出世になることだ。

太助　苦勞をしてもいゝ人と、添ひてえなどゝいふ事は、そりやあずつと昔のこと、遊女もやつぱり商法ゆゑ、たんと取るのが當世だ。

善六　何にしろおいらんに、ちよつと逢はしてくんなせえ。

太助　逢ひさへすりやあ分ることだ。

高篠　假令何と言ひなさんしても、鹽梅の惡いおいらんを、お逢はせ申す事はなりませぬよ。

善六　さう因業に言ひなさりやあ、賣り詞に買ひ詞。

太助　是非とも逢はにやあ歸らねえ。

ト兩人大きくいふ、此内下手路地口より幸兵衛、荒い中形の役半纏家主のこしらへにて出來り、門口に窺ひ居て、

幸兵　これ〳〵、やかましい、靜かにしねえか。（ト言ひながら內へはひる）

高篠　これは大家さん、よい所へ來て下さんした。

幸兵　樣子はあらかた門で聞いたが、貴樣達は大きな聲をして、お上のお觸を知らねえのか。

善六　何も大きな聲を仕度くもないが、爰の內の高尾さんは、わつちが判で賣つたゆゑ、以前の緣を忘れずに、折を持つてわざ〳〵來たのだ。

太助　それを錢貰ひか何ぞのやうに、逢はせる事はならねえから、歸れ〳〵と言はれちやあ、大きな聲もしにやあならねえ。

幸兵　これ靜かにしろと言つたら靜かにしねえか、大きな聲がしてえなら、合羽干場へ行つてしろ、おれが支配の店の內で、大きな聲はならねえぞ。

善六　ならねえもねえものだ、高が場末の芋堀大家。

太助　御大層な事を言ひなさんな。

幸兵　なに芋堀大家とは誰がことだ、今でこそ堅氣だが、元は野玉のかすり取り、大家幸兵衞と言はれちやあ、此の本所で鳴り響いた鐘が下の口利だ、引越し蕎麥を肴にして樽代の錢で酒を飲むそんなしみつたれな事はしねえ、先づ樽代を初めとして、節句錢から釣瓶錢、店賃の外三文でも長屋

のもの丶錢は取らねえ、ほんの事だが出入り事も、土地が場末の本所だけ、いつでもこつちが受け公事だから、辨當錢はいふに及ばず、途中の茶代筆墨代、身錢を切つて勤めるおれだ、安くすると當てが違ふぞ。

ト兩人思入あつて、

善六　こりやあ大きに不調法を申しました、樽代から節句錢まで、取らねえとは、實に感心な大家さまだ。

太助　斯う見たところが人並より、鼻の高い大家さん、割下水の幡隨長兵衛だ。

幸兵　煽てられていふぢやあねえが、繁華な土地で身上しまひ、逼塞場所は山の手か橋を越えて本所と、大概相場が極つて居るから、おれが支配の長屋のものは、喰詰め者が多いゆゑ、夫婦喧嘩は茶漬飯、夜食が足りずば夜鷹そば、箸を二つに割下水、流れ渡りの氣散じは野玉拵ぎの泥水に、朝は夜明けが遲いだけ夜るは九つ過ぎまでも、湯のある土地は外にはあるめえ、いつでも越してお出でなせえ、竈すえて待つて居ります。（ト脂下つて煙管を啣へ、よろしく思入）

善六
太助　高麗屋ア。（ト合方になり、上手屋體より、高尾好みの結び髮、胴拔なりにて出來り）

高尾　大家さん、よい御機嫌でござんすなあ。

幸兵　これはおいらん、今朝から頭痛がするさうだが、少しは輕くなつたかな。
高尾　今しがた揉んで貰つて、大きに輕くなりました。
高篠　おいらんお寒くはありませんか。
高尾　今朝から南氣で、わたしや逆上せてならぬわいなあ。
善六　此間は好きなお酒で、ついうか〳〵と長座をして、嘸御迷惑でござりましたらう。
太助　これは少しばかりござりまするが、山谷へ申し附けましたから、お夜食に上つて下さいまし。
ト杉折を前へ出す、高尾ちよつと見て、
高尾　何だか、有難うござんす。
善六　扨おいらん、いつも參つて同じセリフを申すやうでござりますが、神崎さまがあれ程に焦れ切つてござるから、どうか心を取り直して、話しに乘つて下さいませぬか、失禮な事を申すやうだが立派な所におおいらんが、お出でなさる事ならば、こんな事は申しませぬが、
太助　昨日までも廓の內で一二といはれた高尾さんが、此本所の割下水で何ぼ好き合つた仲だといつてしがない暮しをなさるのも、出來た事ではござりませぬ。
善六　知らねえ者が見る時は、働きのねえおいらんだと、指をさしますぜ、古い都々一にもある通り、

太助　手鍋提げよと口にはいへど實は乘りたい玉の輿、い〻都々一ぢやあござりませぬか。爰らで一番氣を替へて、牛を馬に乘りかへるが、先づ當世でござりまする。

ト高尾煙草を呑みながら思入あつて、

高尾　たゞさへ逆上せてならないに、靜にして下さんせ、わたしと一つに出たものも其身の運と一ツには、心々で思ひの外立派な所へ片附いて、榮耀榮華をするものがござんすゆゑに、此のやうにしがない暮しをして居るを後指さすかは知らねど、廓通ひが元となりお家の寶を失うて浪々なされし吉之丞さま、その御苦勞を餘所に見て、榮耀がしたさに外へ行つては、わたしばかりか廓の恥不束ながら三浦屋で高尾といふ名を繼いだからは、遊女の操を立てる心、是れから長いその内に生活に迫つて親子とも裾を結んで肩へかけ、糊を賣つて歩かうとも、夫の爲なら厭ひはせぬ。慾にころんで義理を捨て、襟許に附く其人は大方笑ふでござんせうが、そでない事が出來ぬのが、野暮な生れのわたしゆゑ、此後は當世の話しは聞かして下さんすな。

善六　それぢやあどうでもおいらんは、

太助　話しに乘つて下さいませぬか。

高尾　え〻もうよして下さんせ、淸い耳が穢れるわいなあ。（ト幸兵衛感心せし思入にて、）

幸兵　流石は三浦屋の太夫職、人の落目を見捨てぬとは、誠に感心いたしました、かういふ店子を持つたのは、家主冥利に叶つた事だ。

高條　ほんに大家さんのおつしやる通り、人と違つたおいらんゆゑ、お前方も無駄な事を、よい加減に言ひなさんせ。

善六　無駄な事とはいひながら、言つて見にやあ譯が分らず。

太助　折でも持つて斯うして來るのも、おいらんの實はお爲を思ふからだ。

高尾　御親切は嬉しいが、こんな事なら來て下さんすな。

善六　假令來いとおつしやつても、此道の惡い本所へ、たゞの用で來ますものか。

太助　暮れりやあ猶更歩きにくい、明るいうちに歸りませう。

高尾　そんなら歸りなさんすか。

善六　歸るはいゝが雲立つて、こいつァ歸りに降られるわえ。

太助　これだからおれもよせと言つたのだ。

善六　愚癡を言つたとて仕方がねえ。

高尾　高條さん、さつきのお金は。

高篠　はい、爰にあります。（ト帶の間から紙に包みし金を出す、高尾取つて、）
高尾　善六さん、本所は道が惡いから、是れで歸りに駕籠にでも。（ト金を出す、善六取つて、）
善六　これはおいらん、有難うござります。
太助　然しお氣の毒でござりますな。
善六　是れだからおれが來いと言つたのだ。
太助　こいつア一番あやまつた。（ト言ひながら門口へ出て、）
善六　高篠さん、おいらんへよろしく。
太助　さあ行きやせう。（ト稽古唄になり、兩人捨ゼリフにて花道へはひる。）
高篠　もしおいらん、今のお金がなくつちやあ、大家さんへ濟みませんね。
高尾　濟まない事は知つて居れど、折を土產に持つて來たゆゑ、どうもたゞは歸されぬわいなあ。
幸兵　成程人に物を貰つて、たゞ歸されぬとは感心だが、おれに濟まぬと言ひなさるのは、どういふ譯があつての事だ。
高篠　さあ其濟まないと申す譯は、段々溜る店賃を、どうかして濟ましたいと、今おいらんが簪を鼈甲屋へ賣りまして、あなたへそれを上げようと、思ひの外に今の二人へ、お金を遣つてしまつたゆ

高尾　ゑ、御勘定が出來ませぬ。
幸兵　お氣の毒ではござんすが、もう少し待つて下さんせ。
高尾　何の事かと思つたら、店賃の勘定なら、決して心配しなさんな、おれが長屋に三月より貸しのねえものは一人もねえが、地主の方へは立替へて、おれが勘定して置いたから、都合が出來たら寄越すがいゝ。
高篠　然しお前さんに立替へさせて、まことにそれぢやあ濟みません。
幸兵　はて、店子はわが子も同じこと、濟むも濟まぬもいるものか。
高尾　お禮といふもをかしいが、これをあなたに上げますから、お内であがつて下さりませ。
ト以前の折を出す。
幸兵　そりやあ何より有難いが、吉之丞さんに上げたらいゝに。
高篠　いえ、差のある人達ゆゑ、上げぬ方がようござんす。
幸兵　成程そこもあればふたもある、折はわしが貰ひます。
高尾　どうぞさうして下さんせ。
幸兵　此肴では一升買つて、長屋の者に飲ましてやらう。

高篠　御散財でござんすな。
幸兵　どうで毎晩飲む酒だ、肴だけ助かります。
高尾　左様なれば、大家さん。
幸兵　ゆるりと家で、ちよん。（ト門口をしめる。）飲みませう。
　ト又稽古唄になり、幸兵衛折を持つて、下手路地口へはひる。
高尾　今日はとゝさんの命日ゆゑ、おかゝを連れて伯父さんが、お寺參りに行かしやんしたが、大分遲い事でござんすな。
高篠　大方歸りにお開帳へ、お廻りなさんしたに違ひない。
高尾　ほんに、そんな事でござんせうわいなあ。
　ト又稽古唄になり、花道より徳右衛門、序幕のなりにて絹やつしの子役の手を引き出來り花道にて、
徳右　お開帳へ廻つたゞけ、四五町道が遠いから、嘸おかよは草臥れたらう。
かよ　あい、草臥れたから、背負して下さんせ。
徳右　おゝおぶつて遣つてもよいけれど、折角爰まで歩いて來て、今背負つては詰らない、もうちつとぢや辛抱せい。

かよ　あい／＼。（ト手を引かれ舞臺へ來り。）
德右　あい、今歸りましたぞ。
高尾　おゝ伯父さん、お歸りでござんしたか。
德右　お開帳へ廻つたので、大きに遲うなりました。
高篠　おかよさん、よく歩けましたね。
かよ　あい、おぶさらずに歩いたわいなあ。
高尾　なに、おぶさらずに歩けようぞ。
德右　いや／＼今日は行き歸りとも、おぶさらずに歩いて來た、褒めてやつてくりやいの。
高尾　おゝ、それはよく歩いて來やつたの。
德右　死んだ兄貴の祥月に、孫のことゆゑおかよを連れ、墓參りに行つて來たが、誰が先へ參つたか、花が澤山あがつて居た。
高篠　大方關取さんのお上さんが、お參りなさんしたのでござんせう。
德右　いや、お浪には途中で逢つたが、まだ參らぬと言ひました。
高尾　それでは弟の宗次郎が、お參りしたに違ひない、懸廻りに出た次手には、お參り申すと言ひました。

徳右　それは〳〵感心なことだ、子供の折からおとなしく心立てがよかつたが、あれは今に出世して、よい商人になるであらう。

高尾　早くあれが家でも持つて、姉さんの所に預けてある、とゝさんの位牌を家へ置きたいものでござんす。

高條　宗次郎さんも最う今に、お家へお歸りでござんせうなあ。

徳右　十年の年も去年明け、今年は旦那へ御禮奉公、首尾よくそれを勤めれば、今年の暮か來年の春は家が持てるであらう。

高尾　さうなつたら力になり、嘸嬉しうござんせう。

徳右　いや力といへば宗次郎に、何ぞ頼んだ事でもあるか。

高尾　あい、頼んだ事がござんすわいなあ。

徳右　一昨日あれに逢つた時、委しい事も言はなんだが、もし姉さんに逢うたらば、お頼みの其品は一日二日のうちには、持つて參ると言傳を頼まれたも年の上、さつぱり忘れてしまつたわえ。

ト高尾これを聞き、嬉しき思入あつて、

高尾　そんならわたしの頼んだことを、一日二日の其うちに、持つて參ると申しましたか。

徳右 お丶、きつと持つて來ると言つた。

高尾 そりや、まあ、嬉しい事でござんすなあ。

徳右 して、弟に何を賴んだのぢや。

高尾 爰に居るのは高篠さんゆゑ、隱さずお話し申しまするが、吉之丞さまが失ひし大江樣のお家の寶寢覺と名附けし香合が、道具屋の手に渡りし由、以前御恩になりしとて志賀之助さんが買ひ求め姉さんに渡せしを、と丶さんが預かつて歸る途中で人手に掛り、またもや香合盜み取られ願ひに願ふ望みを失ひ、どうぞして搜し出し再びお手に入れたいと、作藏どのがそこ爰と尋ねし念が通じてか、又道具屋へ賣物に出たのを聞き出し直を聞けば、二百兩といふ事ゆゑ、浪々の身に都合は出來ず、兎やせんかくと才覺に吉之丞樣も作藏どのも、朝から諸所へ出步けど、是れぞといふ當てもないゆゑ、弟が尋ねて來たを幸ひ、若しや都合が出來まいかと、話しをしたらどうかして、お間に合せて上げませうと、受合うて歸りしが、そんなら出來ると言うたかいなあ。

ト徳右衛門これを聞き思入あつて、

徳右 お丶其事はそちが姉の、お浪から聞いて居るゆゑ、繫がる緣のおれも伯父、どうかしてと思へども、高の知れたる釣船漁師、二百兩の事は扨置いて、十兩の金も出來ぬ身の上、意氣地のない事

ではある。

高尾　何の中でも姉さんが志賀之助さんへ濟まぬゆゑ、今度はこちらで都合して、買ひ求めてお上へ差上げ、吉之丞さまを御歸參させ、目出度く春を迎へたいわいなあ。

高篠　案じるよりは產むが易いと、よく譬にも言ひますれば、宗次郎さんが都合して、お金を持つてござんすれば、其香合がお手に入り、吉之丞さまもお屋敷へ、直に御歸參なされませうわいなあ。

高尾　どうぞ早う弟が、才覺をしてくれゝばよいが。

德右　その二百兩が調うて尋ぬる寶がお手に入り、吉之丞さまは御歸參なされ、高尾おぬしも御新造さまに、身の固まるは嬉しいが、あゝ、案じられるは宗次郎の身の上。

ト又投首をなす、高尾思入あつて、

高尾　なに、弟の身の上が案じられると言はしやんすは。（ト合方きつりとばなり）

德右　利口のやうでも廓育ち、浮世の事を知らぬゆゑ、二百兩といふ金の都合を弟へ賴んだらうが、聟養子といふではなし、年は明いても奉公人、十か二十の金ならばどうか都合もならうけれど、二百兩といふ金が何で出來ようぞ、梅の由兵衞の淨瑠璃を聞いた事がないかは知らぬが、姉の小梅がおぬしのやうに長吉といふ弟へ、金の都合を賴んだところ、內の娘と懇して主人の金を娘に

貰ひ姉へ屆けに來る途中、其夫の由兵衞が金の切羽に女房の弟と知らず殺害せし、柵らむ義理の淨瑠璃は作り物とは言ひながら、後の人への敎へ草、宗次郎が二百兩の金を首尾よく才覺すれば主人の物を掠めるか、又は盜みを、いや、そんな事もせまいけれど、年寄りの身の取越し苦勞案じられてならぬわいなう。（ト高尾これを聞き思入あつて、）

高尾　成程さうでござんすな、是れまで廓に居た時分、よい客からは物前に包み金を貰うたゆゑ、奉公の身は誰にでも都合のなると思うたは、世間知らずのわたしが誤り、今伯父さんの言ふ通り、ひよつと弟が道ならぬそでない事でもした時には、今日命日のとゝさんへ言譯がない、こりやどうしたらようござんせう。

德右　今にも持つて來たならば、どうして才覺して來たか、金の出所をとつくりと、よう聞いて見たがよい。

高尾　いえ／＼持つて來ぬうちに、どうか斷つて遣りたいゆゑ、一筆書いて遣りませう。

德右　いや／＼それはよしにしやれ、ひよつとおぬしの其文が、人目に掛らばあれが身の上。

高尾　とはいへ、わたしが行くには行かれず。

德右　それ程までに案じるなら、つい一走りおれが行て、宗次郎に逢つて斷つて來よう。

高尾　どうぞさうして下さんせ。（ト此うち門口の側へ相引にて烏をおろし、烏笛）
高篠　旅烏がまぐれて來たか、いつにない烏啼き。
高尾　折も折とて心掛り、もしや今いふ由兵衛の。
德右　長吉殺しにならぬうち、
高篠　そんな事はござんすまいが、
高尾　金の切羽の無分別、
德右　ないともいはれぬ憂き世の中、
高篠　暮れぬうちに少しも早う、
かよ　わしも一緒に、（ト德右衛門にすがる。）
德右　いや、今度は一緒に連れては行かれぬ。
かよ　そんならお土産を、
德右　おゝ、買うて來てやるぞよ。（ト稽古唄にて足早に向うへはひる。）
高篠　わたしも家を明けて來たれば、仕掛けをして參りませう。
高尾　作藏もまだ歸らねば、用が濟んだら、來て下さんせ。

高篠　直に出直して參ります。(ト此時雨車になり、高篠門口へ出て思入あつて、)もしおいらん、降つて來ましたよ。

高尾　降つて來たら、傘をあげようか。

高篠　いえ、それには及びませぬわいなあ。(ト合方になり、高篠前垂を冠り下手へはひる。跡雨車、合方、)

高尾　女心の淺墓に、お客に無心をいふ心で、二百兩といふ金を年季勤めの弟に頼んでやつたは我が誤りに、常日頃から物優しく姉思ひの弟ゆゑ、其身を厭はず盜みをなし、長吉殺しのやうな事がもしあつたならどうせうぞ、あゝ心に掛る事ぢやなあ。

かよ　かゝさま、雨が降つて來たわいなあ。

高尾　ばら〳〵降りと思ひの外、夕立めいた俄か雨嘸伯父さんが困るであらう。(ト薄く雷の音になる。)

かよ　あれ雷さまがお鳴りなさる、かゝさま怖いわいなう。(ト高尾に縋る。)

高尾　何も怖いことはない、取り附いて居やいなう。(ト子役を抱へ、)吉之丞さまも作藏どのも、何處で雨に逢はしやんしたか、早く歸つて下さんすりやよいに、斯うと知つたら高篠を、もそつと留めて置かうもの。(ト雷はげしく鳴る。)

かよ　あれ、怖いわいなう〳〵。

高尾　あゝ困つた事ぢやなあ。（ト高尾困る思入、下手より以前の善六、太助窺ひながら出て、囁き合ひ）

善六　もしおいらん、雨降りにお氣の毒だが、

太助　ちよつと一緒に來ておくんなせえ。

高尾　一緒に來いとは、そりや何處へ。

善六　此先きの四ッ角に、傳内さまがござるから、

太助　そこまで一緒に來て下せえ。

高尾　人もあらうに傳内どのへ、何でわたしが行かうぞいなあ。

善六　えゝ面倒な、引ッかつけ。

太助　合點だ。

ト兩人おかよを蹴倒し、高尾を引立てにかゝる。ばた〳〵になり、花道より作藏、若黨なり、尻端折り緑立を冠り、走り出て來り、内へはひり、此體を見るより兩人を投げ退け、

作藏　こりや、御新造さま、何事でござりまする。

高尾　さあ誰も居ぬのを附込んで、此の二人がわたしを捉へて、

作藏　扨はうぬらは勾引しだな。

善六　おゝ、傳内さまに賴まれて、
太助　高尾を引きあげ、
兩人　連れて行くのだ。
作藏　さう聞いちやあ二人とも引ッ括つて差出すぞ。
兩人　何を小癪な。（ト兩人作藏に組附くを、振拂つて立廻り。）
かよ　怖いわいなう。
作藏　お怪我のないうち、お二人には。
高尾　おゝ、おかよ來や。
トやはり雨車、雷の音にて、高尾おかよの手を引き奥へはひる。跡早き合方、雷の音にて作藏兩人を相手に立廻り、此うち作藏雷に恐れる仕組、トゞ烈しき音にて作藏はッとうつ伏になる。
善六　此間に早く。
太助　合點だ。（ト兩人下手へ逃げてはひる。作藏起きあがり四邊を見て、）
作藏　えゝ、生れついての雷嫌ひに、二人の奴等を逃したか。（ト跡追つかけようとする、又雷の音、作藏びつくりして耳を塞ぐを、道具替りの知せ。）えゝ忌々しい。

ト向うへ思入、やはり雷の音にて道具廻る。

（割下水の場）――本舞臺一面の平舞臺、眞中に松の大樹、上の方に板橋、小川の流れ、日覆より同じく松の釣枝、上下藪疊、うしろ黒幕、總て割下水の體、雷の音にて道具留る。と俄雨に逢ひし仕出し行違ひにはひること。花道より以前の善六、太助逃げて出來り、舞臺へ來て、

善六　折角うまくいつた所へ、歸らねえでもいゝ若黨が、歸つて來たばかりに、

太助　無駄骨折つてぶちのめされ、此雷が鳴らねえ日には、あぶなく命を取られるところ。

善六　運よく爰まで逃げたのは、誠に助ける雷だ。

太助　然し命を拾つたが、何ぞ落しやあしなんだか。

善六　煙草入は腰にあるが、財布をどつかへ落してしまつた。

太助　そいつア詰らねえ事をした、いくらばかりはひつて居た。

善六　さつき貰つた祝儀をそつくり、財布の中へ入れて置いた。

太助　貰つた祝儀を落してしまふとは、やつぱり折だけ損をしたのだ。

善六　今更いつても仕方もねえが、惡いことは出來ねえなあ。

太助　高尾さんを引ッさらひ、金に仕ようと思つたばつかり。

善六　あの若黨の馬鹿力で、いやといふ程打たれたが。

太助　あの儘歸れば損もせず、

善六　ぶたれもせずにちよつぴりと、

太助　何處ぞで飲んで歸れるのに、

善六　今日から惡事を思ひ切り、

太助　落した金を捨利と思つて、

善六　是れから心を、

兩人　入れ替へやせう。（ト雨車、薄き雷の音にて兩人上手へはひる。是れより床の淨瑠璃になり。）

〽降りしきる雨も烈しき雷鳴に、心とゞろく眞の闇、目指すも知れぬ割下水、水にきらめく電光の、影をよすがに歩み來て。

トやはり右の鳴物にて、花道より宗次郎、剃立て縞褻し手代のこしらへ尻端折り、番傘跣足にて出來り、是れと一緒に東の揚幕より吉之丞五十日鬘、肩入れやつしなり尻端折りにて、小さく最上と記せし蛇の目傘をさし、跣足にて雪踏を後へ挾み出來り、兩人花道へ留りはつと思入、誂への合方、かす

めて雨車、雷の音、

宗次　夏に近いといひながら、思ひ掛けない雷鳴に、道を歩くも氣味惡く、賴む小蔭の屋敷あと、殘りし門を幸ひに、雨止みするうち日は暮れて、道さへ知れぬ此の宵闇。

吉之　筑波おろしに雲立ちて一天墨を流すが如く、篠つく雨の大降りに水はき惡き此邊は、忽ち水を押し上げて、常に馴れたる道なれど、溝も分らぬ割下水。

宗次　明りがなくては歩けねど、まだ雷鳴も止まぬゆゑ、三町先きも明らかに、見え透く空の稲光り。

吉之　不破の關屋にあらねども、月もる家に雨も漏り、嘸や宅にて女房や娘が困つて居るであらう。

宗次　少しも早うお宿を尋ね、わりなき賴みの二百兩、

吉之　金の都合にとやかくと、此雨雲よりふさぐ胸、

宗次　晴れて世間へ出らるゝやう、

吉之　歸參の望みも今日明日と、

宗次　寶詮議の日限りゆゑ、

吉之　切羽詰りし身の難儀、

宗次　早うお渡し申したく、

吉之 心やたけに逸れども。

宗次 弓と弦なん廻り道、

吉之 思ふに任せぬ、

兩人 世の中ぢやなあ。

〽風も烈しき横しぶき、金取られじと打ちすぼめ、來かゝる折しも鳴るいかづち。

ト兩人傘を中開きに、花道附際へ來る、雨車雷の音はげしく、

吉之 又もや空もかき曇り、

宗次 盥をこぼす大降りに、

吉之 肝にこたへる、

兩人 あの雷鳴

〽音すさましく兩人は、辷る足許一目散、駈出すはずみに行當る、途端に落つる雷にはつとばかりに打伏せしが、音も鎮まり浪人は、ほつと一息起き上り。

ト雷の音厳しく、兩人舞臺へ來り行當る。此時本鐵砲の音して、掛煙硝ぱつと立ち、後の松の木二ッに裂け、兩人たち〳〵と上下へ耳を塞ぎ打伏しなる。此時宗次郎財布を落すこと、吉之丞起上りほつ

と思入あつて、

吉之　今のは正しく後の松、危い命を拾つたわえ。〔ト胸を撫で、〕又もや鳴らぬ其内に、少しも早く。

〽心せかれて立ち上れば、足に躓く財布の紐。

ト吉之丞下手へ行かうとする、宗次郎の落せし財布足にさはり、取りあげ見て、

足にさはりし此の財布、中は正しく。〔ト四邊へ思入あつて手繰り見て、〕包みの數も望みの高、計らず我が手に入つたるは、天の助けか忝けない。

〽押しいたゞきしが、〔ト財布を戴き思入あつて、〕

とはいへ道に落ちたるものを、拾ひ取るのは今日の教への道に缺けれども、今日に迫りし手詰めの金、御免下され。

〽天へ向つて伏し拜み、跡をも見ずに駈出す、折から來かゝる若ものが、摺れ違つて傘につまづき。

ト天へ向ひ詫をなし、懷へ入れ花道へ行かうとする、花道より次郎吉頬冠り、尻端折りにて駈けて出て來り、花道にて行き合ひ、次郎吉は舞臺へ來る。吉之丞は懷を押へ花道へはひる、次郎吉吉之丞の傘に躓き取りあげ見て、

次郎　こりやあいゝ物を拾つたわえ。

〽行かんとするを、

ト此うち宗次郎心附き、拾つたといふ聲を聞き、懐を尋ねびつくりなす、次郎吉傘をさして行きかけるを、

宗次　もしお前さま、ちよつと待つて下さりませ。

次郎　呼んだのは、おれかえ。（ト床の合方になり、）

宗次　はい、外に往來もないこの道、お前さまでござりまする。

次郎　むゝ、何ぞおれに用でもあるのか。

宗次　今よい物を拾つたと、おつしやいましてござりまするが、其お拾ひなされた物を、お返しなされて下さりませ。

次郎　それぢやあ是れは、おめえのかえ。

宗次　はい、左様でござりまする。

次郎　おめえのなら返してやらう。

宗次　それは有難うござります。（ト嬉しき思入）

次郎　さあ、爰へ置くよ。（ト吉之丞の傘を投げ出す、宗次郎見て、）
宗次　こりやあ傘でござりますか。
次郎　おゝ、おれが拾つたのは、其の傘だ。
宗次　いえ私の落したのは、此の傘ではござりませぬ。
次郎　さうして、何を落したのだ。
宗次　よい物を拾つたと、おつしやつた其品を、お返しなされて下さりませ。
次郎　おつな事を言ひなさるが、傘より外に拾やあしねえ。
宗次　なに、お拾ひなさらぬ事がござりませう、其様な事をおつしやらずと、お返しなされて下さりませ。
次郎　返せ〳〵としつこく言ふが、さうして何を落したのだ。
宗次　さあ、其の品は、
次郎　品を言はにやあ分らねえ。
宗次　さあ何をお隠し申しませう、財布へ入れて二百両、金を落しましてござりまする。
次郎　え、二百両金を落した。（トびつくりなし思ひ入あつて、）むゝ、それぢやあ今の浪人が。
宗次　今落した其金を、私が持つて参らねば、人の命に拘はる事ゆゑ、どうぞ返して下さりませ。

次郎　幾ら返せと言つたつて、拾つた覺えのねえ金が、何でおめえに返せるものか。むゝ、心當りは今の浪人、まだ二間とは行きやあしめえ、ちつとも早く。

〽心にうなづき行き掛けるを、宗次郎あわてゝ縋り留め。

ト次郎吉うなづき、傘を持つて花道へ行かうとする、宗次郎すがり留め、

宗次　今も私が申します通り、其の二百兩がござりませねば、一人ならず二人三人、命に拘はる大事の金何れのお方か存じませぬが、町所からお名前を承はつて置きますれば、それ相應のお禮を持てお內を尋ねて參りますから、どうぞ返して下さりませ。

次郎　えゝ、しみしつこい野郎だなあ、いゝ加減に放さねえか。

宗次　いえ／＼拾つた其金を、お返しなされて下さりませねば、死んでもあなたは放しませぬ。

次郎　むゝ、それぢやあ手めえは其金を、おれが拾つたと思つて居るのか。

宗次　さあよい物を拾つたと、おつしやつたのが何より證據、落した金はお前さまがお拾ひなされたに違ひござりませぬ。

次郎　傘がなくつて困つたから、いゝ物を拾つたと言つたのだ、それ程おれを疑ふなら、素いつてんだから、手を突つこんで懷を搜して見ろ。

宗次　左樣なら懷を搜し、改めさして下さりますか。
次郎　遠慮はねえから、どこからどこまで、搜した上であきらめろ。
宗次　御免なされて下さりませ。
　〽こは〳〵ながら手を入れて、尋ね搜せど懷中に、落せし金のあらざれば。
　ト次郎吉懷を明けて見せる、宗次郎次郎吉を見て怖き思入、懷へ手を入れあちこちと尋ね見て、
　やゝ、こりや懷中に、落せし金は。
次郎　どうだ金はあつたか。
宗次　さあ、それは。
次郎　ありやあしめえな。
宗次　さあ。
次郎　よく盜人にしやあがつたな。（ト傘で宗次郎を打ちすゑる。）
宗次　さあ、其の懷にはなけれども、金はこなたが拾つた樣子。
次郎　まだそんな事を、吐かしやあがるか。
　〽持つたる傘で續け打ち、髮も亂れてひよろ〳〵と、縋るを蹴倒し、情容赦も白浪と、思ひ

違へて宗次郎、武者振り附くを振拂ひ、えゝ面倒なと次郎吉が、脇腹打てば其儘に、うんとばかりに倒れ伏す。

ト此内狸囃子迷子の鉦太鼓を冠せ、次郎吉宗次郎をむごく打ち倒す、是れにて髪亂れ衣裳破れ、宗次郎武者振り附くを、振拂ひ蹴倒し、兩人體を捨てしむごい立廻りよろしくあつて、ト、次郎吉脇腹を打つ、是れにて宗次郎うんと氣絶なし倒れる、次郎吉見向きもせず、

次郎　とんだ野郎に出會し體中は泥だらけだ、何にしろ落したは、二百兩といふ大金だが、どいつが金を拾つたか、氣の悪い話しだなあ。（ト此時兩窓の障子を明け、）いつの間にか雨があがつて、足許が明るくなつた。（ト宗次郎を見て、）や、こいつア到頭打ち殺したか、こんな奴でも人一人、喰へ込んぢやあ詰らねえ、盛相飯は眞平だ。（ト以前の傘を開き見て、）拾つた傘に最上と御家流で記してあるは最上高尾と名の高い、浪人者ぢやあねえか知らぬ、家は慥に割下水、こりやいゝ手蔓にあり附いたわえ。（ト次郎吉思入あつて、）不便ながらも、此奴は此儘。

〽人目に掛からぬ其うちと、足を早めて行く空の、雨雲拂ふ小夜風に、宗次郎は息吹き返し。

ト次郎吉思入あつて、傘を持つて花道へはひる。跡本釣鐘、風の音になり、宗次郎心附き思入あつて

宗次　えゝ今の奴は何處へ行つたか。（ト本釣鐘床の合方になり、）正しく金を拾つたに、違ひはなけれど

いづれへ遣りしか、懐までを尋ぬれど拾ひし金を持つて居ぬゆゑ、言ひ掛けなすと打ち叩かれ氣を失なつて居るうちに、何處へ逃げて行き居つたか、口惜しい目に逢うたわいの。

〽身内の痛さも打ち忘れ、齒がみをなせしがやゝあつて、口惜し涙おし拭ひ。

　卜宗次郎口をしき思入あつて、涙を拭ひ、

あの二百兩の金がなければ、姉に連れ添ふ吉之丞さま、紛失なせし香合を求むることも叶はずに寶詮議の日延も切れ、若し御切腹でもなされたら姉も共々死ぬは必定、さうなる時は娘は孤兒、一人といへど二人三人、命に拘はる事ゆゑに。

〽勿體ないと知りながら、お主さまのお目を掠め。

二百兩といふ金を盜みし罰は忽ちに、思はぬ雷に途中で失ひ、姉の頼みも水の泡、望みの叶はぬ其上にお主さまへの言譯に、死ぬより外の事はない。

〽雨に濡れたる袖袂、又もや絞りてさめ／＼と、暫し涙に暮れたりしが。

　卜宗次郎よろしく思入あつて、

姉の爲とは言ひながら、お主の金を盜みしゆゑ、命を捨つるは天の罰、せめては斯ういふ譯ゆゑと、一部終始を書き殘し、姉へ屆けて身を投げん。

〽と覺悟の體。（ト此時チヨンと灯入りの月出る、宗次郎是れを見て、）

あゝ寒がる胸に引替へて、空はいつしか雲も晴れ、晝にもまさる此光り、二十何年見し月も、最早今宵が見納めなるか。

〽我が身をかこち、しを〳〵と立ち上りてぞ。

ト本釣鐘にて、宗次郎茫然と立上る、着て居たる羽織ずる〳〵と脱げて落ちるを、道具替りの知せ、投げ首をなしてよろしく思入、三重にてこの道具廻る。

（元の世話場の場）――本舞臺元の世話場、爰に吾市、羽織着流し道具屋にて、香合の箱を前へ置き傳八同じく羽織着流しにて側に住ひ、下手に以前の作藏言譯をして居る、此見得合方にて道具留る。

吾市　もし作藏どの、吉之丞さまがお望みの彼の寢覺の香合も、今日までのお約束だが、こちらでお買ひにならずば、此方が買ひたいと、附きに附いての矢の催促、それゆゑこちらへ同道しました。

傳八　御免なされませ、私は道具屋仲間でござりますが、してお屋敷から御註文で、疾から尋ねて居ります品、御先約のこちらさまで若しお求めになりませずば、私の方は此通り、お屋敷から金も下り、直に買つて納めれば、一割は堅く儲かる品、それゆゑ今朝から吾市どのを、責めに責めて居

ります所。
吾市　今お聞きなされる通りゆゑ、御都合が出來ませずば、仲間の方へ賣りますから、ちよつとお斷りを申しまする。
作藏　出來るとも出來ないとも私には申されねば、旦那さまのお歸りまで、お待ちなされて下さりませ。
吾市　そりやあ今まで待つた事ゆゑ、待つまいものでもないけれど所詮出來ない二百兩、いつまで待つても無駄なことだ。
傳八　わしが方なら右から左り、直に金を渡します。
吾市　斯ういふ口が目の先へ、ぶら下つて居る此の香合、金が出來ねば御緣のないのだ。
作藏　さうではあらうが、五ツまで遲くも五ツ半までには、きつとお歸りなされませうから、それまで待つて下さりませ。
吾市　達て待てといふならば、待つまいものでもなけれど、旦那さまが歸つたらきつと金が出來ますか。
作藏　さあ、それは。
傳八　それぢやあこつちへ買ひませうか。
作藏　さあ。

吾市　才覺が出來ますか。

作藏　さあ、

吾市　さあ、

兩人　さあ〳〵。

吾市　金が出來ずば、御緣のないのだ。

〽金の切羽の其所へ、立ち歸つたる吉之丞、門に樣子を窺ひ居て、

ト此以前花道より、吉之丞出來り、門口にて樣子を窺ひ居て思入。

吉之　いや、其の金子調達いたしました。

吾市　え。（ト顏見合せ思入、吉之丞內へはひるを見て、）

作藏　さうおつしやるは、旦那さま。

吾市　そんならあなたが、

傳八　その金子を。

吉之　二百兩持參いたしました。

吾市　それではいよ〳〵香合を。

吉之　如何にも、只今買ひ求めん。（ト傳八思入あつて、）

傳八　二割儲けと思ひの外、我が手に入らぬが殘念至極。（ト此内作藏心得ぬ思入あつて、）

作藏　して、旦那さまには其の金子が、どうしてお手に入りましたぞ。

吉之　調達なせし、仔細は跡にて。（ト作藏思入あつて、）先づ差當る香合の則ち代金二百兩、數改めて受取りやれ。

〽思ひ掛けなき二百兩、吾市の前へ差出せば、手に取りあけて。

ト吾市心得ぬ思入にて、金を改め、

吾市　こりやまあ、夢ではないか知らぬ。

傳八　よもやと思つた二百兩、お渡しなされば仕方がない。

吾市　左樣なれば、寢覺の香合、慥にお渡し申します。

〽言ひつゝ出せば吉之丞、蓋取りのけて中改ため。

ト吾市香合の箱を吉之丞の前へ出す、吉之丞蓋を明け、行燈の火で改め見て、

吉之　身共がしかと受取つた。（ト吉之丞押し戴いて傍へおき、）

傳八　とんだ五郎のせりふだが、みす／＼手に入る香合を、我が見る前で買はれるとは、あゝ寶の山へ

入りながら。
吾市　いや手を空しくは歸すまい、此間からの歩き賃、一杯御馳走いたしませう。
傳八　酒ぐらゐでは、合はない話しだ。
吾市　悪くはしねえ一緒に來なせえ、左樣なれば旦那さま。
吉之　是れまで度々大儀であつた。
吾市　どういたしまして。（ト兩人門口へ出て、）傳八。
傳八　うまく行つたな。
吾市　これ、靜にしろ。
〽何か一物うなづき合ひ、忍び足にて急ぎ行く。（ト兩人うなづき合ひ、下手へはひる。）
〽跡見送りて吉之丞、寢覺の香合押し戴き。（ト吉之丞香合をいたゞき、）
吉之　ちえゝ忝けない、思ひ掛けなく寢覺の香合、再び我が手に入つたるは、未だ武運に盡きざるか。
悅んでくれよ、これ作藏。
〽言へど返答もなさゞれば。（ト作藏ぢつと思案の思入。）
本地へ歸參の幸先に、何を濟まぬ顏をいたすぞ。

作藏　本地へ御歸參なさるのは、此上もない事ゆゑにお悦び申しまするが、其の香合を御求めなされし二百兩の代金は、何れで御都合なされましたぞ。

〽問はれてはつと差詰りしが。（ト吉之丞はツと思入あつて、）

吉之　おゝ、此金子は川達の、梅澤屋で都合いたした。

作藏　しかと、左樣でござりまするか。

吉之　なに僞りを申さうぞ。（ト作藏思入あつて、）

作藏　もし旦那さま、譜代の家來の作藏に、なぜお隱し下さります。

吉之　何と言やる。（ト床の合方になり。）

作藏　その川達の梅澤屋は、旦那さまの御用を斷り、一兩の金も貸しませぬに、何を目當に二百兩、あなたへお貸し申しました。

吉之　さあ、それは。

作藏　一昨日も私が餘儀なき譯を話しまして、七重の膝を八重に折り賴みますれどいかな事、二百兩は扨置いて二分も貸さぬ梅澤屋が、二百兩貸しましたとは、こりや僞りでござりませうな。

吉之　さあ。

作藏　さあ只今も申す通り、お隱しなさらず私に、金の出所を旦那さま、お聞かせなされて下さりませ。
吉之　とは又何故。
作藏　御親類は申すに及ばず、古朋輩の方々も、あなたが遊里へお通ひなされる御不行跡を憤り、是れまで度々作藏が御無心申しに參つても、只の一軒快よく貸して下さる所もなし、其日の生活に迫るゆゑ、晝夜をわかず私が草履草鞋を造つても、やう〳〵日々の小遣錢、米の代から店賃に御所持の品を賣代なすゆゑ、月々に減るお家の諸道具、それを見兼ねて高尾どのが、今日は簪明日は櫛と髪の飾りはまだなこと、曇らぬ心の鏡さへ一面殘して跡を賣り、合せ鏡のならざる身代、かほどにまでも零落しあなたを目當に二百兩誰が金を貸しませうぞ。高い聲ではいへませぬが、切取りなされてござつたか、盜みをせねば此金は、あなたのお手には入りますまい。
吉之　其疑ひは尤もながら、浪人なせど我も武士、何ゆゑ盜みをいたさうぞ。
作藏　盜みをせぬとおつしやりますが、たゞではお手に入らぬ金、お隱しなされず私に、そでない事をいたせしと、お明しなされて下さらば、まさかの時は作藏が、盜みの科を負ふ心。
吉之　志しは忝けないが神明かけて盜みはいたさぬ、香合詮議も今日に迫る日限りに未明より、金策に出でたれど調ひ兼ねて力なく、歸る途中の雷鳴に、歸宅を急ぐ暗紛れ、足にさはりし金財布、

中には小判で二包員數も丁度二百兩、天の與へと押し戴き歸宅いたせば道具屋が、日延を待たぬ切狩ゆゑ、仔細も明さず求めし香合、盜みし金にあらざるゆゑ、そちが疑念を晴らしてくりやれ。

作藏　すりや二百兩のあの金子は、途中でお拾ひなされしとか。

吉之　如何にも、拾ひし金なるぞ。（ト作藏きつとなり。）

作藏　えゝ情ない旦那さま、拾ひし金を天の與へと思召すのはお心得違ひ、なぜ其所の代官所へ御訴へはなされませぬぞ。あなたは香合買ひ求め本地へ御歸參なされますれば此上もない恐悦ながら、落せしものは如何ばかり難儀をなすか知れませぬ、其身の粗相といひながら、事に寄りなば命にも拘ることもござりませう、是れが町人百姓なら無理とも思ひませねど、人の司の武士が左樣な事をなされては、昔は知らず潔白な、今の世に濟みませぬぞ。

吉之　尤もなるそちが詞、われも大江の家中に育ち父が敎へを受けしゆゑ、道に落ちしを拾はぬ事を辨へぬではなけれども、紛失なせし香合を詮議の日延も明日限り、此度上へ差上ねば此身はとまれ再度の日延取成しくれたる船木氏が、上へ對して言譯なく切腹なすは必定ゆゑ、道に缺けたる事ながら、拾ひし金にて香合を買ひ求めしは外ならず、上へ差上げ恩人たる船木氏の切腹を、止めたいばかりに拾ひし金を訴へず、我が手に入れしは此譯ゆゑ、許してくりやれ、これ作藏、

〽切なき聲を物語れは、扨はさうかと作藏も、主人の心思ひ遣る、折から一間を立ち出るおかよは何の心なく、有合ふ香合手に取るも、こなたは斯くとも知らずして、
ト吉之丞よろしく思入。作藏も扨はといふこなし、此うち奥よりおかよ出で、香合を見てそつと取り、持遊びにして居る、

作藏　船木さまのお命に、拘ることゝは露知らず、御異見申せし失禮は、御免なされて下さりませ。何は兎もあれ船木さままで御安堵あるやう、是れより直に香合を持參いたしませう。

吉之　如何にも持參いたしたけれど、最今宵は五ツ過ぎ、船木氏の宅までは四ツ半ならでは行かれまじ。

作藏　いや韋駄天走りに私が、駈けて參らば四ツまでには、必ずお屆け申せませう。

吉之　然らば是れより大儀ながら。

作藏　畏つてござりまする。

〽言ふに傍の香合を、取り上げ見れば箱ばかり。
ト吉之丞傍に置きし香合の箱を取りあげ見る、中になきゆゑびつくりなし、

吉之　や、箱の内なる香合が。

作藏　なに、香合がござりませぬ。（トおかよを見て、）おゝ、孃さまが持つてござりまする。

吉之　大事の品ぢや、爰へ寄越せ。

かよ　わしに是れを下さんせ。

作藏　えゝ、めつさうな事おつしやりませ、あなたにそれを上げられませうか。

〽取らんとすれば渡さじと、逃げるはずみに取り落し、二つに割れし寢覺の香合。

ト作藏取らうとする、おかよ逃げるはずみに取り落し、件の香合二つに割れる、兩人びつくりなし、

吉之　やゝ、こりや、大切な香合を。

作藏　取り落して眞つ二ツ。

兩人　えゝゝゝゝ。

〽餘りの事に兩人は、尻邊にどうと倒るゝ折柄、門には始終を窺ふ次郎吉。

ト兩人上下にどうと下に居て、呆れし思入、此以前下手より以前の次郎吉出來り、門口に窺ひ居る、

おかよわツと泣き出し、

かよ　かゝさま、どうぜうぞいの〳〵。

〽どうせうぞいなと泣き叫けば、高尾は一間を駈け出て、我が子を引附けおろ〳〵涙。

トおかよ泣く〳〵上手より高尾つか〳〵と出て、おかよを引附け、

高尾　えゝ、そなたはなう〳〵、如何に頑是がないというて、此香合は先達てわたしのとゝさま宗庵さまが、人手に掛つて取られし品ゆゑ、どうぞして取戻し本地へお歸りなされたら、草葉の蔭でも父さまが、嘸お悦びと夫婦して、千辛萬苦で取り得し香合、何でそなたは割つたのぢや、明日に迫りし詮議の日延、この香合がない時は船木さまが御切腹、我が身の事で人さまに命捨させとゝさまが、餘所に見なして居られうぞ、共に死なねば濟まぬ義理、それも誰ゆゑそなたゆゑ、手はおろさねど親殺し、如何なる天魔が我が腹へ宿つて來たか情ない。我が手にかけて殺さねば、夫へ義理が濟まぬわいの。

〽憎い奴めと七ツ子を、目鼻もわかず打ち据えれば。

ト高尾おかよを引附け、めつた打ちに打つ。次郎吉思入あつて下手へはひる。

かよ　かゝさま、堪忍して下さりませ。

高尾　いや〳〵、堪忍ならぬ〳〵。

〽襟上取つて摺附けるを、見兼ねて作藏おし止め。

ト作藏高尾を止める、此うち吉之丞腕組をなし、うつ向き居る。

作藏　あゝこりや御新造さま、御尤もではござりまするが、なに頑是のないお孃さま、手荒い事をなされまするな。

高尾　いや／＼留めて下さるな、親に難儀を掛ける奴、殺さにや腹がいぬわいの。

作藏　そりやさうでもござりませうが、命をお取りなされたとて、一旦割つた香合が元の通りになりませうか。

高尾　元の通りにならぬゆゑ。

作藏　まあ其やうになされずとも、まあ／＼お待ちなされませ。

高尾　えゝ、留めずと、放してくりやいなう。

ト此内始終高尾打たうとするを、作藏留める立廻り、おかよは泣きながらうろ／＼する、吉之丞思ひ入あつて、

吉之　こりや／＼高尾、よい加減にいたさぬか。

高尾　いえ／＼、よい加減にはなりませぬ。

吉之　假令娘を殺したとて、香合失ふ吉之丞、命を捨てずに居られうか。

高尾　それぢやによつて。

作藏　嬢さま、おあぶなうござります。

〽おかよをかばひ作藏が、小脇に抱へ走り行く。

ト高尾立ち掛るを、吉之丞留める、作藏はおかよを抱へ下手へはひる。

〽跡に高尾は身を悶え、我が子を返せ作藏と、あせるを夫が引き留め。

ト高尾追ひかけ行かうとするを、吉之丞留め、

吉之　斯く成行くも道ならぬ拾ひし金を遣ひしゆゑ、計らず手に入る香合も、娘が粗相で失ひしは、これ皆天の御罰なり。

高尾　でも香合を毀さずば。

吉之　はて武運に盡きたる吉之丞、死すると覺悟せし上は、もう何事も捨てゝ置きやれ。

高尾　えゝ情ない事ぢやなあ。

〽はッとばかりに泣き伏す高尾、吉之丞は默然と手を拱いて吐息つく、折から爰へ駈來る兩人。

ト高尾はつと泣き伏す、吉之丞は顏を背けぢつと思入、ばた／＼になり、花道より以前の徳右衛門、仁太郎男達の子分にて、舞臺へ走り出來り、

徳右　これ〱高尾、大變だ〱。

高尾　おゝ、お前は伯父さん。

吉之　あわたゞしい何事なるぞ。

徳右　何事どころか大變だ、宗次郎に今しがた、仁太郎どのが逢つたる所。

仁太　何か樣子は知らねえが、徳右衞門どのに屆けてくれと、賴まれて來た此の手紙。

ト徳右衞門懷から手紙を出し、

徳右　名宛は高尾の名宛だが、心許なく開いて見れば、宗次郎が姉への書置。

高尾　えゝゝゝゝ。（トびつくりなす。）

吉之　なに、宗次郎が書置とな。

高尾　して、弟の書置には、何と書いてござんすえ。

徳右　先だつ涙に讀みもくだらず。

仁太　とつくり讀んで御覽じませ。

〽いふに書置手に取り上げ。（ト高尾手紙を取りあげる。）

高尾　「書置の事。」

吉之　何ゆゑ死ぬと覺悟をなせしぞ。（ト床の合方にて、）

〽詞の内に封おし切り。

高尾　「心も心ならざるゆゑ、申譯のみ書殘し申し候。先達お前さまより御賴みの金子、奉公の身に才覺なりかね、我身を捨て候覺悟にて、御主人の金子を竊に盜み、今宵持參いたせし所、時ならぬ雷鳴に割下水の橋際にて、其の金子を取り落し、正しく拾ひし者御座候ゆゑ、返しくれ候樣賴み候へども、言掛り致し候と申し、蹴たり踏んだり打擲いたし、私氣絕いたし候間に何れへか逃げ去り申し候。斯かる憂きめに逢ひ候も、御主人の金子を掠め候御罰ゆゑと、先非を悔みて今宵身を投げ相果て候覺悟に御座候間、御賴みの金子間に合ひ兼ね候段、幾重にも御許し下され候。」

〽淚ながらに讀終り、正體もなく泣き伏せば、扨は宵に拾ひしは弟が落せし金なるかと、心どきつく吉之丞。

ト高尾書置を持ちしまゝ、泣き伏す。吉之丞扨はといふ思入あつて、

吉之　此書置の樣子では、宵に拾ひしあの金は。

德右　え。

吉之　いやさ、重ね／＼の今宵の災難、斯うも憂き目に逢ふものか。（ト高尾德右衞門に縋り。）

高尾　もし伯父さん、宗次郎はどうしましたらう。

徳右　此書置の樣子では、どんぶりやつたに違えねえ。

高尾　すりや、身を投げて死にましたか、はあゝ。（ト泣き伏す。）

仁太　今更言つても仕方もねえが、顏の色も常と替り、たゞならねえとは思つたが、斯ういふ事とは知らねえのは、おれが無筆なばッかりに書置といふ此の上書が、讀めねえゆゑに宗次郎さんを留めずにしまつたおれが悔しさ、繋がる緣の親分へ斯ういふ譯といつたなら、死なずと仕樣もあらうのに、早まつた事をしなさつたなあ。

徳右　さつきもおれが言つた通り、斯ういふ事に淨瑠璃や、芝居によくある筋台ゆゑ、少しも早く留めようと、お店へ尋ねて行つたのも、後の祭になつたる悔しさ。

高尾　わたしが金を頼まずば、弟に命を捨てさすまいに。

吉之　それといふのも其元は、我が身が失ふ香台を求めん爲の金策ゆゑ。

高尾　如何なる前世の因果やら、此香台ゆゑとゝさんは、人手に掛つて敢ない御最期、廻り廻つて道具屋の手に渡りしを求める爲、弟が命を捨つるのみか、其香台を娘が割り、御緣家たる船木さま、夫の身にまで拘はるのは、情ないではござんせぬか。

徳右　おゝ尤もだ〳〵、其歎きは尤もながら、今更いつても仕方がない、死ぬる覺悟の宗次郎が、身を投げたのは慥に大川。

仁太　徳右衛門さんの生業柄、是れから素張りをしたならば、死骸は直に知れようから、氣をしつかりと持たつしやい。

〽歎きに沈む其の折柄、門に窺ふ若者が。

ト此うち皆々よろしく思入、よき程に下手より、以前の次郎吉傘を持ち内へはひり、

次郎　へい御免なさいまし、最上さまとおつしやるは、こちらでござりまするか。

徳右　はい、こちらでござりますが、何處からござりました。

次郎　わつちやあ御近所の者でござりますが、此傘はお内のではござりませぬか。

〽差出す傘を打ち見やり。（ト次郎吉以前の傘を出す、吉之丞是れを見て）

吉之　おゝ、これは最前忘れし傘。

次郎　それぢやあお返し申します。

吉之　是れはわざ〳〵忝うござる。

次郎　どうか旦那、一杯飲まして下せえまし。

吉之　高の知れた傘一本、飲ましてくれろと言つたつて、幾ら禮が出來るものか。
次郎　出來ねえといふのは分らねえ、貰つていゝから貰ひに來たのだ。
吉之　なに、貰つていゝとは。
次郎　仲間の金を貰ひに來たのだ。
吉之　何と。（ト誂への合方になり、）
次郎　わつちやあ幻次郎吉といふ、盛場捽ぎの巾着切りだが、こつちの家の旦那どのも荒稼ぎをしなさるから、仲間入りの弘め金、それを貰ひに來やしたのだ。
吉之　此身に覺えのないことを、荒稼ぎとやらいたせしとは。
次郎　そんなしらを切んなさんな、暮れて間もなく鳴り出した、其雷より怖ろしい素人衆の荒稼ぎ、二才野郎をぶつくぢき、金を取つたを見ておいた。
吉之　見たとは何れいづくにて。
次郎　とんだ仰山の提げ賣りだが、所は本所割下水、三ツ目へ出る橋の際、どつさり落ちた雷に、松の裂けてる溝ッ端。
〽いふに主人は扨こそと、胸にこたへる二百兩。（ト吉之丞ぞつと思入あつて、）

吉之 扨は最前割下水で、摺れ違つたはこなたであつたか。
高尾 この書置に似寄りの話し、さうして打たれた其者は、
徳右 幾歳ぐらゐでござつたな。
次郎 年の頃は二十三四で、花車な姿の店者だ。
高尾 二十三四とあるからは、疑ひもない宗次郎。
徳右 是れまで顏を合さねば、それと知らずに旦那さまが。
次郎 此傘でなぐつたのだ。
〽扨はさうかと徳右衞門、高尾も共に疑へば。
ト德右衞門高尾顏見合せ、吉之丞を疑ふ思入、吉之丞切なき思入あつて、
吉之 それは最前雷鳴の響きに恐れて忘れし傘、二十三四の若者を、打擲なせし覺えはない。
次郎 いや、覺えないとは言はさねえ、二才をなぐつて二百兩、稼いだ金の入川まで、根こそげ知つて來たおれだ。二百兩を山分けに、半分仲間へ貰ひてえ。
吉之 假令何と言はうとも、打擲なせし覺えはないが、金は今いふ小橋の際で計らず我が手に入つたれど、今の話しの模樣では、正しく高尾の弟が。

次郎　なんと。

吉之　いやさ、落したものなら知らぬこと、何でこなたに渡さうぞ。

次郎　稼いだ金を拾つたと、いふならそれにもしてやらうが、道に落ちてあつたなら訴へるのが天下の大法、それを默つて遣つたら是れものがれぬ其身の兇狀、まして非道の追落し、訴人をされたら首道具、證據の殘つた傘の口をすぼめていふ内に彈きの金をくんなせえ。斯ういふ惡事と次郎吉が指したら紙より身の破れし、かゞりの絲より命綱、切れたら夫婦ばら〳〵に、果ては千住か鈴ケ森で骨を曝さにやなるめえぜ。

吉之　おゝ盜みをなさば如何やうの、罪科に逢ふも計られねど、元より覺えのない事なれば、訴人なすなら訴へ出よ。

次郎　おゝ、しなくつてどうするものだ。金を半分よこしやあよし、いやといやあ仕方がねえ、傘を證據に出る所で、すつかり種を割下水、上汐ならば知らねえこと、水は逆にやあ流れねえぞ。

へ證據の傘を搔い込んで、行かんとなすを仁太郎が。

ト次郎吉傘を持つて行かうとするを、後に窺ひ居たる仁太郎出て、

仁太　おい次郎さん、ちよつと待ちねえ。

次郎　おゝ誰かと思つたら、仁太さんか。
仁太　其傘を持つて、何處へ行くのだ。
次郎　何處へ行くものか、是れを證據に訴人をするのだ。
仁太　そいつアちつと惡るからうぜ。
次郎　どうしたゝ。
仁太　いや訴人をするなら留めはしねえが、是れが堅氣な人なら知らず、盛り場稼ぎの巾着切り、おめへの體にかゝはるだらう、脅しはよして話しづくで斯うしてくれと言ひなさりやあ、たんとの事は出來ねえが、少し位の事ならば留めにはひつた扱ひ人、わつちがどうかしやせうから、野暮を言はずと次郎吉さん、話しあひにしてくんなせえな。
次郎　思召しは有難いが、少しと言つちやあ話しが出來ねえ、十や二十の端た金を貰つた日にやあ仲間の奴に、一杯飲ますことが出來ねえ、お氣の毒だがお斷りだ。
仁太　それぢやあどうでも、訴人をする氣か。
次郎　おゝしなくつてどうするものだ、こつちやあ高が巾着切り、行つた所が五十か一百叩いて娑婆へ出られる體さ、荒稼ぎとはいふものゝ二百兩といふ金を、盗んだからは命はねえ、覺悟を極めて

待つて居ろ。

仁太　さう聞く上は。（ト立ち掛けるを、德右衞門留めて、）

德右　これ仁太郎どの、腹の立つのは尤もだが構はず捨て置きなせえ、盛り場稼ぎといひながら名うての次郎吉ゆゑ、どんな惡事があらうも知れぬ、今度行つたら其首だ。

次郎　何と。

德右　いやさ、口ほど人はいかぬもの、行くなら勝手に遣るがいゝ。（ト次郎吉思入あつて、）

次郎　成程お前が言ふ通り、背負つても知れぬ兇状ゆゑ、首になるめえものでもねえが、とても死ぬなら道連れに片ツ端から連れて行くから、迎ひの來るを待つて居ろ。どれ、吠え面をかゝせてやらうか。

へ尻引きまくつて立ち上る、門に窺ふ作藏が、ずつとはひつて立ち塞がり、

ト次郎吉尻をまくり立ち上る、此以前より門口に作藏窺ひ居て、此時內へはひり、次郎吉の前へ立ち塞がり、

作藏　や、わりや性根がまだ直らぬな。

次郎　や、おめえは兄貴か。

作藏　兄とは誰がこと、人でなしめが。

〽襟上とつて引き倒せば。（ト作藏次郎吉の襟上を取つて引附ける。）

吉之　すりや、強請に來たる若者は。

高尾　作藏どのゝ、弟でありしか。

德右　思ひがけない事だなあ。

〽作藏齒嚙みをなし。（ト床の合方になり、作藏ちつと思入あつて、）

作藏　餓鬼の折から手癖が惡く、稻荷の宮の賽錢が盗み習ひで巾着の、迷子札より札附きに度々折檻なしたれど、空吹く風に十四の暮ぬけ參りから家出なし、親の家の飯は喰ず箸にも棒にもかゝらぬ所業、打捨て置かば親の身へ繩を掛ける奴ゆゑに勘當なして音信不通、死んだ親仁やお袋が此世に居るうち朝夕に、どうぞあれがお仕置きにならぬ其うち死にたいと、口にはいへど心では嘸や不便でござらうと、推量なして餘所ながら逢はした其夜に持逃げなし、詫びに賴んだ合壁の近所の衆へ面目を失はしたる不孝者、それから度々惡い耳聞くもうるさく思つたが、此作藏の御主人と知つて來たか知らずに來たか、忘れし傘に柄をすけて荒稼ぎとは何の戲言、言はうやうない人でなしめが。（ト作藏突き放す、次郎吉づう〱しく、）

次郎　人でなしは言はずとも、生れ立ちから知れた次郎吉、死んだ親仁に見限られ勘當受けりやあ、あかの他人、義理も絲瓜もいるものか、主人であらうが何であらうが、こんな所を附込んで強請つて喰ふがおれが生業、荒稼ぎした分けめえを寄越すか但しはおれを突き出し、口を利かれて困るなら、すつぱりおれを切つてしまへ。

作藏　あの正直な親達の腹からどうしてうぬがやうな、惡い根性の奴が出來たか、勘當せしとは言ひながら現在兄の御主人へこんな事を言ふからは、あかの他人へ對してはどんな事を仕居るか知れぬ、どうで始終はお上のお仕置、刀の銹になる奴ゆゑ望みとあらばすつぱりと、兄が手に掛け殺してくれう。

次郎　おゝ殺すなら殺してくれろ、假令實の兄にもせよ、人を殺しやあ下手人だぞ。

作藏　大罪人のおのれを殺し、何で下手人になるものだ。

次郎　ならざあ早く殺してくれろ。

作藏　おゝ殺さねえでどうするものだ。

〽用意の一腰取出し、柄に手を掛け立ちかゝれば。

ト作藏下手の壁にかけたる、一腰を取つて拔きかけるを、德右衞門仁太郎是れを留め、

徳右　これ、腹の立つのは尤もだが、悪い人でもこなたの弟、
仁太　短氣な事をさつしやるな。
作藏　さあ、殺さば世間の爲め、留めずに置いて下さりませ。
次郎　さあ、殺されるなら殺して見ろ。（ト次郎吉作藏へ體を摺りつける、）
作藏　うぬ、さう吐かせば。（ト吉之丞留めて、）
吉之　腹も立たうがこれ作藏、殺害なさばそちの身の上。
作藏　假令命を捨てればとて、こいつは生かして置かれませぬ。
次郎　えゝ、ぐづ〳〵と面倒だ、訴人をするから待つて居ろ。（ト門口へ行くを引きとめ、）
作藏　えゝ、われを遣つてなるものか。
次郎　えゝ、放しやあがれ。

〽留むる腰を振拂ひ、駈け行く次郎吉作藏が、遣らじと跡を追つかけ行く。

ト次郎吉振拂つて門口へ行くを、作藏支へ立廻りながら下手へはひる。

吉之　悪人ながら兄弟ゆゑ、殺さぬやうに作藏と、二人の者を留めて下され。
徳右　いや生して置けば旦那さまの御身に拘る大事ゆゑ、留めずにお置きなされませ。

仁太　先づそれよりは宗次郎さん、死ぬとはいへど實證も、未だ知れざるうちなれば。
德右　大川筋を尋ねたら、出合ふまいともいはれぬ。
吉之　とはいへ、餘程の刻限ゆゑ。
高尾　もし死んだなら隱さずに、死骸なりとたゞ一目、わたしに見せて下さんせ。
德右　おゝ見せなくつてどうするものか。
仁太　それぢやあ是れから川筋を、
吉之　片時も早く。
德右
仁太　合點だ。
〽いふより早く兩人は、大川さして急ぎ行く。
ト ばた〳〵にて、德右衞門仁太郎花道へ走りはひる。
〽跡に二人は吐息つき、思案にくるゝ傍より、娘おかよが手をつかへ。
ト 吉之丞高尾顏を背けぢつと思入、時の鐘下手より以前のおかよ出てそつと内へはひり、手を突き、
かよ　かゝさま、堪忍して下さりませ。
高尾　おゝおかよ、歸つて來たか、堪忍して遣るから爰へ來や。

かよ　あい〳〵。

〽優しき詞に側へ寄る、娘を取つて膝に敷き、有合ふさすが取るより早く、突かんとなすを押し留め。

ト高尾おかよを捉へ膝に敷き、硯箱の小刀を取つて殺さうとするを、吉之丞あわてゝ是れを留め、おかよを抱いてのき、

吉之　えゝ、又しても頑是なき、娘を捉へて殺す心か。

高尾　さあ、これを殺さにや濟まぬゆゑ、今更いうて返らねど。

〽姉が頼みを叶へんと、其身を捨てゝ弟が才覺なせし二百兩、念が届いて落せしも、お前の手に入る香合を。

再び求めて御歸參と、悦ぶ甲斐も情なや、おかよが割つたばツかりに。

〽花咲く春の樂みなく、生涯世に出ぬ埋れ木と、なるのみなるか御恩ある。

船木さまの御切腹、我が手に掛けて殺さねば、浮世の義理が濟みませぬ。

〽殺させてたべ我が夫と、流石三浦の太夫職、健氣な心に吉之丞。

ト此うち高尾よろしく思入あつて、

吉之　遊女ながらも心根は武士も劣らぬこなたゆゑ、殺すといふは無理ならぬど、殺したとても此儘に身の言譯が立つでもなし、斯くまで武運に盡き果てたる吉之丞が身の切羽、思案もあれば急かずとも、心を落着け先づ待ちやれ。

かよ　これかゝさま、惡い事をしましたから、どうか堪忍して下さりませ。

〽もみぢのやうな手を合せ、涙ながらに詫びければ、憎い奴とはいふものゝ、殺すも不便と泣きくづをれば、夫も共に袖しぼり。

ト此うちおかよ手を合せ拜む、高尾是れを見て不便なといふ思入、吉之丞も思入あつて、

吉之　あれ、あのやうに手を合せ、堪忍してと詫びるもの、どうまああれが殺されやう。

高尾　不便なれども殺さねば。

吉之　濟まぬ浮世の義理合も、斯くなる上は是非もなし。

高尾　それぢやというて。

吉之　はて思案もあれば。（ト小刀を捥ぎ取り、）まあ〳〵待ちやれ。

高尾　はあゝ。（ト泣き伏す。）

〽恩愛妹背にからまれて、又も涙に。

ト高尾泣き伏し居るをおかよ背中を擦る、吉之丞是れを見て愁ひの思入よろしく、時の鐘三重にて道具廻る。

（裏手墓原の場）＝本舞臺平舞臺上の方に一間の湯灌場、下の方刎釣瓶の井戸、此傍に墓手桶を乘せる棚、正面所々に丸物の石碑卒都婆、後一面に玉椿の生垣、黒幕の所に柳の立木、日覆より同じく釣枝、總て前の屋體の裏手墓原の體、爰に次郎吉肩先を切られ糊紅になり、作藏刀を振り上げ居る、此見得禪の勤めにて道具留る。

次郎　こりやあおれを、切りやあがつたな。

作藏　生して置いては世間の難儀、お上のお手に掛らぬうち、兄が情に殺して遣るのだ。

次郎　おゝ殺されるなら殺して見ろ、二言目には兄だく＼と兄風を吹かしやあがるが、何をうぬァ仕置きやあがつた、十四の年に家を駈け出し、勘當受けて十何年巾着切で人となり、足手を伸ばした幻次郎吉、盛場稼ぎの兇状で御牢内へも度々行つたが、見舞を一つ入れねえ奴等、恩もなけりやあ義理もねえ、うぬ等に殺されて詰るものか。

作藏　二合半でも侍の祿を食んだる此の作藏、少しは腕に覺えもあれば苦痛のねえやうすつぱりと、殺

してやるから覺悟なせ。

次郎　えゝ、洒落くせえ事を吐かしやあがるな。

ト是れより葛西念佛の合方狸囃子を冠せ、西の下にて迷子の鉦太鼓を叩き、作藏は刀次郎吉は卒都婆にて刎釣瓶、井戸を遣ひ、兩人立廻りよろしくあつて又次郎吉を切る。

どうで始終は切られる體、命を捨てるは惜しかあねえが、うぬがやうな間拔野郎に、殺されるのが忌えましい。

作藏　今死ぬ體で憎まれ口、骨までわりやあ曲つた奴だ。（ト又切り附ける。）

次郎　さあ、おれを切つたら手柄にならう、さあ、もつと切れ／＼。（ト體を突き附ける。）

作藏　おゝ切られねえで、どうするものだ。（ト切り下げる。）

次郎　ちつとばかりこたへたやうだ。

作藏　まだ、そんな事を吐かしやあがるか。（トむごく切り倒す、次郎吉苦しき思入。）

次郎　さあもつと切れ／＼、間拔野郎にやあ覺束ねえが、首まですつぱり切つてくれ。

作藏　えゝ、やかましい默つてくたばれ。（ト切り倒し止めを刺し。）現在實の兄弟だが、うぬがやうな人でなしは、又と一人世間にあるめえ、面を見るのも腹が立つ。

〽悔し涙に踏みにじれば、倒れし死骸の懐より轉り出し香合に、一通添へし二百兩、心得難く取り上げ見て。

ト作藏悔しき思入にて、次郎吉を踏みにじる、是れにて懐より箱入の香合に書置を添へし二百兩出る、作藏心得がたく取り上げ、見てびつくり。

やゝ、こりや紛失の香合に、二百兩の金包み、扨は道具屋吾市めも、一つ仲間であつたるか。金子添へたる一通は。（トすかし見て、）「作藏さまへ次郎吉、」何をあいつが。

〽死骸へ一通打ち附けて。（ト一通を死骸へ打ちつけ、）

斯うして見ると次郎吉が、巧みで最前道具屋が賣つた寢覺の香合は、もしや僞りではなかつたか。（ト一通を取り上げ、）何をあいつが、書き置いたか。

〽言ひつゝ封を押し切つて、月の光りに讀み下し。

ト是れより竹笛入り誂への合方になり、作藏書置を開き月影にすかし見て、

「書置の事、」なに書置とは。（ト合點の行かぬ思入、）「兄貴堪忍してくんねえ、おめえのお主と知らねえから、忠次といふ巾着切元道具屋ゆゑ姿を替させ、さつき賣つた香合は寸分違はぬやうには見えるが、あれは忠次がこしらへもの、おれが懐に持つて居るのが誠の香合に御座候、拾つた金

を足にして又も仕事に掛けようと内と外とで樣子を聞き濟まねえことを致し候、いつぞや極樂寺の裏手で宗庵どのを殺し、又割下水で宗次郎どのを傘の骨の折れるほど打ッ挫いたもわつちに御座候、今日といふ今日惡いことをしたと目が覺めて見たら誠に面目を踏み潰し候、それゆゑ香合に金を添へ兄貴おめえの手に掛つて人間らしく死にてえから、惡態をついて殺され候、愚癡な事をいふやうだが是れから冥土へ行つたらば、とつさんやかゝさんに只逢ふ事も出來めえから伯父に詫びをして貰ひ孝行する氣に御座候、おめえもおれが憎からうがたつた一人の弟だから、思ひ出した日があつたら水の一杯も手向けてくんねえ、言ひてえ事も澤山あるが釘の折れで書けねえから、よろしく推量して下さるべく候。」

〽泪ながらに讀み終り、寢覺の香合取りあげ見て、
ト此うち作藏よろしく思入にて讀み、香合を改め見て、
そんなら是れが紛失の、誠の品であつたるか、此香合を差上げれば、旦那は直に本地へ歸參、又二百兩の此金を小西へ返さば宗次郎どのゝ、盜みをなせし科も消え、三方四方の身の納まり。
〽言ひつゝ死骸を引き起し。（ト糊紅になりし次郎吉を引き起して、）
これ弟、斯ういふ心になつたらば、なぜ打ち明けて言つてくれねえ、死なで叶はぬ事ならば、殺

したのは仕方もねえが、こんな酷いことはしねえ、おれが悪かつた堪忍してくれ、此世の別れだ此兄に、一言物をいつてくれ、最早呼吸の息も切れたか、あゝ心がらとはいひながら、見るも不便な此姿、問ひ弔ひはおれがするから、心殘さず往生しやれ。

ト今の今まで踏みにじり、憎しと思ふ次郎吉が死骸をいたはり作藏が、咽ぶ涙は大雨に下水の水を押しあけて、小橋を流すごとくなり。

ト此うち作藏次郎吉を捉へ、よろしく兄弟の名殘りを惜しむ思入あつて、死骸を放す。次郎吉ばつたり倒れる、作藏も泣き伏す。

トかゝる所へ左右より、高篠家主走り出で、

トばた／＼になり、上手より幸兵衞、下手より高篠兩人とも書置を持ち走り出來り、

幸兵　おゝ作藏どの爰に居たか、吉之丞さまからこなたの所へ、密事と記した此手紙。

高篠　又おいらんからお前の所へ、屆けてくれと此お文。（ト兩人手紙を差出す。）

作藏　すりや、旦那さまと御新造さまから。

幸兵　何か樣子がありさうだ。

高篠　讀んで見て下さんせ。

作藏　先づ旦那さまより。

〽言ふより早く封押し切り。(ト作藏封を切り開き見て、)

「書置きの事。」(トびつくりなす。)

幸兵　なに、書置だ。

高條　して、おいらんの其お文は。(ト此うち開き見て、)

作藏　是れもやつぱり、書置の事。

幸兵　え……。

〽餘りの事に呆れし兩人、作藏二通を兩手に持ち。

ト兩人びつくりなす、作藏書置を兩の手に持ち、是れより床二挺の合方にて、

作藏　一先年それがし宿直の夜、盜賊入つて主家の重器寐覺の香合紛失に及び、即ち宿直の越度の爲日ならず追放仰せ附られ、現に浮浪の身となりしも船木氏の歎願により、日數百日の其内に探索いたし候やう寛仁の御沙汰を蒙り、香合の行方草を分け日夜探索に及び候へども是れと申す確證を得ず候。」(ト讀みかけ心急く思入にて高尾の書置を開き、)「涙ながらに一筆書殘しまゐらせ候、左候へばよしなき事を弟へ頼み、十一歳より養育下さる御高恩に預り候御主人の金子を盜ませ、其身に罪を負

せ候のみか命まで失はさせ候は、返す〳〵も女子の淺慮不便なこといたしりゝ。」（卜吉之丞の書置を取りあげ、）「然るに從前遊所へ通ひ三浦の娼妓高尾に馴染、かれが貞操無二に愛着し二世の契約結びし所、當今苦界の期限に至り某婦妻に娶りしを、唯戀情にのみ沈み香合の探索に因循なりと同藩一般誹謗なすよし。」（卜又こちらを取りあげ、）「我が身ゆゑに弟に非業な死をいたさせ候ては、あの世に居らせられ候とゝさまへ對し申譯もなく、嘸草葉の蔭にて御恨みなされ候こと存じりゝ。」（卜是れより兩方手に持ち、）「一層奮發なし、探索に及び候所、正に神明の加護なるや百日の今日に至り、計らず主家の重器を得開運の時至りしに、」「娘が粗相と申しながら、大切なる香合と存じまゐらせ候ゆゑ、憂きが中にも明暮に樂しみ居りりゝ大江さまへ御歸參の、御望みを失ひまゐらせ、殘り惜きことゝ存じりゝ。」「よく〳〵武運に盡き果て候ゆゑ、再び重器を破損させ、世に比類なき寶を失ひ、此身の大罪謝すべきやうなく、」「娘かよと諸共に身を投げ相果て候まゝ」「自殺に及び候間、今日の始末船木氏へ卽刻申し達すべく候。」「宗次郎が盜みせしも姉ゆゑなりと御主人へ、お詫び頼みりゝ。」やゝゝゝゝ。

〽讀み終りて作藏は、二通の書置兩手に持ち、狂氣の如く齒嚙みをなし。

ト作藏よろしく思入あつて、

折角誠の香合が手に入つたるにお二人とも、死ぬる覺悟の此書置、是れも鶍の嘴となつたか。

ト悔しき思入。

幸兵　とはいへ、未だ命を捨てぬか。

高篠　生死分らぬお二人さま。

作藏　何れへお出でなされしか、當はなけれど目指すは菩提所。

幸兵　猶豫は手おくれ、

高篠　少しも早く、

作藏　右へ行かうか左へ行かうか。

幸兵　この傘の倒れた方へ。（ト以前の傘を出すを引つたくる。是れにて幸兵衞前へのめる。）

作藏　えゝ、それ所かえ。（トきつと見得。）

〽尻はし折つて作藏は、飛ぶが如くに。

ト尻を端折りつか〳〵と花道へ行く、舞臺は幸兵衞鼻血を出し高篠介抱なす、三重時の鐘の送りにて

作藏花道へはひろ、是れと一緒によろしく、

幕

ト時の鐘にてつなぎ、引返す。

大切

角田川の場

淨瑠璃 子ゆゑの闇の道行に 花雪積繰言（清元連中）

〔役名――最上若黨作藏、高尾伯父德右衞門、男達子分仁太郎、神崎傳内、最上吉之丞。最上の妻高尾、高尾娘おかよ其他。〕

（角田川土手の場）――本舞臺四間通し高足の二重、草上手の蹴込み、上の方誂への櫻の立木掛稻、下の方淨瑠璃臺打返しの建仁寺垣、いつもの所出語り臺、後今戸の川岸を見たる夜るの遠見、所々に櫻の立木、日覆より同じく釣枝、總て角田川土手の體。爰に○網打ちのこしらへにて投網を肩に掛け、△同じこしらへにて玉網を擔ぎ、□網船の船頭にて火繩箱を提げ立掛り居ろ、此見得波の音にて幕明く。

〽 こウ千藏、此間からの雨續きで、山も大層降つたと見え、川の水が高くなつた、斯ういふ時が漁師の附日だ。

△ 何でも今夜はいゝ所を打つて、大きな物でも掛けにやあならねえが、最うそろ〳〵上汐だらうな。

□ さうよ今夜は大汐だらう、最う上げて來る時分だ、是れからゆつくり出して、綾瀬の近所を打ち廻しなせえ。

○ 時に仲間の德右衞門も、上手へ登つて居るか知らぬ。

△ さつき家へ寄つて來たら、疾くに出たといふ事だ。

□ 尋ねるものがあるといふが、鯉でも取りに出たか知らぬ。

○ いや鯉といやあ得意先から、鯉を四本賴みてえと手紙が來たがさつぱり讀めねえ。

△ 讀めざあおれが讀んでやらうか。

○ 讀んでくれ〳〵。（ト懷から手紙を出す。）

△ どれ〳〵見せろ。（ト手紙を取つて開き、）淨瑠璃名題――（ト名題を讀む。）

□ どれ、跡はおれが讀んでやらう。（ト手紙を取つて、）淨瑠璃太夫――（ト淸元竹本連名を讀み、）

○ みんなが讀むのに、おればかり讀めねえのも外聞が惡い、仕舞はおれに讀ましてくれ。（ト手紙を取つて、）相勤めまする役人――（ト役人を讀む。）

□ それぢやあ手紙と言つたのも、お定まりの淨瑠璃觸れか。

○鯉の頼みと思つたら、淨瑠璃の聲のことだ。
△とんだ宛字の間違ひも、鯉と聲との假名違ひ。
□此大汐を幸ひに、上汐になつたら乘り出さうか。
○それがいゝ／＼、いよ／＼此所漁船始まり。
△その爲め大汐左樣。
□さあ行かう。

ト波の音にて三人上手へはひる。知らせに附き下手建仁寺垣を打返し、爰に淸元連中居並び、淨瑠璃になる。

〽春の夜の月もまだなる川ぎしを、浮名高尾が身の末の流れの昔はづかしく、人目堤をそこはかと子ゆゑに迷ふ宵闇に。

ト本釣鐘を打込み、花道よりばた／＼にて、高尾好みのこしらへ手拭を吹流しに冠り出來り、跡より前簇のおかよ追つかけ出來り、花道にて高尾に縋る。

〽影さへ闇き雨あがり、胸に滿ち來る汐時も、四つか五つか淺草の鐘の音近き上げ南、花の吹雪に憂き事の、積る小蔭へたどり來て。

ト此うち花道にておかよに縋られ、跡へ心の引かされる振りよろしくあつて舞臺へ來り、

高尾　これはしたり聞きわけのない、わしはのがれぬ事あつて遠い所へ行くほどに、そなたは跡でとゝさまや、竹町にござる網打の伯父さまを便りにして、柔順しうしてくりやゝ。

かよ　いえ〳〵どんな遠い所でもわたしは歩いて行きますから、一緒に連れて行て下さりませ。

高尾　おゝ一緒に連れて行く心で、爰まで連れては來たけれど、生先き長きそなたをば、どうまあ連れて行かれうぞいな。

〽涙の雫をちこちの、田の面の蛙音を鳴きて、哀れ眞柴の垣越しに、いつしか月も差込む癪、

ト高尾おかよを捉へ、どうまあ是れが殺されうといふこなしあつて胸を押へ、癪のさし込む思入、

あいたゝゝゝゝ。

かよ　かゝさま、どうぞなさんしたかえ。

高尾　事を分けて歸れといふに、そなたがいふ事聞かぬゆゑ、持病の痞えが起つたわいの。

かよ　そんなら言ふこと聞きますから、早う直つて下さりませ。

高尾　わしが言ふこと聞く氣なら、早う爰から歸りやいの。

かよ　それでもつかえの直らぬうちは、案じられてならぬもの。

弥生狂言

大切

菊田川の

高尾　痞えどころか此母は、最う此世には居られぬわいの。

かよ　え〻。（トびつくりする、高尾おかよを引附け、）

高尾　これ、よう顔見せてくりやいなう。

〽蕾の花の咲くも見ず、越路へ歸る雁ならで、別れともなき別れ霜、明日は消え行く身をかこち、〽親子手に手を取交し、暫し涙にくれにける。

ト高尾をおかよ捉へよろしく別れを惜しむ振りあつて、知らせに附き上手霞幕切つて落し、竹本連中居並び直に淨瑠璃になり、

竹本〽同じ思ひに吉之丞、たどる堤も一筋に。

トばた〳〵になり、花道より吉之丞一本差し尻端折りにて、出來り、花道へ留り、

竹〽もしや追手と振返り、月をよすがに三圍や、櫻のもとへ立ち留る。

ト吉之丞思入あつて跡を見返り思入、合方になり、

吉之　思ひ廻せば某ほど武運に盡きたる者はあるまい。寢覺の香合紛失なしそれを詮議に此年月、艱難辛苦の甲斐もなく、再び手に入る香合を損ぜし上は最う是れまで、歸參の望みも叶はぬのみか御家の寶滅する上は取成なせし船木氏、義強き氣質に切腹なさん、我れも紛失なせし折一命捨んと

思ひしが、香合詮議しい出して歸參の望みも最早叶はず、船木氏に先立て死する覺悟でいでたるが、嘸や跡にて女房娘、それと聞きなば歎くであらうが、死なねばならぬ身の切羽、必ず我れを恨んでくれるな。

〽跡へ心も引く網の、目褄を忍び夜るの道。〽子は目早くもそれと見て、

ト此うち吉之丞思入あつて舞臺へ來る、おかよ吉之丞を見て、

かよ　や、とゝさまか。

吉之　そちは娘か。

高尾　こちの人。

吉之　さうして二人は、何ゆゑ爰に。（ト高尾思入あつて）

高尾　さらばでござんす。

〽さらばとばかり立ち上り、〽行くを遣らじと引き留め。

ト高尾吉之丞を見て、上手へ行かうとするを、吉之丞引き留め。

吉之　こりや女房待つた、身共が顏を見ると其儘詞も交さず逃げ行くは、此身に愛想が盡きたるか。

高尾　えゝ勿體ないことおつしやりませ、何で愛想が盡きませう。

吉之　して又そちは、何れへ行くのだ。

高尾　わたしやあの世へ參ります。

吉之　何と言やる。（ト是れより淸元の合方になり、）

高尾　さあ死なねばならぬ譯といふは、歸參の種の香合を道具屋吾市が持つて居て、二百兩の金あれば買ひ戻される事ゆゑに、どうがなしてと思ふ折、使ひの歸りと弟が寄つたを幸ひ相談掛け、どうぞ仕樣はあるまいかと。

〽（淸）賴みし事が仇となり、惡い事とも白浪の、弟がふつと出來心。御主人さまのお金をば盜んでなりと此姉の、苦勞を助ける心にて才覺なせしも情なや、道にてそれを取り落し、言譯なさに淵川へ身を投げて死ぬ心根を思ひ遣つては此姉も、どうまあ生きて居られませう。

〽（淸）お前は跡に存命へて、娘おかよが養育を賴むとばかり言ひ捨てゝ。〽（竹）行くを夫が又引留め。

ト此うち高尾よろしくあつて、上の方へ行かうとするを吉之丞留めて、

吉之　その言譯はそなたより身共が先きに言はねばならぬ、心を鎭めて聞いてくりやれ。（トこれより竹

本の合方になり、〽如何なる宿世の惡業にや、紛失なせし香合を父が惠みを受けたりとて、そなたの緣に繋がりし志賀之助が買ひ求めしも。

竹〽いづくの誰が仕業にや、舅が非業の死を遂げしも、その香合を所持せしゆゑ、又弟の宗次郎がそちに賴まれ才覺せし金も途中の雷鳴に、取り落せしを我が拾ひ役に立てしを知らずして。

竹〽身の言譯に入水なし、最期をせしと聞くからは、今更いうて返らねど。斯かる憂き目を見するのも、忠孝二つの道に缺け色に心を寄せしゆゑ、天の御罰と先非を悔い船木氏に先立つて切腹なして死ぬ覺悟。

竹、へそなたは跡に存命へて、娘が世話と二つには我がなき跡じ、一遍の囘向を賴むと言ひ捨てて立つを暫しと縋り留め。

ト此うち吉之丞よろしくこなしあつて立ち掛るを、高尾すがり留め、

高尾　そりや聞えぬぞえこちの人。

清〽初めて逢うた其夜から、勤め放れし中ゆゑに、いつしか間夫といはた帶、誓ひに切りし指折りて算へし月も滿ち汐に、子持高尾と言はれしも、廓を出でゝ僞りの手管の嘘も本所に、

女夫となりし上からは死なば諸共離れじと、縋り歎くぞ道理なり。

ト此うち高尾吉之丞を捉へ、子を枷に口說きの振りよろしくあつて、

竹〽かゝる所へ向うより見ゆる火影の人音に。清〽見附られじと兩人はおかよを伴ひ掛稻の、小蔭へ暫し忍び居る。

ト此うちかすめてばた〳〵、吉之丞向うへ思入あつて高尾おかよの手を取り三人掛稻の蔭へはひる、竹本の甚句の合方になり、花道より植木屋紺の腹掛股引紺半纏三尺帶草履、花鋏を腰に差し植木屋めこしらへ、竹の皮包を繩にて提げ、生醉の思入にて出來り、

竹〽醉うた〳〵五尺の體、飲めば飲むもの熱燗で、六本銚子の替り目に、何の他愛も生醉が、連れに後れし千鳥足。

植木　えゝい。

清〽癡話をする身は根附の時計、丸い中にも針がある。竹〽どつこい當時は鼻唄もめつたにならぬと本性の、違はぬ證據我れとわが、口を押へて來りける。

ト花道で植木屋生醉の振りよろしくあつて舞臺へ來り、

今日は旦那場の仕舞仕事で御馳走になつた其上に、土產まで貰つて來たが、お臺所に居るうちは

さのみ醉つたやうでもなかつたが、外へ出たら滅法に醉つた、足がひよろ〳〵していかねえ、此皮包と同じやうに、是れからぶら〳〵遣つ附けよう。

竹〽行かんとせしが掛稻の、小闇き小蔭をさし覗き。

ト植木屋上手へ行きかけ、掛稻の蔭を見てびつくり飛び退き、

やあ〳〵こいつは素敵な代物だが、男とひそ〳〵話して居るは爰等へ出かける引張りか。

清〽え丶畜生めと夕闇に、もしも狸であつたなら、茶屋の二階のそれならで、毛織も時の花見蓙。竹〽八疊敷のふらんけん、どろんけん〳〵拳酒に、一杯機嫌の腹鼓、ぽん〳〵ぽんぽこぽんつくと。清〽脅して置いて土産物。竹〽せしめる心か白髭や。清〽其手は桑茶の畑道。

竹〽眉を濡らしてぽんぽこぽん、清〽浮れ興じてたどり行く。

ト植木屋よろしく振りあつて、提灯と皮包を提げ上手へはひる。時の鐘。

竹〽跡見送りて兩人は傍の小蔭立ち出で丶。

ト掛稻の蔭より吉之丞、高尾おかよを連れて出て來り、

吉之　今來りしは追手かと、思ひの外に所の者、通り過ぎしは是れ幸ひ。

高尾　又もや人の來ぬうちに、死ぬと覺悟をなさんしたら、どうぞわたしも諸共に。

吉之　二世と契りし仲ゆゑに、一緒に死なうと言やるのは無理ならねども二人が死ねば、後に殘りし娘は孤兒。

高尾　さあそれも不便でござんすが、伯父さんといひ姉さんといひ、見て居る事でもござんすまい。

吉之　親はなけれど子は育つと、世の諺もあるなれば、

高尾　誰か世話してくれませう。

淸〽とはいへ、何の頑是なき娘を跡へ殘すのが、黄泉の障りと兩人は口に言はねど目に淚。

竹〽娘は泣く〳〵側へ寄り。

ト此うち兩人おかよへ思入あつて不便なといふこなし、おかよも泣きながら、

かよ　若しかゝさま、とゝさまと死なつしやるなら、わしも一緒に死にたいからどうぞ殺して下さりませ

高尾　えゝわつけもない何を言やる、とゝさんやかゝさんは生きて居られぬ事あつて、それで二人死ぬのぢや程に、そなたは跡に存命へて、伯父さんの世話になり、おとなしう成人しや。

かよ　いえ〳〵それは、いやぢやわいな。

竹〽二人に別れてわし一人、跡に殘つて居る時は、これから手習三味線の、稽古にいつも友達に親のない子といぢめられ、悲しい思ひをせうよりも一緒に殺して下さんせ。淸〽はひまつ

はれば恩愛に、母はたまらず抱きしめ。

ト此うちおかよよろしくあつて、吉之丞高尾顔見合せ不便なといふ思入あつて、高尾おかよを抱きしめ、

高尾　おゝ尤もぢや〳〵、それが不便でならぬゆゑ、

吉之　一緒に連れて行きたいが、戀ならねども心中と、

高尾　明日は世上の噂となり、流れの末の身の果ても、

吉之　波にたゞよひ岸につき、曝す屍にそなたまで、

高尾　連れて行くのは又一倍、

吉之　不便な事と思ふゆゑ、

高尾　一緒に連れては、

兩人　行かれぬわいなう。

かよ　連れて行つて下さんせにや、わたしや先へ死にますわいなあ。

竹〽親に別るゝ子は賢しく、既に斯うよと見えければ。

トおかよ二重より川へ飛び込まうとするゆゑ、慌てゝ吉之丞抱き留め、

吉之　此儘捨てゝ行く時は、共に命を捨てるは必定、不便ながらも櫻の許へ。

高尾　わたしい扱帶で暫しのうち、縛つて置くも此子の爲め。（ト扱帶を解いて出す。）

かよ　いえ／＼死なせて下さりませ。

吉之　えゝ罪なきそちを、殺されうか。

清〽傍の櫻　幸ひと、命を繋ぐいましめは、是れぞ大悲の善の綱。

ト此うち吉之丞扱帶にておかよを縛り、上手櫻の木へ結び附ける。

高尾　斯うして置くもそなたの爲、必ず親を恨んでくりやるな。

かよ　いえ／＼恨みますわいなあ。

吉之　又もや障りのないうちに、

高尾　そんなら此儘、

吉之　少しも早く、

高尾　とはいへ、此子が。（トおかよの側へ寄らうとするを隔て。）

吉之　えゝ未練なことを。

竹〽心を勵まし兩人が、既に斯うよと見えたる所へ。

ト吉之丞脇差を拔き高尾を引附け突かうとする、ばた〳〵にて下手より前幕の傳內出來り、

傳內　どつこい、高尾は殺させぬ。

ト波の音はげしく傳內、吉之丞の脇差を捥ぎ取ろ、吉之丞これを取返さうとするを、傳內川へ投げ込む、吉之丞傳內と立廻り堤の後へ投げ込み、

吉之　刃を失ふ上からは、

高尾　この堤より川中へ、

吉之　二人一緒に、

高尾　少しも早う。

竹〽堤へ登り觀音の、御山の方を伏し拜み。

ト兩人おかよへ思入あつて土手へ上り、裏向きにて手を合せ、

兩人　南無阿彌陀佛。

淸〽ざんぶと川へ飛び込みて爰に浮名ぞ。

ト兩人手を組み二重より後へ飛びこむ、どんと水音水煙りぱつと立つ、三重にて左右の太夫座を消す、おかよはわつと泣く、烏笛早き合方ばた〳〵になり、花道より前幕の作藏走り出來り花道にて、

作藏　旦那さまや御新造さま、おかよさまのお行方尋ね、そこ爰と駈け廻れど今以て手掛りなく、心も心ならざるに忌はしいは烏啼き、お三人のお身の上にどうぞ凶事がなければよいが。（トあちこちと尋ねる思入にて舞臺へ來り、櫻の木へ縛られしおかよを見てびつくりなし、）や、お孃さまぢやござりませぬか。（トつか〳〵と側へ來る。）

かよ　おゝ作藏、遅かつたわいなう。

作藏　なに、遅かつたとは、そりや何が。

かよ　今とゝさまとかゝさまが、川へはひつて死んだわいの。

作藏　なに、お二人さまには身を投げて、えゝゝゝゝ。（ト二重へつか〳〵と駈け上り、後へ思入あつて、）ちえゝ早まつた事をなされましたなあ。（ト拳を握りきつと思入、）

かよ　手が痛うてならぬゆゑ、早う解いてくりやいの。

作藏　おゝ合點でござります。（ト扱帶を解きおかよをおろし、）こりや覺えある御新造さまの。

かよ　それでわしをとゝさまが、爰へ縛つてかゝさまと、二人で死んでしまうたわいの。

作藏　すりやお前さまを爰へ縛つて、お二人さまには此川へ。

かよ　わしも一緒に。（ト飛び込まうとするを作藏抱き留め、）

作藏　えゝお前さままで同じやうに、早まつた事なされまするな。

かよ　それでも一緒に死にたいわいの。（ト泣き藻掻くを、ぢつと押へて。）

作藏　弟が悪心翻へし計らず誠の香合が、手に入つたゆゑ嬉しやと、お二人さまの在所を尋ね御手渡しと思ひの外、千辛萬苦の甲斐もなく水の哀れや此の始末、こりやどうしたら。（ト二重の上にどつさりと下に居るを、道具替りの知せ、）よからうなあ。

ト男泣きに泣く思入、早き合方波の音にて此道具廻る。

（北條家物揚場の場）――本舞臺四間常足の二重石垣の蹴込み眞中に石段の揚げ場、雨落より波板を出し舞臺前に一面波布を敷き、上手に丸物の網船をもやひ後屋敷長屋の書割、二重上手に柳の立木、日覆より同じく釣枝、霞附の月をおろし、總て角田川北條家物揚げ場の體、二重眞中に前幕の德右衞門長半纏腹掛股引漁師のこしらへにて焚火をして居る、上手に吉之丞下手に高尾兩人とも濡れ衣裳にて、川より揚りし心にて住ひ居る、波の音佃の合方にて道具留る。

吉之　折角お助け下されど、今もお話し申す通り、

高尾　生きて居られぬ二人が身の上、

吉之　死なで叶はぬ事なれば、
高尾　どうぞ見のがして、
兩人　下さりませ。（ト兩人立たうとするを徳右衞門留めて、）
徳右　外の者でもあることか、緣に繋がる此伯父の目にかゝつたら金輪際、見のがす事はならぬから、まあ二人とも下にござれ。（トこれにて兩人下に居る、これより誂への合方かすめて波の音をあしらひ、徳右衞門思入あつて、）宗次郎が書置にてつきり川へ飛び込んだと、思つたゆゑに宵ッから、此川岸を尋ぬるうち流れ寄つたるこなた衆二人、餘りの事にびつくりして船へ引き揚げ水を吐かせ、藁火を焚いてやう／＼と、こちらのものにした故に樣子を聞けば義理づくゆゑ、死なうといふも尤もだが、そりやあ昔の人のすること、今は世界もがらりと替り、六歳からして子供にも學問させる世の中に死んで言譯仕樣などゝは、そりやあ無學文盲なわしらなどがする事だ。詰らぬ義理に大切な命を武士が捨てるといふは、よく書生衆のいふことだが、あんまり愚ぢやあござりませぬか。
吉之　成程こなたの言ふ通り、斯うして二人一緒に死なば切ない譯を知らぬものは、
高尾　わたしが流れの育ちゆゑ、戀に迫つて心中せしと、噂をされるでござんせう。
吉之　死ぬとも夫婦別々に、死なぬは近頃我が誤り。

高尾　一途に死なうとのみ思ひ、そこへ心の附かざりしは、
吉之　武士たる身にて面目ない。（ト兩人後悔せし思入、）
德右　面目ないと氣が附いたら死ぬる覺悟を止めにして、濟ぬ浮世の義理づくも死なずに仕樣がござりませう。先づ兎も角も二人ともわしが家へ一緒にござれ、三人寄れば文珠の智慧よい分別がござりませう。（ト此以前より後へ以前の傳內窺ひ居て、）
傳內　いや其異見には及ばぬこと、高尾は兎もあれ吉之丞は、所詮生きては居られまい。
德右　や、こなたはいつぞや三浦屋で、お目に掛つた傳內どの。
吉之　身共が生きて居られぬとは、
高尾　そりや何ゆゑ。
傳內　寶の香合割つたる上は、切腹なして女房の高尾を身共へ渡してしまへ。
吉之　寶を失ふ言譯に、切腹なすとも女房が、
高尾　何でおのれに隨はうぞ。
傳內　さう言や、いつそ手短に。
ト波の音になり、傳內高尾を捉へ引立てにかゝる。此時ばたばたになり、下手より以前の作藏おかよ

を連れて出來り、此中へ割つて入り傳内を見事に投げる、皆々作藏を見て、

德右　思ひ掛けない作藏どの。

吉之　扨は娘の縛めも、

高尾　そなたが解いて助けしか。

かよ　よう死なずに居て下さりました。（トおかよ高尾にすがる。）

作藏　お悦びなされませ、誠の香合が手に入りました。

吉之　なに、誠の香合とは。

作藏　最前道具屋吾市が賣りしは、彼れは細工のこしらへ物、これ御覽下さりませ。

ト香合を出す、吉之丞取り上げ見て、

吉之　誠にこれご寐覺の香合。

高尾　どうしてそなたの手に入りしぞ。

作藏　委しき事は後してのこと、我が弟次郎吉が先非を悔いて我が手に掛り、跡に殘りし書置に仔細を書いて此香合、二百兩の金諸共、我が手に入つてござりまする。

高尾　すりや弟の金までも。

傳內　最う此上は。

ト刀を拔き吉之丞に切つて掛る、ちよつと立廻つて刀を打ち落す、傳內これを取りに掛るを、德右衞門投網をすつぼり冠せ、傳內藻搔くを押へ附け、

德右　惡事はのがれぬ天の網。

作藏　この二百兩が手に入れば、

吉之　死ぬには及ばぬ宗次郎、

高尾　不便な事をしましたわいな。（トばた〳〵になり、土手より前幕の仁太郎走り出來り。）

仁太　もし、宗次郎さまは別條なく、お助け申してござりまする。

高尾　なに、宗次郎が、

皆々　助かりしとは。

仁太　大川橋から身を投げて既に死なうとした所、折よくそこへ親分が通り掛つて引き止め、お助け申してござりまする。

作藏　さすれば直に二百兩。

德右　主人へ戾せば恙なし。

吉之　我れは是れより香合を、
高尾　お上へあげれば木地へ御歸參。
仁太　善人榮えて惡人の、
傳内　滅びる時節は此しだら。（ト網を冠つたまゝ前へ出るを、）
作藏　思へば目出たい、（ト傳内を見事に投げ、）
皆々　納まりぢやなあ。（ト皆々引つぱりよろしく、）
作藏　先づ今日はこれぎり。

ト目出度打ち出し

子持高尾（終り）

僞織大和錦

其大和路の七面坂で治左衛門が非業の最期誰が業とも白浪の積る惡事を丑藏が足を附けたる草鞋錢ゆすり取つたる金高も人間わづか五十兩急報ふ仕返しの刀の錆より身の錆に悔悟なしたる慶十郎妻のおみねもとも〴〵に敵と名乘りて討たれる覺悟忠義一途の作藏が急くを止むる幼童は師弟の恩義に勸むる切腹今開明の世の中に甚兵衛夫婦が感心なす一夕話をば結び合せ善と惡とのうら表

『偽織大和錦』は明治九年三月作者六十一歳の時中村座に書きおろされた。『鎌倉山春朝比奈』（松島局）の二番目狂言であつた。講談に材料を仰いだものであつたが、仲藏の扮した惡漢丑藏が特に好評であつたことが、『續々歌舞伎年代記』に記されてゐる。「仲藏の斑の丑藏、芝居でよくする、剛らしきセリフを用ひずベイ〳〵詞で脅迫するうまさ何とも言はれず、拔けるほどよしと大いに見物をうならせ、二番目は大方此優一人芝居の如き感あらしめたり。」とある。

書きおろしの時の役割は市川團十郎（神谷慶十郎）、岩井半四郎（船木後家お峰）、中村仲藏（わるものまだらの丑藏）、中村時藏（船木甚兵衞）、中村鶴助（立場酒屋重助）、中村鶴藏（岩淵九郎藏）、市川姉藏（船木の下男作藏）、市川新十郎（船木治左衞門）、市川新藏（船木治三郎）等であつた。

挿繪にしたのは書きおろしの時の繪草紙の一部分で、此分の題字は竹柴其水である。

大正十五年八月下旬　　　　校　訂　者



僞織大和錦（お峰慶十郎＝三幕）

序幕　箱根山閑道の場

〔役名＝庄官船木治左衞門、同下男作藏、旅商人四郎兵衞、雲介小地獄の清六、神谷慶十郎。船木の後妻お峰、其他。〕

（箱根山閑道の場）＝本舞臺一面常足の二重六枚飾り、岩山の蹴込み、眞中に樫の大樹、上下とも杉林、日覆より同じく釣枝、後ろ奥深に山又山を見たる岩組の遠見、舞臺前上下に峰の張物、かげより杉の梢を見せ、總て箱根の關裏道の模様、誂への如く飾りつけ、爰に雲介の頭小地獄の清六、焚火にあたり居る、左右に一、二、三、四の雲介一升徳利筒茶碗にて酒を飲み居る。この見得山おろし、馬士唄にて幕明く。

清六　もう二月も十日過ぎゆゑ、小田原や三嶋の宿ぢやあ梅がちら〳〵咲いて來たが、峠にはまだ去年から雪が消えず、二子おろしでふきさらされちやあ、梅の花より水ツぱながつらゝのやうにさがつてならねえ。

一　そのまた寒い山中に、わざ〳〵かうしてがんばるのも、關所の裏手のぬけ道ゆゑ、女を連れた旅人が通るを待つて茶碗酒。

二　うまい仕事をたのしみに、酒と焚火で寒さをしのぎ、網を張つては居るものゝ、此頃のやうに仕事がひまぢやあ。

三　箱根八里のつぎ立より、地切りで買込む七ツ物のつぎ立がむづかしいが、どうかいゝ鳥がかゝればいゝ。

四　こう〳〵その泣事はあとにして、早く茶碗を廻さねえか、まだ一杯も飲まねえから、こつちは咽喉がぐび〳〵して居る。

清六　さうだ〳〵、何でも物は祝ひがらだ、景氣をつけてがんばれ〳〵。

ト山おろしになり、これより皆々酒盛、捨ゼリフよろしく、花道より五の雲介一人走り出て舞臺へ來り、

五　こいつアいゝ所へ來た、おれにも一杯飲ましてくれ。

清六　誰かと思やあ矢立の杉藏、この酒盛はみんなして、地切をきつた酒だから、飲むならあとをつぐがいゝ。

一　一ぺえいくらの出しッこで、

二　寒さをしのぐこの酒盛、

三　錢を出さねえそのうちは、

四　めつたに茶碗は廻されねえわ。

五　これさ／＼、くど／＼としみッたれた事をいふな、一ぺえくらゐはぢいても、いゝすぢがあるから、飮ませろといふのだ。

清六　なに、飮ませても、

五人　いゝすぢとは。

五　そのわけといふのは、今爰へめつぽふかいな鳥が來るから、先へ駈けぬけ知らせに來たのだ。

清六　さうしてそいつは、

五人　どんな鳥だ。

五　今朝小田原を早立に、この峠をば打越しの女連の旅人だが、妾か女房か知らねえが、年の頃は二十五六、めつぽふかいにいゝ女を一緒に連れた商人體、供の野郎がかついで居るその兩掛もずつしりと、目方があつて金のつる、金太や銀二が駕籠をすゝめ、風祭から裏道を廻つて爰へやつて

來るから、駕籠を下して酒手をば、ねだりかけたら手前達も、側からとも〲口を出し、分け口を貰ふがいゝ。

清六　そいつァいゝ鳥が引かゝつた。

一　さういふことなら、手前にも。

二　惜しい酒だが、前祝ひに、

三　茶碗に一杯、

四　飲ましてやらう。(ト一人向うを見て、)

五　あれ〱、向うへやつて來るぞ。

清六　いや、うまい仕事だ、がんばれ〱。

トやはり山おろし馬士唄になり、花道より船木治左衞門少しふけたる名主のこしらへ半合羽一本ざし手甲旅がけにて山駕籠へ乘り、是を二人の雲介かつぎ、つゞいてお峰半元服の妾のなり、好みの着附裾少し高くはしより、手拭を冠り山駕籠に乘り、是を二人の雲介かつぎ、あとより一人の雲介兩掛の荷をかつぎ、下男作藏着流し尻はしより、上帶三尺脚絆手甲草鞋にて菅笠を持ち附添ひ出て來る。花道にて駕籠舁杖をする、治左衞門舞臺を見て、

治左　こりや／＼駕籠や、向うに大分人が集まつて居る。
お峰　ても氣味の悪いことではある。
六　いえなに、あれは雲介仲間、うさんなものぢやあござりませぬ。
作藏　それぢやあ、おめえがたの仲間の者か。
七　焚火をして居りますから、
八　あそこへいつて駕籠をたて、
九　一あたりあたりながら、
十　一ぷくやつて出かけませう。
治左　それを聞いて安心した。
お峰　成らうことなら休まずに。
六　一あたりあたらねば、この山道は越されませぬ。
作藏　それぢやあ、なるたけ急いでくれ。
皆々　さあ參りませう。
ト右の唄にて、皆々舞臺へ來て二重へ上り、二挺の駕籠を能き所へおろす。舞臺の雲介皆々此體を見て、

清六　おゝ、お客人寒かつたであらう。
一　さあ〳〵爰へ來て、
皆々　あたつて行かつしやれ。
ト是にて治左衞門駕籠より出る、お峰も氣味惡さうに駕籠より出る、作藏も立よりて、
作藏　いゝ所に焚火があつて。大だすかりといふものだ。
ト治左衞門お峰作藏きせるを出して、煙草を呑むことよろしく、清六此體を見て皆々と顏見合せ、
清六　なるほど、こいつはいゝ鳥だ。
治左
お峰　えゝ。
清六　いやさ、いゝ通りをお廻りなすつて、仕合せといふものだ。
一　さうだ〳〵、女を連れて峠を越すには、裏道傳ひで難澁だが、
二　駕籠を雇つたかはりにやあ、道案內を知つて居るから、
三　細い所を踏みまよつて、道にまごつく氣遣ひなし。
四　かうして焚火のある所へ、出て來られるとは仕合せだ。
五　まあゆつくりとあたんなすつて、寒さをしのいで、

六人　お出でなせえ。

治左　そりやこなた衆のいふ通り、大阪邊は諸所方々廻りあるいて勝手は知れど、此の東路は去年の秋下つたまゝにてまだ初旅、おなじみ薄き道中も、いづれもさまのお他力で、のぼる峠の箱根山。

作藏　供に附添ふ作藏も、梅の浪花で人となり、あづまの空のなつかしく、去年の秋にはる〴〵と、お目見得したれど是も初旅、この末ともに山道に迷はぬやうにこなた衆も、道案内をして下せえ。

お峰　浪花は知らず鎌倉は、弱きを見捨てぬ御氣性ゆゑ、案じる事はござんせぬ。

治左　どうぞ二人もゆく〳〵は、お取立てに預かるやう。

作藏　お峰さまから皆さんへ、よろしくお願ひ申しまする。

お峰　折を見合せとも〴〵に、お願ひ申してあげるわいなあ。

六　ときに、かうして裏道を、首尾よくぬけた御祝儀に、一杯飲まして、

五人　下せえまし。

治左　そりやもう、かういふ難所をば打越して貰ふゆゑ、一挺につき極めの賃に二朱づゝの酒手を遣らうと思つて居る。

六　もし〳〵旦那、常談をいつちやあいけません、きびしい關所のぬけ道を、女を連れて首尾よく通

り、二朱ばかりの目くされ金を、酒手に貰つてどうしませう。

治左　なに、二朱づゝでは不承知か。

六　不承知の不承知でねえのと、そんな相場があるものか。

七　さうだ〳〵、二朱や一歩の旅女郎を、連れて通るとは譯がちがひ、

八　此の別品なかみさんを、連れて道中するからは、

九　役者でいへば顏ばかりで、まづ千兩の直打がある。

十　日本一の立女形を、連れて峠を越す氣なら、

六〻　酒手もその氣で、

五人　氣張んなせえな。

作藏　こウ〳〵待ちねえ、おめえがたは足弱連れと侮つて、おつなことをいひかけるが、是が女をかどはかし逃げるとでもいふぢやあなし、しら几帳面のおかみさんを、連れて道中する旦那だ。天下の掟に是非がなく、關所の裏手は廻るものゝ、世間晴れたる御夫婦づれ、それを女に相場をたてゝ、多分の酒手をねだるとは、ちつと見込みが違ふだらうぜ。

ト爰へ淸六前へ出て、

清六　おい〳〵荷持の若い人、詞の中だがそいつはいかねえ、これからずつと先の世に世がひらけたら知らぬこと、當時幕府の御政事内は、箱根の關所はきびしい掟、女を連れて通られぬは、こりや言はねえでも知れた事だ、そこを當時のお役人が、目こぼしをしてぬけ道を、通すお慈悲にこちとらが、案内をした此の閑道、二朱や一歩の酒手を出し、それでいゝとは言はせねえ。

一　さうだ〳〵、たとひあやしい女でなく、世間をはれたかみさんでも、でんどへ出れば關破り。

二　そこをいはずにかうやつて、焚火にあてる親切づく。

三　二子の山に消え殘る、雪はまだ〳〵澤山あるが、

四　白い黑いは言はねえから、安くつもつて一人前、

五　一兩づゝで十一兩、器用に出して、

皆々　通んなせえな。（トきつといふ、作藏むつとして、）

作藏　それぢやあわいらは弱身をつけ込み、爰で酒手をゆするのだな。

六　えゝゆするとはなんの事だ、寒ツさらしにぬけ道を、

七　親切にして越してやり、

八　きめの駄賃のその外に、

九　二朱や一歩の酒手ぢやあ、
十　不承知だから、さういふのだ。
清六　とやかうと面倒だ。女を連れて山道を、爰やかしこと踏み迷ひ、ほえづらかはくを見物して、山犬でもけしかけてやらうわえ。
作藏　うぬ、そんなことを。（ト立ちかゝるを、治左衛門とめて、）
治左　こりや〳〵作藏、まあ待ちやれ。
作藏　それだと申して。
治左　はて、待ちやれといふに。（トきつと留めて、こちらへ向ひ、）なるほどこれはこつちのあやまり、かういふ道を通りながら、わづかばかりの酒手では越せぬといふも尤もなれど、今も下男がいふ通り、これが不正の女を連れ道中するといふではなし、世間晴れたる夫婦連れ、長い旅をばかゝへて居るゆゑ、多分の事も出來ぬ仕儀、不足であらうが一人前一歩づゝやらうから、それで峠を越してくりやれ。
一　えゝ、一分ばかりで越されるものか。
皆々　うつちやつておけ〳〵。（トわや〳〵いふゆゑ清六とめて、）

清六　これ〳〵、みんな靜かにしろ、供の男と事かはり、旦那が譯をいつて賴むを、さういつちやあ色氣がねえ、まあ〳〵おれに任せておけ。（ト皆々をしづめ、こちらへ向ひ、）もし旦那、それぢやあかうしませう、おめえさんも譯をいつて、さう素直に賴みなさるを、まさかいやとも言はれぬから中をとつて、二分づゝ下せえ。それで大まけにまけておきませう。

治左　それではあまり多分ゆゑ。

一　そつちがいやなら、こつちもいやだ。

皆々　うつちやつておけ〳〵。

ト　わや〳〵云ふゆゑ、お峰氣のもめるこなしにて、

お峰　もし旦那、どうぞ事なく納まるやう、酒手をやつて下さりませ。（ト治左衞門へ縋る。）

治左　ぢやといつて、あまり法外。

皆々　何が法外だ、何が法外だ。（トわざと大きくいふゆゑ、）

お峰　あゝもし、わたしや持病がおこりますわいなあ。

ト　耳なふさいでよろしくこなし、治左衞門是非なき思入あつて、

治左　えゝこれ、何をいふにも足弱づれ。

ト胴卷より金包みを出す、雲介皆これへ目をつける、治左衛門金の包みを落す、治左衛門數をかぞへ、

治左　それではそつちの望み通り、二分づゝやるから、越してくりやれ。

作藏　えゝみす〳〵かれらに。

雲介皆々　どうしたと。

治左　えゝこれ、だまつて居やれ。

ト作藏をとめて、件の金を清六に渡す、清六金を受取り改め見て、

清六　安いものだが仕方がねえ、二分づゝ貰つて通してやらう。

一　それでもあとに、

皆々　まだたんまり。

清六　はて、あとであんまりこせつくなえ。（トよろしくなだめる。）

治左　それでは急いでやつてくりやれ。

トこれにて清六思入あつて、

清六　ときに、焚火は消えてしまふし、是れぢやあみんなも越されめえがな。

六　なに、一息に、

駕舁四人　やッつけやせう。（トいふを冠せて、）

清六　えゝ手前達もかるはずみな、まだ〳〵あとに五十兩、いやさ、五十町一里にして三里からある峠道、一息つかずにや越せめえがな。（トよろしく呑込ませる。）

六　なるほどさうだ、どこぞで一杯やつてこねば、

七　なか〳〵峠は、

駕舁四人　越されねえ。

作藏　そんなら酒手をとつた上で。

清六　はて、此の寒さぢやあ、飲まずに居られぬ。

お峰　さうでもあらうが、心急き。

治左　少しも早くやつてくりやれ。

清六　なにさ、直きにいつて來ますよ。

作藏　はてさういはずに。（トとめるを、皆々ふり拂ひ、）

雲介皆々　さあ〳〵、行かう〳〵。

ト清六先に皆々下手へはひる。あとを見送りお峰治左衞門作藏あきれし思入にて、

治左　むゝ、さては酒手をむざ〳〵と、かれらに貪り取られしか。
作藏　こりやもう、きやつらの歸りを待ち、うか〳〵しては居られませぬ。
お峰　とあつてこれから、行く先が、
治左　はて、分からぬこともあるまいから。
作藏　少しも早く出かけませう。（ト此内お峰癪のさしこむ思入にて、）
お峰　あいたゝゝゝ。
治左　こりやお峰には、どういたした。
お峰　寒さの上に最前から、氣を揉みましたそれゆゑに、持病の癪がさしこみまして。
作藏　えゝ、折わるいそのおなやみ。
治左　あいにく藥の持合せが。
ト當惑の思入、お峰癪を押へながら、
お峰　これ〳〵作藏どの、その兩掛の蓋を明けると、小風呂敷の包みの中に寶丹があるはずゆゑ、どうぞ出して下さんせ。
治左　なに、寶丹が貯へあるとな。

お峯　はい、池の端で求めたのが、包みにはひつてをりまする。

作藏　それは何よりよい藥、どれ取出してあげませう。

ト件の兩掛の蓋を明け、小さな風呂敷包みを出しお峯に渡す、是にてお峯寶丹を飮む事よろしく、治左衞門は有合ふ茶碗へ淸水を汲んで持來り、お峯に飮ませる、此内作藏件の風呂敷包みを兩掛の内へしまはうとして、中より違つた風呂敷包みを出し、合點の行かぬ思入にて、

作藏　旦那さま、此の包みはあなたのでござりますか。（ト治左衞門に見せる。）

治左　いや〳〵、それは覺えないが、お峯のにてはあらざるか。

お峯　いえ〳〵、それは妾も。

作藏　ついに見なれぬ此包み、どうしてこれにはひつて居たか。

治左　はてさて、ふしぎな事ではある。

ト三人合點の行かぬこなしにて、件の包みをしまふ、この時バタ〳〵になり、花道より旅商人四郎兵衞好みのかつら、着流し尻はしをり、脚絆草鞋にて、引廻し合羽を上へ引きかけ管笠を持ち走り出來り、直に舞臺へ來り治左衞門を見て、

四郎　おゝ旦那、是れにおいでゞござりましたか。（ト息のきれし思入、皆々四郎兵衞を見て、）

治左　こなたは昨夜小田原の、小清水でお目にかゝつた。
作藏　尾州名古屋のお方にて、旅商人の四郎兵衛さま。
お峰　さうして爰へござんしたは、何ぞ御用でござりまするか。
四郞　へい、昨晩も申す通り、商賣にて鎌倉まで、下るつもりでござりますが、餘儀ないわけであなた方に、お聞き申したい事があつて、峠の難所もいとひなく、おあとを慕ひやう〳〵と、お目にかゝりましてござります。
治左　餘儀ないわけといはれるは、
お峰　いかなる事でござりまする。
作藏　樣子を聞かせて下さりませ。
四郞　外の事でもござりませぬが、もしあなた方のお荷物の中へ、人形手の唐更紗の包みが一つ、ひよつとしてまぎれこんではをりませぬか、お聞き申しに參りました。
治左　さては包みはこなたのなるか。
四郞　えゝお覺えがござりまするか。
治左　さあ、今も今とて供の者が、兩掛の荷の蓋を明け、見なれぬ包がはひつて居たと、いはれてこち

らも心づき、いかなる事で此中へ、まぎれこんであつたかと、心配をして居たところ。

作藏　まあ何にしろ主が知れて、こちらも安心いたしました。（ト雨掛の内より以前の包みを出し、）もし、その包みとおつしやるは、この風呂敷でございますか。（ト四郎兵衛に見せる。）

四郎　へい〳〵それでございまする。慥な證據は片すみに、岩淵とした白いきれが、縫ひ付けてござりませう。（ト是れにて作藏風呂敷の端を改め見て、）

作藏　なるほどこれに岩淵と、記したきれが附いて居りまする。

治左　やれ〳〵、それはお氣の毒な。

作藏　慥にお返し申しまする。（ト四郎兵衛に渡す。）

四郎　いやもう、これで少しは落着きました。（ト思入あつて、）とても事に此の中を、改めて見たうござりますから、どうぞお立合ひ下さりませ。

治左　そりやもうこなたの包みとあれば、改めて請取らつしやい。

四郎　へい〳〵、さやういたしませう。（ト包みの目方を引いて見て、）どうやら中が輕いやうぢや。

三人　えゝ。

四郎　いや、こんなに輕いはずではないが。

ト中結をとき包を明ける、内より着がへの袷一枚出る、四郎兵衛是れを手にとりふるつて見る事よろしくあつて、わざとびつくりおどろき、

四郎　さあ〳〵、ねえぞ〳〵。（ト立騒ぐゆゑ、三人合點の行かぬこなしにて）

治左　これ〳〵旅人、ぎやうさんに、

お峰　ないとは何が、

三人　ありませぬな。

四郎　さあ此中へ入れて置いた、金が五十兩なくなりました。

三人　えゝゝゝ。（トびつくりする、四郎兵衛思入あつて、）

四郎　もし旦那ッ、御常談をなさいますな。

治左　何といはつしやる。（ト是れより合方になり、）

四郎　昨晩も申した通り、わしは尾州名古屋の者で、江戸の書林へ青表紙の書物を仕入に參るもの、河内屋といふ本屋から頼まれて來たその金は、江戸で名高き須原屋といふ、書林へ送る五十兩、しかもこれなる風呂敷の、着物の間へ入れて置いたが、それの見えぬが合點が行かぬ、證據といふはこの通り。（ト以前着物の間より落ち散りある手紙を取りあげ、）金に添へたる此の手紙を、開封すれ

ばわかること、思ひ違ひといふ事も、よく世間にありがちゆゑ、金さへ出して下されば、とやかうとは申しませぬ、御常談をなされずと、お隱しなされた五十兩どうぞ返して下さりませ。

ト是れにて治左衞門心得ぬこなしにて、

治左　これ〳〵何を言はつしやる、思ひ違ひの隱したのと、以ての外なるその疑ひ、何で常談いたさうぞ、その小包みが兩掛に、まぎれてはひつてゐた事を、知つたのですらたつた今、必らず粗相をいはつしやるな。

お峰　ほんにわたしが今の先、癪のいたみに兩掛の中より藥を取り出す時、見なれぬ包みと作藏に、聞かれて初めて心附き、ふしぎな事と思ふ矢先、こなたがあとより見えられて、やう〳〵知れたその持主。

作藏　金がはひつてゐたかゐないか、それをば何で知りませう、疑はしくば兩掛の、中を改め見さつしつて、それで疑念をはらさつしやい、めつたなことをいはつしやると、間違ひになりまするぞ。

四郎　いゝや、その手は喰ひますまい、金をこかした兩掛の、中をこつちに改めさせ、それでそつちの身脫れをする氣であらうがそいつは行かぬ、盜みかたりをしさうもない、足弱連れと見せかけて人の心をゆるさせる、白むくでつかと氣はつけど、事を好まぬ旅先ゆゑ、たゞ穩便に濟まさうと

下から出ればいゝかと思ひ、しらばつくれたことをいへば、出る所へ出て表向きに、調べた日にやあ枕さがし、それからそれと枝葉がさき、惡事のほこりが立たうも知れぬ、敵の末ではあるまいし、こつちもいらぬ罪をつくり、急ぎの旅にひまをかき、長逗留もしたくない、四の五のいはずと、もし旦那、早く金をば出して下さい。

治左　これ／＼旅人、だまらつしやい、こなたの方から合宿の、一人旅ゆゑ退屈と、こちらの座敷へはひつて來て、どうした事でかその折に、こつちの荷物へ小包みを入れて戻つてはひつてゐたといひがけて、旅をかせぎの盜人だの枕さがしであらうのとは、聞き捨てならぬその疑ひ、そりや此分には濟まされませぬぞ。

作藏　さてはさういふそつちこそ、此の道中を渡つてあるく、旅をかせぎのごまのはひ、古手なことをいはねえで、包みを持つて行くがいゝ。

四郎　えゝやかましい、だまりやあがれ、なるほど盜人たけ／″＼しいと、金を盜んでおきながら、押手をつよくこはもてゞ、追拂はうとはふてえやつ、よくまあものを積つて見ろ、ゆすりかたりをするものが、わざ／＼包みを人手へ渡し、街道一の難所といふ、箱根の山の裏道まで、廻り遠くも追ひかけて、金のせんぎに來るものか、ことにこつちは手紙といふ、慥な證據が爰にあるが、そ

つちに覺えがないといふ、何ぞ慥な證據があるか。

治左　さあ、それは。

四郎　何と證據はあるめえが、未練をいはずと五十兩、きり〳〵爰へ出してしまへ。

トきつといふ、爰へ下手より、以前の雲介大ぜい出來り、この體を見て、

清六　こウ〳〵旅人。

雲介
皆々　どうしたのだ〳〵。（ト四郎兵衞皆々を見て、）

四郎　おゝいゝ所へ人足衆、わしやあ名古屋の町人だが、爰に居るごまのはひに、五十兩かたられたのだ、どうぞ加勢をして下せえ。

清六　道理でこつちもさつきから、うさんなやつだと思つて居たが、

一　旅商人の懷ろを、

二　さぐつて盜むごまのはひ。

三　ふとい奴らと知れたれば、

四　とも〴〵せんぎを、

皆々　しにやあならねえ。（ト立ちかゝる、治左衞門きつとなつて）

治左　むゝ、さてはわいらは言ひ合せたな。
四郎　えゝ、言ひ合せとはそつちの事、金を盜んでおきながら、しらばッくれても、もう叶はぬ。
清六　きり〳〵金を、
皆々　出してしまへ。（トこれにてお峰うろ〳〵しながら、）
お峰　こりやまあ、どうせう、どうせうぞいなあ。
作藏　そんなら昨夜なれ〳〵しく、菓子を持參で隣りから、話しに來たが合宿も、かういふ企みをしようといふ、そつちの仕事であつたるか、さうとは知らず兩掛へ包みを入れてうせたのを、知らなんだのはおれのあやまり、旦那さまへの言譯に、白い黑いをわけるから、さあ代官所へ一緒にあゆべ。
四郎　おゝ行かねえでどうするものか、一緒に行けとはこつちのせりふだ、出る所へ出て調べたら、わいらは箱根の關破りだぞ。
治左　その關破りの調べになれば、案内したる人足も、罪は脫れぬ同類だぞ。
お峰　どうぞしやうはない事かいなあ。
清六　おゝぐづ〳〵とめんだうだ、金を出さねえうめ阜に、女と荷物を引さらへ。

皆々 それがいゝ〳〵。（ト立ちかゝるを、治左衛門作藏きつとなつて、）

治左 やあ、亂暴したら、

作藏 容赦はないぞ。

四郎 さういふわれから、

皆々 たゝんでやるのだ。

ト是れより早き禪の勤めになり、四郎兵衛先きに雲介皆々縫ぐるみにて、治左衛門作藏へ打つてかゝる、手明きの雲介お峰をとらへ花道の方へ引立つて行かうとする。爰へ花道より、神谷慶十郎、月代むしり、浪人體、大小にて、義經袴白の二重廻し、上じめ、草鞋にて、竹刀へ小さき包みを結び附けしをかつぎ出來り、花道にて此體を見て、お峰をかばひ、雲介を投げ退け、お峰を後へ圍ふ、此内雲介皆々は治左衛門作藏を打ちすゑ、四郎兵衛清六にて押へ附けながら、此體を見て、

四郎 やあ、邪魔な所へ、三ぴん侍。

清六 そいつを先へたゝんでしまへ。

皆々 合點だ〳〵。

ト慶十郎へ打つてかゝる、慶十郎持つたる鐵扇にて立廻り、雲介皆々を打ちすゑる。

雲介
皆々　こいつァ叶はぬ、逃げろ〳〵。
ト花道へ逃げてはひる。四郎兵衞清六縫ぐるみにて慶十郎へ打つてかゝろ、慶十郎ちよつと立廻つて、兩人の襟首をしつかと捉へる、是れにて兩人苦しきこなしにて、
四郎　あゝもし〳〵お侍さま、助けて下さい〳〵。
清六　さうしめられては死にます〳〵。
慶十　さあどうだ、その身の惡事をすみやかに、白狀いたして心を改め、この後惡事をせぬとあれば、けふのところはゆるして遣はす、さもなきうちはゆるさぬぞ。
四郎　へい〳〵申します〳〵、申しますからお侍さま、
清六　どうぞ其の手を放して下さい。（ト是れにて慶十郎手を放す、兩人下に居て、）
四郎　いやもう實は昨日平塚から、あとを附けたるごまのはひ、昨夜旅籠の合宿に、包みを向うの兩掛へ、そつとかくして山中で、ゆすりかけたる五十兩。
清六　そのあひずりはふだんから、脫れぬ仲間のはひとくも、金と女に目がくれて、手あらいことをしましたが、大きな目玉のおまへさんに、にらみつけられて一縮み。
四郎　此後心を改めて、惡事は決していたしませぬ。

清六　どうぞ不便と思召して、命ばかりは、

四郎　お助け〳〵。

慶十　此後心を改めて、悪事をせぬとあるなれば、けふのところは見脱しくれんが、再び悪事をはたらくのが、我目にかゝるその時は、命はないからさう思へ。

ト兩人の襟上を放してやる、是れにて兩人こそ〳〵と下手へ來り、

四郎　何のことだ馬鹿々々しい、大和のこのみ見て取つて、いがみの權太のころ入りをやらかすつもりも椎の木に、すこしはゆかりの樫の木坂、たゞの奴で引込んでは、名題に上つた甲斐がねえ。

清六　はてあんまり役がよすぎると、却つて人のそねみをうけ、ごまといふ名にさはるから、ちつとは雲にもつきあひなせえ。

四郎　とはいへみす〳〵。

慶十　どういたした。

四郎　覺えて居ろ。

ト四郎兵衞先に清六ついて花道へ逃げてはひろ。あと替つた合方になり、治左衞門お峰作藏よろしくこなしあつて、

治左　これは〳〵御武家さま、見ず知らずの私共の危ふい難儀をお救ひ下され、何とお禮を申さうか、なか〳〵詞に盡されませぬ。

お峰　せめてあなたの御住所や、お名を伺ひおきまして、御恩報じをいつの世にか、いたしたうぞんじますれば、

作藏　いづれの御藩でお名前は、何と仰せられまするか、お聞かせなされて、

三人　下さりませ。

慶十　身共はいさゝか仔細あつて、姓名とては申されぬが、さる大身に仕官なせしも、朋友の讒言により、主家を放れ浪人なし、殊更劍道未熟ゆゑ、修行のために諸國をめぐり、惡事をこらし善をすゝめ、陰德を積む志願の者、さしてもなき儀をそのやうに、主從よつて謝されては、却つて身共が面目ないわえ。

治左　すりやあなたさまは御劍道を、修行の御身でござりまするか、私事は大和の國吉野郡の壺内村に父の代より名主を勤め、村のたばねをいたしまする、船木治左衞門と申すもの。

お峰　又私は江戸表で產れしものでござりまするが、ふとした緣で此のお方と女夫になつて大和路へ、一緒に參るものでござりまする。

作藏　私事は下男の作藏、おかけさまにて主從三人、難儀をのがれこのやうな、有りがたいことはござりませぬ。

慶十　むゝ、さてはそれなるお女中は、江戸表にて御家内に持たつしやれたといはるゝか。

治左　まだ御昨今のあなたさまへ、かやうなことを申し上げるもいかゞではござりまするが、何をお隱し申しませう三年いぜんに妻に死なれ、あとへ一人幼年の男子が殘つて居りますゆゑ、繼しき母の手しほにかけ育てともなく此の年月、妻もむかへずをつたるところ。

作藏　去年の秋より村内に公事の出入りが出來まして、旦那さまには江戸表へはる〴〵下つて二年越しほんの旅中のつれ〴〵とお圍ひなされしお女中が、心立よきお峰さま、公事も片附きお國許へ歸るについて世話人へお賴みなされて貰ひうけ、改め後のおかみさんにお直しなさるつもりにて、お連れなされし此の道中。

お峰　諸國をおめぐり遊ばすと、おつしやりますれば猶の事、是れを御緣に大和路を若し御通行遊ばすをりは、必らずお尋ね下さいますやう、お待ち申してをりまする。

慶十　身共も是れより京地へ登り、祇園淸水智恩院と、あらゆる神社佛閣を拜禮なして大和路の古跡を尋ね浪花へ出て、四國九州西國と巡行いたす所存なれば、緣さへあれば又重ねて、面會いたすこ

ともあらん。

ト是れにて治左衞門懷中より紙入を出し、中より所書の手札を出し、

治左　則ちこれが名所を記しましたる手札ゆゑ、お渡し申して置きますれば、必らずおたづね下さりませ。（ト慶十郎へ渡す、慶十郎手にとり見て、）

慶十　「大和の國吉野郡壺内村、名主船木治左衞門。」いづれそのうちお尋ね申す。

ト件の手札を懷中する。此の時七ツの鐘鳴るゆゑ、

作藏　ありやもう、たしか夕七ツ。

慶十　日も西山へ傾けば、早く峠を下らつしやれ。

治左　又もやさはりのなきうちに、急ぎまするでござりまする。

お峰　とはいへ知れぬ裏道にて、此の行先にて惡者が。（ト案じるこなし、）

慶十　幸ひ身共も三島宿に、しるべがあつて立越えれば、案内ながら同道いたさう。

作藏　あなたさまさへ御一緒に、お出でなされて下さりますれば、心丈夫と申すもの。

治左　何から何まで御厚情、何と御禮を申さうやら。

慶十　しかし、女儀にて山道を、下るはさぞかし難儀であらう。

お峰　いえあなたさまが御一緒で、心丈夫と思ひまするとも、歩けぬことはござりませぬ。

作藏　なんでも旅は張合ひに、ならねば道が歩けませぬ。

治左　なるほど、そちが申す通り。さやうござらばお武家さま。

慶十　同道いたすでござらう。（ト此内作藏件の兩掛をかつぐ。いぜんの雲介二人息絶えしを、慶十郎引起して、むゝと活を入れて、）お女中には駕籠へ。（トお峰へ目くばせする、お峰心得て有合ふ駕籠へ乘る。慶十郎は雲介二人を駕籠の所へつきやり、）それを擔げ。

七　なんで駕籠をば。（トふしやう〳〵いこなし、）

慶十　いやだと申すと、ぶつた切るぞ。（トきつといふ、雲介二人是れに恐れて、）

七　あゝ情ない。（ト是非なく件の駕籠をかつぎあげる。）

治左　さやうなれば、旦那さま。

慶十　どれ、（ト持來りし竹刀をかたげるを、よろしく木のかしら、）參らうか。

ト慶十郎外各々こなし、よろしくキザミ、山おろしへ馬士唄をあしらひ、

ひやうし　幕

二幕目

壺内村浪宅道場の場
同立場酒屋見世の場
七面坂雪中の場

〔役名――神谷慶十郎、庄屋船木治左衞門、伯父船木甚兵衞、船木悴治三郎、立場酒屋重助、船木下男作藏、構ひものまだらの丑藏、胡麻のはひ岩淵九郎藏、立場酒屋の若い者又作、同丁稚丁松、寺男傳介。立場酒屋女房しげ、船木後妻お峰、其他。〕

(壺内村浪宅道場の場)――本舞臺四間通し常足の二重、上下折廻し板羽目、二重正面板羽目、いつもの所猴子張の冠木門、此外へ一面に白壁の土塀、能き所に松の立木、二重の正面に面小手竹刀など掛けあり、日覆より板羽目の大欄間をおろし、總て大和國壺内村神谷道場の模様よろしく。爰に船木悴治三郎若衆かづら稽古袴なり、襷後ろ鉢巻にて竹刀を持ち立ちかゝり、門弟二人同じく稽古着にて面小手をかけ、竹刀を持ち、治三郎と試合して居る、上手に門弟二人稽古着のなりにて控へ、二重眞中に船木治左衞門羽織まち高袴名主の拵へにて、是れを見物して居り、平舞臺下手に百姓四人着流しにて控へ居る、この見得白囃子にて幕明く。と右の鳴物にて、三人よろしく立廻りて、トゞ治三郎門弟二人を打ちすゑ、

門一　あゝ、まゐつたく。
門二　治三郎どの。
三四　お手柄く。（ト是れより合方になり、）
百一　名主どんの小旦那が、えらく劍術が上つたといふから、
百二　けふ連れ立つて此の道場へ、見物に參りましたが、
百三　世間の噂に少しも違はず、
百四　小旦那殿の今の働き、
百一　實にわしらも、
百姓四人　たまげました。
門一　いや、常と違つて今日は、親御が見物して居るゆゑ、
門二　治三郎殿の太刀筋が、いとゞはげしく打ち込まれ、
門一　思はぬ不覺を。
門二　とつてござる。
門三　いやどういたしてもこのくらゐなうちは、外へ心が散らぬゆゑ、

門四　治三郎殿の御上達、我々感服いたしてござる。
治左　是れと申すも神谷氏のお仕込みがよろしいゆゑ、上達せしとは申すものゝ、なか〳〵もつて各々方のお相手にはなりませぬが、親共の見る前で打ちするゑるはおとなげないと、わざと勝をばお讓り下され、悴につれて私まで面目を施しまする。こりや〳〵、各々方へお禮を申せ〳〵。
治三　お稽古を下さりまして、ありがたうござりまする。（ト門弟四人へ辭儀をなす。）
門一　なにさま親御は親御だけ、手前の胸中お察しあつて、
門二　わざと勝利を讓りしと、お見拔きなさるとは、あつぱれお目高。
門三　いや〳〵、全く御兩所が敗をとつたに相違ござらぬ。
門四　その負け惜しみはお止めなされい。
門一　いや、朋友のよしみのない、
門二　ほどの惡いことを言はれる。
治左　いや〳〵今の立合ひは、全く悴の勝にあらず、各々方のお引立にて、此末ともに治三郎を、劍道上達いたすやう、御指南のほどを願ひまする。
門三　その儀は我々心得をれば、

門四　必ず御配慮いたされな。
百一　いや、いつぞはわしらも名主さまに、お聞き申さうと思ひましたが、
百二　こちらのお宅の先生は、名主さまとは以前から、
百三　なんぞ退れぬ縁でもあつて、
百四　御懇意になされまするか。
百一　それが聞きたう、
百姓四人　ございまする。（ト合方になり、）
治左　いや以前からといふではないが、知つての通り六年前の秋頃、村方の出入に附いて永らく江戸へ出て居る内、朝夕の事も宿屋では不自由勝ゆゑ寄宿中、女やもめで居る家へ下宿をするが便利であらうと、人のすゝめに假の宿、萬端世話を頼みしは、今のお峰が侘住居、遠國者の我々ゆゑ、いかなあやがあらうかと初めは心もゆるされず、五日十日と居る内に様子を見ればさはなくて、元が武家出の女にて、世に便りなく浪々の夫に別れ操を立て、心細く暮して居ると聞いて不便に思ふゆゑ、丁度こちらも三年あと女房に死なれ獨身ゆゑ、身寄りの者より貰ひうけ、お峰を連れて國許へ歸る途中の箱根山、雲助どもに取巻かれ荷物は元より主従の命もすでに危ふき折、神谷様

がお通りなされ、難儀をお救ひ下されし其の大恩を御縁のはしと、當地へお尋ね下されしを、無理に引き留め及ばずながら、お世話いたして居るのぢやわえ。

一　それで様子がわかりました、道理でわしらもこれまでは、不思議に思つて居りましたが、

二　それぢやあいつぞや箱根山で、危ふい難儀に出逢つたと、作藏どんから聞きましたが、

三　その時通りかゝつたる、武術修行のお武家様は、こちらのお内の神谷さまか。

四　命の恩があるからは、こりやあどんなに名主さまが、お世話をしてもよい筈だ。

治左　いやもう生兵法は大疵の基といふが、われ人とも劍術武藝の心得があるとないでは旅中にて、盜賊などに出逢つた時、大きな違ひに悴にも、かうして武藝を習はせますが、わづかな間の御指南も御丹精ゆゑ此のやうに、使へるやうになりました。

三　そりや御親父のいはるゝ如く、武術に鍛練いたす者は、一生涯の其身のとく。

四　よく劇場でもいたしますが、惡者などが娘を捉へ、手籠めにしようといたすところへ、

一　立派な武家が通りかゝり、惡者を手玉にとり、追ひちらしたるそのあとが、

二　手なみに惚れて其娘が、戀煩ひといふ筋は、こりやあ劍道の徳といふもの。

一　さう聞いて見ると劍術を、わしらも是れから入門して、

二　田畑を耕す間には、やつとうを習ひ覺え、
三　惡者達が女をとらへ、手籠めにすると見たならば、
四　そこへかけつけ手玉に投げ、おつな色事でもしますべえ。
治左　いや劍道は上達しても、其の色事はむだであらう。
百一　それではやつぱり、
百四　むだでござるか。
治左　はて、よくまあ鏡と、相談さつしやれ。

ト此時しらべになり、上手の棲より神谷慶十郎、袴一本ざしにて出來り、

慶十　船木氏、甚だ失敬御免下され。（トよろしく座に着く。）
治左　是れは先生、お食事でござりましたか。
慶十　稽古が立て込み居りしゆゑ、やう〳〵只今晝飯を、試合のあひまに喫してござる。
門一　どれ、我々も御免を蒙り、
門二　食事をいたして、
門弟四人　參らうか。

ト上手へはひる。あと合方きつばりとなり、

治左　さて先生へお禮をば申し上げねばなりませぬが、今日是れへ參りまして、御門弟衆と悴めが試合の樣子を見物せした、だん〳〵との御丹精にて、悴が劍道上達いたすは、全くもつて先生のお稽古がよろしきゆゑに、親の身にとり何程か、ありがたい儀でござります。

慶十　いやその挨拶にあづかりては、甚だもつて痛み入る、なか〳〵敎がよろしいとて上達いたすわけにあらず、幼年ながら御子息の太刀筋がよろしきゆゑ、下地のある武家方の門弟達を當節にては當てこむほどの手なみとなり、敎示いたせし手まへに於ても、悦ばしく思ひ居ります。

治左　いやもう不調法なる悴めを、さやうにお褒め下さりましては、面目次第もござりませぬ。

百一　どうぞわしらも先生の、お稽古にあづかりまして、

百二　やつとうを習ひ覺え、日頃の遺恨ある奴や、

百三　女を手籠めにいたすやうな、惡い奴らを手玉にとり、

百四　えらいものだといはれるやうに、お弟子になされて、

四人　下さりませ。

慶十　いや其稽古も最早半年、長く當所に居られねば、新規の弟子はとれませぬ。

百一　えゝ、そりや又なぜで、

四人　ござりまする。

慶十　かね〴〵是れなる船木氏へは、手前が志願を打ち明けて、お物語りをいたし置きしが、聊か神谷の流名をあらはすとは申しながら、凡そ武藝は諸流にわたり秀でしものゝ世に多く、上に上ある劍術の奥義を求めんそのために、あらゆる日本六十餘州巡行いたす望みなれば、一所に一年と足を留めては居りがたし、申さば浮浪の身の上ながら、是れなる船木治左衛門殿が、たつての賴みに御子息の手ほどきなりといたさんと、半年あまり寓居なし、かく道場は構へますれど、わづかの間にかほどまで治三郎殿が上達なせば、最早近々手前においては、他國へ發足いたす所存、なまじ神谷の流名を各々方へ傳へしとて、却つて其身の害となるとも、助けにとてはならざるゆゑ、それよりやはり鋤鍬取り、農家の業に心をゆだね、國の寶の名義を忘れず、領主へ奉公盡さつしやれ、必ず世にいふ生兵法は、學ばつしやらぬがよくござる。

百一　はゝあ、それぢやあ此地に先生は、足を留めては下されぬか。

百二　さういふわけなら小旦那が、不器用者でいつまでも、

百三　劍術武藝を覺えずば、是非なく爰に居さつしやらうに、

百四　あいにく早く劍術を、覺えられたが不仕合せ、
百一　お名殘りをしい、
四人　事だなあ。
治三　いえ〳〵なんで私がまだ上達をいたしませう、さやうな事をおつしやらずと、長く此地にお足を留め、せめて二年と三年も、御指南なされて下さりませ。
治左　そりやもうそちのいふ通り、五年と十年習うたとて、極意の知れぬ劍道ゆゑ、年端の行かぬ身を以て、半年ぐらゐのお稽古で、何で武藝が覺えられよう、さしたる御用でござりませずば、せめて此地に二三年、御寄宿なされて下さりませ。
百一　わしらもとも〴〵、
四人　願ひまする。
慶十　はて御緣があらば又後年、再びお世話になるでござらう。
　ト きつぱりいふ、是れにて皆々是非なき思入、此の時花道の揚幕にて、
作藏　うしやあがれ〳〵。
　ト 合方しらべになり、花道より作藏着流し下男の拵へ、岩淵九郎藏旅なり、笈摺を負ひ、笠を持ち草

蛙にて、作藏に引きずられ出來り、花道にて、

九郎 もし〳〵お若い衆、さう手荒くなされずとも、決して逃げ隱れはいたしませぬ、まあ此手を放して下さい。

作藏 えゝ、そんなことをぬかしをつて、逃げようとしても、其手はくはぬ。おれと一緒にうしやあがれ。

ト兩人舞臺へ來り、作藏門の外より内を覗き、

作藏 おゝ旦那さま、是れにござりましたか。（ト治左衞門作藏を見て、）

治左 そちは作藏、何事だ。

作藏 いつぞや箱根で言ひがけをいたした、ごまのはひめを連れて參りました。

治左 なに、あの折の惡者を。

作藏 野郎め、こつちへはひりやあがれ。

ト門の内へ連れ込み、よろしく突き放す、百姓四人是れを見て、

百一 ごまのはへなら、叩きしめろ。

百姓三人 それがいゝ〳〵。

慶十　これ〳〵、各々待たつしやれ。
百姓四人　でも、ごまのはへを。
慶十　はて、此の道場へ參りしからは、其成敗は手前がいたす、まづ〳〵各々お控へなされ。（ト是れにて百姓四人下に居る、慶十郎は九郎藏を見て思入あつて）何さまいつぞや箱根山にて、我目にかゝりし旅かせぎ、あの節篤と異見を加へ此の後惡事を働らかば、容赦はせぬと申し置きしが、見れば笈摺身にまとひ、順禮姿と變化なし、まだ賊心を改めをらぬか。
九郎　いや〳〵全くもちまして、さやうなわけではござりませぬ、あの節あなたの御異見にて、惡事はさつぱり思ひ止り、善心となりまして、昔造りし舊惡の罪亡ぼしの其ために、御覽の通りの西國順禮實はあなたのお行方をお尋ね申してをりました。
作藏　えゝしら〴〵しい其のいひわけ、人足どもをかたらつて、ゆすりかたりをするほどな、われが性根であの折に、是れなる旦那の御異見ぐらゐで、惡事の止まるはずがねえ、東海道を食ひつめて此の大和路へうか〳〵と、さまよひ來れば籠の鳥、袋川きにしてなりと、みじめを見せねば腹が癒ぬわえ。
九郎　さゝ惡者の私ゆゑ、さう疑つておいでなさるも、御無理ではござりませぬが、僞りのない其證據

を、只今出して御覧に入れます。まあ〳〵下においで下さい。

百一　なに、嘘でない。

皆々　證據とは。（ト九郎藏是れにて腰に巻き附けたる小風呂敷より、紙入を出し、）

九郎　もしそれなる旦那さま、こりやあの折にあなた樣が、御懐中からお落しなされた御紙入でござりますが、お覺えがござりませうがな。

ト慶十郎の前へ出す、是れにて慶十郎よろしく思入あつて、

慶十　いかにも、是れは手前の懐中物、さてはあの折其方が。

九郎　へい、盗みましてござりまする。

皆々　むゝ。（ト思入、是れより合方かはつて、）

九郎　咽喉をしめられ苦しみながらも、盗み心はやつぱり止まず、どさくさまぎれに懐ろの紙入を抜き逃げましたが、あとで中をば改め見れば、見込みと違つて金はなく、入用らしい書物がいくらもはひつてをりますから、其時始めて思ひ當り、盗みかたりをするものは、おのれが榮耀がしたいばかりに、人の命をちゞめたり此方にあつて益もない大事な物をかすめ取り、つばめを合して見る時は、金の員數は僅かでも、犯せる罪が多いゆゑ、果はみじめな仕置に逢ひ、馬鹿々々しいと氣

が附いたら、よせばよかつた此の紙入、現在きはどい命を助かり異見を加へて下すつた、其人の物を盗み取り、金のつるにもありつかず、向うの難儀になる事を仕出したのは惡事の止めどき、爰らが心の入れかへ時と、すつかり末を考へまして順禮姿とさまをかへ、罪亡しをいたしますが是れといふのもあの時の、御異見ゆゑと心に忘れず、お後をしたつて其品を、お屆け申すつもりにて、廻國修行をしながらも、けふまで旦那のお行方を、お尋ね申してをりました。

ト是れを聞き慶十郎思入あつて、

慶十　さてはあの節宿へ着き、我懷中が紛失せしゆゑ、奪ひ取られしとは心附かず、騷ぎのまぎれに落せしか、金子は肌身へ着けたゆゑ此の紙入にはあらざれど、中には種々の書物や我師匠より讓られたる免許の狀が入れあるゆゑ、餘人にとては申さゞれど、たゞ殘念に思ひ居りしに、改心なして我が行方を尋ね求めて屆けしは、神妙なるいたし方、實意に免じて罪をゆるし、草鞋錢を惠みくれん。廻國なさば故鄕へ歸り、何家業かは存ぜねど、其の身に覺えし職をはげみ、誠の人になつたがよいぞ。

治左　いやもう惡を懲らして善を勸むる先生のお惠みに、惡事を止まり善心に立ちかへつたる上からは過ぎし恨みも水となし、宿に困らば一夜ぐらゐの報謝をいたして進ぜよう。

九郎　思へばあの折あなた方へ、申しかけをばいたしましたも、今となつては面目ない、お腹も立たうが旦那さま、お許しなされて下さりませ。

作藏　さういふわけとも知らねえで、手荒くこなたを引きずつたが、はずみにどこぞ痛めはせぬか、どうぞ料簡して下せえ。

百一　わしらも旅のごまのはへと、

百二　聞くとあとさきかまはずに、

百三　たゝんでやらうと思つたが、

百四　今となつては、氣の毒だ。

九郎　いえ〳〵なんであなた方を、今更お恨み申しませう。

ト此内慶十郎手箱より、金を出し紙に包み、

慶十　些少なれども草鞋錢、旅中の手當の足しにしやれ。（ト投げてやろ、九郎藏取り上げ、開き見て、）

九郎　こりや大まいの一兩金。

慶十　免許の狀が計らずも再び戻る悅びに、僅かな金子。

治左　てもお氣前の、

百姓　よい先生。
九郎　かやうに澤山頂いては、相濟みませぬが長旅ゆゑ、思召しに隨ひまして、いづれ、御恩は返します。
慶十　最早日暮に程近し、木錢へ行つて泊るがよい。
九郎　さやうなれば旦那さま、どなたも隨分お達者で。
作藏　こなたも體を、
百姓
四人　大事にさつしやれ。
九郎　是れにてお別れ申しまする。
ト唄になり、九郎藏皆々へ辭儀をして、しを〳〵と門口へ出て思入あつて、わざと笠を門口の內へ殘し、下手へはひる。直ぐにばた〳〵になり、花道より又作着流し前垂れがけ、酒屋の若い者にて走り出來り、直ぐに舞臺へ來て、
又作　へい、御免下さりませ。
治左　あわたゞしき其の樣子、何用で參つたのぢや。
又作　先生樣へ折入つて、お願ひがあつて參りました。（ト治左衞門又作を見て、）

治左　誰かと思へば角酒屋重助の所の又作ではないか、先生へお願ひとは。

又作　お〻名主様、丁度よい所にござりました、あなたもかね〲御存じのおかまひ者の丑藏が、私の見世へ參りまして、酒をたらふく飲んだ擧句、內のおかみさんとわけがあるから、女房にくれといひがゝり、あばれちらして居りますから、こちらの先生をお願ひ申して、つまみ出してお貰ひ申さうと、お願ひ申しに參りました。

作藏　それぢやあ、あの丑藏めが又村內へ立ち入つて、あばれ歩いて居やあがるか。

治左　そのしめしなら先生を、お賴み申すまでもない。今わしが行つてつまみ出すから、重助どのにさういつて來やれ。

又作　さやうなら名主さま、お早くお出で下さりませ。（ト引返して花道へはひる。）

治左　ならず者ゆゑ去年の冬頃、所構ひになりましたが、まだ根性が直りをらぬか。

作藏　旦那さま、私も御一緒に參りませう。

百一　わしらも行つて丑藏を、

百二　引きずり出して、

百姓四人　やりますべえ。

慶十　あこれ、定めて酒興の上でござらう、手荒いことは止さつしやれ。
治左　さやうなれば、神谷さま。
作藏　是れでお暇。
皆々　いたしまする。
治三　どれ、わたくしも御一緒に、
治左　いや、そちはこちらに殘り居て、お宅の御用を足すがよい。
治三　それでは、さやういたしませう。
治左　どりや、追ひ拂つてやりませうか。
　ト合方になり、治左衞門先に百姓四人作藏附いて花道へはひる。あとに慶十郎思入あつて、
慶十　こりや治三郎、奧へ參つて休息しやれ。
治三　さやうならばお師匠さま、御用があらばお呼び下さりませ。
　トしらべにて、治三郎上手の棲へはひる。時の鐘、慶十郎あたりを見廻し、件の紙入を取り上げ、手紙を出し開き見てにつたりとうなづく、爰へ下手より以前の九郎藏出て、向うへ思入あつて、
九郎　御免下さりませ。（ト門の内へはひる。慶十郎九郎藏を見て、）

慶十　何ぞ用か。

九郎　へい、笠を忘れました。

慶十　おゝ、さやうか。（ト奥を見やり、九郎藏と顔見合せ、慶十郎うなづくを道具替りの知せ、）いや粗相なことぢや。

ト兩人氣味合の思入、時の鐘にて道具廻る。

（同　立場酒屋見世の場）――本舞臺上手へよせて三間常足の二重、下の方一間落間、正面酒樽の書割、此の下手一間立場居酒と記せし腰障子を立切り、軒口一間藁葺の庇、二重の正面眞中暖簾口、上手一間中仕切りのあるまひら戸の戸棚、此前に帳場格子、下手一面の板羽目、落間の所に惣銅壺の竈、土間に中臺の樽を並べ、總て壺内村居酒屋店先の模樣、爰にまだらの丑藏、好みのかづらそぼろなり田舍の惡の拵へにて、ちろりと丼を持ち樽に腰をかけて居る、重助着流し、前垂れ、酒屋の亭主にて、丑藏の胸ぐらを取り立ちかゝり居る、二重に女房おしげ丸髷着流し、前垂がけにて住ひ、下手に丁松、角大師の酒屋の丁稚にて立ちかゝり居る、此の見得角兵衞獅子の鳴物にて道具留る。

丑藏　こウ重助、われが嬶とねんごろして居るから、世間へぱつとしねえうち、此の丑藏にくれろとい

ふに、胸ぐらをとつてどうするのだ。

重助　えゝ言ひがゝりもてえげえにしろ、どこの國にか手前のやうなやつと、間男をする者があらうかい。

しげ　ほんにあきれた言ひがゝり、そんな難くせを附けなさると、お酒の上とはいはせぬぞえ。

丁松　やァい勘定が足りねえもんだから、いろ〳〵なことを言やあがる。

丑藏　なに勘定が足りねえ、此小びつちよめが、駄目こくな、自慢でねえがぼろ着でも、酒の錢ばかりやあ絶やさねえくらやみの丑藏さまだ、こら阿女、何も亭主の前だといつて、さうしらばつくれる事アあんめえ、もうかうなつたら面あらつて、女房にならうといふがいゝわさ。

重助　これ〳〵丑藏、なんぼ酒にくらひ醉つたといつて、いふことゝいはねえことがある、人の女房に疵をつけて酒の勘定をふまねえで、錢がなけりやありていに、ねえといつて借りて行け。

しげ　いえ〳〵覺えのない事を、言ひがけをされたから、明りを立てねば歸されぬ。もし丑藏さん、いつまた妾がそんなことをしたか、それを聞きたい聞きたいわいなあ。

丑藏　聞かせねえでどうするもんだ、われは忘れたか知らねえが、此の三月の半ごろ吉野へ花見に行つた時、しかも歸りは夜に入つて道からおらと連れになり　互ひに手と手を握つたのがつながる緣

のかけ茶屋の葭簀の蔭へころがり込んで、われ首玉へかじりついて、可愛い人だといつたこと、
よもや忘れやあしめえがな。

しげ　あれ〳〵、あんな言ひがゝりを。

丑藏　えゝ、言ひがゝりとは何の事だ、今更ちくだとぬかしても隠し事はだめだから、ぶちまけていふがいゝわさ。

しげ　えゝ、けがらはしい。

丑藏　なんだ、けがらはしいと。（トひよろ〳〵して立ちかゝるを重助きつと押へ、）

重助　えゝ、じたばたしやあがるな。（トよろしく止める。ばた〳〵になり、花道より以前の又作出來り、）

又作　もし〳〵親分、今丁度道場で名主様にお目にかゝり、直に爰へお出でござりまする。

丑藏　それぢやあ、迎ひに行きやあがつたな。

又作　おゝ、行かねえでどうするものか。

丑藏　えゝ、此のだめ野郎めが。

ト傍に有合ふちろりにて又作のあたまをくらはす、是れにて又作あたまより酒をあび、びつくりしてあたまを押へ、

又作　やあ〳〵、おれを切りやあがつた〳〵。
丁松　おい〳〵、又作どん血ぢやあねえ、そりやあ酒だ。
又作　なんだ酒だ、さけ〳〵ひどい目にあはしやあがつた。（ト手拭にてふいてゐる。）
丑藏　やい重助、酒がなくなつた、ついで出せ。
重助　えゝ、なんであとを飲ませるもんだ。
丑藏　なんだ飲ませねえ、こら、われが内ア酒屋でねえが、錢イ出して飲む酒だ、飲ませろてッたら飲ませろな。
しけ　ほんにあきれたものぢやなあ。
トやはり角兵衞の鳴物になり、花道より以前の治左衞門先に、百姓四人作藏附いて出來り、花道にて此體を見て、直に舞臺へ來る、重助は治左衞門を見て、
重助　名主さま、此通りでござります。（ト丑藏是れを聞いて、）
丑藏　なに、名主が來た。（ト治左衞門を見て上手へ行きかゝるを、治左衞門傍へ駈けより、丑藏の襟上を引つける、）こら何をしやあがる、放さねえか。
治左　うぬ、何をするもすさまじい、お構ひの身を持ちながら、何で常所へうせをつた。

丑藏　むゝ、足があるから來たがどうした。

百姓　あれ、あんなことをぬかしやあがる。

治左　そのいけ口を。（ト丑藏を引起す、是れにて丑藏エ、イとおくびをするゆゑ、治左衞門酒くさいといふ思入にて手を放す、是れより合方になり、）やい丑藏、おのれのやうな人でなしに、幾度いつてもむだな事だが、押がりゆすりの兇状にてすでに島へも行く所を、此の治左衞門がお上へ願ひ、格別のお慈悲をもつて所構ひの入墨で、追ひ拂はれたを忘れをつたか、此の大和一ヶ國は立ち寄ることのならぬ身で、當所へ立ち入るそれのみか、酒をくらつてあばれあるき、人に迷惑かけるとは、言はうやうなきごくつぶしめが。

作藏　それも構ひの身分ゆゑ、神妙にでもすることか、言ひがけをして惡事を働き、今度わりやあ送りになれば、再び娑婆へは歸られねえが、それでも惡事を働くか。（トおしげ前へ出て、）

しげ　もし旦那さま、お聞きなされて下さりませ、あらうことかあるまいことか、夢にも知らぬ妾と間男をして居るなどゝ、大きな聲でがなり立て、わけでもあるかと思はれましては、世間へ顏出しが出來ませせぬ。

重助　いやもう酒をたらふく飮んだ上で、間男をしてゐるゆゑ世間へぱつとせぬうちに、女房にくれろ

など〻、あとかたもなき言ひがゝり。

丑藏　やい〳〵重助、言ひがゝりとは何の事だ、われの女房のおしげとは疾うからねんごろにして居るから、敵の末のわれでもおらあ面へ泥べいなするのが藝でもねえと思ふから、ありていにぶちまけて、阿女をきれいにくれろといふのだ、それをとやかうごたくをつき、心の變つた阿女とも知らず、おらが名に呼ぶくらやみの恥を世間へふれるとは、丑よりのろい鼻の下、二本棒たァわれがことだあ。

重助　え〻馬鹿なことを言やあがれ、女房が間男をしたかしねえか、知らねえやつがあるものか。

丑藏　それ〳〵それが鼻ッたらしだ、知らぬは亭主ばかりなりたあ、そこの事をいつたものだァ、だめなことを言やあがるな。

百一　これ〳〵丑藏何をいふ、知らぬが亭主ばかりといふが。

二　一ッ村にかうして居ながら、おらたちさへ知らぬ間男。

三　いくら手めえが言ひがけしても、こつちの女房に限つては、

四　浮氣な心のねえことは、村中一統證人だぞ。

丑藏　え〻間拔けのつらのわれたちに、知れるやうな間男を、なんでおらがするものかえ。（ト此内下手

より、以前の慶十郎出て、此體を見て下手の腰障子のかげへはひろ、丑藏はおしげを見て思入あつて、）これおしげ、もうかうなつたら仕方がねえ、おらと疾からい丶仲だと、爰へ出てぶちまけろ。

しげ　あれあのやうな憎いことを、妾や悔しい、悔しいわいなあ。

重助　もし名主さま、どうぞあなたのお計らひで、よろしいやうにお捌きを、お附けなされて下さりませ。

治左　いや必ず心配さつしやるな、わしが眼の黒いうちは、こいつにごたくはつかせませぬ。（ト丑藏の傍へ來り、）やい丑藏、わりやあどのつらでそのやうな、大それたことをぬかす。

丑藏　どのつらでも言やあしねえ、此のつらで言ひますのさ。

治左　え丶、あの、爰な恩知らずめが。（ト合方きつばりとなり、）こりややい、改めて言ふには及ばねえおのれが親の丑右衛門は、元鳥越が宅に勤めて居て、召し遣うたる縁により、ならずものとは知りながら、是れまで度々おのれをかばひ救うたことは忘れはせまい、數へて見れば三年あと、押借りをして此村の、堺屋といふ質屋の主人に手疵を負はせた其科で、お代官へ召し取られすでに島へもやられるところ、此の治左衛門が初筆になり村内一統御地頭へお慈悲願ひに出たればこそ、遠い島へもやられずに、此の大和一國を構ひ者にて去年の暮、やう〳〵明るい娑婆へ出て、

命を全うしてゐるのを有りがたいと思はずに、またぞろ當所へ立ら寄つて、無法無體のいひがゝり、それではわれは濟むまいがな。

丑藏　いや其の恩は知つてゐる、なに私だつて人間の皮を冠つてゐますから、お構ひ者の證據にやあ邪魔になつても一足づゝ、草鞋を腰に付けてゐますが、色事ばかりやあ別なもので、此の三月花見の時言ひ約束をした阿女が、寢返りをして今になり、つき出し者にすると思やあ、たとひ命をさし出すまでも、構ひの場所へ立ちよつてごたくをつきたくなるのが情合、業がにえてなりませんが、おまへさまに出られちやあ、おらもなんだかこそばッたく、言ひてえことも蟲をこらへ、おとなしくして歸りますから、手切れを取つて下せえ、それでかんべんしておかう。

作藏　えゝ、あとかたもねえ事を言ひかけ、手切れを取つてくれろとは、どこまでふてえか數が知れねえ、構ふことはござりませぬ、おかまひなされず旦那さま、つまみ出しておやんなせえ。

百一　それがいゝ〳〵。

百二　どれ、おらたちが

百姓四人　つまみ出して。（ト立ちかゝる。）

丑藏　えゝ、だめなことをしたが最後、わいらも牢へ抱いて行くぞ。

百姓
四人 やあ〳〵。（トびつくりして後へさがる。）
治左 もう料簡がならぬわえ。
ト立ちかゝる、爰へ下手の障子のかげより、以前の慶十郎出て、治左衞門をとめて、
慶十 あいや船木氏、お待ち下さい。
治左 やゝあなたは神谷の、
皆々 先生さま。
ト是れを聞き、丑藏薄氣味惡き思入、合方きつぱりとなり、慶十郎前へ出て、
慶十 これ若い衆、大きな物へ水を一ぱい下さい。
又作 へい〳〵畏りました。
トどんぶり鉢へ水を汲み、盆へ載せ出す、慶十郎是れを持ち丑藏の傍へ寄り、
慶十 いやなに丑藏殿とやら、まあ此の水を飲まつしやい。
丑藏 なに、おらに水を飲めとは。
慶十 委細の樣子は先刻より、後ろへ參つて承知いたしたが、こなたは大分熟醉なし、どうやら前後を忘れし樣子、それゆゑ手前が手をおろし、すゝめる水は生醉の、取り亂したる本性をあとにて思

やかう言はぬため、是れでさめずばまだ外に、水よりつめたき氷の刃。

丑藏　え〻〻〻。

慶十　まあ此の水を飲んだがよい。（ト是れにて丑藏思入あつて、）

丑藏　折角の思召しだ、御造作になりませう。（トどんぶりを取つて水を飲む、皆々此體を見て、）

治左　今まであばれた丑藏めも、

作藏　先生のお顔を見て、

重助　どうやら樣子のかはりしは、

しけても調法な酒の醉、

百一　こ〻らが本性、

百姓四人　たがはずだ。

丑藏　え〻い、醉ざめの水といふものア、いつ飲んでも惡くねえ。やい丁松、もう一杯くれ。

丁松　あんまり飲んでまた晩に、寢小便でもしなさんな。

丑藏　え〻、手前ぢやァあるめえし。

ト丁松柄杓へ水を汲んで出て、どんぶりへあけてやる。丑藏づう〳〵しく水を飲んでゐる。慶十郎思

入あつて欄へ腰をかけ、

慶十　さて丑藏どの、失敬だが、それへ出さつしやい。

丑藏　あの、おらかえ。

慶十　いかにも。（ト丑藏思入あつて前へ出る。）

丑藏　改まつて、何ぞ用かな。

慶十　されば手前もこなたには、初めて面會いたすゆゑ、委しき事は存ぜねども、承れば是れにござる治左衛門殿のお宅に、元奉公をいたされたる丑右衛門とやら申す仁の、こなたは悴といふことぢやが、手前は當今此地へ參り、いさゝか武術の指南をいたす神谷慶十郎と申す者ぢやが、まづさし當る論はさしおき、凡そ人間たる者はたま〳〵此の世へ產れ出て、父母の丹精養育受け、そも〳〵物心のつく頃より、善惡の二道に立ち別れ直ぐなる道へ行く時は生涯その身を安泰にて定まる齡のあらんかぎり、此世を明るく送れるを、其身の心たゞ一つで、曲れる道に踏み迷ひ果ては僅かの定業も待たずして命をちゞめ、死しての後まで惡名を、此世へ殘して亡き親の名まで穢さにやならぬといふは、さて歎かはしき事かと思ふが、こなたは何と思はつしやる。それがとつくと承りたい。

ト是れにて丑藏思入あつて、

丑藏　なんだかこりやあ寺へ行つて、說敎でも聞くやうだが、まづおらなぞの料簡ぢやあ、人間僅か五十年二十五年は寢て暮し、其內晝寢と居眠りを引けば僅かな一生だから人はの めつ て死なうとまゝ、おらさへよけりやあそれでいゝと、うめえ物はたんと食ひ、してえ事はさんざして、酒と女で食傷して、死んだら定業だと心がけて居ますのさ。

慶十　さゝ其の望みなら猶のこと、惡い心を改めて其身の家業を精出して、かせいだらば若いうちは、辛いやうでも年をとりいくらも樂が出來るであらう。それを家業もはげまずに、太く短く世の寶をむさぼらうと してや りそこなひ、明るい體をくらやみと、人のいやがる牢へ行き、三度の食も餓ゑかつゑ、夜の目もろく／＼寢られぬ上、はては野末にかばねをさらし、此世からなる淺ましい最期を送るは身から出た、銹とはいへど歎かはしき、哀れむざんなことではないか。

丑藏　そりやあ體へひゞたけの入らぬときなら腕を組んで、思案をしかへることもあるが、入墨者の所構ひで、どうで細つた此首に、人の嚊と間男すりやあ、知れねえやうでも天知る地知る、傍に亭主の居るうちは、いつか一度は知れるから、それよりいつそぶちまけて、嚊をくれるかさもなくば、手切れでもふんだくつて、うめえ酒でもたらふく飲むのが上分別といふものだ、親切らしく

遠廻しに異見をしたとてだめ事だ、お氣の毒だがおいて貰はう。

ト是れにて慶十郎思入あつて、

慶十　すりや、どうあつても間男を、したゆゑ、命をさし出しても、

丑藏　なあに、生かしておいて亭主野郎に、阿女を抱き寝させるより、一緒に切られて死んだ方が、はるかにましと思つてゐるのさ。

慶十　何さまこれは、三つ子に淺瀬。

丑藏　えゝ。

慶十　いやさ、三つ子の魂百までと、あくまで根強きその詞、しからば異見はいたさぬが、間男をいたしたなれそめは、いつ頃なるかそれが聞きたい。

丑藏　そりやあ今年の三月半、花見の歸りにちよくつたのさ。

慶十　してまた當所を構はれしは、いつ頃なるか、それが聞きたい。

丑藏　それは去年の十二月、上にて大赦を行はれ、

重助　十が九つ遠島と極りしところ仕合せよく、

作藏　所構ひで重たゝき、百脊負つて追拂はれ、

しけ　悪い人ゆゑ誰一人、引取りてのないところをば、

百一　此の名主さまがお頼みゆゑ、

百二　村中よつて、

皆々　引き取りました。

慶十　さすれば間男を表向きに、地頭へ持ち出す其時は、構ひの場所へ立ち入りし、重き咎めは受けるとも、間男のかどは虚説となり、お取り上げにはならぬはず。

丑藏　えゝ。

慶十　さゝそこが天下の善悪を見分ける上の決斷所、横に車を押さうとも無理は通らぬ前後の相違、それも知らずに命をさし出し、おのれと罪を求めるは曲れる道に迷ふがゆゑ、思へば不便な口許思案、爰の道理を辨へて直ぐなる道へ心をよせ父母に受けたる身體髪膚、粗末にいたしてむざ／＼と失ふやうな無分別は、どうか出したくないものと、手前は思ふがこなたはどうぢや。

トやはらかくいふ、是れにて丑藏思入あつて、はたと手を打ち、

丑藏　いや、おらも是れまで悪事を働き、人の異見も度々聞いたが、いつでも極つたいひぐさで、耳から耳へつんぬけるが、劍術つかひの先生がこわもてなしで和らかに異見を加へて下さるにやあ、

實の事こたへました。

慶十　しからば身共の理解がわかり、少しは胸に落ち入りしか。

丑藏　落ち入つたの落ち入らねえのと、そんな段ぢやあござりませぬ、おらが樣なろくでなしを、それほどまでにおめえさまが、親切にいつて下さるかと今といふ今氣がついたら、有りがたいやら勿體ねえやらで、親が死んでも泣かねえ目に、淚がしんでまゐりました。

ト淚をかくして目をこする、丁松是れを見て前へ出て、

丁松　やあ丑藏が泣き出した。をかしいな／＼。

ト手を叩いて笑ふ、慶十郎思入あつて、懷中より金を出し紙に包み、

慶十　これ丑藏どん、さうまたこなたが異見を聞き、改心すると言はつしやれば、手前においても悦ばしい、こりやいさゝかの金子だが、他國へ立ち退く路用にして、いづれへなりと身を落ち着け、誠の人になるための、元手金にしてくりやれ。（ト金をさし出す、丑藏是れを受取り、）

丑藏　なに、此の金をくれさつしやるとか。

慶十　はて、構ひの場所を立ち退くには、金がなくては心細い。（ト丑藏開き見てびつくりなし、）

丑藏　そんなら五兩の路用まで、

慶十　異見の印を納めておきやれ。
丑藏　是れを受けちやあ濟みませんが、おつしやる通り他國へ行くにやあ、何より金が先きに立ち一文なしぢやあ困りますから、お詞にあまへましてお戴き申します。（ト押しいたゞき懐ろへ入れる。）
治左　理につめられて仕方なく、改心するとはいふものゝ、
重助　持つた病ひに又ぞろや、悪事をするは知れたこと、
作藏　その時却つて先生の、お顔をよごさぬその先きに、
しげ　やつぱり縛つて御地頭さまへ、
百一　つき出す方が、
百姓四人　よかんべい。
慶十　はて、たとひ悪事をする者でも、性は善なるものなるゆゑに、是れで大概直るであらう。
治左　してまた直らぬ、
皆々　その時は。
慶十　此後當所へ立ち廻り、亂暴いたす其時は、手前の方へお知らせ下さい。其折こそは代官所へ捕縛いたしてさし出さん。

治左　思へばお慈悲な先生の
重助　おあつかひにて仕合せな、
作藏　命を拾つたあぶれもの、
しけ　此後ともに間男の、
百一　まの字をいつても、
百姓四人　承知せぬぞ。
丑藏　是れまで惡さをしつくして、是れにござる皆さんにも、御厄介になつたおらだからさう思はつしやるも尤もだが、向後心を入れかへたから、何で惡さをいたしませう、名主様を始めとしてこちらの御夫婦百姓衆。お腹も立たうが丑藏が、是れまで惡さをしましたは、氣違ひ水の酒の上だと勘辨してくれさつしやい。
慶十　その料簡に相成つたら、此後酒はつゝしむがよいぞ。
丑藏　お前様の御異見で惡さの念も酒の醉と、一緒にさめた上からは、金毘羅さまへ願酒して、もう甘酒も飮みませぬ。
治左　しからばけふを限りとして、早く常所を立ち退けよ。

丑藏　さやういたすでございます、それぢやあどなたもお達者で、長くお世話になりました。

ト しを／＼として立ち上る、爰へ又作出て、

又作　おい、行くなら酒の勘定を。

丑藏　違えねえ、さうであつた。（ト件の金の内より一歩出して、）さつきちろりでくらはした、あやまり賃につりをやるわ。

又作　それぢやあ二朱からあるつりを。

丑藏　こなたにやるから、取つておきやれ。

丁松　それぢやあおいらも、打たれりやあよかつた。

丑藏　おゝ丁松、雪催ひで寒いから、風をひかねえやうにしろ。

丁松　なあに子供は數の子だ。

丑藏　かずの子ぢやあねえ、風の子だらう。

丁松　なんでもその子だ。

丑藏　こりやあ大きに、おやかましうございました。

ト 誂への合方になり、皆々へ辭儀をなし丑藏しを／＼と下手へはひる。此内雪おろしになり、日覆よ

り雪降り出す、皆々是れを見て、

慶十　二三日あとから催しゐたが、こりやあちら〳〵降つてまゐつた。

治左　雪の降るのは豊年の貢と唱へ、百姓はとも〴〵悦ぶことながら、

重助　その日暮しの小商人や、外を出歩く生業は、

作藏　道が惡さに難澁して、是れを苦にやむ人心、

しげ　悦びあれば愁ひありと、夕暮近くの降り出しゆゑ、

百一　今夜はたちまち、

百姓四人　銀世界、

慶十　あしたはつもる雪の日に、

丁松　あれも人の子樽ひろひ、

又作　えゝ生ぎゝなことをいふな。（ト丁松のあたまをはる。）

丁松　おつと、打つたらつりをくんねえ。

又作　がきのくせに、慾ばるな。

ト又雪おろしになり、重助おしげ二重へ上り、あと皆々軒下へはひり居る。此時上手より寺男傳介下ゆ

駄をはき、蓑を引かけ竹の子笠を冠り、白張の傘を一本かつぎ出來り、舞臺を通り花道の方へ行きかける、治左衛門見て、

治左　こりや／＼、そこへ行くは養福寺の下男傳介でないか。（ト是れにてふりかへり）

傳介　おゝ、これは名主の旦那さま、只今あなたのお宅へ參るところでござりまする。

治左　それは丁度幸ひであつたが、何ぞ急な用でもあつてか。

傳介　へい、此雪の降りますので、傳介はこつぱいでござります。

治左　なにこつぱいとは、いかなるわけぢや。

傳介　まあ聞いて下さいまし、二三日あとから雪が催しこつちは持病の疝氣が起つて、えらくやめてならねえのに、和尚さまは一人でよろこび、雪が降つたら歌俳諧の御連中を呼びあつめて歌の稽古を催すといつて、待ちに待つて居るところへ、今方からちら／＼降つて來たので、氣違ひのやうに騷ぎ立て、座敷を掃除しろそれ傳介、火をおこせそれ傳介、茶菓子を買つて來いやれ傳介、途中で歌の連中に逢つたら、直に來るやうにと、かうして傘までかつがせて、此の寒いのに使ひに出され、握り睾丸も出來ましねえ。

治左　それでは直ぐに參らうから、外の連中を廻るがよい。

傳介　さうして下さらば和尚さまが大悦びだ、そんなら傘を置いてまゐります。
治左　いや／＼傘は此家で借りれば、外の連中に貸してやるがよい。
傳介　いえ／＼邪魔でなりましねえから、どうぞさうして下せえまし。（ト件の傘を置いて、）やれ／＼いゝ所でお目にかゝりました。（ト傳介花道へはひる。）
重助　それでは是れから、名主さまには。
しげ　お歌の會に、養福寺へ。
治左　是れも風雅の道と思へば、片時も早く行うたうござる。
作藏　さやうなら私が、お送り申してまゐりませう。
治左　いや／＼、手前は行くに及ばぬ、宅へ歸りて此事を、峰に話して置いてくりやれ。
作藏　とはいへお一人雪中に、人里放れし七面坂、どうやらお案じ申しますれば。
治左　はて、雪の景色を見わたしながら、一人歩きも樂しみぢや。

ト此内慶十郎思入あつて、氣をかへ、

慶十　して今晩のお歸りは、定めし夜更になりませうな。
治左　歌戰の樣子で、事によれば一泊するかも知れませぬ。（ト傘をさし立上る。）

重助　さやうなれば、
皆々　旦那さま。
治左　積らぬ内に先生も、早く御歸宅なされませ。
慶十　さやういたすでござりませう。

ト治左衞門上手へ行きかけ、石につまづき下駄の鼻緒切れる。

作藏　こりや旦那さま、お鼻緒が。（ト是れにておしげ重助の下駄を持ち出で、）
しげ　是れをおはきなされませ。
治左　それではどうか、貸して下され。（ト下駄をはきかへる。作藏氣にかゝる思入にて、）
作藏　どうやら心に。
治左　や。
作藏　どうやら爰まで降り込みさうだ。（ト店先にて思入、）
治左　どりや、集會をいたさうか。（ト雪おろし、唄になり、治左衞門傘をさし、上手へはひる。慶十郎思入、）
慶十　しからば手前も積らぬ内、早く歸宅いたさうか。
重助　別に御用がござりませずば、何はなくとも粗酒一獻。

しげ　ほんにお禮が申したければ、お話しなされて下さりませ。
慶十　いや〳〵手前は不調法ゆゑ、酒の馳走は無用にさつしやれ。
重助　それではせめて番茶を入れ、
しげ　お菓子をとつてさし上げませう。
慶十　その御馳走より宅へ參り、早く炬燵へ入りたうござる。
重助　なるほど、それもお樂しみ。
しげ　思はぬ事にて今日は、
重助　多分の金子をお出させ申し、
しげ　お氣の毒さまでござりまする。
慶十　はて、それも心をため直す、異見のための金子と思へば、少しも惜しいとは思ひませぬ。
作藏　はて、先生は又格別、
百一　心の廣い、
百姓四人　ものぢやなあ。
重助　それ、先生にお傘をあげろ。

又作　へい〳〵、畏りました。（ト又作番傘を持ち出で、）お傘はこれに。

ト出す、此内慶十郎懐中より、黒縮緬の頭巾を出し、

慶十　はて、頭巾があれば、傘には及ばぬ。

又作　それでも雪が、お體へ。

慶十　いや、雨とちがつて、仔細はござらぬ。

重助　さやうなれば、

皆々　先生さま、

慶十　どなたも、御免下されい。

ト頭巾を冠る、唄になり、慶十郎花道へ行き思入あつて、足早にはひる。皆々是れを見送り、

作藏　どれ、私もお暇いたしませう。

重助　まあ、一杯飲んで行かつしやい。

作藏　いえ、さうしては居られませぬ。

丁松　もし、此の傘をさしてお出でなされい。

作藏　いえ、それには及びません。

百一　そんならこなたは、
百姓四人　歸らつしやるか。
作藏　どなたも御ゆるりとなさいまし。（ト雪おろしにて、作藏花道へはひる。）
又作　いや借りることの嫌ひな人は、傘まで容易には借りて行かねえ。
重助　そりやあ又作のいふ通り、一番借りいゝ酒屋の店、此の村内で貸しのないのは、名主樣と先生ばかり、外はたいてい置き買ひに、貸しのない内は一軒もない。
百姓四人　ハツクシヨ。
重助　おゝ是れは皆の衆粗相をいひました、どうぞ氣にさへて下さるな。
百一　いや／＼決して氣にはさへぬが、酒屋ぐらゐ貸しにならないと、儲かる商賣はないさうぢや。
百二　違えねえ／＼、地酒の中へ水を割り、それを計つて賣るのだから、こりやあ何の事はねえたゞ取りだ。
百三　それゆゑ少しの引のこりは、借り置かねえでは割に當らぬから、ちつとは借りるもよかんべいっ
百五　それを知らずに几帳面に、晦日々々に拂ひをするのは、ばか／＼しいといふものぢや。
又作　これ／＼村の衆、そりやあ大違ひだ、拂ひをちやんとさつしやれば、何で水を割りませう。それ

がうそなら現金で一升買つて見さつしやい、いつもの酒とは違ひます。

百一　なるほどこりやあさうかも知れぬ、一合賣りでつぎをまけたり、引のこりの貸しがあつては、水でも割らずば引合ふまい。

重助　まあ何しろ皆さんへ、お禮に一口あげますから、利酒をして下さいまし。

百一　そりやあ有りがたい。

百姓四人　よばれますべい。

しげ　これ又作、お酒をつけなよ。

又作　畏りました。（ト暮六つの鐘鳴るゆゑ、）

重助　おゝ入相だ、あかりをともせ。

しげ　あい／＼。

ト暖簾口へはひる、爰へ又作ちろりに酒をつけ、皿へ數の子を入れ、膳へ附けて持つて出で、

又作　丁松ぢやあございませんが、お肴の數の子だ、私の腹の痛めないことだ、たんと飲んでおいでなさい。

百一　それでは重助どの、よばれますぞ。

重助　さあ〳〵私が自慢の酒だ、飲んで見て下さいまし。
百一　どれ、それぢやあ年役に私から先きへ始めよう。
ト百姓四人緣へ腰をかけ、一人は酌なし、一人は飲むことよろしく、
百一　いや一杯ぢやあ分らねえ、もう一杯ついでくれ。
重助　どうでござるな〳〵。
重助　どうでござる〳〵。
百一　まだ分らぬ、もう一杯くれ。
百二　これ〳〵田五作、いゝかげんにしろ、まだ分からねえと、一人で飲むとはづるい男だ。
百三　分らねえけりやあこちとらが、飲んで見れば分ることだ。
百四　さあ、猪口を廻した〳〵。
百一　さては腹の中を、見拔かれたか。（ト是れにて四人酒を飲み、思入よろしくあつて、）
百二　なるほど自慢の酒ほどあつて、いつもの酒とは口が違ひ、
百三　一本生の酒だと見えて、是れではあたまへのぼりさうもない。
百四　なんでも是れから現金に、なるたけ借りはこしらへぬことだ。

百一　そこが浮世のたとへの通り、地酒の沙汰も金次第だ。
百姓三人　いや、惡いしやれだ。
百姓四人　はゝゝゝ。（ト暖簾口より、おしげ行燈をさげて出で）
しげ　皆さん、たんとあがつて下され。
百一　いや酒がいゝので利がよく、
百二　十分馳走になりました。
丁松　はい、おかはり。
百三　いや、かはりとは有りがたい。
ト酒を飲み居る、重助帳場の格子の内へはひり、帳合をしながら。
重助　いや改めていふではないが、此の村内の名主さまも、あの通りよいお人だが、今歸らしやつた先生ぐらゐ、よいお人はまたとあるまい。
しげ　ほんにお前のいふ通り、劍術柔術はいふに及ばず、武藝は何でもお達しなされ、其上お弟子に學問をお敎へなさるといふことだが、なまなかの學者などは叶はぬとやらいふ噂、お強いお方にひきかへて、お情深く男もよし。

百一　これ〳〵かみさん、よさつしやい、そんなに褒めると丑藏のやうな、又難くせをつけられるぞ。
重助　いや、あのやうなお人が女房に惚れて下さらば、話し合ひできれいにやります。
百二　それぢやあものは相談ぢやが、わしやあ去年嚊に死なれ、一人ものぢやがどうであらう。
百三　はゝあ、さてはおぬしも爰のかみさんに、疾うから惚れて居ると見えるな。
百四　いや、おらも實は首ッたけだが、誰も心は違はねえものだ。
しげ　えゝもう、常談もたいがいになさんせ。
丁松　爰に居る又作どんも、おかみさんに惚れて居らあ。
又作　えゝ、よけいなことをいやあがるな。（トあたまをはる。）
丁松　ほい、又つりの貸しが出來たぞ。（ト重助こなしあつて、）
重助　おゝつりといへば丑藏が、先刻拂ひをして行つたぢやねえか。
又作　南無三、それを思ひ出されたか。
しげ　てもまあ、づるい男だなう。
ト此時ばた〳〵になり、上手より以前の傳介走り出來り、
傳介　これ〳〵村の衆、大變だ。

重助　こなたはさつきの使ひの衆。
しげ　てもぎやうさんに、大變とは、
皆々　どういふわけだ〳〵。
傳介　今俳諧の連中へ、ぐるりと廻つて歸りがけ、七面坂を通りかゝると、名主の旦那が切り殺されて雪の中に倒れてござつた。
皆々　やあ〳〵〳〵。（トびつくり思入、是れより早い合方になり、）
重助　そりやあなるほど、大變だ。
しげ　そりやほんまの事かいなあ。
傳介　ほんのうそのと一緒に行つて、切られて居るを見さつしやい。
百一　こりやあかうしては、
皆々　居られぬわけだ。
重助　それぢやあ私は名主樣の、内へ知らせに行かうから、又作と一緒に皆の衆、七面坂へ行つて下さい。
百姓四人　承知しました〳〵。

又作　ちえゝ、今一足早くんば。

百姓
四人　どうしたく。

又作　一分の金をづり込むものを。

百姓
四人　えゝ、何をいふのだ。

傳介　さあく、一緒に來て下せえ。

ト傳介先に百姓四人又作ついて上手へはひる。此内重助は身支度して、尻をはしをる。

丁松　雪のあんまり降らねえうち、おいらは水を汲んでおかう。（ト丁松奥へはひる。）

重助　さつき鼻緒の切れたのが、思へばかうなる前表か。

しげ　かうして見れば日頃より、善根なされしかひもなく、

重助　つもる深雪の其中を、血汐によごす御最期は、

しげ　どういふことか知らねども、昨日は今日とかはり行く、

重助　告ぐる遠寺の鐘の音も、

しげ　無常を誘ひはかなくも、

重助　是れを思へば浮世とは、あゝよく言つた、

ト兩人顏を見合せるを、道具替りの知せ、

兩人　ものぢやなあ。

ト兩人愁ひの思入、此道具廻る。

（七面坂雪中の場）═本舞臺一面の平舞臺、上下雪の積りし植込の張物、正面上手へ畫心に高二重程の石段、雪の積りし坂道、下の方片蓋の辻堂、一面雪降りの山の遠見、下手能き所に立木、同じく釣枝、舞臺花道とも雪布を敷き、總て吉野郡七面坂の體。爰に治左衞門の吹替の死骸倒れて居る、是れを以前の百姓四人、又作傳介取り附いて介抱して居る見得、雪おろし、木魚入りの合方にて、道具留る。

百一　これ名主さま、氣をたしかに持たつしやれ。

皆々　名主さまいなう〱。（ト皆々聲を高く呼び生ける、皆々死骸の樣子を見て、）

一　これ〱皆の衆、もうだめだ、咽喉にとゞめがさしてあるから、呼んでも氣のつくはずがない。

二　えゝこれまあ、何者が仕業だか、肩からかけて後ろけさに、むごたらしく斬つた樣子。

三　なんでもこりやあ意趣遺恨で待ちかまへ、ばつさりと斬つた仕事に違えねえ。

四　ふだんあんなに慈悲深いから、人に恨みを受けるやうな悪いお人でなかつたに。

又作　どこのどいつが此様に、むごたらしく斬りやあがつたか。

傳介　さぞかみさんや小旦那が見たら、悲しいこんだんべい。

百一　えゝ、氣の毒な、

皆々　こんだなあ。

ト雪おろし合方になり、花道より以前の作蔵、ばつちよ笠を冠り、役提灯をつけ先に立ち、あとよりお峰、丸髷名主の女房の拵へ、下駄がけにて傘をさし出る、あとより治三郎同じく下駄がけ傘をさし出る、此のあとより伯父船木甚兵衛更けたる拵へ、綿入れ羽織下駄がけにて出來り、花道にて、

甚兵　今朝から大分催したが、たうとう雪に降り込められ、參り合せし其所へ、重助どのが宙を飛び、治左衛門が手あやまちせしと、知らせにびつくりとりあへず七面坂へ參りしが、たしかに辻堂の邊と申すことぢや。

作藏　もしおかみさま、向うに大勢村の衆が寄り集つてゐる樣子、少しも早く參りませう。

お峰　どうぞわづかのお怪我にて、あとの療治の叶ふやう。

治三　斬られながらも急所をよけ、苦痛をこらへてござればよいが。

甚兵　何にもせよ心ぜき、ちつとも早くあれへ參れ。

ト右の合方にて、皆々舞臺へ來る、百姓皆々此體を見て、

百一　や、こなたは名主の伯父御とおかみさま。
百二　あゝ、小旦那も御一緒にか。
百三　あゝ悲しい事になりました。
百四　さぞ愁傷でござりませう。
又作　てもお氣の毒な、
皆々　事ぢやなあ。

ト舞臺の皆々わッと泣き伏す。是れを聞き、お峰さてはといふこなしにて、

お峰　そんならもしや、旦那さまは、
治三　深手をお負ひなされしか。
又作　えゝ、深手ならまだよいが、
傳介　とつくに息が、
皆々　絶えました。

甚兵
作藏　えゝ。(トびつくりなす。)

お峰
治三　どれ、どこに。(ト兩人治左衞門の死骸の傍へ來りすがりながら、)

お峰　おゝ、ほんに身内も冷たうなり、血汐に染る此亡骸。

治三　とゞめがさしてあるからは、もうお療治は叶はぬか。

お峰　こりやまあ、どうせう〳〵ぞいなあ。

治三　えゝ情ない事ぢやなう。

ト兩人死骸へ取り附き、泣き伏す。是れにて甚兵衞作藏も涙を拭ひ、

甚兵　さゝ其お歎きは尤もだが、今更いくら泣いたとて、再び戻るわけでもないが、ひよんな事になつたなあ。

作藏　たゞ殘念なは養福寺へ、先刻お供をしたなれば、かうした事にもなるまいに。

百一　それも風雅の道なれば、一人で行くと言はしつて、

百二　作藏殿が一緒に行かうと、いふのを無理にふり拂ひ、

百三　たつた一人で歌の會へ、行かしつたのが此間違ひ、

百四　わしらも今まで此の死骸の、あたりに積る白雪が、

又作　眞赤にとけて流れるほど、涙をこぼしてゐたなれど、

傳介　泣いてかへらぬ事なれば、あとの體を大事にさつしやれ。（ト是れにてお峰顏を上げ、）

お峰　いうてかへらぬことなれど、日頃歌道がお好きにて夜の更けるのもおいとひなく、養福寺さまへお出でゆゑ、途中さんどで間違ひでもあつてはならぬと御異見を、度々いへどお用ゐなく、人には癖のあるものゆゑ氣にはゆるせ敷島と、いひはなしたるお詞に、それなり押して御異見も、いはずに居たがけふの今、かうしたことになつたるか。

治三　かやうな時にお傍に居て、お役に立てるそのために日頃習うた劍術も、むだとなりたる此御最期敵はきつと私が尋ね出して討ちますから、今の不孝はお父さま、お許しなされて下さりませ。

甚兵　おゝ、健氣にもよう言うた、流石は神谷先生に敎へを受けし治三郎、人は氏より育ちぢやなう。

作藏　その若旦那のお悔みより、わしが悔みは又一倍、無念で／＼なりませぬ。

百一　わしらもとも／＼。

皆々　無念でござる。

お峰　これ旦那さま、愚癡なやうではござりまするが、せめてのことに御一言、物おつしやつて下さりませ、あなたを便りにはる／＼と東のはてから此國へ、參りましたるかひもなう、かうしたはか

ないお別れは、いかなる前世の宿業なるか、ならうことならわたくしもあの世へお連れ下さりませ、いつそ死にたうござりますわいなあ。

治三　いえ〳〵何でおまへさまを、お死なせ申してよいものぞ、實の父さま母さまを先立てました上からは、大事の〳〵一人の母さま、どうぞお命存へて便りになつて下さりませ。

甚兵　そりや治三郎のいふ通り、三年あとに先妻が病死いたして又ぞろや、治左衛門が計らずも横死を遂げし上からは。

作藏　是れからあなたが若旦那を、お守りなされねば、數代續きし當村の名主のお家が絕えまする。

お峰　それにつけても旦那樣を、殺せしやつは何者ぞ。

治三　心當りがござるなら、どうぞ敎へて下さりませ。

作藏　さあ證據なければ是れぞといふ、慥かなことはいはれねど、先刻酒屋の店先であばれてゐたるあの丑藏。

百一　お構ひ者ゆゑ名主さまや、わしらが駈けつけ恥しめて、

百二　村境までつまみ出して、追ひ拂はうとしましたところ、

百三　神谷樣が駈けつけて、異見を加へ金をやり、

百四　けふから心を改めると、すご〳〵歸つて行つたれど、
又作　根が惡黨の丑藏ゆゑ、さつきの遺恨をはらさうと、
傳介　待ちぶせしたかも知れぬわえ。（ト是れにてお峰こなしあつて、）
お峰　嬉しやそれで、手がゝりが。
治三　直にお上へ願うで出て。
お峰　はて、たしかにそれとは言はれぬわいなう。
ト愁ひの思入、合方雪おろしになり、花道より以前の慶十郎、足駄がけ長合羽、澁茶の日傘かさし、手丸提灯をつけ、早足に出來り、花道にて舞臺を見て、
慶十　それに居るのは、治三郎か。
治三　や、さうおつしやるは、御師匠さま。
お峰　なに神谷さまが、
皆々　お出でとな。
ト是れにて慶十郎舞臺へ來る、甚兵衞こなしあつて、
甚兵　これは〳〵神谷氏には、雪中のおいとひなく、よくぞお尋ね下された。

慶十　貴殿は伯父御甚兵衞殿か、計らざる凶變出來、さぞ御心配にござらう、只今船木のお宅から知らせの使ひに取りあへず、駈けつけ參りしが、驚き入つたる椿事出來、して〳〵御親父治左衞門殿の手疵は重手か薄手なるか、承りたい如何でござる。(トせいていふ、お峰前へ出て、)

お峰　そのお尋ねに預かりまして、申し上げるも涙ながら、最早あへなくあの世の旅へ赴きましてござります。

慶十　なに、船木氏には御最期とな、ほい。(トびつくり思入、治三郎前へ出て、)

治三　どうぞお慈悲に御師匠さま、敵を討たせて下さりませ。

慶十　さては先刻重助殿の、店にてお別れ申せし時、何となく治左衞門殿の、影の薄きは合點行かずと心にかゝりをつたるが、かくなる知せであつたるか。

お峯　そんなら最前旦那さまの、樣子に自然と御最期の、

治三　かけ身も薄く見えしとか。

百一　思へばあはれな、

皆々　事ぢやなあ。(ト皆々涙を拭ふ、甚兵衞作藏前へ出て、)

甚兵　さて神谷氏、思ひもよらぬ事件出來、顚倒なして申すことも、前後は定めしござらうが、ふとし

た御縁で横死せし治左衞門とは格別の御別懇なる間がら、殊更もつて治三郎と師弟となるも何ぞの約束、何卒是れなる治三郎へ力を添へて治左衞門を、殺害なしたる敵を尋ね、助太刀なしてとも〳〵に、討たせてやつて下さるやう、此の甚兵衞の一つのお頼み、承引なして下されい。

作藏　其時こそは作藏めも、及ばずながら旦那さまの、草葉のかげの御無念を、おはらし申す心にてお手傳ひいたしたければ、神や佛をせがみましても、敵の行方を尋ね出しお知らせ申すでござりませう。

慶十　いかにも其儀は承知いたした、かゝる事件に至らずとも、過ぎし頃より當村へたよつてまゐり船木氏に一方ならぬ恩義に預り、いつかは是れを謝さんものと朝暮忘却いたさねば、助太刀いたすは願ふところ、してその敵は何者なるか、未だ相手は知れませぬか。

お峰　その手がゝりもあらはには、たしかにそれと申されねど、

治三　心當りがござりまする。

慶十　それは何より悦ばしい、あとにて篤と承はらんが、して代官所や親族方へ、知らせの人を出されしか。

甚兵　いえまだ其儀も、火急ゆゑ。

慶十　しからば直に手分けをなし、手落ちのなきやういたされい。

百一　それではわしらは近村の、

百二　親類方へ、

百姓四人　知らせませう。

傳介　この傳介は和尚さまへ、直ぐに歸つて此事を。

又作　わしは死骸を引取りの、駕籠をたのんでまゐりませう。

作藏　また作藏は代官所へ、

甚兵　そんなら皆の衆、御苦勞ながら。

治三　よろしうおたのみ申します。

百姓皆々　やれ〳〵氣の毒千萬だ。

ト雪おろしになり、百姓四人作藏ついて花道へ、又作傳介は上手へはひる。あとに慶十郎、お峰、甚兵衛、治三郎殘り、お峰こなしあつて、治三郎のさして居る一腰を手早く拔きとり、

お峰　さうぢや。（ト死なうとする、治三郎甚兵衛あわてゝ止め、）

甚兵　あゝこれあぶない、何ゆゑあつてお峰には、

治三　此場で死なうとなされまするぞ。

お峰　はて、丁度折よく神谷さまが、お出でなされて夫の敵、討たせてやらうと受合うて、下さる上は、用なき此身、安堵いたしてあの世へ行き、夫と一緒に居る心。

ト是れを聞き、慶十郎感心の思入あつて、

慶十　はて貞節なる志し、誰しも惜しむ一命を、捨てゝ夫へ操を立つる誠の道は顯れたり、さはさりながら若年の子供を一人あとへ殘し、いまだ敵の在所も知れず、あの世へ行つて亡き夫へ、手向けの種の土産があるまい。

お峰　えゝ。

慶十　さ、その一命を延はりて、追善供養をいたせし上、敵を首尾よく討ちおほせ、草葉の蔭へ手向けなば、死ぬに增したる貞婦の鑑み、早まる場所ではござるまいが。

お峰　そんなら死ぬにも、死なれませぬか。

甚兵　今先生の御教訓、餘所に聞いてはなりませぬぞ。

治三　死ぬのは何卒お母さま、お止めなされて下さいまし。

トお峰是非なきこなしにて止る、本釣鐘、

慶十　誠や生者必滅の、世の習ひとはいひながら、
お峰　昨日までも今朝までも、かゝる事とも白雪の、
甚兵　積る間もなき道野邊に、
治三　消えてはかなき御最期は、
慶十　和歌に心をよせられし、
お峰　實朝公の御他界も、
甚兵　かくやと思ふ夜嵐に、
治三　散らす紅葉の此の血汐。

ト三人件の死骸へ取り附く、此時又雪おろしになり、本釣鐘を打込み、日覆より雪降る、慶十郎是れを見てにつたり思入あつて、

慶十　やがて九代の執權も、
甚兵
治三　えゝ。
慶十　治三郎覺悟。

ト刀の鍔音をさせる。是れにて治三郎ひらりと飛び退き、

治三　めつたに油斷はいたしませぬ。
甚兵　流石はお仕込み、あつぱれ感心。
お峰　どうぞあなたの御助太刀にて。
慶十　やがて敵は、（ト傘を取つて開くを木のかしら、）討たしてやるぞ。
　ト皆々愁ひの思入よろしく、雪おろし本釣鐘、誂への合方にて、

ひやうし幕

大詰

船木宅庭前の場
養福寺繩手の場

［役名――神谷慶十郎、船木甚兵衞、船木治三郎、忠僕作藏、立場酒屋重助、くらやみの丑藏、岩淵九郎藏、酒屋の若い者又作、寺男傳介、百姓。船木後妻お峰、甚兵衞女房お崎、酒屋女房おしげ、召仕おてふ等。］

（船木宅庭前の場）――本舞臺三間の間中足の二重、本緣附、上手一間塗骨障子屋體、正面の錺誂への佛檀、いつもの所枝折戸、此外正面屋根附きの門の裏を見せ、左右土塀、能き所に松の立木、總て

此の道具雪持ち、二重正面上の方一間の床の間、此次地袋戸棚、違ひ棚、下の方白地中形の襖、此上のなげしに捕繩六尺棒など掛けある事、總て壺内村名主宅庭前の體。枝折戸の外より花道へ一面に雪布を敷きつめ、二重に精進の膳部を四人前ほど並べ、銚子杯など取り散らしてある、よき所に手焙り火鉢、平舞臺に前幕の百姓一人醉ひたるこなしにて上手に立ちかゝり、是れを前幕の重助おしげ兩人にて止めてゐる、下手に百姓一人同じく立ちかゝり、是れを百姓二人止めてゐる、此の見得雪おろし在鄕唄にて幕明く。

百一　さあ、極道野郎め。それへ出ろ、かぼちや頭をいがませにやあ、業がにえてなんねえのだあ。

重助しげ　まあ／＼、靜かにおしなされい。

百二　これ夫婦の衆かまはしやるな、なんぞといふとおらが事を、かぼちや／＼とぬかしをるが、われが面が見られたざまか。

百姓三四　これ／＼畑作、まあ待てろな。

百一　あれ年役のおらに向つて、あんなことべいぬかしをる。

重助　はてまあ、下に居さつしやい。（と双方をなだめ下に居させる、合方彈きながしにて）今臺所でわし達は、料理ごしらへをしてゐたゆゑ、委しいことは知りましねえ。

しげ　去年お亡りなされたる、旦那さまの御一周忌に、お前さん方も呼ばれて來て、
重助　お仲間喧嘩をなさるとは、
しげ　どういふ間違ひでござります。
百三　さあ夫婦の衆聞いてくれさつしやい、平にはひつたがんもどきが、田五助の顏に似てゐると此畑作が笑つたので、仲間喧嘩がはだつたのぢや。
百四　おらの面ががんもどきなら、われの面は附合せの椎茸のやうな黑い面だと、言ひ爭そつての此どさくさ、何のたはいもないことだ。
百二　こんなに色は黑くつても、どこやらのあぢがいゝとて小色の一つもする男だ、新田の八郎助の後家のおなべの前へ對しても、だまつて聞いちやあゐられやしねえ。
百一　これ、なぜそんだらおらがことを、がんもどきだとこきやあがつた、かうして名主どんへ呼ばれて來ても、上席へ坐る家柄のおらに向ひ、心安だてもてえげえにしろ。
重助　はてまあそれで分りました、どんな事かと思ひましたら、互ひに顏のざんそうからいひ爭ひして此の間違ひ。
しげ　ふだんと違うて御佛事の御一周忌に呼ばれて來て、喧嘩をしては濟まぬゆゑ、仲をお直しなされ

ませ。

百三 いやもう、ふだん水を割り、安い酒を飲むものが、

百四 たま〳〵呼ばれて利のいゝ、酒を飲んで性を失ひ。

百姓 一二 あんだと。

重助 はて、もう〳〵何もおつしやらずと、

しけ 仲を直して下さいまし。

トよろしくなだめる、合方になり、奥より甚兵衞羽織着流し、お崎前帶女房の拵へ、兩人とも寺參りより歸りし心にて出來り、二重に住ひ、

甚兵 これは村の衆、よう出て來て下された。

お崎 手拵への精進料理、あがるものもあるまいが、

甚兵 ゆつくりと飲んで、

兩人 下されいなう。

百一 これは御一家の、甚兵衞さま。

百二 大きに御造作に、

百姓四人　なりました。
重助　さあ〳〵皆さん、お膳へ附いて、もう一杯お始めなされい。
しげ　お燗がぬるくば、直しませうわいなあ。
百一　いやもう澤山、
百姓四人　よばれました。
甚兵　手傳ひに來た御夫婦に、客あしらひをさせをつて、
お崎　ほんにおてふはどうしたやら、又遊んでゞもゐはせぬか。
重助　いえお女中のおてふ殿は、お臺所で追かけの、
しげ　御膳を焚いてをりますゆゑ、それで爰にはをりませぬ。
百一　ときに、わしらも腹一ぱい、御造作によばれたら、
百二　椎茸づらだといはれぬうち、早く内へ歸るべい。
甚兵　はて、さういはずと、今一獻、
お崎　すごして歸つて下さりませ。
百三　いえ、十二ぶんによばれましたから、

百四　これでお暇いたします。
重助　そんなら皆さん、
しげ　御一緒に。
百一　大きに御造作に、
百姓四人　なりました。（ト百姓四人下駄をはき、技折戸の外へ出て、）
一　いや、やかましやの伯父御が居ては、酒を飲んでもうまくねえ。
三　十分めしを喰つたくせに、まだ田五助は飲む氣と見える。
二　たゞ飲む酒だと醉ひ倒れるまで、飲むのがあいつのくせだから。
一　あんだと。
四　はてもう、喧嘩はおいたがよかんべい。
　　ト在郷唄にて、百姓四人花道へはひる、重助おしげ是れを見やり、
重助　やれ〳〵、是れで生醉ひを一片附け、やう〳〵歸した。
しげ　何の事はない、大風の吹いたあとのやうでござんすなあ。（トあたりを片附けてゐる、）
お崎　久しい馴染に夫婦して手傳ひに來て下され、さぞ佛も悦びませう。

甚兵　いや風の吹いた後といへば、去年の今日もこのやうに、夕暮から雪が降出し、寒い風が吹き廻したが、やつぱり今年も雪が降り、きびしく冷えることではある。

ト手焙りにあたりこなしある。

重助　なるほどさやうでござりました、月日のたつは早いもので、旦那さまの御變死も、つい此間と思ふうち、もう一年になりまして、御一周忌の御佛事とは、夢のやうでござりまする。

しげ　さぞ今日の御佛參も、お寒かつたでござりませうが、よくまあお早く御夫婦樣も、お歸りになりました、さうしてこちらの旦那樣や御新造さまは、まだお寺にお殘りでござりまするか。

お崎　こなた衆夫婦が留守役を引き受けて下されたゆゑ、こちらの夫婦も安心して佛參はしたれども、定めて留守へ村の者が、大勢來て困つてゐようと、治三郎と作藏をあとへ殘してこちらの夫婦も連れ立て今戻りましたが、寒さで肌が凍りましたわいなう。

ト此時正面の襖を明け、前幕の慶十郎お峰兩人、着流しにて出來り、

慶十　衣類を着かへてをりしゆゑ、

お峰　大きに失禮いたしました。（ト合方きつぱりとなり、よろしく住ふ。）

甚兵　さて慶十郎殿、改めいふには及びませぬが、今日の佛が横死の後は何かとこなたの御厄介、諸國

を廻り劍學の修行をなさるゝ御心願ゆゑ、此地に長く足を留め居られぬといふ其お方を、無理にすがつてお頼み申し、治左衞門の後妻たる是れなるお峰を連合に持つて下され、治三郞が十五歳になりますまで後見をして下さるつもりに、まづ一周忌も滯りなく相濟みまして親類共も、一同安心いたしました。

お崎　いかなる宿世の御緣やら、三年以前に箱根山で、今日の佛がお前樣に、危い難儀を救はれしが、御緣となつて其後に、此地へお尋ね下されしを、お引き留め申しまして、半年餘りもたつうちに名主殿には不慮の横死、何卒此家の後見におはひりなされて下されと、親類揃つて一統にお頼み申せど日頃より、お物堅い御氣質に、若い後家の居る家へ後見にはひりなば、世間の人にあらぬ名を、つけられるのが御迷惑ゆゑ、其儀ばかりはひたすらにと、お斷りをおつしやつたを。

重助　道理至極と伯父御さまが、御親類と相談の上お媒人をなされまして、表向きにはこちら樣の御後見になさいまして、お峰さまと御夫婦になされしからは、こちらのお家は萬代不易でござります る。

しげ　どうぞ當所に末長うおいでなされて村内の、お取締りや二つには、若旦那治三郞樣のお世話をなされて下さるやう、及ばずながら私共も、ともぐ\お願ひ申しまする。

慶十　いやもうふしぎな御縁で此家の後見とは相成れど、元より望まぬ富家の郷士、勝手違ひし十露盤も、年貢の納め田地の割方、屆かぬがちにござれども、甚兵衛殿や村内の古い衆の教へを受け、どうやらかうやら今日まで後見をいたしてござるが、片時も早く治左衛門殿を討ちし敵が相知れなば、治三郎に本意を遂げさせ、これを一つの規模となし當所を退身いたさんと、心を碎きをるうちに、めぐる月日に關守なく、早一周忌となり佛事供養を營みまするも、是れ宿縁のなすところと、たゞ治三郎の成長を、明け暮れ祈りをりまする。

お峰　かやう申せばわたくしも、身の言譯に似たれども、御親類方のおすゝめにて、思ひがけなう身にあまる夫を重ねて神谷さまと、御縁を結び此御家を、今日まで立つてをりますれど、お心正しき神谷樣、片時も早く治三郎に敵を討たせてやりたいと、たゞそれのみにお心をお勞しなされておいでゆゑ、女夫といふは名ばかりにて、ついに是れまで一つ寢をなされしことはござりませぬ。

甚兵　いや／＼それはよくないことぢや、それだから慶十郎殿の心がどうも落ち着かぬ、親類共や此伯父に安心させると思ふなら、どうぞ仲よく一つに寢て、早く仕込みをしてくりやれ、はて伯父がゆるして女夫にしたのぢや、何の佛に遠慮がいらうぞ、此家に長く慶十郎殿が足を留めて下されば、草葉のかげで治左衛門も、悦びこそすれ恨みはせぬ、それらが世にいふ片意地のいらぬ遠慮

お崎　といふものぢや。

お崎　連合のいはるゝ通り、治三郎とてまだ幼年、老少不定の世の中に、若しものことでもある時は、此家の跡をつぐ者が、絶えるも知れぬ一粒者、どうぞそなたと神谷樣の中へやゝでも出來たなら成人させて行く〳〵は、あの治三郎の控へにして、甚兵衞殿や此妾に安心させてもらひたい、さうなる時は治左衞門の、敵を討たせて貰ふより、はるかにまさる幸ひぢやわいなう。

重助　敵は多分丑藏と、目ぐしは附けどこれとても、證據なければ御地頭へ訴へ出るわけにも行かず。

しげ　又あの折に神谷さまの、御異見より心を改め、他國へ立退き今もつて、影も形も見せぬゆゑ。

慶十　その詮議さへけふあすと、あだに月日も一ヶ年。

お峰　過ぎて敵の在所をば、尋ね求めて討つ時は、

甚兵　甥の望みは叶へども、惜しき此家の後見を、

お崎　退身させてあと〳〵の、家督もいまだ幼年ゆゑ、

重助　お困りなさるゝ一村の、

しげ　たばねも稻の實りよき、

慶十　此の豐年にあひながら、

お峰　貢を受けぬ御氣質に、
甚兵　多き田地に目もかけず、
お崎　たつに餌飼の鶴ならで、
重助　空に羽を伸す、
しげ　大きなお望み。
慶十　さのみ大きな望みもござらぬ。（ト此時七つの鐘鳴る。）
甚兵　いや、とかうするうちもう七つ。
お崎　どれ、お暇としませうか。
慶十　何はなくともお二人さまへ、
お峰　御膳をあげたうござりますれば。
甚兵　いや〳〵膳部は二人前、
お崎　最前内へ貰うてあれば、
甚兵　是れから歸つて、
お崎　ゆる〳〵たべます。

重助　どれ、私も御一緒に、

しげ　道までお送り申しませう。

慶十　いや、お年寄り御夫婦は、御遠方ゆゑ是非もないが、

お峰　せめて酒屋の御夫婦は、あとへ殘つて下さりませ。

重助　いえ、あのやうに内へまで、お膳をお貰ひ申しますれば、

しげ　是れから戻つて取膳で、頂きますでござりませう。

甚兵　いや、若い夫婦はむつまじく、

お崎　おうらやましいことぢやなあ。

慶十　それでは御隨意にいたされい。

お峰　ほんに終日御手傳ひで、

慶十　われ〱夫婦も、

お峰
慶十　助かりました。

甚兵　そんなら當家の。

お崎　夫婦の衆、

慶十　さやうなれば、

お峰　お二人さま。

重助　こちら夫婦も、

しげ　お暇いたしまする。

慶十　それ、皆さんを、お送り申せ。

お峰　はい。

ト雪おろし、唄になり、甚兵衛先に、お崎、あとより重助、おしげ、お峰附いて、奥へはひる。あとに慶十残り、枝折門の外の降る雪を見ながら、

慶十　治三郎も何をいたしてをるか、又大ぶん降つて參つたが、親類共と同道ゆゑ、どこぞへ寄つて居ると見える。（ト煙草を呑みゐる、奥よりお峰座蒲團を持ち出來り、）

お峰　あの衆達をお返し申せば、もう御遠慮はいりませぬ、まあおふとんなとお敷きなされませ。

ト是れにて慶十郎、座蒲團の上へ住ひ、

慶十　いやそちもけふは草臥れたであらう、まあゆつくりと今日は、寒さ凌ぎに一口飲みやれ。

お峰　あなたにもさぞお寒からうと、只今てふに御酒の支度を、申しつけましてござりまする。

慶十　おゝさやうか、精進物の殘物にて、一杯やらずばなるまいわえ。

ト爰へ奥より下女のおてふ、蝶足の膳へ精進の料理を載せ、燗徳利盃洗など揃へ持ち出て、

てふ　御新造さま、お燗がつきましてござりまする。

お峰　さあ旦那さま、お始めなされませ。

慶十　しからば、早速始めようか。

てふ　どれ、お酌をいたしませう。

ト是れより合方かはつて、慶十郎酒を飲み思入あつて、

慶十　雪には餘程今日の、佛も緣があると見えるわえ。

お峰　ほんにさやうでござりまする、昨年の今日も、やはりかやうに雪が降り、旦那の戻りが遲いゆゑ、お案じ申してをりまするると、重助殿があわたゞしく知らせてまゐつて俄の大變、思ひ出してもわたくしは胸がどき〳〵いたしまする。

てふ　おつしやる通りあの當座は、お使ひに出ますのさへ、氣味が惡うござりましたが、もう一年になりますとは、お早いものでござりまする。

慶十　その仕業も何者なるか、いまに敵が知れぬといふは、さて〳〵困つたものではある。

てふ　ほんに人の噂では、お構ひ者の丑藏の仕業であらうと申すこと、かうして一年たちましても、たしかな證據が知れませぬが、是れがやつぱり惡運とやらの、強いのでござりませう。

ト是れを聞き慶十郎お峰顔見合せ、思入よろしく、

慶十　そちも今宵は、過すがよい。

お峰　旦那さま、一つ頂戴いたしませう。

ト是れよりおてふ酌をして、お峰酒を飲むことよろしく、爰へ下手の門を明け、前幕の丑藏草鞋がけ古手拭にて頬冠りをして、枝折戸の外にて内を覗き、うなづいて枝折戸を明け、

丑藏　旦那さま、御免下せえまし。

ト内へはひり、冠りし手拭を取る、おてふ丑藏を見て、

てふ　や、こりや丑藏か。（ト立たうとするを、）

慶十　あゝこれ、さわぐには及ばぬから、そちは次へ行つてゐやれ。

てふ　はい。（ト奥へはひる、慶十郎思入あつて、）

慶十　こりや丑藏、そちや此家へ何しにまゐつた。

丑藏　へい、ちとお願ひがござりまして、めえりましてござります。

慶十 なに、願ひがあつて來た。
丑藏 さやうでごぜえます。
慶十 むゝ。（ト合方きつぱりとなり、）願ひの筋と申すのは、いかなる譯か存ぜねど、二ヶ年いぜん當國を構ひの身分となつたる其方、しかも昨年の今日なりしが、酒屋の店にて不當を申し、當家の先代治左衞門どのや村内の人々が、繩をかけて代官所へ、さし出さんといたせしを、手前が中へ立ち入つて助けてやりしを忘却せしか、何ゆゑあつて當村へ再び立ち入るのみならず、家もあらうに名主の宅へ、そちや足ぶみをいたせしぞ。（ト此内丑藏平舞臺下手下に居て、）
丑藏 さう理屈づめにされましては、面目次第もござりませぬが、あの時なるほどお前樣に、御恩になつたは忘れやあしませぬ、再び構ひの場所がらへ足を入れるときかねえぞと、あれほどまでに言はしつて、金まで惠んでお貰ひ申せば、めえられた義理でねえことア承知してをりますが、御案内の通りのろくでなしで、若え時分から極道ばかりし盡した此の丑藏、暑さ寒さがめえりますと貧乏病の骨がらみで、體がやめてなりましねえ、ところで今度ア思ひきつて遠ツぱしりぢやあごぜえますが、善光寺から草津の方へ湯治に行つてすつかりと、體ア直したく思ひますが、それもかういふ寒空で、雪が降るくれえに冷えますから、道でのたれ死ぬことやら、首尾よく行くこ

とやら、生死のほどは知れましねえ、いはゞ一生のお願ひじめえでござりますから、可愛さうだと思はしつて、草鞋錢をお願ひ申します。（トお峰を見て、）こりやあ御新造さまでごぜえましたかどうか旦那へおめえさまから、とも〳〵願つてくれさつしやい。

ト是れを聞き、お峰こなしあつて、

お峰　さういふことなら草鞋錢を、やるまいものでもなけれども、そなたは當所を構はれた入墨のある身ではないか、人目にかゝらばどのやうな難儀に逢ふやも知れぬゆゑ、なるたけ人に逢はぬやうに、早く當所を立ち退きませうぞ。

丑藏　それゆゑお庭口からこつそりとめえりましたが、噂を聞けば旦那さまが、非業な死にやうをなせえまして、いまだに敵の知れねえのも、くぼい所へ水たまるで、どうやらこつちへ疑ひが、いやそんなことアどうでもいゝが、おめえさまには神谷さまと、御夫婦にならしッて、さぞお嬉しうごぜえませう。（トいやにいふ　慶十郎思入あつて、）

慶十　當所構ひのならず者、合力どころか此家の敷居も容易にまたがせぬが、昔をいへば當家の家來、あへて緣がないともいへねば、體の療治がしたいとあれば、草鞋錢を遣はすから、人目にかゝらぬ其内に、早く當所を立ち退けよ。

丑藏　そりや、早速のお聞き濟みで、ありがてえことでござります。
慶十　これお峰、手箱を持つて來やれ。（とお峰上手の障子屋體へはひる。）
丑藏　いやもう、惡さをしたやつは、落目になつちやあ往生で、どこへ行つてもびた一文くれる者がござりましねえ。（トお峰革文庫を持ち出る、慶十郎中より金を出し紙に包み、）
慶十　こりや丑藏、今其方が申す如く、構ひの場所へ立ち入りなば、其身の罪は定まるとも合力などをいたすものはたゞ一人もない筈ぢやが、それを格別の情をもつて、此の金子を遣はす間、此後は決して當國へはひることは相成らぬぞ。（ト件の金を投げてやる。）
丑藏　いえもう、是れを頂きませんでも、構ひの場所ゆゑ容易にやあ、來られたわけぢやあござえましねえ。（トいひながら件の包みを取つて開き見て、）もし、こりやあ五兩ござえますな。
慶十　おゝさ、人の身上預かる身で、たとひ五兩の金子たりとも合力には出しにくいが、佛の忌日先代の主人へ仕へし家來筋、報謝と思つて惠み遣はす、金子をもつて早く行きやれ。
丑藏　ありがたうはござえますが、是れぢやあちつと足りませぬ。
お峰　なに、五兩では不足とは。
丑藏　おめえさまは女中の事ゆゑ、御存じねえか知りましねえが、此の大和から上州の草津までは百里

あまり、五兩の金ぢやアめえられましねえ。

慶十　こりや〱丑藏、何を申す、そりやはや道々榮燿をいたしてなみの旅籠へ泊りなば、足りぬかは存ぜぬが、申さば體を療治のため草津へまゐる一人旅、一錢二錢の合力を貰つて道中せぬまでもよけいな金子を遣はぬやうに木錢へ泊つてまゐつたなら、日一分にして二十日あれば行かれぬことはよもあるまい。それらの邊は申さずとも心得のなきわれでもないが、それを不足と申すのはまだ根性が直らぬな。

お峰　ほんに折角旦那さまが、お情ぶかい思召しで下さる物をそのやうな、不足をいつてはよくあるまい、お腹をおたて申さぬうち、お禮を申して早く行きや。

丑藏　そりやおめえさまのいふ通り、不足といつちやあ濟みましねえが、とてものことに旦那さま、此後再びあえりませぬから、もうちつとばかり草鞋錢に色を附けてくれさつせえ。

慶十　してまた、色をつけろとは、いくらほしいと申すのぢや。

丑藏　體が惡く草津まで長の湯治に行くのだから、いくらあつても足りましねえが、百里の道を日一兩につもつたところで丁度百兩、百兩ともいひ出してえが、昔はお主のこちらの內、去年旦那が死なつしやれ、お物入りの續いた事だ、ぢうぶんなことあいひましねえ、五十兩くらつせえ。

お峰　えゝゝゝ。（トびつくり思入）
丑藏　そのくれえなことア丑藏に、合力してもよかんべい。（ト慶十郎思入あつて、）
慶十　五兩の金子を遣はすさへ、十分過ぎると思ひの外、それを不足と申し立て、十層倍の五十兩、くれてもよいとは何ゆゑに。
お峰　さてはそなたは神佛へ、禁酒でもしてそれを破り、氣が違うてばしゐやるのか、あんまりあきれて腹さへも、立たれぬほどにをかしいわいなあ。
丑藏　酒を破つて氣が違ひ、むやみなことをいひましたら、なるほどあきれもしませうが、さういふわけでねえといふは、しかも去年の今日のこと、丁度こんなに日暮から雪が降り出しとつぷりと、暮れたあの晩七面坂で、お見かけ申した神谷樣。
慶十　やあ。
トぎつくりして、思はず手に持つたる猪口を落す、丑藏悠々と椽へ腰をかけ思入あつて、
丑藏　もし、あの時何處へござらつしつたえ。
ト小聲にていふ、是れにてお峰奥を憚るこなし、合方きつばりとなり、
さうたア知らずおらあ又、人の噂にうつほれて日頃の思ひます酒屋、一杯きけんで間男だと、ご

たくをついて居る所へ、こつちの内の大将や村のやつらが寄つて來て、やれつき出すの、ぶつちめろと、がなつてゐるをおめえさまが、中へはひつて口イきゝ、うめえ異見の言ひかたに、がら烈い氣も失せてしまひ、善にもどつて今日からア、禁酒すべいと旅行の金まで貰ひすご〳〵と、通りかゝつた七面坂、降り出す雪に辻堂の中へはひつて醉ざめの、寒さアこらへてゐるとも知らず、ばつさりいはせた雪の中、さ、是れから先きやあ言はずとも、胸に覺えがありますべい。あの時のことを知る者ア、おらより外にやアありましねえ、いや同じ惡事ィ働いても僅かな金で貯へなく、おッ縛られてくれえ込み、からだへひゞの入るもありやあ、えらいことをさつしやれて田地田畑家藏から山まで持つた名主どん、株ばかりでも千兩のこつちの内を乘つ取つて、三千世界にまたとねえ、其美しい顏附の御新造まで抱き寢して、しらばつくれてござるだもの、五十兩くれえの口留めを、くれさつしやつても憎かアあんめえ、何とさうぢやあござえませんか。

トきつといふ、是れを聞きお峰思入あつて、

お峰　そんならあの夜の、樣子をば。（トいひかけるを冠せて、）

慶十　あ、これ。（ト押へてあたりへ思入あつて、）いや、そりやあ貴さま人違へだ。

丑藏　何でおらが、人違えを。（ト大きくいふを、）

慶十　あ、これ、靜かにしろ。

ト件の手箱より、五十兩包みを出し投げてやる、丑藏是れを取つて氣をかへ、

丑藏　いや、なるほどこりやあ人違えだ。（ト件の金を懷ろへ入れる、慶十郎思入あつて、）

慶十　たとひ嘘にも辻堂で、見たといふならそれを證據に、詮議の手づると思へども、當所構ひの丑藏が、七面坂で見たといひたてゝも、證據にならぬ水掛論、そこを思つてまる一年、その夜のことも白雪と、とけたる心で五十兩、何にもいはずに持つて行きやれ。

丑藏　いやもう、かうして草鞋錢の色せえつけてお貰ひ申しやあ、根が入墨の丑藏ゆゑ、黑い眼で見たことも白いといはぬ雪の夜に、血を流したる赤え話しも、黄色い小判で色を直し、青い草津へつツ走つて口をふいて居ますべい。

慶十　それぢやあ人目にかゝらぬうち、少しも早く行くがいゝ。

丑藏　もし、一文でも多いがいゝから、此の五兩も貰つて行きます。

ト以前の金を懷ろへ入れ、枝折戸の方へ行く、お峰是れを案じるこなし、

お峰　とはいへ此まゝ。（ト立ちかゝるを、）

慶十　はて、そなたは何にも知らぬことだわ。

丑藏　やつぱり、夫婦なれ合ひで。
慶十　えゝ。
丑藏　いやさ、やつぱり風が北風のやうだ。
ト雪おろし、合方になり、丑藏頬冠りをしながら、花道へはひる。慶十郎思入あつて、上手の障子屋體より一腰を持つて出て、きつとなり、
慶十　お峰。（ト慶十郎囁く。）
お峰　そんなら、是れより。
慶十　これ。
ト押へるを木のかしら、兩人よろしく顏を見合せ、此の道具廻る。

（養福寺繩手の場）――本舞臺一面の平舞臺、眞中に小屋根のある石の地藏、此前に腰をかける程の石の線香立、傍に納め幟二三本立てあり、上下松の立木、日覆より同じく釣枝、後ろ一面田圃を越えて向う寺の屋根などを見たる雪降りの遠見、舞臺前上下雪板、此道具總て雪持ちにて舞臺花道とも雪布を敷きつめ、壺内村養福寺繩手の體。前幕の寺男傳介簑笠にて買物の笊をさげ、酒屋の若い者又作二

升桝をさげ、番傘をさし、兩人立ちかゝり居る、雪おろし、禪の勤めにて、道具留る。

傳介　いやもう、去年はえらい間違ひで、名主どんが殺されたが、今日はその一周忌だから追善の歌の會をするとッて、せうもこりもなく和尚さまが、連中を集めて歌の會だ、おらが寺の氣違ひ和尚にも誠にはや困りものだ。

又作　しかし、それでもかうやつて酒が寺へはひるやうぢやあ、こなたもしつかり飲めるだらう。

傳介　どうして〳〵酒どころか、菓子を一つくれやあしねえ。

又作　何にしろ内の夫婦も、今日は名主どんへ手傳ひに行つて、今しがた歸つて來たが、一周忌の献立で大そう御馳走があつたさうだ。

傳介　おらもおめえもあの時に、かゝり合つた仲間だから、今日はよばれていゝわけだ。

又作　構ふことはねえ、日が暮れたら二人して、押しかけて行つて、精進料理で一杯御馳走になんべいか。

傳介　それもよからうが、又歸りにおつころされちやあつまらねえ。

又作　違えねえ。それもさうだ。ちつとも早く行かうぢやあねえか。

傳介　それがいゝ〳〵。

ト兩人連れ立つて上手へはひろ、あと雪おろし木魚入りの合方になり、花道よりいぜんの丑藏出來り、
花道にてあとをふりかへり思入あつて、

丑藏　此の田圃はふだんでも、泣きッつら田圃といふくらゐで、吉野おろしで寒い時分は横ッ面を切られるやうだが、此雪ぢやあ猶の事だ。どれ向うの地藏の前で一休み休んで行くべい。（ト舞臺へ來り地藏の臺石へ腰をかけ、）いや、よく昔からあるやつで、金を素直に渡しておいて、あとを追駈け、途中でおッ殺すといふ手があるから、道で一杯やりていのを、がまんして急いだが、實ァびく〳〵ふりかへつて、後を見い〳〵やつて來たが、爰まで來りやあ、もう案じることあねえ。（ト懷ろより金を出して見て、）しかし流石は惡黨だけに、五十兩といつたらば二十五兩か三十兩くれるであらうと思つたが、二言と言はせず五十兩、がらりとそけへぶん投げて持つて行けたァたまげたもんだァ、是れを手みせに是れから先、おらが命のあらんかぎり時たま行つちやあごたくをついて、ぶち種でも借り出すべい、いや、いゝ仕送り手が出來たなあ。（ト此時に地藏の雨よけの屋根に積りし雪ばつたり落ちろ、丑藏びつくりして金を懷ろへ隱し。）えゝ鳥が飛んだのか、何ぼおらでも五十兩といふ金を持ちやあ物騷だ。どれ暮れねえうち出かけべい。

ト雪おろしになり、丑藏上手へ行きかける。此時上手の松のかげより、慶十郎尻はしをり大小にて立

ちふさがり、

慶十　丑藏、遲かつたなあ。（ト慶十郎頭巾をとる、木魚入りの合方、）

丑藏　や、こなたは。（トぎつくり思入、是れより替つた合方になり、）

慶十　さつきから手前の來るのを、先へ來て待つて居た、よくそれでも道を忘れず、此の原中へ出かけて來た。

丑藏　それぢやあやつぱりお定まりの、其身の惡事がばれねえやうに、おらを爰で殺す氣だな。

慶十　さればよ、凡そ天地のその間に、身共の惡事を知つた者はたゞの一人もあるめえと、今日の今日まで思つてゐたが、人もあらうにくらやみと異名をとつたわれにまで、惡事を知られた上からは、その丑藏の歩みさへ長く待つたる八丁繩手、爰で息の根とめてやるから、覺悟いたしてそれへ出やれ。（ト丑藏是れまでだといふ思入にて、）

丑藏　さう聞くからはおらだつて、なに逃げかくれするものか、われに命やくれべいが、いくらそつちが劍術の師匠とよばれた先生でも、手なみの方ぢやあ負けるか知らぬが、肚胸くらべぢやあ負けねえつもりだ、おらが體へ一寸でも、刀の先が當るが最後、われの腕へかぶりつくから、切られるものなら切つて見ろな。

慶十　おゝ、いゝ覺悟だ、其儀ならどれ一思ひに殺してくれう。

ト刀へ手をかけ立ちかゝる、丑藏その手をきつと押へ、

丑藏　えゝ、ふざけたまねエさらしやがるな、

ト慶十郎をつきのけ、雪をとつて打ちつける。慶十郎刀を拔き丑藏に切つてかゝる、丑藏これなくぐりぬけ、兩人地藏の廻りを廻り、トゞ丑藏有り合ふ幟をとつて立廻り、此內始終雪おろし、誂への合方にて、慶十郎切りかけるを、丑藏幟の棹にて受ける、仕掛にて幟の棹切れて折れ、丑藏此切先きにて手を負ひ、糊紅になりどうとなり、

丑藏　これ待つてくれ、言ふことがある。

慶十　えゝ、此の期に及んで未練なことを。

丑藏　いや、未練ぢやあねえ、おらがやうなならずもんでも、人の死ぬ時といふものは、いゝ事をいふといふから、刀を止めて神谷さま、まあ聞いてくれさつせえ。（ト是れにて慶十郎あたりへ思入あつて線香立の石へ腰をかける、丑藏苦痛のこなしよろしく、是れより替つた合方、）どうでおらあ遲かれ早かれのたれ死イする氣だから、同じ命イ取られるなら、おめえのやうな立派な人に、切られて死にやあ本望だが、たゞ惜しいなあおめえのこんだァ、劍術といひ、學問といひ、業にかけちやあ何一

つ知らねえといふ事もなく、勝れてゐるといふ事だが、なぜまァあんなわるさァさつしやる、それがおらあ聞きてえのだ。孔子に學問說くやうだが、士農工商とやらいつて、民の内でも侍は人の上に立つといふに、わるさせえしねえけりやあ、食ひはぐりのねえ腕ェ持つて、侍で世を渡り疊の上で死ねべいに、名主どんへ江戸から來た女子に心が迷つたか、切られて死ぬなァくやしくねえが、おめえのやうな利口な人が、女に迷つてわるさァして、人に惡名うけるかと、思やあおらあそれが悔しい。

ト思入あつていふ、慶十郎是れを聞き、ほろりとせし思入あつて、

慶十 おゝかたじけない、鳥のまさに死なんとするや啼く聲悲しく、人のまさに死なんとするや其いふことよしといへるは、實にことわりや其方が今際の異見はさることながら、たゞ一通りに聞く時は、無分別なるやうなれど、何をか包まんあのお峰は、元は身共が妻なるわ。

丑藏 えゝ、それぢやあ江戸からなれあひで。

慶十 おゝさ目的あつて四五百兩、金のつるにもありつかんと、下宿を求めし治左衞門に、江戸にて當座の妾とさせ、手管をもつて此國へ、はる〲連れて戻らせしも、慶十郎が皆さしがね。

丑藏 そんならいつぞや箱根にて、始めて出逢つたこなさんが、名主の難儀を救ひしも。

慶十　言はずと知れた身共が策、胡麻の蠅だと見せかけたは、浪人岩淵九郎藏といふ、實は身共が朋友だわ。

丑藏　むゝ、それで樣子が分つたが、惡事にかけちやあ拔け目のねえ、おらせえ知らねえくれえだから親類はじめ村内の百姓達まで知らねえはず、たゞをかしいと思つたは、こなたの內へ胡麻の蠅が順禮姿で尋ねて來て、づる〳〵べつたり世話になり、しかも去年の今夜のことだ、晝間異見をしてくれた、正しい詞に引きかへて、名主を殺しのめ〳〵と、後見役にはひつたのは、利口な人だが色事にやあ、迷ふものかと今日が日まで、思つてゐたる此の丑藏。

慶十　いゝわると見受けてその方に異見を加へる其折に、知れぬやうでも密通はいつか世間へ洩れやすしと、聞いて三つ子に淺瀨だと深いたくみの人殺し、事十分に調ひて濡手で粟のつかみどり、心にかゝる山の端もないと思ひし凡俗の、人目に淸く降る雪は、積る惡事ともろともに、とけてしまへど又今年。

丑藏　降つて湧いたる積惡も、雪のあしたの噂さへ、惡い道ゆゑぬかりがあり、

慶十　かけの仕事にいつまでも、凍りとぢると思ふのは、

丑藏　道理に暗えろくでなし、おらがやうなるものゝいふこと、

慶十　思へば腰へ兩刀を、たばさむ武士の身にとりては、
丑藏　恥る所業も天道の、
慶十　日に照らされて見る時は、
丑藏　いつかとけ出す時節來て、
慶十　さとしたものにさとさるゝ、
丑藏　下駄と草履のはきちがひ、
慶十　餘所は道よき往來も、
丑藏　ぬかつて人の笑ひ草、
慶十　歩行の難儀とあせりたる、
丑藏　はねは私身にかゝるとは、
慶十　はてよくいつた、
丑藏 慶十　ものぢやなあ。（ト此時又雪おろしになり、雪降る。）
丑藏　かうまた心がつかしつたら、苦艱を助けて神谷さま、とゞめェぶつてくれさつせえ。
慶十　おゝやがてあとから冥土へ行き、閻魔の廳で名乘らうから、そちは一足先きへ行きやれ。

丑藏　おゝ、三途の河原で待つてゐますぞ。

慶十　どれ、引導を渡してやらうか。

　ト丑藏の胸ぐらをとり、とゞめをさす。是れにて丑藏よろしく落ち入る。此時ばた〳〵になり、花道より、前幕の岩淵九郎藏着流し尻はしをり、一本ざしにて白張の傘をつぼめてさし走り出來り、直に舞臺へ來り、上手の方へ行かうとして慶十郎に行き當る、慶十郎南無三といふ思入にて九郎藏に切つてかゝる。九郎藏ちよつと立廻つて兩人顏見合せ、

九郎　おゝ神谷氏、是れにござつたか。

慶十　誰かと思やあ岩淵か、此の大雪にどこへ行く。

九郎　久しくお宅へ無沙汰をしたから、今ちよつとお尋ね申すと、露顯の小口が出來したと御新造から内々承つて驚き入り、あとから助力に出かけてまゐつた。

慶十　いやそれは千萬かたじけないが、大事を知つた丑藏は、かくの通りに切り捨てたれば、もはや案じることはない。

九郎　承ればこやつめは、當所構ひの入墨者、切つても仔細はござるまいが、貴殿の身分でかやうな儀が、ばれては後日に面倒ゆゑ、手前が萬事引き受けませう。

慶十 いや〳〵それには及ばぬから、幸ひこやつの懷中に五十兩ほどはひつてゐれば、それをこなたの路用として、早く當所をふけて下せえ。

九郎 なに手前にふけろとは。

慶十 はて惡いやつでも人一人、殺害すればそれからそれと、惡事の露見に及ぶは必定、もう身共とても此國に、長く足はとゞめられぬ。

九郎 これ〳〵神谷氏、何をいはるゝ、そも〳〵江戸表を出る時より貴殿とかたく契約いたし、此一條が成就いたせば共に榮華をいたさうし、又仕損じて露顯となれば、最期は共にいたさうと苦樂を論ぜぬ一味の岩淵、只今となり手前をば、お見限りとはお恨みだな。

慶十 いやそれに御決心なら身共に於ても悅ばしいが、しかし惡事も遠からず露顯の小口にならうから貴殿もその氣で今のうち、木辻へでも行き存分に、御愉快をなさるがいゝ。

九郎 どうやら貴殿がそのやうな、心許ないことをいふと、手前も心が落着かぬが、何にいたせ金子とあれば、耳よりなことだ頂戴いたさう。（ト丑藏の死骸の懷中より以前の金を出し、）こりや五十金よりよけいにござる。

慶十 五十五兩ござるはずだ。（ト九郎藏かぞへ見て、）

九郎　いやいつ見ても山吹は、花の色香がすたりませぬな。（ト金をよろしくまとめて、）幸ひ傘を持つてまゐつた、まあ是れへおはひりなされい。

ト金を懐中して傘をひらく、慶十郎刀の血を拭ひ、鞘に納めて、丑藏の死骸を見て思入あつて、

慶十　やがて此の身もあの如く、

九郎　えゝ。

慶十　いや、好みの通り、袈裟切りにいたした。

九郎　それは定めて、見事でござらう。

慶十　いざ、同伴いたさう。

ト雪おろしになり、兩人相合傘にて花道へかゝる、此時上手より以前の又作出來り、死骸につまづきびつくりして、

又作　人殺し。

ト大きくいつてべつたり下に居る、花道の兩人見送り、

九郎　南無三、かやつも。（ト刀の柄へ手をかけ、あとへ返らうとするを、慶十郎止めて、）

慶十　はて、無益の殺生、（ト入れかはつて九郎藏をしやんと止めるを、道具替りの知せ、）よしになされい。

ト雪おろし木魚入りの合方になり、慶十郎九郎藏花道へはひる。又作腰がぬけし體逃げられぬ思入。

右の鳴物にて此道具廻る。

本舞臺元の庭前の道具。爰に行燈へ灯りをともし、以前のお峰膳を傍へ引きつけ、火鉢にあたりさしうつむきゐる、此の模樣雪おろし、時の鐘、床の送りにて、道具留る。と是れより床、竹本淨瑠璃になり、

〽雪の日も早や暮れ過ぎて鐘の音と、ともに凍りし軒端さへ、壺内村に年ふりし名主の家の一構へ、積るお峰は劒羽をかくして鴛鴦の襖もる、風はいとへどふせがれぬ事の破れにつまどりを、待ちわびてこそゐたりける。

ト此内お峰あたりへこなしあつて、酒を飲むことなどよろしく、

お峰　夫の安否とやかうと案じ煩らふ其所へ、あの岩淵が見えしゆゑ、幸ひあとより見えがくれに、賴んでやりしがそれとても、今に戻つて來らぬは、ても心ならぬことではある。

〽つゝむ大事に腰元の、手はありながら憚りて、呼ばれぬ不自由枝折の外、そつとたゝずむ夫のかけ。

ト此内よきほどに、下手の門を明け、以前の慶十郎、頭巾を冠り出來り、あたりへ思入あつて枝折戸を明ける、お峰是れを見て、

お峰　おゝ、旦那さまか。

慶十　お峰、今もどつた。

〽あたり憚り内に入り、（ト慶十郎二重へ上る。）

お峰　今おすゝぎをあげますから、暫くお待ちなされませ。

慶十　なに、雪道ゆゑ足はよごれぬ、其の手拭をとつてくりやれ。

お峰　それでは拭いてあげませう。

〽濡れていとはぬ露の身も、もらさぬ大事ふきとりて、

ト此内お峰、上手にある手拭をとり、慶十郎の足をふく、是れにて慶十郎頭巾をとり、よろしく居まひて、

慶十　やれ〳〵殊の外寒かつた、まあ一杯飲ましてくれ。

お峰　只今お燗が冷えましたゆゑ、あつくいたしてあげませう。

慶十　いや直すには及ばねえ、ひやでもいゝから、飲ましてくりやれ。

お峰　でも冷酒はお毒ゆゑ。

慶十　毒といふても、ちつとの内。

お峰　えゝ。

慶十　はて、咽喉さへ通れば同じことぢや。

ト是れより下座の合方になり、慶十郎猪口をとり、お峰酌をするよとよろしくあつて、

お峰　さうして只今おあとから、岩淵をあけましたが、道でお逢ひなされましたか。

慶十　おゝ岩淵にも道で逢つて、今途中まで一緒に來た。

お峰　思つたよりはお歸りが大分お遲うござりますゆゑ、お案じ申してをりましたが、お首尾はいかゞでござりました。

慶十　おゝその首尾は上首尾だが、して治三郎や作藏は、定めて宅へ歸つてゐるような。

お峰　あなたがお出かけなされまするると、間もなう歸つてまゐつたゆゑ、もしや道にて行き逢うて御迷惑でもなされはせぬかと、それといはずに餘所ながら口裏をさぐりしところ、お目にもかゝらぬやうすゆゑ、少しは安心いたしました。

慶十　知れまいと思つてゐるも、やつぱりこつちの愚といふもの、遲かれ早かれ積惡が、

お峰　や。

慶十　まあ、もう一杯ついでくりやれ。

へまたも飲みほす冷酒は、胸につめたき末期の水。

ト此内お峰酌をして、慶十郎思入あつて酒を飲むことよろしく、お峰こなし、

お峰　もう御遠慮はいりませぬから、てふをよんでお燗を直させ、ゆる〳〵おあがりなされませ。

慶十　いや〳〵それには及ばぬから、そちも一杯飲んでくりやれ。

お峰　あなたが飲めとおつしやるなら、冷でも頂戴いたしますが、どうやら是れでは水杯でもいたすやうではござりませぬか。

慶十　おゝ、此の杯が末期の水ぢや。

お峰　えゝ、何とおつしやりまする。（ト是れより床のメリヤス、）

慶十　只今の期にのぞみ、申すも愚なることながら、かくいふ我もそちとても、舊幕頃は祿をけがし鎌倉天下の旗本にて、なにがしの末孫ながら瓦解の後は浪々なし、仕官の望みも嘗てなく、商法とても知らざれば、尾羽打ちからし諸道具を賣りしろなして暮すうち、舊友岩淵九郎藏が尋ねまつて悪計の徒黨へ我を引き入れんと、再々すゝめも道ならねば、始めのほどは斷りしが、たつき

にせまるところより、ふと黨中へ荷擔なし、切取り强盜いたすのは、武士の習ひとおのれから良からぬ道に理をきはめ、物取りなせしが病みづきにて種々惡計をめぐらせしが、皆一つとして大望の成就なさぬもことわりか、天理に背きし事のみゆゑ。

お峰　つひには詮議嚴しくなり、あきもあかれもせぬ仲を、女夫が急に別れねばならぬ仕儀にて出先きより逃亡屆けて三歳あと、お別れ申せしそのあとへ、人の世話にて寄留人の下宿をすれば、賄にて女子一人は樂々と暮しがつくとすゝめられ、こちらの内の主從を二人二階へ置いたのが、緣のはしにてあなたといふ蔭に夫のあることを知らで三月の取りきめも、當座の花といひかけられ。

慶十　どうしたものと内々にて、よこせし文の金のつる、かく〳〵せよと岩淵が智略によつてさしがねも、

お峰　夫のためには川竹の流れへ沈む者さへあれば、身をけがしても行末の、

慶十　よしと思ひし企ても、惡しきたくみのなれあひが、

お峰　首尾よくいつて何一つ、今は不自由があらざれど、

慶十　密夫ばかりは隱しても、あらはれやすきものなりと、

お峰　いひしを聞いて殺す氣に、

慶十　なるといふのも積惡に、
お峰　誰白雪と思ひしが、
慶十　積る惡事の消えがたく、
お峰　いつか見られて今日のしぎ、
慶十　それゆゑ覺悟はきはめをるわえ。

ト此內、作藏治三郎窺ひ出て、慶十郎お峰と見合せ、作藏治三郎こなしあつて奧へはひる。慶十郎是れまでといふ思入あつて、

お峰、來やれ。

〽一間へこそは入りにける。

ト慶十郎お峰の手をとり、上手障子屋體の內へはひる。

〽あとはひつそとなる鐘の、時刻も五ついつの間に、樣子聞いたか作藏が、治三郎を伴ひ出で。

ト此內時の鐘になり、正面下手の襖を明け、前幕の作藏一本ざしにて、治三郎に一腰をささせて連れ出來り、

作藏　さあ治三郎さま、親旦那樣を殺したは神谷樣でござりまする、わしが助太刀いたしまするから、すつぱりとお討ちなされい。

治三　さあわしも今まで次の間で、聞いてびつくり此の胸が、今にどき／＼するわいなう。

作藏　えゝそのやうな弱いことで、親御の敵が討てませうか、神谷樣には覺悟をなし、討たれる氣にてゐるやうなれど、お峰殿には未練を出し脱れる心に見えるゆゑ、とり逃がしてはなりませぬ、さあさあ早くなされませ。

治三　それぢやというて是れがまあ。

作藏　えゝ、是れがまあとは腑甲斐ない、日頃習ひし劍術は何のためでござりまする、何にも知らぬわしでさへ、及ばずながらお助太刀をいたす覺悟でをりまするに、御猶豫をしておいでなさるは、親御が非業に討たれしを口惜しいとは思はつしやらぬか。これ若旦那、いやさ治三郎樣、えゝだまつておいでなさるのは、こりや神谷樣が怖いのか、はてたとひ以前がお師匠でも、惡事を働く人でなし、恨みこそあれ彼奴等に、よしみもなければ義理もない、恐るゝ事がござりませうや、さあ／＼お早くなされませ。（ト此内治三郎始終さしうつむき默つてゐるゆゑ。）えゝこれほどいふのに尻ごみして、だまつておいでなさるのは、やつぱり敵が怖いのか。えゝふがひないお前さまはな

あ。（ト下座の合方になり、）これ若旦那治三郎さま、よく考へても御覽じませ。そりやもう向うが劍術の大先生ゆゑ立合うては叶はぬのは知れてあれど、親の敵は不倶戴天、叶はぬまでも立ち合うてたとひこちらが不覺をとり返り討ちになるとても、親旦那さまの恨みの刀、一太刀なりと神谷樣に手疵を負はせてあの世へ行けば、草葉のかげの親御さまへ、申譯がござりまするぞ、殊に今おてふどんを伯父御の所へかう〳〵とお知らせ申しにやつたれば、おくればせにも是れへござ只つて、助太刀をなされませうし、案じる事はござりませぬ、さあ〳〵お早くなされませ。えゝ是れでもあなたは聞きわけて、敵を討たうとは思はつしやらぬか、言はうやうなき臆病者めが。

〽忠義一途に作藏が、言ひはけますれど治三郎、力なく〳〵顏をあげ。

ト治三郎愁ひのこなしあつて、

治三　おゝ。もつともぢや、こりや作藏、現在敵が目の前にあるをおめ〳〵立ちおくれ、討たれぬといふその譯は、そなたと違ひ此のわしは、なまじ學問修行して物の道理が知れしゆゑ。

〽三歲此方劍術や、文の學びの敎へを受け、一方ならぬ師の恩は、七尺去つて影だにも、ふむなといへる世の敎へ。

一人は假にも母さまとおたのみ申して三歲越し、お世話になりし義理あれば、たとひ非業に討た

れたる大事の父の敵でも、討つに討たれぬ悲しさを。

〽推量してとあといひさし、なげきに沈むを又はげまし。

作藏　えゝそのやうな弱い氣で親御へ孝が立ちませうぞ。そりやもう向うが本當の人間なれば恩もあり討たれぬ義理もござりませうが、惡事を働くあいつらが、これまで敎へた學問が、何の定規になりませうぞ、さあ義理も恩も入りませぬから、敵とお名乘りなされませ。

治三　いや〳〵何と言はうとも、敵と名乘つて討たれぬゆゑ、おたのみ申してお二人に自殺をしてお貰ひ申し、それを手向けてお父さまへ申しわけをするわいなう。

作藏　そんならどうでも敵討ちを、なさる心はござりませぬか。

治三　おゝそればつかりは出來ぬわいなう。

作藏　えゝ、ふがひないお心だなあ。

〽腹立ち涙むせび入る、後ろへ立出る伯父甚兵衞。

ト作藏よろしくこなし、爰へ正面の襖を明け、伯父甚兵衞出來り兩人を見て。

甚兵　おゝ治三郎、よくいつた。（ト是れにて兩人後ろを見やり、）

治三　や、こりや伯父さまには。

作藏　いつの間に。

甚兵　下女のおてふが知らせゆゑ、直にかけつけ最前から、樣子は後ろで聞いてゐたが、たとひ惡人なりとても一たんそちが父母とせし眼鏡ちがひはわしが誤り、誰より一番甚兵衞が草葉の陰の治左衞門へ濟まぬ譯ゆゑ途方にくれ、どうしたものと思つてゐたが、自殺をすゝめ亡き親へ言譯するとは流石にも、學問修行をしたゞけに大人も及ばぬよき分別、あつぱれ出かす〳〵。

〽思ひがけなく年寄りの、詞ゆるがぬ分別を、褒めそやすにぞ治三郎。

治三　そんなら不孝な私と、お呵りなされはしませぬか。

甚兵　何の呵つてよいものぞ、それが孝あり義ありといふ、双方全き分別なるぞ。

作藏　とはいへとも〳〵、甚兵衞さまも。

甚兵　取り逃さぬやう出口をかためん。

治三　そんなら伯父さま。

作藏　若旦那。

甚兵　どれ、三方からつめかけようか。

〽見やるなけしの捕繩と棒おつ取つて甚兵衞が、先きに立つたる奥の間の、障子の内に聲あ

つて、

ト此内甚兵衛正面のなげしにかけし繩をとり、腰にはさみ棒を取つて先きに立つ、作藏治三郎附いて上手の障子屋體へはひらうとする、此時障子の内にて、

慶十　お出でに及ばぬ惡賊夫婦。

お峰　只今それへまゐりまする。

三人　何と。（ト身構へする。）

〽一間の障子押し開けば、飾る持佛に燈明の輝きわたり兩人が、雪にひとしき白小袖、覺悟の刃携へ出で、はるか下つて控ゆれば、是れはと人々打ち驚き。

ト此内上手の障子を引き拔き、正面に誂への佛檀、是れに位牌を飾り金物の佛具などよろしく、蠟燭立に灯りを照らし、慶十郎水上下、白小袖にて、三方へ九寸五分を載せて持ち、お峰同じく白の小袖にて懷劍を持ち、兩人とも酣をはぢきゐて、つか〳〵と前へ出て、甚兵衛治三郎を上手へ敬ひ、二重下手へ住ひ平伏する、是れにて作藏平舞臺下手に居て、三人此體を見て、びつくり思入よろしくあつて、

甚兵　さては二人も覺悟なし、

治三　自殺をなさるゝ、
作藏　心であつたか。
慶十　いかにも我等が積惡も、今ぞ天運盡きたるところ、名乘り合はして治三郎に、敵を討たるゝ所存なりしが、一旦父母と呼びし上師弟の恩を思はれて、自殺させんとけなげな一言、孝子の情に今日今宵切腹いたす我本懷。
お峰　樣子を聞きしとあるからは、改めいふに及ばねど、かゝる惡事をたくみたる母とも知らで此年月孝行にしてたもつたのも、今となつてはさぞやさぞ、憎いやつとも思やらうが、廻る因果の報い來て月日もあらうに旦那さまの、一周忌の今宵となり、自殺を遂げて死ぬるのがせめては一つの言譯ゆゑ。
慶十　いざや夫婦が首級を討ち、あれなる位牌の治左衞門殿へ手向けてくりやれ治三郎。
治三　又父上をむごたらしう、殺す心にひきかへて、劍術といひ學問まで、うるさいともお思ひなされず、いとねんごろに敎へて下され。
作藏　いつこく者の作藏まで、情をかけて長の年、お遣ひなされて下さるゆゑ、世間へ出ては褒めそやし、自慢話しをしてゐたのも、

甚兵　是れでは明日から村内の、

治三　百姓衆へもこの顔が、

作藏　面目なうて、

三人　むけられぬ。

〽くやみなげゝば恥入りて。（ト是れより横笛の入りし床のメリヤスになり）

慶十　されば手前も昨年の今日までは當所へ來り、船木氏の御厚情に一たん惡事の念も止み、是れなる峰をいひさとし、夫婦の緣もこれまでとあきらめくれて治左衞門殿の後妻となり、身を全ういたしくれよと賴み置き、我は諸國を巡行なし、いづれへなりと仕官なし、一度疲弊いたしたる實家の名跡引き起す所存なりしが計らずも、舊友岩淵九郎藏が尋ね來りて契約を、今更違變いたすとは武士の性根にあらぬ義と、すゝめに又も惡念のきざす折から丑藏が、密夫は必らず知れやすく連れ添ふ夫のあるうちは安穩ならずと申せしが、魅入る天魔か途中にて、恩人船木治左衞門殿を討つて捨てたる我大罪。

お峰　是れといふのも鎌倉の、瓦解を恨み世に逆らひ良からぬ事をいたせしゆゑ、仕官をなせば相應の身分にならるゝ我々が、故郷を離れ大和路につもる今宵の雪よりも、重き惡事の名を殘す、非業

な果てを伯父上樣、お察しなされて下さりませ。

甚兵 定めてさういふ譯ならんが、是れが誠のお人にて、當家の跡目をつがれたら、

治三 實の父上母上にも、勝る立派なお二人ゆゑ、

作藏 此作藏も末長く、三世のお主と賴まんに、

慶十 武士にたとへし櫻木の、

お峰 名所も多き大和路に、

甚兵 汚名を殘す身の果ては、

治三 あだに散り行く花の色、

作藏 さめて流るゝ吉野川、

慶十 昨日の淵は今日の瀨と、

お峰 かはりて名乘る敵同士、

甚兵 それもしがらむ恩と義理、

治三 討つに討たれず、

作藏 引くに引かれず、

慶十　思へばかひなき、

皆々　身の上ぢやなあ。

〽悔む歎きに血の涙、落ちてふりつむ白雪も、一度に解くる如くなり

ト此内皆々愁ひの思入よろしく、以前より下手の門を明け、幕明きの重助、岩淵九郎藏に繩をかけ連れて出て、兩人枝折戸の外に窺ひゐて、此時九郎藏わつと泣き出す、皆々この聲を聞き、

慶十　や、枝折の外に、

皆々　誰やら人が。

重助　甚兵衛さま、私でござりまする。

ト重助は繩にかけたる、九郎藏を連れて内へはひる。皆々此體を見て、

慶十　捕縛を受けて來りしは、

お峰　最前もどりし岩淵どの。

甚兵　何ゆゑあつて、重助どのが。（ト是れにて重助前へ出て、）

重助　先程店の若い者が、青くなつて歸つて來て、養福寺繩手で丑藏を神谷樣がお殺しなされて立ち退くところを見かけたと、聞いてさてはと思ひしは、去年あれほど異見を加へ當所を逃がしてやつ

たのを、まだ性根が直らいで、何處ぞの家へかあばれこみ勘辨強い神谷さまが、もうこれまでと思はしつて、繩手へ連れ出し人知れず殺しておしまひなされしかと、内々悦ぶそのところへ。

九郎　身共はそれとも知らぬゆゑ、先刻酒屋の若い者に惡事の端を見られた上は、いつそ去年の人殺しを一緒に背負つて神谷氏に、これまで受けた恩返しをいたすつもりで酒店へ、惡事を名乘つてあばれこみ、繩にかゝつて御夫婦へ暇乞ひをしようと思ひ、出て來て見れば此の始末、盡した心もいすかとなり、惡の報いは恐ろしい、聞いて涙も鬼の目に歎くは愚痴の至りだが、たゞの奴になつてござる。

〽善にもどりて啼く鹿は、奈良にさまよふ角神谷、さこそあらんとうちうなづき。

ト慶十郎思入あつて、

慶十　いひ合さねど三人が、

お峰　惡心かへりて善となり、

甚兵　罪をわびたる雪の日も、

治三　會稽山に異ならぬ、

作藏　めぐる忌日は、

重助 旦那の祥月。

九郎 せめて最期をもろともに。

慶十 はて、入らぬ義理だて。（ト慶十郎お峰肌をぬぎ、）

お峰 治三郎。

慶十 治三郎。

治三 はッ。

〽はッとばかりに立ちあがれば、師弟の因み恩愛に、なまる刃金や後夜の鐘。

ト此内治三郎愁ひのこなしにて刀を拔く、慶十郎お峰の後へ立ちかゝろ、よきほどに本釣鐘を打ち込み、慶十郎よろしく刀を引きまはし、お峰もがつくりとなる、甚兵衞作藏此體を見て手を合せろ、九郎藏顏をそむけ、重助もよろしく、床の三重。

〽あはれはかなき。

ト皆々引張りの見得、三重本釣鐘の送りにてよろしく、

幕引き附けると、エイと太刀音して、あとシャギリ。

幕

お峰慶十郎（終り）

世界花咲
菊月狂言

御攝御差圖聞書御伽草紙

誓ひは堅き石段に西谷廣瀬が吳越の爭ひ勝負を殘し立別れ伊織小賤の濡衣を救ふは胸の大眞院義理と忠義に兩士の切腹妻の小笹が亡跡を尊き僧の安養も多門之助が鉛の成敗深き恨みも谷底へ落てあざみが身の出世是ぞ謀叛の種が島兄彌平次の隱家を尋ね求めて太田屋と惡事に靡く青柳主水企みを悟る烏山豐後彼の青龍の兜の諫言聞く奥方の悅びも吹消す嵐の闇試合暗き汚名に退城も再の時節を松崎龍川逐る庄屋も賴母しき賴母が助力貸座敷に娘お節が眞心はあつばれ天下の問注所大坪矢部が捌にて落着なせし黑白評定

鐘岬大船世鳴響昔噺

筑紫巻談浪白縫

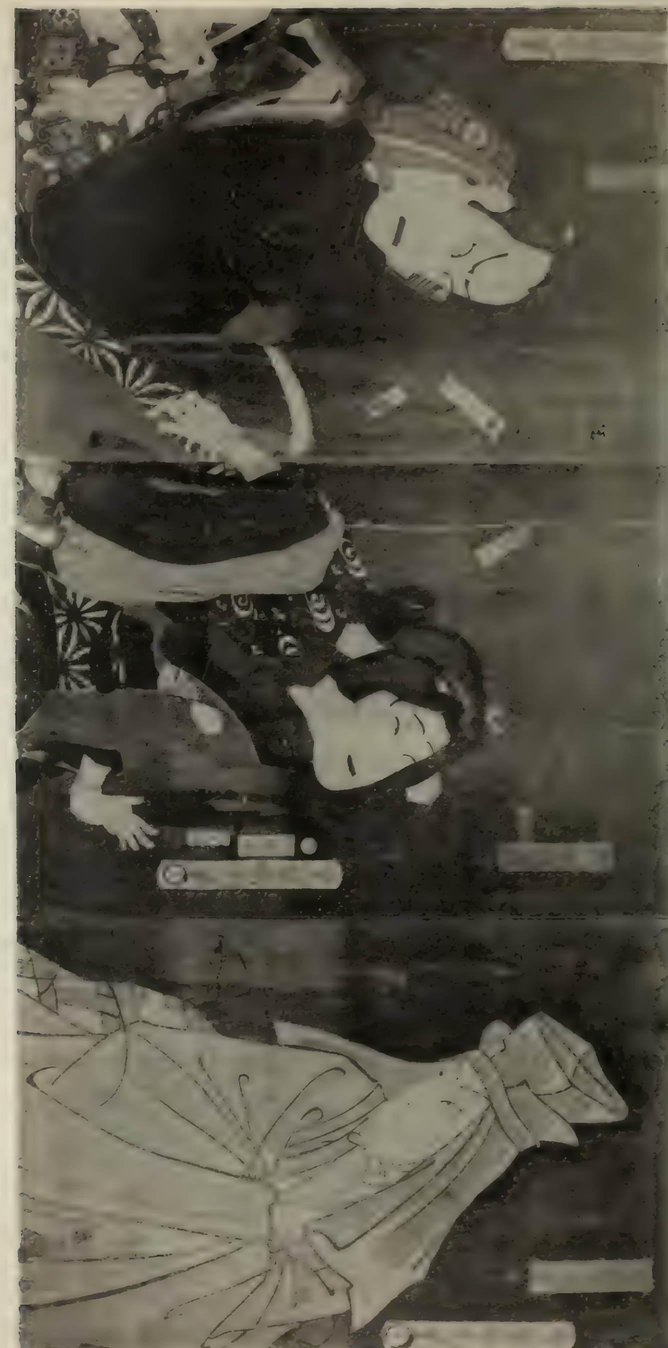
『黑田騷動』は明治八年十月、作者六十歳の時、新富座に書きおろされた。栗山大膳を鳥山豐後として『白縫物語』の世界にして脚色したので、「浪白縫」なる題を生じたものであらう。彦三郎の鳥山豐後、菊五郎の安養法師等何れも好評であつた。然し鉛責の件は稿下の時は差支へなかつたが、再演に及んでは慘酷に過ぐるとの理由で、あくどい責め方は制限された。紅葉の間の闇試合は一篇中の眼目であり、著名であるが、豐後を演ずる彦三郎が主水を演ずる菊五郎の要求するが如くに試合立廻りの稽古を附けず、初日に到つて懸命に切り込ましたのを巧みにあしらつたので、眞に迫り見物の喝采を博したといふ事が傳へられてゐる。作中青柳主水は又毛谷主水ともなつてをり、大坪孫左衞門は大久保彥左衞門をきかせたものである。

書きおろしの時の役割は坂東彦三郎（鳥山豐後之助、太田屋勘兵衞、廣瀨新十郎）、尾上菊五郎（紅養法師、青柳主水）、中村芝翫（獵人彌平治後に只村彌太夫、大坪孫左衞門）、澤村訥升（花木數馬後に薊又愛妾お筆の方）、市川左團次（菊地多門之助、西谷藏太、雪岡賴母）、坂東しう調（廣瀨の妻小笹、內室梅の方）、中村喜世三郎（腰元小賤）、嵐大三郎（後室大眞院、中老吳竹、鳥山奧方松崎）、市川子團次（松浦伊織）、尾上梅五郎（宇壺彌九郎）、坂東喜知六（谷玄蕃）、大谷門藏（荒鐵太刀藏）、中村成藏（鎌浦左膳）等であつた。

挿繪にしては國周筆の錦繪二葉である。毛谷主水は卽ち青柳主水である。

大正十五年八月下旬

校　訂　者



筑紫巷談浪白縫（黒田騒動――六幕）

序幕

箱崎八幡石段の場
天神町紅陽院の場

（役名――廣瀬新十郎、太田屋勘兵衛、獵師彌平次、紅陽院安養、西谷藏太、松浦伊織、谷玄蕃、宇壺彌九郎、荒鐵太刀藏、箕浦左膳、奈須野玄伯、菊地豐千代丸、神職鈴戍。小姓花木數馬實は彌平次妹あざみ、菊地の後室大眞院、腰元小磯、腰元○△□等。）

（箱崎八幡の場）――本舞臺四間高足の二重、石垣の蹴込、眞中石段、二重の正面山門の入口、軒口に「敵國降伏」と記せし額を掛け、此前青銅の高麗狗、左右廻廊の書割。平舞臺上手に莫大なる松の立木是に「神木箱崎の松」といふ高札、下手楓の立木、此の前「樹木折り取るべからず」の建札、日覆より同じく釣枝、床几二脚並べ、すべて筑紫の國箱崎八幡境内の體、爰に○△□◎の四人、菖蒲革の袴股立の足輕にて、左右に棒を突き、奈須野玄伯坊主かづら醫者の拵へにて、眞中に控へ是を兩方より支へ足輕取卷いてゐる。この見得大拍子にて幕あく。

四人　此處通すこと、罷りならぬぞ。

玄伯　イヤ、それは御尤もでござりまするが、何も胡亂な者ではなし、れッきと致した宅のある者、そのお咎めには及びませぬ。

○　イヤ〳〵假令胡亂でないにもせよ、今日當社へ若殿の御參詣あるその所へ、ついに見馴れぬ其方が、

□　仔細も申さず賤しいなりで、

△　重役たる谷玄蕃樣に、

○　逢ひたいなどゝは無禮な奴。

四人　下れ〳〵、下りをらう。

ト四人六尺棒にて突立てるを、

玄伯　イヤ、下りませぬ。假令身なりは賤しくも、昔よりして是までに醫道を學び、數多の人を助けてまゐつた奈須野玄伯、用事あつて谷氏にお目にかゝつて申したき一儀のある故參りしそれがし、是非とも此場で逢はして下せえ。

○　ヤア、まだ〳〵申すか強情者め。ならぬと申すに、たつてと言はゞ、

□ 此處にて縛り上げるぞ。

◎ それとも素直に、こゝを下るか。

玄伯 これほど身共が譯を申すに、逢はさぬからは腕づくでも、此處を通つて見るぞよ。

○ エヽ、通してならうか。

四人 下れ〳〵、下りをらう。

ト四人玄伯を戻さうとする、これを支へる立廻り。此時二重の上手より、谷玄蕃くりさげ鬘、麻裃大小にて出來り、

玄蕃 いづれも控へい。

四人 ハツ。

ト控へる。玄伯玄蕃を見て、

玄伯 あなたは谷玄蕃樣、よい處へお出で下さりました。

玄蕃 オヽ玄伯老、先刻より待兼ねをつたわ。

○ 左樣なれば、玄蕃樣には。

三人 アノ此者に、御用あつて。（ト此内玄蕃石段より下りて來り）

玄蕃　いかにも談ずる儀があつて、最前より待つてをつた。
玄伯　それ、どうだ、御重役たる玄蕃樣が、最前よりお待兼ね。それを胡亂と引捉へ、身許を明かせの下れのと、無理無體な雜言、けふの處は許してやるぞ。（トこれにて四人下手へ手をつき、）
○　これは〳〵玄伯樣とやら　誠にお見それ申しまして、
△　何とも申譯もございませぬ。
□　眞平御免、
四人　下さりませ。（トよろしく詫びろ。）
玄蕃　其方達は暫く控へい。
四人　はツ、畏つてござりまする。
ト挨拶して下手へはひろ。玄蕃玄伯あたりを見廻し、思入あつて、
玄蕃　玄伯老、近う。
玄伯　はツ。（ト三味線入り、大拍子になり、）
玄蕃　シテ、頼みおいたる彼の一儀は、
玄伯　それはお氣遣ひなされまするな、幸ひ身寄りが福岡に菓子を渡世に致してをれば、それを竊に頼

み込み、當八幡の供物と同じ巴の供物の紋の打菓子へ誂へ通りに一藥を仕込ませましてござる。

玄番　イヤ出來された、流石は貴老、然し供物の菓子の巴に寸分相違はあるまいな。

玄伯　相違があつて何と致さう。先日送り遣はされた供物の菓子を、雛型に致して此通り、聊か相違はござりませぬ。

ト懐中より紙に包みし、白の巴の紋のついたる打菓子を七つ程出す。玄番受取り、

玄番　それは千萬忝い。（ト開き見て、）成程どれがどれやら見分けられぬ、供物の菓子の出來鹽梅、なかなか感心致した。

玄伯　有難うござりまする。シテその毒藥の打菓子は、どなた樣へあげる思召しでござりまする。

玄番　さればその仔細と申すは、かねぐ\其方も知る通り、此の玄番は當菊地家の重役、若殿豐千代樣のお守り役になるべき身分を、家老鳥山豐後之介が、何か所存のありしにや、分家の家來西谷藏太を眼識をもつて本家へ招ぎ、身共があるを差しおいて、お守り役を勤めさせるは、それがし身にとり口惜しく、一度は無念を晴らさんと思ひ積りし今日、若殿豐千代樣の御成にて、當箱崎八幡宮へ御參詣のあるこそ幸ひ、藏太が手づから差上げる供物の菓子を竊にすりかへ、召上がる際に臨み、毒ある事を身共が見出し、藏太を重き罪に落し、辭職をさせるわが計略。

玄伯　それで樣子が分かりましたが、唯お話を聞いてさへ、癪に觸るは西谷藏太。
玄蕃　やがて貴老の一藥で、首尾とゝのふ上からは。
玄伯　毒藥變じて藥の御褒美。
玄蕃　取らすも此方の身の幸ひ。
玄伯　さうなる時は愚老の身分も。
玄蕃　然らば褒美の、又外に、
玄伯　この後とも惡い事なら、
玄蕃　其方荷擔致すと申すか。
玄伯　サアそこが病の、溜飲でござりまする。
玄蕃　ナニ、溜飲とは。
玄伯　胸に疊んで置きまする。
玄蕃　ムヽ、然らば左樣か。
玄伯　御念に及ばぬ。
玄蕃　オヽ、それで身共も安心致した。

玄伯　左樣なれば玄蕃樣。
玄蕃　神職方へ同道致せ。
　トやはり右の鳴物にて、玄蕃先に玄伯附いて二重上手へはひる。やはり三味線入り大拍子になり花道より腰元小賤、紺土佐の日傘をさし、紅緒の草履にて出て花道に留り。
小賤　御母公樣の御供にて、天神町の紅陽院へ來たので幸ひ思ひ出したは、若殿樣の御代參にお供なされた伊織樣に、どうぞ首尾してお目にかゝり、お話したいものぢやなあ。
　トやはり右の鳴物にて舞臺へ來る、此内正面山門の内より、松浦伊織麻裃大小にて出來り、小賤を見付けて、
伊織　そこへござるは、小賤殿ではござらぬか。
小賤　オヽ伊織樣、よい所でお目もじ致しましたわいなア。（ト兩人床几へ腰をかけ、）
伊織　シテ今日は小賤殿には、何れへ御用でお出でなされた。
小賤　サアけふ天神町の紅陽院へ、御母公樣の御供にて參りましたを幸ひ、僅かな暇を拔けまして、やう〳〵爰へ參りましたも、實はあなたにお目もじして、お話したいばつかりゆゑ。（トいふを冠せ、）
伊織　これはしたり小賤殿、いかゞ致したものでござる。爰は往來それに又、御代參にて群集の中、こ

なたとたつた二人にて、假令御用の話でも、餘所より見らるゝその時は、いかなる疑ひかゝるも
知れず、必ず共にお愼みなされい。
小暖　そんなら爰でお話しましては、貴方は惡いとおつしやりまするか。
伊織　先づ今日はお戻りなされ、いづれ其内表向き御面會致すでござらう。
小暖　左樣なればその時を、樂しみにしてをりますわいな。（ト兩人よろしく、）
伊織　御代參の群集の中、人目に掛らば一大事、必ずみだらはなりませぬぞ。
小暖　そんならあなたは今となり、お心替りでござりまするか。
伊織　さういふ譯ではなけれども、何を申すも往來中ゆゑ。
小暖　その往來も存じてなれど、せめて一言よう來たとおつしやつたとて、貴方のお身に拘はる事でも
ござりますまい。
伊織　それぢやというて、みだらな事を。
小暖　せぬとおつしやる上からは、お心替りでござりまするか。
伊織　決してさうでは、
小暖　そんなら眞實。（ト寄添ふ。）

伊織　替らぬ心。（ト手を取り、引寄せる。）

小賤　嬉しうござんす。

ト兩人よろしく思入。此前より以前の玄蕃先に、宇壺彌九郎、荒鐵太刀藏、麻裃大小にて、二重の上手より出て窺ひゐて、此時、

玄蕃　不義者見附けた。

三人　そこ動くな。（トこれにて兩人びつくりなして、左右へほぐれて、）

伊織　ナニ、不義者と仰せあるが、身共覺えがござらぬぞ。

玄蕃　ヤア覺えないとは言はさぬぞ、最前より後ろにて、慥かに見たる其方達兩人。

彌九　何故あつて引附き合ひ、ひそ／＼話を致しをつたぞ。

太刀　それでも、不義とは、

三人　申さぬか。（ト是にて伊織思入あつて、）

伊織　イヤ不義は決して仕らぬ。アノ、これはかやうでござる。今日御母公大眞院樣には、天神町の紅陽院へ御佛參にいらせられしが、若殿樣が御代參を滯りなく勤めしか承つて參れとの御母公のお使に、是れなる小賤殿がまゐつてござる。（ト小賤にこなしあつて）何と、左樣であらうがの。

小賤　伊織様のおつしやる通り、それに相違はござりませぬ。
立番　イヤ／＼さうは抜けさせぬ、御母公より若殿へ御使を遣はすなら、お守り役たる西谷藏太へ、申聞けべき筈なるに、
太刀　松浦伊織と唯二人、此處にて引附き合つたり、あたりを憚るひそ／＼話、心得難く存ずる故、我我どもが詮議致すが。
彌九　それとも全く御母公よりのお使ひに相違ないといふなら、我々是より天神町の紅陽院へ罷り越し、
立番　御母公にお逢ひを願ひ、小賤にお使を仰せ附けありしか、伺つても大事ないか。
小賤　ア丶モシ、それは。
太刀　留めるはいよ／＼心得難し。サ伊織殿にも、言譯ござるか。
伊織　サそれは。
彌九　サア、
三人　サア、
四人　サア／＼／＼。
立番　ソレ御兩所、御母公にお聞き下され。

兩人　心得ました。
藏太　アイヤ暫く、何れも待つた。（ト兩人立ちかゝりしが、是を聞き控へる。）
三人　あの聲は。
ト三味線入り大拍子になり、上手より西谷藏太、麻裃、大小、太緒の草履子役の若殿、裃大小にて、是を手を引き、後より簑浦左膳更けたる重役、やはり麻裃大小、若君の側につき、後より近習四人附添ひ出來り、
玄蕃　若君樣には、唯今お越しで、
三人　ござりまするか。
藏太　これは〳〵、何れもお役目御苦勞に存ずる。
玄蕃　これは藏太殿、貴殿とても今日は御代參のお供にて、御心勞の程お察し申す。
太刀　シテ唯今我々が、是なる不義いたづらを、詮議なさんと存ぜしを、
彌九　何故あつて貴殿には、待てとお止め、
三人　なされしぞ。（ト藏太思入あつて、）
藏太　待てとお止め申せしは、御代參の御供先にて、無益の暇を費すゆゑ。

三人　何と、

藏太　御同然に今日若殿樣の御供にて、御歸館までは大事の勤め、よし又出先にかやうなるみだらな事が出來なすとも、詮議致すは拙者が役目、貴殿のお役は路次の警固。

三人　ムヽ。

藏太　それぢやによつてお止め申す。若殿樣にもお戻りがけ、紅陽院へお立寄りにて、御母公にお逢ひになれば、その時拙者が伺ひ見ん、然し松浦氏に於ては、みだらな事はなき筈ぢやが、何と左樣でござらうがな。（ト思入にて伊織小賤に呑込ませる。）ムヽさうであらう。それゆゑ身共がお止め申した。いづれも右の次第ゆゑ、先づ〳〵お控へ下され。

玄蕃　イヤ〳〵、コリヤ控へられませぬナ。

藏太　ソリヤ又なぜに。

玄蕃　現在我等が目の前にて、ちよくり合つた彼等兩人。

彌九　それゆゑ、

三人　詮議致す。（ト又立ちかゝる。）

左膳　イヤ暫くお待ちなされ。申さば目出たき御代參に、よしなき事に根を糺し、罪人出すは主君へ對

も、却つて不忠でござらうテ。

彌九　アイヤ〳〵左膳殿、御法を破る不義者を、吟味致すは忠義の爲め、不忠などゝはかたはら痛い、いらぬ口出し無用でござる。

左膳　シテ又不義と仰せあるには、何ぞ慥な證據がござるか。

彌九　イヤ、その證據と申しては。

左膳　御供先の御用筋にて談話致してをつたるを、それを一々不義者といらぬ詮議を召さるより、わが勤役を勵むが肝要、何と左樣ではござらぬか。

彌九　ム、然らば證據がなきゆゑ、不義者ではないと申すか。

左膳　サア身にとつて覺えなき濡衣を着せなば、迷惑いたすものあれば、自然と上を恨むの道理。それぢやによつて、此儀はこの儘、聞き流しておやりなされ。

彌九　然らばどうなりとも、勝手に召され。（ト敵役三人忌々しきこなし、藏太思入あつて、）

藏太　イヤナニ松浦殿、聖賢の敎に申せし如く、男女七歳にして同席せずと、若木の花の其許が艶なる婦女子と唯二人、御談話など召さるゝゆゑ、假令みだらな事がなくとも、人の疑ひを受けるは尤も、必らず以後はお愼みなされい。（ト藏太思入にていふ。伊織兩手をつき、）

伊織　御親切なる其許のお口添にて、それがしも此場の明りが立ちましたが、さもなき時は、イヤサ、左もなき時は二人とも、身に覺えなき不義の汚名を、受けぬのも其許の、

小賤　お執成にて恙う、濟みましたるもあなたのお蔭。

兩人　エ、有難う存じまする。（トバタ／＼になり、山門の内より神主出來り）

神主　はツ、最早祭禮の式にかゝりますれば、是より拜殿へお入りあつて、然るべう存じまする。

藏太　神職方より祭禮の式になる由迎ひとあれば、是より直に御參詣。はツ、若君樣へ申上げまする。お戻りがけに御母公へお目通りの御口上を、是なる小賤に申聞けますれば、暫時拙者は御容赦な願ひ上げ奉りまする。

若殿　そんなら藏太、待つてをるぞよ。

藏太　はツ、直ぐお後より參じまする。

玄蕃　えゝ、見す／＼二人の不義者を。（ト立ちかゝる）

藏太　イヤ、若君樣には拜殿へ。

左膳　先づお越し、

皆々　あられませう。

ト唄になり、神主先に案内して、左膳、伊織若殿に附添ひ、敵役藏太に會釋しながら、忌々しき思入小賤を尻目にかけ、皆々二重の正面山門の内へはひる。藏太後を見送り、

藏太　小賤近う。

小賤　ハ、ツ。（ト合方になり。）

藏太　其方は如何致したものだ。いかに若氣の至りとて、御母公の御供先より、身儘にこれへ參るなどとは以ての外の事なるぞ、今日其方達兩人の不義いたづらの疑ひは、全く以て脱れぬ處なれど、身共が理を非に言ひまげて、其方たち二人を助けしぞ。此後斯樣な事あつては、此藏太まで言譯立たぬ、必ず心を改めて御奉公を大事にせいよ。

小賤　お情厚きそのお詞、唯今より心を改め、此後きつと愼みますれば、お許しなされて下さりませ。

藏太　その心なら折を見合せ、それがしよきにはからひ、二人を女夫に、イヤサ、二人眞當に勤めなば、軈て時節で表向き、女夫になるゝ事もあるゆゑ、必ずそれを待つがよいぞ。

小賤　何から何までお心添へ、私ばかりか伊織樣まであなたのお蔭を以ちまして、事なう濟みし御厚恩死んでも忘れは致しませぬ。

藏太　ハテ、假にも死するなどゝいふ、不料簡は出さぬがよいぞ。

小賤　有難う存じまする。

藏太　サ、そちは是より少しも早く、御母公のお側へ行き、ようお供を致すがよい。

小賤　左樣なれば西谷樣、是にてお別れ申しまする。

　ト合方にて小賤挨拶をして下手へはひる。藏太後を見送り、

藏太　若い同士とは言ひながら、あたりへ心も附けずして、言葉の端を聞かれしゆゑ、途方に暮るゝを助けてやりしが、考へ見れば不便ゆゑ、近日上を執成して、表向きにて二人を女夫に。（トあたりへ思入あつて、）どうぞ致してやりたいものぢや。（トこの時時の太鼓を打込む、）オヽ、最早神殿にて祈禱の始まり。ドリヤ、拙者も參らうか。

　ト石段をあがる。此時花道の揚幕にて、

新十　アイヤ藏太殿。暫く。

　ト三味線入り大拍子になり、花道より廣瀨新十郎、麻裃太緒の草履にて出來り、花道にとまる。藏太石段の上にて、

藏太　さいふは廣瀨新十郎殿、よくぞ當社へ參られたり。

新十　それがしこれへ罷り越せしは、貴殿に面會致したさに。

藏太　何は格別、先づ〳〵是へ。

新十　いかにも、それへ參るでござらう。

ト新十郎舞臺へ來る。藏太石段より下り上手の床几へ、新十郎は下手の床几にかけ兩人思入あつて、

藏太　シテ其許是へ參られしは、拙者に御用の筋あつてか。

新十　いかにも貴殿のお跡を慕ひ、やう〳〵是へ參つてござる。

藏太　シテその仔細と仰せられるゝは。（ト誂への合方になり、新十郎思入あつて、）

新十　仔細と申すは餘の儀にあらず、それがし一度は其許へ御面會の致したく疾より存じをりしかど、元老職の計らひにて、御分家の縫之介樣の御附人になられしゆゑ、面會とてもなりかねしが、この度鳥山豐後殿御推擧によつて、又候や御本家へ戻られしは、盲龜の浮木優曇華の花待ち得たる此の面會、定めし貴殿も御存じの、父の恨みを晴らさんため。

藏太　そりや此方とても同じ事、父上此世を去りてより、早や光陰も矢の如く、金烏玉兎の足早く、徒らに年經れど、父の無念を晴らさんと、目指すは御身唯一人、元の起りは御親父の新左衞門殿が卑怯ゆゑ。

新十　何と。（ト合方キツパリとなり、）

藏太　先君數度の合戰に、濃州船岡川の急流を一番乘りの功名は、卽ちわが父西谷千藏、その時廣瀨が後より乘附け、一番乘の爭ひも、未だにいづれが何れやらその甲乙も極まらねど、正しく父の一番乘の手柄をば、横合より奪はんと巧む廣瀨は手柄盗人。

新十　ヤア口賢くも申せしよな。御身が父の千藏こそ、亡父廣瀨新左衞門が一番乘に渡りしを、五體不具にて口籠り、名乘りおくれし虚に付け入り、後より敵地に乘込みながら、一番乘りと呼はりし西谷こそは手柄盗人。

藏太　ヤア又しても覺えぬ雜言。全く亡父が船岡川の眞魁を致せしを、吃の身として妨げなし、功を貪る不屆奴。いづれが虚なるか實なるか、悴同士が勝負を決し、先祖の甲乙試し見ん。

新十　オヽそれこそ望む所なり、亡父が最期の際までも遺恨は殘る兩家の確執、互ひの父は世を去れど、無念を承け繼ぐ悴と悴。

藏太　その爭ひも戰場の弓矢神なる八幡の、社前に於ての立合も、

新十　神の惠みの引合せ、過ぎし亡父が急流を乘越したるは美濃の國。

藏太　國は違へど筑前の、所の名さへ胞衣浦に、

新十　悴同士が甲乙を、試すも冥府へよき土産。

藏太　かゝる時世も當代の、泰平謳ふ世の中ゆゑ、
新十　互ひに武術も知らざりしが、
藏太　思ひがけなき今日唯今、
新十　御身と、
藏太　それがし、
新十　この場の立合、
藏太　イデヤ數年の、
兩人　遺恨を晴らさん。

ト白囃子になり、兩人股立を取り、藏太刀を拔かうとする。是を新十郎支へ、ちよつと立廻つて上下へ別れ、藏太石段の上より十間の扇を手裏劍に打ち、これを下手にて新十郎キツと受留める、是にて双方一時に拔きつれ、藏太は石段の上新十郎は舞臺の下手にて刀を構へ、キツと見得。誂へ神樂の入りし賑やかなる鳴物になり、新十郎は石段の上へあがり、藏太と立廻る。此時藏太印籠を落す。爰へ山門の内より以前の玄蕃窺ひ出て、これを拾ひはひる。兩人石段をつかひ烈しき立廻りあつて、ト鍔ぜり合ひになる、爰へ正面より伊織走り出來り、

伊織　しばらく〳〵。（ト兩人の中へ割つてはひり、よろしく宥め、）先づ〳〵お鎭まり下されい。

新十　何故あつて横合から、

藏太　待てとお止め、

兩人　召さるのだ。

伊織　拙者が身分で御兩所の、かゝる事件のその中を、お止め申すは恐れ入れど、若殿よりのお召ゆゑ。

兩人　何と。

伊織　先刻西谷藏太殿、御前にお別れなされてより、まだ藏太は參らぬかと、再度の仰せにもどかれず、急ぎのお迎ひ、參れば計らざるこの始末、定めし是には深き仔細のあつての事と推察致せど、何を申すも今日は、御代參の御供ゆゑ、此儘拙者にお預けあらば、いかばかりか大慶至極、廣瀬西谷御兩所とも、此儀只管願ひ奉る。

ト伊織兩手をつき、よろしくこなし。新十郎藏太顏見合せ、双方氣味合ひの思入あつて刀を引く。

藏太　永年たゝまる父が仇、思ひ設けて花々しく、

新十　此場に於て勝負を遂げ、冥府へ手向と思ひしが、

藏太　主命ゆゑに是非もなし、此場は此儘別れても、

新十　思ひ筑紫の不知火に、消ゆる間もなきわが無念、

藏太　同じ所存を箱崎に、納めて後日の面會まで、

新十　汝が首は汝に預ける。

藏太　お主の御用濟むまでは、

新十　命を助け、

兩人　引き別れん。

伊織　然らば拙者が扱ひを、お用ひあつて御兩所とも、此場をお別れ下さるとな。

兩人　いかにも。

伊織　それは千萬忝し。イザ、此の上は神前へ。

新十　然らば藏太。

藏太　新十郎。

新十　又の面會。（トよろしく思入。）

兩人　待つておゐやれ。

　　兩人引張り、時の太鼓にて道具廻る。

（紅陽院の場）――本舞臺三間の間中足の二重、正面大形の襖、この上に一間の地袋戸棚、上手に附屋體、上下茶壁、眞中臥掛窓、塗骨障子を建切り、下手の棲庫裏と見える白壁の窓。此前柴垣、御影の沓脱、いつもの所枝折木戸、此外楓の立木、日覆より同じく釣枝。すべて紅陽院庭先の體。二重の上手に大眞院、切髪の後室、好みの拵へにて前に高杯の茶碗を置き、腰元二人後ろに附添ひ、眞中に紅陽院安養、坊主かつら衣なりにて住ひ、此見得音樂入りの合方にて道具留る。

大眞　今日は參詣の者、種々お手數をかけまして、嘸御混雜にござりませう。

安養　大眞院殿にはようこその御參詣、最早法會の式も終れば、ごゆるりと粗茶一服召上られて下さりませう。

大眞　先主秀行逝去の後は、浮世を離れし大眞院、唯忌日の佛事のみ樂しみとなし暮せしが、はからず當寺へ肥前の國より尊き法師のお直りに、年忌佛事に參詣して、佛經の御講釋聽聞いたすが何より樂しみ、實に極樂の思ひでござる。

安養　冥加なき大眞院殿の御仰せ、佛の教へをお話し申すも拙僧申上ぐるにあらず、和漢の佛書を見聞なし、その儘申上げるゆゑ、是みな如來の仰せ言、我力ではござりませぬ。

大眞　アヽ恐入つたる法師の卑下、今昔ともに高名のお方にならるゝ方々は、皆わが學力やら手練など

を鼻にかけぬが何より證據、それには引換へ世間には、業の未だ積まざるものは、少しの事も自慢顔に見せたがるが此の世の習ひ、貴僧ほどの道德にて御自ら顔なされずに、和漢の佛書と仰せあるは、實に感心致しまする。

安養　その仰せでは痛み入ります、なか〳〵以て拙僧などが及びも絶えた事で、かゝる身に餘つた大寺を引受け、衆生濟度を致しまするも、お屋敷樣は申すに及ばず、諸所の檀家の皆お蔭、偏に他力でござりまする。（ト向うへ思入あつて、）それに就いても先刻より、小姓數馬へ申し附け、御靈前へ供へし白蓮、早く持參いたせばよいが。

腰△　スリヤ方丈樣には、御靈前へ。

腰□　お花をお供へ、

兩人　なされまするか。

安養　少し時候は後れましたが、地内の池に咲いたる蓮は格別の大輪ゆゑ、御佛前へ供へまして又候御回向致しまする。

大眞　それは何より有難い、けふの佛へお志し。嘸喜ぶ事でござりませう。ナウ腰元ども。

腰元　左樣でござりまする。

の閼伽桶へ誂への白蓮を入れ、是を提げて出來り花道に止り思入あつて、

トよろしく思入。合方になり、花道より小姓花木數馬、若衆かづら振袖袴なり、小姓の拵へにて黑塗

數馬　誠や人間の一生は、昨日の花も夕には、嵐もありて散りて行く。この身も兄はありながら、邪ゆゑに過ぎし年、お師匠樣に助けられ、お側勤めの振袖も、澤むらさきの染出しに、姿を包み師の坊が、衆生濟度のその爲に、當寺へお越しのお供して、お目見得するは三年振り、何れも樣のお顏を拜し、この嬉しさはいかばかり、何卒此上相變らず、御贔屓願ひ上げ奉る。（ト見物によろしく辭儀をなし、）先程仰せの此花を、お師匠樣がお待兼ね、少しも早く差上げうか。（トやはり右の合方にて數馬舞臺へ來り、）唯今持參いたしましてござりまする。（ト枝折戸の内へはひり、よろしく住ふ。）

安養　最前より待兼ねをつた。コリヤ數馬、御母公へ御挨拶を申上げい。

數馬　はッ。（ト手をつき、）今日はようこその御參詣、計らずお目もじ致しまして。（ト柔く言ふゆゑ、）

安養　コレ。（ト疊を叩く。數馬心付き、）

數馬　何卒お見知りおかれ下さりませう。（ト男らしく言ふ。大眞院思入あつて、）

大眞　テモ美しきその小姓、扨は法師の御祕藏でござるかな。

安養　はッ、彼は花木數馬と申し、拙僧當寺へ參らぬ先より、召連れましたる若年者、お見知り置かれ

大眞　下さいませう。

數馬　數馬とやら、近う。

數馬　はッ。（ト數馬二重へ上り下手へ住ふ。大眞院數馬をよく〳〵見て）

大眞　スリヤ、これなるが噂に聞きし、花木數馬であつたよな。

安養　大眞院には御存じでござるかな。

大眞　サアその者の儀につき、悴左門之介より妾へ賴み。

安養　シテ殿樣より御母公へ、お賴みとおつしやるは。（ト合方キッパリとなり）

大眞　サアその賴みは外ならず。先頃悴左門之介箱崎八幡より參詣の歸るさ、當寺へ立寄り休息せし時此數馬が薄茶の手前、起居物腰見受しゆゑ、法師へ所望致せしかど、出家堅固を遂げたきゆゑ、武家奉公には差上げぬと、お斷りありしとやら。貴僧も御存じ知らるゝ通り、生れだちより荒々しき左門之介が振舞ゆゑ、どうぞ心を和らげたく、妾は元より奥向にても心を勞する折柄ゆゑ、悴が心に叶ひなば、假令小姓にあればとて、貰ひ受けてやりたいが、子に惹かさるゝ親心。見れば悴が望みしも理なる美しさ、サアうつり心はよく〳〵と、あれが望みを汲み分けて、小姓には下されぬか。（トこれにて數馬ギョッとせし思入、安養こなしあつて）

安養　外ならぬ太守の御所望、いかにも進上申したいが、是には深き仔細あつて、どうも館へは上げられませぬ。

大眞　ム、、シテその仔細と申すは。

安養　サア、その仔細と申すは。（ト安養當惑の思入。數馬進み寄り、）

數馬　モシお師匠樣、私より御母公樣へ申上げるでござりませう。

安養　お話し申すはよけれども、萬事心を、イヤサ、萬事僞りなきやうに、な、それ、詞遣ひに粗末なきやう、心をつけてお話し致せ。（ト呑込ませる。數馬思入あつて、前へ進む、大眞院こなしあつて、）

大眞　イヤ〳〵、わしが聞くに遠慮はない。早く樣子を聞かして下され。（ト合方替つて、）

數馬　お聞きなされて下さりませ。（ト合方になり、）何をお匿し申しませう。產れは肥前の山家にて、かすかに暮せし身の上なりしが、三歲の時兩親に別れし後は兄弟二人、頼りない身に邪險な兄ゆゑ、現在親が血を分けし妹の私を、（ト女の思入。）

安養　コレ。（トこなし。數馬びつくりして心附き、）

數馬　サアせめて妹がある事なら、話し相手にならうもの、親の忌日が參りましても、線香一本供へも致さず、親の位牌に濟みませねば、菩提の爲と二つには、此身の罪障消滅を、願ふ心で家を出て

安養　お師匠樣のお弟子となり、出家堅固に致しますのが、此身の願ひでござりまする。まだ若年ではござりますれど、兄が日頃邪險に致すを、わが罪障と心がつくは、卽ち如來の懺悔滅罪、來世の爲を賴まんと、出家になりたき願ひゆゑ、餘儀なく當寺へ引取りまして、疾にも剃髮いたすべきを、今日まで延引せり。かゝる仕儀ゆゑ御領主のお側にあつて御奉公は、なりかねまする事なれば、

數馬　何卒よしなに、御領主樣へ。

安養　お斷りの儀を、

兩人　願ひ上げまする。（ト兩人始終思入にていふ。大眞院こなしあつて）

大眞　スリヤこれほどに申しても、その事ゆゑに御不承知とな。

安養　サア冥加に餘る事なれど、是と申すも女子ゆゑ。

大眞　エ。

安養　イヤサ、よしなに御子息貞行公へ、お斷り下されい。

トキッパリ言ひ放す。大眞院是非がないといふ思入にて、

大眞　さういふ事なら是非なけれど、どうやら女子の、

數馬　え。
大眞　サア、女子も及ばぬ立振舞、倅に斷り申したら、一倍思ひが増すであらう。
腰△　ほんにお小姓の數馬樣は、女子にしても見まほしき、テモ美しいお若衆樣。
腰□　殿樣がお見初め遊ばしたも、ほんに無理では、
腰△　ござりませぬわいなア。（ト爰へ奥より以前の腰元小賤出來り、）
小賤　ハツ御母公樣へ申上げます。若殿樣には御代參の御祈念相濟みお歸りがけ、唯今當院へお立寄りにござりまする。
安養　ナニ、若殿がお立寄りとな。（ト立上らうとするを、）
大眞　アイヤ安養樣、必らず御配慮下さりまするな。毎度の事でござりますれば、どうぞその儘此處に、
安養　ハツ、左樣なれば此の儘、大眞院樣には。
大眞　ドリヤ、對面を致しませうか。（ト立上り數馬へ思入あつて、）アヽ此やうな小姓が、左門之介の側に附添ひをらば和がうに、出家する身に是非もなし、アヽ是が所謂佛說に、緣なき衆生は度しがたしといふのぢやなア。
小賤　御母公樣には、お廣間へ。

安養　先づお越し、
皆々　あられませう。
ト唄になり、大眞院先に小賤腰元△□附添ひ奥へはひる。兩人後を見送りほつと思入あつて、
數馬　お師匠樣。
安養　數馬、ひやいな事であつたなう。
ト此以前下手より彌平次、月代、着流し三尺帶にて出來り、柴垣の蔭に窺ひゐて、この時枝折戸をあけ、
彌平　お上人樣、御機嫌ようござりまするか。（ト内へはひる。數馬彌平次を見て、）
數馬　ヤ、お前は兄さん。（ト立たうとする。）
安養　ア、コレ。（ト奥へこなしあつて制す。是にて數馬下にゐる。安養あたりへ思入あつて、）オ、こなたは獵人彌平次、どうして是へ來られたか。そこは庭先、マア〱こちらへ上らつしやれ。
彌平　左樣なら、眞平御免なせえまし。（ト禪の合方になり、彌平次二重下手へ住ふ。）
安養　シテ彌平次殿には、縁もなきわしが所へ何用あつて、こなたは尋ねてござつたのぢや。
彌平　モシ、上人樣、その御挨拶は情ねえ。成程こなたのいふ通り、丁度今年で三年後、此妹をお前

さんに。(ト大きくいふを、數馬制して、)

數馬　アヽモシ。(ト奥へ氣がねのこなし。)

彌平　イヤサ、此の若衆を百兩の涙金で兄弟の縁をすつぱり切つてしまひ、こんたに呆れて獨りもの、まだ其頃は私も手に鐵砲は持ちながら、内にかけたる熊の膽の、看板ばかりで内證は、山に緣ある狐を渡世に側中化してぶつたくり、初めはまんがよかつたが、出來のいゝのに方々から綽名もだつきや九尾と呼ぶ腕ッこきに飛込まれ、いゝ目の起きたお先狐も、忽ち調子が狂ひ出し、どん／＼向うに吸上げられ、南龍ならば祈りも効かうが、根が獵人ゆゑ狐に嫌はれ、到頭貰つた百兩の、金も殘らずすつてしまひ、それから段々とる年に、嚴しいお觸の勝負事は、さらりと廢めて堅氣になり、山獵師を一三昧に精を出してをりましたが、假令緣が切れましても、さて戀しいのは眞身の兄弟、二十年此方音信不通で、一度便りも出來ぬ事ゆゑ、無事に暮してゐる事かと、遙遙尋ねて參りました。假令兄弟の名乘はせずとも、久し振りでよく來たと、澁い茶の一杯も、どうぞ飮ませて下せえまし。

ト彌平次よろしく思入あつていふ、此内數馬始終腹の立つ思入にて、

數馬　モシ兄さん、お前はよくものめ／＼と、どの顏下げて來なさんした。まだその上に今のやうに三

年此方音信不通、無事に暮してゐるかと思ひ、はる／＼尋ねて來たなど〻、言はれた義理ではごアざんすまい。またお前と内にゐる時、僅かな金に差詰り、私を博多の柳町へ勤めに賣らうといふ所へ、お師匠樣がお泊り合せ、切羽詰つた五兩の金を、見兼ねてお惠み下すつて、女郎に賣られる苦界を脱れ、ヤレ嬉しやと思つた時の御恩を直に打忘れ、その折御所持の胴卷に殘つてありし後金の九十五兩に目がくれて、既にあなたの寢込みをば、

彌平　コレ／＼。（ト言つては惡いといふ思入。）

數馬　エヽ言はいでかいなア／＼、その大枚のお金をば取らうと企んだ仕事さへ、天罰ゆゑに仕損じて、お上人樣に押へられ、其場で直に御說得。この後必らず堅氣になれと、殘りのお金の九十五兩を資本にお貰ひ申しながら、博奕で取られてしまひしなど〻、よくのめ／＼と此處へ、ようもお前は來なさんしたなア。（ト數馬疊を叩き腹の立つこなし。）

彌平　さう又俺の身の恥を並べりやァこつちも又、言はにやアならねえ事がある。上人樣から五兩の金貰つた後の九十五兩、合して都合百兩の、金の轡でおぬしの緣切、今年は丁度十七の、花の盛りの妹を、側へ引寄せ寵愛して、（トいはうとするを數馬心遣ひのこなしにて、）

數馬　モシ／＼兄さん、お上人樣のお側にて、あらう事かあるまい事か、あなたに限つてそのやうな事

が。

彌平　假令あらうがなからうが、表向は小姓にして、女を側へ引付けりやア、言はずと知れた妾狂ひ。

數馬　モシ〳〵お前は滅相な、何を證據にそんな事を。

彌平　イヽヤ、さうだ〳〵。

ト數馬氣がれのこなし。彌平次わざと大きく言ふ。安養迷惑するこなしにて、

安養　アヽコレ、それは兎もあれ靜かに致せ。コリヤ彌平次、定めし其方の料簡にては左樣に思ふか知らねども、樹下石上を宿となし名慾二道を離れし身が、何故色香に迷はうぞ。其方の手許へ置く時は、必らず果は苦界へ沈み、あれが不便と思ふゆゑ、金を遣はし貰ひきりしが、其方の心が眞底より堅氣にさへなりし時は、又元々へ返して遣はす。それぢやによつてそのやうに、證據もなき事を申さずと唯々その身をまつたうに、堅氣になるが專一なるぞ。

ト安養よろしくいひ諭す。彌平次成程といふこなしあつて、

彌平　さういふあなたのお心とも知らぬ凡夫の淺ましさに、厭な事も申しましたが、此後心を改めまして、堅氣になりますす料簡ゆゑ唯今爰で申した事は、御免なすつて下さいまし。

安養　こなたがさういふ心なら、事は好まぬ沙門の身の上。

數馬　是からお前も心を入替へ、きつと堅氣になりなさんせ。
彌十　そりやァおぬしが言はずとも、お上人様の異見につき、是から堅氣になる心。その代りに一つのお願ひ。
安養　ナニ、願ひとは。
彌十　どうぞ以前の誼がひに、お出入りさせて下さいまし。（トこれを聞き數馬ギヨッとして、）
數馬　どうしてお前はお出入りを。（トいふをかぶせて、）
安養　アコレ、折角參つた兄の彌平次。
數馬　イヽエ、兄ではござりませぬ。
彌十　コレサ、それでもあなたのお詞だ。
數馬　それおやというて。
安養　ハテマア、それはそれにして、奥へ參つて茶でも飲みやれ。
彌十　左様ならお詞に甘へ、御馳走になりませう。（ト立上る。）
數馬　アモあんまり、のめ〳〵と。（ト彌平次へこなし。これを安養隔て、）
安養　サアかう來やれ。（ト唄になり、安養先に彌平次奥へはひる。合方彈流し、數馬後見送り思入あつて、）

數馬　ア、折も折とて御領主様の御母公様がこのわしを、男と思うて御所望も、女というては斷れねば餘所にいひなし御師匠様がお斷り下されし、時も時とて在所から、心よからぬ兄さんが、尋ねて來たも庭口から、委細の譯を聞いた樣子、堅氣になりしとあるからは、さういふ事もあるまいが又惡法でもかゝねばよいがなア。

ト思案の思入。爰へ上手の窓を明け、以前の宇壷彌九郎窺ふ。數馬是を見て思入あつて、男のこなしになる。

御師匠様より申付かりし、最前持參の此の白蓮、ドリヤ御佛前へ供へて來ようか。

ト立上り、下手へ行かうとする。彌九郎窺ひ出て、

彌九　コリヤもう、たまらぬ。（ト抱付くを數馬振拂ひ、）

數馬　エヽもう、何をなされまする。

彌九　コレ〳〵數馬、何をとは曲がないぞよ。（トをかしみの合方になり、）いつぞや殿のお供にて箱崎八幡より戻りがけ、當寺へ參りしその時に、殿樣にもお見初めなされば、又お手前樣もお見初めなされ、こなたにぞつこん執心致した。物腰といひ口のきゝやう、女も恥づべき美少年、まづ役者に譬へて見れば、澤村訥升尾上梅五郎と申す處ぢや。あれらは舞臺の色事師、身共などは現世の

色事商ふ家柄ぢやゆゑ、その證據には此通り、ごほん〳〵の咳はせかぬ、兩眼ともに窪むが證據ぢや。安養和尙の思ひ者にて、手放す事がならぬとあらば、たつた一度で大事ない、どうぞ思ひを晴らさせてくりやれ。（ト側へ寄るを數馬飛退き。）

數馬　御領主樣の御家來ゆゑ、萬事に控へてをりますれば、餘りみだらなそのお詞、此後仰せは御無用でござりまする。（ト少しムツとして言ひ放す。）

彌九　成程少しツンと致して、此後仰せは御無用でござりますると申した所は感心ぢや。おぬしが左樣に立腹致せど、どうぞ此の身の願ひをかなへて。

ト數馬に抱付き、懷ろへ手を差込む。數馬アレエ〳〵と振り拂すを、彌九郎無理に手を差込み、びつくりして、

ヤア、乳房の樣子は、正しく女。

數馬　エヽもう、お放しなされませ。

ト振拂つて逃げにかゝるを、彌九郎袂を捉へ兩人ちよつと立廻りの內、奧より荒鐵太刀藏、以前のなりにて出來り、此中へはひる。彌九郎數馬と思ひ太刀藏へ抱附く。此間に數馬花手桶を持ち奧へはひる。太刀藏は彌九郎を突放し、

太刀　エヽ彌九郎殿、何をさつしやる。
彌九　エヽ、今のは太刀藏殿、お手前か。（トこれに彌九郎心付き。）
太刀　如何いたしたものでござる。
彌九　イヤこれは大變。（ト彌九郎胸の惡きこなし。）
太刀　イヤ人の事よりお手前こそ、男戀しの女中にさへ、嫌はれるくせとして出來もせぬ小姓を口說き、無駄を知らないお方ぢや。
彌九　ハテ手前が彼めを口說いたのは、色氣ではござらぬわい。
太刀　ムウ色氣でないと仰せあるお手前樣が、何故に彼めを捉へ、無態の手籠め。
彌九　先づしばらくお待ちなされい。（ト彌九郎上下を窺ひ、誰もゐぬといふ思入あつて。）アノ小姓の樣子を見るは、實は殿より竊の御內意。（ト太刀藏不審の思入あつて。）
太刀　ナニ、殿より御內意とは。
彌九　サア先達といひ又今日、御母公大眞院樣より御直々に安養法師へ、小姓數馬を再度御所望なされし處、法師が承引なきは、正しく女犯と鑑定致せし通り、案に違はず、コレ。（トあたりへ思入あつて太刀藏に囁き。）ナ、でござる。

太刀　扨は女でござるとな。（ト大きく言ふ。）

彌九　アコレ。（ト押へ。）此事殿へ申し上げ、安養法師に辛き目見せん。

太刀　併し婦人と聞く上は、身共も一倍。

彌九　思ひの増すのは尤もぢやが、やつぱり拙者の手際でござる。

太刀　イヤ貴殿と違つてそれがしが、手際をふるへば十が九つ。

彌九　出來ますまいな。（ト彌九郎詰寄る。）

太刀　よく當りました。

彌九　それで身共も。

太刀　エヽ。（ト兩人顏見合せ。）

彌九　安心致した。（ト木魚入りの合方にて、この道具まはる。）

（客殿の場）━━本舞臺一面の平舞臺、向う九尺の大床の間、此下金地へ虎を畫きし襖、上下杉戸、裾通り蓮の彩色畫。日覆より大欄間をおろし、舞臺花道とも高麗縁の薄縁を敷詰め、揚幕の所杉戸の出はひり。すべて紅陽院客殿の體。爰に以前の大眞院、若殿褥に住ひ、後ろに腰元二口附添ひ、上

手に簑浦左膳、杉浦伊織、下手に西谷藏太、折敷へ供物の菓子を載せ、これを前に置き、下手に腰元小賤仕ひゐる。此後ろ以前の近習四人附添ひ、此の見得琴の入りし靜かなる合方にて、道具納まる。

藏太　若殿樣には今日は、御代參の御祈念も事なう濟んで大慶至極。

左膳　お日和とても長閑にて、境内の景色御覽遊ばし、

伊織　まだ御幼年にはあらせらるれど、流石は世繼ほどあつて、

小賤　その御威勢の顯はれて、お附き遊ばすあなた方も、

腰△　それ〴〵鼻が高いと申すもの。

腰□　これに列なる私共まで、

藏太　一同恐悅。

皆々　申上げまする。（ト皆々辭儀をなす。大眞院思入あつて、）

大眞　お守り役の藏太を初め、今日君に附添ひし皆の者の心遣ひ、大眞院察し入るぞよ。

藏太　ハツ恐れ入つたる御仰せ、先刻是なる小賤より御母公御佛參と承り、右の趣申上げしに、御立寄なされたき、仰せに直樣その場より、當寺へ參り計らずお目見得。

左膳　幸ひ是より御歸館には、大眞院樣と御同伴にて、當境內の七草を御覽遊ばすも又一興。
伊織　箱崎社內と事變り、色づく楓菊の花壇、寺院の庭は又格別。
小賤　定めしこれはよいお詠め、ならう事ならお徒歩にて、私共も松浦樣と、
左膳　エ。
小賤　イエ、私共も御一緒に、お供致したうござりまする。（ト藏太思入あつて、）
藏太　何はしかれお上には、今日八幡宮へ捧げし御供物、これにて頂戴あられませう。
　　ト折敷の菓子を大眞院の前へ出す。
大眞　何樣武運長久祈禱の御供物、有難く頂戴致さう。然し是はわしよりも、家の繼目の豐千代から、先へ頂戴しやいなう。（ト大眞院供物を豐千代の前へ出す。）
豐千　ハツ、御供物頂戴致しまする。
　　ト豐千代菓子を取らうとする。此前より上手の杉戸を明け、玄蕃誂への狆をかゝへ窺ひゐて、此時狆を放す。差金にて狆眞中へ來り件の菓子を食ふ。皆々びつくりして、
藏太　ヤア神へ捧げしこの供物を、踏み荒したるのみならず、
小賤　若殿樣のお手もつかぬに、

伊織　みだりに喰ふ手飼の犬、
左膳　きつと成敗致してくれん。（ト立ちかゝろたを、）
大眞　アヽコレ待ちや。けふは目出たき祭禮に、ましてや爰は寺院の事ゆゑ、畜類なればその儘に致して置いたがよいわいの。
ト此内狆はこちらへ來り、頻りに苦しむこなしあつて、ぱつたり倒れる、皆々びつくりなし、
皆々　ヤヽ、此體は。（ト此時玄番ツカ〳〵と出て、）
玄番　主を害する西谷藏太、何故主を害さうぞ。そこ一寸も動くまいぞ。
藏太　貴殿は谷玄番殿、何故主を害さうぞ。
玄番　默れ藏太、其許今日御代參のお供を致す前々より、かゝる巧を企て、供物の菓子へ毒を仕込み、御母公初め若殿の御命を縮め奉らんとは、犬に劣りし人非人めが、かやうな奴を生け置いては、如何なる事件のあらんも知れず、きつと成敗致してくれるぞ。
藏太　お控へなされい玄番殿。餘人は知らず此の藏太、かゝる企をなすべきや。我父西谷千藏は過ぎし天文年間富田に於ての合戰に、御先祖菊地秀行公の御供なして數度の血戰。勳功によつてその時より即ち家祿頂戴なし、世俗に申す鎗先の功名ゆゑに登庸せし忠臣無二のわが家柄、何とてかゝ

る巧をなさうや。近頃申すも烏滸がましけれど、若君のお守役を勤めをれば、恐れ多き事ながら
君の御命縮めんと、思ふ惡心あるならば、いかで供物へ毒を仕込み、かく廻り遠き事をなすべき
ぞ、ム丶察する所それがしを罪に取つて落さんと、思ふ輩が仕業ならんか。

立番 ヤアかゝる惡事を巧みながら、のめ〳〵とした其の言譯、但し覺えがないといふ、何ぞ慥かな證據があるか。

藏太 サア、その證據は。（ト當惑のこなし。）

立番 證據がなければ、伏罪致すか。

藏太 假令證據はござらずとも、身共に於ては左樣な事は。

立番 なければ此場の面晴に、是ぞといふ證據を出すか。

藏太 サア、別に證據と申しては。

立番 なければ此の場で、白狀致すか。

藏太 サそれは。

立番 サア。

兩人 サア〳〵〳〵。

立番　よもや證據はあるまいがな。（ト藏太思入あつて、件の菓子に心付き、）

藏太　その證據は、まヅ此の通り。（ト菓子を取つて食はうとするを、）

立番　イヤ、さうはならぬ。（ト藏太を止め下手に向ひ、）此奴めを引括れ。

太刀
彌九　ハツ。

ト下手の杉戸より彌九郎、太刀藏捕繩を持ちバラ〳〵と出來り、左右より藏太の兩手を押へるを振拂ひ、

藏太　ヤア、何故それがしを。

彌九　ヤア惡事露顯にこれまでと、おのれが仕込みし毒を喰ひ、死んで言譯する氣であらうが。

太刀　一味荷擔の奴輩を、一々探索いたすまでは、滅多に命は捨てさせぬぞ。

立番　ソレ藏太めを、引立てめされ。

彌九
太刀　ハツ。（ト兩人立ちかゝるを、）

左膳　アイヤ御兩所、お控へされい。

彌九　何故あつて左膳殿には。

太刀　待てとお止め、

兩人　召さるのだ。

左膳　サアお止め申すは其許が越度にならぬお爲を思ひ、いまだ罪の黑白も、しかと分らぬその先に繩かけなば、そでない時は貴殿は免職。

敵役三人　何と。

左膳　サアそれぢやによつてそれがしが、お止め申すは其許の、お爲を存じて申す事。

彌九　イヤそれは千萬、

兩人　忝い。

玄蕃　然らば罪科が分らぬとて、此儘藏太を差しおいて、自殺致した其時は、藏太に代り其許が、此言譯を召さるゝか。

左膳　サアそこでござる。

敵役三人　どこでござる。

左膳　餘人は知らず藏太殿は、逃げ隱れを致すやうな武士にてはござらぬぞ。そこを見拔いてそれがしが繩かけるにも及ばぬと、お止め申すがあやまりでござるか。

玄蕃　さう父貴殿が請合ふなら、

太刀　こりや間違ひもござるまい。

彌九　繩にかけるは、天下の大法、

玄蕃　是非がござらぬ、控へておゐやれ。（ト此内伊織、小賤顏見合せ、思入あつて兩人前へ出て、）

伊織　イヤ、その科人は、外にござる。

皆々　何と。（ト合方になり、）

伊織　今日若殿の御代參ゆゑ、八幡宮へ供へし供物に、南蠻秘法の一藥を調達なせし此の伊織、

小賤　その企てに合體なし、若殿樣を失はんと、荷擔なせしは此小賤、

伊織　かく明白に露顯の上は、所詮遁しおほせ難し、

小賤　何卒是にて、二人の者を、

伊織　御成敗、

兩人　下さりませ。（ト兩手をつきよろしくこなし。）

玄蕃　扨こそ同類がふえて來たわえ。

太刀　イデ、それがしが、

彌九
太刀　繩打つて。（ト立上ろ。）

大眞　アイヤ兩人、控へい。
立番　デモ、白狀せし、
敵役三人　同類ゆゑ。
大眞　イヤその科人は、外にあらう。
敵役三人　何とおつしやる。
大眞　日頃忠義な藏太をはじめ、伊織や小賤が企てなし、君や妾を失はんと毒害致さう筈がない。コリヤ惡人が外にあらうが。
伊織　サア、その企てはそれがしゆゑ。
小賤　どうぞ此の場で、
兩人　御成敗を。
大眞　其方たち二人は罪を負ひ、藏太を庇ふ心であらうが、却つてそれは惡かるべし。若しも後日に外外よりかゝる企て致せし者が、出まいものでもないゆゑに、そこらあたりに。（ト敵役三人へ思入。）
敵役三人　エ。
大眞　サアそこらこゝらを詮議をしたら、出まいものでもない程に、迂闊な事は申すまいぞや。

伊織　スリヤ、是ほどに申上げても。

小賤　藏太樣のお命乞ひ、

兩人　私共には叶ひませぬか。

左膳　御母公よりのお詞ゆゑ、先づ〳〵控へておいでなされい。

伊織
小賤　ハア、。（ト泣伏す。）

玄蕃　ハッ、御母公へ申上げまする。此藏太を拷問なし、篤と探索致せし上にて、委細は又候申上げます。（ト大眞院愁ひの思入あつて、）

大眞　コリヤ藏太、そちが心を存ずるゆゑ、不便の事とは思へども、先づ差當り今日の供物を持參のその役は、其方が掛りの事ゆゑに、疑ひかゝるこの汚名、武士の身にとり嘸や術なうあらうが、言ひ說く時節を待つてゐやいなう。（トよろしく思入にていふ、藏太はッとうつむく。）

藏太　有難きその仰せ、わが代になり何一つ、是ぞと申す功もなくして、身に餘りたる家祿を頂き、勿體ないと存じをりしに、此度計らず御分家より、元老鳥山豐後殿の推擧によつて御本家へ、若殿守護を仰せつけられ、爰ぞ御恩の報ずる時節と、思ひし甲斐も情なや、かゝる椿事出來なし、此儘汚名に沈むとも、何の厭ひは致さねど、唯若殿の御身の上、油斷ならざる時節ゆゑ、よしなに

玄蕃　頼むは左膳殿。何卒貴殿にお頼み申す。（ト涙ながらによろしく頼む。）
玄蕃　イヽヤそりやならぬ。此の後役は則ち玄蕃。汝如きの指圖は受けぬぞ。
豐千　イヤその方はきつい嫌ひぢや。予が守り役は、藏太ぢや〳〵。
玄蕃　ハッその仰せ御尤もにはござりまするが、藏太めはあなた樣を毒殺なさんといたしました、恐しい奴でござりますれば、唯今より御前を退け、きつと成敗いたしまする。
豐千　イヤ予は殺されても大事ない、藏太は側へ置いてくりやれ。（トこれを聞き藏太落涙のこなし、）
藏太　左程までに拙者めを思召して下さりまする、若殿樣の御心中、申上げやうもござりませぬが、かかる汚名の晴れますれば、直樣お側へ上りまして、又候御守護致しまするが、もし此儘佞人の、
敵役三人　エ。
藏太　イヤサ、佞人なりとの疑ひに、蔽ひし雲の晴れやらず、淸き心の有明を、見ぬその時は御母公や若殿樣にお目見得も、これ今生のお暇乞。
豐千　そんならどうでも其方は、予が側にはをられぬとか。
大眞　サアそなたがそれ程思ふゆゑ、どうぞ側へ置きたいが、置くに置かれぬ此の場の仕儀。
左膳　見す〳〵そこらに探索の、的はあれども是ぞといふ、證據なければ是非もなし。

伊織　せめて二人が最前の、イヤサ最前よりの此場の汚名を。
小賤　御恩返しと思へども、お上の仰せもとかれず。
腰△　數なりませぬ私共まで、
腰□　實に涙がこぼれまする。
玄蕃　イヤお上を初め皆の衆が、藏太を左樣に御贔屓あるが、唯今此場でそれがしが、若し見出さぬ其時は、若殿樣には一大事。
太刀　その時いくら後悔するとも、後の祭で無駄な事。
彌九　所を是なる玄蕃殿が、藏太の惡事を見出せしは、御家へ對して大忠節。
玄蕃　誠らしく見せかけても、其場で露顯いたすといふは、爰が當家の威勢といふもの。イヤハヤ下司の智慧と申すものは、はしたないものでござる、ハヽヽヽ。（ト藏太顏を上げちつと思入あつて、）
藏太　梅花の下は闇夜に行くともその薰隱れなし。善惡共に天眼の光りは正に明かなり。一旦汚名は受けるとも、いつかは天の惠みにて。（ト玄蕃三人を見て、）イヤサ惠む御家の礎たる、元老職の御處置を受けん。
玄蕃　ソレ藏太めを、引立て召され。

太刀　ハツ。(ト近習に指圖する。近習兩人繩取にて、太刀藏、彌九郎、藏太の側へ行き、)

彌九 太刀　藏太、お立ちやれ。

ト是にて藏太辭儀をなし、しを〳〵と立上り、太刀藏、彌九郎近習兩人附いて花道へかゝる。

豐千　コリヤ〳〵藏太。

藏太　ハツ。(ト花道に平伏する。)

豐千　其方は、もう行くか。

藏太　ハツ、もうお暇致しまする。

豐千　予も一緒に行きたいの。

左膳　これは又思ひも寄らぬ、彼が參るその先は怖い所でござりますれば、なか〳〵お出ではなりませぬ。サヽ、拙者がお相手仕りませう。

豐千　エヽ、控へをれ。(トキッといふ。)

左膳　ハツ。

藏太　左樣なれば、お二方樣。(ト豐千代立上つて、ちつと藏太を見て愁ひの思入にて、)

豐千　殘り多いぞ。

藏太　ハツ。

ト花道へ泣伏す。これを三重になり、彌九郎太刀藏、側より「歩め〱」と急き立てる。藏太舞臺へ心の殘るこなし。豐千代大眞院は伸び上り花道へこなし。双方より見送り見返り藏太揚幕へはひる。

玄蕃思入あつて、

玄蕃　イヤ惡い事は出來ぬものだ。まだ善惡も分らざるその幸先に、かくの仕合せ。是と申すも忠臣の家來が數多く附添ひをれば、聊かも惡事は出來ぬしるし。恐悦申上げまする。

ト誂への合方になり、下手の杉戸をあけ、安養出來り下手に住ひ、

安養　委細は一と間で承りしが、思掛けなき椿事出來。まだ伏罪の樣子もなければ、いかゞ御處置か存ぜねど、何卒西谷藏太殿罪科の納まり、御仁慈の御沙汰の程願ひ奉ります。

大眞　安養法師のお心添へ、見す〱藏太が企みでないと知れてあれば、汚名の疑ひ晴れ、赦免になるでござりませう。

玄蕃　イヤ〱、それが大きな御油斷、表は忠義に見せかけても、心の内は大惡心、えてニコ〱と笑ふ奴に、少しも油斷はなりませぬ。

安養　そのお詞も一理あれど、是まで首尾よくお勤めなされし西谷氏の事なれば、唯只管に助命になる

やう、願はしう存じまする。

左膳 思はぬ儀にて貴僧にまで、御心配の相掛けまして、

伊織 何とお詫の致しやうもなく、偏にお許し下され。（トこの時七ツの時計）

小賤 あのお時計は申の下刻。

玄蕃 イザ御母公には御歸館あつて、然るべう存じまする。

大眞 左樣なれば、安養法師。

安養 只管寛仁大度の儀を、願ひ上げ奉りまする。

大眞 その内吉左右お知らせ申しまする。

安養 ハツ。（ト挨拶して）

左膳 それ大眞院樣のお立。（ト此時花道にて）

大勢 ハアヽ。

左膳 イザ、お越し、

皆々 あられませう。

ト唄になり、大眞院豐千代の手を引き、玄蕃、左膳、伊織、小賤、腰元△□近習兩人附添ひ、花道へ

はひる。安養思入あつて、

安養　最前よりの樣子をば襖越しに承はりしが、正しく外に佞人あつて、忠臣たる藏太殿を、罪に落さん企ならんが、唯氣の毒なは藏太殿。かゝる汚名にて捕縛せられて引かれしか、ハテどうか仕樣がありさうなものぢやなア。（ト合方になり、奧より數馬出來り、）

數馬　御師匠樣、ひよんな事になりましたわいなア。

安養　ナニ、ひよんな事になりしとは。

數馬　サア御領主樣の御家來にて、彌九郎樣といふお方が、此身を捉へ戲れ言によそへて、懷ろへ手を差入れて乳房を捉へ、正しく女と覺りし樣子。此上爰にをる時はお師匠樣や私に、いかなるお咎めあらうも知れず、そこをよく〳〵考へまするると、もう此お寺にはをられませぬ。

ト是を聞き安養びつくりなし、

安養　ムヽ、スリヤ今日御代參より若殿樣のお供して、當寺へ來りし彌九郎が、其方を捉へて戲れし、その節女と覺りしとな。五戒を保つ身の上に、三惡道は破らねど、女人を寺に置く時は、檀家の聞えと其方を、若衆に仕立て小姓となし、是まで側に置きつるが、此程領主左門之介殿、仰せありしを餘事に紛らし、その場は難なく斷りしが、又候今日大眞院御佛參にて再度の御所望。斷り

言ひしのみならず、其方を女と悟られては、最早側へは置き難し。とあつて餘所へ預けんにも、
法類末寺は許多あれど、出家の身ゆゑ明かしかね。

數馬　眞身の兄は丁度ゐながら、心よからぬ生れゆゑ、迂濶にこの身も賴まれず、お師匠樣。

安養　數馬、アヽどうか仕樣が、

兩人　ありさうなものぢや。

ト兩人思案の思入。此時下手の杉戸を明け、太田屋勘兵衛、羽織着流し町人のなりにて出て、

勘兵　その御心配には及びませぬ。（ト此聲にびつくりなし、勘兵衛を見て、）

安養　オヽ、こなたは檀家の勘兵衛殿。

數馬　そんなら何かの樣子をば。

勘兵　ヘイ、殘らず聞いてをりましたが、數馬殿は私が慥にお預かり申しませう。

安養　エ、スリヤ、アノこなたが。

數馬　私を。（ト合方になり、勘兵衛あたりへ思入あつて、）

勘兵　お預かり申しますのは、外の事でもござりませぬが、此の勘兵衛も一人娘を御領主樣の奥向へ御奉公に出しまして、毎年春の宿下りに宅へ參つて話には、當殿樣の御氣質は言出した事はどこが

どこまで、剛情我儘のお產れ故、何を越度にどのやうなお咎めあらうも計られず。何でもこれは今宵の內に、數馬殿を私が連れて參つて竊に匿し、行方知れずとおつしやるのが、上分別でござります。

りまする。

安養　スリヤ勘兵衞殿が是なる數馬をアノお匿ひ下さるとか。それは千萬忝い、實は唯今此所で當惑致しをつたる所、よくぞこれへ來られしぞ。

勘兵　幸ひ是へ參りましたは、今日御母公大眞院樣のお供を致して參りました、小賤と申す腰元が私の娘ゆゑ、母があれに用事あつて、傳言を致しましたので、逢ひに參つて計らずも、お次で聞いてをりました。

數馬　そんなら先刻のお美しい、お腰元の小賤樣は、あなたのお娘御でござりましたかいなア。

安養　不思議な緣とは申しながら、富田村の淨林寺より、當寺へ參るもこなたの周旋。

數馬　又候此度私が、身の上までもあなたのお世話。

安養　いかなる前世の因緣やら、かうまで御世話下さる段、

數馬　何とお禮申しませうやら、

安養　御親切忝う存じまする。（トよろしく禮をいふ。）

勘兵　イヤそのお禮では痛み入りまする。當寺を再興致しましたも、あなたが淨林寺にいらつしやる時世話人ゆゑに私がお出でを願ひに參りし所、早速のお聞濟みにて直樣是へお越し下され、忽ち當寺も此やうに建直りましたのも、みんなあなたの御丹精、お禮はこつちで申す筈、せめてあの時の御恩返しまでに、今度お世話を致しまする。

安養　何から何までこなたの心配、行末ともに數馬が身の上。

數馬　よろしうお願ひ申しまする。

勘兵　御心配なされまするな。町人ながら筑前の博多の町で太田屋の勘兵衞と呼ばれては、菊地の城下で五本の指、その織元の主人ゆゑ、どんな絡んだ糸筋でも、纏める機の生業柄、氣をやきもきと思召さずと、ずつとすまして博多すぢ、その身を隱す羽織地も、心の帶の締め括り、横から獨鈷の筋が出るとも、知らぬ顏して茶獻上、指でもさゝせや致しませぬから、マア落着いてござりませ。（ト勘兵衞よろしく思入。時の鐘鳴る。安養こなしあつて、）

安養　アリヤもう入相、日が暮れたれば折を見合せ、書院の玄關に重ねある、明長持へこつそりと、

勘兵　仕出しの膳部と見せかけて、

數馬　どうぞあなたのお宅まで。（トいふをかぶせて、）

安養　アコレ、壁に耳ある世の譬、必らずともにひそかにせられよ。（ト此時雨車になる。）幸ひ降り出す雨にまぎれ、
數馬　落ち行く道も町を越し、
勘兵　一寸先も見え分かぬ
安養　霧の覆ひし田圃道、
數馬　田の面飛び交ふ螢火に、
勘兵　うつる案山子も人影と、
安養　引板の鳴子の音に怖ぢて、
數馬　逃げる蛙の臆病者、
勘兵　雨も小止みて、
安養　いつかまた、
勘兵　晴れる時節が
三人　ござりませう。

ト三人よろしく思入。此時上手の杉戸を明け、以前の獵人彌平次窺ひゐて、思はず數馬と顏見合せび

つくりして、

數馬　アレ、兄さんが。（ト後へさがる。）

ト數馬を隔て彌平次と顔見合せ、杉戸をぴつしやりしめる。是にて勘兵衞後へ下るを道具替りの知せ。三人はツと思入。惡い者に見られたといふこなし。雨車、合方にて、此の道具廻る。

勘兵　アコレ。

（表門の場）＝＝本舞臺一面の平舞臺、正面瓦屋根、朱塗りの表門、軒口に「極樂山」と記したる額、上手の柱に「弘法大師」といふ板札を打ち、左右練塀、後ろ一面の黒幕、門の前に石橋をかけ、此下溝の心にて諸所に捨石を置き、上手柳の立木、日覆より同じく釣枝、すべて紅陽院表門、夜の體。木魚入りの合方、雨車にて道具納まる。と花道より谷玄蕃、袴、背割り羽織、足駄にて澁蛇の目の傘をさし出る、後より奈須野玄伯、尻端折り跣足にて白張の番傘をさし、幕明きの醫者にて跡をつけ出來り、玄蕃をすかし見て、

玄伯　モシ〳〵夜目で確とは分かりませんが、そこへお出でなされますのは、玄蕃樣ぢやござりませぬか。

玄蕃　オヽいかにも身共は玄蕃だが、さういふ其方は。
玄伯　へイ、奈須野玄伯でござりまする。
玄蕃　エヽ、玄伯老か。（ト惡い奴に逢つたといふこなし。）シテ何ぞ用でもあるのか。
玄伯　大事の用がござりまして、先程あなたに別れてから、お跡を尋ねてをりました。
玄蕃　併し爰は往來中ゆゑ、向うの門前まで來やれ。
玄伯　へイ、左樣ならお供致して參りませう。
　トやはり右の鳴物にて、兩人舞臺へ來り捨石へ腰をかける、此内雨車止む。玄蕃思入あつて、
玄蕃　シテ用事と申すは。
玄伯　外の事ぢやアござりませぬが、先刻の御褒美を、お貰ひ申しに參りました。
玄蕃　大事の用と申せしゆゑ、何事かと存じたら、褒美を取りに參りしとか、それは先刻約定せしゆゑ唯今直樣とらするぞ。
玄伯　へイ、それは大きに有難うござりまする。
　トこの内玄蕃紙入より、小判を三枚出し紙に包み、
玄蕃　サア、手を出しやれ。

玄伯　ハツ。（ト受取りさぐり見て、）モシ玄蕃様、晝でも眼が怪しいから、夜ぢやァ猶更分かりませんが
こりやァ小判で二兩でござりますね。

玄蕃　いかにも、褒美は小判で三兩。

玄伯　ハイ左樣でござりまするか、そんなら是は返上致します。

玄蕃　スリヤ又何で。（ト玄伯そつくり玄蕃に戻し、）

玄伯　ヘイ、つい此間まで上方で柱暦やお役替の改まつたを下げ賣の、是でも山師の片端、丁度その頃お前さんが江戸の屋敷へ勤番に、御出府なすつてお目にかゝり、引上げられて醫者と化け、藥の道は五臟圓の、ねり藥より外は知らねえが、惡い事なら長棒で、病家を廻るお醫者より、遙かに上手の匙加減、その毒藥の調合も、譬の通り鼻藥の、その藥禮が三兩なら、お貰ひ申したも同じ事、藪醫者ながら長袖の、身分になつた恩返しと、思つて百も貰ひますめえ。（ト番傘をかつぎ、）またお目にかゝりませう。（ト下手へ行きかける。玄蕃思入あつて、）

玄蕃　コレ〳〵玄伯老、待ちやれ、これは身共が氣がつかなんだ。今のは全く出し損ひぢや。今度はたんまり其方に、禮の金子を遣はすあひだ、サ、これへ來やれ。

玄伯　エヽそれぢやァたんまりおくんなさるかね。其奴ァ一番戻らざァなるめえ。（ト玄蕃の側へ來り、）

へイ、參りました。

玄蕃　唯今遣はす。（トあたりへ思入あつて、刀を拔き、玄伯の目先へ突付ける。）サア、受取りやれ。

玄伯　どこでござりまする。（ト手を出し、さぐり見て、）ヤ、人殺し。

ト逃げにかゝる襟上を取つて引戻し、ちよつと立廻つて玄伯を斬り下げる。これにてバツタリ倒れ苦しみながら落入る。爰へ上下より以前、の宇壺彌九郎、荒鐵太刀藏、黒の手拭にて頬冠り大小尻端折りにてあたりを窺ひながら出る、玄蕃此の人影に後へ下り三人ちよつとためらひ、太刀藏彌九郎しやんと鍔音をさせる。これにて玄蕃も鍔音をさせ、三人うなづき合ひ、兩人小聲にて、

彌九　首尾よく參つて、

太刀 彌九　重疊でござるな。

玄蕃　御兩所あたりへ、

兩人　ハツ。

ト木魚入りの合方になり、彌九郎太刀藏上下を窺ひ、人は來ぬといふこなし。玄蕃死骸を後ろへ片寄せ思入あつて、

玄蕃　御代參の供物の菓子も、首尾よく參つて思ふ壺。西谷藏太を罪に落せば、此上彼奴めが自滅の魂

膽。

彌九　サア自滅させるは易き事、日頃藏太と確執の新十郎に預けを言附け、囚人藏太を彼が手で、干殺させる苦肉の計策。

太刀　その上殿へ讒言なし、忠義立する家來を遠ざけ、我々どもがお側に附添ひ、萬端よきにはからはん。

玄蕃　それは近頃よき手つがひ。シテ御兩所には、何故これへ。

彌九　われ〳〵是へ參りしは、我君の內意をうけ、院內の出口の張り番。

玄蕃　ム丶、シテその仔細は、いかなる譯にて。

太刀　仔細は殿樣御執心の當寺の小姓花木數馬、正しく女に相違なければ、明日賣僧の安養めを、城內へ呼寄せて、殿が御詮議なさるゝ手配り。

彌九　なれども賣僧もしれもののゆゑ、もしその先に風を喰ひ、女を連れて今宵の內、逐電なさんもはかられず。

太刀　それゆゑ宇壺と申合せ、

彌九　取逃さぬやう、

兩人　見張りの役目。

玄蕃　それは近頃御苦勞千萬。手前は醫者の玄伯めを、此所まで連れまゐり、殺害なして憂ひを拂ひ、先刻箱崎八幡の石段に於て拾ひ置きし、西谷藏太が所持の印籠。

ト以前の印籠を出し玄蕃の死骸の側へ落し、

かうして置けば誰が見ても、彼が仕業と疑ひかゝり、手前は安心藏太めは自滅。

彌九　イヤ、萬事のぬかりはないお方。

太刀　雨にて道のぬからぬ内、

玄蕃　手前はお先へ歸宅致さう。

彌九　左樣ござらば、

彌九
太刀　玄蕃殿。

玄蕃　御兩所、首尾よくおやりなされい。

ト雨車木魚入りの合方にて、玄蕃花道へはひる。この時門の內にて、

彌平　イヤ、此の長持はやらねえぞ〳〵。

ト此聲に彌九郎、太刀藏囁き合ひ、上下へ小隱れする、雨車合方になり、門の內より、太田屋勘兵衞

安養寺と記せし番傘をさし、下駄がけにて出る。後より所化二人、やはり下駄にて誂への長持を舁ぎ出る。是を彌平次尻端折り跣足にて追掛け出で、長持の棒鼻を捉へ留めるを、勘兵衛隔て、

勘兵　コリヤ長持をどうするのだ。

彌平　イヤどうもしねえ、法事に持込む仕出し屋の、朱膳朱椀と見せかけて、中へ忍ぶ代物は、とんだ生身の裏表、精進物なら仕方もねえが、魚類と俺が見込んだから、脱れぬ中の生臭物、在家に住ふ此兄が、預かつて連れて行くのだ。

勘兵　イヤその兄も三年後、縁が切れたと聞くからは、おぬしが差出る幕ぢやァねえわ。

彌平　イヽや出ずにやァゐられねえ。女人法度の此寺から。

勘兵　持出す桐の長持も、此の世話人の勘兵衛が。

彌平　附いてゐるから猶怪しい。中は慥に緋鹿の子の、娘模樣の振袖と、

勘兵　目串をつけての押戻し、

彌平　サア、安珍ならぬ安心の、

勘兵　出來ねえものなら、明けて見ろ。

彌平　そんなら爰で明けて見せるか。

勘兵　眞言祕密の錠前ゆゑ、
彌平　明かぬといふのも、
勘兵　知れた事よ。
彌平　さういふ此方も腕づくで、
勘兵　取つて見るかよ。
彌平　オヽ合點だ。

ト禪の勤めになり、彌平次錠前へ手をかける。勘兵衛是を支へる、爰へ所化二人彌平次へかゝるを、立廻つて所化二人門の内へ逃げてはひる。此の立廻りのうち左右より、太刀藏、彌九郎窺ひ出て、件の長持を擔ぎかゝるを、勘兵衛彌平次びつくりして兩人を支へる立廻りよろしく、トヾごつちやになり、勘兵衛番傘にて彌九郎と立廻り、彌平次は長持の捧を拔き、太刀藏と立廻り上下へ追つてはひる。後本釣鐘を打込み、知らせなしに朧の半月を下ろし、凄き合方、蟲の音になり、門の内より安養法師下駄がけにて出來り、空を眺め思入あつて、

安養　秋の日和といひながら、今まで蔽ひし雨空も、雲間を洩れて出る月の、照りそふ影に見渡せば、幸ひ今は人絶えて、あたりに障りのなき内に、ムヽ。

ト思入あつてあたりを見廻し、素知らぬ振にて長持の側へ行く、この内上手より以前の彌九郎出來り此體を見てそつと上手の柳の立木へ登りこれを窺ふ、安養この内長持の側へ行き、あたりへ思入あつて錠前へ手をかけ、ムヽと捻ち切り蓋を取る。中より以前の數馬出て、

數馬　お師匠樣。

安養　アコレ、靜かにしやれ。（トバタ〳〵になり、上手より勘兵衞出來り、）

勘兵　オヽお上人樣、數馬殿もこれにござつたか。

安養　オヽ勘兵衞殿。イヤもう、すんでの事に。

勘兵　ひやいな目に遭ひました。

安養　此上ともに、こなたの厄介。

勘兵　決してお案じなされまするな。（ト數馬思入あつて、）

數馬　左樣なればお師匠樣、隨分共に御機嫌よろしう。

安養　オヽ其方も達者で、（トホロリと思入あつて氣をかへ、）勘兵衞殿、何分お賴み申しまする。

勘兵　しつかりとお預かり申しました。（ト數馬の手を取り、兩人花道へ行くを、）

安養　アコリヤ〳〵。

ト両人花道へ行かうとして、安養数馬をきつと見て、名残惜しきこなしにて、
袖をつかまへよ。
数馬　どうやら、是れがこ一ト見ようとする。）
勘兵　サア。なりとも早く。」
ト合方時の鐘にて、勘兵衛数馬の手をとり、両人揚幕へはひる。安養後を見送り思入あつて、
安養　三界無安、猶如火宅と説かれし經も今目前、師弟の因みも忘却せず、彼れが別れを惜しみしも、
浮世は夢の此形勢、一々的中致せしよなア。
ト此時思はず下を見て、彌九郎の水に映る心にて、ハツと心附き、後ろを振向く、是にて彌九郎顔をかくす。安養扨はと心付く、此時彌平次下手の藪を押分け窺ふ、両人顔見合せ、安養後へ下ろた木のかしこ、彌平次彌九郎上下より窺ふ。此の模様よろしく、寺鐘にて、
ひやうし　幕

二幕目　廣瀬邸切腹の場

「役名　廣瀬新十郎、西谷鐡太、谷女蔵、朝倉三之進、田村清六、用人久内。廣瀬妻小笹、下女お

鍋等。」

（廣瀬邸の場）――本舞臺三間の間常足の二重。上手一間の塗骨障子屋體。二重の正面石摺の襖。いつもの所綟子張の冠木門。此外一面白壁の塀。よき所に松の立木。すべて菊地城内廣瀬宅の體。本舞臺に下女のお鍋屋敷下女の拵へにて俎へ人參をのせ切つてゐる。傍に前栽物を入れたる笊を置き、下手に用人の畜久内袴なりにて、擂鉢を控へ、味噌を擂つてゐる見得、合方烏笛、調べにて幕あく。

お鍋　ほんに、氣にかゝる烏啼きぢやわいなア。

久内　コレ〳〵お鍋、餘所見をして手を切るまいぞ。

お鍋　ほんに久内殿は耳が遠いゆゑ聞えまいが、御精進日でもないくせに、けふは御精進の御献立。心にかゝつてならない所へ忌はしい烏啼き、私や氣にかゝつてならぬわいなア。

久内　ハテ御精進の献上に、何で辛子味噌が入るものか。

お鍋　エヽもう、かな聾のくせに、早耳を走らせて、後生樂な味噌擂り用人めが。

久内　何だ味噌擂り用人とは、誰の事だ。

お鍋　ホイ、これは聞えたと見えますわいナ。

久内　俺が味噌擂りなら、貴樣は胡麻擂りだ。

お鍋　何だ胡麻摺だえ、耳の遠いくせに、口の減らない老耄爺め。
久内　いつ俺が泥坊をした。
お鍋　オヤ、誰が泥坊をしたと言つたえ。
久内　可内と馴合うて、買物なぞで儲けた覺えはねえぞ。
お鍋　アレ問ふに落ちいで語るに落ちるとは、此の事ぢやわいなア。
久内　何だ、疾から知つてゐるとは、聞捨にならぬ。サア證據を見せろ〳〵。
　　ト摺子木を持つて立ちかゝるゆゑ、
お鍋　エヽ、味噌のついた物を、振廻しなさんすな。
久内　何だ、晦日か朔日の買物の時だ。エヽ何をぬかす。
　　ト摺子木でお鍋の頰を突くゆゑ、お鍋味噌だらけになり
お鍋　オヤこの爺め、何をしやアがる。
　　ト庖刀を持つて立ちかゝる。合方キツパリとなり、奥より小笹屋敷女中の拵へにて出來り、
小笹　コレ、二人とも靜かにせぬかいなア。
お鍋　奥様御覧遊ばしませ。私の顏を此やうに致しました。

久内　私が耳が遠いゆゑ、莫迦にしていけませぬ。

小笹　ハテ心配の多いのに、喧嘩どころぢやないわいなう。

お鍋　イエ私も今日は、御精進日でもござりませぬのに御精進の御献立ゆゑ、心にかゝつてなりませぬ所へ、アレあのやうに先刻から烏啼きの惡いので、お案じ申してをりますのに、いかに聾といひながら平氣な顔でをりますから、つい忌々しくなりまして、味噌摺用人めと申しましたら、何時泥坊をしたと申して、綺麗な顔へ味噌をつけ、みそもない目にあはせますゆゑ、つい摺子木と庖刀で喧嘩をしました。謂れ因縁摺子木、庖刀左樣でござりまする。

小笹　精進日ではなけれども、けふはお上よりお預かりの藏太殿が御精進ゆゑ、それで献立を言附けたのぢやわいなア。

久内　へゝエ、左樣なら藏太樣が、昨夜お死になされましたか。

小笹　エヽモ忌はしい、さうではない。

お鍋　モシ奥樣、聾にお構ひ遊ばしまするな、それはさうと先達から承らうと存じてをりましたが、お仲の惡いアノ藏太樣を、こちらのお家へお預かりなされてより、打つて變つて旦那樣には、藏太樣とお仲が直り、御大切になされますのは、どういふ譯でござりますか、お聞かせなされて下

さりませ。

小笹　其方衆の不審は尤も、西谷廣瀨は先代より代々不和にて暮せども、罪人となりし藏太殿が、當家へ預けになりしゆゑ、それを粗末にする時は、世俗に言へる弱い者いぢめ、武士の本意にあらざるゆゑ、日頃の遺恨は取置いて、大切にするのぢやわいなう。

お鍋　オヤ左樣でござりまするか、ほんに私であらうなら、不斷仲でも惡いものを、自分の家へ預かれば、慘めを見せてやる氣になるは當り前でござりますのに、それを却つてあのやうに御大切になされますとは御武家樣は又格別、お達引なものでござりまするな。

久内　さうして御臨終は、何時でござりました。

小笹　エヽモ、そのやうな事は知らぬわいの。

お鍋　ほんに厄介な聾爺で。

久内　何だと。（ト大きく言ふ。）

小笹　エヽ、又しても靜かにせぬかいなう。（トバタ／＼になり、花道より中間出來り、門口へ來て、）

中間　賴まう。

お鍋　どうれ。（トこちらへ來て、）どちらからお出でなされました。

中間　朝倉から參りました。唯今主人が參上致せば、お奥へよろしくお願ひ申しまする。

ト引返して揚幕へはひる。

お鍋　奥樣お聞き遊ばしましたか。

小笹　朝倉樣がお出でとあれば、其方たちも勝手へ行き、料理の支度をしやいなう。

お鍋　畏りましてござりまする。

久内　ハヽア、御檢視でも來ると見える。

お鍋　又あんな事を。

小笹　サヽ、早う行きや。

ト兩人俎と摺鉢を持ち奥へはひる。合方調べにて、花道より朝倉三之進、羽織、袴、大小にて、中間一人附添ひ出來り、直に舞臺へ來て、

三之　可內、そちは歸宅致せ。

中間　ハッ。（ト下手へはひる。）

三之　御免下されい。（ト内へはひる。小笹見て、）

小笹　これは〳〵朝倉樣、ようこそ御入來なされました。サヽ、こちらへお出で下さりませ。

三之　これは御細君、御無沙汰致した。

ト三之進上手へ通る、小笹奥へ向ひ、

小笹　コレお鍋や、お茶煙草盆を持つて來や。

お鍋　畏りました。（ト奥よりお鍋茶煙草盆を運ぶ事よろしく、）

三之　イヤ〳〵おかまひ下さるな。シテ新十郎殿には、御在宅でござるかな。

小笹　大切なる囚人をお預かり中にござりますれば、在宅致してをりまする。

三之　然らば手前が參りしと、お取次ぎ下されい。

小笹　唯今奥へ知らせるでござりませう。

お鍋　ドレ、左樣申して參りませう。（ト立たうとする、此時奥にて、）

新十　アイヤ參るに及ばぬ、唯今それへ。（ト合方キツパリとなり、新十郎袴にて出て、よろしく住ひ、）これは〳〵朝倉氏には、ようこそ御入來、その後は打絶え御無音なせしが、いつも御勇健にて、手前祝着に存じまする。

三之　其許にも御壯健にて、手前も大慶に存じまする。

新十　シテ今日の御入來は、何ぞ御用でござりますかな。

三之　今日お宅へ參りしは、貴殿へ竊に面會なし、お話し申す儀がござつて、わざ〳〵罷り越してござる。

新十　ナニ、それがしへ御密談とな。（ト思入あつて、）其方どもは次へ立て。

小笹
お鍋　ハア。（ト奥へはひる。三之進思入あつて、）

三之　シテお預かりの藏太殿は。

新十　奥の別間へ大切に、介抱致し置きまする。

三之　サ、それが却つて我君の御不興となり貴殿へ疑ひ、それゆゑ今日密々に、貴殿へ知らせに參つてござる。

新十　何と仰せらるゝ。（ト合方キツパリとなり、）

三之　改め申すに及ばねど、先達紅陽院に於て、お守り役たる西谷藏太、身に覺えなき罪に落入り、惡人共の計らひにて、御當家へ預けの身となり、定めて日頃其許と確執の藏太ゆゑ、見殺しにも召されんかと、思ひの外なる厚きお手當、武士の魂と心ある人々には、貴殿の義心を感じてをりしが、それに引代へ惡人輩、紅陽院の門前にて殺害されし奈須野玄伯、死骸の側に落ち散りありしは、西谷藏太の定紋附きの印籠ゆゑ、正しく幼君豐千代樣を、毒害なさんと企みし、慥かな證

據と讒言なし、又其許にも今日まで藏太を手厚く致すは、是まで上邊に不和と見せかけ、內々藏太と同意ならんと、惡人輩が口々に、由なき事を言上せしゆゑ、我君大いに御立腹にて、直樣今晩使者を遣はし、藏太に斷罪申付けんと、谷玄蕃へ命令下り、今晩上使に參る由、其兩人の參らぬ先、藏太に切腹お勸めあつて、御介錯をも致されなば、藏太に內通を召されし疑ひ晴るゝ所とお察し申し、わざ／＼參上致してござる。（ト是を聞き新十郎びつくりなし。）

新十　スリヤ藏太には斷罪とな、ムウ。（ト當惑のこなし。）

三之　シテ貴殿には、如何召さるゝな。

新十　ハテ、無慘なる其嚴命。（ト合方キツパリとなり。）仰せの如く西谷廣瀨は父の代より確執にて、日頃吳越の思ひをなせども、計らず此度西谷藏太身に覺えなき汚名を受け、囚人の身となりしゆゑ、惡人共の計らひなるか、君命なりと我宅へ、預けられしを幸ひに、手厚き世話も武士の義理、神へ誓ひをかけてなりと、汚名を負はせし佞臣の、その本人を詮議なし、藏太が汚名を雪ぎし上、元の身分に立返らせ、情は情意地は意地、其時互ひに勝負を決し、先祖の甲乙定めんと、思ひし事も水の泡、今宵に迫る斷罪とは、誠に以て新十郎、近頃當惑致してござる。

三之　御尤もなるそのお詞、定めて貴殿の御氣質では、さこそと推察致せども、是れみなお側に附隨ふ

悪人輩の計らひゆゑ。

新十　シテ其許の鑑定では、西谷藏太に罪を負はせし、其の本人は誰でござらう。

三之　されば證據のあらざれば、しかと言はれぬ事ながら、藏太に罪を負はせしは、正しく谷玄蕃でござらう。（ト是にて新十郎膝を打ち、）

新十　誠に衆目の指すところ、手前も左樣存ずる所、彼は當家の重役にて、順道なれば若君の、お守り役にもなるべき處、鳥山氏の眼識にて、玄蕃を差しおき分家より、藏太が當家へ立歸り、豊千代樣のお守り役となりしゆゑ無念に心得、惡事を企みしものならん。

三之　そのお見込みに相違なし、此度殿のお指圖なりと、御身に藏太を預けしも、正しく玄蕃が皆計らひ。

新十　思へば憎くき御家の奸賊、上使に參るはこれ幸ひ、死後の思ひ出。

三之　ヤ。

新十　イヤ日頃の誼朝倉氏、よくぞお教へ下された。

三之　此儀申入れし上は、手前はお暇仕る。

新十　折角の御入來、何はなくとも粗酒一獻。

三之　イヤ〳〵、かゝるお取込みゆゑ、ゆるりと參るでござらう。（ト立上るを新十郎思入あつて、）
新十　とは言へ、是が今生の、
三之　ヤ。
新十　藏太も最早今生の、お別れとなる痛はしさ。
三之　かゝる御内話致すのも、心苦しうござるゆゑ、藏太に面會致さねど、思へば不便で儀でござる。
ト門口にてホロリと思入。新十郎もちよつと愁ひのこなしあつて氣をかへ、
新十　左樣ござれば、朝倉氏。
三之　御細君へよろしう。
ト唄になり、三之進花道揚幕へはひる。後時の鐘を打ちあげ、床の淨瑠璃になる。
〽秋の日のはや入相の暮れ近き、七つ下りも今の間に、暮るゝも思案兎や角と、胸の日近くも底深く、計りかねたる奧の間を、妻の小笹が立出でゝ、夫の側に進み寄り、
ト此内新十郎思案のこなしよろしく、爰へ奧より以前の小笹出來り、案じるこなしあつて、
小笹　唯今の御樣子はお次で聞いてをりましたが、シテあなたには藏太殿を、いかゞ遊ばす思召しか、お聞かせなされて下さりませ。

〽問ひかくるのを好き機に、後の難儀をかけまじと、(ト新十郎思入あつて、)

新十　別に思案と申してない。藏太に切腹申付け、首打ち落す分の事ぢや。

小笹　スリヤ、アノ、矢張り藏太殿を。

〽打つて替へたる一言に、妻はおづ／＼手を仕へ、(ト小笹こなしあつて、)

ソリヤもう是まで御大切にお手當をなされましたを、却つて人の疑ひ受け、惡事に同意をしてるなどゝ、あらぬ汚名を受けましては、お腹の立つはお道理ながら、そこをこらへて殿樣へ、藏太殿の命乞を遊ばしまするが、侍の道を守りし御分別と、憚りながら存じまする。

新十　ヤア小賢しき差出口、女の身にて控へをらう。

小笹　スリヤ、どうあつても藏太殿を。

新十　藏太に同意致せしなどゝ、思ひ寄らざる疑ひ受け、殿の御不興蒙りしも、其方共が至らぬゆゑぢや。

小笹　そりや又何故でござりまする。

新十　何故とは愚か者めが。(トきつといふ。是より床の合方になり、)唯今となり其方たちへ、申して返らぬ事ながら、我は武門の表ゆゑ、君より預かる西谷藏太、大切なる囚人、大事にせよと申すのは

ながら、何故是までに食を斷ち、西谷藏太を干し殺さぬ。
粗末にせよとの詞の謎。それを解き得ず今日まで、劬り手當を致せしゆゑ、かゝる疑ひ受け

小笹　エヽヽヽ。

新十　サ、父の代より遺恨を含み、日頃呉越の思ひをなす、當の敵を預かりながら、其儘打捨て置く時は、亡父へ不孝となる事を、心附かぬうつけ者めが。

小笹　〽思ひがけなき腹立の、難題なんと言譯も、泣くに泣かれぬ憂き思ひ。（ト小笹こなしあって）わが夫、そりや御本心でござりまするか。エヽお前樣はなア。（ト合方キッパリ。）そりやもう愚昧な私ゆゑ、そのお心を存じませず、お預かりの藏太殿を大事にかけてをりましたは、不調法かは存じませぬが、先頃あなたの仰付けには、假令是まで不和にもせよ、無實の汚名で罪を負ひ、預けの身となる藏太殿、大事にせよとのお詞は、お見上げ申したお心と、他人へこそは申さねど、里の父上母樣に自慢話を致せしも、干し殺せとある謎なりとは、口と心の兩股武士、武士の身にあるまじきお恥とは思召さぬか。いつそ左樣なお心なら、なぜ連合の私に、かう〳〵せよと御存意を、お明しなされて下さりませぬ。今の仰せが誠なら、里の父上母樣に自慢話を致せしが、今更となり恥かしい、そりやお恨みでござりまするわいなア。

〽恨み歎くも道理とは、思へど態と荒々しく、（ト新十郎思入あつて、）

新十　ヤア己が不覺を取置いて、夫に向ひ恨みを述べ、兩股武士とはよく申した。人に自慢を致せしが恥しいと思ふなら、今日よりして離別致す、とつとゝ爰を出て行きやれ。

小笹　イエ〳〵何のこれしきに、去らるゝ心はござりませぬ。

新十　其方に去らるゝ心はなくとも、身共の方にて愛想が盡き、離別致した、出てうせう。

小笹　イエ〳〵假令何とおつしやつても、去らるゝ覺えはござりませぬ。申譯には、オヽ、さうぢや。

〽きつさうかへて立上るを、（ト小笹立つて奥へ行くを引留めて、）

新十　コリヤ狼狽へて何れへ參る。

小笹　サア夫の心を悟り得ず、世に亡き舅のお位牌へ、不孝をしたる申譯に、藏太殿と刺違へて。

新十　ソレ〳〵それが大きなたはけ、最早今晩斷罪と、上より御沙汰のあるべき藏太、殺さずとても命はなきもの、今刺違へて犬死なしても、受けし汚名は雪けぬわえ。

小笹　スリヤ死ぬるにも、死なれませぬか。

新十　死ぬに及ばぬ、出て參れ。

小笹　ハア。

〽はッとばかりに泣く聲を、襖隔てゝ聞きゐたる鍋も涙に走り出で、
ト爰へ以前のお鍋奥より出て、

お鍋　エヽさりとてはお恨めしい旦那樣の思召し。そんならお謎でおつしやらずに、平ぶッつけにおつしやれば、三度の御膳も藏太樣へ、上げた積りでお上げ申さず、私が食べまして、疾に干し殺して見せませうのに、殘念な事をしたと思へば、恨めしいやら口惜しいやら、くやし涙で胸一杯。それではお腹が埋りますまい。こりや旦那樣が御無理でござりますわいなア。

ト よろしく泣伏す。新十郎きつとなつて、

新十　ヤア、おのれまでがつべこべと、主を蔑なす憎い奴。小笹と共に出て失せう。

お鍋　そりやもう出ろとおつしやりませいでも、そんな氣むづかしい旦那樣に、何で御奉公が出來ませう。私でさへお厩の豆助どんと夫婦の約束、この美しい奧樣なら、どこへでも賣口がござりまする。ハテほしがる所は、山々ある。（トちよつと聲色にてこなしあろ。）サア奧樣、お里へ行つて此事を親御樣へおつしやりませ。

小笹　イエ〳〵何でこれしきに、離別を受けて行かれうぞ、足らはぬ所は幾重にも、お詫言を致しませう。どうぞ不便と思召し、お置きなされて下さりませ。

新十　ヤア下郎言ふとも詮は叶はぬ。とつとゝ爰を出てうせう。

お鍋　アレ〳〵あんなにおつしやれば、所詮お詫は叶ひますまい。お里へ行つて親御様と、御相談を遊ばしませ。

小笹　これおやといふて。

お鍋　ハテマア、お出で遊ばしませ。

〽あかぬ別れも中垣を、隔の下女に引立てられ、哀れ小笹が二世の縁、つなぐ便の親里へ是非も泣く〳〵出でゝ行く。

ト此時お鍋小笹をせり立て、花道にて小笹こなしあつて、兩人揚幕へはひる。

〽後に廣瀬はつく〴〵と、思ひめぐらし愛着に、うかむ涙の目をしばたゝき。

ト此内新十郎向うを見てこなしあつて、有合ふ硯箱を引寄せ、認める事よろしく、

新十　心にもなき事ながら、所詮離別と申せしとて、聞入れまいと思ふゆゑ、無理に出してはやるものの。

〽里へ歸らば舅頼母、わが胸中を見拔きをるゆゑ、合點行かずと疑惑を生じ、今宵の内に參るは必定、邪魔のなき内認めん。離別狀と諸共に、此世を早く去り狀も、後へ難儀

をかけざるため。アヽ思へば人の一生は、盛り短き。（ト筆を硯箱へ置くを道具替りの知せ、）ものちやなア。

〽きれて果敢なく。（ト床の三重にて、此の道具まはる。）

（別間の場）――本舞臺三間の間中足の二重。本緣附き大和葺の庇、いつもの所枝折門、二重の上下後へ下げて風雅なる板塀、此處に柴垣、紅葉の立木、日覆より同じく釣枝、二重正面上手一間の床の間、眞中一間地袋戸棚、上違ひ棚、下手一間月影の襖、前面一面建切りあり。すべて廣瀨宅別間の體。床の三重にて道具納まる。

〽鳴る鐘も諸行無常と告げ渡る、風の前なる燈火も、たど〳〵見えし一間には、顏も藏太が茫然と、書見の體こそ佗しけれ。

ト此内時の鐘にて、よき程に正面の障子を引拔く。内に前幕の西谷藏太、着流し袴なりにて褥の上に住ひ、短檠を照し見臺に向ひ書物を讀みゐる。後合方になり、藏太こなしあつて、

藏太　此書物にもある如く、窮鳥懷に入る時は獵師も是を捕らずと。古人の論を捨てざるか、我れ惡人の陷穽に陷り、日頃不和なる廣瀨の宅へ預けの身分と相成りしも、仇の仇たる此宅へ、參れば

定めし食を斷ち、父はいかなる非義の策略ありて、當家に止宿致すうち自滅の期到らんずと、思ひきや、

〽左にあらずして厚くもてなし、日頃の不和に引代へて、手當も屆く節義心、左はさりながら我が身ゆゑ、却つて惡人共の憎しみ受け、

〽此家へ難儀をかけるのも、いかにも氣の毒千萬ゆゑ、けふは切腹致さうか、明日は自殺を致さうかと、覺悟はすれど晝夜となく、張番の者次の間に、控へゐるゆゑ心に任せず、ハテ何としたものぢやなア。

〽生きるをかこつ囚人の、譯も白髮の久内が淸き膳部を取揃へ、襖押明け捧げ出で、

ト下手の襖を明け、以前の久内膳部を持つて出て、藏太の前へ出し、下手へ下り手を仕へ、

久内 御精進と承り、粗末なる手前料理、召し上られて下さりませう。

藏太 ハヽツ忝き御情、けふは亡父の逮夜ゆゑ、精進と申し置きしに、却つてかゝるお手厚き御獻立に

あづかり、何とも恐入りまする。

久内 又私はあなた樣が、佛におなりなさつたかと、心得違ひを致しました。

藏太 ナニ、佛になりしとは。(トちよつと思入。)

久内　イエ、耳が遠うございますので、時々聞き違ひを致してなりませぬ。

藏太　いまだ空腹でござらねば、後刻頂戴仕る。

久内　サヽ、お箸をお取りなされませ。

藏太　イヤ〳〵、いまだほしくはござらぬ。

久内　イヤ、お箸は附いてをる筈で。（ト氣を揉む。藏太大きな聲にて、）

藏太　後に頂戴致すでござらう。

久内　左樣なら、御隨意になされませ。（ト久内奥へはひる。）

〽親仁は次へ立つて行く、後に藏太は獨り言。（ト藏太思入あつて、）

藏太　親仁が耳が遠いゆゑ、身共が佛になりしかと、聞違ひを致せしとは、それが此世の前表にて、もしも斷罪の御沙汰となり、恩義も報ぜず死する事か。何につけてもかくまでの、手厚き三度の食事さへ、一方ならぬ當家の介抱、此身の汚名晴れし上、先祖の遺恨を報ぜんと、思ふは開化にあらざれば、僅か少なき私の宿意を捨てゝ兄弟の、因を結ぶ所存ゆゑ、冥土の父のお心には叶はぬかは存ぜねども、昨日の敵がけふは猶、打つて替つて頼もしく、心盡せし膳部の初穗、御賞翫なし下されい、

〽世になき父へ陰の膳、据ゑる其身も日の影に、今ははかなきお預けの、一と間を明けて入り來る、主人廣瀬がそれと見て、

ト此内藏太件の膳を上手の床の間へ直し、蔭膳を据ゑる心。後ろ向きにて回向をしてゐる。爰へ下の襖を明け、以前の新十郎出來り、

新十　藏太殿、嘸御氣鬱でござらう。

〽聲に見返り座を改め、（ト新十郎下手へ住ふ。藏太もよろしく居直りて、）

藏太　これは新十郎殿、何からお禮を申さうやら、重々の御厚情。

〽詞には謝し盡されず、

唯今は父御配慮下され、精進の御獻立、父の逮夜にござるゆゑ、早速是へ蔭膳を据ゑてをる所でござる。千萬忝う存じまする。

新十　イヤ〳〵御挨拶では恐入る、粗末にはござれども、唯御精進と承り、清きのみを專一に、調へさせし手拵へ、亡き御親父へ供へられしとは、御孝心の程感服致す。

〽膳を賞する交りも、水魚の中ぞ賴みある。（ト思入よろしくこなしあつて、）

藏太　イヤナニ廣瀬氏、其許のお心にては情は情仇は仇と、此度の無實の汚名も晴れて拙者が冤罪とな

り、元の藏太に立歸らば、矢張り呉越の思ひをなし、父と父とが遺言の、遺恨を承け繼ぐ御所存ならんが、かゝる情を蒙りて、何と致して其許に、藏太は刃が向けられう。あの世へ參らば我君へは、よしなに詫を仕れば、何卒汚名の晴れし後は、親族なりと思召され、行末長く御別懇偏に願ひ奉る。

〽武士の意氣地も打捨てゝ、賴む藏太が心根を、聞いて廣瀨も默然と、しばし愁ひに詞なし

ト此内藏太新十郎へ賴むこなしよろしく、新十郎愁ひの思入にて、差し俯向きゐるゆゑ、藏太此體を見て、扨てはといふこなしにて、

ムウ御承引のござらぬは、恥辱を捨てし此藏太を、甲斐なき者と思召され、やはり遺恨は遺恨にて、お晴らしなさる御所存なるか。

〽尋ねに廣瀨は面をあげ、(ト新十郎思入あつて、)

新十　何しに不承知申さうや、それこそ望む所ゆゑ。

藏太　貴殿が左樣な御所存なれば、手前に於ても悦ばしく、猶此末は兄弟の因を結ぶ心得なるか。

新十　其返答の出來かねるは、最早貴殿とそれがしが、此世にゐるも今宵限り、明日は冥府へ行かねばならぬ。

藏太　何と言はるゝ。（ト是より床のメリヤスになり、）

新十　いかなればこそ貴殿とそれがし、敵同士の末なるか、父と父とが遺言ゆゑ武門の意地を張通し是まで呉越の思ひをなせしも、此度計らずお手前をわが家へ預かる次第となり、互ひの不和も其末は、水に流して兄弟の交りなすが、

へ愚を去りて、當今開化の時節に基く、忠孝の道ならんと樂しみをりし甲斐もなく、先刻朝倉三之進殿内密に知らせくれたるは、御身を上より預かりて、厚く手當を致せしを、佞臣共が早くも知り、見込の違ひし所より、殿へ讒言申上げ、今宵限りに其許には早や斷罪と事極まり、則ち上使は谷玄蕃と承りしそれ故に、連添ふ妻をも離別致せば、此世に思ひ置く事なし、手前も覺悟致してござれば、冥土ならでは親族の交りなす事叶ひませせぬぞ。

藏太　おゝ、スリヤ其許には手前ゆゑ、御細君をも御離緣とな。シテ／＼覺悟と仰せらるゝは。

新十　されば御身が先達、無實の汚名を受けられしも、出世を妬む佞人の正しく企みと存じをりしに、朝倉氏の見込みも同じく、惡事の根ざしは谷玄蕃と、詞の符合致しをれば、無實の罪にて其許が切腹召さるを餘所に見て、なに安閑と致しをらうや。介錯致す其刀で、上使に立つたる玄蕃を突

き、返す刀に新十郎切腹なして相果てんと、最早覺悟をいたしてござる。

藏太　イヤ〳〵それは由なき事、手前は武運に盡きたるゆゑ、佞臣共の謀計にて、無念の最期を遂げまするも、是非なき事と思ひをれど、罪なき御身を諸共に、いかで切腹致させんや。其儀は思ひ止まつて下され。

新十　イヤ〳〵、假令其許が如何やうに言はるゝとも、最早決心致しをれば、思ひとゞまる所存はござらぬ。

藏太　スリヤ御家名を、捨てられても。

新十　ハテ、主家の爲には我が家名、捨つるもかねて覺悟の前。

藏太　さは言へあたら武士の、數代續きし此家を、

新十　捨つるは惜しきやうなれど、お家の大事に比べなば、

藏太　小事にかへる兩人が、家と命を差出して、

新十　惡人退治の勳は、

藏太　末世の龜鑑と止りて、

新十　亡き親共へよき手土産、

藏太　思へば逮夜の精進も、

新十　清き最期の獻上に、

藏太　膳部調ふ、

新十　覺悟の手つがひ。

藏太　ハテ潔き、

兩人　身の果ぢやなア。

〽用意も今と兩人が、勇む覺悟の折柄に、（ト此内兩人よろしく思入。此時花道の揚幕にて、）

呼ビ　御上使。（ト呼ぶ。兩人キッと見て、）

新十　最早上使の入來なるか。

藏太　然らば何卒御介錯。

新十　心靜かに切腹召され。

〽心得たりと諸肌を脱ぐや最期の刀さへ、短き命脇腹へ、ぐつと突立て引廻し、

ト此内藏太肌を脱ぎ刀を腹へ突立て、よろしく引廻す。新十郎此體を見て刀を抜き立上り、藏太の後ろへ廻り思入あつて、

ハテ、速かなる御切腹。

藏太　憚りながら。（ト首を差延べる。）

新十　ムヽ。

トうなづいて刀を前へ差出すを、道具替りの知せ、兩人引張りの見得。合方、時の鐘にて、道具廻る。

本舞臺元の常足の道具、合方調べにて道具納まる。と花道より前幕の谷玄蕃、麻裃にて出來る。後より田村清六くりさげ鬘、同じく麻裃大小にて、首桶を抱へ出來り、直に門口へ來て、二重上手へ通る。奥より用人久内出て、よろしく出迎ひ、

久内　これは〳〵御兩所樣には、よくぞ御入來なされました。

玄蕃　先刻朝倉三之進より、主人へ申入れたるその儀によつて、兩人共最早刻限、上使に參つた。

清六　差添として田村清六、首受取りに罷り越した。イデ奥の間へ案內致せ。

久内　何事をおつしやりますか、私には分りかねます。ドレ奥へ申入れませう。

新十　參るに及ばぬ、唯今それへまゐるであらう。

〽ト一と間の内に聲あつて、來るを遲しと谷玄蕃。

ト此内奥より新十郎、藏太の首級を淺黄袱紗へ包み持ち出で、二人が眞中へ住ふ。玄蕃是を見て、

玄蕃　これは〳〵廣瀨氏、先刻貴宅へ朝倉氏領ひの上意を密々に、お知らせ申しに參りしと、同人より承りしが、さすれば上使の趣きを、申さずとても御承知ならん、藏太が介錯御苦勞千萬。

清六　扨は先刻朝倉氏より、申上げしを御承知あつて、首打落し召されしか。

新十　いかにも君命もだし難く、早速藏太に自殺を勸め、武士の情に新十郎、介錯致してござりまする。

玄蕃　こりやかうなうては叶はぬ筈。しかしジタバタ致しなば、縛り首にも致すべきを、覺悟致して武士らしく、自殺をせしとは健氣な奴。

清六　イヤ〳〵自殺を致せしとは武士の情の表向、覺悟の自腹も切りかねしを、新十郎殿が無理無體に縛り首にしたるも知れぬ。その死態が見たうござつた。

新十　何は格別御兩所には、イザ御實檢下されい。

玄蕃　いかにも、實檢、

清六　致すでござらう。

ト差出す首級を清六が、用意の桶へ取次いで、ためつすがめつ兩人が、實檢なして打悅び、

ト此内玄蕃清六首を見る事あつて、

玄蕃　イヤ藏太の首級に相違ござらぬ。ハテよく討たれた。よいざま〳〵。(ト思入あつて形を崩し、)イヤ新十郎殿、實は藏太めを日頃の不和に引代へて、庇ひ立をさるゝ故、もしや惡事に御同意なるかと、疑念を起し罷りをつたが、

清六　早速首討ち差出し召されば、是にて疑念は晴れ申した。御前體は我々がよしなに執成致せし上、預かり中のお物入、追つて御沙汰がござらうから、それ樂しみにお待ちなされい。

〽詞殘して首桶へ、首級を納め立上れば、廣瀬はわざと謹んで、

ト兩人立たうとする。新十郎思入あつて、

新十　アイヤ御兩所、まづ〳〵お下に、

玄蕃　ナニ、我々に、

清六　御用でござるか。

新十　各々方のお計らひにて、かく言ふ廣瀬新十郎、多年の遺恨も一時に相晴れ、亡父へ孝道家の規模、是に過ぎたる悦なしと、誠に大慶至極にござれば、お禮のために粗酒一獻差上げたく存じますれば、何卒お過し下されい。

〽舌の劍に兩人が、かゝると知らず口端に乘り、(ト兩人思入あつて下にゐて、)

玄蕃　ナニ御酒を下されんとな。それは千萬忝い。

清六　御酒と聞いては目のなき我々、仰せに隨ひ頂戴致さう。

新十　コリヤ久内。（トいへども久内聞えぬこなし、）コリヤ／＼久内。（ト大きくいふ。）

久内　ヘイ、何御用でござりまする。

新十　お饗應の用意致せ。

久内　イエ、表の締りは心得てをります。

新十　ハテ、お饗應の用意ぢやわえ。

久内　ヘイ、左樣でござりましたか。（ト久内奥へはひる。玄蕃思入あつて、）

玄蕃　イヤナニ新十郎殿、改め申すに及ばねども、天文二年富田に於て天下分け目の戰の折、船岡川の一番乘り、今に何れと定まり兼ねしが、西谷藏太が自滅致せば、いよ／＼御身の御親父が一番乘りと相定まり、やがて殿より一廉の、御恩賞が出るでござらう。

清六　實はそれゆゑ藏太めに、罪を負はせ我々が、當家へお預け申したも、是にをらるゝ玄蕃殿が反間苦肉のお計らひゆゑ、それにてお禮を述べられよ。

〽自慢顏にておのれの罪、白狀するも事をかしく、（ト扨こそと思入あつて、）

新十　スリヤ玄蕃殿を始めとして、いづれも方のお計らひとな。
玄蕃　かゝる恩義をおかけ申すも、まさかの時は片腕とも、頼みに思ふ其許ゆゑ。
清六　我々殿へ讒を構へ、藏太を自滅させてござる。
新十　スリヤ、アノそれゆゑ。
兩人　いかにも。
新十　然らば是にて御兩所へ、新十郎がお禮の印。
兩人　なに、お禮とな。
新十　西谷藏太へ手向けの一刀、禮に遣はす、覺悟致せ。
〽刀すらりと引拔けば、兩人慌てゝ仰天なし、（ト新十郎刀を拔放すゆゑ、兩人びつくりなし、）
玄蕃　コレノヽ待つた新十郎。
清六　何故あつて其刀を。
新十　ヤア何故とは横道者、罪なき者を罪に落し、惡事を企つ奸賊共、命は貰つた覺悟致せ。
玄蕃　ヤア、上使に立つたる我々へ、
清六　手向ひなさば斷絶なるぞ。

新十　家断絶も國家の爲、いかでそれがし厭ふべきや。

玄蕃　さう聞く上は、

兩人　逃げるが一の手。

〽逃げんとなすを引戻し、水もたまらず右左り、斬るは銘作切り手は廣瀬、心持よく死してんけり。二人の首級を手早くも、藏太が前に押並べ、在すが如く打向ひ、

ト此内新十郎ちよつと立廻つて兩人の首を打落す。爰へ奥より以前の久内出で血糊を拭ひキッと思入。是より誂への合方になり、件の首桶より藏太が首を出し、首桶の上へのせ、此前へ玄蕃清六の首を並べ、思入あつて、

新十　コリヤ藏太、御身の仇も目前に、討つて恨みを晴らせし上は、イデヤ冥土へ同道なさん。

〽刀逆手に突立つる、折柄外へ慌しく、駈入る親子腰元が、それと見るより走り寄り、

ト此内新十郎刀を腹へ突立てる。バタ／＼になり、花道より雪岡賴母更けたる鬘、羽織袴大小にて、以前の小笹を連れ、下女お鍋手丸の提灯を灯し、先に立つて出來り、直に舞臺へ來て内へ駈け入り、賴母小笹新十郎に縋り、

賴母　ヤヽヽヽ扨は我が推量に違はず、新十郎には切腹なせしか。

小笹　モシわが夫、早まつた事なされましたなア。
新十　さ言ふは舅頼母殿。よくぞ御入來下された。（ト此内お鍋あちこち提灯にて見て、）
お鍋　ヤア〳〵、爰にも彼處にも、内は血だらけ首だらけ。
頼母　此場の樣子でかくいふ頼母、大概それと推量なせど、
小笹　こりや何故にわが夫には、御生害でござりまする。
新十　手前が覺悟は義理ゆゑに、又二つにはお家の爲。
頼母　何と。（ト竹笛入りの合方になり、）
新十　舅殿にも御存じならんが、先日箱崎八幡へ、供へし供物の手違ひより、惡人輩の謀計にて、不便や忠臣西谷藏太、無實の罪に落入りて、最期を遂けしそれゆゑに、佞臣共を討つて捨て、家に代へたる此の切腹。後へ難儀をかけまじと、妻の離別も難題に、心にもなき愛想盡し、御身が聞かばそれと悟り、御入來あらんと察せしゆゑ、心忙しき生害も、唯殘念なは惡人に、荷擔の奴輩一一に、詮議せざるが殘念ゆゑ、御前表は新十郎發狂致してかくの仕儀と、よしなに御披露下されて、後々の御詮議お賴み申す。緣者にあらぬ離別狀、認めあればお持ち下され。
へ探る手箱も打明けし、最期の次第去狀を、見るに小笹は恨めしく、

ト此内新十郎伜の手箱より以前の去状を出し、頼母の前へ出し、小笹こなしあつて、

小笹　そりやお胴慾でござります。假令御自殺なされぱとて、お家の爲に遊ばすを、何とて難儀に思ひませう。夫婦は二世とあるからは、此身も共に、おゝ、さうぢや。

〽刀取る手を押止め。（ト小笹新十郎の差添に手をかけるを止めて、）

新十　ヤア由なき我へ義理立して、親へ不孝と思はぬか。

小笹　それぢやというて。

新十　えゝ狼狽者めが。

〽叱るは慈悲の恩愛に、傍に舅が詞さへ、捌きかねたる妹背仲、お鍋がつッと差出口。

ト此内新十郎小笹白刃を爭ふ。頼母ぢつと思入。お鍋是を見て、

お鍋　申し奥樣、そりや御不覺、旦那樣のお詞に背いて御自害遊ばさずと、髮をおろして亡き跡の、菩提をお弔ひ遊ばしませ。

頼母　出來したお鍋、よく申した。我もかくとは察せしゆゑ、娘が離別は心得ずと、直に連立ち參りしが、早や切腹の後となり、あたら若木の戀聟を、捨つるは惜しき事ながら、千悔なすとも返らねども、聟の存意を貫くやう、御家の安全取計らひ、離別を受けしわが娘、尼に致して亡き跡の、

新十　エヽ忝きそのお詞、それにて思ひ置く事なし、逆縁ながら御介錯。菩提は小笹に弔はせん。
頼母　いかにも、介錯承知致した。
小笹　とは言へ是が秋の夜の、深き名残りの憂き別れ。
新十　返らぬ旅へ赴くも、敵と味方の四人連れ。
頼母　未來は一蓮托生の、
小笹　願ふあの世は、
お鍋　あなたのお役、
新十　最早此身の、
皆々　知死期時。
〽哀れ突出す鐘の音と、共に消え行く憂き別れ、秋の名残りぞ。
ト此内頼母新十郎の後ろへ廻り、涙ながらに刀を拔く、新十郎は引廻す、小笹お鍋愁ひの思入。此模樣本釣鐘、床の三重にてよろしく

幕

ト幕引つけると、エイト太刀音して風の音にてつなぎ、直に引返す。

二幕目返し

菊地城內詮議の場

〔役名――紅陽院安養、菊地多門之助貞行、宇壺彌九郎、荒鐵太刀藏、近臣摩賀平、同伊蘭太。小姓千彌、同萬彌等。〕

〔山鳥の間の場〕＝本舞臺四間通し高足の二重本緣附き、眞中に白洲階子、二重の左右網代塀枝折門つき、諸所に紅葉の立木、日覆より同じく釣枝、二重の正面金地へ藤に山鳥の彩色畫の襖。二重の下手に臺子を敷き、是に茶の湯の風呂釜をかけ、すべて城內山鳥の間庭先の體。爰に宇壺彌九郎、荒鐵太刀藏鐵砲を持ち立ちかゝりゐる。下手に近臣摩賀平伊蘭太同じく袴股立の侍にて、十手を差して控へ、此の見得早舞にて幕あく。

摩賀　いやなに彌九郎殿、今日俄のお達しにて、山鳥の間へ臺子を置き湯をたぎらせしは御客人へ、お茶の催しある事と、思ひの外なる御兩所には、

伊蘭　甲斐々々しきお支度にて、銘々鐵砲をお持ちなされ、御用心をなされますのは、どういふ譯で、

兩人　ござりまする。

彌九　お手前方は知るまいが、紅陽院の安養法師、女犯を犯しをりながら、存ぜぬ知らぬと陳じ立て、
太刀　それのみならず我々が、迎ひに參れど此程より、强情我慢を言募り、上意に背く賣僧坊主。
彌九　その上彼は大力にて手取りになすとも手に餘り、力づくでは叶はぬゆゑ、もし御前にて暴れる時は、熱湯をぶつかけ取押へ、
太刀　それで行かずば鐵砲にて、打取る手筈に定めあれば、其方達も心を配り、油斷なきやう賣僧が參らば、必らずともに用意致せ。
摩賀　それで樣子が分かりましたが、もし手に餘る其時は、あれにかけたる釜の湯を、
伊蘭　賣僧めが天窓から、ざんぶりかけた其上で、御詮議なさるゝ思召しとな。
摩賀　然し女犯を致したる坊主とあれば我々も、とも〴〵憎しみのかゝるといふもの。
太刀　手ぐすね引いて待合はし、それと指圖を致しなば、
摩賀　直樣兩人、
摩賀
伊蘭　罷り出ます。
彌九　どうか先日嫌はれた、
太刀　遺恨をけふは、

彌九　晴らさにやならぬ。（ト此時花道の揚幕にて、）

太刀呼ビ　紅陽院參上。（ト呼ぶ。皆々向うを見て、）

彌九　はや紅陽院參りしよな。

太刀　然らば暫時我々は、

摩賀伊蘭　お次に控へてをりませう。

彌九太刀　サヽ、お出でなされい。（ト皆々下手へはひる。又揚幕にて、）

呼ビ　參上。（ト呼ぶ。と床の淨瑠璃になり、）

〽秋來れば四方の梢も錦して〳〵、千種花咲く庭先も、由縁の色の白菊や、三衣尊き安養法師。

ト是より三線味入り音樂の鳴物になり、花道より序幕の安養法師、紫の衣、錦の袈裟水晶の珠數を持ち、金剛草履にて出る。此の前後へ袴なりの近習二人附添ひ出る。是れと一時に正面の襖を左右へ開き、菊地多門之助貞行羽織着流し殿の拵へ、小姓千彌萬彌袴なりにて刀を持ち附添ひ出で、二重へ出迎ふ。安養は花道へ止り、

安養　實に大國の主人たる貞行殿の好まるゝ、寺院に呼べる紅葉も、盛りまばゆき龍田山、錦織りなす

粧ひを、居ながらに見る館の容體、ハテ風情ある眺めぢやなア。

貞行　これは／＼安養法師、よくぞ今日入來ありしぞ。

安養　こは畏れ多き御出迎ひ、近頃恐入りましてござる。

貞行　そこは庭先、まづ／＼是へ。

安養　然らばそれへ、通るでござらう。

ト會釋をなして上人は、しづ／＼一間へ打通る。

ト是へ右の鳴物を冠せ、安養舞臺へ來り、下手へ住はうとするを留めて、

貞行　アイヤ上人にはお待ち下され。母大眞院が師と賴みし、道德知識の貴殿ゆゑ、まづ／＼是へお通り下され。

安養　御直の仰せ恐れ入れど、沙門の身なればお許し下され。

ト上人上座へ召し給ふ。（ト是にて二重の上に安養、下に貞行住ひ、思入あつて、）

貞行　シテ法師には此程より、御不快の由承りしが、早速快氣に赴かれ、多門之助にも祝着いたす。

安養　されば度々御城内へ、罷り出でよとの君命なりしが、所勞に侵され候ゆゑ、思はず參上延引せり、見受けますれば太守にも、御安泰なる御樣子に、拙僧恐悅仕る。

貞行　御所勞とあれば是非なき事ぢや。此程より法師の入來、多門之助待兼ねをつた。

安養　シテ今日お招きありしは、何等の御用に候な。

貞行　人來を待ちしは餘の儀に非ず、女犯の罪を調べんため。

安養　何と言はるゝ。（ト音樂入りの合方になり。）

貞行　抑貴僧には先つ頃、惡しき病の流行し時、積れる行の著しく、諸人の病苦を平癒なさしめ、國民の爲にもならんと、紅陽院へ移られしゆゑ、我等に於ても格別の會釋を以て菊地家の、祈願所とも賴みをりしに、去月の半に此の貞行、箱崎八幡へ社參の歸るさ、給仕に出でし美少年、至極心に叶ひしゆゑ、法師へ所望を申入れしに、彼は不運の孤兒にて、世に亡き父母の菩提の爲め、出家を遂げさす少年ゆゑ、城內へは遣はし難しと、誠しやかに言はれしゆゑ、其儘空しく打過ぎしが、此程母の佛參の折、家來が樣子を探り見れば、男子にあらぬ婦女子の由、五戒を保つ身を以て、艶なる婦女を小姓に仕立て、手許へ置いて寵愛なし、それにて知識といはるゝや。サ、返答を承らん。

へ詞するどく問ひかくれば、安養詞に逆らはず、

安養　コハ何事かと存ぜしに、思ひも寄らぬ其のお尋ね。拙僧身にとり女犯などゝ、左樣な覺え決して

ござらぬ。必らず粗相申されな。

〽珠數爪繰りて淸僧の、更に取合なかりける。（ト安養自若としてゐるゆゑ、貞行思入あつて、）

貞行　スリヤ上人には覺えないとな。

安養　イヤ、左樣な覺えは毛頭ござらぬ。

〽貞行庭へ打向ひ、（ト貞行下手へ向ひ、）

貞行　ヤア〳〵兩人、はや參れ。

彌九太刀　ハアー。

〽はッと答へて兩人が、砲携へて庭先へ、現はれ出でゝ取圍めば、上人きつとなり、

ト此内下手より以前の彌九郎、太刀藏出來り、安養を上下より取卷き、鐵砲の筒先を向ける、是にて

安養キツとなり、

安養　こは仰々しき此の振舞、御身等は宇壺、荒鐵の兩名、罪なき者へ飛道具を差附け圍ふは、何事なるぞ。

彌九　ヤア白々しき賣僧の安養、女犯を犯しながら主君の御腦を法力にて、治せしなどゝ申立て、

太刀　狐を使ひ邪法を以て、人を惑はすあぶれ者。命が惜しくば三拜なし、其身の大罪白狀致せ。

安養　ヤア無禮なる其雜言、左樣な覺え嘗てなし。

貞行　覺えないとは言はせぬ證據、此程あれなる彌九郎が、小姓に仕立てし花木數馬、正しく女と申する事、乳房までを見出せしゆゑ、其夜竊に門前へ、探索に遣はせしに、事の露顯を早くも悟り、長持へ入れ何者にか、預けて逃せし事までも、慥に承知致せし貞行。

彌九　最早脱れぬ賣僧の安養。

太刀　女犯の罪を白狀致せ。

〽退引させぬ詞詰、法師は動ずる氣色もなく、

ト此内三人キツトなり詰寄る。安養扨はといふ思入あつて、

安養　かく探索召されし上は、今は何をか包み申さん、小姓に仕立て置いたるは、薊と申す女でござる。

貞行　その又薊を貴僧には、しかも宗旨は眞言にて、文字さへ眞の言の葉と書く婦女禁制の院内へ、みだりに女子を置く時は、これ女犯にはあらざるか。サヽ此言譯は如何なるぞ。

安養　サ、それには深き仔細あり。多門之助殿お聞き下され。（ト是より喝鼓入り誂への合方になり、）沙門の身として院内へ、女を置くも憚りあれば、男子に仕立てゝ手許にて、召仕ひたる其の仔細は、今を去る事五ケ年以前、惡しき病のはやりし時、諸人の病苦を助けんと、拙僧諸國を廻歷なし、

肥前の國平戸在富田村、淨林寺へ足を留めし其砌り、山家に住める獵師なる、彌平次と申す者、一人の妹を金ゆゑに、苦界の廓へ沈めんと、無慙な貧苦を不便と存じ、金子を與へ救ひしが、放蕩無頼の兄ゆゑに、娘の行末心許なく、寺院へ引取り遣はせしが、まだ其頃は十三歳、女子といへど青葉ゆゑ、憚る事もなかりしが、早や年頃となりしゆゑ、夙にも片附け遣はすべきを、いかなる事にか縁を嫌ひ、何卒寺院で一生涯、抖擻の尼とも相成りて、淸き最期を遂げたき願ひ、葷酒を入れざる山門に、女人の入るは不都合なれど、なが〳〵手許に召使ひし、恩愛の情に迫り男子に仕立てしが誤りにて、女犯を致し候かと御疑ひもさる事ながら、諸佛菩薩を誓ひに立て、左樣な覺え嘗てござらぬ。かゝる仕儀ゆゑ貞行殿、御疑念晴らして下されい。

〽詞たくまぬ言譯も、貞行耳に逆らひて、（ト貞行思入あつて、）

貞行　其の言譯相立たぬ、女を寺院へ差しおいて、女犯でないと言張るとも、いかで貞行誠となさうや。

彌九　コリヤ我君の上意の如く、縁附く事が嫌ひなどゝは、

太刀　惚氣交りで女犯の罪、言拔けんとする大膽者。

貞行　たつて陳じる其時は、縁より下へ突落し、捕縛なしても白狀さする。

彌九　それとも其身の罪を詫び、娘を殿へ差上げるか。

太刀　但し捕縛の調べにあひ、強情我慢を言ひ張るか。

貞行　安養返事は如何なるぞ。

〽又も詮議に詰めかくれば、安養心に怒りをなし、

安養　こは心外なる其のお詞、貞行殿には疳癖にて、御發狂を召されしか。

貞行　何んと。

安養　身不肖なれど、拙者は教學師の職に選ばれ、畏れ多くも佛經を講ずる役目蒙りをれば、よしや女犯の罪あればとて、京地へ出でゝ調べを受くる。それをみだりに捕縛なし、調べんなどゝは無禮でござる。まして飛道具にて圍むなどゝは、これ本心の沙汰にあらず。心得違ひとあるなれば、一度は赦す沙門の慈悲、後にて篤と分別召され。

〽立腹なして座を立てば、（ト安養立上るを、貞行きつと止めて、）

貞行　ヤア言譯無さに歸らうとて、いかで其儘歸さうや。

安養　貞行殿には安養を、お止めあつて何と召さるゝ。

貞行　女犯の罪を詮議致す。

安養　イヽヤ女犯の罪あらば、京地へ出でゝ詮議を受ける。御身に受ける謂れはない。

貞行　ヤア返すがへも憎くい過言。イデ其の儀なら容赦はならぬ。

〽刀おッ取り抜きかくる、腕をしつかと押止め、

ト貞行小姓に持たせし刀を取り抜きかける。安養その手を押へきッとなる。

安養　沙門の身なれど此の安養、御身如きの手に合はんや。

貞行　ソレ、打据ゑい。

彌九
太刀　心得ました。

〽右と左りに兩人が、打つてかゝるを事ともせず、縁より下へづでんどう、長押の槍を押取つて、突出す貞行安養は、汐首押へ動かせず、其間に兩人起上り、かねて沸らす臺子の釜、其儘取つて打掛くれば、あつとばかりに庭先へ、轉び落つるを取押へ、土に頭を摺りつければ、法師は無念の齒噛みをなし、

ト此内誂への鳴物をあしらひ、彌九郎、太刀藏、二重へ上り、件の鐵砲にて安養へ打つてかゝる。安養ちよつと立廻つて兩人を縁より投げ落す。貞行は長押にかけし槍を取つて安養に突きかける。安養立廻つて槍の汐首をキット押へる、是にて貞行困る思入。此内彌九郎、太刀藏起上り、二重臺子にかけし釜をとりて後ろより安養へ湯を浴びせる。是にて安養怺へかね、白洲階子より下へ落ちる。彌九郎、太

刀藏寄つて安養を押へつける。貞行は椽端へ出て槍の石突をついて思入。安養顔を上げ、無念の思入にて、

安養　ヤア、熱湯を以て安養を取押へんとは、卑怯な振舞。

貞行　出家の身にはあるまじき、力だてを致しなば、汝を押ゆる手だても樣々、動かるゝなら動いて見よ。

安養　ナニ、これしきの熱湯に、いかで安養恐れんや。

彌九　こま事拔かさず、

太刀　腕廻せ、

安養　何を。

ト刀の下緒兩人が、取つたとかゝるを捻返し、組んづほぐれつ挑み合ふ、

ト此内鳴物をあしらひ、彌九郎、太刀藏刀の下緒を取り立かゝる。安養刎退け、三人立廻りながら下手へはひる。

ト跡見送りて多門之助、（ト貞行思入あつて、）

貞行　荒鐵宇壺が恐れをなし、大力無双と申せしが、よもあれ程にはあるまじと、思ひの外なる手強き

賣僧、ハテ、憎き奴もあるものぢやなア。（トバタ〳〵になり、下手より摩賀平伊蘭太出來り、）

摩賀　ハッ、殿樣へ申上げます。宇壺、荒鐵の兩所が、唯今お庭のお圍ひ外にて、賣僧坊主を捕へんと互ひに挑ひ爭ひしが、

伊蘭　彼も熱湯の爛れにて身體弱りをりますれば、やう〳〵お茶席のお庭先まで、追込みましてござりまする。（ト是を聞き貞行につたりと思入あつて、）

貞行　强情我慢の賣僧めも、熱湯の爛れに弱りしならん。然し圍ひの茶席へ追ひ詰めしとあるからは、最早外へ行く所なし。それにて先は滿足々々。

摩賀　シテ此上の、

摩賀伊蘭　御手段は。（ト貞行鐵砲へ思入。）

貞行　さしもしぶとき安養ゆゑ、一通りでは白狀せまい。幸ひ用意の熱湯にて、鉛の玉を溶かし置き、背を斷ち割つて疵口より鉛を注込み拷問なさん。

伊蘭　スリャ、安養を、

兩人　鉛の責めに。

貞行　兩人とく〳〵。（ト槍の石突を突くな、道具替りの知せ。）

支度致せ、

トキツと思入。此の見得早舞にて、道具廻る。

（茶座敷の場）――本舞臺上手へ寄せて二間常足の二重。檜網代の蹴込、葺下ろしの屋根。四谷丸太の柱。二重眞中に御影石の沓脱、上下跡へ下げて折廻し角がらのある屋根附の土塀、所々に本物の植木、雪見形の石燈籠、つくばひの手水鉢飛石などよろしく並べ、二重正面上手一間の床の間、眞中三尺の壁、下手三尺茶立口。下手の棲突上げの腰窓、上手の棲障子建切り、二重の緣先に、上手へ寄せて誂への竹椽、下の方誂への紅葉の大樹、日覆より同釣枝。諸所に四つ目垣、菊の盛りの土手板、すべて此道具本物と見える事、菊地の庭茶座敷の模樣よろしく、矢張り早舞にて道具納まる。と上手より以前の摩賀平、伊蘭太鐵砲金柄杓など持ち出來り、

摩賀　殿樣より火急の仰せに、責道具とても調はず、鉛の玉をとろかして汲出すさそくの此の入れ物。

伊蘭　待合のお庭先へ、かん〳〵と炭をおこし、鐵砲丸の鉛をとかし、イザといふ時間に合ふやう。

摩賀　貴殿と何かの手つがひよく、

伊蘭　荒鐵宇壺の下働き、

摩賀　是にて致すでござりませう。（ト此時バタ〳〵になり、）

伊蘭　ヤア、あの物音は慥かに賣僧。いまだ御兩所の手に餘り、捕縛されぬと相見える。

摩賀　サヽ少しも早く玉をとろかし、鉛の責めの用意を致さう。

伊蘭　サア、ござりませ。（トやはり早舞にて兩人下手へはひる。）

〽入りにける折しもあたり騷がしく、さしも豪氣の安養が、熱湯に爛れしを事ともせず、取つた遣らぬと兩人が支へるその手を振拂ひ、挑み爭ふ庭續き、暫し戰ふ其内に體の疲れにどうと伏す、隙をねらつて手早くも、有合ふ繩に括し上げ、紅葉の下に引括れば、安養無念の齒噛みをなし、

ト此内上手より、安養衣を脱ぎ捨て、着流ししどろになり、太刀藏、彌九郎と立廻りながら出來り、文句よき程にバッタリ轉ぶ。此間に兩人安養へ繩をかけ、下手の楓の下へ縛りつける。安養キッとなつて、

安養　コリヤ汝等、假令主人の言附にもせよ、無法無體に手向ひなし、我を捕縛致せしは、言語に絕えし獄卒めが。

〽忿怒の面現はせり、折柄後に聲あつて、（ト安養縛られしまゝ、兩人をぢつと見詰め、無念の思

入。此時奥にて、

貞行　兩人控へい。

彌九　あのお聲は、

太刀　我君様。

〽あなたの襖引明くれば、貞行公は煩惱の、胸のほむらも晴れやらず、忽然として出來り、
褥に坐して庭前の、樣子見下ろす有樣を、見るに安養聲荒らげ、

ト此内以前の貞行、奥より出來り、二重眞中に住ふ。安養キッと見て、

安養　コリヤ貞行、取るに足らざる此奴等は、物の數にて數ならねど、汝は國の主人にて、太守と呼ばれし身を以て、手籠に我を捕縛なし、若し京地よりお咎めあらば、其の時何と言譯致す。家の大事を思ひをらぬか。

〽恨みを餘所に家國の、爲を案じゝ金言も、貞行更に聞入れず、（ト貞行につこと思入あつて、）

貞行　ハテ、みじめなるよい態〳〵。（ト是より琴の入りし打合せの合方になり、）凡そ天地の其間、不思議と言へる事はなし、邪法を以て聊の功を立てしを鼻にかけ、出家呼はりかたはら痛い、汝如きの賣僧めを假令いかほど致せばとてお祟りあらう筈はない。邪婬を犯し大罪のおのれに科があり

ながら、過言を申すのみならず、わが言附にて折檻なす二人へ對し手向ひなすゆゑ、縛り上げたが何と致した。但し責苦が脱れたくば、犯した罪を白狀なし、命の慈悲を願ひし上望みかけたる薊とやら、予が手廻りに差出すか。さもなき内は品を替へ、拷問なしても女犯の罪、白狀させねば相成らぬ。賣僧め答へは如何なるぞ。

安養　ヤア假令いかほど拷問なすとも、身に覺えなき女犯の罪、いかで白狀致さうや。かゝる無體の汝等に、詞交すも穢らはしい。責めるとあらば責めて見よ。

貞行　オヽ面白い。よく申した、望みの通り責めてくれん。

彌九　どれ一と拷問。

彌九 太刀　致してくれん。

〽得たり賢し牛頭馬頭の、惡鬼に等しき兩人が、打ちつ叩きつ締上げれば、兩眼閉ぢて觀念の覺悟に答へあらざれば、打たるゝ身より打つ腕の、いつか痺るゝ拷問に、責めあぐみてぞ見えにける。

ト此内彌九郎、太刀藏割竹を持ち立掛り、捨ゼリフにて安養を散々に打据ゑる。安養は目を閉ぢしままぢつと思入あつて怺へるこなし。トゞ兩人腕の痺れる思入にて、顏を見合せホツとなし、

彌九　エヽ、張合のなき業つくばり、

太刀　一筋縄では行かぬ奴、

彌九　イデ手を替へて、

兩人　拷問なさん。

〽又も左右へ立かゝるを、

貞行　兩人待つた。

彌九　何故お止め、

兩人　なされまする。

貞行　其奴を拷問致すには、左樣な手ぬるい事どもでは、容易に白狀致すまい。

彌九　シテ拷問の、

兩人　御手段はな。（ト貞行下手へ向ひ、）

貞行　ヤア〳〵者共、申付けし用意の品を持參致せ。（ト下手にて、）

摩賀伊蘭　ハア――。

〽はつと詞の下侍、運ぶ烈火の金柄杓、沸いてたぎる熱湯の、鉛を汲んで持ち出づれば、

宇壺荒鐵見てびつくり、

ト此内ド手より、以前の摩賀平、伊蘭太金柄杓に鉛の熱湯を汲んで持ち出る、太刀藏、是れを見て、

彌九　ヤヽ、スリヤ鑄掛の職にて用ふる、

太刀　鉛をときしたゝらの熱湯、

貞行　背を斷ち割つて鉛の熱湯、注ぎ込むといふ話は聞けど、これまで貞行試した事なし、幸ひ今日安養めが、しぶとき拷問致すには、此上もなき責道具、それにて拷問致して見よ。

彌九　コリヤ結構な思召し。假令如何なる豪傑でも、此の熱湯が一滴、體へさはる其の時は、身うちは爛れ赤裸、

太刀　その苦しみが脱れたくば、いかにも女犯を犯しましたと、白狀致して罪に伏し、薊を殿へ差上げるか。

彌九　賣僧め、返事は、

彌九　ドヾ、どうだ。

太刀　〽金杓取つて安養の、目先へぐつと突付くれば、

ト彌九郎太刀藏件の金柄杓を取つて、安養の目先へ左右より差付ける。これ迄安養目を閉ぢちつとし

てゐて、鉛の湯氣にて額を蒸され、兩眼を開きキッとなり、

安養 コリヤ多門之助、ちえゝおのれはなァ。(ト誂への床の合方になり、)智仁兼備の名将と、譽れを取りし秀行の、現在嫡子にありながら、いかなる天魔が魅入りしか、譬へ方なき此の振舞、わが身は樹下石上草の枕に起伏なす、宿り定めぬ身の上ゆゑ、命はさらく惜しまねど、罪なき者をかくまでに、成敗なして濟まうと思ふか、古き例は殷の世も妲妃の色香に溺れしゆゑ、惡逆無道に亡びしぞ、其の紂王にも勝りたる、我威に募りしうつけ者め。

〽古き例をひきべつのあるに甲斐なき誡も、時雨紅葉の色づきて、血走る涙貞行は、耳にもかけずえせ笑ひ、(ト此内安養よろしくこなし。貞行思入あつて、)

貞行 曳かれ者の小唄とやら、おのれが苦痛を脱れんと、富婁那の辯にて言ひとくとも、長談義は聞きたうない。猶豫致さず荒鐵、宇壺、早く鉛を注入れい。

〽心得たりと兩人が、かたまる鉛見て驚き、(ト彌九郎太刀藏金柄杓の鉛を見て、)

兩人 心得ました。

彌九 エヽ、コリヤ今の間に固まつたか。

太刀 早く汲み替へ、持つて來やれ。

摩賀
伊蘭　ハッ。（ト件の金柄杓を持つて侍二人下手へはひる。）

貞行　その間に兩人、背を斷ち割れ。

彌九　ハツ、ドレ一料理、

彌九
太刀　致さうか。

〽氷の刃拔放し、廻る後は此世から、劍の山の道知るべ、逆に持つたる切尖も、背筋のあたり五六寸、衣をかけて突破り、溝になれよと斷割れば、血潮たばしる折柄に、たゝらの鉛金杓へ、汲んで運びし熱湯の注ぎ込む鉛、阿鼻叫喚もかくまでに、荒き苛責と身を悶え、

ト此内彌九郎太刀藏刀を拔き安養の後へ廻り、手拭を刀へ卷き、逆手に持ち背中を斷ち割る事よろしく、仕掛にて安養の體へ血汐たばしる。爰へ下手より摩賀平、伊蘭太金柄杓へ鉛を汲んで持ち來る。貞行目配せするゆゑ、侍兩人立掛り、安養の背中へ注ぎ込む。是にて黄色き煙立つ。皆々是に驚き、後へ飛び下る。安養は苦痛のこなしにて、

安養　ちえゝ犯せる罪のなき者を、捕縛致せし其上に、昔が今に例なき、鉛をもつて安養が身に覺えなき此の拷問。言はうやうなき大惡無道、鬼め、魔王め、獄卒め。

〽怒れる眼は此世から、魔道へ落ちし安養が、罵る聲の物凄さ、荒鐵宇壺兩人も、身の毛

よだつて拵ゆれば、多門之助は悠然と、香を薰じて空吹く風。

ト此内安養苦痛の思入にてキッとなる。是にて摩賀平、伊蘭太は氣味の惡きこなしにて、逃げてはひる。彌九郎、太刀藏も氣味惡きこなしにて拵へる。貞行は香を出して薰ずることあつて、

貞行　かゝる苦痛をさせまじと、詞を以て問ひ糺せど、白狀致さぬのみならず、無禮過言の賣僧めゆゑ、成敗なすはおのれが罪、おのれに酬ふ苦しみも、自業自得の斷末魔、こま事申さず往生致せ。

〽詞和らぎ大惡も、性は善なる導きの、諭しに猶も腹立たしく、（ト安養無念の思入にて、）

安養　ヤア往生なせとは奇怪至極、見よ〳〵今に菊地家に祟りをなして取潰し、世に亡き父の修羅の妄執、やはか晴らさでおくべきか。（トキッと思入。皆々是を聞き咎め、）

貞行　ナニ、父の恨みを晴らさんとは、心得難き世迷言。

彌九　シテ〳〵われが、

太刀　素性といふは。

安養　貞行初め獄卒共、此の安養が身の素性、今こそ名乘る、承れ。

〽炎の息をほつと吐き、（ト安養縛られしまゝキッと居直り、是より誂へ笛の入りし合方になり、）

父母兄弟の菩提のために、出家堅固を遂げしゆゑ、過ぎし恨みも佛道の、生者必滅の教へを守り、

断ち切る筈も情なや、今は魔道の鬼となり、名乗るも無念の事ながら、貞行汝が亡き父なる、秀行に亡されし大伴左衛門尉義景が、忘れ形見の末子たる、三郎丸とはわが事なり。

三人　ヤ、、、、

ト是を聞き貞行段々前へ進み出て、ト二重より下り、庭下駄を履き、上手の竹縁へ腰をかける。安養は苦痛を怺へる思入あつて、

安養　大伴菊地は其後も、互ひに不和の仲なりしが、和睦となりて秀行の、妹を父の義景が娶りしばつかり落城なし、見るもなか／＼いたはしく、我はそれより國遠なし、出家となりし身の上に、恨みの念も忘れしが、魔道へ落ちし上からは、敵の貞行、自滅させいで置くべきか。

〽最期の念も悪靈の、相を現はす物語り、貞行心苛立てゝ、

ト此内安養無念の思入よろしく、貞行キッとなつて、

貞行　扨はおのれは義景の、忘れ形見でありしよな。

彌九　さう聞く上は、猶もつて、

太刀　お手下さずばなりますまい。

貞行　如何にも、成敗致してくれん。

〽刀引抜き立寄りて、（ト貞行立上り、刀を抜き安養の傍へ來り、）

コリヤ賓僧、女犯の罪を糺さんと、地獄落しの拷問も、しぶとき答へ淨玻璃の鏡に照され身の素性、おのれと名乘る修羅道は業の秤の重き科、心の鬼の苦しみも身で身を責める紅陽の、名さへ由緣の庭前へ散る紅葉の血塗れに、多門之助が手を下し此世の暇を取らしてくれん。首差し延べて觀念致せ。

安養　おゝ身體自由ならざれば、無念の最期は遂ぐるとも、おめ〳〵首を打たれうか。

貞行　小癪な事を。

〽片手なぐりに打ち下す、刃の下に秋の菊、散るよと見えし如くなり、俄に一天掻き曇り、館は忽ち震動なし、

ト此内貞行キッと思入。彌九郎太刀藏は安養の體を前へ引出し左右より押へつける。是にて貞行安養の首を討ち落す。此時ドロ〳〵になり屋體の前へ一面に黑幕を振冠せる。皆々あたりへ思入あつて、

ヤヽ、いまだ未の下刻にて、太陽西に入らざるに、

彌九　俄に天地鳴動なし、

太刀　暗夜に等しき此體は。（ト兩人安養の死骸を押へながら、がた〳〵顫へ出す。）

太刀　何だか不氣味になつて來たわえ。

彌九　首が迷子になりしも不思議に。

貞行　シテ賣僧めが、最期の首級は、(トあたりへ思入。是にて彌九郎、太刀藏こちらへ來り、

ト兩人あたりを捜す。此内安養の吹替の首貞行の袴へ喰付きゐる。兩人是をみてびつくりなし、

彌九　ヤ、コリヤ我君のお召の裾へ。

太刀　賣僧の首が、いつの間にか。(ト是にて貞行わが袴を見てギヨツとせし思入にて、)

貞行　コリヤ、太刀藏々々、首級を取れ。

太刀　ヘイ。(トむづ〳〵してゐる。)

貞行　エヽ、取れと申すに。(トキツト言ふ。)

太刀　ヘエイ。(ト氣味惡さうに首を取らうとして取れぬ思入にて、)コリヤ、どうしても取れませぬ。

貞行　エヽ、不埒な奴めが。(ト一刀に斬りつける。ハツと倒れる。彌九郎びつくりして、)

彌九　コリヤ殿樣には、太刀藏を。

貞行　其方代つて取つてくりやれ。

彌九　取らぬと言はゞ直ぐにばつさり、飛んだ所へはさまつたわえ。(トこは〳〵ながら首へ手をかけ、)南

貞行　無阿彌陀佛々々々々々っ。（ト取る事よろしくあつて、）へイ、取れましてござりまする。

貞行　面を洗つて、雁木に掛けい。

彌九　へイ。（トド手のつくばひの手洗鉢にて首を洗ひ、）シテ此首級は。（ト貞行あたりを見廻し、）

貞行　幸ひあれなる、机の上へ。

彌九　ハッ。

ト有合ふ桐の机へ安養の首をのせる。是にて本首と替り、此時ドロ〳〵になり、貞行の後へ陰火燃える、彌九郎是を見てびつくりなし、

おのれ賣僧め。

ト貞行へ斬つてかゝる、ちよつと立廻つて向うへ突遣る。是にて太刀藏に躓き、太刀藏起上つて兩人ちよつと立廻り、相打にて左右へバツタリ倒れる。

貞行　無禮者めが。

〽折しもこなたの机の首級、恨みの眼ぢつと見開き、

安養　貞行汝も其如く、今にぞ思ひ知らしてくれん。（ト貞行キッとなつて、）

貞行　扨は賣僧の祟りなるか、イデ其の儀なら、

ト上手の首へ立かゝる、大ドロ〳〵になり、下手紅葉の下の死骸より大ばれんの陰火燃えて、連理引きになり、貞行上手へ行けぬ思入。あちこち切拂ふ。トゞ下手にある安養の本首是れを見てにつたり笑ふ。是にて貞行心づき。

ウム。（ト足を踏み出すを、木の頭。）

〽怪し恐ろし。

ト大ドロ〳〵、貞行机の上の首を見込み、よろしき仕組にて、

ひやうし　幕

三幕目

筑紫辰澤観音堂の場
同　谷底の場

〔役名〕——太田屋勘兵衛、獵師彌平次、紅陽院之靈、菊地多門之助、松浦伊織、簑浦左膳、獵師峯藏同がけ六、菊地の供廻り大勢。彌平次妹薊等。〕

本舞臺一面の山幕、上下杉の植込み、口覆より杉の釣枝、獵師峯藏、がけ六の兩人、筒袖山たッつけ、山刀草鞋北叟頭巾を腰へ挾み、獵師の拵へ、鐵砲を擔ぎ立掛りゐる見得。山おろしにて幕あく。

峰藏　コウがけ六、手前はどうだか知らねえが、俺ァ此頃間が惡く、兎ッ子一匹擊つた事はねえ。
がけ　そりやァ手前ばかりぢやァねえ。此頃山の切出しで、杣が伐るので口山へは、猪も鹿も出ねえから、何にも捕らねえ。
峰藏　何にしてもこんな事ぢやァ、獵人をしちやァ飯が食へねえ。何ぞ宗旨を替えにやァならねえ。
がけ　然し俺達は先祖代々の獵人だから、今更廢めるわけにも行かず、生半の事をするよりか、矢張り仕馴れた事がいゝ。
峰藏　成程手前のいふ通り、生半な事はうつかり出來ねえ、隣り村の太郎作が澁皮のむけかけた娘を的に宿場へ出て、居酒の店を出し、覘ひ外さず鐵砲よりドンと一番當てる氣も、土地の若い衆に娘を凌はれ、當てる心算が玉を失くして、家は次第に火繩の火が消えて、たうとう種をすつてしまつた。
がけ　それぢやァ隣り村の太郎作は、若い衆に娘を凌はれたか。其奴ァ詰らねえ事をしたな。オヽその娘で思ひ出したが、此の辰澤の觀音堂へ、どこから來るか知らねえが、年の頃は十六七で、いゝ娘が夜に入つて、たつた一人で來るさうだが、手前見掛けた事はねえか。
峰藏　オヽ見かけたく、昨夜觀音坂で見かけたが、びつくりする程いゝ娘だから、知つての通り助平

根性。どうかしようと思つたが、此山中へ夜々中、娘の來よう譯がねえ。てつきりれこだと思つたから、眉毛を濡らして家へ歸つた。

がけ　狐か狸か知らねえが、何しろ觀音坂で今夜娘を待合せ、いよ／＼誠の娘なら、二人で存分慰まうし、又狐か狸の化けたのなら、打殺して錢にしよう。

峰藏　成程、これは遣らずのがさず、損の行かねえ話だが、惡くするとすつかり化され、石佛でも抱かにやアいゝが。

がけ　そこは彼奴らが一の禁物、一發ドンと打放し、狐か狸を試した上。

峰藏　誠の娘に極つたら、狐拳で前後を定め、

がけ　あした庄屋の澁を食ふとも、此鐵砲は放さにやアならねえ。

峰藏　それぢやア是れから辰澤へ。

がけ　ちつとも早く出掛けよう。

峰藏　どうぞ娘に、逢ひてえものだ。

ト山おろしになり、兩人上手へはひる。知せにつき、山幕切つて落す。

（辰澤峠の場）本舞臺四間通し常足の二重、蹴込み山の書割、下手になだれの上り段、二重上の正面に茅葺屋根。本椽附き椽つか吹拔き雨開きの扉誂へあり、軒口に「觀世音」といふ額、すべて苔蒸したる誂へ、堂の上手に長石の碑、是に「辰澤觀音堂」と記し、苔蒸したる建石仕かけあり、堂の後ろ一面に黑幕、上下杉林、よき所に杉の立木、同じく釣枝、蔦からみ、二行に釣る事、雨落より山の張物を出し、杉の梢を見せ、谷の模樣、眞中に切穴、此の左右正面折廻し山の張物にて見切り、すべて筑紫辰澤觀音堂の模樣、山おろしにて道具納まる、と山おろし打上げ、誂への唄淨瑠璃になり、

〽千年經る松の老木の色替えず、枝を交へて生ひ茂る、葛のおがせを分けつゝも、誠を思ひ辰澤に、眞心運ぶ夜の道。

ト本釣鐘、谺の合方、掠めて風の音をあしらひ、花道より薊、島田鬘、振袖、褄を端折り、田舍娘の拵へにて火繩を振かざしながら、跣足にて出來り、花道へ留り、跡先へ思入あつて、

薊　今宵は雨氣に月さへも、見えぬ木の間の薄暗がり、火繩の灯影にやう／＼と、習はぬ道の山越えて、此の辰澤の觀音樣へ、千尋に餘る谷よりも、深き御恩の御師匠樣、わが身の事より過ぎし頃御城内へお召しにより、其後如何なされしや、何の御沙汰もない故に、御無事でお歸りなさるゝやう、夜毎に參る跣足參りも、唯一心に山中の、怖さも此身に覺えねど、谷の水音猿の聲。テモ

物凄い事ぢやなア。

〽翠もふかき黑髮の、操を立てる松の下、月さへ洩れず繩の火を、便に辿る木下蔭。

ト此内薊よろしく思入あつて、舞臺へ來り、二重へ上りあたりへこなし、右の合方にて、

今更いふも愚癡ながら、思ひ廻せば我が身ほど、はかなきものが世にあらうか。幼い時に父樣に別れて間もなう母樣も、共にあの世の人となり、親なき跡は親といふ、唯兄さんを力として、成人なせしかひもなく、その兄さんの身持が惡く、僅かな田地も賣代なし、終には溜る借財に、私を苦界の廓へ沈め、一と先づ難儀をのがれんと、相談なしてすでの事、柳町へ賣られる所、紅陽院の安養樣が、金子を出してお救ひ下され、それから三歲の御養育、一方ならぬお惠みゆゑ、御恩送りに女の身を、男姿に小姓となり、お側勤めをなす内に、思ひ掛けなく御領主の、菊地樣のお目に止り、御所望ありしその折に、使ひに來る彌五郎が、此身の乳房を見咎めて、つひに女といふ事が顯れしゆゑ一大事と、安養樣のお指圖で博多の織元太田屋の養女となつて脫れしが、お師匠樣は御領主のお召しによつて此間御城内へお出でなされしが、如何なる御詮議あつての事か、其後何の御沙汰もないのは、正しく凶事と思ふゆゑ、御無事にお歸りなさるやう内外の者の寢入るを待ち、庭から抜けて此山中へ夜な〳〵お詣り申しまするも、受けし御恩を送りたさ。

トよろしくあつて堂へ向ひ、

南無や薩唾の御利益にて、御無事にお歸りなされまして、どうぞお目にかゝれますやう、大慈大悲の觀音樣、お救ひなされて下さりませ。

〽聲もかすかに谷水の、音のみ深きねぎ言に、心の誠顯はれし、古木の枝に啼く猿、

ト薊合掌なして、一心に祈念の思入。此の以前堂の後ろより、獵師峰藏がけ六出かゝり窺ひゐて、唄の切れにて前へ出て、

峰藏　コレ姐エ、人が聞くのも知らねえで、

がけ　何をそんなに、愚癡をいふのだ。

薊　エ、（トびつくりなし、二人を見て）コリヤお前方は、何時の間に。

峰藏　山稼ぎの歸りがけ、猪狼のその外は、往來のねえ山中に、女の聲は不思議ゆゑ。

がけ　觀音堂の後ろへ廻り、息を殺して隱れてゐた。

薊　スリヤ、最前からの樣子をば。

峰藏
がけ　殘らず後ろで聞いてゐた。

薊　アレ。（ト逃げようとするを立廻り、薊を引留め、）

峰藏　コレサ、急かずとマア待ちねえ。二人に愚癡を聞かれたとて、慌てゝ行くにやア及ばねえ。

がけ　家へ行くなら俺達が、麓へ出るまで送つてやるから、マアゆつくりとしなせえな。

ト兩手にて薊の手を取り引据ゑる。薊氣味惡き思入あつて、

薊　イエ〳〵私は家を拔け、隱れて參りし事なれば、少しも早く歸りませねば、あすから家が出られませぬゆゑ、どうぞ放して下さりませ。

峰藏　さういふ事なら歸してやらうが、觀音樣を信心する、

がけ　後生心があるならば、施しをして、

兩人　行きなせえ。

薊　施しせいと言はしやんすは、手の内の事でござんすか。

峰藏　エヽばかな事を言ひなせえな。獲物次第で一と晩に、何貫といふ錢を取る、

がけ　惡錢取りの獵人だ、五十や百のはした錢、手の内などが入るものか。

薊　さうして私に、施しせいとは。

峰藏　俺達二人に一膳づゝ、

がけ峰藏　箸を取らしてくんなせえ。（ト兩人しなだれかゝる。）

薊　エヽ、そんなら爰で私をば。

峰藏　厭だと言やァ手足を縛り、

がけ　痛い目させても、

兩人　抱いて寢るのだ。(ト薊顫へながら、)

薊　アヽ、誰ぞ來て下さいまし、アレエ〳〵。

峰藏　エヽやかましい、靜かにしろ。いくら泣かうが喚かうが、人里離れた此の山中、觀音樣が留めたら知らず、猪狼か獵人の、仲間の者より往來はねえ。

がけ　聲を立てりやァ段々と、二人が三人四人と、人が殖えりやァお前の難儀。

峰藏　素人と違つて俺達が、覘ひをつけた上からは、

がけ　どうで受けにやァならねえ鐵砲。

峰藏　往生なして早籠めの、

がけ　二つ玉を、

兩人　受けてくんねえ。(ト左右より手を取る。)

薊　アレエ。(ト振拂つて逃げようとするを兩人捉へようと追ひ廻す。)

〽俄かに落す夜嵐に、樹々の稍も吹荒れて、木の葉の雨のばら〳〵と、雲も夜霧かましらかとそことも分かで立黻ふ。

ト此内風の音のやうなるドロ〳〵になり、兩人薊を捉へようとするを立廻りて、薊脇腹を突かれ悶絶する。兩人しめたと薊を捉へる。大ドロ〳〵になり、兩人タヂ〳〵と連理引樣になり、兩人苦しみ左右へ見事に返り、悶絶する。是をきつかけに堂の前へ誂への白き煙立つ。此の内扉仕掛にて開き本緣の上に安養の靈、香染、破れたる袈裟衣、おどろなる拵へ、立身にて現はれる。

〽風おとろへて打戰ぐ、緣に生ひ出し枯薄。

ト薄ドロ〳〵、安養緣の上にてこなしある。是にて薊ウンと心づき、起上つてあたりを見廻し、安養を見てびつくりなし、

薊　ヤヽ、あなたは師の坊、安養樣。

安養　オヽ、薊、よくも夜な〳〵我を思ひ、觀世音へ詣でしぞ。

薊　御身に凶事のないやうに、お願ひ申上げましたが、どうしてあなたは此所へ。

安養　因を結びし其方に逢ひたく、わざ〳〵是れへ來りしぞや。

薊　見受けますれば恙う、以前に替らぬ師の坊樣、是も偏に觀音樣の御利益ゆゑでござりましたか。

安養　エヽ有難うござりまする。（ト薊悦ぶ思入。安養〱を見てこなしあつて、）その悦びも裏がへに、仔細を話さば其方の悲しみ。

薊　え、なんとおつしやります。

安養　そちが切なる心根が、不便なゆゑに安養が、假に姿を現はせしぞ。

薊　テモ心得ぬそのお詞、もしやあなたは御城内にて、

安養　オヽ、多門之助が手にかゝり、非業な最期を遂げたるぞ。

薊　エヽ、スリヤ師の坊には御最期とな。

安養　いかにも冥土の鬼となつて、此土に迷ふわが魂魄、

トドロ〱になり、安養の衣裳引抜きにて、血に染んだる凄き拵へになり、幽靈の合方、寝鳥の焼酎火出る。薊安養を見て、

薊　テモ淺ましきそのお姿、御無事でお歸りありし事と、悦ぶ甲斐も情なや。邪險の刃に果敢なくも非業の御最期なされしとか。エヽ口惜しい事でござりまするなア。（ト薊口惜しき思入。）

安養　それほどまでに口惜しと、思ふ其方の眞心を、知つたるゆゑに陰府より、假に姿を現はして、最期の樣子申し聞け、口惜しと思ふわが一念、其方の體へ憑りうつり、領主へ仇なす所存なるぞ。

薊　わが恨みをば受け繼ぐれるか。

安養　産みの親よりまさりたる、大恩受けし師の坊樣、女ながらもこの薊が、命を捨てゝも菊地へ入込み、あなたのお恨み晴らします。（トきつといふ。）

薊　スリヤ一命を取らるゝとも、恨みを晴らしてくれるとな。

安養　あなたの爲なら八つ裂きに、よしや此身を裂かるゝとも、何しに命を惜しみませう。

　　ト安養嬉しき思入あつて、

安養　師弟の因を忘れずに、一命捨てる其方の心底、是にて迷ひの心も晴れ、陰府へ歸る安養が、非業に死したるあらましを、此の場に於て物語らん。

薊　お聞かせなされて下さりませ。（ト誂への合方になり、安養思入あつて、）

安養　無道の領主多門之助、この安養が大友の、血緣ゆゑに根を斷つて、その葉を枯らすといふは僞り、誠は其方に懸想せしより、女を男の姿となし、召仕ひしは女犯なりと、糺問なせど元よりして、此身に覺えなきゆゑに、罪に服せず言ひ張りしを、白狀させずにおくべきかと、種々の拷問なせし上、わが背を斷ち割り湯となりし、鉛を注込む非道の拷問、齒を食ひしばり怺ゆれど、五體は疼き骨々は、碎くるばかりのその苦しさ、阿鼻叫喚の墮地獄にて、呵責を受けなばかくあらんと

血を吐く程の切なさも、覺えなきゆゑ服せざりしを、憎しと手づから貞行が、嬲り殺しに無慙の最期、非道の成敗受けたる悔しさ、死しても片時忘られず、魂魄此土に迷ふ安養、今より御身の五體をかり、菊地の家へ立入つて恨みを晴らすわが一念、受繼ぎくれよコレ薊。

ト安養物凄く、よろしく無念の思入。薊悔しきこなしあつて、

薊　非業の御最期なされし樣子、聞けば聞くほどお情ない。嘸御無念にござりませう、一旦受けし御恩送りに命を捨てゝも私が、御無念お晴らし申しまする。

安養　テモ忝き志し。得心なせし上からは、此土に迷ふ我が魂魄、御身の五體を借りるぞよ。

薊　スリヤ、私の。

安養　いふにや及ぶ。

〽袖に涙の雨やさめ、萩の葉末に置く露も、

トドロ／＼になり、安養本緣より二重の上へ下り、薊の側へ來りこなしあつて、薊を引寄せ懷ろへ手を入れる。此の途端後ろにて本鐵砲の音して、安養立上り、大ドロ／＼になり、白き煙立昇り、上手の建石へ消える。薊ハッとひれ伏し。

〽散りて落ちゆく小夜あらし、

ト唄を上げる。上手の竹藪を押分けて獵師彌平次、筒袖山たッつけ、山刀をさしほくそ頭巾を冠り、草鞋を穿き鐵砲を持ち出る。下手の藪を押分け太田屋勘兵衞、半合羽、尻端折り、脚絆草鞋一本差し、菅笠を持ち出て、双方一時に見得、時の鐘、忍び三重模樣の合方かすめて山おろし、暗がりの思入にて双方窺ひ寄り、薊に躓く、薊心付き、是より三重、ダンマリ模樣の立廻り。よき所に以前の峰藏がけ六出て中へはひり、よろしく立廻つてキット見得。知せにつき霞附きの月を下し、三人顏見合せ。

彌平　ヤ、コリヤ妹。

薊　お前は兄さん。

勘兵　さういふ聲は。

ト側へ寄る。薊は逃げようとする。峰藏がけ六捉へようとする。ドロ〳〵燒酎火にて連理引になり、兩人行かれぬこなし、三人は立廻りの内、彌平次薊の袖を捉へ、勘兵衞支へる。薊は逃げようとして二重の上より、前の切穴へ落ち、片袖は彌平次の手へ殘る。

彌平　南無三、谷へ、

勘兵　娘は落ちたか。

彌平　命に恙は、

勘兵　なけりやアいゝが。

ト下を見込む。兩人引張りの見得、誂への鳴物になり、後セリにてこの道具をセリ上げる、正面一面の山幕になり、是と一緒に下より、貞行半纏股引、ぶつさき羽織、大小切草鞋、鷹野の拵へ、弓を持ちて立身、下手に以前の薊、片袖ちぎれしなりにて悶絶してゐる見得にて、舞臺眞中へせり上る。留の木にて山幕を切つて落す。

（谷底の場）――本舞臺向う打抜き、山々を書割りたる遠見、裾通り銀張りの谷川の流れ、上下前の杉林諸所に蔦のからみし松の立木、日覆より松、杉の釣枝、灯入りの月をおろし、すべて谷底の體よろしく道具納まる。と谺入の合方になり、貞行思入あつて、

貞行　けふ狩くらの折柄に、わが拳に止めたる祕藏の鷹の朝霞、物に驚き逸れたるゆゑ、後を慕うて此處彼處、山又山へ分け入りて、計らず來りし此の谷間、（ト薊へ思入あつて、）心得難きは是なる小女、見れば衣類も破れしといひ、悶絶せしは此の峰より、爰へ落ちしと覺えたり。打捨て難き大事の人命、介抱なして助け得させん。

ト腰より小さなる馬杓柄を出し谷水を汲取り、印籠の藥を薊の口へ入れ、水を飲ませ、介抱しながら

ふつと月明りに薊の顏を見る。薄ドロ〳〵になり、貞行思入あつて。

薊　フム、是なる小女は先つ頃、紅陽院へ休らふ時、茶の給仕せし數馬といふ、小姓に寸分違はぬ面ざし、姿は替れど彼事も誠は女と聞きつれば、もしや數馬にあらざるか。何にもせよこの小女、心をつけて問うて見ん。（ト活を入れる。薊息を吹返せし思入。貞行これを見て、）コリヤ心がつきしか。

貞行　ハイ、心付きましてござりまする。

薊　そちは峰より落ちたるか、悶絶なしてをつたるゆゑ、予が介抱致せしぞ。

貞行　どなた樣でござりまするか有難うござりまする。（ト辭儀をなし顏をあげ貞行を見て、）ヤあなたは。

薊　予が面體を覺えをるか。

貞行　ハイ、よう覺えてをりまする。

薊　姿は替れど其方は、紅陽院に仕へたる、小姓數馬にあらざるか。

貞行　お目立ちまする上からは、何をかお隱し申しませう。男姿に窶しましたる、小姓數馬にござりまする。

薊　誠は女と聞きつるが、扨はいよ〳〵女であつたか。

貞行　お恥かしうござりまする。（ト顏を隱し、なまめきし思入。貞行側なる岩臺へ腰をかけ見惚れるこなし。）

貞行　若衆姿に懸想なし、所望致したる事ありしが、女とあれば又一入、思ひがけなき再會は、悦ばしき事なるぞ。

薊　勿體ない事ながら、今此所で御前樣の御介抱を受けませねば、此儘死するわが身の上、何とお禮を申しませうか、詞で申し盡されませぬ。

貞行　予が介抱にて心付きしを、左程に其方は嬉しう思ふか。

薊　是が嬉しう思ひませいで、何と致しませうぞいなア。

貞行　左程に嬉しう思ふなら、予が心に隨つてくりやれ。（ト薊の手を取る。）

薊　エ、スリヤ數ならぬ私を。

貞行　屋敷へ連れ行き、寵愛したい。（ト貞行寄り添ふ。薄ドロ〳〵にて薊思入あつて、）

薊　それぞ此の身の願ふ所。

貞行　スリヤ其方は、得心なるか。

薊　一度嬉しき仰せをば、蒙りましてござりまするが、男姿にやつせしゆゑ、御意にもといて橋口より、他家へ參つてをりましたが、思ひがけなく又今宵、是にてお目見得致しまするは。（ト薊思入ドロ〳〵にて）影身に附添ふ。

貞行　ヤア。（ト思入薊氣なかへ）

薊　サア、影身に附添ふ亡き親の、導きでがなござりませう。

貞行　シテ其方が生れ故郷、是れまでの名は何と申すぞ。

薊　元私は肥前の國、柳ヶ浦の產れにて、百姓彌三兵衛が娘、薊と申しまする者にて、いまだ幼き其時から父母ともに死別れ、兄を便りに成人なし、仔細あつて橋口の安養樣にお世話になり、其後博多の織元なる太田屋勘兵衛方へ養女となり、唯今彼處にをりまする。

貞行　シテ又兄は、いづれにをるぞ。

薊　兄は當國白木山の麓、落合村に住居をなす、獵人彌平次と申しまする者でござりまする。

貞行　早速明日勘兵衛方へ使を立て、其方を予が召仕に呼び迎へん。

薊　スリヤ私を、お召仕に。（ト思入あつて、）えゝ有難うござりまする。

貞行　けふは不獵の其上に、朝霞を失ひて、心よからず思ひしが、鳥獸にまさりたる、思ひがけなき獲物をなし、ハテ悦ばしい事ぢやなア。

ト此時山おろし、バタ〳〵になり、花道より松浦伊織半纏股引ぶつさき羽織、大小切草鞋、拳に鷹を据ゑ、續いて簑浦左膳同じ拵へ、其外供廻りいづれも半纏、紐付、股引、大小、切草鞋鷹野の拵へにて

松明を照らし持ち出で來り、直に舞臺へ來り、

伊織　ヤ、わが君是に、

皆々　御座ありしか。（ト皆々よろしく平伏する。貞行思入あつて、）

貞行　オヽ松浦伊織を始めとして、皆のもの大儀々々。

皆々　ハヽハッ。

伊織　御祕藏の朝霞、物に驚き逸れたるゆゑ、君には行方を追はせ給ひ、山路へ深く入り給へば、お跡をしたひ參りしぞ。

左膳　恐れ入つたる事ながら、御前の影を見失ひ、皆一同に心ならず。

○　ちり／＼になり八方より、道なき山路を踏み分けて、

△　爰の林かしこの森と、お跡を尋ね奉れど、

□　御影だにも見えざれば、山の麓で一同落ち合ひ、

◎　もしや是なる谷間へ入らせられしも、

皆々　計られず、

伊織　先づ先駈けてそれがしが谷間へ參るその折柄、かたへの松に朝霞が、羽を休めしを見出して、御

覽の如くお拳を、取り得ましてござりまする。

貞行　オヽ、ようこそ取り得た、過分〳〵。

伊織　ハヽ、恐れ入り奉りまする。（ト辭儀をする。左膳薊へ目をつけ、）

左膳　我君樣へ伺ひまする。是なる女は何者にて、かくお側にをりまするぞ。

貞行　オヽ朝霞のそれしを追ひかけ、深入りなせし此の谷間、見れば峰より落ちし體にて、氣絶なしたる此の小女、不便と存じ藥を與へ、介抱なして助けしもの。

左膳　コハ勿體なき事ながら、よくもお助け遊ばしました。御領主樣の御介抱にて、危ふき命助かりしは、此上もなき仕合せ者ぞ。

薊　賤しき此身をお手づから、御介抱にあづかりまして、恐れ多い事でござりまする。

ト時の鐘、伊織思入あつて、

伊織　最早今宵も初更、我君樣には片時も早く、是より御歸館遊ばされませう。

貞行　オヽ、初更とあらば歸館致さう、コリヤ小女、そちもとも〳〵麓まで。

薊　有難うはござりまするが、危ふい命を助かりましたも、觀音樣の御利益と存じますれば辰澤へ、お詣り申して參りますれば、是れにてお別れ申しまする。

貞行　觀音へ參詣するも、今宵に限りし事でもあるまじ。夜道は物騷、とも〴〵參れ。
薊　あたりに知るべもござりますれば、おかまひなくとお館へ。
貞行　然らば是れより歸館致さん。（ト薊へ思入あつて、）必らずあすの。
伊織　ヤ。
貞行　イヤ、淺瀨なれども谷川あれば、怪我せぬやうに氣をつきやれ。
薊　有難うござりまする。（ト薊顏を上げ、貞行ちつと見惚れる。伊織是を見て、）
伊織　我君々々。（ト貞行見惚れゐる。）我君樣。（ト大きくいふ、貞行心づき。）
貞行　オヽ、皆の者。
皆々　ハヽ。
貞行　ナント、よい獲物ではないか。
左膳　ナニ、よい獲物と仰せられまするは。
貞行　ハテ、其方も不粹な奴ぢや。
左膳　ハヽ。（ト伊織扨はといふ思入にて、）
伊織　扨は君には、此の小女を。

貞行　今日の鷹野の獲物なるぞ。

伊織　いかさまお目に止まるも尤も、縹緻すぐれし形容。

左膳　とは言へ、素性知れざるものを。

貞行　萬事は歸館の其上で、

伊織　左樣ござらば、

皆々　我君樣。

貞行　ム、コリヤ薊

薊　ハ、。

貞行　使を待ちやれ。

薊　有難うござりまする。（ト辭儀をする。）

伊織　君のお立ち。

皆々　ハア――。

貞行　皆參れ。

ト行列三重やうな合方になり、貞行先に皆々花道へ行く。よき所へ行き、貞行振返り薊と顔見合せ、

よろしく思入あつて薊ハツトひれ伏し辭儀をする。貞行につこり思入あつて揚幕へはひる。皆々續いてはひる。後木釣鐘、誂への凄き合方、掠めて薄ドロ〳〵を交ぜ、薊ジリ〳〵と顏を上げ、向うを見詰め、安養の憑りうつりし心にて立上り、恨めしさうに向うをキツと見詰る。燒酎火を出し、ちよつと薊こなしあつて、

薊　科なき師の坊を無慈悲にも、責め殺したる菊地貞行、わが身に懸想なせしを幸ひ、館へ入込み妾となり、よしや此身は穢すとも常磐御前の例に習ひ、色に事よせ國家を絶やし、紅陽樣が背を割かれ鉛の熱湯注ぎ込まれ、地獄の責苦にまさりたる苦痛をなされし其の恨み。

ト口惜しき思入。此時後ろへ以前の獵師峰藏出て、

峰藏　先刻の娘か。（ト後より抱きつくを振りほどいて、ちよつと立廻り、ドロ〳〵になり、峰藏を引付け、）

薊　やがて恨みを。（ト峰藏を投返し、薊足を踏み出すを、木の頭、）晴らしてくれん。

ト向うを見込み、山おろしにてよろしく、

ひやうし　幕

四幕目

菊地家館諫言の場
お筆の方部屋の場
奥御殿御酒宴の場
紅葉の間鬪試合の場

〔役名〕――菊地多門之助貞行、同豐千代丸、鳥山豐後之助、靑柳主水、只村彌太夫、松浦伊織、簑浦左膳、茶道逸齋、菊地の臣○△□◎。內室梅の方、愛妾お筆の方、腰元小賤、奥女中桐野、腰元小菊、同桔梗、同尾花、同朝顏等。〕

〔書院の場〕――本舞臺四間中足の上段、正面金襖、襷欄間、上下金襖揚幕に杉戸を建て、すべて菊地家本城書院の體、平舞臺眞中に、茶道逸齋、坊主鬘茶道の拵へ、左右に菊地の臣○△□◎の諸士居並び、調べにて幕あく。

逸齋　各々方には今日は、御到番でござりましたか、御苦勞に存じまする。

○　イヤ〳〵拙者共同勤の者は、三番出の當番ゆゑ、さのみにも存ぜねども、其許は日勤、殊に晝夜の御前勤め、イヤハヤ御苦勞な儀でござる。

逸齋　仲間の者も多い中に、數ならぬわたくしを御前樣の厚く召仕はれまするは、仕官致す身の面目、それを思へばさのみにも存じませぬて。

□　イヤ何れも當節は面白い世界でござる、武藝を勵むより媚び諛ふ事が出世の早道と申すもの。

△　左樣でござる、もと獵師の貝村氏などは、妹お筆の方のお蔭にて、八百石に忽ち立身。

◎　それと申すも青柳主水殿、とも〴〵お執成し召さるゆゑ、イヤモウ引きが肝腎でござる。

○　それに引代へ頑な家老鳥山豐後之助は、長崎表へ在番にて留守中なれば、御殿の中に誰一人、怖いものはござらぬテ。

逸齋　愛妾たるお筆の方を始め、主水殿へ媚び諛ひ、隱し藝の踊りでも御覽に入れて御褒美を、頂戴致す手段が肝要。

○　御母公大眞院樣には先頃御逝去、唯邪魔になるは奥方梅の方樣。

逸齋　其儀については此の逸齋、お筆の方の奉公振りを奥樣へ焚きつけて、手厚い悋氣に殿を怒らせ、口說の果は離緣となり、梵天國の其後は、殿樣を寢かさうと起さうと、お筆の方の心の儘。左樣なる時は我々も、一足飛びの立身出世。

□　いかさま、胡麻にかけては拔目のない逸齋老。

△　此上共に我々へ、

◎　胡麻の御指南、

四人　頼み存じまする。

逸齋　承知致してござる。愚老の天狗は胡麻を摺る器械の、蓮花ではない連木で、きつと摺り當てまする。

○　そのお手際で我々も、立身出世致すやう、貴殿の顔で、

□　掬ひ上げて、

四人　下さい。

逸齋　そこは即ち宗原逸齋、ぐつと呑込んでをりまする。

皆々　ハヽヽヽヽ。（ト皆々笑ふ。上手の襖を明け腰元小菊出來り）

小菊　唯今是へ御臺樣のお越しゆゑ、チトお靜かになされませ。

○　ナニ、是へ御臺樣のお越しとな。然らば我々共は、お次へ參らうではござらぬか。

□　いかにも左樣致さう。宗原氏、御同道致さうか。

逸齋　手前は是にて御臺樣へ、お目見え致し、かの悋氣の種を、イヤサ、兎角陰氣にならぬやう、御機

嫌を取結ぶでござりませう。
○ 然らば後刻、
四人 御意得るでござらう。

ト矢張り調べにて、四人下手へはひる。跡琴唄の合方にて、小菊正面の襖を左右へ開く。奥方梅の方襠衣裳奥方の拵へ、豊千代丸羽織袴小刀にて、是を手を引き、奥女中桐野、中老襠衣裳腰元二人附添ひ出る、皆々よき所へ住ひ、逸齋平伏して、

逸齋 これは〳〵御臺樣にも、若君樣にも、麗しき御尊顏を拜し、大慶至極に存じまする。
梅の 逸齋殿にも日々の出仕、大儀ではあるわいなア。
逸齋 ハツ、若樣、又お馬になりませうかな。
豊千 オヽ逸齋、馬事して遊ばう〳〵。
桐野 これはしたり、先づお待ち遊ばしませ、今日殿樣には大洋丸出來ゆゑ、御乘試し旁々に、筑紫の浦を御遊覽。
小菊 お噂を伺ひますれば、萬石積とやらの其の大船。
桔梗 お繪圖で拜見致したよりは、

尾花　嘸見事な事で、

四人　ござりませうな。

梅の　その美事なと聞く度に、もし公儀よりお咎めの御沙汰でもあらうかと、たいてい案じられる事ではないわいなア。（ト心遣ひの思入。）

逸齋　アイヤ御臺樣、必ず御心配遊ばされまするな。誰あらう筑紫の太守大々名、殊には長崎御警衞まさかの時の軍用に、お備へ遊ばす上の御趣意、室町殿からお褒めこそあれ、何んのお咎めがござりませう、決して御懸念には及びませぬ。それよりはこの逸齋、誠に心配な事がござりまする。

梅の　其方が心配と言やるは。

逸齋　その心配なと申しましたは、御臺樣の御身の上の一大事。

桐野　ナニ、御臺樣の御身の上の、

四人　一大事とは。（ト合方になり、）

逸齋　改め申すには及びませぬが、御臺樣よりかねて御懇命を蒙りまする私、蔭になり日向になり御爲大事と存じまする折柄、かの御愛妾お筆の方、此程は別して殿樣の御寵愛深く、晝夜分たぬ御酒宴、御膝許に凭れて申す事の聞き苦しさ。私はいかなる月日の下に産れまして、かゝる優しき殿

樣のお情を受けまする事か、實に冥加に餘りまする。したがお美しい御臺樣は嘸おいとしうござりませう。私はほんの當座の花、殿御心と秋の空、替り易き世の習ひ、もしお見捨遊ばすその時は、私は生きてはをりませぬ。などゝ古風に涙ぐみ、やいの／＼と縋りますると、殿樣は又お目を細く遊ばして、イヤそれはこなたの取越し苦勞、假令奥を離縁致せばとて、其方は見捨てぬ武士の誓言、僞りは申さぬと御意遊ばすと、ほんにそのやうにまで思召して下さりまするか、お嬉しう存じますると、ホロリと涙をこぼしまする。サ、替らぬ固め此方へ來いと手を取つて御寢所へお伴ひ遊ばしました。御離縁遊ばしても筆は見捨てぬと御意遊ばしましたぞ。我々の嬶左衞門の尉平の丸面でございませうなれば、悋氣の角の前立に、燒餅に叩き立の烏帽子、長家鐵棒の大鎧を一着なし、摺子木形と名附けたる連木のより棒を携へ、摺鉢山に陣取つて、血戰にも及びまする。さりとはあなた樣は腑甲斐ない、御分別遊ばして以後の見せしめ、殿樣のお顏を引掻き、蚯蚓脹れでも拵へてお上げ遊ばしませ。さもない時はお筆の方の色香にほだされ、あなた樣を酷くなさるゝに違ひない。それを思ふと逸齋は悔しくつて／＼、悔し涙がこぼれまする。

ト逸齋いろ／＼こなし。

小菊　これはしたり逸齋樣、はしたない事を御臺樣へ、お勸めなさるゝは、

桔梗　以ての外の事、チトお嗜み、

四人　なされませ。

逸齋　お前樣方はさう落着いてござれども、打捨て置かれぬ事、それゆゑ御臺樣へお勸め申すのでござりまする。

桐野　悋氣嫉妬は女子の嗜み、誠をお守り遊ばす御臺樣、はしたない事申上げ、お控へなされませ。

逸齋　イエ〱、それでも餘り齒痒うござりまするゆゑ、是非ともお勸め申しまする。

ト此以前より、左膳出て窺ひゐて、此時前へ出て、

左膳　是れはしたり逸齋老、先刻より委細の樣子承りしが、御臺樣へ御悋氣をお勸め申すは、近頃もつて卒爾千萬。

逸齋　これは〱左膳樣のお詞とも存じませぬ。愚老事は御臺樣のお爲を存じて申上げるに、何故卒爾でござりまするな。

左膳　いかにも卒爾であるまいか。何やう御寵愛あるとても、お筆の方は召仕、御臺樣と何とて其威を競はんや。たはけた事を申さずとも、きり〱お次へ立たつしやい。

逸齋　それぢやと申して、お爲を思うて申す事を。

左膳　何がお爲、はしたない悋氣爭ひは大奥の亂れとなる事、何のお爲になるべきや。

逸齋　それでもみす〳〵。

左膳　ハテ、立てと申すに。（トキッといふ。これにて逸齋是非なく、）

逸齋　ヘエヽ。（ト立つて下手へ行きかけ、）アノ女に產れて悋氣のないは、玉の杯底なきが如しと、吉田の兼好が書かれしが、さりとては腑甲斐ない。（ト自分の天窓を撫で、）しかし胡麻の器械が、狂つたと見えるわえ。

トやはり右の合方にて、下手へはひる。左膳見送り、

左膳　イヤハヤたはけた奴ではある。イヤナニ御臺樣、唯今の逸齋、あちらへべつたり此方へべつたり致す似而非者、必らず御油斷遊ばしまするな。

梅の　そりやもう、かねてよりあの者の樣子は承知してをれば、決して心は許さぬわいなう。

桐野　全く彼は廻し者に相違ござりませぬ。しかし何樣御悋氣をお勸め申したとて、御臺樣のお取上げが、何としてござりませうぞいなう。

小菊　足らはぬ女子の私共にも、

桔梗　つい悟られる企み事。

尾花　誠に淺はかな事で、
四人　ござりまする。（ト此内梅の方思入あつて、）
梅の　左膳近う。
左膳　ハツ。（ト左膳脇差を拔き近寄り、梅の方の側へ寄り、）何御用にござりまする。
梅の　其方も知りやる通り、此程より殿の御身持、ます／＼募る御亂行、妾が心の内の切なさを察して給ひなう。

ト合方になり、

悋氣嫉妬は女の嗜みゆゑ、それは心に思はねども、殿樣には日に增して、筆が色香に迷はせ給ひ晝夜を分たぬ御酒宴に、此身に辛くお當り遊ばし、又その上に此度は大公儀へお屆けなく、萬石積みの大船をおしつらひ遊ばせしとの事、追付け室町殿へ聞えなば、お家の安危も計られず、お諫め申す臣下の者は、皆お手討に遊ばされ、目も當てられぬいたはしさ、元老たる豐後之助、此地にゐやつた事ならば、何とか處置もあるべきに、折惡しうお國にをらず、御異見遊ばす御母公大眞院樣は世を去り給ひ、妾一人が心の內、あるにもあられぬ悲しさを推量して給ひなう。

ト愁ひのこなし。左膳思入あつて、

左膳　御尤もなる御嘆き、數萬騎の御家臣ありながら、力と頼む者とては、誠に僅かの其中の、鳥山殿もお國にをらず、我々共がなまじひに、お諫め申せば忽ちお手討、忠義に捨てる一命を、聊か惜しむにあらねども、唯殿樣の御亂行、ます／＼募る基ゆゑ、本意ならねど差控へ、心を痛めをりまする。

桐野　お筆の方の御樣子を承はれば賤しい素性、その色香に迷はせ給ひし殿樣は、唯事ならぬ不審の思ひ。

小菊　それにつけても御臺樣、唯何事の御意もなく、お筆の方へ兎や角と、お心を置かれ遊ばすを、

桔梗　お側に見上げる私共は、口惜しいやら苦しいやら、

尾花　寄ると觸るとお互ひに、悔し涙がこぼれまする。

朝顏　御臺樣には、嘸御無念にござりませう。

四人　お察し申してをりますわいなア。（ト皆々愁ひの思入。梅の方も愁ひのこなしあつて、氣をかへ）

梅の　自らとした事が、皆の者と共々に、女子の足らはぬ愚癡とやら、殿樣のお耳に入らば、猶御機嫌を損なはん。重ねて言うてたもんなや。

桐野　それぢやと申して、あまりなる事ゆゑに、

小菊　どうも蟄して、

桐野
小菊　をられませぬ。

梅の　テモ聞分のない、妾を思はゞ何事も、聞き流しにして給ひなう、

皆々　ハアーイ。(ト是非なく控へる。)

ト此時花道にて、

呼ビ　殿様の御歸館。

左膳　ナニ殿様の御歸館とや。

梅の　皆の者、お出迎ひを。

皆々　畏りました。(ト皆々よろしく出迎へる。)

呼ビ　御歸館。

ト誂への唄になり、揚幕の杉戸を開き、貞行羽織袴、其後よりお筆の方、花笄三つ輪髪に結ひ、襠衣裳、貞行の刀を袱紗にて持ち、續いて只村彌太夫、杉浦伊織 裃 大小、腰元小賤蒔繪の煙草盆を持ち出來り、皆々花道よき所に居並び、

貞行　かねて製造申し付けたる大洋丸出來により、檢分致せし處、存じたよりはあつぱれ見事、一入悦

ばしき事であつたわえ。

お筆　お棚飾りの繪卷物、極彩色の八島の戰ひ、安德帝の御座船に、少しも替らぬ見事さは、なか〳〵詞に盡されませぬ。

彌太　鳳凰の䑺、龍頭の破風、金物の結構は、室町殿も及ばぬ事。

伊織　武器を備へし幕張りは、威あつて猛きその形裝。

小賤　お水主の者の舟唄は、聲も拍子も打揃ひ、

お筆　何は兎もあれ我君樣、

彌太　イザ先づあれへ、

皆々　お越し遊ばされませう。

ト皆々舞臺へ來り、腰元勝息など置く。貞行二重眞中に住ふ、平舞臺上手に梅の方、豐千代下手にお筆の方、彌太夫、伊織、小賤、梅の方に會釋してよろしく居並び、

梅の　大洋丸御乘試し、滯りなく濟ませられ、

左膳　恐悅至極に、

皆々　存じまする。（ト皆々平伏する。）

梅の　筆、彌太夫はじめお供の者、御苦勞であつたわいなう。
彌太　御臺樣の御懇の御意、
お筆　有難う、
四人　存じまする。
貞行　奥豐千代はそれに控へ、筆は予が側へ參れ。
お筆　イヤ奥樣を差しおき、それでは餘り畏れ多い。
貞行　奥の會釋はいらぬ事。遠慮に及ばぬ、是へ參れ。
お筆　御意ではござりまするが、お側衆のおもはく、此儀ばかりは御免なされて下さりませ。
貞行　ハテ予が許すに、誰の批判があらうぞ。
お筆　それぢやと申して。
貞行　ハテ、參れと申すに。（トキッといふ。）
お筆　ハアイ。（ト是非なき思入にて、梅の方に會釋なし、二重へ上らうとするを、伊織制して、）
伊織　アイヤお筆の方、無禮でござる。お控へなされ、
ト是にてお筆の方又下にゐる、貞行ムッとしたる思入にて、

貞行　コリヤヤイ伊織、予が許して側近う召し寄するを、何故あつて留立て致すぞ。

伊織　ハツ、殿の御意ではござりますれど、御臺樣を差しおき、お筆の方が御身近う、上座に直るは君臣の禮を失ふ道理。それゆゑ拙者がお止め申してござりまする。

貞行　ヤア若輩者の身を以て、小賢しき諫言立、申してよければ彌太夫が申すわ。いらざる差出、エ、控へをらう。

伊織　假令何樣仰せあるとも、道に背きし事あらば、お諫め申すは臣下の道、君の御爲を存ずるゆゑ。

貞行　エヽまだ／＼申すか。予が意に背く憎き奴、手討に致すそれへ直れ。

ト貞行刀を持ち、立ちかゝり拔きかける。お筆留める、彌太夫前へ出て、

彌太　我君、まづ／＼お鎭まり下さりませう。

貞行　エヽ留めるな兩人。以後の見せしめ、予が意に背く奴輩は、片ツ端から手討に致す、筆、そこ退け。

お筆　これは又餘りなる御短慮、私が願ひ、どうぞ暫くお鎭まり下さりませ。

彌太　お聞きの通り筆が迷惑致しますれば、伊織が申上げる通り、御臺豐千代樣を御同席へ、お直し遊ばすやう、

お筆　私共が身に替えて、
彌太　此儀偏に、
兩人　願ひ奉る。（ト是にて貞行思入あつて）
貞行　ナニ、筆が迷惑致すとか。然らばいかにも聞き屆けた。
お筆　スリヤ、お聞き屆け下さりまするか。
貞行　オヽ、いかにも。
彌太　兩人が願ひ、お聞濟み下され、
お筆　有難う、
兩人　存じまする。（ト兩人平伏する。）
貞行　筆彌太夫兩人殘り、奧を始め皆の者次へ立て。
梅の　左樣なれば、我君樣。
皆々　御機嫌よろしう。
梅の　筆、御前よしなに賴んだぞや。
お筆　ハツ。（ト唄になり、彌太夫、お筆殘り、皆々上下へはひる。）

貞行　ア、邪魔を拂うて清々致した。サ、是からは水入らず、遠慮に及ばぬ、兩人近う。
彌太　ハツ。（ト摺り寄る。）
貞行　筆、遠慮はない、予が側へ。サ、手を取らうか。（ト貞行寄らうとするをお筆思入あつて、）
お筆　アイヤ暫く、改めて御前樣、お願ひがござります。
貞行　是れは又改まつて願ひとは、餘所々々しい。サ、何なりとも申せ〳〵。
お筆　サ、その願ひとは。
貞行　その願ひとは。
お筆　お暇を願ひたう存じまする。
貞行　何と申す。（ト合方になり、）
お筆　お暇願ふは外ならず、元より素性の賤しき此身、冥加に餘るお情受け、日に增し厚き御寵愛、御臺樣の思召し奥女中を初めとして、お側女中お次お末に至るまで嫉み譏り、その辛さ、いつそ以前に立歸り、たとひ襤褸を纏うても心を樂に送りたさ、お情厚き殿樣のお側を片時離れまするは身を碎くよりも辛けれど、それを厭はず私がお暇願ふ心の內、どのやうにござりませう、御推量なされて下さりませ。

彌太　又彌太夫とても同じ事、此身に餘る大祿を頂戴致すのみならず、譜代恩顧の御家臣の、半ばに上と敬まはれ、冥加に餘る御高恩、忘却は致さねども、御家臣多いその中に、あの彌太夫は匹夫ちやのヤレ獵人と、手引き袖引き譏り合ひ、見下げまするを聞く度に、その殘念さはいかばかり、それゆゑ妹諸共にお暇受けて故郷へ歸り、出家をとげて我君の御武運長久、祈りまするでござりまする。

お筆　唯今兄が申しまする通り、二人の者が蔭言に、卑しき素性を蔑まれ、嫉み譏りを受けまするは、我君樣の御威光を、自然と落す道理ゆゑ。

彌太　お爲を思ひ身に代へて、お暇願ふ二人が心中、お察しあつて此願ひ。

お筆　お叶へなされて、

兩人　下さりませ。（ト兩人愁ひの思入にてよろしく願ふ。貞行思入あつて、）

貞行　何事かと存ぜしが、兩人が暇の願ひ、こりや一應は尤ものやうに似たれども、ソリヤ心の狹いと申すもの。假令萬人の譏りを受けようとも、我一人の心に叶ひなば、など厭ふ事やあらん。左樣な事は聞流しに致して置いたがよい。

彌太　殿の御意にはござれども、唯今も申す通り、匹夫下郎の成上りのと、口々に罵りまするを、自然

と耳に入る度に、拙者ばかりか殿の御恥辱、心魂に徹し、殘念至極にござりまする。

お筆　我身ばかりか兄の身を、賤しめらるゝその辛さ、二人が切なき心の内、御推量遊ばして何卒永のお暇を偏に願ひ、

兩人　上げまする。

貞行　二人が心中推察致した、いかにも役儀の輕きゆゑにこそ、家中の者が賤しむると見ゆるわ。唐土にては周の大王卑賤の身より王位に登りし例もあれば、素性は如何ほど賤しくとも、何の恥にもあらざれども、さまでに辛く思ふならば、今日より彌太夫に加增致させ、奉行職申し付けるぞ。

彌太　スリヤ拙者へ御加增給はり、奉行職仰せ付けらるゝとや。

貞行　又筆事は近く奥を離別なし、豐千代を別家させ、其方が腹に宿せし胤を、男子ならば家督に立てそちは奥に直してくれん。

お筆　スリヤ足らはぬ私を、アノ奥樣に。

貞行　いかにも、兩人とも身に貫祿のつく時は、役儀の權威に怯ぢ恐れ、誰あつて蔑すむ者はあるまいほどに、コリヤ兩人、安心なして末長く予に仕へてくりやれ。

お筆　冥加に餘る御情け、厚き惠みのお詞を伺ひまする上からは、何とてお暇願ひませう、なア兄さん。

彌太　いかにも妹の申す通り、かくまで厚き御高恩、何とてあだに存じませう。此上ともに忠勤を。
お筆　勵みまするで、
兩人　ござりまする。（ト兩人悦びよろしく禮をいふ。貞行思入あつて、）
貞行　兩人とも、そのやうに悦んでくりやれば、予も滿足に思ふわえ。
お筆　重ね〲御懇の御意。
彌太　心魂に徹し、
兩人　有難う存じまする。（ト此時揚幕にて本鐵砲烈しく聞える。貞行キツとなり、）
貞行　ハテ心得ぬ、海岸の方に當り、俄の砲聲、
彌太　正しく謀叛の輩あつて、御城外へ押寄すると覺えたり。
お筆　容易ならざる一大事。
貞行　ナニ、たとひ謀叛を企つとも、何程の事やあるべきぞ。
お筆　何にもせよ彌太夫樣、お物見を。
彌太　オヽ、心得た。（ト立ちかゝる。バタ〲になり、花道より以前の逸齋、慌しく出來り、）
逸齋　御注進々々々。

貞行　何事だ、早く申せ。

逸齋　唯今休息中、お屋根の間窓より海岸を遠見致せしに、扨も美々しき大洋丸、漂然と漾ふ所へ、戌亥の方の島影より、兵船數多漕ぎ來り、何かうろ〳〵致すうち、矢庭に放す大砲は、鳳凰の袖に當り、續いて放す大砲は船のあちこち嫌ひなく、當れば則ち烟立ちて、見る間に一圓焔となつて燃上る、水主揖取の叫ぶ聲、藪に蚊などの鳴く如く、魚は驚き跳ね廻り、そりやこそ逃げろといふ隙に、鯛の濱燒出來るやら、鯉のうしほが出來るやら、目を驚かす事でござりまする。

トいろ〳〵思入あつていふ、貞行急いて、

貞行　シテ〳〵、その大砲を放せし、曲者は誰なるぞ。

逸齋　いづれも船は無印ゆゑ、誰やら一向分りませぬ。

貞行　エヽ奇怪なる曲者、彌太夫、早く討手の用意致せ。

彌太　ハツ。（トバタ〳〵になり、花道より幕明きの家臣○△□◎出來り）

○　ハツ、我君樣へ申上げまする。長崎在番の鳥山豐後之助殿、

△　いつの間にやら歸宅致され、大砲數多船へ備へ、

□　大洋丸を押取り卷き、四方より擊ちかけて、

◎殘る方なく燒拂ひまして、

四人　ござりまする。

貞行　ヤア、予へ屆けもなく理不盡に燒拂ふとは不屆き至極。コリヤ者共、豐後を召捕り是へ引け。

四人　スリヤ、我々どもが。

貞行　いかにも、手に餘らば打捕つても苦しうない、早や參れ。

四人　ハツ。（ト右の四人引返して揚幕へはひる。）

貞行　奇怪なる豐後なれば召捕らせ、吟味致すに、筆が是にゐては兎や角と面倒なり、逸齋其方に預くる間、奥へ伴ひいたはり遣はせ。

逸齋　委細承知仕る。サア、お部屋樣、イザ〳〵お奥へ。

お筆　ではござりませうが、御短慮でも遊ばしては心許なし、やはりお側に。

彌太　是はしたり、我君の仰せなれば奥へ參られよ、身不肖なれどもそれがし附添ひをれば、必らず心置かるゝな。

お筆　左樣なれば我君樣、必ず御短慮遊ばしまするな。

貞行　氣遣ひ致すな。ソレ逸齋、筆を伴へ。

逸齋　サ、お越しなされませ。

お筆　暫く奥へ、御免なされて下さりませ。

ト貞行彌太夫へ會釋して、逸齋附いて奥へはひる。と揚幕の内にて、

○　鳥山殿、君の御前へ、

四人　お出でなされい。

豐後　仰せなくとも豐後之助、唯今出仕仕る。

ト早舞になり、花道より裃衣裳、三方へ誂への兜を紫の袱紗にて包んで載せしを持ち出來り、○△□◎前後を取卷き、花道にてちよつと立廻りあつて留る。貞行思入あつて、

貞行　ヤア豐後之助、予が申付けし召捕の者へ、何故あつて手向ひ致すぞ。

豐後　イヤ手向ひは仕らぬ。我君へ申上げたき儀がござる。いづれも、邪魔召されずとお控へなされ。

四人　何を。

ト四人又かゝるを豐後之助立廻りながら、舞臺へ來り、キッとなる。

貞行　ヤア豐後之助、何故あつて屆けもなく、大洋丸を無法にも燒捨てたるぞ。狂氣なせしか、但し所存あつての事か。言へ、聞かう、何と。

豐後　イヽヤ豐後之助狂氣致さず、又無法も仕らぬ。大洋丸を燒捨てしは、國家の害を除かん爲め。

貞行　口賢く申すとも、此の貞行が所存あつて造らせし大船を、何故あつて自儘に燒き捨てしぞ。

豐後　スリヤ我君には國家の滅亡なすべき大事に、お心がつきませぬか。

貞行　ナント。（ト誂への合方になり、）

豐後　我君知ろし召されずや。大船製造は天下の嚴禁、法を犯せば滅亡なす、近き例は隣國なる肥後守忠衡殿、日本丸といへる大船をしつらへしゆゑ、既にお家斷絶なす、愚臣が君へ屆けもなく燒き捨てしは愚かな事、君には御公儀へ屆けもなく、萬石積の大船を製造ありし事共を、わが腹心の者よりして、長崎表へ竊の知せ、是ぞお家の一大事、數代續きし菊地家の一世の浮沈と取敢へず取つて返して小舟に打乘り、間數を計りし所、聞きしに違はず萬石積、自儘に製造ありし事、室町殿へ聞えなば、反逆謀叛と忽ちに、兵を向けんは是れ必定、左ある時には國家の亂れ少しも猶豫はなり難く、燒き捨てしは微臣が忠節、是にも何ぞ御批判ござるか。

貞行　肥後守忠衡が日本丸を造りしは榮耀の爲、申譯のあらざるはたはけにして語るに足らず。予が大船を造りしは左に非ず、治にゐて亂を忘れざる、是れ公朝へ一つの忠勤、我が心も知らずして、それをみだりに燒き捨てしは、古老の臣を鼻にかけ、筑前の太守貞行を、蔑ろに致す所存か。

豐後　イヤ蔑ろには仕らぬ。假令非常の備へなりとも、嚴しき上の掟を破り、御國に罪あるその時は申譯がござりまするか。

貞行　いかにも、長崎警衛の備へに造りし大船なれば、申譯はきつと立てるわえ。

豐後　さあらば造るその前に、何故公儀へお屆けにはなられませぬぞ。

貞行　國家政事に事繁ければ、前後の相違何事ならん。

豐後　イヽヤ近頃以て思召し違ひ、長崎表に事あるにも候はず、國の掟を犯せし上、問罪の後お答へとは、諸侯たる身の所爲にあらず、室町殿を輕んじ召さるゝその罪は、如何して申開きはなされまするぞ。

貞行　サ、それは。

豐後　但し此の豐後が申す事に、御批判がござるか。

貞行　サ、それは。

豐後　申開きがござりまするか。

貞行　サ、それは。

豐後　サア、

貞行　サア〳〵。

豊後　よも、御返事はござりますまい。(トキッといふ。貞行無念のこなしあつて、)

貞行　何様に申すとも、予が造らせし大船を、届けなく燒き捨てしは、主を主とも思はぬ鳥山。ソレ彌太夫、此扇をもつて、豊後を打据ゑい。(ト扇を彌太夫の前へ投出す。)

彌太　ハツ。(ト立ちかねる。貞行急いて。)

貞行　エヽ何を猶豫、わが扇をもつて打つ時は、予が手を下すも同じ事、我に代つて折檻致せ。

彌太　デハござりまするが。

貞行　エヽ、きり〳〵と打据ゑぬかい。

彌太　ハツ。(ト是非なく扇を持ち、豊後之助の側へ來り)鳥山殿、上意でござる、覺悟召され。

ト扇を持つて打つてかゝる。豊後之助身をかはして、其の手を押へキッとなり、

豊後　扨は汝が筆といへる、妲妃に等しき奸婦の兄の彌太夫よな。匹夫下賤の身をもつて豊後之助を打擲とは、無禮であらう。控へをらうぞ。

彌太　いかにも御身の言はるゝ如く、匹夫上りの只村彌太夫、妹の縁にて召出され、立身出世致したゆゑ氏なき者と思はつしやらうが、先祖は由ある只村の系圖正しき彌太夫が、匹夫下賤の金拳、受

けらるゝなら、受けてお見やれ。

豐後　ハヽヽヽ、君に諛ふお髭の塵取り、わいらが手に合ふ豐後ならうや。

彌太　何を小癪な。

ト又打つてかゝる。ちよつと立廻つて豐後之助彌太夫をキッと留める。

貞行　予が折檻を申付けし、彌太夫に手向ひ致すか。

豐後　假令君の仰せなりとも、餘人は知らず此の豐後は打たれまい。

彌太　とは又何故。

豐後　新參の汝等は、よも知るまい。我君此の品にお覺えがござりまするか。

ト以前の兜を包みし袱紗を取りのけ、貞行の前へ突き遣る。貞行見て、

貞行　コリヤこれわが父戰場にて召し給ひし、家に傳はる靑龍の兜。

彌太　それが何とぞ致したか。

豐後　我君、あなた樣はなア。（ト誂への合方になり、）事新らしく申さずとも、定めし御合點にござりませうが、先君秀行公御臨終のその折に、此豐後を近く召され、惣領多門之助幼少より、行跡を試し見るに、國家を治むる大將には覺束なし。次男縫之介をもつて跡目に立てんとの御仰せ、それ

は御不順なり、多門之助樣にも度々御異見申上げなば、氣荒な所もお直り遊ばすは是れ必定、御跡目の儀は多門之助樣と、拙者が達て願ひしゆゑ、お聞濟み下され、其方請合ふ上からは、貞行へ遺言申聞けん、是へ呼べと仰せによつて、我君にもそのお席へ入らせられ、秀行公には重き枕を上げ給ひ、わが遺言よく承れ、此度の豐後の恩義忘るゝな、後年は父と思ひ彼が諫言何事によらず用ゐませい、此の青龍の兜は和漢の戰の今日まで、戰場に於て肌身放さず用ひしを、今改めて豐後へ預け置く、多門之助無道の行ひある時は、此の兜をもつて異見せよ、用ひざる時は貞行を斬捨てゝも苦しからず、予が名代なるぞよと仰せ置かれ、遂に此世を去り給ひ、それよりそれがし此兜を大切に守護なし奉り、年始の具足開き蟲干の其外は、取出す事のあらざるに、目出度しと泰平諷ふ甲斐もなく、成長あるに隨つて、追々募る御亂行、御領分の民百姓、妻や娘を呼び出し、總じて女の大事がる、黑髮切つて毛綱となし、鐘ケ淵に沈めある釣鐘を引上げんと一々用なき不仁の至り、まつた御殿の御普請に神代杉を用ひんと、箱崎八幡の神木を伐らせしなんど、驕奢に長ぜしその振舞、剩へ先頃、名僧知識の聞えある、安養上人、女犯なりと言ひふらす佞人共の讒言を採用あつて拷問に、鉛をもつて責め殺し、妲妃に等しき女を愛し、晝夜を分たず淫酒に耽り、唐土にて惡逆無道の君たりし殷の紂王におさ／＼劣らぬ御行跡、まだ其上に嚴禁

の大船製造なさるゝは、國家の滅亡招く御所業、一大事ゆゑ預かりの兜をもつての御諫言は、取りも直さず先君の、再來あつて上意も同然、お席が高い我君樣。お下にござれ、イヤ、お下りなされい。（トキッといふ。貞行怒りし體にて、）

貞行　ヤア入らざる諫言、父上には病みほうけ、今際にのたまふ事共は、邪熱の爲の譫語同然。何の事の足るべきや。

豐後　スリヤ、いかやうに申しても、お聞入れはござりませぬか。

貞行　エヽくどいわ。ソレ、豐後を召し捕れ。

四人　ハツ。

ト豐後之助へかゝるを、扇にて四人を打据ゑ、兜を載せし三方を持ち、二重眞中へ上る。彌太夫是を支へる。豐後之助振り拂ひ彌太夫の眉間を扇にて打ち、貞行は二重の上手にて拔きかける、豐後之助兜を差付ける。彌太夫下手に眉間を押へ、三人引張りの見得、早舞にて道具廻る。

（お筆部屋の場）――本舞臺三間の平舞臺、上手床の間違ひ棚地袋。續いて銀張りの襖。上下塗骨障子を建切り床の間に琴を立かけ、本箱、火鉢、煎茶道具一式。すべてお筆の方部屋夜の體。短檠を

照し、爰にお筆紫の褥を敷き、煙草を喫んでゐる。眞中に逸齋、小賤下に控へゐる。合方にて道具止る。

小賤　あなた樣のお蔭にて、今日はよい保養を致しましたわいなア。

お筆　御前樣のお供ゆゑ、嘸御迷惑でござりませう。

逸齋　イエ〳〵、此の小賤殿は伊織殿に思召しがござりまするゆゑ、假令殿樣のお供でも、いとしいお方が御一緒ゆゑ、お心の内では大保養でござりまする、ナア小賤殿。

小賤　アレマア逸齋樣、左樣な事は存じませぬわいなア。

逸齋　ナニ知らぬ事がござりませう。今日の御遊覽は殿樣とお筆樣、お供は伊織殿と小賤殿どちらもよい一對ゆゑ、嘸相手欲しやでござりましたらう。

小賤　又そのやうな事、よい加減にお嬲り遊ばしませ。それはさうと私は結構なお船に乘り、あちらこちらを拜見致しましたも、あなた樣のお蔭ゆゑ、有難う存じまする。

お筆　小賤殿は私が以前お世話になつた、太田屋さんの娘ゆゑ、どのやうにもお世話して上げねばならぬ筈。それゆゑ殿樣へ申上げて、御迷惑ながら今日のお供。

逸齋　それほどのお仲合なら、とてもの事に、伊織殿を取持つてお貰ひなされませ、逸齋周旋を仕り

まする。小賤殿、いかゞでござりまするな。（ト逸齋は小賤に勸める。お筆制して、）

お筆　アヽコレ、不義はお家のきつい御法度、滅多な事は言はぬもの。チトお嗜みなされませ。

逸齋　是は粗相を申しました。眞平御免下さりませ。

お筆　それはさうと小賤殿、傍輩衆のおもはく、サア／＼部屋へお引きなさんせ。

小賤　左樣なればお部屋樣。後程お目にかゝりませう、逸齋樣、ごゆるり是れに。

逸齋　小賤殿、かのお方のお取持。イヤサ、おとなしうお下りなされませ。

小賤　ホヽヽヽ、是は御親切樣でござりますわいなア。（ト小賤下手へはひる。）

逸齋　ときに今日長崎より、思ひがけなく鳥山殿が歸られ、御館へ御諫言申上げるとの事を承りましたが、どういふ事になりましたか、氣になりまするゆゑ、ちよつと聞合せて參りませう。

ト立つ。

お筆　アヽコレ、其の席にてかのお方に此の文を、いつものやうにお屆け申して下さんせえなア。

逸齋　委細承知致しました。（ト此内お筆手箱の内より目錄包みを出し、逸齋に渡す。）これは／＼每度々々恐れ入ります。然し折角の思召し、お返し申すも失禮ゆゑ、有難う頂戴致しまするが、此上共に決してかやうな事は、澤山お願ひ申上げまする。

ト捨ゼリフにて下手へはひる。お筆の方殘り、思入あつて、

お筆　安養樣のお恨みを晴らさう爲に當家へ入込み、心にもない肌身を穢し、婬酒を勸め大義を計れど兄彌太夫ばかりでは所詮成就は覺束なく、色香をもつて主水殿と、わりなき仲になりしゆゑ、腹に宿せし嬰兒を、殿の御胤と言ひ做して、やがて當家をわがものになすべき企み、それにつけてもあの小賤、以前の誼みをあやなして、杉浦伊織へ不義を取持ち、否應言はさず杉浦を、味方に附けんと思へども、年に似合はぬ悧發な生れ、掟を守り容易には心許さぬ片意地者。慾氣のないには困つたものぢやなア。(ト時の鐘鳴る。)アノ鐘は最早初夜過ぎ、かのお方のお出でに間もあるまい。お湯なと沸して待たうわいなう。

ト火鉢の炭を直す。時の鐘打上げ、獨吟になる。

〽世の中の憂きには神もなきものを、心筑紫に鷄鳴かぬ、假の塒に留木の薫り、

ト花道より逸齋先に、青柳主水袴なりにて出來り、花道にてよろしくあつて、舞臺へ來り、逸齋小聲にて、

逸齋　お連れ申しました。

お筆　大きに御苦勞にござんした。(ト逸齋主水の手を取りお筆の側へ突きやる。お筆主水顏見合せて思入。)

〽見合はす顔の若楓、末は色増す櫨紅葉、

ト此内主水逸齋に、あちらへ行けと仕方にて敎へる。逸齋心得下手へはひる。

主水　けふ鳥山が御前へ出て、御諫言申上げると聞き、何事やらんと取敢へず、竊に登城致せし處、折よく逸齋に出合ひ、そなたより玉章ゆゑ、早速にこれへ參つたわえ。（ト懐より文を出す。）よう早速に、お出でが出來ましたなア。

お筆　御用もござりませうのに、ようマアお出で下さりましたなア。（ト主水件の文を開き見て、）

主水　不思議なはこなたの手跡、御臺にその身その儘よく似てをるが、いつの間にかゝる手跡を覺えしぞ。

お筆　兄彌太夫が言附にて、何かの役に立たうかと、御臺樣のお文を手本に書き習ひましたれど、元より賤しい私ゆゑ、似たと申せど瓦と黄金、お恥しう存じまする。

主水　なんの〳〵元より器用な其方ゆゑ、主水などは及ばぬ事。然しこなたと忍び逢ひは逢ふものゝ、晝夜お側を離さぬ殿樣、いとしさが彌增して、見捨てられはせぬかと、それぱかりが心配でならぬわいなう。

お筆　アレ又そんな事おつしやつて下さりまするな。殿樣のお情を受けながら、隙を窺ひ忍び逢ふも命

にかへて致しまするを、何で心が替りませうぞいなア。

〽心のたけを打明けて、割つて見せたき川竹の、流れの身にはあらねども、二人に枕かはす身は、花に嵐の裏表。〔ト以前の文を遣ひよろしくあつて、〕

それにつけても私が腹に宿せしはあなたのお胤。どうぞ世に立て、永き榮えを願ひまする。

主水　そりやもう男子でさへある事なら、豐千代を竊に失ひ、家督に立てるわが所存。それにつけても邪魔になるは豐後之助、承れば奥御殿へ上りしとの事、退座を待ち受け紅葉の間の、暗きを幸ひたゞ一と討。

お筆　スリヤ、アノ鳥山を。

主水　暗殺なして後難を、除く所存で豫ての手つがひ。

お筆　さうなる時は我々が、大望成就疑ひなし。

主水　十が九つ仕果すれば、必ず吉左右相待たれよ。

お筆　どうぞ首尾よう御本意を、お遂げなされて下さりませ。

〽誓に立てし梓弓、思ひは同じ戀の棧。〔トよろしくあつて、逸齋慌しく出來り〕

逸齋　唯今是へ殿樣の、お入りでござりまする。

主水　ナニ、殿樣のお入りとな。

お筆　今宵は久々にて、積るお物語をと思ひしに、テモ折の惡い。

主水　殿が是へお入りあらば、豐後めを讒言なし、御立腹あるやう、此方の口先でな。

お筆　そりやもう、よう心得てをりますわいなア。（ト主水脇差を持ち立上り）

主水　然らばお入りのない内に、

お筆　アヽ、モシ。

ト脇差の鞘を持ち引止める。主水お筆を引寄せる。逸齋覗き込む。是にて兩人退くはずみに逸齋の天窓を脇差のこぢりにて打つ。逸齋 痛き思入。主水氣の毒なる思入。お筆笑ふ。此の模樣よろしくあつて、

〽鴛鴦の衾の[illegible]にしがらむ、（ト獨吟の上げにて、よろしく此の道具廻る。）

（奥方部屋の場。　―本舞臺三間平舞臺、向う御簾襖、左右畫心に張物。上下杉戸、大欄間を釣り下ろし、以前の奥の方、褥を敷き脇息にかゝり、次に豐千代、後ろに腰元四人居並び、眞中に豐後之助、その前に酒肴、吸物膳、並べあり、下手に老女吳竹、伊織、左膳、すべて奥殿酒宴の體、夜の模樣。

諸所に菊燈臺を照し、合方にて道具納まる。

豊後　久々にてお目見得致し、存じがけなく御酒を頂戴仕り、大層に酩酊致してござる。

梅の　遠慮致さず、ゆるりと過したがよいぞ。

左膳　今日鳥山氏大洋丸を燒拂ひ、青龍の兜をもつて殿へ御異見、追々惡人を遠ざけ善人の榮える時節、大慶至極に存じまする。

梅の　それといふのも、豊後が厚き忠義故にこそ、家來とは思はぬ、そちは當家の礎、よう御諫言申上げてたもつたなう。

豊後　ハヽ、冥加に餘る御懇の御意。祝着至極に存じまする。それにつけても若君のお守り役がなうては相濟むまい。西谷藏太の後役には、誰彼と申さうより、杉浦伊織へ若君のお守り役、申付けらるるは如何でござりまするな。

梅の　オヽよい所へ心がついた。伊織へ申付けるであらう。コレ呉竹、幸ひ豊後も列座なれば、そちからよいやうに申付けてたも。

呉竹　畏まりました。伊織殿、今日より若君樣のお守り役仰せつけられまする。有難くお受け申されてよからう。

伊織　此身に餘る大役を仰せつけられ、有難き仕合せに存じ奉る、此上は身命にかへ勤めまするでござりませう。鳥山様、呉竹殿、猶此上のお心添へ、よろしう願ひ上げまする。
豊後　忠義の心は見抜きをれば、若年とは申せ奥向きの勤め、色に溺れては相成りませぬぞ。
伊織　忝きその御異見、きつとお守り申すでござりませう。
梅の　何にもせよ豊後久々の事なれば、今一献過して立ちやれ。ソレ、腰元共。
腰元　畏りました。（ト是より豊後之助の前へ出で、よろしく酌をなす。豊後之助飲んで、）
豊後　有難く頂戴仕つてござりまする。
豊千　コレ豊後、長崎へ行かずいつまでも、予が側にゐてくりやいなう。
豊後　ハア、。（ト平伏なす。）
梅の　惡人共に世を狹められ、まだ頑是ない子心にも、そなたを慕ふ心根を、豊後、推量して給ひなう。
（ト愁ひの思入。豊後之助も涙を拭ひ、）
豊後　おいたはしい儀にござりまする。（ト思入。此時四つの時計鳴る。）アリヤもう亥の刻、最早退出仕りまする。
呉竹　左様なれば、最早御退出なされまするか。

豐後　いかにも、存じ寄らず數獻頂戴仕り、積鬱を散じましてござりまする。御前よろしうお執成を願ひまする。

伊織　坊主衆々々々。（ト呼ぶ。と下手より以前の逸齋出來り、）

逸齋　御用でござりまするか。

伊織　鳥山殿をお見送り申せ。

逸齋　畏りました。ドレ、私が御案内致しませう。（ト是にて豐後之助下手へ來て、）

豐後　奥樣若君樣、隨分共に御機嫌よろしう。

豐千　オヽ爺よ。そなたも無事でゐてたもや。

豐後　ハヽハツ、誠に栴檀は二葉より芳しと、恐れ入つたるそのお詞、有難く存じまする。

ト豐後平伏して、呉竹、伊織、左膳と銘々挨拶をなして、逸齋先きに手雪洞を持ち、花道へ行きかゝる。

梅の　コレ豐後、待ちや。

豐後　ハヽハツ。（ト平伏する。）

梅の　此上ともに、賴むぞや。

豐後　委細承知仕る。必ず御安堵遊ばされませう。(ト誂への唄になり、豐後花道へはひる。皆々後え見送り。)

梅の　今に始めぬ豐後が忠節、お預かりの兜をもつての御異見、我君樣にも、よもやお聞入れのなき事はあるまいわいなう。

吳竹　先殿樣御臨終の折、くれ〴〵の御遺言に、豐後之助を親と思へと仰せ置かれし事どもは、よもやお忘れは遊ばしますまい。されば豐後殿へ御前樣は、返すお詞はござりますまい。

伊織　長崎より取る物も取敢ず、歸國召さると其儘、大洋丸を燒捨てられしその勇氣、なか〳〵凡人の及ばぬ事。

左膳　惡人輩がどのやうに齒嚙みをなしても及ばぬ事、誠の道には勝たれませぬ。

梅の　我君樣のお心も和らぎ、善人榮える時節となり、今の苦艱を昔語りに、早うしたいものぢやなア。

吳竹　そりやもうお氣遣ひ遊ばしまするな。追付け鳥山殿の忠義も顯はれ、惡人の亡びまするは必定ゆゑ、モウ此上は、御安堵遊ばしたがよろしうござりまする。

梅の　さうは思へど殿のお身持、唯事ならぬ御亂行。

伊織　名僧智識の聞えある、安養法師を酷き拷問。

左膳　遂には命を失ひし、その祟りぞと蔭言に罵る族もあるとの事。

呉竹　實に下々の口々は、戸の立てられぬ多くの家中。
伊織　譬にもいふ君は船、臣は水、水よく船を浮ぶとも、
左膳　水又船を覆す。
梅の　それを思へば何よりも。
呉竹　忠臣はお家の、（ト皆々と顔見合せ、）寶ぢやなァ。
ト合方にて、双方氣味合の思入にて、道具廻る。

（紅葉の間の場）＝本舞臺一面の平舞臺、正面左右とも金襖、紅葉の彩色畫、上手畫心に同じ襖。上手下手とも丸物の大盡柱、此後ろ通ふ事あり。前面大欄間、矢張り金地へ紅葉の書割。眞中に一間の大衝立を置き、右の鳴物にて道具納まる。と上手より逸齋雪洞を持ち、先に立ち、續いて以前の豐後之助出來り、

豐後　久々にて大奧へ罷り出で、御酒を數獻頂戴致し、御前を退出致したら、大分醉が廻つてまゐつたわえ。
逸齋　お危うござりまする。お靜かにお越しなされませ。

豐後　オヽ大事ない、逸齋、大儀ぢやなう。
逸齋　イエ〳〵お心遣ひには及びませぬ。かう入らせられませ。
ト逸齋わざと躓き火を吹消す。是にて暗闇の模樣。
豐後　コリヤ逸齋、いかゞ致した。
逸齋　これはとんだ粗相を致しました。
豐後　ハヽヽヽ、提灯持がぬかるみへはひるの譬、醉つたる身共より、醉はぬそちがきつゥ惡い足許ぢや。
逸齋　恐れ入りましてござりまする。暫くお待ち下さりませ。どれ、灯を點けてまゐりませう。
豐後　左樣致せ。（ト逸齋舌を出して下手へはひる。豐後殘り。）アヽいつもながら、そゝくさと致した奴ではあるわえ。然しかう致してもをられまい。すべり〳〵參らうか。
ト豐後ひよろ〳〵として下手へ行きかゝる。此時後ろの衝立の蔭より、以前の青柳主水、袴股立肩衣を脱ぎかけ、拔身にて窺ひ出で、豐後へ行當り、双方思入。横笛入りの合方にて、闇の立廻よろしく、豐後之助上手大盡柱を小楯に取りキツと窺ふ。知らせなしに此道具逆に三方廻しになり、大盡柱舞臺眞中になる。正面紅葉畫の續きの張物。探り合ひの立廻り、豐後之助は思入あつて、大盡柱の蔭に

體を寄せ、上手へ顏ばかり出して、

ト呼ぶ。その聲をしるべに主水斬つてかゝる。豐後下手へ體を拔き、主水の利腕を捉へ押へつける。是にて知せなしに道具元へ戻る、主水放さうとするを豐後押へ付ける。トゞ主水振りほどき逃げかけ、以前の衝立に躓く所を、豐後しつかりと押へつけ、生醉の思入にて、

豐後　坊主々々〳〵。エヽイ、アヽよい心持に醉うた、誰ぢや〳〵。

トいへども主水無言でゐる、豐後肩衣の紋をすかし見ながら、

今斬りかけし手の内は、匹夫上りの彌太夫めでもあるまい。とあつて青柳主水ではよもあるまい、然し何者にもせよ、わが申す事よく承れ。御身の父とわが父とは、いづれが零落致しても貢ぎ合はん、又家を繼ぐべき子なき時は、互ひに悴を養子となし、家督させんと約せしほどの交はりなるに、此の豐後を暗殺なし、元老職になりたいか、なりたくばわれ隱居なし、殿へ願うて元老にして遣はしくれんが、その惡心を後悔なし、どうぞ善心になつてくりやれよ。汝が器量でよい道へ心を用ひ忠勤なさば、あつぱれ當家の礎ともなるべきに、いかなればかく逆心をさし挾むぞ。邪は正にして勝つ事能はず。いかで天命遁るべき、露顯に及ぶ其時は、家の沒落目の當り、さう


梅幸百種之内

なる時は第一に、先祖へ不孝主家へ不忠、言はうやうなき不屆者めが。

ト主水を廊下へすりつけて氣をかへ、

トサ青柳主水なら、かく異見を致す。大醉の身共、一向何者か相分らぬが、しかし今拙者が申した事、御不承知なら是非に及ばぬ。此の場に於て唯一と討に刺殺さうか。

ト是にて主水顔をあげ、

主水 先づ暫く、お待ち下さりませう。

豊後 ムウ、待てとは身共が申した事、會得が參つたか。

主水 いかにも唯今の御異見、心魂に徹し忝く、重々恐入つてござりまする。

豊後 スリヤ、アノ、いよ〱。

主水 先非を悔いて此後は、必らず改心仕りまする。

豊後 それに相違はござらぬか。

主水 箱崎八幡を誓に立て、毛頭違背はござりませぬ。

豊後 オヽ、かく誓言を聞く上は、よもや異變はござるまいな。

ト主水を起し拔身を渡す。主水鞘に納め手をつき平伏する。

主水　いろ〳〵申し談ずる儀もござれど、爰は他聞の憚りあれば、明日拙者が宅へ、な。

豐後　ハツ、委細承知仕りまする。何はしかれ此の場の事は。

主水　ハテ、醉醒ゆゑに、水ぢや〳〵。

豐後　ハヽハツ。（ト平伏する。）

主水　サヽ、行け〳〵。

豐後　ハツ。（ト會釋して上手へはひる。豐後見送り、）

逸齋　逸齋はいかゞ致した。コレ、坊主はをらぬか。坊主〳〵。

豐後　ハア。（ト下手より逸齋雪洞を點け、出來り、）大きに延引仕りました。嘸お待遠にござりました。

逸齋　何を致してゐた。あまり待遠ゆゑ、一睡致した。

豐後　ドレ、御案內致しませう。

ト豐後之助立上る時、誂への紙挾みを落し、心づかぬ體。逸齋氣味惡さうに顫へ〳〵行くを、豐後之助見て取り、

豐後　扨は彼めも、

逸齋　エ。

豐後　敵と見えしは、群れゐる鷗。（ト謠を謳ひ、）ア、醉うた〳〵。

トやはり合方にて、花道へはひろ。此の前より主水襖を明け見送りゐて、此時前へ出て刀を杖に見送ろこちりへ豐後の落せし紙挾みさはろゆゑ、拾ひ上げ、よく〳〵透し見て、よき物が手に入りしといふ心にて、ニツタリ思入するを、木の頭にて、よろしく

ひやうし　幕

五幕目

松ヶ崎城外追分の場

同　城内廣座敷の場

【役名──鳥山豐後之助、雪岡賴母、瀧川小文治、鳥山長男右平、鳥山の臣早川久次郎、同田川吉次郎、雪岡の臣隼太、同岳馬、大庄屋幸十郎、同惣代藤五郎、百姓○△□。鳥山の奥方松崎、同腰元渡會、同渡鳥等。】

〔城外追分の場〕──平舞臺三間の間、正面草土手の手摺、此上に廣大なる川の張物、すべて在體の模様をあしらひし書割、向う岸一面の堤、是より上の段へ淺黃幕を釣込み、後に切つて落し城の遠見になる仕組、舞臺の上の方枝川の心にて畫心の土橋をかけ、下手に「從是松ヶ崎領」といふ榜示杭、よき所

に登り木の松の立木、同じく釣枝、すべて松ケ崎城外追分の體。爰に百姓○△□其他一、二、三、四、五、六等皆々縄襷にて、竹槍、鋤、鍬などを持ち立ちかゝりゐる。此の模樣、浪の音、ドン〳〵竹法螺の音にて幕あく。

百一　時に新田の太郎作殿、寄せ太鼓や竹法螺で村中出ろといふ事ゆゑ、譯も分らず出かけて來たが、いつたいこりやァ、

皆々　どういふ譯ぢやの。

○　サアその譯を聞かつしやれ。此間博多の沖へ菊地家の殿樣が、樋か萬石積といふ大きな船を拵へて、自慢してゐさつしやつたを、此方の御領主の鳥山樣が長崎表で聞かつしやつて、それはとんだ一大事、もし大公儀へ聞えれば、菊地のお家に拘はる事と、そこで不意に御歸國なされ、その大船を燒き捨てたを、殿樣が御立腹で、鳥山樣は御勘氣蒙り。

△　惡人共の勸めを用ひて、天下法度の船を拵へ、忠義を思うて燒捨てた、その御家老に科を着せ、それで此節は御閉門。

百二　惡い家來に煽てられ、まだ〳〵是で慊らず、鳥山樣へ切腹を言附ける氣でゐさつしやると、御城下あたりできつい評判。

□ そこで御領分の百姓が集まつて、見てはゐられぬゆゑこのやうに人を集め、様子によつたら押掛けて、筑前の御領分菊地家と戰をする氣でござるわいなう。

百三 其奴ア小氣味のいゝ話だ。御領主樣の爲ならば、わしも命は入らぬから、皆と一緒に押掛けませう。

百四 それはさうと筑前から、けふは上使が來る筈だと、庄屋殿が言はしッたが、それでは大方切腹を言渡しに來る使であらう。（ト揚幕の方を見て、）

百五 ヤア噂をすれば影とやら、アレ〳〵向ふへ上使の乘物。

百六 成程こつちへ來るやうだが、そんな惡い上使なら、御城内へ入れぬやうに、爰で一番打締めろ打締めろ。

皆々 面白い〳〵。サアやッつけろ〳〵。

ト皆々手配りする思入。浪の音合方になり、花道より若い衆の陸尺乘物を舁き、雪岡の臣隼太、兵馬の兩人𧘕𧘔股立大小の拵へ、駕籠脇侍にて附添ひ、絹羽織の侍二人、中間、供廻りの人數よろしく警固して舞臺へ來る。百姓皆々立ちかゝり、

○ ソレ、やッつけろ。

皆々　合點だ〳〵。（ト皆々バラ〳〵と出て乘物を取卷く。隼太兵馬キッとなり、）
隼太　ヤア、此の乘物を何と心得る。菊地家よりの御上使なるぞ。
兵馬　仔細もいはず狼藉なすは、身の程知らぬ不屆き奴。
兩人　キリ〳〵そこを下りをらう。
○　イヤ、何んで下るものか。忠義一途の鳥山樣を、いろ〳〵主人へ讒言して、その上大方切腹を言附けに來た上使であらう。
△　さういふ事なら領主の敵、サア俺達の竹槍で、
皆々　爰で往生してしまへ。（トみな〳〵竹槍を突出す。隼太、兵馬乘物へ立塞がり、）
隼太　ヤア、敵呼はり無禮至極。
兵馬　イデ其儀なら我々が、片ッ端から、
兩人　切下げくれん。
百一　ヤア、腰拔け武士のなまくら刃金。
皆々　切られるものなら、切つて見ろ。
隼太兵馬　何を小癪な。（ト兩人立ちかゝる。此時乘物の内にて、）

賴母　兩人控へい。

兩人　ハアー―。

ト兩人控へる。乘物の内より、雪岡賴母上下大小にて出で、供廻り草履を直す。是を穿き前へ出る。
百姓皆々見て、

□　ヤア、御上使にござつたは、賴母樣だ〳〵。

皆々　下にゐろ〳〵。

ト皆々下にゐて、

○　これは〳〵賴母樣、お駕籠の内ゆゑお顔が見えず、どなた樣か存じませぬゆゑ、大きに御無禮を致しました。

皆々　へイ〳〵、眞平御免なすつて下さりませ。（ト詫びる。賴母こなしあつて）

賴母　オヽ粗相とあれば許し遣はす。さるにても上使の入來を鳥山殿の切腹ならんと思ひ違へ、一揆を起し動亂なすは、實に尤もなる事ながら、いかに殿樣御短慮なりとて、豐後に罪なければ、切腹の御沙汰あるべき筈なし。殊にかくいふ雪岡賴母、是より城内へ罷り越し、及ばずながら寸志をもつて、事穩便にはからへば、其方共も心を落附け、必らず動亂致すまいぞ。

ト皆々得心せし思入にてよろしく言ひ含める。

△　イヤモウ不斷から御領主様と御懇意な頼母様、事を分けてのお詞ゆゑ決して背きは致しません。

百姓　その代りにはあなた様のお計らひを以ちまして、鳥山様のお身の上にどうぞ凶事のないやうに、

皆々　へイ〳〵、お願ひ申上げまする。

頼母　其儀は頼母心得をれば、必ず共に安堵致せ。

皆々　へイ〳〵、それでやう〳〵落着きました。

頼母　何は格別城外にて、其方共が動亂なさば、却つて城主の迷惑ならん。一先づ一同引取りませい。

□　イヤモウ、御領主様のお爲とあれば、

皆々　引取りまするでござりまする。

隼太
兵馬　サヽ、早く參れ〳〵。

○　左様なれば、くれ〴〵も、

皆々　御領主様の御安泰を、

頼母　氣遣ひ致すな、心得をるぞ。

皆々　どうぞお願ひ申しまする。サアござれ〳〵。

ト百姓皆々捨ゼリフにて頼母へ挨拶なし、土橋を渡り上手へはひる。頼母後を見送り思入あつて、

頼母　多年の間鳥山氏が、當領内の百姓に、慈悲を加へて深く憐み、常々撫育召されしゆゑ、かゝる折にも命を輕んじ、徒黨を結び出張なすも、領主へ恩を返さん爲め。これにつけても頼もしきは豐後殿の日頃の所存。

隼太　實に仁心は國の礎。

兵馬　人はかくこそありたきもの。

頼母　ハテよき政事は。（ト頼母立身にて乘物へ凭れるを、道具替りの知せ。）執りたいものぢやなア。

トよろしく思入。供廻りの人數後ろに居並び、此の見得、浪の音、合方にて道具廻る。

（廣座敷の場）――本舞臺一面の平舞臺、向う花の丸襖、上下折廻し同じ襖、日覆より花の丸大欄間をおろし、後に花の丸田樂にて替る仕掛。舞臺花道とも薄縁を敷詰め、揚幕へ杉戸を取付け、すべて松ケ崎城内廣座敷の體。爰に鳥山の奥方松崎、奥方好みの拵へにて褥の上に住ひ、腰元渡會、渡鳥後ろに控へ下の方にゐる。鳥山の臣田川吉次郎、早水久次郎麻上下立役の諸士にて、花筒へ紅葉の枝をさしたるを前に置き、控へゐる。此の見得合方にて道具留る。

渡會　奥樣へ申上げます。早水久次郎殿、田川吉次郎殿。

渡鳥　お愼みの御見舞として、唯今出仕、

兩人　致されましてござりまする。

松崎　おゝ二人とも心にかけ、ようそのやうに見舞うてくりやつた。必らずあだには思ひませぬわいなう。

早水　ハヽ、恐入つたるそのお詞、此の程より御閉門にて、我君はじめ奥樣にもお愼みの折柄ゆゑ、恐れながら御身の上深く心配仕り、即ち御機嫌伺ひとして、出仕致してござりまする。

田川　それにつけても奥樣には、いとゞ物憂き秋の日も、嘸御氣鬱にゐらせられんに、せめてお心慰むため、兩人が獻上の一と品。

早水　庭に照りそふ紅葉の枝は、即ち主君の御身によそへ、佞人讒者の雨露に、染めなす色も忽ちに、心の錦世に顯はれ、

田川　やがて閉門御免あるやう、その吉端を祝せし一枝、何卒お納め下さらば、

兩人　大慶至極に存じまする。

松崎　いつに替らぬ二人の者が、心を籠めしその一枝、閉門御免の吉端とは、實に頼もしき志し、過分

に思ひますわいなァ。

渡會　ほんに奥様のおつしやる通り、御門も開く辻占とは、思へば目出たきその紅。

渡鳥　殊に心の錦とて、その枝振も好もしく、一入見事に、

渡會
渡鳥　思はれまする。（ト松崎思入あつて、）

松崎　それにつけても我夫の、かく御謹愼遊ばすは、此程太守樣御しつらひの萬石積の大船を、博多の沖にて燒きたまひしその祟りとは思へども、今に御意の御沙汰もなく、心も心ならぬわいなう。

早水　奥樣の御心配御尤もにござりまする。勿論先頃我君樣筑紫の館へ御出仕あつて、殿へ御諫言申上げ、その大船の一埒は、早や事濟みと承はりしが、兎角御前邊に佞人多く、種々奸計を用ゆれば油斷ならざる此の時節。

田川　扨はそれらの惡人共が、我君を追ひ退けんと、殿へ讒言致せしより、かく御閉門と相成りしか。

早水　然し元より我君に罪なき事は知れしゆゑ、最早近々にお咎めも御免になるでござりませう。

松崎　此上にどのやうな、嚴しきお咎めあらうかと、思ひ過しがさるゝわいなう。（ト揚幕にて、）

呼ビ　御上使。（ト呼ぶ。皆〻聞耳立て、）

松崎　ハテ折も折とて御上使のお入り、凶事か吉事か知らねども、筑紫よりの御沙汰であらう、

早水　何は兎もあれ、奥樣には、
田川　奥の一間へ暫しの內、
松崎　成程女子は遠慮ゆゑ、一と先づ次へ行きませう。(ト松崎立上りて、件の紅葉を見て、)しかし思へば善惡も、けふぞ夫の身の上に、かゝる紅葉の時雨あめ。
渡會　色は染まねど置く露に、
渡鳥　濡るゝ梢の夕日影、
早水　善惡分るゝ一枝は、
田川　しかも木の葉の綾錦、
松崎　心ならねど、
皆々　直樣奥へ、
松崎　皆も一緒に來やいなう。
ト唄になり、松崎先に渡會、渡鳥紅葉を持ち附添ひ、早水田川も附いて奥へはひる。後知せにつき、襖欄間とも花の丸田樂にて替り、丸に三つ柏の紋散らしになり、よろしく納まる。
呼ビ　お入り。(ト是をキッカケに、床の淨瑠璃になる。)

〽茂る日を、松ヶ崎なる廣書院、程もあらせず入り來る、上使は名に負ふ雪岡賴母、仁義を胸にしづ〳〵と、一間見渡し立留り、

ト此内奥より早水田川出て出迎ひをなす、よき程に花道より、以前の雪岡賴母先に、近習附添ひ出て花道に留る。

賴母　筑紫よりの仰せを蒙り上使として雪岡賴母、唯今參着致してござる。

早水　これは〳〵御上使樣には、お役目御苦勞千萬に存じまする。

田川　何は兎もあれそこは端近、御上使樣には是れなるお席へ。

兩人　先づお越し遊ばされませう。

賴母　然らば。

〽設けの席へ打通り。（ト賴母舞臺上手へ通り、床几にかける、近習茶煙草盆を持ち出る事あつて、）

シテ其方共兩人は、豐後殿の家臣なるか。

早水　ハヽ、仰せの通り拙者事は、當家の家臣早水久次郎。

田川　同じく田川吉次郎、お出迎ひ仕つてござりまする。

早水　何は格別お入りの趣、唯今お取次ぎ、

兩人　仕らん。

〽と立上れば、（ト早水田川立ちかゝる。此時奥にて、）

豐後　アイヤ、參るに及ばぬ。鳥山豐後唯今御面談仕らん。

早水　あの、お聲は。

早水
田川　御前樣。

〽詞の内に一間より、身は愼みの豐後之助、悠然として出來り、上使が前に手を仕へ、

ト此内奥より豐後之助、麻裃にて出で、よき所へ住ひ、

豐後　これは〳〵賴母殿、今日はお役目御苦勞千萬、謹愼の身ゆゑお出迎ひも仕らず、失敬の段御容赦下されい。

賴母　アイヤその御挨拶には及ばぬ事、はからず殿の御勘氣に、此程よりの御愼み、御心中の程嘸かしと、拙者推察罷りある。

豐後　何はしかれ上意の趣、仰せ聞けられ下さるやう、願はしう存じまする。

賴母　唯今演說仕らん。

〽持參の御書を押開き、（ト賴母懷中へさしたる御書を出し開きて、）

「一、鳥山豐後之助事主命によつて、大切なる長崎表固めの役相勤め居りながら、自儘に歸國致せし上、剩へ奥向きへ立入り、猥りがましき儀有之候、重々不屆きの至りにつき、きつと咎め申付くべき所、父監物の勤功にめでて、松ヶ崎の城地取上げ、永の暇申付くるもの也。」

〽とありければ謹んで承り、（ト此内豐後始め早水田川平伏して聞き終り、豐後思入あつて、）

豐後　ハツ上意の趣委細承知仕る。いかにも長崎表より俄に歸國致せしは、假令餘儀なき譯にもせよ、全く自儘の行ひゆゑ、お咎めあるは是非もなし。然し一つの不審といふは、奥向へ立入つて、猥りがましき事ありとは、豐後身に取り覺えなし、ハテ合點の行かざるその御諚。

〽と心得ぬ樣子に賴母打寛ぎ、（ト豐後不審の思入。賴母床几を取り下にゐて、）

賴母　扨上使の表相濟まば、是よりは常の傍輩委細の譯をお話し申さん。（ト謡への合方になり、）貴殿に覺えなき事は、天道の鏡にかけ、この賴母が存じをれど、佞人讒者の計略にてかゝる無實を受けられしも、脱れぬ證據は先達て御臺樣へ出仕の折、貴殿御所持の紙挾をお取落しでござらうがな。

豐後　いかにもあの折酩酊なし、取落したる紙挾は、先君より拜領せし七子鳳凰の古代切、世に類なき品ゆゑに、紛失しては相濟まねど、豐後之助が所持といふ事誰知らぬ者もなければ、拾ひし者のあるなれば、必らず我へ返しくれんと、其儘に捨置きしが、それが何とぞ致せしかな。

頼母　サヽその事よりして計らずも、出來なしたる一大事。かの紙挾みは城内にて青柳主水が拾ひしが、御臺樣より其許へ送り給ひし一通の、艶書が中にありしとて、委細は青柳主水殿、殿へ言上致せしゆゑ、忽ち不義と事極まり、かくお咎めには及びしぞ。

豐後　ヤヽ扨は青柳主水が企みにて僞筆をもつて艶書を拵へ、拙者を不義に落せしか。アヽわれながら不覺の至り。(ト合方替りて、)元より男女の境を立て、掟嚴しき奥向へみだりに出仕は憚りあれど計らず此程歸國なし、言語に絶えし殿の御身持、見るにつけても若殿や御臺の御身いかゞやと、お案じ申す心より、推參なして久し振り御機嫌を伺ひしに、殊の外なる御悦び、其方には久々ゆゑ一盞過せと仰せあつての御饗應に、悦ばしさの餘りにて數獻過せし酩酊に、前後を忘れ退出せしが、此身の越度となつたるか。かくと知つたら紅葉の間にて、主水めを取押へし折捨置く奴ではなかりしに、ハテ殘念な事を致したなア。

〽口惜しさよとばかりにて、後悔面に現はれたり。頼母は心察しやり、

ト豐後之助殘念なる思入。頼母もこなしあつて、

頼母　かく貴殿の災難を何卒お救ひ申したく、樣々心配致せども、今となつてはそれがしの力に及ばぬ君の嚴命、シテ又上意の御返答は、いかゞ召さるゝ御所存なるぞ。

豐後　其後は今更詮方なし。唯神妙にお受け致し、退城致す所存でござる。
早水　スリヤ、無實なる汚名を受け、
田川　君にはやみ〳〵御退城とな。
豐後　ハテ謀書をもつて不義に落され、企みの罠にかゝりし上は、假令いかほどそれがしが申譯を致せばとて、御暴行の我君樣。お側に佞臣附添ひをれば、よもお取上げあるべき筈なし。假令一度豐後之助が無實の罪に服すとも、日月いまだ地に落ちず、天道誠を照らし給ふ。やがて此身の曇りも晴れ、汚名を雪ぐ期もあらん。

〽諭せば二人は差俯向き、詞なければ上使は聲かけ、

ト豐後之助言聞せる思入。早水田川うつむきゐる。賴母氣を替て、

賴母　左程決心ある上は、今更となり是非なき次第、然らば暫時休息なし、拙者が城地を受取れば、心靜かに退城召され。
豐後　委細承知仕る。旅行の用意仕れば、賴母殿には暫時御猶豫。ソレ、奥の一間へ御案内。
早水
田川　ハツ。
賴母　左樣ござらば、豐後殿。

豐後　御上使には、先づ、

早水田川　お入りあられませう。

〽近習が案内に一間の内、上使はしづ〳〵入りにける。（ト早水田川案內して、賴母奥へはひる。）

〽跡には一人鳥山が、國家の大事身にかゝる、無實の科と二道に、暫し所存を凝らせしが、

やゝあつて吐息をつき、（ト此内豐後之助思案の思入あつて、）

豐後　佞人讒者の舌頭に、豐後之助を失はんと、あざとき奸計企つるは、取るに足らざる事ながら、勿體なくも御臺樣、不義に陷り給ひしは、容易ならざるお家の椿事、かくまで惡人蔓れば、此儘打捨て置き難し。幸ひお暇給はる上は、是より都へ出府なし、訴訟致さば黑白も、自然と分かり當家の納まり。こりやどうあつても武將家へ、裁判を受けずばなるまいわえ。

〽深き思案の折柄に、立聞く妻子は轉び出で、

ト豐後思入あつていふ。バタ〳〵にて、奥より以前の松崎先に、豐後之助長男右平、羽織袴にて出來り、

松崎　樣子は一間で承りました。御身に覺えのない事なら、何故申開きをなされませぬ。惡人共の手立に落入り、おめ〳〵御汰城遊ばすなどゝは、腑甲斐ないとも殘念とも、喩へがたなき思召し。

右平　どうぞお心取直し、御身の罪の晴るゝやう。

松崎　御思案なされて、

兩人　下さりませいなア。

豐後　〽涙と共に諫むれば、豐後二人に打向ひ、（ト松崎右平豐後之助に縋つていふ。豐後之助是を制して）

奥といひ悴まで、深き樣子を知らざれば、左樣に思ふは尤もながら、爰の道理を承はれ。かくいふ豐後は菊地家の臣下といへど故あつて、武將家より内命蒙り、附家老ともいふべき家柄、されば常々菊地家の安危を深く押測り、萬一當家の荒廢に拘はる事件と見るならば、假令此身は浪人なすとも、公邊へ出で主家の安泰計らふが、附家老たる職分なり。さればお家の亂れに臨み、永のお暇頂戴せしそのお咎めを幸ひと、直樣都へ出府の儀心に決定致せしも、深き所存のある事にて、一朝一夕の論にあらず、必らず歎く所でないぞ。

松崎　そりやもう深き御所存とは、推量致してをりますれど、あなたが御退城遊ばせば、おいたはしいは御臺樣や若君樣の御身の上、お側にゐるは惡人ばかり、お二方を誰あつて守る者さへござりませぬ、その御危難を餘所に見て、あなたの、お役が濟みまするか。

豐後　その儀も疾より承知なれど、御臺若君のお身の上は、忠義厚き賴母殿に賴み置けば氣遣ひなし。

我は是非とも退城なし、事を計るがお家の爲め」

松崎　いかにお家の爲ぢやとて、知行に離れた御浪人とは、あまりといへば情ない。

豐後　ハテくど〳〵とかしましい、婦女子の知つた事ではないわえ。

〽呵り付けられ奧方も、途方に暮れし折柄に、奧より出づる近習の兩人。

ト豐後之助きつといふ。松崎是非なき思入。下手の襖を明け早水、田川出て、

早水　ハヽ、樣子は殘らず承りしが、思掛けなきお咎めに、奧樣といひ若殿樣のお歎きあるは御尤も、

田川　いよ〳〵御退城と御決心ある上からは、今更是非なき事ながら、みす〳〵君を讒言なす、佞人どもをその儘に、

早水　捨置き給ふが一つの不審。

田川　二人の者の言やる通り、惡人共を助け置き、分けて憎き主水めに、元老職までお讓りありし思召しは、一向合點がまゐりませぬ。

〽詞に豐後は打ちうなづき、（ト豐後之助思入あつて、）

豐後　その不審は尤もながら主水へ職を讓りしは父の遺言守るがゆゑ

松崎　ナニ、御遺言と、

皆々　おつしやるは。

豊後　その譯よツく承はれ。（ト誂への合方になり、）彼が父たる毛谷帶刀、我が父鳥山監物殿と、かねがね兄弟の義を結び、此後御身の血筋絶えなば、我子をもつて相續させ、又我血筋絶ゆる時は、御身の子息を貰ひ受け、家督させんと約せしを、父が最期の我への遺言、されば主水が惡事を糺し罪に落して家名をば失はせんは道ならず、殊更才智身にすぐれ、大器量ある若者ゆゑ、一旦の惡事を忠義の道に矯め直し、菊地の御家を守護させんと、異見を加へて元老のわが職分をその儘に讓りし恩義もあだとなり、却つてわれを辭職させんと無實の罪を負はせしは、慾に迷うて左程まで誠の道を忘るゝとは、ハテ扨不便な奴ではある、ハヽヽヽ。

〽怒りをかくし打笑へば、（ト豊後笑ふこなし、）

松崎　左樣なれば主水の家と、さういふ深き因ゆゑ。

早水　罪を許して元老の、

田川　職分までもお許しありしか。

右平　それほど深き御恩を忘れ、却つて御身に仇なすは、思へば〳〵憎い奴。此身の力に及ぶなら、主水を殺し父上の、恨みを晴らして孝行の、道が立てたうござりまする。

〽稚心に思ひ詰め、悔し涙に暮れければ、母は聞くより聲曇らせ。

ト右平よろしく殘念なるこなし、松崎是を聞き。

松崎　コレ右平、よう言やつた。稚なけれども流石は男子、父上に仇なす奴、殺して恨みが晴らしたいとは、よう立派に言やつたぞいなう。

〽褒めるも涙先立てば、父も不便と胸迫る、歎きをかくして聲勵まし、

ト松崎泣いていふ。豐後も不便といふ思入あつて氣をかへ。

豐後　最前より餘程の間、益なき愚癡に時移る。最早退城と事極まれば、我はこれより都へ出府、又其方は肥前の國、深江の里方へ悴諸共罷り越し、暫く其方も忍びをらうぞ。

松崎　スリヤ、あなたと御一緒に、

松崎右平　まゐる事は叶ひませぬか。

豐後　オヽ定めし話に聞いたであらうが、都へ出府致すのは深き所存のある事なれば、足手まとひの妻子を連れ、まゐらん事は思ひも寄らず、爰よりは程近き肥前の深江に身を忍び、わが吉左右を待つてゐやれ。

〽諭せばやう〳〵合點して、

松崎　暫しもお側を離るゝは、心ならねど我夫の、事を分けてのお詞ゆゑ。

右平　母上諸共私も、肥前へ參り父上の、

兩人　お便りあるを待ちまする。

豐後　それにて我も一つの安堵、必らず時節を待つてゐやれ。

〽言ひ含めたる折柄に、瀧川小文次次の間より、おづ〱出でゝ手を仕へ。

ト豐後之助、松崎右平の兩人へ言含める。よきほどに下手より小文次、袴なりの若黨にて出で、すつと下手へ控へ手をつき、

小文　ハヽ、御前樣へ改めて、一つのお願ひがござりまする。（ト豐後見て、）

豐後　オヽ、誰かと思へば、そちや小文次、願ひとは何事なるぞ。

小文　餘の儀でもござりませぬが、仔細あつて私は、永のお暇願ひまする。

豐後　何と申す。（ト合方になり、）

小文　これまで永年御恩になり、御扶持を頂戴致したゆゑ隨分忠義を盡す氣で、御奉公も致しましたが、唯今樣子を承れば、お咎め受けて我君には、城地を差上げ御退城と御決心ある上からは、今日よりして御浪人、實は是まで陪臣の上席とはいへど松ヶ崎の、城主といはるゝ鳥山樣、殊に當家

で元老の役目をお勤めなさるゆゑ、その御家來の我々も自然と人に尊敬され、肩身を廣く附合ひしが、もう御浪人遊ばせば行末何の樂しみなく、主人と共に零落して見る影もなくなるは必定、それより早くお暇願ひ、よき奉公の口を尋ね餘所へ主取り致すのが、上分別と心附き、それゆゑ唯今小文次が、永のお暇願ひまするは、かういふ譯でござります。

〽思ひがけなき詞の樣子、豐後之助は小首を傾け、

ト小文次思入あつていふ、豐後之助是を聞きこなしあつて、

豐後　ハテその方が願ひの趣、何事かと存ぜしに、スリヤそれがしが領地に離れ、浪人なすを見限りて、他家へ主取り致すと申すか。

小文　仰せの通り小文次は、此身の出世が願はしく、立派な主人を尋ねまする。

松崎　コレ小文次、そりや本性で言やるのか。

〽ずつけり言へば驚く人々、奥方は胸に据ゑかね、

小文　元より御酒は不調法、酩酊致す筈もなければ、全く本性でござりまする。

松崎　エヽ、おのれはなう。(ト合方キツパリとなり、)多く家來もある中に、其方は取別け譜代にて三代家に勤めしゆゑ、常々我夫も目をかけられ、御不便加へ給ひしが、お咎め受けて御退城と聞いて俄

に主人を見限り、永の暇をくれよとは呆れ果てたるその詞、一旦お咎め受くるとも、いつか御身の曇りも晴れ御歸國ありし其時は、其方達も共々に再び世に出るものなるを、今目の前の慾に迷ひ餘所へ主取しようとは、見下げ果てたる不實者めが。

ト松崎腹立ちの思入、早水田川も小文次に向ひ、

早水　コレ小文次殿、奥樣の仰せの通り、呆れ果てたる此方の不所存、世の盛衰に御主人がいかに零落し給ふとも、忠義を忘れず仕へるが、家來の道ではござらぬか。

田川　我々どもは御主君がいづれへお越しあらうとも、是まで受けし御恩返し、どこがどこまでお側に附添ひ、旅行のお供をする所存。

早水　それには引代へ餘所外へ、こなたはいよ〳〵主取して、その身の榮華を願はるゝか。

田川　今から心を改めて、以前に替らず御主人へ、忠義を盡す奉公こそ誠の忠義と申すもの。

田川
早水　いかゞでござる小文次殿。

〽返答聞かんと詰め寄れど、差し俯向いて詞なき、樣子に奥方心を定め、

ト早水、田川小文次へ詰めかけいふ。小文次俯向いてゐる、松崎是を見て、

松崎　もう二人の者何も言やんな。返事のないはどうあつても、永の暇を取る氣であらう。コレ小文次

小文　暇が欲しくばやるほどに、とつとゝ爰を立ちをらうぞ。
左樣なれば私へ、いよ〳〵お暇下さりまするか。それで此身の、イヤサ、此身の願ひが叶ひし上は、こんな所に長居は無用。ドレお暇をいたしませうか。（ト小文次立上り花道へ行くを）
〽刀引つさげ行きかける。
豐後　小文次、待て。（ト小文次思はず下にゐる。）
小文　何ぞ、御用でござりまするか。
豐後　そちに暇は遣はさぬぞ。
小文　そりや又、何故。
豐後　當方を立去り、餘所へ主取りなすとは、眞赤な僞。
小文　エ。
豐後　主人に離れその方は、毛谷主水を突く氣であらうが。
〽星をさしたる一言に、小文次思はず立戻り、
ト豐後キツパリ言ふ。小文次是を聞き、ツカ〳〵と元の座へ戻り、
小文　ハ、ハツ、驚き入つたる御眼力、どうしてそれを御前には。

豐後　ハテ、それと推量致せしも、殺氣を含みし其方が相恰、所存は面に現はれしぞ。

小文　かくお目立ちまする上からは、今は何をか包み申さん、實は最前若君が、主水を殺して父上の、せめて恨みを晴らしたしと、お年も行かぬ御身にて天晴れ健氣なお詞をお襖越しに承り、三代お家に仕へたる、御恩返しは爰ぞと思ひ主取り致すと僞つて永のお暇願ひしは、いかにもお家の惡人を討つて捨てたるその上に、切腹致し死ぬ覺悟、それと御前の御推量、驚き入つてございまする。（ト此内豐後之助思入あつて、）

豐後　コリヤ小文次、假令主水を覘ふとも、奸智に長けし彼もしれもの、汝如きの手に合はんや。われ公邊へ訴ひ出で天下の裁判受ける時は、主水彌太夫は申すに及ばず、お筆といへる婦人を初め、お家に害をなす輩、霜に熱湯を注ぐが如く追ひ退けんは手裏にあり。さるによつて其方は及ばぬ望みを思ひ止り、やはり身共へ奉公なせば幸ひ頼む奥と忰、肥前の國深江まで送り屆けしその上に萬事の世話を致しくれよ。

小文　ハツ冥加に餘るそのお詞、所存を改め奥樣や若殿樣の御供なし、及ばずながら御介抱致しまするでござりまする。

豐後　オヽそれでこそ誠の忠義、くれ〴〵も汝へ頼むぞよ。

早水
田川　シテ我々が身の上は。

豐後　其方ども兩人は、都方へ出府の上、申付くべき用事もあれば、身共に附添ひ供致せ。

早水
田川　ハツ、委細承知仕つてござりまする。

豐後　コリヤ其方は奧へ參つて、青龍の兜持參仕れ。

早水
田川　畏まつてござりまする。

〽一と間へこそは立つて行く、折から出づる雪岡賴母、

賴母　委細は一間で承りしが、豐後殿の御胸中、奧方といひ御子息や御家來に至るまで、忠孝信義の志し、拙者も感服仕り、思はず落涙致してござる。

豐後　何かの樣子が耳に入り、面目次第もなき仕合せ、お聞きの通り最前より益なき事に暇入りなし、思はず遲刻致してござる。

賴母　イヤ〳〵假の退城ゆゑ、萬事の手筈に遲刻は尤も、シテ又御用の筋もござらば、何事なりとも御遠慮なく拙者へ仰せ聞けられい。

豐後　忝きそのお詞、それにつきそれがしが、賴母殿へ折入つてお頼み申す事こそあり、申付けたる品持參致せ。

早水
田川　ハア、。

〽仰せにはッと近習の者、御兜を持ち出でゝ、豊後が前に差置けば、恭しく目禮なし。

ト此内豊後上手折廻しの襖へ手をかけ引抜く。内に誂への壇の上に青龍の兜を三方に載せ飾り神酒供物など捧げある事。豊後三方の儘、恭しく兜を持ち出し、頼母の前へ置く。是にて松崎はじめ皆々頼母の臣隼太、兵馬まで平伏なし、兜を敬ふこなし。豊後頼母に向ひ、

豊後　お頼み申すは外ならず、今改めて申さずとも、御存じの通り御家の寶物、身共に代り今日より、何卒お預かり下さるやう、偏に願ひ奉る。

頼母　スリヤ拙者めに、此の品を。

豊後　お預け申せば此身の大慶。君に暴なる御所行あらば、かねて先君御遺言の通り、兜をもつて諫言致され、まつた御臺や若君の御身危ふき折柄ゆゑ、此儀も守護なし給はるやう、くれ〴〵貴殿へお頼み申す。

頼母　ハテ後々まで忠義を思ひ、殘る方なきそのお頼み、御臺若君警固なし、まつた是れなる兜の儀はしかと拙者が預かり申せば、必らず氣遣ひめさるゝな。

豊後　頼もしきそのお詞、それにて安堵致してござる。

〽折柄聞ゆる時計の音。
あの時計は未の上刻、最早猶豫なし難し。
松崎　そんなら旅路の支度を調へ、
右平　私共もとも〴〵に。
小文　是より直に、
早水
田川　御出立。
豐後　次へ下つて我々は、旅行の用意仕れば、賴母殿には暫く是に、
賴母　委細心得申してござる。
豐後　左樣ならば、
皆々　御上使樣、
賴母　心靜かに退城召され。
豐後　ハ、ハツ。
〽はツとばかりに人々は、上使を敬ひ次の間へ、皆々打連れ入りにける。
ト豐後之助はじめ、皆々賴母へ挨拶して正面へはひる。賴母、隼太、兵馬殘る。

〽折柄城下騒しく、俄かに聞ゆる物音に頼母はきつと耳聳て、

ト此時ドン〳〵竹法螺の音はげしく、頼母きつとなり、

頼母　ヤヽ又も城外騒しく、手に取る如き物音は、再び一揆の起りし様子。

隼太　最前道にて我君のお諭し受けて百姓共、一旦引上げ鎮まりしが、

兵馬　扨は又候事起り、人数を集めて出張りしか。

頼母　元より無法の振舞に、理非を知らざる農民共、徒黨を結び動亂なすは、容易ならざる一大事、必らず共に油断致すな。

隼太　心得ましてござりまする。

頼母　身共は是にて大切なる、寶の兜を守護なさん。

隼太
兵馬　シテ又我々兩人は、

頼母　櫓へ登り物見致せ。

兩人　ハヽハツ。

〽勇みいさんで。

ト頼母兜を持ち立上る。下手の方に隼太、兵馬股立を取りきつと見得。この模様三重へドン〳〵竹法

螺をかぶせ道具廻る。

本舞臺元の城外の道具に戻る。やはりドン／＼、竹法螺の音にて道具留る。バタ／＼になり、上手土橋より、幕明きの百姓大勢、竹槍、鋤、鍬など持ち群がり出で、

○　コレ／＼皆の衆、いよ／＼御領主鳥山樣は筑紫からのお咎めで、この松ケ崎をばお取上げの上、永のお暇ゆゑ、是から俄にお城を開き、立退かつしやるといふ話ぢや。

△　先刻の上使があれほどに請合つて行つたから、こんな事にはなるまいと思つてゐましたが、大きに當が違ひました。

百一　その御上使の賴母樣は、主人の使ひに來たのだから、恨む所は少しもないが、あんまり菊地の殿樣が、非道な仕方でござるなう。

□　それは先刻も言ふ通り、當時お家に惡人蔓り、忠義一途な御領主樣をとかく邪魔にするとの話。

百二　大方さういふ惡い奴等は、殿樣へ讒言して、かういふ政事をするのであらう。

百三　さういふ譯ならいつその事、是から筑紫へ押しかけて、殿樣始め一家中の惡人共を相手にして、

百四　片ツ端から竹槍で突殺した其上で、鳥山樣のお跡を慕ひ、わしらも國を立退きませう。

百五　オヽそれがいゝ〳〵、そんなら是から氣を揃へ。
百六　何でもかまはず筑紫の城へ、攻めかけるのが近道だ。
皆々　サア〳〵、直に押しかけろ〳〵。
　　トわや〳〵いひながら花道へ行きかける、此時バタ〳〵になり、花道より大庄屋幸十郎、惣代藤五郎小倉の縁とり袴、地味なるぶつさき羽織、兩人とも庄屋の拵へにて走り出で、花道よき所にて皆々を止める。
幸十　コレ〳〵皆の衆、待つた〳〵。
○　ヤ、こなたは庄屋樣か。
皆々　留めさつしやるな〳〵。
幸十　イヤ何でも留めにやならぬ、樣子は向うで見てゐたが、筑紫のお城へ押しかけようとは、あまりといへば料簡違ひ。
藤五　先づ第一に一揆徒黨は、昔からの御法度ゆゑ、大勢寄つてこのやうに亂暴しては濟みませぬぞ。
幸十
藤五　マア鎭まらつしやれ〳〵、
△　イヤ〳〵御領主の大事ゆゑ、默つて見てはゐられぬ〳〵。

皆々　サア〳〵爰を、通したく〳〵。
幸十　イヤ通す事はならぬ〳〵。
百一　イヤ〳〵、いくら留めさしやつても、やるところまでやらねばならぬ。
皆々　サア〳〵そこを、退かつしやれ。
ト皆々庄屋兩人を搔退け行かうとするゆゑ、幸十郎、藤五郎キツとなり。
幸十　エヽ是程いふに、聞分けないか。
藤五　それほど此方衆行きたくば、
幸十　二人を殺して行かつしやれ。
皆々　エヽめつさうな事言はつしやりませ。
幸十　そんなら留まつて下さるか。
藤五　サヽそれは。
皆々　但しは殺して行かつしやるか。
幸十　サア、
藤五　サア、
皆々　サア、

皆々　サア〳〵〳〵。

幸十　コレ庄屋の詞を聞分けて、

藤五　どうぞ皆の衆、留まつて下され。（ト幸十郎藤五郎キッといふ。皆々顔見合せどうしようといふ思入）

幸十　サア引かつしやれ〳〵。

　　ト捨ゼリフにて宥めながら皆々を舞臺へ押戻し、幸十郎藤五郎ホッと思入。皆々餘儀なく控へゐる、

　　兩人捨石へ腰をかけ、

藤五　ヤレ〳〵今の勢ひでは、どうなる事と思つたが、やう〳〵騒ぎが鎭まつて、ホッと息をつきました。

幸十　マア〳〵皆の衆氣を鎭め、此の庄屋がいふ事をとつくりと聞いて下され。扨こなた衆の今の詞、成程御領主鳥山様を大事と思ふ心から、菊地家の殿様を無慈悲な仕方とお恨み申し、また御家來の惡人を殺して恨みを晴らさうと、徒黨を結び後へ引かぬは、是れが世にいふ大和魂、實に見上げた心底ぢやが、爰の道理を聞かつしやれ。肝腎の鳥山様が殿様よりの御沙汰を守り、闇々御退城遊ばすも、主君の二字が重いゆゑ、仰せを背かぬ思召し、早い話が我々の日頃大事に思つてゐる御領主様を家來にして、お使ひなさる菊地様、それほど尊いお方ゆゑ、當領内の者とても、粗

末にしてはならぬ所、品もあらうに押しかけて、戰をしようと言はつしやるのは、あんまり無法でござるまいか。（ト思入あつていふ。皆々是を聞き、）

○　イヤもうそのやうに言はつしやると、どうやら面目ないやうぢやが、然しわしらの料簡では、御領主樣には常日頃、いろ〳〵御恩を受けるゆゑ、大切だと思つてをれど、菊地樣には何一つ、お世話になつた事もないから、大事にする氣がござらぬわいの。

△　成程太郎作のいふ通り、筑紫から三文でも貰つた覺えがないからは、義理立てするにやア及ばぬ事ぢや。

百一　さうだ〳〵その通りだ。あんな無慈悲な殿樣に、

□　義理も糸瓜も、

皆々　いるものか。（ト大きくいふ。藤五郎制して、）

藤五　コレ〳〵皆の衆、どうしたものだ。幸十殿がいろ〳〵と今のやうに言はつしやつたは、こなた衆のみんな身の爲、いかに道理が分らぬとて、菊地家の殿樣に義理がないといはしつては、それでは道が違ひますぞ。假令非道な行ひあるとも、下にして上に逆らひ、もし亂暴したその後で烏山樣へ憎しみかゝり、お祟りあつたその時は手は下さねど御領主へ、刃物をあてるも同じ事。

幸十　サアそれぢやによつて心を改め、一揆徒黨の騷ぎをやめて、此の松ヶ崎へ鳥山樣が再び御歸參あるやうに、

藤五　時節を待つたがよいわいなう。（ト幸十郎藤五郎よろしく言ひ含める。皆々合點の行きし思入にて、）

百一　成程、段々聞いて見れば、底もあり蓋もあつて、すつかり合點が行きました。

百二　亂暴すれば御領主へ、祟りがあると聞く上は、こりや鎭まるが上分別。

百三　然し二人の庄屋樣が、爰へ出かけてござらずば、とんだ騷ぎになるところ。

百四　折よく途中で出會はし、止められたのがみんなの仕合せ。

皆々　ひやいな事でござつたなう。

幸十　イヤもう得心さへして下されば、我々二人の詞も立ち、骨折甲斐があるといふもの。

藤五　それはさうと幸十殿、御領主樣も今頃は、もうお城をお開きなされて、大方爰の追分をお通りでござらうわいの。

幸十　成程どこへござらつしやるも、お道筋は此の追分、丁度爰らに待合はし、途中ながらお暇乞ひをしようではござらぬか。

藤五　是まで永年御恩になつた、お禮を言はねばならぬゆゑ、そんなら爰らで待受けませう。

○　御領主樣がお通りなら、わしらもみんな爰にゐて、
皆々　お暇乞ひをしませうわいの。
幸十　オヽさうさつしやれ〳〵。（ト此内百姓△上手を見て、）
藤五　△　ヤア、とかう言ふうち御領主樣が、こちらを指してござつた〳〵。
幸十　どれ〳〵。（ト上手の方を見て、）オヽ成程、御領主樣ぢや、藤五郎殿、見さつしやれ。大勢の御家來も思ひ〳〵に退散して、お供は僅か二三人。
藤五　ほんに、奥樣と若殿樣をお連れなされてしを〳〵と、お運び遊ばすあの御樣子、おいたはしい事でござるなう。
幸十　今爰へござるほどに、サア〳〵皆の衆、粗相のないやう、
藤五　そつちの方へ寄つてござれ。
幸十　〽庄屋が指圖に百姓ども、しづまり返つて控へゐる。折しも鳥山豐後之助、妻子の外に引連れし、供人さへも僅かにて、力なく〳〵住み馴れし、城を出でたる旅の空、來かゝる道に控へし大勢、合點行かずと立留り、
ト幸十郎藤五郎皆々をずつと下へ控へさせ、兩人もよき所に控へる。此内上手の土橋より豐後之助夫

袴ぶつさき羽織、大小にて端反りの塗笠を冠りて先に立ち、早水、早川の兩臣、印半纏、股引ぶつさき羽織、大小の拵へにて附添ひ、少し後より奥方松崎、旅行好みのなり、笠を持ち杖をつき、右平野袴ぶつさき羽織、大小にて塗笠を冠り、小文次印半纏、股引、大小にて塗笠を冠り兩掛けの旅荷を擔ぎ出來り、幸十郎藤五郎皆々豐後之助の方へ向き、ハヽハツと平伏なすゆゑ、豐後之助合點の行かぬ思入にて立留り、

豐後　多人數の者これに控へ、心得ざるその振舞。コリヤ其方どもは領内の者か、イヤサ、道路にひれ伏し罷り在るは、何等の譯ぢや。仔細を申せ。

ト問はれて庄屋は顏を上げ、

ト幸十郎、藤五郎頭をあげ、

幸十　恐れながら申し上げます。私事は御領内、小澤村の庄屋にて、幸十郎と申す者。

藤五　又私は原石村にて、やはり庄屋を勤めまする、藤五郎と申すもの。

幸十　その外二十七ヶ村の百姓共、

藤五　今日御開城のお暇乞ひとして、

兩人　是まで出ましてござりまする。

豐後　〽兩手をついて述べければ、豐後はそれと心づき、（ト兩人の樣子を見て豐後心づき、）

左樣申せば覺えある、青龍の兜祭典の節、供物を捧げに參つたる、庄屋共であつたなア。

幸十
藤五　御意の通りでござりまする。

豐後　兩人は申すに及ばず、二十七ヶ村の百姓ども、身が開城の際に臨み、わざ〳〵見送りくれるとは
豐後過分に思ふぞよ。

藤五　ハヽハッ、冥加に餘るそのお詞。

皆々　へイ〳〵、恐れ入りましてござりまする。

〽猶も敬ひ控へゐる。こなたは調度に腰打かけ、

ト此内小文次よき所へ兩掛をおろし、豐後、松崎右平是へ腰をかけ、小文次、早水、田川は側へ控へてゐる、松崎思入あつて、

松崎　ほんにまあ此樣に、皆の者が打揃うて、お暇乞ひに參るとは、テモしほらしい志し。

右平　不斷から私が鷹野の折に野山へ出て、世話してくれた百姓共、かうして見送りしてくれるとは、
一倍嬉しうござりまする。

小文　若殿の仰せの通り、常日頃より面體を、我々よつく存ぜし者。

早水　殿の御恩を忘却せず、

田川　かく志しを盡すといふは、

三人　感じ入つたる儀でござりまする。

へ感服なすぞ道理なる、豐後之助は傍を見やり、

ト松崎はじめ、いづれも感心のこなし、此内豐後之助大勢を見廻し思入あつて、

豐後　庄屋をはじめ皆の者、遠慮に及ばぬ、それへ出い。

皆々　ハ、ハツ。（ト皆々少し前へ出る。是にて誂への合方になる。）

豐後　扨是れまでは數年の間、我が領内の田地を耕し、山野を拓き米穀數多貢ぎして、養ひくれし其いさほし禮は詞に盡しがたし。然るに此度仔細あつて、菊地の殿の御意に逆らひ、お咎めの筋ありしにより、此松ヶ崎の本城始め、知行殘らず返上なし、今日唯今當所を立去り、妻子は肥前の深江なる、知邊の方へ預け置き、我は是れより所存あつて都へ出府なせば、當領二十七ヶ村は今より筑紫の差配を受け年貢上納致さにやならぬ。されば是より又一際、猶耕作に力を盡し、土地の榮をなすならば、我が悅びも此上なし、返す〴〵も是までの、其方共が多年の心勞、われいづ方にて終るとも、必らず忘れはおかぬぞよ。

〽忘れは置かぬとありければ、庄屋は思はず膝すり寄せ、
ト豐後思入あつていふ。幸十郎藤五郎是を聞き、

幸十　ア、勿體ないそのお詞。御領主樣、年々の貢を御收納致すのは珍らしからぬ土民の勤め、永年當所に住み馴れたおのれは元より妻子まで、無事に月日を送りましたは、御領主樣のお蔭ゆゑ、取りも直さず命の親、こつちからこそ御恩の御禮、山程いはねばならぬ所、恐れ多い今の仰せ。

藤五　それにつけても常日頃、お家の榮え御武運長久、御身に凶事のなきやうに、神や佛を朝晩に、拜み通した甲斐もなく、降つて湧いたる今度の椿事、思ひがけなく御領主樣に、お別れ申すはその昔、親に別れた悲しみより、百倍まさる心の内、なか〳〵もつて菊地家の、あすから御支配受けるのは、小前の者も一同に不承知でござりまする。

幸十　それゆゑ實は唯今から、庄屋をはじめ皆の者、いづれ何處の果までも、お供致して行きたい願ひ。

藤五　どうぞ是から御旅行先へ、お連れなされて、

皆々　下さりませ。

〽袴の裾に取縋り、くどき立てるぞ道理なり。豐後は不便と心を察し、

豐後　コリヤ皆の者、よう聞けよ。（ト思入、上下の合方になり）別れを惜しみ先々まで、供致さんとのそ

の一言、頼もしき心底ながら、此度それがし彼地へ出府致し、室町殿へ訴訟をなすも、主家の浮沈を思ふゆゑ私ならぬ國家の爲、かゝる旅行に多人數を、はる〲召連れ參らん事なか〲以て思ひも寄らず、殊に菊地家への聞えもあれば、必らず共に左樣な儀は叶はぬ事と諦めよ。

幸十　左樣なれば私共の、

藤五　お供の願ひは

皆々　叶ひませぬか。

豐後　オヽサ、領内の者一人も、決して供はならぬぞよ。

幸十　せめてお供が叶はずば、此の松ヶ崎へもう二三日、お止め申しておきたけれど、

藤五　それも叶はぬ本意ないお別れ、コレ皆の衆、

皆々　庄屋樣、

幸十 藤五　悲しい事に、

皆々　なりましたなア、ハアヽヽヽ。

〽大聲あげて泣きければ、奥方不便と察しやり、

ト百姓皆々わッと泣く。幸十郎藤五郎も手拭を額へ當て泣く。松崎見て、

松崎　聞けば聞くほど皆の者が、淺からぬ志し、わしとても今の今までかうなる事とは夢にも知らず、此の松ケ崎に住み馴れて、もう此右平も年頃ゆゑ、やがて筑紫の奥御殿へ、お小姓勤めと明け暮れに願ひ願うた樂しみも、打つて替りし御開城、後へ心を引く杖に、旅路の憂さも我が身より、夫やわが子の身を思ひ、先立つ物は涙なり、コレ二人の者、推量してたもひなう。

幸十　お道理でござりまする、昨日までも今日までも、結構な御殿の内で、荒い風にも當らぬ御身が、輕々しいお道中に、お心細いは御尤も。

藤五　常にはろく／＼お顔さへ拜まれぬほどの、御領主樣といひ若殿樣から、馴々しいお目見得に、お名殘り惜しさは又一倍、涙の遣り場がござりませぬ。

△　わしらもがつかり力が拔け、

皆々　鋤鍬持つ氣もござらぬわいの。

〽しをれかへりし有樣に、（ト幸十郎藤五郎百姓みな／＼しをれし思入。豐後之助見て、）

豐後　イヤ／＼それは心得違ひ、最前も申す通り、猶此後は農業に力を盡さにや相成らぬぞ。それにつけても頼み置く、一儀と申すは外ならず、身共當所を立去らば田畑其外山林領内殘らず改め受け、必らず粗相なきやうに、菊地家の役人へ、其方より渡してくりやれ。

幸十　畏りましてござります。其儀は臺帳に引當てまして、私共が取調べ、間違ひなきやうお役人へ渡しまするでござりまする。

藤五　此上のお願ひは、どうぞ御身の曇りも晴れ、再び御歸國あるならば、此の松ヶ崎の御城内へ、お戻りなされて下さりませ。

小文　其儀は必らず案じるな。やがて黑白分りなば、直樣御歸國あるほどに、

早水
田川　それを力に待つてゐやれ。

幸十
藤五　へイ〳〵、そればかりを樂しみに、

皆々　お待ち申してをりまする。

ト風の音、知せにつき遠見へかけし淺黃幕を切つて落す。向う誂へ松ヶ崎の城を、小さく奥深に書割りし遠見。豐後之助初め六人是を見込み思入。

豐後　秋のならひの川霧に、今までそれと見えざりしが、

松崎　深山おろしに夕日さす、空さへいつか晴れ渡り、

小文　河を隔てゝ堤より、

早水　遙かに見ゆるは我君の、

田川　住み馴れ給ひし御本城。
豊後　最早これが、
六人　見納めなるか。
〽と延上り〳〵、名殘り惜しさに人々が、心惹かれて見る空の、果も淚に暮近き、諸行無常の鐘の音。
ト此內豊後之助初め六人城の方を振返り見て、名殘り惜しむ思入、本釣鐘になり、豊後きつとなり、
早水　最早夕景、是より直に、
小文　お立ちとあらば此所が、丁度旅路の追分道。
豊後　都へまゐるは東の方、
松崎　肥前へ行くは西の空、
幸十　惣名代に私共は、
藤五　國境までお見送り、
豊後　アイヤ、其方共は後に殘つて、取片附けを。
皆々　畏りましてござります。

豐後　ドリヤ、片時も早く。
〽と立上れば、是が別れと今更に、妻子の歎きは胸一杯。

松崎　そんならわが夫、

右平　父上樣。

松崎　隨分共に御機嫌よろしう。

豐後　そちも達者で、便りを待ちやれ。

松崎　ハイ。（ト泣く、右平もホロリと思入あつて、）
〽と泣く聲を後に殘して行なやむ、道は二筋恩愛の、親子妹背の追分や、四鳥の別れ右左。

幸十
藤五　左樣なれば、

皆々　御領主樣。

豐後　皆のもの、堅固でゐやれ。

皆々　ハアヽ。
〽泣く音を後に出でゝ行く、
ト遠見三重になり、兩花道の皆々愁ひの思入よろしく、

ト幕引付ける、と幕外、床のメリヤス、下座の合方になり、皆々よろしく思入あってはひる。　幕

大詰

木屋町貸座敷の場
問注所對決の場
菊地上家形の場

〔役名〕――矢部備後守、青柳主水、只村彌太夫、大坪孫左衞門、鳥山豐後之助、松浦伊織、矢野亘、早水久三郎、田川吉次郎、近藤大藏、吉田屋佐兵衞、笹尾喜内、吉田屋下男杢助、同心○△□◎、菊地豐千代丸。菊地家老女呉竹、吉田屋娘お節、腰元○△、洗濯屋お熊婆、其他。〕

〔木屋町貸座敷の場〕――本舞臺三間の間常足の二重、銅網の蹴込み、眞中暖簾口、上下の壁に講中札、浪花講の看板をかけ、二重に帳場格子、平舞臺上手に明荷を三つほど積み重ね、屋體の下一間の下家下足掛の書割、下手板塀、是に「御貸席御泊り宿吉田屋」と記せし看板をかけ、此前に木屋町といふ用水桶、いつもの所門口、すべて木屋町貸座敷の體、爰に吉田屋下男杢助、着流し小倉帶、下男の拵へにて皿のひめのりを側へ置き、吉田屋といふ行燈を張つてゐる。下手に洗濯屋のお熊婆ア、袖な

半纏にて浴衣の襟を鋏で解いてゐる。此の見得摺鉦入り、飴賣りの鎌倉節にて幕あく。

お熊　この杢助のづくなしめ、此節高いひめのりを、さう無闇沙汰なしに、お前に使はれてたまるものか。

杢助　何だ、沙汰なしだ。その沙汰なしといふ臺詞は、俺が方から言はにやァなんねえ。

お熊　サァ込ますなら込ますでいゝから、早く糊を返しなせえ。

杢助　エヽわからねえ、聾婆ァだ。（ト耳の側へ口を寄せ、）その沙汰なしといふ事は、俺が方から言はにやァなんねえよ。（ト大きな聲でいふ。）

お熊　エヽ五月蠅え男だ、こんなに俺が耳の端で大きな聲で怒鳴られると、のぼせ上つてなりやァしねえ。サア、いゝから糊を返しなせえよ。

杢助　イヤ返せもねえものだ、この慾張り婆ァめ、内のお客の汚れ物を年中洗濯してゐながら、此の杢助に盆暮でも百の附屆けもしねえから毒づいてやるにも耳も聞えず、毆りつけてゞもやらにやァ腹が癒えねえが、それもあんまり不便だから、せめて糊でも使つてやるのだ。

お熊　そんなに使はれてたまるものか。此の浴衣の襟を解き、洗濯をして天氣の内に、糊を付けにやァならねえのだ。

李助　經師屋さんが入梅に、張物をしやァしめえしよく糊々と氣を揉む、二文がところを買つて見ろ、此の大皿に一杯あらァ。憚りながらかんてえながら、生れは肥前の長崎で、交易場の取締りをする青井丹藏の小倅で、内の前は珊瑚樹で敷詰め、ギヤマンの戸障子に、瑠璃や瞬碁は何のその、どこの國の異人とでも附合ひをする俺だから、世界の地球は此胸に、すらりと疊んである俺だ。それが嘘だと思ふなら、誰とでも議論をしべえ。

お熊　後生樂の大飯喰ひめ。段々これから日が詰るに、そんな暇があるものか。あんまり喋べると舌を切るぞ。(ト鋏を出す。)

李助　イヤ舌を切るより自腹を切つて、俺に附屆けをするがいゝ。

お熊　莫迦な事をいひなせえ。三十二文の洗濯賃を溜めて、高利を貸さうといふ、綽名をとつた三角婆アだ。義理を缺くのは當り前だ。

李助　こんな奴にやァ話が出來ねえ。昔噺の舌切雀で、手前は重い葛籠の方を、背負つて來る玉だんべい。

お熊　そりやァ言はずと當り前だ。中には構ひはねえ、重い方がいゝよ。

李助　エヽこんな慾張つた奴ァ、どうせ四文も出さねえから、糊をひつ使つたその上で、こつぱりつけ

てゝもやらにやア、俺の腹が癒えねえわえ。（ト杢助立ちかゝるを、）

お熊　サア、打つなら打て、いくら年はとつてゐても、まだ手前達に打たれるやうな、耄碌はしねえぞ。こゝな一つ目野郎め。

杢助　俺が一つ目なら、手前は本所だ。

ト杢助立ちかゝるをお熊鋏を出す。是にて杢助逃げながら上手の明荷を眞中へ出し、蔭へ隠れる。お熊うろ〳〵して明荷の側へ行く。この時蔭より杢助ヅツト出で、口をあき、

バア、もゝんがア。

お熊　エヽ、びつくりした。

ト兩人立廻りの内、花道より早水を先に、田川着流し大小、前幕の浪人者にて出來り、直に舞臺へ來て門口より、此體を見て兩人内へはひり、

早水　コリヤ〳〵杢助。

早水
田川　マア靜かに致せ。（ト早水杢助を止め、田川はお熊を宥める。）

杢助　これはお客様、唯今お歸りでござりましたか。

お熊　とんだ御厄介になりました。

早水　店先にて見苦しい。かやうな喧嘩は致さぬがよいぞ。

李助　とんだ事から諍ひを始めまして、申譯もござりませぬ。

田川　イヤ身共達に遠慮は入らぬが、外の客人も迷惑致せば、チト靜かに致すがよい。（トお熊構はず、）

お熊　そりやァ私も如在はござりませぬ。定めしお急ぎと思ひましたから、早く洗濯致しませうと、糊を買つて參りますと、とんだ邪魔がはひりまして、つい遲なはりましてござりまする。

李助　とんだ間違ひをしてゐるわえ、へイ〳〵元の起りは、お熊婆ァが惡いのでござりまする。

お熊　ナァニ、此の天氣でござりまするから、直に乾きます。

李助　何だ、自分の言ふ事ばかりいつて、人に物を言はせやァしねえ。

お熊　ハイ、いわしやなら本町三丁目でござります。

李助　エイ、分らねえ婆さんだ。（ト耳へ口をおッつけ大きい聲にて、）人に物を言はせないといふのだよ。

お熊　ナニ獨り者だ。さうだらう、お上さんがゐないから、洗濯を頼みなされるのだ。

李助　エヽ、獨り者の事ぢやァねえわえ。

お熊　當り前よ、こりやァ單衣ものだ、

李助　到頭足がらをすくはれた。

お熊　どうだえ、手柄が見えたらう。
李助　惡く洒落れらア。（ト早水思入あつて、）
早水　コリヤ〳〵李助、奥へ參つて旦那樣へ、唯今兩人が歸宅せしと、
田川　其方より申上げてくりやれ。
お熊　へイ〳〵畏りました。左樣ならお二人樣、ごゆるりとなされませ。
　　　トお熊浴衣を抱へずつと暖簾口へはひろ。
李助　イヤ、とんだ聾話だ。（ト後より李助奥へはひろ。）
田川　イヤお熊婆アの遠通寺で、思はず一興致した。（ト合方になり、）
早水　扨田川氏、御同然にお供して、都表へ參つてより、最早半年にも相成りまするが、御主人樣には訴訟をもつて、何れへお願ひなされても、願書はその儘お差戻しにて、採用の氣色なく、我々までもたゞ〳〵心痛。
田川　殊更此程兩三度、足利家の問注所に於て、青柳主水と對決に及べども、兎角彼めが佞辯に、言ひ曲げられて殘念至極。
早水　又候昨夜の差紙に、今日問注所に於ての對決も、いかゞなりしか案じられたる儀でござる。

田川　何はしかれ爰は店先、人目に立つのも如何ゆゑ。
早水　座敷へ參り事の仔細を、
田川　とくと伺ひまするでござる。
早水　サア田川氏、お越しなされ。
　　ト合方になり、兩人奥へはひろ。やはり右の鳴物にて花道より、吉田屋佐兵衞羽織着流し、宿屋の亭主にて出來り、花道に止り、
佐兵　自身番へ呼ばれたと、表向は言ひ拵へ、大藏樣と亘樣のお二人に賴まれて、家に寄留の鳥山樣をなきものにして金のつる、然し此奴の手續きは誰より一番娘がいゝが、うまく說得してえものだ。（トやはり右の合方にて舞臺へ來り門口より、）娘、今戻つた。（ト内へはひろ。奥にて、）
お節　ハイ〳〵。（ト暖簾口たり吉田屋娘お節出來り。）父さん、唯今お歸りなされましたか。
　　ト佐兵衞平舞臺の上手に住ふ。
佐兵　とうに戻つて來る筈なれど、出役の喜平に捉まつて、又例の話好きに、思ひの外遲うなつた。
お節　さうして先刻自身番へ、お前呼ばれなさんしたは、案じた事ぢやござりませぬか。
佐兵　サア心配な事が出來たわえ。

お節　エ、何と言はしやんす。

佐兵　コレ娘。

ト奥へ思入。是にてお節暖簾口を窺ふ。合方になり、お節佐兵衛の側へ來り、

お節　シテ、その心配と言はしやんすは。

佐兵　先刻町内へ呼ばれたは、御公儀樣より御役人が御出役にて、コリヤ佐兵衛、そちが方に菊地の浪人鳥山豐後之助と申すもの、寄留致しをるとやら、彼は主家を相手どる大惡人の棟梁なれば、生かして置いてはお爲にならず、天下の大事を思ふなら、彼等主從三人を毒害なして殺してくれよと、退引させぬわしへのお頼み、それゆゑ心配してゐるのぢや。

ト是を聞きお節びつくりして、

お節　エ、そんなら奧のお三人へ、アノ毒藥を。

佐兵　コレ。（ト制す。お節顫へゐる。佐兵衛思入あつて、）コレ娘、此事故に俺が心配、なれども其場で斷れば家内中が繩目の恥、どんなお咎めに逢はうも知れず、是非なくお客へ毒藥を差上げませうと受合つて戾つては來たものゝ、あなたも立派な御武家ゆゑ、誰でもいゝわと上げられず、所で俺が考へには、其方は鳥山樣の小用を頼まれ、朝夕に何かのお世話する事ゆゑ、此の毒藥を酒に仕

込んで、何と上げてはくれまいか。

お節　エヽ。（トびつくりなす。）

佐兵　サ、その驚きは尤もだが、これも親への孝行だ。コレ娘、お上の爲と親の爲、此の一藥を上げてくりやれ。（ト懐中より藥包みを出す。）

お節　父さんのお頼みなれど、假令僅かな間でも、私を贔屓にして下さる大切なお客様へ、何で毒が飲まされませう。是ばつかりは止めにして下さりませ。

佐兵　そんなら是程事を別けて天下の爲、親の爲とわしが頼むに聞き入れず、止めにしてくれといふからは、此後其方はもう頼まぬ。御公儀様より申付かりしその申譯に、此藥を俺が飲んで死んでしまはう。

お節　え。

佐兵　その代り親より大事の、奥のお客のお世話をしろ。娘、さらばだ。

ト件の藥包みを明けて口へ押付けながら、飲むといふ振をする、お節びつくりしてその手を押へ、

お節　アヽモシ父さん、どうぞ待つて下さんせ。

佐兵　イヤ何でも死ぬ、放せ〱。

お節　そんならお前は本當に、死なしやんすのでござんすか。

佐兵　オヽ自身番でお役人様へ受合つて來た上からは、今更其方が厭だといへば、死ぬより外に仕様がない、娘さらば。（ト又藥を飲まうとするこなし。）

お節　マア〳〵、待つて下さりませ。

佐兵　そんなら毒を飲ましてくれるか。

お節　サア、それは。

佐兵　俺が死なうか。

兩人　サア〳〵〳〵。

佐兵　娘、返事はどうだ。（トキツと言ふ。これにてお節ぢつと思入あつて、思案を極めしこなし。）

お節　親の命にや替へられぬ。いかにも毒を飲ませませう。

佐兵　ムヽ、そんなら其方が飲ましてくれるか。

お節　アイ。

佐兵　それでやう〳〵、金の蔓に、

お節　エ。

佐兵　イヤナニ、かね〴〵其方にいふ通り、萬事に行屆く相手は立派なお武家ゆゑ、やり損ひをせぬやうに。（ト藥包みをお節に渡す。お節愁ひの思入あつて、）
お節　首尾よく是れを仕果せれば、
佐兵　公儀の爲と親の爲。
お節　さうなる時は父さんも、
佐兵　命が助かり何より目出たい。
お節　その代りに私の命を。
佐兵　ヤ。
お節　サア命にかへて、あなたの御身を。
佐兵　娘、首尾よくやつてくれ。
お節　アイ。（ト愁ひの思入あつて、）合點ぢやわいなア。
ト思ひ切つて藥包みを持ち、奥へはひる。此以前下手より矢野亘、羽織着流し大小、近藏大藏、同拵へにて出來り、門口に窺ひゐて、
亘　佐兵衞、委細はこれにて承はつた。

佐兵　イヤこれは、それにお越しでござりましたか。（ト門口へ出る。）

亘　コリヤ佐兵衞、よくぞ娘を說きつけて、得心させてくれた。

大藏　イヤ、なか／＼出來しをつたわえ。

佐兵　これと申すも御褒美の、お金がほしいばつかりに、正直律義な娘をば、說得をした此の仕事。然し毒害の前方に、お約束の金子をば、どうかお貰ひ申したうござります。

大藏　それは承知致しをるが、折惡しく此所に兩人共にその金子を、持合はさねば明日迄、どうか日延を致してくりやれ。

佐兵　そりや待ちも致しませうが、その代りに毒藥を、明日まで延ばしませう。

亘　それはあんまり因業と申すもの、假令金子を渡さずとも、先づ用辨に致しておいて、その上受取つてもよいではないか。

亘 大藏　どうぞ先へやつてくりやれ。

佐兵　そりやアやりも致しませうが、かういふ仕事の御褒美は、先へ貰つてしまはねえと、後で間違ひのある奴で、狂言でもよくしまする。まんまと首尾よくやつた後で、褒美は冷てえ氷の刃金、手も見せず一太刀に、ハアッと一聲上げたツきり。そんな芝居ぢやありますまいね。

大藏　ばかを申せ、武士の口外致せしを、左樣な事があるものか。
亘　其儀は必らず安心致せ。
佐兵　よろしうござります、そんなら先へやりませう。（ト思入あつて、）イヤ〳〵此奴アどうも安心ならねえ。モシお二人樣、やつぱり明日に延ばしませう。
亘　ハテさて其方も因業な奴ぢや。然らばよいわ。大藏殿、あたりへ心を。
大藏　ハツ。（ト大藏門口、暖簾口へこなし、此内亘懷中より一卷を取出し、）
亘　この一卷は大切なる、徒黨を記せし連判狀、これを其方へ預け置くゆゑ、明日金子と引代へる、先づそれまでの證據に渡すぞ。（ト佐兵衞に渡す。）
佐兵　何か樣子は存じませぬが、連判狀とあるからは。（ト中を開き見て、）成程これは大事な品。そんなら明日御褒美を、受取るまでこの品を。
大藏　オヽ其方にしつかりと、預け置くから必らずともに、手落のなきやう。
佐兵　畏りました。證據の品を預かりましたから、やう〳〵安心致しました。
亘　然らば何分今宵の内に、
大藏　そちが働き頼むぞよ。

佐兵　お案じなされますな。萬事は吉川屋佐兵衛が胸に。
亘／大藏　よろしく・な。
佐兵　ヘイ、承知致してをりまする。
亘　それでやう〳〵、(ト大藏と顔見合せ、)
兩人　安心仕つた。(ト唄になり、兩人は下手へはひる。佐兵衛殘り、)
佐兵　あゝ受合つてはやつたものゝ、相手は名に負ふ武家の事、娘がうまくやつてくれゝばよいが、何にしろ此の品を預かつて置けば、褒美の方は氣遣ひなし。よく又娘に言聞かしておかうかえ。
　ト唄になり、奥へはひる。花道より大坪孫左衛門白髮鬘、裃、日勤の雪踏にて出る。後より笹尾喜内、菖蒲革の羽織、若黨の拵へにて、太緒の草履を持ち附添ひ出來り、兩人花道に留り、
孫左　コリヤ喜内、先へ參つて尋ねて見やれ。
喜内　ハツ。(ト先へ駈抜け門口へ來り、)頼まう〳〵。
李助　ヘイ〳〵。(ト李助出來り、)ヘイ、どちらからござりました。
喜内　菊地の浪人鳥山豐後之助殿の、御旅宿はこちらでござるか。
李助　ヘイ、こちらでござりますが、どなたでござります。

喜内　少々面會致したいと、取次いでくりやれ。

李助　へイ〳〵畏りました。（ト李助奥へはひる。喜内下手へ來り、）

孫左　どうぢや、知れたか。

喜内　へイ、この家にござりまする。

孫左　ムヽ左樣か。然らばこれにてよろしいから、其方は先へ屋敷へ歸れ。

喜内　ハツ、畏つてござりまする。（ト喜内花道へ行きかゝるを、）

孫左　コリヤ〳〵。

喜内　ハツ。

孫左　後刻迎ひに來てくりやれ。

喜内　ハツ、左樣なれば後程上りまする。（ト合方にて喜内花道の揚幕へはひる。孫左衞門思入あつて、）

孫左　イヤ、年をとると忘れツぽくつてならぬわえ。

ト此時奥より早水、田川出來り、門口にて孫左衞門を見て、

早水　これは〳〵大坪樣にはようこその御入來。

田川　先づ〳〵是へお上り下さりませ。

孫左　オヽ、鳥山の御家來衆か。眞平許さつしやれ。（トズツと上手へ通る。兩人下手へ住ひ）

早水　幸ひ主人鳥山豐後、先刻歸宿致したところ、

田川　丁度折よく大坪氏の御尊來、

早水　何はしかれ、此の由を、

田川　主人へお知らせ。

兩人　申すでござる。（ト立ちかゝるを、）

孫左　アイヤ〳〵一々取次がつしやるも面倒だ。外に客のない事なら、お手前一緒に連れて行つて下さ
れ。

田川　デモ取散らしてをりますれば、

早水　ちよつと片附けた其の上にて、

兩人　御案内を致しまする。

孫左　イヤそれを待つのも面倒だ。デハ直々に面會なし、示談致さにやならぬゆゑ、そんな事にかまは
つしやるな。

早水　然らば、その儘、

田川　御案内を。

孫左　年寄りは氣が短けえ。

兩人　かうお出でなされませ。

ト唄になり、早水先に孫左衞門、田川附いて暖簾口へはひる。合方彈流しにて、奧よりお節出來り。

お節　父さんが言はしやんすには、今お出でのお客樣へ定めて御酒が出ようから、それへ毒をば仕込めとある、退引ならぬ私へ言附、いかに親の爲ぢやとて、一人ならず三人まで、お客樣を殺すやうな恐ろしい事が出來ようぞ。とあつて是れをせぬ時は、父さんの爲お上の爲、所詮生きてゐられぬのは、先刻から覺悟の上、いつその事に。（ト爰へ以前のお熊浴衣を疊んで持つて來て、）

お熊　ハイ、出來ました。（ト出す。お節びつくりして、）

お節　ほんに聾で。

お熊　エ、（ト浴衣を取るを道具替りの知せ、）

お節　よかつたわいなア。

ト　お節覺悟の思入。お熊は素知らぬこなしにて襷を取る。幕あきの飴屋節にて道具廻る。

奥座敷の場——本舞臺一面の平舞臺、正間に床の間、此下秋草の襖、上手障子屋體。下手の張物三尺の下地窓、さらし竹を打ち、此上茶壁、窓の向う建仁寺垣、石燈籠、振よき松の立木、此の前御影石のつくばひ、すべて吉田屋奥座敷の體、上手に大坪孫左衞門、下手に前幕の豐後之助着流しにて控へ、合方にて道具留る。

豐後　これは〳〵御老體には、豐後づれがこの旅宿へ、ようこその御尊來、大悦に存じまする。

孫左　イヤ拙者も疾より其許の御旅宿へ訪れて、昔話の仕らんと存じをつたる其所へ、參らにやならぬ儀が起り、密々御示談致しに參つた。

豐後　ムヽしてそれがしに御示談とは、如何なる儀にてござりまする。

孫左　その譯と申すは、孫左衞門其許へ異見に參つた。

豐後　何と仰せらるゝ。（ト誂への合方になり、孫左衞門進みより、）

孫左　鳥山殿、とくとお聞きあれ、先づ日本の諸侯の內で、陪臣とは申しながら、音に聞えし附家老にて、申さば城主も同じ事、そのお手前に似合はしからぬ、此度上への訴へは、主人の家を相手どり、二十八ヶ條の申立は、菊地の家を潰す心か、但し又、お手前は天下の亂を招く心か、その心腹が承りたい。（ト孫左衞門詰寄る、）

豐後　いかにも貴君の仰せの如く、拙者主家を相手どり、公朝へ訴訟致すは、不忠臣には似たれども、かく致さねば佞人蔓り、殿のお心猶々狂ひ、御家の安泰覺束なしと、それがし決心致せしゆゑ、本國筑紫を退去なし、遙々遠き都表へ、出府致して訴訟なすも、御家のお爲を思ふがゆゑ。

ト是にて孫左衞門思入あつて、

孫左　それほど菊地の御家を思ふ忠臣無二の其許なれど、かゝる訴訟をなす時は菊地の家は忽ち斷絶。世の諺にも言へる如く、高梁強くして家を倒すと、御身如きの忠臣は、卽ち世俗にいへる如く、主思ひの主倒しだ、イヤサ怒らつしやるな鳥山氏、此の孫左衞門は御存じの、戰場生き殘りの親仁ゆゑ、言ふ事に飾りはござらぬ。コレ豐後殿、惡い事は申さぬから、此の出入は止めにさつしやれ。（ト孫左衞門思入にていふ。豐後之助はぢッとこなしあつて、）

豐後　何樣左樣思召すは、こりや御尤も至極でござるが、是には深き所存のある事、餘人にあらぬ其許ゆゑ、深くも包む品なれど、家を倒して家を起すの、高梁を御覽に入れん。

ト豐後之助上手の屋體より兩掛を持ち來り、中より風呂敷包みの箱を出し、件の風呂敷を解き、桐の箱を取出し、恭しく孫左衞門の前へ置く。孫左衞門不審の思入あつて、

孫左　鳥山氏、シテ此の品は。

豐後　此の一品は勿體なくも、足利家の先君御直筆の御墨附。
孫左　ナニ、先君様の御墨附とな。ハツ。

ト下つて平伏なす。合方キツパリとなり、孫左衛門思入あつて下手へ行き、つくばひにて手を洗ひ、元の座へ來り、件の箱を開き、中より白羅紗の切に包みし墨附を出し開き見て、

コリヤこれ先君の御直筆にて、足利三代菊地三代の内、假令いかなる事ありとも、本領安堵の御墨附。
豐後　大坪氏には御存じなきや。
孫左　孫左衛門、先君のお側を離れた事はないが、是ればかりは一向存ぜぬ。
豐後　スリヤ御存じはござらぬかな。
孫左　一向に存ぜぬが、是れをどうして其許には。
豐後　その仔細を逐一に、豐後是れにて申述べん。（トあたりへ心を配りこなしあつて、孫左衛門の側へ進み寄り。）先主秀行武功によつて、先君よりそれなる賜物頂戴致し罷りあれど、當主貞行暴行のみなし、かゝる品を渡しおかば、いかなる慢心なさんも知れず、御病死の砌りそれがしを、御枕邊へお招ぎあつて、竊に拙者へ預け置かれし先君の御墨附、かゝる品を所持致せば、主人の亂行申

立て、一旦主家を取潰し、佞人共を悉く誅罰なし、若殿にて菊地家を再興なす所存に、それがし決じをれど、爰に一つの違脚と申すは、一旦主人を相手どり、公儀へ御苦勞かけたる大罪、いかなる刑に處せらるゝか、此儀はしかと計りがたし。なれども拙者が胸中は、菊地の御家に恙なければ、此身の望み外になし、よし又、此事成就せずして、それがしやみ〳〵朽つるとも、我が心中を何れへか、申し遺して置きたしと存じをつたる其所へ、計らずも舊來のお馴染み厚き其許にお話し申すはこれ幸ひ、御賢察願ひ奉る。（ト孫左衞門これを聞き、感心せし思入にて膝を打ち、

孫左　ム、出來された。イヤ偉いものだ。その料簡なら孫左衞門後ろ立の仕り、後の所は請合ふから、爰は一番踏張つてやる所までやらつしやい。ナアニ是しきは些細な事だ。御同然にその昔、數多戰場往來して、血の雨降らした事を思へば、遙に樂なこの仕事、疊の上の仕事ゆゑ、聊か臆する事はござらぬ。孫左衞門ぐつと承知致した。ずん〳〵とやらつしやれ〳〵。

ト孫左衞門よろしくこなし、豐後思入あつて、

豐後　そのお心添にてそれがしも、一倍力が增してござる。此上ともにお執成を偏に願ひ奉る。

孫左　身共はこれより御寶藏の記錄所を取調べ、御墨附のお控へを、しかと拜見致した上にて、足利家を煽り立て、菊地の當主を押籠めて、惡人輩を取り挫かん。

豐後　その儀只管大坪氏、よきに御添心の下されい。

孫左　案じさつしやるな、大丈夫だ。（ト豐後之助思入あつて、）

豐後　先づ御用談が調へば、何はなくとも粗酒一献。

孫左　浪人のお手前に、散財させるも氣の毒だが、物は延喜と申すから、前祝ひに馳走にならう。

ト豐後後ろへ思入あつて。

豐後　ソレ兩人、酒宴の用意。（ト後ろにて、）

早水 田川　ハア――。（ト合方になり、奥より以前の早水田川酒肴を持ち出來り、よろしく並べ、）

孫左　鳥山殿、大分張込まつしやつたな。

豐後　召上る品もござるまいが。

早水　一献お過し、

田川　下さりませ。（ト奥よりお節銚子を持ち、しなしなとして出來り、）

お節　御酒を持參致しました。（ト下手に控へる。孫左衞門お節を見て、）

孫左　御兩所、彼はお召使でござるかな。

早水　イエ、左樣ではござりませぬ。當家の娘節と申す、正直なるものゆゑに、

田川　主人これに寄留中、朝暮の世話を頼みまする。
孫左　オヽ左樣でござるか。それは御苦勞だ。サア是れへ參れ〳〵。（ト孫左衞門猪口を取つて）
　御亭主役ゆゑ、先づお手前から、
豐後　然らば、頂戴致すでござる。（ト猪口を取り、）コリヤ節、注いでくりやれ。
　　ト此の内お節思入あつて、
お節　イエ、この御酒は私が、お毒味をいたしまする。
豐後　ハテ其方が持參の酒なれば、毒味するには及ばぬわえ。
お節　イエ〳〵、是非とも私が。
　　ト豐後之助の猪口を取り、銚子の酒を注ぎ飮まうとする。爰へ奧より佐兵衞走り出で、お節の手を押へ、
佐兵　コレ〳〵娘、何をする、それを飮んでたまるものか。イヤサ、下戸のくせによすがいゝ。
　　ト止めるを、孫左衞門豐後之助は不審の思入。
早水　コリヤ〳〵亭主、お客樣の前といひ、あたり近所も憚らず。
田川　挨拶もなく罷り出で、失敬知らぬその振舞。

豐後　娘が毒味を留めるなら、其方代つて毒味を致せ。（ト佐兵衞びつくりして、）
佐兵　エヽ、どう致して此の酒を、
豐後　飲まぬと申すは、仔細があるのか。
佐兵　イエ、別に仔細と申して、
早水　なければ代つて、
早水
出川　毒味を致せ。
佐兵　どう致して、この毒味は、
豐後　出來ぬと申すは、仔細があるのか。
佐兵　サア、それは、
三人　サア、
四人　サア〳〵。
豐後　返事の出來ぬは、怪しい奴、ソレ。
早水
出川　ハツ。（ト兩人立ちかゝる。）
佐兵　コリヤもうたまらぬ。

ト逃げにかゝるを、早水、田川押へる。この途端懐ろより以前の一卷を落す。豐後之助手早く取上げ見て、

豐後　コリヤこれ、慥に連判狀。

佐兵　それを遣つては。

ト取りにかゝるを、早水、田川兩手を押へつける。この内豐後之助開き見て、

豐後　ムヽ惡事を企む菊地の家來、青柳主水を始めとして。（ト孫左衞門目をこすりながら覗き見て、）

孫左　ムヽ、それに連なる數多の惡人。（ト早水、田川覗き、）

早水　血判なせし、

田川　連判狀。

お節　そんならそれを、父さんが。（トびつくり思入。豐後之助キッとなつて、）

豐後　コリヤ、よい物が。（ト孫左衞門と顏見合せ、連判狀を頂くを、道具替りの知せ。）

豐後 孫左　手に入つたわえ。

ト豐後之助勇み立ち、件の連判狀を卷き納め、孫左衞門は御墨附へ拜をなし、お節はびつくりせしこなし、早水、田川は佐兵衞を下緖にて縛り上げる。此の模樣よろしく合方にて道具廻る。

（書院の場）――本舞臺四間通し中足の二重、蹴込み、上段の書院、後ろ八つ藤白地の襖、上下同じ張物、上手床の下へ杉戸を建付け、下手へも同じく杉戸を取付け、上段一面に布を敷詰め、爰に四幕目の菊地の老女呉竹、願書を持ち控へゐる。同心〇、△の兩人、黒の羽織袴股立にて、緋房の十手を持ち立ちかゝりゐる見得。時の太鼓にて、道具留る。

〇　女の身にて此の席へ、訴訟なすとは叶はぬ事。

△　願ひの筋があるならば、順道をもつて願ひ出でよ。

〇　此所へは罷りならぬ。

〇△　下れ〳〵、下りをらう。

呉竹　成程おつしやる通り女の身で、此所へ出訴致すは叶はぬ事と、かねて存じをりますれど、容易ならざる火急の事ゆゑ、筋違ひを顧ず、これまで出ました事なれば、叶はぬまでもお取次、偏にお願ひ申上げます。

△　シテ其方は何處の者だ。

呉竹　私事は菊地家の、老女呉竹と申すもの。

〇　ナニ、菊地家の老女が強ひて願ひを上げるとは、いかなる仔細だ、それを申せ。

呉竹　そのお願ひと申しまするは、私主人の御臺樣、無實の汚名を受け給ひ、一方ならぬ御心配、私共の身にとつては、寢ても寢られぬ無念さに、御訴訟申上げる上からは、此身は強訴の罪となり、いかなるお仕置受けるとも、聊命は惜しまねど、主人の汚名が雪ぎたさ、どうぞお慈悲にお取次、偏にお願ひ申しまする。

○　さういふ事なら猶ならぬ、その筋へ願ひ出で、

△　上の御所置を受けるがいゝわさ。

呉竹　スリヤ是ほどに願つても、お取次は下さりませぬか。

○　エヽ、叶はぬ事だわ。

○△　下れ〳〵、下りをらう。

トよろしく爭ふ。此時正面の襖を明け、矢部備後守繼上下にて出る。後より子役の坊主二人、刀御用箱を持ち出で、備後守の側へ置き、直に奥へはひる。同心○、△控へる。

備後　シテ此者は、何處のものだ。

○　ハツ、菊地家の老女とやら、何か願ひの筋あるとて、

○△　罷り出でましてござりまする。

備後　ム、、スリヤ願ひの筋あるとて、願書を持參致せしと申すか。

○△　御意の通りにござりまする。

備後　その訴狀、これへ持て。

吳竹　スリヤお取上げ下さりまするか。（ト件の願書を○に渡し、）何分よろしう願ひ上げまする。

　ト○備後守の前へ持ち行く。備後守開き、とくと見て。

備後　此訴狀の文體にては、國家に仇なす佞臣等が、奸計を以て內室には、其身にとつて覺えなき、艷書僞筆を取拵へ、豐後之助が取落せし紙挾の內へ入れ置き、只村彌太夫の手より、太守左門之助へ出しゝゆゑ、豐後之助の領地を取上げ、追放なせしにより、內室にも一間の內に蟄居致され、病ひに侵されをらるゝ由、右兩人が無實の罪裁判の儀を願はしく、それ故の訴へなるか。

吳竹　左樣にござりまする。

備後　ム、、幸ひの此の訴へ。（ト我知らずいふ。）

吳竹　エ、

備後　イヤナニ、菊地の老女吳竹とやら、女の身にて唯一人、主人の汚名を雪がん爲め、願書をもつて訴へ出でしは、さすが奧向き大勢の取締りをも致す身に、神妙なる訴訟の趣き、備後守感心致し

たぞ。

呉竹　冥加に餘るそのお詞、強ひて願ひを上げまするは、恐入ります事ながら、私事は奥方の、幼少のその時より、朝暮かしづきをりまする、常に内端な氣質にて、此度不義の汚名を受け、忠臣無二の豐後之助、追放の身となりし趣承りしそれよりは、其の心配は如何ばかり、終には病に侵されて、重き枕に私を近く招きてくれ〴〵も、二人が汚名の晴るゝやう、どうぞ仕様はあるまいかと、餘儀なき頼みに私も、是非に汚名を雪がんと、それゆゑ強ひてお調べを願ひ出でました事なれば、何卒上の御威光にて、理非明白に御裁判を、偏に願ひ上げまする。

ト呉竹いろ〳〵思ひ入にていふ。

備後　いかにも尤もなる願ひ、ソリヤかうなうてはならぬ筈ぢや。

○　スリヤ、御前には、老女の願ひ、

△　お取上げ、

○△　遊ばしまするか。

備後　イヽヤ、とくと理解を、申聞けねば相成らぬわ。呉竹近う。

呉竹　ハツ。（ト前へ出る。備後守も小膝を進め、）

備後　其方の願ひ尤もの次第なるが、コリヤ聞届けには相成らぬぞ。

呉竹　何と仰せられまする。（ト合方になり、）

備後　そちが願ひを聞き濟む時はな、此程公儀へ訴へ出でたる豐後之助が申し口も相立ち、内室の汚名も晴れ、二人が明りは立つであらうが、爰をよく〳〵承れ、鳥山豐後之助は公儀より一萬石の領地を賜り、菊地の家へ御附人、されば陪臣にして陪臣にあらず、しかるに公邊へ届けもなく、其身に罪なきものを自儘に領地を取上げて、追放なせしは左門之助が粗忽の計らひ、加之豐後之助へ宛て行はれし一萬石、本人退城なす上は、公儀へ早速返上すべきに、それを其儘領地となすは、これ横領にして國賊同然、その申譯は相立つまい、それゆゑ内室並びに豐後之助、此の兩人に聊かも罪なしと定まらば、菊地の家は斷絶なるぞよ。

呉竹　エヽヽヽ。

備後　サヽそれゆゑ上にも此程より執權共が打寄つて、種々心勞致しをる、その仔細は菊地の城地悉くお取り上げある其時は、數多の家臣は黨を組み、民百姓は一揆を企て、西國方に蜂起なし、騷亂起るはこれ必定、天下の大事となるゆゑに、餘儀なく忠臣鳥山が訴訟の願書を差戻し、非分に落すは天下のお爲、無實の汚名といふ事は公邊にても推察なせど、かゝる仕儀ゆゑ是非に及ば

ざるによつて、其方を今日裁断の席へ呼び出し、主水より差出したる内室の艶書の目利申付けなば、謀書に相違なきにもせよ、直筆なりと其方より、申立てゝはくれまいか。

呉竹　お詞にはござりますれど、假令家の爲にもせよ、見す〳〵謀書を正筆と私より申立て、操正しき奥方と忠心厚き鳥山を、罪に落すといふやうな空恐ろしい僞りを、何として申されませう。こればかりは幾重にも御免なされて下さりませ。

備後　スリヤさう思ふは無理ならねど、二人の明りの立つ時は、所詮菊地の家名は斷絕、嫡子たる豐千代は一生埋れ木。

呉竹　スリヤ忠義に厚き鳥山を、不義に落して奥方に、矢張り汚名を負はせねば、菊地の家は立ちませぬか。

備後　いかにも、そこを思へば内室も菊地の家を潰しても、身の明りが立てたいか、よもやさうは思ふまい。又豐後之助もまツその如く惡人さへ追退け、主家さへ安穩に立つ事ならば、强訴の罪いかなる刑に處せられても苦しからぬと申しをるぞよ。されば其方の申立にて菊地の家には恙なし、主人の汚名を雪がずとも、忠義にまさるこれ大いなる功ならずや。天下の爲主家の爲、大事に小事はかへられぬ。かゝる例はその昔、常磐御前がよき手本、操を捨てゝ仇を報ぜし例に倣ひ、忠

義を捨てゝ忠義を立つるは、爰が即ち思案の極意ぢやわ。

吳竹　その御理解を承れば、餘儀ない事ではござりますれど、唯今も申す通り、みす〳〵謀書にあるものを、眞といつて御臺樣や、忠臣無二の豐後殿を、不義に落すといふ事は、

備後　ならぬとあれば今もいふ、菊地の家を取潰し、天下の大事に相成るを、それでも其方は忠義と思ふか。

吳竹　その忠義を存じますればこそ、此の訴へ。

備後　菊地の家國滅亡なしても、二人が汚名を雪ぐ心か。

吳竹　サ、それは。

後備　但し二人を罪に落して、菊地の領地を取り留めるか。

吳竹　サ、それは。

備後　サア、

吳竹　サア、

兩人　サア〳〵〳〵。

備後　先祖の武功に大國を代々領し、筑紫の國を治める丹精は、千々に心を筑紫潟、善惡二つは老女の

吳竹、大事を立てるか小事を立てるか、そちが料簡たゞ一つ、その返答が承りたい。

トキツといふ。これにて吳竹ぢつと思入あつて、

吳竹　いかにも、お家を立てませう。

備後　ムヽ、スリヤ兩人を罪に落し、菊地の家を立てると申すか。

吳竹　よく〳〵考へ見ますれば、奧方並びに豐後之助、種々に心を碎きますによし、菊地の家を思ふが爲め、二人が汚名晴れましても、家國沒收なす時は日頃の苦心も水の泡、お情厚き御理解をいかにも會得仕る、仰せの通り計らひませう。

備後　然らば對決の席に於て、艶書の目利申付けるが、奧方の自筆なりと、きつと申すであらうな。

吳竹　仰せの通り、きつとお答へ申上げまする。

備後　スリヤ、異變はないか。

吳竹　ハツ。

備後　それにて身共も安堵致した。（ト吳竹も思入あつて）

吳竹　仰せの如くお受け致し、二人を無實のその罪に落しまする上からは、豐千代殿へ家督の願ひ。

備後　其儀はかく言ふ備後守、身命にかへて執成致すぞ。

呉竹　エヽ、有難う存じまする。（ト呉竹悦び平伏なす。）

備後　唯今呼出すそれまでは、次へ参つて休息致せ。ソレ、彼れめをいたはり遣はせ。

△　ハツ、立ちませい。（ト呉竹備後守へ會釋なし、下手杉戸の内へはひる。備後思入あつて兩人に向ひ、）

備後　菊地家の一件、いづれも罷り出でたか。

○　ハツ、疾より出仕仕つてござりまする。

備後　双方共呼出せ。

○△　ハツ。

ト同心○、△下手杉戸の内へはひる。時の太鼓になり、上手より青柳主水、麻裃大小にて、以前の矢野亘、近藤大藏、裃大小後より同心○附添ひ出來る。下手より鳥山豊後之助麻裃大小、早水久次郎、田川吉次郎、同じく裃大小、後より同心附添ひ出來り、双方よろしく住ふ。

○　菊地の元老青柳主水、附添として矢野亘近藤大藏。

△　浪人鳥山豊後之助、附添として早水久次郎、田川吉次郎。

○△　相詰めましてござりまする。（ト青柳主水思入あつて、）

主水　此程鳥山豊後之助より訴への儀につき、御用繁多の御中を、度々御裁斷下し置かれまする段、重

備後　重の御手數恐れ入り奉る」(ト平伏なす。備後守豐後之助に向ひ、)

イヤナニ豐後之助、此程より種々の訴へ、容易ならざる事のみ故、元老主水を國許より召寄せ、數度對決に及べども、證據なきのみにて明白ならず、今日は菊地家の老女吳竹をこれへ呼出し、かねて主水より差出しある內室より其方へ送りしとある、艷書の目利申付け眞僞を糺し明白に裁斷なさん」双方とも左樣心得よ。

ト是を聞き、主水、亘、大藏額見合せ、惡い者を呼び出されたといふこなし。豐後之助早水、田川は額見合せ悅こばしき思入にて、

豐後　スリヤ奧方の附人たる老女吳竹、お召し下されしとか。

早水　彼は忠義無二の者ゆゑ、艷書の眞僞も相分り、

田川　鳥山殿の不義の汚名も晴るゝは必定。

豐後　有難い儀に」

三人　ござりまする。(ト悅こぶ、備後守思入あって、)

備後　然らば豐後、彼に目利申付け、全く以て奧方の正筆なりと申立てなば、其方は異論なく罪に服すであらうな。

豐後　老女呉竹儀は、奥方幼年の砌より附添ひをりますれば、何とて僞り申上げませうや何より以て潔白に、艶書の眞僞相分りまする儀にござりまする。（トこれにて主水聞いて思入あつて、）

主水　假令老女が目利なすとも、奥方には其罪に恥入つて、重き病ひに冐さるゝとの事。

豆　又鳥山殿は言譯なさに、罪に服して城地を差出し、其身は退身なしながら、

大藏　今更訴訟致すとは、言ひやうのなき未練至極。（ト是を聞き、早水、田川むつとせし思入にて、）

早水　ヤア言譯なさに豐後之助、いかで退城致さうや。

田川　出放題なる其の雜言、餘りと申せば、

兩人　過言であらう。（ト息込む。豐後之助制して、）

豐後　これはしたり執權の御前、控へてをらうぞ。（トこれにて兩人是非なく控へる。）

備後　ソレ、呉竹を呼出せ。

△　ハツ。

ト下手の杉戸の内へはひる。直に呉竹しを〳〵として出來り下手に住ふ。豐後之助是を見て、

豐後　オヽ呉竹殿、御苦勞千萬。御臺樣の無實の汚名お雪ぎあるは今此の時、何卒目利をお頼み申しまするぞ。

主水　アイヤ吳竹殿、誠の艶書を僞筆などゝ上を僞り召さるゝ時は、後日の祟り輕からず、性根を据ゑて目利召されよ。（ト此內備後守手箱の內より件の艶書を出して同心△に取次がせ、吳竹の前へ出し、）

備後　コリヤ吳竹とやら、その艶書は內室の正筆なるか僞筆なるか、眞直に申し聞かせよ。

吳竹　ハツ。（ト開き見て術なき思入、）

備後　僞りか眞か、どうぢや〳〵。

吳竹　奥方の直筆に、相違ござりませぬ。（ト思ひ切つて言ふ。）

豐後
兩人　ヤア。（ト三人顏見合せ呆れし思入。）

備後　スリヤ、內室の直筆に相違ないとな。

吳竹　御意の通りにござりまする。（ト泣伏す。）

豐後　コレ〳〵吳竹、何と申す。こなたは眼が眩みしか。エヽ言ひやうなき、

ト立かゝらうとするを、備後守制して、

備後　コリヤ〳〵豐後、今頁となり爭ふは、未練であらうぞ。

豐後　デモ、みす〳〵謀書を、

備後　ハテ、控へをらうぞ。

豐後　ハツ。（ト控へる。）
備後　コリヤ吳竹、目利相濟む上からは、用事はない、立て〳〵。
吳竹　ハツ。（ト豐後之助に向ひ、）豐後樣、お許しなされて。（トいひかけるを、）
○△　立ちませい〳〵。（トこれにて吳竹是非なき思入にて下手へはひる。主水思入あつて、）
主水　さすがは天下の決斷所、理非明白に相分り、嘸や主人も聞かれたら、滿足に思さるゝでござらう。
亘　左樣でござる。奧方を唆し密通なした科により、かく浪人をなしながら、
大藏　その主君を相手どり、强訴なしたる重罪人。
主水　かく公朝までさま〳〵と、御苦勞かける橫道者、是れが世に言ふ人面獸心。
亘　しかし病氣で今日は、出仕致すまいと存ぜしに、
大藏　毒の利目か。（ト亘袂を引く大藏心附き、）イヤサ、天罰は恐ろしいものだ。
ト三人憎ていにいふ。豐後之助無念のこなしあつて、
豐後　いかに時節といひながら、忠義と思ひし吳竹まで。惡人どもへ荷擔なし、
早水　現在おのれがかしづきし、御臺樣を不義に落すとは、
田川　見下げ果てたる人でなし、

豐後　これを思へば世の譬、唯一心の外味方なしと、是非もなき世の、

三人　成行ぢやなア。（ト三人歎息の思入。備後守思入あつて豐後に向ひ、）

備後　コリヤ豐後、艶書の眞僞分明なる上からは、其方が罪も明白、きつと蟄して御沙汰を待て。

豐後　スリヤ、私はどうでも罪に。

後備　エヽ、論は無益ぢや。不屆者めが。（ト豐後之助、早水、田川顏見合せ愁ひの思入）。コリヤ、大法の通り取行へ。

○△　ハツ。（ト兩人豐後之助の肩衣脇差を取上げようとすると、この時奥にて、）

孫左　アイヤ、その裁斷しばらく待つた。

○　あのお聲は、

○△　大坪樣。（ト兩人控へる。後の襖を明け、以前の大坪孫左衞門繼上下にて出來り、二重下手へ住ふ。）

備後　これは〳〵孫左衞門殿、ようこそ御出仕。

孫左　備後殿、菊地家の儀につき、度々の裁斷、御心勞お察し申す。

備後　シテ御老體には、何故これへ。

孫左　されば今日兩人の對決と承り、又其許の裁斷見聞なさんと存ぜし所、足利家に內談あつて殿中

備後　へ出仕致し、思ひの外遲刻致した。シテ裁斷は如何に相成つたな。

孫左　菊地家の老女吳竹を呼出し、艶書の眞僞を尋ねし所、內室の自筆に相違なき由。さるによつて豐後之助は不義に極まり、先づその一段は事落着致してござる。

備後　イヤ〳〵備後殿、もうその心配には及ばぬぞよ。

孫左　ナニ、心配には及ばぬとは。

備後　唯今室町殿の御諚には、貞行儀は屆けもなくしてみだりに都へ出府致し、公儀を恐れぬ致し方ゆゑ、菊地家を取潰せとある嚴命下つてござる。

孫左　邪正明白に取捌くは、こりやこれ政道の表、珍しからぬ事ながら、此度の一儀は上にも深き御趣意のある筈、然るに取潰せとの御諚、備後守、一圓その意を得ませぬテ。

備後　イヤ〳〵備後殿、是迄の所ではさう思ふはコリヤ尤も。チト又風が變つて來たゆゑ、その心配にはもう及ばぬ。それゆゑ此孫左衞門も口出し致せば、御懸念なく手一杯にお調べなせえ〳〵。

孫左　スリヤアノ、いよ〳〵それに相違ござらぬか。

備後　此の孫左衞門お請合ひ申す。貴殿の御迷惑には致さぬから、安堵さつしやれ。コリヤ〳〵鳥山、先達の願書を出さつせえ。

豐後　ハツ。(ト悦ばしき思入にて懐中より竪文を出す。同心△取次ぎ、孫左衛門へ渡す。)

孫左　サア備後殿、是を主水へお尋ねなされえ。(ト備後の前へ出す。開き見て主水に向ひ、)

備後　コリヤ主水、豐後之助より申出でし此の訴狀。太守貞行が亂行二十八ヶ條、一々問ふが返答致すか。

トこれにて主水思入あつて、

主水　不忠不義の豐後之助より、何事を申出しか、國家に關係致せし事は、逐一お答へ申上げるでござりまする。

備後　しかと左樣か。

主水　ハツ。(ト備後前へ出て、)

備後　然らば問はん。青柳主水二十八ヶ條のその内にて、捨て置き難き大事件、領地といへど公儀より、社領の御朱印御寄附ある、神后皇后の御陵たる、箱崎八幡の神木を、公邊へ届けもなく、何故自儘に伐られしぞ。コリヤこれ輕からざる儀ぢやが、申開きあるかどうぢや。

主水　こは大事件と仰せあるゆゑ、何事の箇條かと思ひの外なるお尋ね、いかにも先年國許にて、箱崎八幡宮御修覆の刻、主人貞行寄附の爲、神前の格天井神代杉にて造營なさば、神慮にも叶はんと

數年朽ちたる社内の杉を杣共に申付け、得物をもつて向はせし所、返つて神の祟りなるか、人夫に怪我のありしゆゑ、恐れをなして事止みたり。それらの儀を委しく箇條の中へ差加へ、公朝へ訴へ出しなんぞとは、主人を讒する不忠の鳥山。

豐後 ヤア佞辯をもつて言ひ說くとも、いかで天道許すべきや。神前の格天井とは跡方もなき僞り、館の普請に用ひんと、汝等が勸めて伐らせしそれゆゑに、神の祟りを蒙りて、無益の人命損じたり。これ慥なる證據ならずや。

主水 ハヽヽヽ、詞を巧みに誠しく、いかやうに申すとも、菊地家の城内に神代杉の一枚板を用ひし書院はござらぬわ。さすれば是が何より證據。御兩所樣、御賢察下しおかれませう。

備後 コリヤ豐後、主水が申すには、伐らせんとせし析、神の祟りにや人命損ぜしゆゑ、事止めしと申すが、其神木何れへ用ひしや、又はその儘差置きしや。

豐後 神の祟りに恐れをなし、その儘社前に打捨てござりまする。

備後 然らば住居の用ひに使はんや、又は神前の格天井になさんや、證據なければ論ずる事能はず。先づ其儀は差置き、次の箇條を承らん。萬石積の軍艦を造りし趣これあるが、大船製造は天下の嚴禁、これらの事は存じをらうな、何故自儘に造りしぞ、何ぞ言譯あるや。

主水　それぞ豐後之助が僅かな事を仰々しく、認め加へしものにして、左門之助が造りしは、萬石積は愚かな事、千石積にも足らぬ小船。なれども公儀へ聞えを憚り、かくいふ主水が申付け、粗相の出火と言ひ觸らし、海中に於て悉く燒捨てましてござりまする。

豐後　默れ主水、その大船を燒捨てしは、かくいふ豐後之助なるわ。唯今となりまざ／＼しく、汝が仕業と虛言を申すか。

主水　愚や鳥山、其方箇條に書き認め、訴へ出でゝ裁許を願ふが、證據になるべき大船を、跡方もなく燒拂ひ、何をもつて證據となすや。これは此の主水が燒捨てしに相違ないわ。

豐後　假令いかやう言張るとも、身共が燒捨てし事、國許にて誰一人知らぬ者はないわえ。

主水　シテ大船を燒捨てしは、いつの頃なるぞ。

豐後　しかも昨年の秋なれば、天正五年七月十日なるわえ。

主水　然らば承らう、太宰菊地は長崎の御警衞を仰せつけられ、隔年に相勤め罷りある。しかも昨年は菊地家の番にして、元老なれば其方は太守の名代、人數を引連れ在勤中、さすれば國許にはあらざる筈。

豐後　サア、

主水　假令主家の大事たりとも、公儀の御用を捨て置いて、よもや歸國は召さるまい、御用を差置き歸國なして、燒捨てたと言はるゝか。

豐後　サア、それは。

主水　さある時には御身は大罪、よもや歸國は致されまい。（ト主水豐後守に向ひ、）恐れながらこれらを以て、彼が申立つる箇條一々嘘言たる事、御賢察願ひ奉る。

孫左　コリヤ議論が大分絡んで來たが、備後殿、そこはそれで置いて、次の箇條をお尋ねなされい。

備後　コリヤ主水、都に於て御惱御平癒の祈願成就の功により安養大僧都と名乘りし程の名僧を、京地へ奏聞も遂げずして、女犯なせしと捕縛なし、昔が今に例なき拷問にて遂に責殺せしとある、容易ならざる罪、僧の女犯はそれ〳〵に、寺法の定まりあるものを、何故あつて責殺した。是にも何ぞ言譯あるや。

主水　其儀もあれなる豐後之助が跡方もなき嘘說を言立て、箇條に載せし愚かな訴へ、既に先年安養上人城内へ參られし折、急病さし起り、種々に醫療を盡せども、叶はずして入寂の砌、拙者を近う招ぎ、我れ行の徳により位官蒙る淸き身を、穢さば朝へ恐れあれば、三衣と共に庭中にて、茶毘となして、大和國法隆寺へ分骨を葬りくれとの賴みに任せ、かくの如く計らひしゆゑ、程なく拙

備後　者京地へ出て、寺社傳奏のお掛りへ、右の次第を逐一にお屆け申してござりまする。
ムヽ、スリヤ責殺したと申すは豐後之助が嘘言の申立にて、全くは急病にて安養は相果てしゆゑ賴みの如く取計らひ、其方京地へ出府なし、事の始末を逐一に傳奏をもつて奏聞なせしに相違ないか。
主水　御意の通りにござりまする。
豐後　イヽヤ全く以て左にあらず、是れ皆主水が拵へ事にて、奏聞は致せしにもせよ。拷問なして責殺したに相違ござりませぬ。此儀篤と御吟味のほど、願はしう存じまする。
主水　イヤナニ鳥山、主水が取拵へ事と申す事、それほど慥に承知あらば、何故その折に京都へは、かくと通達召されぬのぢや。
豐後　それぞ御家の爲を思ひ、無事を計るが臣たる道。
主水　その臣として何故に、樣々主君を讒言なし、かく強訴を召さるゝぞ。
豐後　鳥山保忠讒言など構ふべきや。おのれが心に引較べ、佞辯をもつて言ひくろめるとも、天道眞を照し給へば、いつかは邪正明白に判然なすは必定なるわえ。
主水　おのれ何やうに申すとも、一旦京地へお屆け相濟み事納まりし事共を、嘘說を舉て公邊へ種々の

御手數を相掛けるは、近頃以て粗忽であらうぞ。

豐後　イヽヤ粗忽の儀は申上げぬ、菊地の家には佞人蔓り、國家の安危に拘はるゆゑ、身を退いてかくの歎願。

主水　スリヤ、主家を倒しておのれが趣意を、立てるを忠義と言やるのか。

豐後　サ、それは。

主水　公儀に取つては強訴の罪、主人にとつては不忠の罪、アノ爰な重罪人めが。

トキツといふ。この内孫左衞門思入あつて、

孫左　コリヤ〳〵鳥山、彼奴はなか〳〵辯才に長けた奴だ。此の鹽梅では二十八ヶ條何と言ひ解くも知れぬわ。此上は手短かに、極意の品を取出せ〳〵。（ト豐後之助思入あつて、）

豐後　ハツ、いかにも左樣仕りませう。（ト豐後之助思入あつて主水に向ひ、）コリヤ、主君貞行殿二十八ヶ條の亂行たる元の根ざしは、汝等なるぞ。

主水　何と。

豐後　妲妃に等しき女を愛させ、匹夫下賤の彌太夫を立身させて身近う附け置き、淫酒を勸めるのみならず、あるとあらゆる亂行は、皆汝等が奸計によつてなす業にて、國家を横領なさんず企て、脫

れぬ證據は旅宿にて、われ〳〵主從を毒殺なさんと、吉田屋佐兵衞を語らひて、褒美の印に渡せし連判。謀叛の棟梁青柳主水、犯せる罪の慥な證據。（ト備後守の前へ置く、）此品をもつて御裁判、偏に願ひ奉る。

備後　コリヤ是れ青柳主水を初筆として、主家を乘取る企みの連判。

孫左　一味徒黨の奴輩を、一々吟味召され。

備後　いかにも、かゝる證據の手に入る上は、備後の訴へ二十八ケ條の一々を、論ずるまでに及ばぬ事一大事なる謀叛の吟味、きつと遂げねば相成らぬわ。

豐後　スリヤ、此品をもつて彼等が惡事、逐一御吟味下されんとな。

備後　オヽ、いかにも罪を糺してくれん。（ト主水に向ひ、）コリヤ主水、最早叶はぬ汝が大罪、恐れ入つたか、罪に伏すか。

主水　ハツ、こは思ひも寄らぬ御尋ね、一味徒黨の連判のと、此身にとつて覺えござらぬ。

備後　ヤア、汝如何ほどあらがふとものがれぬ證據はそれなる兩人、唯今豐後が懷中より、此の連判を取出す折おのれと現はれ心の顚倒、最早惡事は顯はれをるわえ。但し飽くまで申募らば、獄卒共の手をもつて拷問なしても白狀させせんが、汝も菊地で元老職を勤めし身分ならずや。此期に及び

未練であらうぞ。

主水　デモ覺えなき儀でござりますれば、拷問など受くべき謂れはござらぬわえ。

備後　エ、まだ／＼申すか。内室豐後之助不義の趣、其方より訴へ出し訴狀の印形、まつた是なる連判に押したる印形、手蹟も變らず同筆同印。

主水　エ。

備後　ナント、是でもあらがふか。

主水　サ、それは。

備後　但し拷問受ける所存か。

主水　サ、それは、

備後　罪に伏すか。

主水　サア、

備後　サア、

兩人　サア／＼／＼。

備後　恐れ入つたか。（トキッといふ。）

主水　恐れ入り奉る。（ト兩手をつき頭を下げる。備後守思入あつて、）

備後　左樣なくては叶ふまい。ソレ、大法の通り取行へ。

△○　ハツ。（ト兩人主水、亘、大藏の肩衣、大小を取上げる。備後守□◎に向ひ、）

備後　主水をはじめ三人の者、控へ所に於て屏風を圍ひ、きつと張番致せ。

□　ハツ。（ト兩人主水の袂を押へ、）立ちませい。
　　ト三人上手へはひる。備後守見送り思入あつて、

備後　コリヤ豐後、

豐後　ハツ。

備後　不義の汚名を蒙りしを、定めし殘念に思ひしならん。是以て身共が計らひ、吳竹へ理解を申し聞け、其方に罪を負はせしは、主家たる菊地の家國安穩に立てくれんが爲め、然るに只今大坪氏の申さるゝには、足利家にて左門之助へ殊の外御憎しみかゝり、家斷絕と事極まりし趣、されば其方の身は潔白に致してくれん。（ト以前の艷書を出して引裂き、）是にて其方が不義の汚名は晴れたるぞ。

豐後　主家の安危御配慮下され、種々の御厚情、殊には拙者が汚名も晴れ。

早水　附添ひ參りし我々まで。

田川　曇りも晴れし御仁情。

豐後　有難き仕合せに、（ト三人悦ばしき思入あつて、）

三人　存じまする。

孫左　イヤ備後殿、今に始めぬ貴殿の計らひ、此の孫左衛門人を褒めた事はござらぬが、御身ばかりには感心致した。イヤあつぱれ〳〵。

備後　左までにもござらぬ儀を、お褒めにあづかり、大慶に存じまする。

孫左　コリヤ鳥山、かの品を持參致したか。

豐後　ハツ。（ト以前の墨附の寫しを出す。孫左衛門取つて、）

孫左　備後殿、これ御覽なされ。（ト備後受取り開き見て、）

備後　こりや足利家先君の御墨附。

孫左　しかも本書は御直筆でござる。

備後　ナニ、本書は御直筆とな。

トバタ〳〵になり、上手より近侍二人首桶を持つて出來り、

近一　ハツ、申上げます。控所に於て青柳主水、先非を悔いて自殺仕りましてござりまする。

備後　ナニ主水が、自殺致せしとな、こりやかうなうては叶はぬ事ぢや。

豐後　かく惡人の亡びしも、御兩所樣のお執成ゆゑ、大慶至極に存じ奉りまする。

備後　豐後之助が願ひにより、菊地の嫡子豐千代へ本領安堵のお墨附、まつた左門之助には隱居たるべき趣、有難くお受け致せ。（ト豐後之助受取り、）

豐後　ハツ、冥加に餘る御仁情、是以つて御當所樣の御計らひ、大慶至極に、

三人　存じ奉る。

孫左　何の〳〵、是以て皆其方が働きゆゑぢやテ。

備後　大坪氏、實に鳥山は古來稀なる、（ト肩の衣紋を直すを木の頭、）忠臣でござるな。

ト よろしく、　ひやうし　幕

（表門の場）――本舞臺正面朱塗長屋門、左右朱塗りの番所、續いて海鼠壁の長屋、諸所に武者窓。すべて菊地家表門の體。眞中に四幕目の松浦伊織、袴股立ちにて立ちかゝり、上手に以前の笹尾喜内捕

手頭にて十手を持ち、相手の捕手大勢槍を持ち、取圍みゐる見得。ドン〳〵にて道具留る。

伊織　こは何故に當屋敷を、かく獲物をもつて十重二十重に、公邊よりの御手當あるぞ。

喜内　取卷く仔細は公邊より一萬石を宛行ひ、菊地家にて二萬石、合せて三萬石にて附置かれたる家老職松ヶ崎の鳥山豐後之助、先達本國退去致せしを、公邊へ屆けもなく、まつた此度太守多門之助都在勤にもあらざるを、自儘に當地へ出府なせしは天下を恐れぬ無法の根ざしと、主人大坪孫左衞門當屋敷警固を命ぜられ、警固に向ひし笹尾喜内、さるによつて一人たりとも、出門なす事、

皆々　罷りならぬ。

伊織　スリヤそれゆゑのお咎めとな。さこそと存じて先達貞行到着致せしゆゑ、老臣共が諫めを入れて、寺入りさせ、謹愼致し罷りあれば、屋敷にゐるは幼年の豐千代のみ、事の次第をそれがしより豐千代はじめ老臣へ、申聞けるでござりませう。

喜内　シテお手前の姓名は。

伊織　若年ながら豐千代の守り役、松浦伊織と申すもの。

喜内　然らば主人はじめ老臣へ、此の趣きを傳へ召され。

伊織　委細承知致してござる。（ト喜内先に皆々上手へはひる。バタ〳〵になり、以前の吳竹走り出來り。）それへござるは吳竹殿、慌しい何事でござる。

吳竹　オヽ伊織樣、これにおいでゞござりまするか。お悅びなされませ、御家の惡人主水殿、いよ〳〵以て非分に落ち、問注所にて切腹致してござりまする。

伊織　スリヤ青柳主水が非分に落入り、切腹なせしとな、いよ〳〵もつて惡人亡び、善人榮える時節到來。チエヽ忝い。

吳竹　唯此上はお家の治まり、いかゞ成行くものなるか。

伊織　忠臣無二の鳥山殿にとつては敵味方。

吳竹　なれどもこれは忠義ゆゑ、お家に恙いやうに、必死を極めし上への願ひ。

伊織　お外戚はいふに及ばず、老臣方の盡力にて、

吳竹　お上の事は計られねど、

伊織　せめて半地に、

兩人　立てばよいが。（ト兩人歎息の思入。）

伊織　何に致せその趣き、老臣方へお知らせ申されよ。

吳竹　然らば伊織殿。

伊織　御同作仕りませう。（ト此模樣ドン〳〵にて道具廻る。）

（座敷の場）——本舞臺四間通し高足の二重、本緣附、向う墨繪の襖、上下庭の遠見、前面障子建切り、よき所に紅葉の立木。日覆より同釣枝、竹笛の合方にて道具留る。と障子の內にて、

彌太　エイ。

ト太刀音して障子へ吹紅にて血かゝり、ドロ〳〵にて安養の影うつる。これにて障子を內より倒す。爰に只村彌太夫拔身を提げ、女の切首を持つて立ちかゝりゐる。前にお筆の方の吹がへの死骸倒れゐる事。早め模樣の合方になり。

ハア心得ぬ、惡事露顯に妹のお筆も自殺せしゆゑに、介錯なせば法師の姿、朦朧と虛空をのぞみ立去りしは、今迄彼れに安養の憑り移りをつたるか、何にもせよ、奇異なる事を見るものぢやなア。

ト不審の思入。バタ〳〵になり、上手より腰元一、二、三、四、長刀を持ち出來り、彌太夫を取卷き、

一　大惡人の彌太夫が、惡事の露顯なせしより、

二　お筆の方も自殺の上は、

三　もう是までと觀念なし、

四　のがれぬ所と、

四人　覺悟しろ。

彌太　小ざかしきその振舞。片ツ端から斬つて捨てる、覺悟しろ。

四人　何を小癪な。

トちよつと立廻り、腰元四人花道へはひる。彌太夫花道へ追つて行く。揚幕より以前の伊織、禪鉢卷にて十手を持ち出來り、ちよつと立廻つて見得、この時上手にて、

豐後　匹夫只村彌太夫へ、烏山豐後之助對面せん。

彌太　何と。

ト彌太夫立廻りながら舞臺へ來る、是にて正面の襖を引抜く。奥庭の遠見になり、上手より豐後之助、麻裃早水、田川同じく麻裃にて附添ひ出る。是と一時に以前の吳竹豐千代を抱き腰元四人附添ひ二重へ並ぶ、

主人を相手に强訴の烏山、不忠の成敗致してくれん。

豐後　ヤア不忠とは汝が事、妹お筆の緣により、匹夫下賤の身を以て重役に登用されながら、青柳主水

と心を合せ、主家を横領なさんず企て。
早水　國賊の大罪人、主水はじめ惡人共、
田川　罪に伏して切腹なしたり。
豐後　汝もこれにて先非を悔い、潔く切腹なすか。
彌太　サ、それは。
伊織　但し踏みつけ繩かけうか。
彌太　サ、それは、
豐後　切腹致すか。
彌太　サア、
豐後　サア、
皆々　サア〳〵〳〵。
豐後　卑怯未練に立ちはだかり、匹夫の性根現はさんより、一旦武士になつたる意地、潔く生害致せ。
彌太　オ、いかにも元は匹夫の獵人、妹が緣に取入つて、日に增し立身登用なし、家中の奴等に敬はれその幸先に家國を推る心算の山刀、鞘が割れりやアもう是迄、元の杢阿彌獵人の時から多く生き

ものゝ、命を取つた年貢の上げ時、未練こなしにどん腹を、かつさばくから皆寄つて、惡事の腑わけ見物しろ。（ト上段へ腰をかけ刀を腹へ突立てる、これにて豐後之助下手へ來り、）

豐後　ハツ、惡人亡びし上からは、此の豐後は主人へ對し、强訴の罪輕からねば、是より退身仕りまする。隨分共に御機嫌よろしう、御成長を祈り奉る。

豐千　コレ豐後、どこへも行かずに予が側にゐて、長く忠勤盡してくりやれ。

豐後　こは有難き仰せながら、公儀へ對して相濟まざれば、お名殘り惜しうは存じますれど、矢張り此儘私は。

吳竹　スリヤ、どうあつても豐後樣には。

豐後　お暇願ひ奉る。（ト平伏なす。この時上手にて、）

備後　ヤア／＼豐後之助、暇の際に見するものあり、それへ參つて面會なさん。

伊織　やゝ、あの聲は、

早水
田川　備後守樣。（ト調べになり、以前の備後守三方へ墨附を載せ持ち出來り、）

備後　豐後之助が願ひにより、足利三代菊地三代豐千代へ、本領安堵の御墨附、まつた左門之助貞行には隱居たるべしとの御諚なり、有難くお受け致せ。（ト墨附を豐後之助に渡す、豐後之助受取り押頂き、）

豐後　ハッ、冥加に餘る御仁情、豐千代へ家督の御墨附下し置かれ、これに過ぎたる悦びなし、何れも御禮を。

吳竹　これも偏に矢部樣のお取成ゆゑ、

伊織　譜代の家臣は、申すに及ばず。

早水　陪臣の我々に至るまで、

田川　心魂に徹し、いかばかりか、

豐後　有難き仕合せに、

皆々　存じ奉る。

備後　ソレ。（ト近侍が持出でし首桶より首級を出し前へ置き、）控所に於て青柳主水、先非を悔いて自殺せしゆゑ、介錯なして持參せり、彌太夫が首諸共、國許に於て雁木にかけ、諸人に罪を示されよ。

早水　委細承知仕る。（ト首を抱へ、控へる、と彌太夫思入あつて、）

彌太　イザ此上は、介錯頼む。

伊織　心得た。

備後　惡人亡びし上からは、礎固き筑前の、

呉竹　國も豐に治まりて、
豐後　枝も鳴らさぬ松ケ岡、
伊織　是にてお家は、
皆々　萬々歳。
備後　おゝ、（ト扇を開くを、木の頭）
目出度い〳〵。

トよろしく

ひやうし　幕

黑田騷動（終り）

（附錄） 主なる興行年表

大佛供養

年時	座名	名題	景清	三保谷	重忠	幸作	繼信	山路	衣笠	おさせ	高畑
明治六年十月	守田座	音駒山守達源氏	中村芝翫	坂東彥三郎	坂東彥三郎	中村仲太郎	坂東彥三郎	坂東彥三郎	尾上いろは	中村翫雀	市川左團次
明治十二年十月	猿若座	壽永秋大佛供養	市川權十郎	片岡我童	片岡我童	片岡市藏	片岡我童	片岡我童	岩井松之助	岩井紫若	片岡我當
明治十九年二月	中島座	壽永秋大佛供養	中村壽三郎	中村時藏	中村時藏	片岡市藏	中村時藏	中村壽三郎	市川團之助	岩井紫若	尾上幸藏
明治十九年十一月	市村座	二度駈功若武者	市川權十郎	片岡我童	中村芝翫	市川壽美藏			中村歌女之丞	河原崎國太郎	
明治二十九年十月	歌舞伎座	音駒山安達源氏	市川權十郎	市川猿之助		市川壽美藏			市川延女	市川升若	
明治三十二年四月	明治座	壽永春大佛供養	市川左團次	市川權十郎	市川小團次	市川壽美藏	市川權十郎	市川壽美藏	市川染五郎	市川鬼丸	市川小團次
大正十五年二月	新橋演舞場	壽永春大佛供養	坂東彥三郎	尾上菊五郎	大谷友右衞門	市川團右衞門				市川女寅	大谷友右衞門

鳥越甚内

年時	座名	名題	甚内	新十郎	長次	門三郎	浅茅	半左衛門	結城	半次郎
明治六年十月	守田座	東京日新聞（とうきやうにちくしんぶん）	坂東彦三郎	坂東彦三郎	市川左團次	澤村訥升	坂東秀調	中村翫雀	中村翫雀	市川子團次
明治十二年四月	市村座	鳥越甚内夢物語（とりごえじんないゆめものがたり）	市川權十郎	市川權十郎	關三十郎	坂東家橘	市川女寅	市川壽美藏	市川壽美之丞	市川壽美之丞

子持高尾

年時	座名	名題	高尾	宗次郎	吉之丞	次郎吉	四郎左衛門	徳右衛門	仁太郎	作藏
明治六年四月	守田座	關東銘物男達鑑（かんとうめいぶつをとこだてかゞみ）	澤村訥升	澤村訥升	中村翫雀	市川左團次	市川左團次	中村仲太郎	市川子團次	坂東彦三郎
明治十二年七月	猿若座	子持高尾松貞操（こもちたかをまつのみさを）	澤村百之助	市川八百藏	岩井紫若	片岡市藏	片岡我童	片岡市藏	勝川又吉	片岡我童
明治三十四年四月	明治座	廓廣着紅葉裲襠（さとのはれぎもみぢのうちかけ）	澤村源之助	澤村訥升	市川權十郎	市川小團次	市川小團次	市川壽美藏	市川莚升	市川左團次
明治四十一年九月	市村座	子持高尾松貞操（こもちたかをまつのみさを）	尾上芙雀	市川高麗三郎	守田勘彌	中村駒助	中村駒助	市川新十郎	尾上紋三郎	坂東三津五郎

大和錦（お峰慶十郎）

年時	明治九年三月	明治二十七年五月	明治三十四年六月
座名	中村座	春木座	市村座
名題／役名	鎌倉山春朝比奈（かまくらやまはるのあさひな）	胸機關五臟眼鏡（むねのからくりごぞうのめがね）	千體荒神誓仇討（せんたいこうじんちかひのあだうち）
慶十郎	市川團十郎	市川八百藏	中村芝鶴
おみれ	岩井半四郎	岩井松之助	岩井松之助
丑藏	中村仲藏	中村勘五郎	尾上菊四郎
治左衛門	市川新十郎	―	澤村村右衛門
甚兵衛	中村時藏	中村雀右衛門	坂東又三郎
治三郎	市川新藏	中村芝雀	關花助
九郎藏	中村鶴藏	市川宗三郎	坂東又三郎
作藏	市川姉藏	市川右田作	市川福之助

筑紫講談（黒田騒動）

年時	明治八年十月	明治二十八年六月	明治三十五年六月
座名	新富座	明治座	東京座
名題／役名	筑紫巷談浪白縫（つくしこうだんなみのしらぬひ）	筑紫巷談浪白縫（つくしこうだんなみのしらぬひ）	筑紫巷談浪白縫（つくしこうだんなみのしらぬひ）
鳥山	坂東彦三郎	市川左團次	市川八百藏
主水	尾上菊五郎	市川權十郎	市川染五郎
勘兵衛	坂東彦三郎	市川壽美藏	尾上松助
彌平次	中村芝翫	市川左團次	市川八百藏
安養	尾上菊五郎	市川左團次	市川八百藏
お筆	澤村訥升	市川米藏	尾上榮三郎
貞行	市川左團次	市川小團次	實川延二郎
松崎	嵐大三郎	坂東秀調	―
大眞院	嵐大三郎	市川升若	尾上菊三郎

大正十五年九月十三日印刷
大正十五年九月十六日發行

『默阿彌全集第二十三卷』

非賣品

著作權者印

補修　河竹糸女

校訂編纂者　河竹繁俊
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者　和田利彥
東京市小石川區諏訪町五十六番地

印刷者　堀江關武
東京市小石川區諏訪町五十六番地

印刷所　常磐印刷所
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行所　春陽堂



